現代日本文學全集

PL
755
.6
M32

[illegible]akawa, Koichiro
[illegible]hinko bungaku shu

Japanese
Start

[illegible]TY OF TORONTO LIBRARY

CALL NU[illegible]

VOLUME

青中藏書

杉浦非水裝幀

新興文學集

改造社版

LIBRARY
MAY 16 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
755
.6
M32

前田河（中央）岸田（左上）横光（右上）葉山（左下）片岡（右下）五氏の近影

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/shinkbungakush00maed

「新興文學集」目次

巻頭寫眞（五家近影）……二
總序……三

前田河廣一郎篇

序詞（筆蹟）……四
三等船客……五
マドロスの群……二九
伯父……五四
太陽の黒點……六五
捕へられた男……九三
敗軍……一〇七
上海の宿……一一五
四十二歳の現在迄……一三〇

岸田國士篇

序詞（筆蹟）……一三四
村で一番の栗の木……一三五
落葉日記……一五四
紙風船……一七四
ぶらんこ……一八一
命を弄ぶ男ふたり……一八八
年譜……一九八

横光利一篇

序詞（筆蹟）……二〇〇
芋と指環……二〇一
マルクスの審判……二一一
蠅……二二三
無禮な街……二二六
ナポレオンと田蟲……二三八
園……二四五
街へ出るトンネル……二五二
青い大尉……二六七
眼に見えた虱……二七三
日輪……二八七
年譜……三二六

葉山嘉樹篇

序詞（筆蹟）……三二八
海に生くる人々……三二九
略傳……四四三

片岡鐵兵篇

序詞（筆蹟）……四四六
生ける人形……四四七
あんな男こんな男……四八五
大島爭議君……四九六
雲とゴルフの球……五〇一
年譜……五〇三

總序

大正末期から昭和への過程は、その多面、複雜、深刻さに於て、およそ日本の歴史あつてこの方比を見ないものがある。あらゆる分野に亙つて變移し、動搖し、多種多様な傾向がめまぐるしきまでに展開された。このことは常に時代の尖端を行く文藝に反映し、特彩あり、異色ある傾向をもつた作家が簇出した。彼等は既成文壇の堅壘に對立し、勇敢なる存在を示し、年一年と大衆の心核に潜入し、社會的にも文壇的にも輝かしき地歩を獲得するに至つた。こゝに集められた五作家はさうした諸傾向の最尖端を代表する颯爽たる新鋭である。

前田河、葉山、片岡の三氏は、周知の如くプロレタリア文藝陣の第一線に立つて前衛的創作行動をつゞけつゝある作家である。

大がかりな題材を把握し易々とこなしてゆくところ、太き線、強き迫力、廣汎な視野――これが前田河氏の特色だ。氏は現代の日本文壇が有する殆んど唯一なる、大陸的風格を備へた作家だ。

葉山氏はその代表作『海に生くる人々』によつて一躍プロレタリア文壇の寵兒となつた。『海に生くる人々』はたゞに氏にとつてのみならず、第一期の日本プロレタリア文學の永遠の記念塔である。氏は徹頭徹尾プロレタリア・ロマンチストだ。特殊な經歴から來る特殊な題材を把握し、プロレタリアの情熱を以て歌ふが如く創作する「勞働の詩人」だ。

同じプロレタリア文藝陣内に於ても前田河、葉山兩氏と、片岡氏とのあひだには細分すればそれぞれ違つた意識的分界を見出し得る。所謂「文戰的」に對する、「戰旗的」の差異である。轉換以前の片岡氏の立場と作に就てはしばらく措き、轉換後の氏はプロレタリア文藝陣營中『生ける人形』の一篇に示したるが如き、氏でなければならぬ獨自の領域を擔當してゐる。それは「ブルヂョアジーの社會機構の欺瞞に正面から、がつしりと打つかつて行く行き方よりも側面から、皮肉で、明快な頭腦をもつて倣しくづしに暴露して行く」行き方である。

岸田、横光の二氏はイデオロギーから云つて明らかに前三者とは反蹠の點にある。且つ、岸田横光の二氏の間にも大して共通した要素は發見され得ない。

フランス的な輕快なる表現、明朗なる機智、華麗なる才氣を以て、人間生活の微細なる動きを氣分でもりたてゝ行く。さう云つたのが岸田氏の戯曲だ。それは既成文壇には見られざるところのものだ。氏の出現によつて日本の戯曲界が初めて寫實主義から解放されたとはあながち強辯ではない。朗らかな足取で登場する浪漫主義者岸田氏の存在は、何はともあれ日本劇壇に大きな示唆をもつ。

横光氏はその特彩ある着想と技巧、特異なる近代感覺の觸手を以て、「新感覺派」なる一派を産んだ。氏は絶えず前人未踏の境地を提へようと努力する。『蠅』に於て、『日輪』に於て、その努力の成果は遺憾なくうかゞはれる。氏の文壇に於ける地位は前田河氏と共に既に大家の班に伍した。否その中堅作家として異常なる期待をかけられてゐる。

是等新興五作家のその各々の特色より打出されたる二十七の長短篇を一讀する時、吾等は既成文壇人の諸作に求め得られざる「新しき興奮」を感ずる。この二十有七篇はいづれも各作家の代表的名作だ。今、一括して『新興文學集』とする。本集によつて新時代の代表的文藝は縮圖的鳥瞰圖をもち得たと云つてよい。

昭和四年六月

三等船客

マドロスの群

伯父

太陽の黒點

拵へられた男

敗軍

上海の宿

前田河廣一郎

前序

動いてやまぬ人類の意志が形を描きたがつた。だが、その形は、一定の旅程尺虫りあしたに過ぎない。歩々行の一寸づつが此諸篇である。形はずつと進む——。

前田河廣一郎

三等船客

一

「あれ、擽つたい。」

はねのけるやうに癇高な、鼻のひくい、中年期の女のみが發し得る聲が、總體にゆらゆらと傾いた船室の一隅からひびいた。女の姿は何かの蔭になつて見えなかつたが、男は前のめりに動いた姿だけ、汚らしい壁の上に、不自然な暴動の影を投げて、崩れるやうに暗い方へ消えてしまつた。

「畜生、ふざけてやアがる。」

かなりな距離ではあつたが、さつきからその暗隅を見すかしてゐた偏目の男は、卷煙草の端を上のベッドから床へ投ると同時に、もうぢつとして見ては居られぬと云ふ風な性急な言葉を吐いた。

そのわきに、ベッドに俯向になつて講談本を讀んでゐた男も、その時、むつくり頭をあげて、偏目の男の熟視してゐる方を眺めたが、すぐつまらなさうに横を向いて、鼻の中で嗤つた。

「ハワイへ着いたら尻尾を出すよ。」

偏目の男は、向き直つて對手に何か云ひかけようとした刹那、

「わたし、もう立つの。つまらない。ちよつとそこを通してさ。」

と早口に云つて、暗隅に居た女が、煤けた通風機の後ろから上氣した顏をあらはしたので、急いでまた元へ向き返つた。

「そんなに急いで立たいでもええぢやないか、かみさん——。」

肺の強さうな、男の聲が、蔭の方から女を追ひかけた。

「もう、男の人は、いや。」

脚元があぶないので、通風機の胴へ片手を置きながら、華奢な踵の高い白靴を、船室のまん中の一段高くなつた壇の上へ載せた女は、肥つた笑ひ顏を、今出て來た方へ向けた。その拍子に、船が一搖れしたので女の手は通風機の胴を離れて、壇上の足が床の上の足と重り合うたと思ふと、彼女の兩手はすぐ横手のベッドの鐵柱をめがけて、身體もろともぴつたりと吸ひついた。

「おお危い。——書生さん、御勉强ですか？書生さん。」

抱いた鐵柱をそのまま搖つた彼女は、のびあがるやうにして上のベッドを見あげたが、そこにゐる青年は頭から毛布を被つて眠つてゐた。方々の男どもは、彼女の扁平つたい顏と、派手な格子縞のスカートとに向つて犯すやうなみだらな視線を注いだ。女はきまり惡げに、いろいろな色合の毛布や蒲團で圍まれたベッドとベッドとの間に、まぎれ込んでしまつた。

「ふられたね。」

うすつぺらな笑ひとともに、妙に細い聲が、暗隅の男へ話しかけたらしく、その邊のベッドから響いた。二三人のえへらへら笑ひがそれに續いた。

「ありや一體何だい、君？」

「酌婦よ。」

「さうかな、それにしても堅氣らしい處もあるぜ。」

「君はまだ若いよ。」

正面の上のベッドに、あぐらをかいて、林檎

をむきながら話し出した二人の青年の會話も、突然、舷窓の外を、まつ暗な大海の流れ、重い響でぐいと船體を押しゆるがして、甲板の上に大男が倒れた時のやうな物音をたてたので、狭いされてしまつた。亂雜な室内の一切の物は、一瞬間、ふらふら、ふらふらッと宙に浮いて、一息ついたかと思ふと、又元にもとの位置へ急にぐらぐらると押し戻された。けたたましい雷鳴と、子供の泣き聲と、それから時間といふ女の聲とが、一時に船内に湧きあがつた。枕元の金盥がとんる音も混つて響き聲がそれにまじつた。

「――彼らは上川、君は海、雪のない國があるやうな、僕も二週間の約束でアーメイした、なつちよらん――」

醉ひながらも、ほそい途切れた聲音で唄ひ出した流行唄の歌は、すべての窓々に閉ぢられた船的な空氣をかい潜つて、歌の續く間に人々の耳に、船室の物音を忘れさせる程度の効果をもつになつてゐた。

「――あすこの國の言葉は、みんなあれに慣れてきたんださうだ。面白いね。」

梅川の男は、また仕切り向側の方を見ながら、寝臺下の男の肩を叩いた、然しさげられた方は、二三行讀み通してから、やつと、南人はこれより博覧會道路を志して急ぎました」とある處へ中指を插し入れたまま本を閉ぢて、充血した眼をあげた。

「さうかね？――」暫く考へるやうな眼付をしてゐたが、思ひ出したやうに彼は襟元の書いてある安煙草を片手でつまんで、――皆な何處でも連中ばつかりなんだからね。」とつけ加へを口へ運びかけて、「この三等室に乗つてる女と云ふ女で、亭主のないのや子供女つきりだらう。皆な御乗りこむのも無理はなからうぢやないか。お化粧さへすりや、あんなお多福だつて満更捨てたもんでもないからな。――」とシガレットを口にくはへて、枕元の國製のマッチを無雑作に擦つた。

「あ、こりや大變、あすこの奴等ばつかりと思つたら、君も、もうきめてゐるんだね。」一個目の男は顎の半分だけで、苦しさうに笑つて、いきなり對手の肩を打つた。

「何を云ふ。君こそ、見ろ、しよつ中出帆してから、彼女の事ばかり思つてゐるんぢやないか。」

「僕か？――」と云ひかけて梅川の男はやつと顔を赧らめながら、「そ、そんな馬鹿なことしたるけど、――」と口籠みのやうな聲で云つて、枕付け棒みくちやになつた毛布の敷いた寝臺の上へ、くるりと仰向けに寝轉んで、一つの目をつぶつた。

人々の會話の聲音は、海の怒濤を貫いていつまでも續いた。時々それらに、甲板の便所の扉が嵐の風音とともに一緒に打ち鳴る音や、どこかでファイア鉛に吊されたままの棒を傳つて動く椅子にからからと鳴る響や、船底を打つて甲板にざわざわと響を曳く波の音などに打消されて、一しほ聲高らかに響くのであつた。鉛々の人々から忘却する出發のはく、消えたやうな動物達の聲が聞かれた三等室の船口の傍に、どこへも通風がなくなつて、[illegible]イ・デッキの便所の戸口へ通うてゐるので、そこへ溜つた悪臭と石炭酸の匂が鼻を刺戟したまま、再び船室へ舞ひ下りて來て、八十幾つかのベッドにある夜具の古綿や、めいめいの處に積み重ねた手荷物や、果物の皮や、訝さうな顔をして寝てゐる女や男の肌の臭ひまでも包み込んでしまふやうに思はれた。その空氣に混りつゝしと觸れあふちには、潮々しい海藻のにほひ[illegible]だけを見せてゐる男や、卑猥な野獣のやうな乳房見にとらけた顔色をすませて寝てゐる婦や、青き

白い腹を露してゐる女の子や、電燈の光の屆かぬ邊に蒲團やら子供やらわけのわからぬ黑い團塊になつて突伏してゐる者などが、一樣に臭い息を吐いてゐた。折々、臨月にまぢかい婦が、肩で息をしながら、ベッドの鐵柱傳ひによぼよぼと二階の便所へ通ふ姿などが、多數の視線につきまとはれて室內から消えて行つた。

廣い物置のやうな一室に、わづか五つしかない煤つぼけた舷窓の彼方に、黃昏の海は、寒さに刺戟された蒼白い波を蹴かしながら、絕えず後ろへ後ろへと流れて行つた。時には、ガラス一枚の外で、まるで瀧のやうに暗碧の水の縞がどろどろと聲をふるはせて打ち當つたり、それが遠退く〳〵と氷山のやうな水の層が、また近づいて來る大波と、溫和しく抱き合つて、船から離れながら深い谷を作つて渦を卷いて行つたりするのが、恐ろしい他界の不思議な暴力の如く人々の眼を脅かすのであつた。

「腹がへつたな、――まだ飯にならんかなア。」

嗄れた聲が、どこからか、さう呟いた。すると、そのすぐ傍から、

「飯つたつて、例のバケツ臭い乾物の煮しめと、鹽つ辛い澤庵漬ぢや食ふ氣にならんからね。」と誰やらが、不平らしく繼ぎ足した。その時、色の蒼黑い船室附のボーイが、だらしない雪駄ばきのまま戶口へあらはれて、莫迦丁寧な聲で叫んだ。

「さア、さア、皆さん、これから船室の檢査がありますから、どうぞ床の上へ物を落つことさんやうにして下さい。煙草の殼や、蜜柑の皮などね。濟み次第すぐ御飯に致しますよ――。」と妙に船客を鼻であしらふやうな事を言つてゐなくなると、人々の間には、一しきりベッドの上へ立ちあがつたり、金盥をかたづけたりする氣勢がして、片頰へべつとり寢亂髮のねばりついた女がきよろきよろ首だけ擡げてその邊を見廻したり、子供が眠から醒された時に限つて立てる泣き聲などが聞え出した。一日中、必らず誰かがどこかの隅で燃やしてゐる會話の火は、再び船室一杯にひろがつた。元氣の良い掛聲で、上のベッドから飛び降りる若い者などもあつた。

「どうです、かみさん、一寢入りしやしたか？」

赭ら顏のがつしりした男が、暗隅からあらはれて、『十三番』と札を貼つた酌婦のベッドへ、づかづかと寄つて來た。飛びあがるやうにして毛布の中から半身を起した女は、まだ眠げな眼をぼんやり瞠いて忘れたことを思ひ出したやうに、

「もう、御飯ですか？」と訊ねた。

「御飯――？　さうよ、御飯はとうに濟んだがね。あんたがあんまり寢坊しとるんで、もう明日の朝までは御飯にありつけアせんぜ。」

男はとぼけ顏をして、女のベッドの片端へ無遠慮に腰をおろした。女は紺の靴下のちらと見えたスカートの邊をかばひながら、無意味な笑ひに、健康さうな齒を見せて、ベッドから降り立つた。

「譃。」

「いいや、ほんたうさ。今御飯をつめた俺の腹アこの通りつつ張つてるがな、觸つて見なされ。――」

「どれ、どれ。――」

「あいたッ。」

その時、三人の男がそのベッドの前へどやどやと押寄せて來た。

「もう來てるか、早いなう。」

紀州訛の、角顏な、色のなま白い男に續いて、顏の黑い、聲の細い青年が、剽輕な聲でわめき立てた。

「妬けるね、いつもから二人でちんかもをきめてるのを見ると。」

「さらよ、いくら船ん中だつてな。」
　茶色のスウェタアを暖かさうに着た偏目の男が、一番後になつた。五人は狹いベッドに目白押しに掛けて、喋々わめき散らしてゐたが、突然、いままで靜かであつた上のベッドから、色の淺黑い二十五六の青年が、安全剃刀を片手に、半身をあらはして、心持衛蒼を含んだ眼元で一同を見廻してから、女へ向つて、
「君、あの鏡をちよつと貸してくれませんか？」
と優しく尋ねた。
　女の瞳は、素早く青年の視線を掬ひ上げて、一瞬間、二人の視線は絡みついたやうに、空中にぢいつと交錯したまま挑み合つてゐたが、女は急に媚のある癇高な聲をあげて、
「顏を剃るんですか？」とわざとらしく眼を瞠りながら尋ねたが、[illegible]もを立たせてベッドの裏をそそくさと探し始めた。
「御安くないね、いよう、色男！」
「二番にお輕が[illegible]」
　下の四人は、そんなことを小聲で言ひ合つた。
「あ、ありました。」青年[illegible]女は青年の顏を下[illegible]、鏡を手渡しながらに、
[illegible]つた。

「よう、よう。」
「俺も書生さんにあやかりたいな。」
　といふ聲に遮られた青年の言葉は「……どうも髯が伸びて」と云ふ一句だけが女の耳に入つた。女が自分のベッドの方へ戻るといきなり誰かが拳を[illegible]しやりと平手で叩く響がした。上のベッドの青年は、ブラッシュで鼻の下や頤へ石鹸を塗り立てた。
　この時、かつかつかつと階子段を降りて來る五六人の跫音がして、妙に語尾を落した會話のきれぎれが、急にひつそりとなつた一室の内へ響いて來た。船客の多くはベッドから伸びあがつて、檢査に來た船の役員どもの姿を訝しさうに見遣つてゐた。役員は總勢五人で、室のボーイが一番後から、ふだんよりも威張つた表情をして、白のジャケットを着込んでついて來た。眞鍮釦をぴからした彼等は何かの缺點を船客の間から探し出さうとする鋭い眼で隅々を見廻しながら、さもさも重要事らしく何事かを囁き合つて[illegible]に次室へ[illegible]行つた。まつ先に立つた[illegible]だ、日本人の若[illegible]は、[illegible]顏に[illegible]つた。
　[illegible]

思つてやがるんだ。から見えても、へん、御客樣だぜ。船賃こそ安いかは知らねえが、ちつたア人間並の待遇をしろい。船會社ア俺達がかうやつて大勢乘り込むからこそ儲かるんだ。こんな臭いとこへぶち込みアがつてさ、あの飯は何だ、一體、豚並にするのもいい加減にしねえか。……」
　眼の圓い、赤肥りに肥つた老爺が、酒臭い息を吐いて、一番先に煽動家らしい口吻で船室の沈默を破つた。彼は叫びながら、ベッドからまん中の食事用の卓へせり出して來て、そこへ括り猿のやうな拳をとんと置いた。
「さうよ、さうよ、まるで豚小屋ぢやねえか、このざまはよ。」百姓らしい老人が、胡麻鹽頭をふりながら、講談本を讀んでゐる男の下のベッドから合槌を打つた。それからそれへと、相應ずる者の聲で、夜になつた一室には、桑港を出てからここ三日間の待遇の惡い會社の仕打を非難する不平で充ちてゐた。
「十三番の女を中心として集まつた男どもは、何やらはしやいだ聲で、高らかに叫びたてながら、折々、どつと笑ひ崩れてゐた。
　[illegible]だ
　正面の[illegible]ベッドにゐた二人の青年が、さも嘲ん

で、ベッドを立ちあがつた。送風機の向うから、ボーイが茶碗と箸を入れた笊と、香の物を盛つた鐵葉の皿を抱へながら、動搖する床をふみしめ、ふみしめ、こつちへ運んで來るのが見えた。次室の天井から、湯氣の立つ飯櫃を、汚らしい繩で釣り卸すのが、立ち犇く船客の間から、手にとるやうに見えた。複雜な騷がしさが、急に室の四隅から湧いて、まん中へ集まつた。

「飯だ、飯だ。――」

「御飯ですよ。」

「そら、飯、飯、飯ッ。」

口から口へと、この簡單な言葉が、見る見る傳染して行つた。口に出さぬ者も、群集の勢ひに動かされて、腹の中ではかすかに「御飯」と囁かざるを得なかつた。箸箱を持つてベッドから飛び降りる者や、子供の名を呼ぶ聲や、茶碗の壞れる音や、バケツを蹴つた雜音や、人々の重みにきしるベンチの響や――大勢の人が、無造作な會食をする際に起すすべての物音は、船室の萎えた空氣を一變して、急に賑かな、騷々しい景氣付をした。

「ボーイさん、お菜が來ないぞ！」

「お菜だ、お菜だい、間拔奴。」

「何をしてるんだい。先刻註文しといた蒲燒と口取を忘れるない。」

人々は笑ひどよめきながら、首を伸ばして次室の天井から、まつ黑い繩で吊り下げられる笊を見てゐた。一人の男が、箸で茶碗の縁をかんかん叩いて、床板をとんとんと拍子を取つて蹴ると、もう一人の男が、別な場所でにやりと笑ひながら同じことを繰り返した。すると、それをきつかけに、模倣者がそこにもここにも增えて、しまひには、卓へ顏を出した男どもは、皆一齊にその即興の馬鹿囃を始めた。男どもの間に挾まれた婦達は、狂氣染みた動亂の底に、食慾のなささうな顏に微笑を嚙みながら、うつむいてゐた。

「さア、さア、皆さん、御待兼のお菜が參りましたよ。――鉢卷をしてお食んなさい。頰つぺたが落つこちるほど甘い物ですよ。食料はついてゐるんですから、御遠慮なしにたんとお食んなさい。――どうぞお靜かに願ひます。」

煮物の小皿を山のやうに積んだ笊を、汗みどろになつて運んで來たボーイは、脣を歪めて叫びながら、一同を笑はせた。暫とすると、船室はにはかにひつそりして、湯を啜る音と、舌打する響と、飯櫃を少しこつちへよこして吳れるやうにと囁く聲などが聞えるだけであつた。

人々は、時々、茶碗から眼をあげて、自分の周圍を見廻して、これ程大勢の人間がこの船室には居つたかしらと疑ふやうに、卓へ押し掛けた多數の人々を眺めた。席がないので、立ちながら頰張つてゐる者もあつた。食物だけは二等まがひの特別な膳を運んで貰つてゐる者は、尊大らしくベッドの上から下の食卓を瞰下して、ボーイの持つて來るオムレツなどを撮んでゐた。箸をつけたと思ふと、すぐ吐瀉してしまふ婦なども見受けられた。

二

晩餐のすんだ後には、牛肉の片や、箸の折れや、澤庵の端などが、處嫌はず撒き散らされた飯粒と、煙草の吸殼とに雜つて、恰度、何物かが突然そこへ亂入して、手當り次第にすべての物を破壞して行つた跡のやうに思はれた。それをボーイがせつせと掃除してゐるのを見戍りながら、人々は蛆のやうに轉げて行く飯粒や、齒形の立つた大根の端などに、つくづく食物と云ふものの氣拙さをさとつたやうな眼付で、めいめいのベッドに飽食の體を横へた。

湯氣のやうにむんとする濕かみと、すべての

物見遊心から寄つて行くやうな見みとに開され
た紛争には、それたも時が經つにつれて、人々の讀もチャド下火になり、時間の約束も無い時間にあり勝ちな、氣深いけだるさと、何かしら强烈な刺戟を直ぐに求める、隣の生活のすべての約束から解放された人々の頭に根強く湧いて来た。一様に物憂い表情をして煙草を喫うたり、とろんとした眼を開けたり閉ぢたりしてゐる彼等の或者は、折々、何か事件が起ればいいと云ふ風に、ひよつくり、ベッドから首を擡げて、部屋の中を見廻すのであつた。然し、部の折惡な讀さ、アメリカ人と喧嘩した話なとが、からからに干からびた空氣のうちに、たまゐたまゐと流れ出ては又すぐ沈默に吸ひ込まれた。それでも、女の話だけは執念深くそこここに繰り返された。

一隅の下のベッドに、仰向けに寝そべつてモトナムプを弄つてゐた青年が、隣の赤ランプに鼻紙を貼つてゐる紀州訛の男へ話しかけた。

「やろか？」

話しかけられたものは、しきりの黒い帯を眼いたなり、鼓判に青年の顔りあひつた眼を鏡遠ので、

「何をイスんか？」しばらくいいいい、した目つきで訊き返した。

「トウンテー・リンは？」

「よからう」彼は首肯いて、青年の頭のベッドに、膝を組みたててその上へ本を載せて讀んでゐた學生にあなたはどうう？と起きあがりまを、促した。學生は氣輕に受けて、隣の上の何を枕の下へしまひ込んだ。三人では面白くないと云ふので、二十三、四の女と、横に隣の男とか加へられた。五人は青年と學生とのベッドに、珈琲色の毛布を敷いて、圓座を組いた。

「親は誰？」

「くじがいいや。」

一寸すみけんで定めようよ。」

親になつたのはトランプを持つた青年であつた。マッチの棒が一人前二十五本づつ、一本二十錢で各自が親から買ふことと定まつた。無聊と倦怠から急に一つの遊戯に集中された五人の人々は、活き活きとした氣色を浮べ、心の中には一種の家族的な親しみを共有してゐるやうに感じたのであつた。各自に切られて、各自に各自の膝下へ撒かれる札の一枚づつ増えて行くのを眼じつと待つてゐるかのやうに、四人は之に重りつめた緊張力を以て、親の顔色に何か油斷なく見張つた。五人の頭の影は、カードを配つたあに動く時だけ、いいいいいらりと毛布やベッドや壁の上に躍動したが、やがてと、すると、いつと珈琲色の毛布の上に長い間しがみついて何か深い考へ事でもしてゐるかのやうに見えた。彼等の見なれない視線と指尖だけが、注意深く動いた。

「もう一枚。」隣ら顔の男は、手元に配られた伏せ札とハートの女王を見くらべてゐたが、太い聲で呟いた。

「いいの？」親の手からはダイヤの三がひらりと辷り出た。

「よし。」貰つた方は首を縮めて、それを伏せ札と數へ合はしてから、強く口を噤んだ。

「そちらは？」

「もらはうか。」

「ほら来た。」

「もう一枚。」紀州訛の男は、手札を二枚開いて、片手で煽るやうな手付をしながら、伏せ札を呼んだ。

「そーら、ブローク。」親は慣れた手付でマッチを攫つて行つた。

一回目の勝負は、親の全勝に歸した。マッチの大部分は親の膝下へ無雑作に積み重ねられた。そうした勝負が、しばらくの間續いた。十

チはそつちへ集つたり、こつちへ搔きよせられたり、一人の膝の前に手薄になつたと思ふと、すぐ又そこへ倍になつて戻つたりした。立ち罩めた煙草の煙を通して、

「張りますよ。」

「そら、ブラック・ジャックだ。」

「ああ、これで一弗損しちまつたな。」

などと云ふ言葉が、次第に靜まりかへつて行く船室の片隅から漏れた。いつの間にか凪になつた海の上を、辷るやうに進んでゐた船は、折々心臓のやうな機關の鼓動を、遠くの方で間歇的に聞かしてゐる外、時々、海のどこかで、綿の棒で大地を撲つたやうな波の音が、眞夜中の底知れぬ大洋の寢返りを打つてゐる態を想像させるのみであつた。そここゝのベッドには鼾の聲がだんだん高まつて行つた。

紀州訛の男は、ポケットからウイスキイの鑵を出して、

「どうです？」と學生の鼻先へ突付けた。

「いや、いけません。」

「おや、あんたは？」突出した手首を動かさずに、[illegible]の目だけ女の方へ向けた。

「ウイスケ？ すこしくださいな。」女は眉根に小皺を刻みながら、[illegible]を受取ると、このまま飲むの？」と鑵の貼札と男の顏を見くらべた。

「一喇叭飲よ。」彼は素氣なく答へて、札を切り始めた。鑵は女から赭ら顏の男と眉の釣りあがつた青年へ廻つたが、他に飲む人がなかつた。自分の處へ歸つた鑵を掴むと紀州訛の男はまだ九分通り入つてゐる酒を、本能的に眼の前に翳して見て、ぐいとそのまま口へ持つて行つて、咽喉を鳴らしながら半分ほど飲んでしまつた。飲み終ると「ほーう」と太い息をして、再び鑵をポケットへ納めた。カードを撒き終つてから、彼は膝下のマッチを擦つてシガレットに火をつけながら、酒に嗄れた聲で、

「さア、少し仰山張ろか。――」と云つて、マッチをぽんと外へ投つた。

立ち後れた形で、二人は勝負にならず、伏せ札とジャッキとスペードの三をぢつと手元に見戍つてゐた學生と、彼との勝負になつた。

「一見ようか。」學生はマッチのありたけを場へ拂ひ出した。その時、隣り合ひに坐つてゐた十三番の女の柔かい膝が、骨張つた學生の膝を二三度ぐいぐいと小突いた。目をあげると、女はほんのり上氣した眼を意味ありげに細めて、彼に胸をした。

親は自分の札を用心深く引いて、一枚だけ手元に伏せて待つてゐた。

「いから、――鐵火でいからない。」頓て彼は膝の下のマッチを太い手でぐいとまん中へ押し遣つて、學生の顏をぢつと覗き込んだ。マッチの大部分は場へ集つた。手合せになると、學生は自信のある手付で、伏せ札を輕く撮んでひよいと場へ開いた。五人の視線は一時にその一枚の札へ集つた。と思ふと、急に轉じて親の手元へ撥ね歸つた。そして、突然湧いた一種の感情を陰蔽した時誰もが使ふ急劇な表情、――沈默を守つて、恐ろしさうにまん中のマッチの數を目で計つた。すこし經つと、傍の三人は、殆ど同時に叫び出した。

「紀州さん、どうしたの？」

紀州訛の男は醉の廻つた顏をあげて、脣を歪めながら、てれかくしに高く嗤つた。

「ブラフだと思つたら、トリンテイ・ワンか。――敗けた。敗けた。」

彼の鼻にかかつた聲は、船室いつぱいに底力のない、からな響を送つた。どこかで、小兒の魘される聲がそれに雜つた。

「わたし、醉つちまつたの。もうよさうぢやありませんか。大分遲いわよ。」女は紅くなつた頰を、圓い手で撫でおろして、人一人覗いてゐ

ない船室を、不思議さうに見廻した。マッチを數へてゐる學生に向つて、紀州訛の男は、熟柿臭い息を吐きかけながら、「勝つたなう、あんたは。」と取つて付けたやうな御世辭を浴びせた。ひつそりした室内に皆の勘定してゐる金貨や銀貨の音が、氣味惡くひびいた。

彼是三十弗ほど損をした紀州訛の男は、金を拂ひ終ると、退屈さうに脊伸びをして、膝を組みなほした。學生に金を數へてやつてゐた女がふと眼をあげると、彼の細い鋭い眼が刺すやうに自分の上に注がれてゐるのを知つたので、彼女は何氣なく、肥つた頰で笑つて見せた。

「あんた、大へん醉つたやうだが、一寸甲板へでもあがりませう。私もこんなに醉つちまつて、どうもならん。そんなに遲いことはないがの、まだ十一時ぢやけに。」彼は金側の大きい時計を女の方へ向けた。女は顏へ表はした笑ひをどう始末していいか迷つたやうに、不自然な微笑を續けたが、不意に踵を立てながら、冗談らしく答へた。

「連れてつて頂戴な。」

「あれた、」赭ら顏の男はベッドの梯子をおりかけて、情けなさうな眼で彼女を見あげた。

「甲板へ出りや、あんたと二人切りぢやけに、よ、——」紀州訛の男は女の手を執りながら笑ひ崩れた。話の繼穗が無ささうに默つて俯首いてゐた學生は、

「僕もいつしよに行きませうか。」と顏を染めながら言つて、きまり惡げに二人の樣子を下眼で見くらべた。

「學生さんも?……かまはないことよ。いいでせう?」女は男の手を振り捥いで、紀州訛の男に訊ねた。

「……三人でかい?」彼はごくりと咽喉を鳴らして、一瞬間の躊躇を示したが、すぐと狡猾さうな眼を天井へ投げて、

「……變な御連れさんぢやて。」と空嘯いた。

「浪にさらはれると危險だよ。」學生はつけつけと咽喉から鋭い言葉を吐いたが、言ひ終つてから自分で自分の拙さ加減に苛立つた風に脣を嚙みながら、枕の下の本を取り上げた。

女は黑と白の毛織の襟卷をすつぽり頭から被つて、あぶなげな足取で、男の導くままに階子段をあがつて行つた。

「書生さん、妬いたなう。」男は上甲板へ出る昇口の梯子をのぼりつめて、アメリカ流に女の腕を執つて戸口を跨がせながら、鼻先でせせら笑つた。暗と電燈との境に、彼女の金齒が、ちらりと氣味惡くひかつた。女は不安な表情を見せまいとするやうに、默つてただニツと笑つて見せた。

月の無い晩であつた。のろりと重い海の上を、汽船は幽かに浪を裁る音を立てながら、辷るやうに暗の中へ、暗の中へと深く進んでゐるのであつた。風呂桶を長くしたやうな煙突から右舷へかけて、斑な星の帶が、深い黝い空を斜に切つて、長く幅廣くひろがつてゐた。仄白い旗を結びつけたマストは、そのすぐ傍の妙に底びかりのする一つの星を、掠めて二三寸外れたかと思ふと、又そこへ戻つて來ながら、わづかに巨船が何物か船よりも强い力に押し動かされながら進んでゐるのを暗示してゐた。蒼茫とした船の外の世界から、青白いものが、大きい皺のやうに、折々霧をわけて、縺れ縺れになつて近づいて、甲板の光圏へ入ると黑と青の二幅の波に割れて、船腹を擦るやうにさわさわと逃げて行つた。女の後れ毛が片頰へ戲れつくほどの軟風が、どこからともなく吹いてゐた。

「——ハワイへつくのは、もう二日目?」女は、ずんずん先に立つて急ぐ男を引留めるやうに、意味の無い問を發した。

「二日目だよ、——」男は熱い息を吐きながら、

言葉をちぎつて答へた。彼の細い眼は女の全身を取入れてしまふやうに、ぢいと彼女の朧な姿を凝視めた。突然男の腕が彼女の背に廻つた。「あんた、さみしいか？」

「そんなことないわ。みんな親切な人ばつかりですもの、どこへ行つても。」

「いままでどこにゐたの？」

「シスコよ。それから田舎の方へも行つたわ、パパさんと。」

「パパさん幾歳？」

「わたしと十六ちがふのよ。姉さんを貰ふはずだつたけど、姉さんが他の男と出來ちまつたのでわたし身代りに來たの。わざわざ寫眞と御金を送つて來たんですから、――」女は、一等室の圓窓から漏れる光の前を横ぎる拍子に、まつ黒い海を背負つて、一瞬間くつきりと浮出た男の横顔を、流瞥にちらと見遣つて、聲を落した。男はがつがつと身内に悶を感じた時のやうに、暫く押默つてさつさと早足に歩いた。誰もゐない甲板には、二人の靴音が不規則に、暗を刻んでどこまでも續いた。舳の方へ近づくに從つて、機關の響と船の動きとがより強く感ぜられた。暗に慣れた二人の眼には、その邊の送風機の群やら、起重機の柱やら、艙口の扉やら、欄干やボートなどが、手を觸れたならそのまますうつと暗へ消え失せさうに、青白く立ちならんでゐるのがわかつた。甲板の下の方から、まだ寢つかぬ人々の話聲が、厚いガラス窓を徹して響いて來た。二人は自分々々の事を勝手に考へて歩いた。女は幾度か無言で抱きよせる男の執念深い腕をすり抜けたのである。

「わたしあんたのパパさんになるがなア。――」

冷たい欄干へ手を置いた女に、男は背後から優しげな聲で囁いた。

「今夜、あなた大變敗けたのねえ。――」女はつかぬことを言つて、壓迫して來る男の力を外らさうと試みた。男は默つて、鼻から呼吸をした。暫く經つと彼は、

「金なんかどうでもいいや。――」と投げ出したやうに言つて、海へ向つてぺつと唾を吐いた。上のエイ・デッキで誰かの靴音が遠くの方から聞えて來て、又ぱつたり止んでしまつた。機關の音が船の胴體の底に、重々しく何かに焦躁を感じたやうに、急に二人の耳へ入つて來た。男は抵抗の無い女の肩を隻手で掻きよせて、

「いやなの？」と息を喘ませながら、女の唇をもとめた。痙攣的な微かな動作で女は男の方へ體をねぢ向けた。

「誰か見てゐるといけないわよ。」

暫くすると、女の尖つた鼻聲が、折重つた靴音の下に、か細く響いた。

「何、誰もゐやせんがな、そりや氣の所爲ぢやけに。」男はぼそぼそと囁いた。その途端に、女の襟卷が獸か何ぞのやうに、ひらりと暗に跳ねあがつて、音も無く甲板へ落ちた。すると、突然、空の方から、絹を裂くやうに、

「あツはは、あツはは……」

と笑ふ淋しい聲がした。

男と女は撥ね飛ばされたやうに、距離を置いて、暗から立ちあがると、女の方から先に小犬のやうな唸りを發して、男の腕へしがみついたのであつた。上の方をすかして見て、男は、

「あれ、狂人よ、あすこの房室にゐる婦だよ。」

と強さうに言つた。

「おお、びつくりした。さ、歸りませうよ、わたしこはいわ。」

「ま、もちつとゐようよ。あんなもの無關ぢや。」

蜿りの大きい波が、一搖り船を動かした後は、靄の深くなつて行く甲板には、大洋のどん底から湧き出すやうな、重苦しい沈默がすべての物音を小さく封じ籠めてしまつた。

と、突然、女のヒステリックの聲が沈默を破つた。

「いや、いや。この人は、默つてるといい氣になつて！」

いいいい、ぴしやりと男の頬を撲る響がして、もつれ合つた二人の肩の間から、女の固まつちい手が、五本の指をひろげたなりに、男の胸をめがけて飛んだ。

三

前の日と同じやうに、その日も暮れるのであつた。

凡ての出來事が、前の日の出來事を眞似てゐるやうに單調で、古臭かつた。同じやうに舌觸りのわるい飯が、同じやうに鹽辛い副食物であしらはれた。甲板の散歩も、煙草の味も、安煙草の煙の幕の下に漂うてゐる話題も、一定の仕事のない無聊さも、サン・フランシスコを出發した其日から、一日として變つたことがなかつた。人々の心も、同じ獄衣を着て、規則正しい監視の下に置かれたやうに、何一つ珍らしい事を考へ出すことが出來なかつた。それでも、この重苦しい、ふやけた空氣のうちに、だんだん發着地へ近づいて行く寂寥としての暖かさだけは、少しづつ人々の生活を變へて行くと同時に、彼等の心に自分達の旅行に就いて何かの目的があつたことを思ひ起させるのであつた。そして、彼等の會話のうちには日毎に「ハワイ」と云ふ言葉が餘計に插まれるやうになつた。だが、彼等の大多數は盲目的に自分の生活を、汽船その物に任せ切つて、サン・フランシスコから横濱までの旅程を出來るだけ何も考へずに、その日その日の生活を送つて行くやうな自暴的な惰情に陥つてゐるのであつた。さう云つた人達は物を食べてゐない時は、鈍重な眠りに陥るか、無駄話をするか、その孰らかを選んだ。たまに甲板へ出たり、ものの本を讀んだりする者があつても、それは彼等の全生活とは何の關係もない、不意の出來心からする行爲に過ぎなかつた。

その晩も食事が濟むと、まだ雑巾のあとの乾かぬうちから、一塊りの男どもが、白けた、みだらな微笑をうかべながら、二三人の饒舌者を中心として集つた。

——その半巾お玉つてい名はどうしてつけたんですか。と一人が訊ねた。

——いや、面白いんだ。人三化七たアあの女のことだから。兎が、奴さん、顔は醜いが客の待遇が上手でね。それで、御客は顔だけ見ないやうに、半巾を掛けると云ふ寸法さ。——」

「メリケン人が日本人を排斥するのも無理はないと思ふこともあるね。寫眞結婚をやかましく云つてるが、あれで、ほんたうの處を曝け出した日にや、お互に肩身が狹いからなア……」

「白ん坊だつて、あんた、中へ入つて見りや腐敗しとるちふ話ぢやねえか。」

「まア、人間つてい奴は、五分々々だね、白人だつて皆々善い奴ばかり揃つてるとは限らんよ。ジャップが悪いなんて云つても、大統領のウイルソンなんざあ淫蕩で仕方がない男なさうだからな。それから今、日本で代議士だの、學者だのつて威張つてゐる連中がもとを洗へば、女郎のピンプをやつて勉強したり、白人の寡婦を騙して學位を貰つたりした連中もかなりあるんだからね。」

——ともかく、かうやつて皆なの話を聽いてゐるが、船ん中ぢや女の話に限るね。當り障りがなくていいや。ほかの事になると、どうも話がごつくつて、角が立つもんだが、この話ばかりは、聽いてゐても誰も損をした例はないからなア……」

いつも酒臭い息を吐いてゐる、謎の關らな老

人が、若い者を見廻して、むくれあがつた脣を舐めずりながら、「アッハ、アッハ、」と無遠慮に哄笑した。彼の聲に和して、笑ひ興じてゐた一群の若い者は、だらしない眼付で、ベッドの上に居る婦どもを見返つた。

束髪の形がくづれた油じみた頭を、重苦しさうに持てあましてゐた婦どもは、彼等の枕元で男達が、言葉で表はせぬほどの猥褻さを手振りや身まねで表はして、展覽會に工場が競うて製作品を出品するやうに、あること無いことの限りを捏造して語りあつてゐるのに、顏一つ赧らめもせず、いゝ、いゝくすくすと男にはわからぬやうな微笑を含んで、耳を澄ましてゐた。

そのうちに、何かの機會で、微かな變化が船室一般の空氣を支配するやうに見えた。一隅には、昨晩の連中が、またトランプを始めたらしく、そこへ吸收されて行つた人々の爲めに、まん中の食卓に集つた人影も、大分疎らになつた。話し疲れた者はベンチへ足を伸ばして、あたり憚らぬ大欠伸をした。煙草を吸つてゐる者は、一日でも早く一本のシガレットを吸ひつくしてしまひたさうに、やたらに黄ろい煙を鼻孔から吐いた。まだ話し續けてゐる者どもも、話をする當人が、言葉を選んだり、記憶を辿つたりする爲めに、咽喉の邊で「え――」と聲を引張るのが、堪らなく待ちもどかしさうに、いらいらした眼で御互の顏を見戍つた。彼等は各自に、だんだん深いけだるさの底に落込んで行く心を、無理にも刺戟の強い言葉や、實感を再現することで、惹き立てようとあせればあせるほど、言葉が上辷りになつて、ほんたうに言はうとすることと遠くなつて行くのを感じた。今まで無限の好奇心から眺め合つた違つた顏も、その人の職業も、もう珍らしさを失つて、普通の挨拶以上にその人間の氣質や經驗などを穿鑿して見ようと云ふ氣も起らなくなつてしまつた。

どのベッドにも、寂寥に苛まれた、壯健な肉體を持つた男や女が、息のつまるほど彼等の前途に塞がつてゐる「時」の重みを、どうして過さうと云ふ考へもなく、彼等の第二の本能である勞働から、一時釋放されたまま、何をするともなく、たゞぼんやり煤けた天井や、上の人間の體のなりにふくらんだ帆布のベッドなどを眺めてゐるのであつた。

「諸君、ちよつと御相談に及びますが――」一人の肥つた男が、小さなしよぼしよぼした眼を、肉の塊のやうな顏に働かせながら、いつのまにか船室の入口から妙な聲を絞り立てて室内へ叫んだ。大食をする家畜のやうな男であつた。彼の背後には、偏目の男と講談本の男が、ポケットへ手を捻ぢ込んで、心持腹を突き出しながら、一室を見廻してゐた。

「あのう、ずゝつは今晩、當船に乘合せました日本浪界の權威、雲右衛門歿後の今日眞に彼の衣鉢を傳ふる第一人者と謂はれまする木村友衛君が、豫々米國で皆樣の御贔屓を蒙つた御恩報じに、一夕の御清聽を煩はしたいと、不肖を通じて申込んで來られますので、それならと云ふので當室の有志と御相談の上、幸ひ機關室とは一番かけ隔つて居りまする當室を暫時御借り申して、一晩丈け御邪魔をさして戴くさうで御座いますが、如何でせうか、もし諸君に御異議がなくば、早速その準備に取りかからせることと致します。」云ひ終つて、彼は胸の太い金鎖を弄りながら、じろじろ四方を見廻した。彼の奥州辯は、撓つたセンチメンタルな聲と對照して、ちよつと滑稽な感じを與へたのであつた。

その男の傍から、偏目の男も、尖りを帶びた聲を張り上げて、

「今晩は、只今御話の通り、木村君の最も得意た義士銘々傳の大立者たる中山安兵衛をせら

れるさうですから――」と附け加へて、自分で自分の言葉に恥ぢたやうに、颯と顔を赧らめながら、一室の喝采や拍手に送られて、次の室へ出て行つた。

今までの單調が急に破られて、人々の心には新しい感激が湧いた。ボーイが三人どこからか紅白の幕を持つて來て、正面のベッドの鐵柱へ釣りあげる。食卓が取除かれた壇の上には、帆布が一面に敷きつめられ、壇上卓にはフラスコとコップが運ばれる。見る見る汚い船室は、浪花節の定席と變じてしまつた。しぼりあげた幕の前の、日本の國旗と汽船會社の旗とが、人々の眼には如何にも華々しく映じたのであつた。

舳の三等室から來た人々と、艫の船客とは、初めのうちは異人種のやうに、滅多に話もせずに別々に塊り合つてゐたが、時が經つにつれて、煙草の火を借りる者や、話し手の噂をする者や、前に立つてゐる女の批評をする者などが殖えて、いつのまにか、同じ目的の下に集つた、單純な觀衆に化つてしまつた。

柝が鳴る。蒼白い顔の男が、卓の前へ立つた。壇をはみ出た觀衆は、椅子や、寢台の上、棚などから、熱心に拍手をした。

「不肖が在米邦字新聞記者を代表しまして、今晩の司會の任を帶びましたことは非常な光榮に感ずる次第で御座います。床次内相閣下が浪花節を以て忠君愛國の大精神を鼓吹する宣傳機關と御考へになられましたことは、實に深い意義があることと存じます。同じく思想方面の宣傳者たる私どもの、今夜の如き會を皆樣の前で企てしましたことも、決して御縁の無いこととは申されません。抑も、藝術と思想とは……」

その男は歯の浮くやうな事柄を、生硬な植民地式な熟語で長々としやべり立てた。幕の後ろには、語り手らしい男が、黑の三つ紋の羽織を着流して、聽衆の中の婦人の顔をじろじろ覗いてゐた。稍だれ氣味になつて、新聞記者の演説が終ると、音〆を合せる三味線の音が、拍手や呼び聲の響に雜つて、人々の心を浮き立たせた。世話役の片目の男は、幕の後ろから、ひかつた一つの眼を働かせながら、黑い團塊になつて蠢動してゐる頭の數を勘定してゐた。

續いて起る拍手のうちに、につこり笑つた、若い男が、輕快な動作で卓の後ろへあらはれた。紅白の幕の前に立つた彼の、白い皮膚と、角刈にした頭と、外つ國の愛嬌ある目元とは、何よりも先づ藝人に接したと云ふ遊戯的な氣分を人々に與へたのであつた。最後の拍手や、野次馬の呼び聲などが鳴りやんでから、わづかの間の沈默が、秒と秒との間にダッシュを引いた。

「――ええと、金門灣頭から降るアメリカを後にして、櫻花咲く日の本の横濱埠頭まで、旅程十六晝夜、長の御旅のつれづれを、私ども藝人の風情が、御聽替しの興を揚げまして、一夕の御清聽を煩はすことは、甚だ恐れ入りました次第で御座りまするが。」

外國ではどんな場合にも聞かれない種類の、個人性を極端まで否定してかかつた敬語の連發と、慴伏したやうな彼の動作は、聽衆を、一段高まつた、藝人を愛顧してやつてゐると云ふ見物人の心理狀態に置いた。

「……この御仁、十を知つて百を悟り、目から鼻へ拔けるやうな悧巧しい智慧で、――[illegible]智慧であつて結構、これが[illegible]でもあつた[illegible]御意とある……」

[illegible]を[illegible]した[illegible]、[illegible]に乘じて、[illegible]の手を[illegible]三味線は、[illegible]、現實の[illegible]を、遠い昔の空想の[illegible]に[illegible]、言葉を[illegible]、[illegible]

つた強音に觸れると、人々の腦裡に刻まれる一句一句は、封建時代の社會觀や、日本でなけりやわからぬやうな不自然な思想や、それに絡みついて醜惡なものを美化しようとする雲とか花とか云ふ自然の現象や、卑俗な英雄崇拜の觀念などであつた。聲の抑揚が囂々しい言葉を運んで、ぐい、い、ぐんぐん音階を登りつめると、末はやはらかな妙音になり、語手は自分の聲に魅されたやうに、眼を閉ぢてびしやり卓を扇で叩いて、苦痛に堪へぬやうな長音を引いて、沈默が呑むままに聲を納めた。と思ふと、くだけた、平板な敍述が浪花節特有の誇張した談話體で、いろいろな事件を、さもさも面白さうに、疑惑を挿まぬ迄に拵へられて來た通り、するすると物語られて行くのであつた……朱鞘の刀をさした偉丈夫とか、月代の青い町人の群とか、忠僕の奴隷的奉仕とか、あらゆる人權を放棄してまでも男性の權力を助長した婦人の風習とか、もう去つた事柄が、水の落ちるやうな吟聲で、單純な復讐譚に織込まれて語られるのであつた。聽いてゐるうちに、人々は長い海外の漂泊から、故國をさして歸りつつある自分達か、むさくるしい三等船室で、輕薄な浪花節を聽いてゐることを忘れてしまつた。或者は眼を堅く閉ぢて、膝頭に顎を押めたなりに、身動き一つしなかつた。或者は調子といつしよに、頭を左右にゆすぶつて音頭をとつた。或者は肺の底から息を吐いて「うまいもんです！」と隣の男に話しかけた。壁にひたと凭りかかつて、憂鬱な表情をして傾聽してゐる者もあつた。——彼等のすべては、大道藝術の浪花節を嘆賞してゐるのではなくて、彼等の一人々々が、自ら藝術家となつて同じ傳奇的な出來事を、自分の頭の中で創作し、朗吟し、感動してゐるやうな氣がした。

彼等の內省は知らず識らずのうちに、聽いてゐる事件の中へぴつたりとはまつてしまつた。彼等の知つてゐるすべての事が、その靈妙な節廻しのうちに籠つてゐさうであつた。それは、彼等が生れてから、また生れぬ前からも、幾度か聽いてゐた節ではなかつたらうか。いや、彼等自身曾て、その事件のうちに住んでゐたのではなかつたかしら。彼等は皆一人の中山安兵衞として、江戸中の安料理屋や酒屋を千鳥足で飮み廻したのではなかつたかしら。そして、今かうやつてアメリカから長い間の力勞を終へて小金をためて日本へ歸つて行くのは遠い昔の出來事で、實は自分自身、醉眼を瞬つて、伯父の決鬪の知らせを讀んで、驚いてゐるのではないかしら。——あの思慮深い、忠義一徹な伯父が、みすみす窮地に陷るものとは覺悟しながらも、武士と云ふ片意地な身分から、どうしても後へは退けず、拙者にも知らせずに老の身で、ひとりで仇敵のまつ只中へ飛び込んで行つた光景が、一々堅苦しい手紙の文句の行と行との間に讀み取れるやうな氣がする。思はずはらはらと大粒の涙が顏面を濡らす。殘念なことをした。もう決鬪が始まつた頃だらう。甥の安兵衞酒は飮んでも、腸までは腐り居らぬぞ。續いて拙者も、おお、さうだ。高田の馬場とは……はて、道は遠いが、息の續く限り馳せ參じたなら、よもや間に合はぬこともなからう。伯父殿はやまつてはくださるな、安兵衞がおつつけ參りまするぞ。甥奴で御座る、安兵衞で、——なに、酒屋だ、小僧、邪魔立てするな。隣の婆さん、後をよろしく賴むぞ。安兵衞が駈けた。人々の魂も驅けた。井戸側の嬶どもは呆氣にとられて彼を見送つてゐる。町の人通りが、皆立ち止まつて何事が出來したかと、口を開いて、血相變へて飛んで行く彼を眺めてゐる。砂村が素足に熱い。鷄が驚いて、垣に飛びあがる。屋敷の黑板塀は長い、長い。並木がある。橋は二跨

きに飛び越えた。人家が續く。市場が開けてゐる。街道へ出た。天秤を横に擔いで行く莫迦者がある。邪魔だ、邪魔だ、道を開け。ええ、面倒だ、たうとう突き飛ばした。たはけ奴が。そろそろ息が切れかかつた。高田の馬場はまだか、ええ、安兵衞これ位で呼吸が迫つて堪るものか。伯父殿、今この安兵衞が參じますぞ、甥の助太刀で御座ります、決してはやまつてくださるな。何といふ長い街道だ。……

「えッへん、安兵衞が高田の馬場を指して急ぐが聽いてあきれらあ。大笑ひさせアがる。やめろ、やめろ、いいいいちよんがり奴。」

誰かが、突然、階子の上から、尖りを帯びた嘲ひどれた口吻でどなり立てた。

「誰だ、誰だ、默れ。」二三人が立ちあがつた。

そこには水夫の服を着た、日に燒けた四五人の若い者が、階子の中腹から船室を見下して嘲笑してゐた。素肌に浴衣をひつかけて、湯上りの髮を後ろへ撫でつけた小粋な若い者なども見せてゐた。

[illegible]

「しづかにせい。」

「喧嘩なら上へ來い、どん百姓。」

「何をッ――。」

聽衆の氣持は急に幻覺の世界から突つ離された。今まで演壇へ集つてゐた視線は、階子段の上に船室の空氣を脅かす爲めに控へてゐる不穩な闖入者の群を見て、恨めしげに震へた。英語まじりの罵倒が、呼吸の迫つた群衆のうちから、礫のやうにそこを目懸けて飛んで行つた。

何かが宙をけし飛んで來て、どしんと船室のうちの何物かに打當つた。偏目の男は、演壇の前に落ちた古盃を拾ひあげるや否や、獸的な呻吟を發して、人をかきわけながら、階子段の方へ急いだ。續いて四五人の男が水夫の群に肉迫した。[illegible]兩手で打破つたやうな物音が起つた。まつ黒い一團の人々のうちから、三つ四つの拳が階段の中心に向つて亂射されるのが、一瞬間、[illegible]と下の人々の眼に映じた。[illegible]そこから發して、シイ・デッキに[illegible]

[illegible]

どやどやと潮のやうな人數が、音の迸る方へ押寄せた。面白半分にわいわい人の肩を押して行く者もあつた。總立ちになつて、血走つた眼で御互を見戍つてゐる男どもの間から、狼狽した女の顏が、蒼白く電燈の下に見えた。氣の早い若い者などは、

「この腐れ船の水夫なら、やつつけちまへ。」など大勢を頼んでわめき立てた。[illegible]人は扇を構へて、口を開きながら鬪爭の中心點を呆然と見あげてゐた。暫く口汚く啀み合ふ聲と、格鬪のひしめきが、他のすべての紛沓の上に續いた。

誰が止めるとなく、それが漸次に鎭まると、誰かが仆れた男を起して階子段をあがつて行く氣勢がした。五六人の船客が、階子段の人だかりを分けて降りて來ると、群集は皆好奇心と信頼とを持つて彼等を前後から取卷いた。

「なアに、この船の水夫でさア。」偏目の男は、半巾で鼻血を拭ひながら、新聞記者へ話した。

「あいつらは航海ごとに浪花節や琵琶の會を開いちや御客の心附を貰ふ筈なんですが、今度ア本物が居るんで、裏をかかれたやうな始末でさア。あの乞食どもが、うんと云ふほど下顎を[illegible]たんですよ――」

[illegible]

また扇をとりあげて、騒々しい復讐譚の終局を、手風にはしよつて、調子も外れ勝ちに、幕の外の三味線の音と共に、演じ終ると手拭で汗を押へながら、一同の前に平身低頭した。だが、その姿は、今となつては、いかにも莫迦々々しく群集の目に映じたのであつた。彼等は世話役の廻した帽子に、思ひ思ひの小錢を投りこんで、我勝ちにとそこを立ち始めた。閉會の辭などは、彼等の話聲や笑ひ聲に埋れて、新聞記者の動かす兩手が、騒音の底に落膽した人のする表情のやうに見えた。

その晩は、遅くまで、中山安兵衛を眞似て唸つてゐる男が多かつた。

一日經つと、汽船は鐘と土人の泳ぎまはつてゐるホノルルの灣口へ着いた。

四

ホノルルでの碇泊は、あわただしい夢のやうに、過ぎ去つた。

上陸前に約束した婦人や、同作者と、連れ立つて船を出る暇もなく、着いたと思ふと、わいわいとどよめき立つ大勢の人々が、後から後からと押して來るまま、船客の多くは税關の石段に、敵の襲來にあつた潰走兵のやうに、ちりぢりばらばらになつて降り立つたのであつた。

そこから町へ入つて、時間に制限されながら、そはそは見物したハワイの光景は、彼等の期待したほどの慰安も、快樂も酬いてはくれなかつた。船の中で、あの女といつしよにどこかの宿屋の奥まつた小座敷で、ゆつくり酒を飲みながらあはよくば口説いて見ようとか、支那街の白人の娼婦を探しあてようとか、久し振りで藝妓をあげて一騒ぎしようとか、退屈まぎれに、じめじめと思ひ耽つて、頭の中だけで地圖を引いてゐた計畫の大部分も、コールタアの臭の濃く漂うた空氣に、鐵材に釘を打ちこむ機械の響が忙しげに、たゝたゝたゝ——と響き亙る廣場へ出たり、世界のいたる地方の衣類を大急ぎでよせ集めたやうな服裝をしたいろいろな人種が、午日のはげしく照りさかつたヘーヴメントの上に、皆何か一定の目標を目懸けて狂奔してゐるやうな實務的な人混みのうちに入つては、何の實現力もない、感情の臆病な小細工に過ぎないやうに、みすみす打毀されて行くのを感ぜずには居られなかつた。……有色人種を人間と思はぬ顔に、太い葉卷の煙を吐いて濶歩するアメリカ人や、シャツとズボンだけでチョコレート色の皮膚を掩うた醜い土人の青年や、出來るだけ短時間に、出來るだけ多量の商品を鬻がうとあせつてゐる小賣商や、涼しげな羅を着流して買物をして歩く西洋の婦人や、陰險な顔を地に向けて日陰の街を足音もなく往來してゐる支那人や、太筆に日本字で汽船の發着表などを書き散らした旅館の列や、い、い、むくむくと膨れあがつた熱帶地の植物が、含んでゐる限りの綠素を吐いて暑苦しさうに葉を垂れてゐる態や、芝居の書割にありさうな一ぜんめし屋に、油じみた稲荷鮨のならべられてあるのや、——さう云つた風な、ごみごみした、いかにも植民地らしい風物が、まとまりの無い印象になつて、數時間の散歩の後に、人々の頭に斑らに殘つてゐるに過ぎなかつた。

ただ、この一瞬間の幻影のやうなホノルルの碇泊時間に、彼等の心に深く染み込んだ何物かがあつたとすれば、それは久し振りで味つた土の踏み心地であつた。動搖する船の甲板を踏み慣れた彼等にとつては、靴の下に、いささかの動搖もなく、太古以來の安定とを以て、重々しく横はつてゐる大地は、不思議な新しい世界のやうに珍らしく感ぜられたのであつた。

暫くの間、ハワイの明るい港灣や、日本の曲線や、まつ白い家並や、常夏の果樹や、そこ

何語や[illegible]語などを交へた、日本語とも英語とも
つかぬ語調で、混沌とした混迷の中を這ひながら、闇の上では見出せない別な世界を、そこに築きあげようと試みるやうに、あらゆる物に向つて負けようとするのであつた。

それから暴風雨の日が續いた。

空も大洋も、水と雲けむる、茫漠とした、まつ白い濃霧の中を、船は[illegible]見えて、一寸二寸と、足場を探りながら進むやうに思はれた。けれどかういふやうな夜は、汚い濃霧の褥を、みるみる白濛々の世界へ、[illegible]をたてつて鞭をつけるやうに飛ばして行つた。マストや柱や廊下は、雫を滴らせるやうな感觸をあたへて身を擦めた。あらゆる物の一たび觸れば大自然の暴力に依つて、みすみす[illegible]てしまふやうに見えた。ピートリの曲がるやうな屈折は、甲板の數尺—まで盛りあがつて、舷側に[illegible]れるごとに、[illegible]高くで甲板を洗ひながら、細かいガラス屑のやうな飛沫を、船の[illegible]に浴びせた。波の高を[illegible]、[illegible]な肉體お薄らぐと、[illegible]のやうな海の面と[illegible]する舷の影が、はてはすうつと見えて、空は低く、[illegible]に水平線に隠れて、その[illegible]度ではと飛んで行つた。永遠の黄昏が迫つたやうに、船室は檻の果ほどの電燈がともつてゐる外、深い闇のうちに沒してしまつた。夜とも晝とも、日が幾日經つたともわからぬやうな、恐ろしい時間の停止が、船室に蟠つた。

誰一人外へ出る者がない。地下室のやうな三等船室には、すべてを忘れる爲めの麻酔が、一團の男女を蒸めてゐる。四五十の人影が、まん中の六七人の博徒を取圍んで、いたいたと重り合ふ。卓の上の電燈は、暗い、濁の巨きな[illegible]のやうな彼等の影を、食卓から床の上へ、そこからまたベッドのある周圍にまで、うつすりと投げ出して、それがぼやけた邊には、白い胸を剥いた女や、馬のやうに鼻孔を大きくした男や、紙切のやうな手をひろげた子供の姿などが、朦朧と見える。

銀貨の音がする。何やら鋭い、細い聲で賭け合ふ聲が聞える。暫し沈默が續く。すると、芝居の幕切の拍手のやうな嘆聲が、息を潜めて見てゐた群集から洩れる。その刹那、いい目に損をした者が、群集の中から吐き出されるやうに、一人二人宛を[illegible]、外へ出て來る。夢中になつて札を張つてゐる男女の顔を、電燈が[illegible]かなから[illegible]のある眼付で他人の動作ばかり見てゐる一組もある。傍觀者は、自分達の冒險心を他人の財産で闘ふ爲めに、殘忍な鋭い批判力を磨ぎすまして、敗けた者の野心を煽り、勝つた者の名譽心を唆す。醉漢がわめき立てて卓の金を掻き廻す。ベンチが作れる。喧嘩が割れると、立ちあがつた博徒の一人が、醉漢を摑り出す。船客が十重二十重にそこを取り卷く。地獄のやうな騒音が鎮まつて人が散る。再び深い沈默のうちに、弗が幽かに鳴り響く。外には、暴風雨が海を底の底から攪拌して、澎湃たる叛逆の手をあげて、鐵と木材とに隠れた卑怯な生物に挑みかかつてゐる。

「そんなに[illegible]けちやいけませんよ！」

金切聲が、二三度高く船室に響いた。二十三番の女の聲であつた。群集は首を傾けて彼女の方を覗いた。

「もう、これつきり。」

[illegible]を帯びた男の聲が、投げ捨てるやうに彼女を[illegible]ねつけた。[illegible]であつた。彼は今までのいい[illegible]されてしまつたやうに、[illegible]押へた[illegible]、[illegible]ねたやうな眼付で、[illegible]

を凝視めてゐた。女は彼のすぐ側に掛けてゐた。

「二弗、行つた」胡麻鹽頭の老人が、おぼつかな手付で、銀貨を二枚場へ置いた。

「二弗受けて、もう五弗。」紀州訛の男は意味ありげに學生の顏を偸み見ながら企圖を嚙んだ。

「おや、こつちは七弗で見ようかい。」偏目の男は放膽的に十弗紙幣を場へ投げて、三弗の銀貨を手元へ引込めた。

「一日損れ博奕つたつてこれこつたよ。俺は今度にして、もう十三弗、二十弗で見ようか。」[illegible]の男が、[illegible]に默つて立つて、紅い二十弗紙幣を出した。

「ようし、[illegible]よからう、二十弗で開く。」胡麻鹽頭の老人が手先の銀貨を勘定し始めると、[illegible]になつてゐる手の甲に牡丹の文身のある男が、[illegible]すやうにその男を遮つて、

「君は、降りたんかい、それとも賭けるのか？」

と彼は[illegible]學生へ向けて矢庭に訊ねた。

學生は、この二三日二十弗、三十弗と敗け續けて、今はもうポケットには幾何も殘つてゐなかつた。[illegible]、彼の子供は彼を誘惑した。彼は急いで場面を一目で見取り入れた。いい、とすると紀州訛の男の三枚續きの一つがダイヤのスポットなら、四揃になるが、その他の者は別に恐るべきほどの手でもない。と彼は瞬時の間に考へた。しかしそれはこの多人數の勝負にはあり得ないことだ。賭博にさう經驗の多くない彼の心には、今まで失つた彼是三百弗近くの金が、必らずいつか歸つて來るもの、と云ふ妄信が絶えず働いてゐた。賭博の最弱點たる所有慾を以て、彼は賭けた。所有慾は彼の眼を鈍らしてゐたことを彼は知らなかつた。

「もう、これつきり。」と、女に云つた言葉で、彼は再び心のうちで、繰り返した。そして、立ちあがるなり、すこし激昂した口調で、

「二十弗受けて、もう三十弗……」

ときつぱり叫んだ。

一座は森として、彼の微顫を帯びた聲を受け入れた。『十三歳』の女は、青年の聲が彼女には餘り高過ぎたと云ふ風に、きよつとして、彼の横顏を仰いだ。

「五十弗、行つた。」紀州訛の男が應じて、[illegible]い平手を卓の上へ、宮守のやうに粘しつけた。舌を巻いて落ちる者は落ちた。學生は、椅子の上へ片足を載せて、青白いわなわなした手で、靴下止けの紐をぐるぐるとほどいた。靴紐はかなり長かつた。細長い指に絡まつた紐を、殆ど引きちぎるやうにして、靴を脱ぎ捨て、靴下を捲り下した彼は、指の曲つた、長いこと日光を浴びたことのない、纖細な片足をあらはした。人々は息を凝らして、彼の不思議な行動を見成つてゐた。間もなく、彼は靴下を捲りあげて、手早く靴を穿き直した。彼の頰には、餘裕のない時に餘裕を示す爲めに、日本人のみがする獨特的な微笑が閃いた。脂汗ににじんだ一枚の百弗紙幣が、無造作に彼の手から投げ出された。[illegible]と、紀州訛の男と、學生との手合せになつた。

あり得ないことが實現された。それはほんたうにあり得たのだ。紀州訛の男は、ダイヤのスポットを魔術手のやうに起して、部厚い、葡萄畑の土のまだこびりついてゐさうな指で、山のやうな場の金を横柄に浚つて行つた。學生の手元にはただ十弗の剩金が戻つて、カードはまた切り換へられた。

「もういいぢやないの、わかつたでせう？——だめよ、だめですよ。」女は聲を立てないで、彼の腿を堅く押へた。學生の心には、何か崩れて、どこかへ流れて行くやうな心持がした。

「失くした！」と云ふ觀念か、突然彼の頭の中に渦巻いた。彼は無意識にまた[illegible]

宿醉や目潰[illegible]などを使つた、[illegible]とも[illegible]ともつかぬ呂律で、混沌とした泥の中を匍ひながら、陸の上では見出せない別な世界を、そこに築きあげようと試みるやうに、あらゆる物に向つて發せらるるのであつた。

それから暴風雨の日が續いた。

晝と云はず、夜と云はず、混沌とした、まつ白い濃霧の中を、船は盲み目で、すごすごと、暗礁を探りさぐり進むやうに思はれた。けしかけるやうな風は、汚い煤煙の塊を、みるみる白霧の世界へ、[illegible]をもぎつて擲きつけるやうに飛ばして行つた。マストや桂や欄干は、髪を拗られるやうな悲鳴をあげて身を顫めた。あらゆる[illegible]した[illegible]は大自然の暴力に依つて、みすみす壓伏されて醜められてしまふやうに見えた。ピーナロの山のやうな巨濤は、甲板の數尺上を一盛りまでつて、舷側に裂かれるごとに、冷たい[illegible]を甲板を濡らしながら、細かいガラス屑のやうな飛沫を、船一面に浴びせた。波の[illegible]んだ側面に、船の手摺で舷体[illegible]お薄らぐと、千丈の紫の間を[illegible]溟の腹に亂射する雨の脚は[illegible]見えた。空は低く、[illegible]その上を怪物の影のやうな雲が、[illegible]

[illegible]度でけし飛んで行つた。永遠の黄昏が迫つたやうに、船室は[illegible]ほどの電燈をともつてゐる外、深い闇のうちに沒してしまつた。夜とも晝とも、日が幾日經つたともわからぬやうな、恐ろしい時間の停止が、船室に蟠つた。

唯一人外へ出る者がない。地下室のやうな三等船室には、すべてを忘れる爲めの賭博が、一團の男女を集めてゐる。四五十の人影が、まん中の六七人の博徒を取圍んで、ひたひたと重り合ふ。卓の上の電燈は、醜い、顏の巨きな怪物のやうな彼等の影を、食卓から床の上へ、そこからまたベッドのある周圍にまで、[illegible]りと投げ出して、それがぼやけた壁には、白い歯を剝いた女や、豚のやうに鼻孔を大きくした男や、[illegible]のやうな手をひろげた子供の姿などが、陰鬱と見える。

銀貨の音がする。何か鈍い、重い聲で賭け合ふ聲が聞える。暫く沈默が續く。すると、[illegible]の[illegible]のやうな騒音が、息を潛めて見てゐた群集から湧く。その瞬間、[illegible]まつた者が、群集の中から[illegible]、一人二人肩を[illegible]、外へ出て來る。夢中になつて札を引いてゐる[illegible]の眼が、[illegible]

ひたすら[illegible]他人の動作ばかり視てゐる眼もある。傍觀者は、自分達の冒險心を他人の財産で賄ふ爲めに、殘忍なほど批判力を研ぎすまして、敗けた者の射倖心を煽り、勝つた者の名譽心を唆す。醜漢がわめき立てて卓の金を掻き[illegible]。ベンチが仆れる。群集が割れると、立ちあがつた博徒の一人が、[illegible]を撲りつけます。船客が[illegible]にそこを取り卷く。[illegible]のやうな騒音が籠まつて人が散る。再び深い沈默のうちに、[illegible]が[illegible]に鳴り響く。外には、暴風雨が海を底の底から攪拌して、澎湃たる[illegible]の手をあげて、鐵と木材とに包まれた卑屈な生物に攫みかかつてゐる。

「そんなに[illegible]けちやいけねえよ!」

金切聲が、二三度高く船室に響いた。「十三歳の女の聲であつた。群集は首を傾けて彼女の方を振向いた。

「もう、これつきり。」

[illegible]を[illegible]た男の聲が、何か捨てるやうに彼女を[illegible]。夢中であつた。女は今までの[illegible]

を凝視めてゐた。女は彼のすぐ側に掛けてゐた。

「二弗、行つた。」胡麻鹽頭の老人が、おづおづな手付で、銀貨を二枚場へ置いた。

「二弗受けて、もう五弗。」紀州訛の男は意味ありげに學生の顏を偸み見ながら合圖を讀んだ。

「おや、こつちは七弗で見ようかい。」一個目の男は放膽的に十弗紙幣を場へ投げて、三弗の錢貨を手元へ引込めた。

「一日置れ傳變つたなこのこつたよ。」彼は俗度にして、もう十三弗、二十弗で見ようか。」一歩ら離らの男が、競爭するやうに聞て笑つて、紅い二十弗紙幣を出した。

「しやう神變た。よかろ、二十弗で開く。」胡麻鹽頭の老人が、手先の銀貨を勘定し始めると、「鍵」になつてゐた手の甲に牡丹の文身のある男が、突飛ばすやうにその男を遮つて、

「君は、落ちたんかい、それとも賭けるのか？」と彼は三角な眼を學生へ向けて出目に訊ねた。

學生は、この二三日二十弗、三十弗と敗け續けて、今は殆んど手元に幾何も殘つてゐなかつた。それ、彼の手元は彼を當惑した。彼は急いで場に二日の中に取り入れた。いい、とすると紀州訛の男が三枚續きの一つがダイヤのスポットなら、四揃になるが、その他の者は別に恐るべきほどの手でもない。と彼は咄嗟の間に考へた。しかしそれはこの多人數の勝負にはあり得ないことだ。賭博にさう經驗の多くない彼の心には、今まで失つた彼是三百弗近くの金が、必らずいつか歸つて來るもの、と云ふ妄信が絶えず働いてゐた。賭博の最弱點たる所有慾を以て、彼は賭けた。所有慾は彼の眼を鈍らしてゐたことを彼は知らなかつた。

「もう、これつきり。」と、女に云つた言葉を、彼は再び心のうちで、繰り返した。そして、立ちあがるなり、すこし激昂した口調で、

「二十弗受けて、もう三十弗……」

といつぱり叫んだ。

一座は森として、彼の微顫を帶びた聲を受入れた。三十三番の女は、青年の聲が彼女には餘り高過ぎたと云ふ風に、ぎよつとして、彼の横顏を仰いだ。

「五十弗、行つた。」紀州訛の男が應じて、大きい平手を卓の上へ、守宮のやうに粘しつけた。舌を巻いて落ちる者は落ちた。學生は、椅子の上へ片足を載せて、青白いわなわなした手で、編上げの紐をゆるゆるとほどいた。靴紐はかなり長かつた。細長い指に絡まつた紐を、殆ど引きちぎるやうにして、靴を脱ぎ捨て、靴下を捲り下した彼は、指の曲つた、長いこと日光を浴びたことのない、纖細な片足をあらはした。人々は息を凝らして、彼の不思議な行動を見戍つてゐた。間もなく、彼は靴下を捲りあげて、手早く靴を穿き直した。彼の顏には、餘裕のない時に餘裕を示す爲めに、日本人のよくする精的な微笑が閃いた。脂汗ににじんだ一枚の百弗紙幣が、無造作に彼の手から投り出された。「親」と、紀州訛の男と、學生との手合せになつた。あり得ないことが實現された。それはほんたうにあり得たのだ。紀州訛の男は、ダイヤのスポットを魔術手のやうに出して、部厚い、蒲萄蔓の蛸の足のまたこびりついてゐさうな指で、山のやうな場の金を橫柄に浚つて行つた。學生の手元には五十弗の剩金が戻つて、カードはまた切り換へられた。

「もういいぢやないの、わかつたでせう？」

だめよ、だめですよ。」女は囁きながら、彼の膝を堅く押へた。學生の心には、何かが崩れて、どこかへ流れて行くやうな心持がした。

「失くした！」と云ふ觀念が、突然で頭の中に渦巻いた。彼は無意識にまた賭けてゐた……

を取り除けて、心の中を空虚にしてゐた。そして、いつか自分が、その渦巻の中へ大きな力で[illegible]果て、すべての意義や判断をその底へ引摺り込んでしまふことを望んだのであつた。彼には何も聞えなかつた。何も見えなかつた。百弗紙幣を切断した断片は、その保管で、性急な、緊張した三回の小さな勝負で、みるみる残りの五十弗も[illegible]出してしまつた。最後の十弗紙幣を[illegible]のやうに[illegible]て行く[illegible]男の太い親指に[illegible]は、思はず[illegible]なつた瞬間に、無数の目が[illegible]やうに、[illegible]心に、恐ろしさに、その親指の動く方向に従つて動いて行つた。彼の頭脳は、親指の持主の[illegible]にまで[illegible]つて行つた。彼は初めて、その親指の持主が[illegible]を[illegible]て、自分の側にゐるのに気がついた。[illegible]てゐるのに[illegible]、[illegible]しく[illegible]やうに[illegible]に[illegible]てゐた。[illegible]生の髭の[illegible]紅い、黒い、大きな[illegible]しい[illegible]で、[illegible]つてゐた。それに[illegible]ひながら、女や、老人や、子供を押し別け、突き退けて、そこを飛び出した。

――よく[illegible]と言ふ声が、[illegible]

[illegible]つけた彼は、ちよつと立ち停まつた。彼は[illegible]息にまつ[illegible]な物に押しかかられたやうな気がした。その途端に、誰かが後ろから彼の肩を押へた。

「どこへ行くんです？」

女の声だ。彼はその女が誰であるかを知つてゐた。

「どこへ、行かうと……」彼はむつかり答へると同時に、扉を開けうとした。

「あなた、泣いてゐるのね」女は遮ぎつて、いつしよに扉を開けた。彼の方から、いつも[illegible]する人々の前に[illegible]びいた。扉は二人の足下に、いいいむくむくと猫背のやうに[illegible]あがつた。すると、今度は反対の方へ、急な[illegible]を作つて、辷り落ちた。凄まじく上甲板にくだけた波の音が、何か叫んだやうな声を打消した。彼は女を振り切つて、扉を開けあふり、シイ、[illegible]夢中で重い扉を押し退けて、[illegible]上甲板へ[illegible]もはした。ゴーツと云ふ[illegible]、[illegible]て、[illegible]な[illegible]て、両手で、それを支へると、[illegible]

まつ暗い、底知れぬ深淵が世界から、恐ろしい勢いで[illegible]大浪が、もつれ合ひ、揉み合つて、急激に目の前へ近づいたかと思ふと、[illegible]に打ち倒れたやうな音を響かせ、一度に、いつしよ彼の立つた扉を[illegible]して、弾き飛ばされた[illegible]、いいいおろおろと前面の梯子段を駈け降りた。[illegible]彼の腕を抱き留めたのは、十二番の女であつた。

五

たまたま[illegible]い[illegible]、[illegible]をしまつたかなりの色の[illegible]、恐ろしい[illegible]で[illegible]つて、みるみる[illegible]な[illegible]になつて沈み[illegible]さつた。殆ど同時に、[illegible]された[illegible]人形のやうな[illegible]な[illegible]が、[illegible]しい[illegible]な[illegible]で、[illegible]な音が[illegible]を[illegible]いた。その[illegible]はだんだん大きくなつて、終ひには[illegible]いつといふ[illegible]たつた。すると、その[illegible]のあたりから、[illegible]力[illegible]ると、[illegible]に[illegible]れた[illegible]、[illegible]もするし、[illegible]なつて、もつと太い音の[illegible]を[illegible]いた。[illegible]つた。

[illegible]、小さく[illegible]、[illegible]くて[illegible]、[illegible]

の音聲がどこか遠い遠い昔から聞覺えのある、それでゐて何とも云へぬ不思議な、懐しみと怖びをいつしよにした複音のやうにひびいた。それにしても、彼等の目覺めかけた意識が、だんだん明瞭になるにつれて、その二つの違つた聲は、彼等の室でゐ、船室、彼等の枕元で、さつきから響き續けたことに、漠然とした疑ひを起したのであつた。

その喧噪、いろいろな雜音と振動とが、一度に湧きあがつた。

誰やらが、咽喉をしめられた時のやうな聲をあげた。ベッドの梯子が外れて床の上へばつたり仆れた。寝てゐる者を呼び起す氣勢がした。金盥か何か、金屬性の器物が鳴つた。足音が、ど、ど、ど——と何處かへ傳つて行つた。そつちにも、こつちにも、ただ一つの感情をあらはした人々の言葉が、入り亂れて、船室はにはかに活氣したやうに騒しくなつた。船客の大部分はベッドを離れた。

夜は白らみ明けに近かつた、濕みを帶びた黄色い灯は、いかにも鈍く船室の下に低く湛へてゐた、窓を合ふ海面をどこからかかすかな黄い傳つて來て、船の周圍に忍び寄るやうに見えた。凛とした寒さが、人々の肌を犯した。

「御産ですつて？——」

「誰？」

「あの五十番の、例の御腹の大きい婦よ。」

「どうも昨晩から様子がへんだとは思つたんですがね。」

「おかみさん、お醫者は今すぐ來ますよ。——でも良かつた。二人とも健康でね。」

「おお、ひどい血だ。こりや、きたない。」

しどけない姿態をした人々は、いつも暗のうちに埋められたやうな、正面から左手の、五十番のベッドを鍵状に取り卷いて、一人の齒の汚い婦が、血の滴る布や、蒲團などを取除けたり、産婦の枕の下へ掛蒲團をあてがつたり、獨りでいそがはしげに立ち働いてゐるのを眺めながら、ひそひそと囁き合つてゐた。駈けつけようとしてあせる子供を抱き留めてゐる婦もあつた。みだらな笑ひを含んで上のベッドから下を覗いてゐる青年などもあつた。にはかにこの産婦が一室の中心點になつた。

産婦は蒲團の層の中に、高い鼻と齒だけをあらはして、低い呻吟を立てながら臥てゐた。一應洗ひ淨められたらしいが、ベッドの下にあるごみごみした着物や、布切や、器具などの中に、踏み捨てられた齒磨楊枝が一本、血に染まつたまま、濡れた床に轉がつてゐた。

「さア、皆さん、どうかあちらへ行つてくださいよ。」

産婦の世話をしてゐた婦は、以前は産婆でもあつたらしく、さう云ふ場合に限つてあらはれる職業的な落ち着きを、齒切れの悪い聲に聞かせて、何やら一塊の布に包まれた物を勦りながら、だんだん近寄つて來る人々をたしなめた。

圓い布の包の中には蠢動する肉の團塊が、精一杯のひいいひいいした聲で泣いてゐた。そこから少し遠退いた人々は、喪服をつけた親族の會議のやうに、ひそひそ聲で話し合つてゐた。婦と婦とでなけりやわからぬやうな會話が、そこここに取り交された。

金釦のついた制服を着けて、船醫が來たのは、夜が全く明け放れた頃であつた。彼は急いで、後から續いたボーイから、鞄を受け取ると、慣れた手付で聽診器などを出して、看護をしてゐた婦の云ふことを、熱心に聽取つた。やがて彼が立ちあがると、ボーイに擔架を命じて、

「ともかく病室へ連れて行つてからにしますから。——こまつたなア、今夜着港と云ふのに……」

額に小皺をよせながら、何か心配げに訊ねるその婦に對して答へた。

船醫と入れ違ひに擔架が來た。產婦は白い布に覆はれて、二人のボーイに擔はれながら出て行つた。看護をしてゐた婦が、嬰兒を抱いてその後について行つた。薄紅い朝の日光が、ちらとその血よりも紅い嬰兒の顏をも照らし、何時ともわからぬ内に圓窓に落ちて、一室の圓窓から消えてしまつた。その飢ゑたやうな、紫靄に消したやうな聲だけが、汽船の腹部を貫いて、どこまでも、どこまでも、重い背綱を曳いたやうに、人々の耳に殘つたのである。重い瞬間、人々は沈默して、偶然、今度[illegible]の目の前で仲間入をした一人のかはいい者のことを考へた。

「運の好い兒だね、今日生まれて今日、――」一人の老人が、[illegible]沈默を破つた。

「さうだね、こんな目出度いことはありませんよ、海の眞中で、」暢氣さうな中年の男が、ふと嬉しさうに叫んだ。

人々の話は、それに就いて色々あつたが、人間が持つてゐる凡ての憂さを忘れるやうに、彼等はあらゆる醜さと苦しさとを、[illegible]

暫くの後には、[illegible]

闇夜ともし放しにしてある電燈の光を薄く見せてた。小さなパノラマの背景のやうな雲には、矢色な雲の斷層に、眞珠色の柔かな朝の光が、燻のやうに赤い日光に焦されて、漸次に紫に變つて行くのが見えた。

「一寸を好きますなア――。」

「わしは三十年振りでがすよ。默つてやせうなア、日本も。」

「今晩、何時でせう、着陸は?」

「何でも檢疫が濟むのは八時だつていふんですから、九時頃でせう。」

「まだ陸は見えませんかね?」

そんな會話が、どの隅にも交された。すべての人が、日光と、風の海とに調和されて、つい二三日前までの野獸のやうな動作も、醜い言葉も、すつかり洗ひ落したかのやうに見えた。

清々とした顏で笑つてゐる婦人もあつた。

「一寸、[illegible]」と[illegible]いた男もあつた。

相變らず[illegible]

が四五人、續いて上甲板へ、足音高く走りあがつた。一室の人々は、船窓から外を覗いて、

「もう着いたんかい?」なぞと叫んだ。

「夜ちや惜しいもんだなう、富士山が見えんちやけに――」紀州訛の男は、[illegible]ヤブラッシャを着ながら、傍の眼の吊りあがつた青年へ話しかけた。

「わしの知つてるもんは、先達日本へ歸つたんだがな、甲板から富士山を見てからに、あんまり嬉しかつたもんで、海ん中へひつくり返つたんだよ。フレスノで葡萄作つてね、何でも二萬からは持つて歸つたと新聞に出た男だつたが、自分で葬式の費用位にアメリカへ行つたやうなもんだよ。」そんなことを云ひながらも、青年は[illegible]を雨[illegible]で眺めてゐた。

人々は急に理想家になつた。今までの幾年の異國の生活が、[illegible]

を片付けはじめた。子供達は大人の群に感染して、わけもなく嬉しさうな顔をして室内を狂ひ廻つた。船客の顔は、どれもどれも、皺が舒びて、柔和な、慈悲深い表情をしてゐた。言葉にあらはせない彼等の心は、十六日間じめじめと見古した床の上を、朝餐の飯粒の散らばつた上を、

「日本、日本、日本――」

とコーラスを唱つて飛び廻つてゐた。

長い間ベッドの鐵柱に吊されたバナナの朽ちた幹が、どさりと切り墜された。まとめた布包を上のベッドから床へ投つて、「あつ、しまつた。」と顔を顰めて、あわてて飛び降りる者もある。毛布や蒲團のカーテンが排ひ除かれる。税關がやかましいからと云うて、買ひ込んで來たシガレットを手當り次第に喫れて行く者もある。自分が宿引にでもなつたやうに、横濱の旅館の屋號をならべて、他人を慫慂してゐる者もある。不用になつた物は、皆惜しげもなく床の上に捨てられた。金盥、鳥打、佃煮の罐詰、果物、煙草の鑵、古靴、女のコルセット、講談本、ウイスキーの罎――これらの物品は、突然、持主の所有慾を離れて、みるみる床の上に積み重つて、必要品から塵芥に變じてしまつた。毛布や、道具類や、船客の乘つてゐないベッドは、今までのやうな個性を失つてしまつた。斑點だらけの壁が、床の上や、壇の上のごみごみした廢物を四方から包んで、一室が巨大な塵埃棄場のやうに見えた。遮る物の無くなつた壁の上には、春の海の反映が、ゆらゆらと光線の戯れを畫いた。

不思議な融和力が、人々の心に動きかけた。それは單に昨日、昨日までの憂鬱と倦怠の生活から反動した、氣紛れな歡びだけではなかつた。すべての人に共通な、すべての人を滿足させる、すべての人の理想である。そして、今までの現實よりも高い、偉大な、幸福なものが、彼等の目前に迫つて來て、すぐと彼等の生活に溶け込んでしまふ、と云ふ晴々しい豫感が、各自の小さな迫害心や、獸力や、利己主義などを打ち破つて、彼等を同じ大きな目的に向つて進んでゐる仲間同志にしてしまつた。無意識な歡びが互の間に結合力となつたからである。荷造りを終へた者共は婦や老人どもに力を添へた。覺束ない手跡で田舍の住所を認めながら、遊びに來給へ、と隣のベッドの他國者に勸めてゐる者もあつた。ボーイを呼んで幾何かの心附を取らせて、丁寧に禮を述べてゐる者もあつた。鞄の中をあらためて、税關を通過せぬ物を除けてやつてゐる世話好きな者もあつた。男達は云ひ合したやうに、アメリカ仕立の一張羅に、派手なネクタイを結んだ。婦どもは田舍の帽子屋から賣りつけられたやうな、大束の造花を重げに載せた天鵞絨の帽子や、思ひ切つて夏向きなスカートを着た。彼等の眼は皆霞んだ。彼等の足は輕かつた。彼等の聲は空洞になつて船室を鈴のやうにひびきわたつた。

「陸が見えるよ、――日本が!」

あたふたと、甲板から降りて來た偏目の男は、まだ荷物の始末に忙しい講談本の男へ話しかけた。その聲が、意外に高かつたので、一室の人々は總立ちになつて、甲板へあがつて行つた。

甲板の上は寒かつた。二月の風はコートやスカートの裾を飜して、柱や壁の蔭には霜の氣が潜んでゐた。正午近い海は、無數の飛魚が泳いでゐるやうに、白い日光の下に輝いた。靜かな蒼空は、澄んで、巾廣い白金のやうな日光を漲らして、水平線からくつきりと立ち離れて見えた。五六艘の反古紙を貼りつけたやうな日本の漁船が、モータアの力で、汽船から離れようとするやうに、沖へ向つて戻つてゐた。冷た

い波は、船の兩舷の下に逆毛のやうに白く砕けて、うねりが打つごとに黒い冬の影を舒して行つた。船客の多くは、右舷の欄干に凭れて、鋸形の一帶の陸地が、處斑らに白い背を閃かして近づいて來るのを見戍つて、がやがやと喧ぎ立ててゐた。

人氣のない船室に、自分の頭文字を書いた鞄の上へ腰かけて、甘くもなささうに幾本も幾本もシガレットを吹かしてゐた學生はふと立ちあがつて、片隅のベッドへよぢ昇つた。毛布や蒲團の除かれた帆布のベッドは、體の重みにきい、きい、きいと軋つた。彼はその邊を見廻して、はつと息をひそめた。空洞な船室には、産婦のゐなくなつた跡に撒いた石炭酸の臭ひが縞を織つて流れてゐた。彼は恐る恐る手を伸ばして、ベッドの上に載せてある紀州訛の男の手鞄を引寄せた。鞄にはまだ錠が卸してなかつた。それを開きながら彼は鋭い眼を、階子段の方へくばつた。其時、シイ・[illegible]忙しげな靴音がして、船室の階子の[illegible]、い、い、[illegible]まつた。

「日本が見えますよ、ね、書生さん、——書生さん！」女の聲が、倚投げに正面の壁へ衝當つて、やけにこつちの壁へ反響した。

いきなり、何かの兇器で頭を毆られたやうに、彼は立ちすくんで、大きな眼をすぐ前の壁の上に堅めた。彼が、何か言はうとして、痙攣的に脣を開いた時、十三番の女の、華奢な、踵の高い白靴が、階子段をことりと一階降りて來た。

マドロスの群

一

村島が死ぬ前までの俺たち六人は、よく酒を飲んでは啀み合ひ、博奕にとられては打つの殺すのと云ひながらも、離れがたい兄弟のやうに、一種の喧嘩ばやい友情をもつてたうとう二航海を過したのであつた。ながい間の異國の海の放浪に身も心も荒みはてて、どうして海から足を洗はうとか、また何を目途に稼ぐとか云ふ、陸に棲んでちみちな生活を營んで居る者のやうな打算をふりすてて、ただもう船さへ空いてありやどこへでも渡つて歩くと云ふ手合ではあつたが、どつちを向いても毛唐ばつかりの世界に、苦力同様な仕事を同じ船で二月もいつしよにやつたと云ふことは、女々しいとも思はれるほどの愛着心をめいめいの魂に刻み込んだのであつた。それに、こんどはもう俺たちも六人ではなくなつた。飲んだくれの、日本以來の兄弟分の、それでゐて至極御仁良の「牛の尻尾」と渾名された村島が、赤道直下の瘴氣にたたれて、三日とわづらはずにころりと死んでしまつてからは、ますます御互の寂しい心をぎつしり抱きしめていつしよに生きて行かねばならぬやうな悲痛な氣持が迫つて來るのを感じたのであつた。兄弟の死――所禿けのしたボックス製の鞄と、一足の古靴と、蠟石で拵へた二つの骰子とを見ると、俺たちはしみじみマドロスの一生のはかないことを考へさせられるのだつた。

「あのずぼらな村島が、ああぽつくり死なうとは思はれなかつたが、な。」

「さうだ、あのずぼらが――」

「よく牛の尻尾を食つてはパントリーにふんぞり返つて晝寢をしてやがつたな。」

港に近づくに從つて、こんな故人の噂をしてゐながらも、俺たちは五人の間に、大きい團子鼻の、惡黨らしい藪睨みの眼のひかつた村島の顔がまじつてゐないことが、何となく物足りなかつた。

日夜に日蔭の中で暮らすやうな氣分が俺たちを襲うて來た。時には、妙な錯覺から、港へつきさへすれば、きつとドックの上に村島の鳥打姿が待つてゐさうな氣もした。

デラウエヤ河口に一晩の潮待をして、四千噸の重油を積んだ俺たちの船がフェラデルフィヤの港へついたのは、秋ももうめつきり更け渡つた十一月六日の朝だつた。一月前に棧橋の傍らに咲いてゐたサンフラワアも月見草も、いまはほろほろと枯れ凋んで木の葉の落ちつくした陸は、熱病にかかつたあとのやうな冷たく皺深い膚を、氣短な日光の前にさらけ出してゐるばかりだつた。一航海の終りにいつも感ずるやうな、いろいろな匂ひをこめた陸の生活に對する飛び立つやうな感激を恢復する氣力もなく、俺たちは居殘りの機關士や水夫の肉を燒いたり皿を洗つたり、餘つた食物を棧橋の野良犬に投つてやつたりして、別に他の水夫たちのやうに上陸を急ぐやうな心もなく、ぼんやりとして氣のぬけたやうな港の景色を眺めて一日を暮らした。新しいボーイを傭はねばならぬと云つて、厨長の栃原だけはその朝からニュウ・コークへ立つて行つた。

「どうしよう？」

翌る日、月給を受取ると、浮かない顏をした中

塚と云ふクックの下働きが、それでも上陸の用意をしながら、料理人の谷に對つて訊ねた。
「俺らスチョージに借りがあるから、まだこの船からは拔けられない。」
谷は貰つて來た紙幣の束を數へてゐたが、つまらなさうにその小口を指先でぱらぱら彈きながら答へた。
「ともかく上陸らうよ。上陸つてトニーのとこで一杯やらうぢやないか？――」
陸へつきさへすりや不思議なほどきびきびして來る皆川が、踵の歪んだ靴へ無理に片足をつッこみながら元氣らしい聲で叫んだ。
「梅原の奴、ボーイを探すなんてうまいことをぬかして、たうとう逃げを張りやがつた。あの野郎、俺たちの倍も月給を取つてゐて、おまけに肉屋の頭をはねてけつかりながら、なアーんだ、しみつたれ。見ろ。きつと今夜あたり情婦のとこへしけこんでやがるにちげえねえから。」
廚長を目の敵にしてゐる士官食堂附の鮎貝は、どこの辯ともつかぬ、日本語にしては妙なアクセントのある、俺たちだけに通有な混血語で毒づいた。事實、よく考へると、廚長なんてものは、やはり同じ日本人でこそあれ、俺だけの眼から見れば一種のブローカアのやうなもので、船長や士官の方へ行つちやおべつかを使ひ、また、こつちへ來ちやいいかげんなばつを合はせてゐる曖昧な職柄なので體のいい遊び人ぐらゐにしか見えはしないのだ。
　午後になつて、船の中が空になるとさすがにぢつとしては居られなくなつたので、外套も着ない、メキシコ人のやうに黑い俺たち五人は、賑かな街から街へと押默つて歩き廻つた。めいめいの煙草とか歯磨とか云ふ身の周りの小さな買物を終ると、久しく強烈な刺戟にあこがれてゐた俺たちはトニーと云ふ行きつけのイタリヤ人の酒場へ入つて、そこで夜徹し飲み明かしたのち、翌る朝に一航海の終りには、必らず寄ることになつてゐるマアガレットの家を訪れた。マアガレットと云ふのは、もと料理人の谷の女房であつたが、谷が船乗になつて流轉の生活をし始めてからは、とてもじみな稼業で自分の生計を支へて行くことが出來なかつたので、たうとう暗い商賣をやり出した女であつた。マアガレットの家には、時とすると四人ぐらゐの白粉臭い若い女が圍つてあることがあつた。
「トーキョウ！」と云ふ合圖さへ知つてゐれば、そこへは誰でも出入することが出來た。俺たち五人はトニーの酒場で飲んだ酒の醉を女どもの膝の上で醒ました。折惡しく女は二人しかゐなかつたので、谷を除いた外の四人は、かはるがはる二人の女を共有することにした。
　からがつがつ急いで偸むやうにとつた快樂もほんの束の間で、それが過ぎると俺たちはまたまたすべてを忘れるために飲みなほして底拔けに騒いだあげく、たうとう外套を買ふ筈の金もなくなして、霜の冴えた頃油船へ戻つたのであつた。谷だけは、明日の出發には必らず間にあふからと云ふ約束で、マアガレットの部屋へ泊ることにして、未練がましく居殘つた。
　碇泊三日のうちに、船底の重油をすつかり東部行の貨車に搾り取られてしまつた俺たちの船は、急に重荷を卸して安心したやうに吃水を高めて、解纜時刻までにぞくぞく歸つて來る船員は、みな油でぬめぬめした繩梯子を小さくなつてよぢのぼらなければならなかつた。梅原の註文して置いた山のやうな食料品や氷などが、五臺の荷馬車で棧橋へ着いたのは、何となく押しつまつた拔錨時刻にまもない正午近くのことであつた。汽車でニュウ・ヨークから歸つたばかりの梅原は、帽子を脱いだ痕の赤く食ひ込んだ額に、球のやうな汗を流しながら、谷に

乘つて棧橋へ降りたり、逆狀と現品をくらべて見たり、吶りがちな英語でプーレイを動かしてくれる水夫長と喧嘩したり、あわてて馬鈴薯を船底へ仕舞ひこんだりした。食料品の積荷で腹を減らした水夫や水兵たちは、俺たちの働いてゐる廚房の窓から首をつツこんでは、リンゴオ・サベ式な英語で、かやかや食物の註文をした。

「No Cook, no eat!——」

から叫んだ下働きの中塚は、連日の醉に充血した金壺眼をぎよろつかせて、剝いてゐる薯の皮を彼等に投げつけた。その下から、彼は心配さうに、

「ちよッ、谷の野郎。何をしてるんだらう?」

と獨り語つた。

水夫部屋の掛川も、口やかましい水夫どもにせがまれて仕方なしに肉皿を持つて廚房へあがつては來たものの、日明けつはなしにした廚房には、珈琲さへろくに沸いてゐなかつたので、ぼんやり其に立つたまま、無上に煙草を喫つてゐるのだつた。

「何だか、こんどの航海は、けちがついてゐるやうな氣がするな。」

俺は、さう云つて、皆の顏をまじまじと眺めた。

村島か、帆布の袋に縫ひつめられて、甲板から、戸板の上をするすると滑つて行つて、脚部に結びつけられた石炭の重みで、硫黄のやうにどろついた赤道直下の海へ、飛沫もあげずにずぶりと墜された瞬間から、俺の心には、この船に對する漠とした恐怖が湧いて來たのであつた。俺には着港後の、船の内外に起つたすべての雜沓は、だんだん不思議な他界の呂律のまはらぬどさくさ騒ぎのやうにしか考へられなかつた。いままで當り前だと思つて來た出來事も、妙にその裏に潛んでゐる祕密を探つて見なければやまないやうな、またそれが馬鹿々々しいむだ事のやうな氣も潮して、生に對するいらいらした猜疑心がいつの間にか俺の心に深く食ひ込んで宿無し犬のやうに離れようとしなかつたのだ。

—こんどの航海は、俺はもうよさうかと思つたんだがな。——」

中塚は壁にかかつたままになつてゐる、かぶりてのない料理人の白いキャップを瞻あげながら、抽象的に物を考へてゐる眼つきでさう云つた。一同は彼の眼色に、谷の奴逃げたな、と感じてゐるらしい恐怖をありありと讀んだやうな氣がした。

その時、廚長がそそくさと入つて來たので、一同はばつたり口を噤んでしまつた。

「君等は何をしてるんかね? 谷はどうしたね? 困るなア、見給へ、晝飯もまだ出來てないぢやないか。——水夫の奴等がうるさいからね、早くしてくれんと困るよ。」

樽原の尖つた鼻は、誰でも對手になつた人間を突刺してしまはうとするかのやうに恐ろしく尖りを帶びて、その尖端からはぽたりぽたりと汗の雫が落ちてゐた。俺一人こんなに働いてゐるのに、と云つた風な表情が彼の顏一面に書いてあつた。實際、着港前後の忙しいのは、船の中では廚長に及ぶものはないと云つてもいい。しかし、それも高い給料のつく職業なのだから、仕方がない。

その途端に、廚房の扉があいて、谷の禿げた額と極り惡げな大顏とがぬーつと現はれた。彼は幾度も途中で考へて來たやうな云ひ譯を、吶りながら述べるのであつた。俺たち一同は思はずほツと吐息して、谷を胴上げでもするやうな氣勢で、大聲をあげた。さすがは慣れたもので、遲れて來ても彼は如何にも料理人らしい落ちつきを見せて何か合せの肉や野菜物やパンなぞをそれぞれに振り充てて、見る間に三十八人分の

ランチを拵へてしまつた。

「ボーイの奴も遅いな。たしか今朝の八時二十五分でニュウ・ヨークから來ると云ふ約束だつたが。老爺、ひよつとしたら、誰もないので困つてゐはしないかしら？」

谷のことで一安心したと思ふと、苦勞性の梅原は、こんどは、幾度も腕時計をのぞいて見ては、村島の代りの遅いのに業を煮やし始めた。彼は幾度も解纜時刻を訊き合せに船長室へ驅けつけたり、フォアキャッスルから棧橋の上やごみごみした港近くの隘衢の上を探すやうに瞶めたりした。そのうちにきりりきりりと錨は巻きあげられ、食料品の全部も船へ積込まれてしまつた。もう船は、切符を買つてゐつたり煙草の一本も喫ひながら、汽車の着くのを待つてゐる旅客かなんぞのやうに、出帆のすべての準備を終つて、うす黄い煙を煙筒から吐きながら、思ひ出したやうに雲の間から射す十月の淡い日光に船腹を曝して待つてゐた。六千噸の船か、一人のボーイを待つてゐる。あり得べからざることで、事實さうなのだ。――梅原の神經質な大きい眼は物に打當るごとに怯えたやうにきよときよとし始めた。二時は出帆の定刻であつた。士官食堂の時計はもう二時半になりかけてゐた。梅原の頭の中を鼠のやうに驅け廻るいろいろな苦悶が、いたるところで彼に出遇すごとに、ありありと俺たちの眼に映じて見えた。三時……俺たちが無限に重りあつた食堂の殘滓でいつぱいになつてゐる皿を、一枚々々スチームの栓を捻つて温めた水で洗つてゐるうちに、すさまじい汽笛とともに船はゆらゆらと動き始めた。やつと皿を洗つて、まづ一服と、脂ぎつた手を拭きながら、上甲板の廚房へ入つて見ると、そこには梅原が谷と中塚と、皆川とに對つて、手を合はせるやうにして何かを賴んでゐる姿が見えた。俺の入つて來るのを見ると、彼は向きなほつて、いきなり、

「ね、伊藤君、諸君にも御願ひしてるところなんだが、ぜひこの一航海は君たち五人で何とか間に合はしてくれないかね？――どうせ六人と定數のきまつてる船なんだから、諸君の頭わりに一人分の月給は割増にするから、そのつもりで、何とか君と鮎貝君と皆川君との間に水夫と火夫の部屋と水兵の方と士官室とを掛け持つて貰はれないかね。僕も手傳ふよ、どうせこんどのことは僕の手落ちなんだから、仕方がない。……」といかにも當惑り切つて拝むのであつた。

「どうも困るね、それでなくとも仕事が困難なんだから。――それに鮎貝にも相談しなけりや、あのつむじ曲りがまた何と云ふか知れないからね。」

「老爺も老爺さ、あんなに承知して置きながら。……」

梅原の『老爺』と云ふのは、俺たちももとはずゐぶん厄介になつたことのある長谷川と云ふ海員下宿の主人で、歐洲大戰が始まつてから、各國の船へのボーイの遣り繰りだけで小一萬からの金を殘したと云ふ評判の立つた男のことである。

「君がいつしよに連れて來さへすりや何でもなかつたんぢやないか？」

から中塚に一本つッ込まれた梅原は、ちつと痛いところへ觸られたやうにあわてて頭を掻いた。

「それが君、食料の註文や何かでどうも僕の方は一刻も猶豫の出來ぬ體だつたんだからね。――大貫と云ふ男だよ、ドックの番號も船の名もちやんと書いて渡したんだが、……間ちがひはない筈だがね。……と云つても、もうこの通り船は動いてゐるし、追つかないことだが。」

「べらぼう奴、六千噸の貨物船をボーイ五人で

切り廻した例はあるかい？　人を馬鹿にするない。」

突然から俺の背後から大聲で叫んだのは、いままで士官室の方の掃除をしてゐた箒の鮎貝だつた。よほどのことでなけりや顏を蒼くしたことのない彼も、廚長の眼と自分の視線とがかち合つた時だけは、ぴりりつと額に青筋を立てて、俺の體を押しのけるやうに前へ衝き出たのであつた。すると、その時廚房の圓窓から水夫長が顏を差し入れて、梅原を呼び立てた。

「さつきから船長が呼んでるよ。」

船長と云ふ一言を聞くと、梅原は、彈機仕掛けのやうに扉口へ飛び出て、急に英語の調子になつて、

「Yes, Sir. Yes, Sir!」と早口に空な甲板へ挨拶しながら、フォア・キャッスルの方へ急いで行つた。

俺たち五人は眼と眼を見合はして苦笑した。拍子抜けのした鮎貝は握つた拳で自分の額をいやと云ふほど叩いた。

しばらくすると、扉口から甲板を覗き見してゐた中塚が急に大きな聲で、

「來たぞ、來たぞ。おい、ボーイが來たよ。」と頓狂に叫び出した。

なるほど、降つて湧いたやうに、前橋の直ぐわきに、灰色の中折を脱いで額の汗を拭ひながら廚長と談してゐるのは、まがふかたなき日本人だ。フォア・キャッスルには、俺たちが「鰯」と綽名してゐるノールウェイ人の痩せぎすの船長が、しきりに河を瞰下しながら合圖してゐた。

「どうして來たんだらう？」

俺たちの疑問は、まもなく船のテー・ボード・サイドに刻るやうな汽笛とともに、ぽくりと頭を掻けた一團の煙で、わけもなく說明された。

「間抜け奴、小蒸汽で送られて來やがつた。」

近よつて見ると、その男はよく活動寫眞で見る何とかチャプリンと云ふ道化役者そつくりな顏をしてゐた。太枠のタンゴ眼鏡をかけて、機關長でさへ生やしてゐないチョビ髭を蓄へ、折目のついたズボンをはき、細身のステッキをついて、陸からのほやほやらしい大げさな革製の鞄を持つてゐるのだつた。

「遅れてどうも濟みません、實は途中で惡い馬車屋につかまつて、ぐるぐる方々を廻らせられましたもんですからね。……どうもこの港の地理にうといので。」幾度も中折をとつて頭を下げながら、から辭儀する彼を、やれやれと云つた顏付で梅原は頭から爪の先までじろじろ何遍も見おろした。俺たちは急に脇の下を擽られたやうにどつと哄笑した。新參者はますます恐縮して、中折を手に持つたまま俺たちの一人々々へていねいに頭を下げた。

「……惡い馬車屋につかまつたかね？」

梅原があきれ返つてさう反問した時には、皆川と中塚はもう堪へ切れなくなつて、腹をかかへて廚房の方へ驅け出した。

「まア、來た以上は仕方がない。――春藤君、部屋まで案內してくれ給へ。」

梅原はから云ひ捨ててさつさと自分の室の方へ歩み出した。部屋へ降りると、その男は、珍しさうにきよろきよろその邊を見廻しながら、一葉の名刺を出した。

「僕は君、大貫兵吾と云ふもんですが、よろしく御賴みします。實はいままで領事館に勤めてゐたんですけれども、どうも一階半級の小役人などと云ふものはうるさいもんでね。たうとうこんどは一つ宗旨を變へて、海へでも出て見ようと云ふ氣になつたんです。……どうです、廣く海の方はおやりですか？」と、いかにも事務所で擦り減らしたやうな日本語でしやべつた。

「これで三年さ。――船乘も道樂ぢやないから

な。」俺はからにべもなく挨拶して、村島のベッドだつたあとをあてがつたのち、あらかじめ俺たちの受持の仕事の大體を説いて聞かせた。彼はやたらに煙草をふかしながら、大儀さうに細身のステッキに顎をのせたまま、俺の云ふことにわかつたやうなわからないやうな叩頭をしてゐた。

しばらくすると、仕事の手明きになつた鮎貝と皆川と谷とが、物好き半分に部屋へ降りて來た。大貫はさつき俺へ云つたと同じやうな挨拶を述べて、しきりに『領事館』を振り廻して、船乗りにはがらにもない名刺を分配するのだつた。

「ははア、さうかね？ あんたはよつぽど偉いんだね。」皆川はから空とぼけた聲で云つて、眼を低い天井へ投げた。谷は大貫の横顔を見戍りながら、

「おい、君、もう俺たちは月給がついてゐるんだから、そんなしやれた風をやめて、さつさと働く身支度をせんといかんよ。」と、頗る真面目な老人じみた顔で忠告した。

「やア、どうも、つい海員生活には慣れんものですからね……。」彼はさう云つて、あわてて服を着換へ始めた。

さつきからこみあげて來る可笑しさを噛みしめてゐた四人は、別にさう滑稽にも思はれない大貫のこの言葉をきつかけに、腹の底から聲をあげて高笑ひした。笑はれた當人は、大切さうに、銀の輪の嵌まつた細身のステッキを壁の隅へ立てかけた。

「情けないことになつたぞ。――どうして、ああ領事館を振り廻すんだらう、ね？」

あとで厨長の梅原でさへ、さう云つて苦笑した。

『牛の尻尾』はこんな工合にして『領事館』と代つた。

二

「おい、中へ入れるんだよ。戸口へ置いたつてなんにもならねいぢやないか？」

云はれて大貫は、本能的な反抗心を眼色に見せてちよつと躊躇したが、俺と鮎貝の險のある顔を見て急に脅かされた動物のやうにすごすご牛の死體を曳きずつたまま冷藏庫の闇を跨いだ。

俺は彼の態度にも感心したので、

「寒いだらう？」と外から呼びかけた。

「あッ、こりや、頭ががい、がい、きしますな――」

大貫の顔は、ビーフの林の奥から露へ出た。

「ボーイに憎まれた厨長が、よくこの中へ入つたまま凍つて出て來ることがあるよ。は、は、は――」

鮎貝は梯子段の下から酢漬の樽を器用にころがして來ながら、氷室の電燈をちらと瞻あげてにやにや笑つた。俺たちのうちで、いちばん殘忍性に富んだ奴は、やはりこの男だらう。

大貫は兩手ではげしく耳を擦りながら出て來た。

「冷たいですな。この分ぢやものの五分間も入つてゐたら死んでしまふでせう。」

「なアに、慣れつこんなりや、すこしは平氣だよ。大體この船の機關長がまぬけだから駄目さ。こんなに氷を積み込むなんて法はないよ。管があるだらう、あの管へもつて行つて機械仕掛けで自然とアイスが出來るもんだが――」

鮎貝は野菜物の籠を箱の上に積み重ねてから、室内の四隅を見廻して、すこしぐらゐの動搖に荷物が崩れぬ用心に品物を手でゆすぶつて見たあとで、頭の上のバナナを房から三つ四つ捥ぎ取つて、俺と大貫とに一つづつ渡した。

「御馳走がすきますね、船の生活は。」大貫はバナナを一口に頬張りながら悲しさうな微笑をし

た。

「君の生れはどこかね？」俺は、この瞬間、無遠慮にから云つた質問を發して見たくなつた。秋の夕暮に、どこの者ともわからぬ人間と、他國の海に漂泊してゐると、時々こんな舊めかしい情緒が心に湧いて來るものだ。

「僕？——東京ですよ。深川の木場ですよ。」

彼の答は頗る淡白だつた。

「ははア、東京かね？　君は書生つぽうだね？」

鮎貝は冷藏庫の重い扉を締めながら振り返つた。

「學生です、つい先達まで商業學校へ行つてゐたんですが、商業の方も面白くないからよしました。」

「何んでもない蟲が舞ひ込んだもんだ。」鮎貝は錠を卸ろしながら、獨り言のやうにから呟いて、二三度頭をかちやかちやゆすぶつて見た。

「——實は僕は日本へ歸る旅費を拵へに來たんですよ。——もう彼是十年あまりこつちにぶらぶらしてゐますからね、來年は來年はと思つてゐるうちに思ふやうに金が出來ずについ延び延びになるんですよ。まつたくやり切れませんよ。それに今年で徴兵檢査の年齡も過ぎてしまひますしね……」

「船は面白いかね？」大貫の言葉には耳をかさずに鮎貝は自分勝手な問を出した。

「さうですな、わかりませんよ。——君がたは海に慣れておいでのやうだから苦でもないでせうが、さつき船へあがつた時などはびつくりしましたよ。もうすこし愉快な仕事だと思つたんですが——」

「まア、だんだん地獄にも慣れて來るよ。」

三人はそろそろ梯子をのぼり始めた。船はもう長い河身の大部分を下つたらしく、をりをり横手の壁を撫でる水の音も、氣ぜはしい上げ潮の響だつた。船底の冷藏庫からあがると、下甲板はまた氣味の惡いほど蒸暑い機關室のすぐ上なので、こんな場所に慣れない大貫はせいせい鼻で呼吸をしながら、默つて俺たちのあとについて來るのであつた。

「しかし、のんきなもんだらう？」

俺はさう云つて、明けはなたれた水夫と、火夫の部屋々々の中に、骨牌に夢中になつたり、『テッポラリー』を唄ひながら便所のわきの水浴をとつてゐる者などを自分の物かなんぞのやうに指さして見せた。三人は部屋へ戻つた。

「彼等はどんな人生觀をもつてるんでせう、あれで？」

「——さア、むづかしいことになつたぞ。おい、俺たちの村ぢやそんなことを云ふ奴のとこへ嫁にきてはねいぜ。」鮎貝はさう云つてけらけら笑つた。

俺は無言で、この道化役者のやうな樣子をした男に多少なりと攪拌された自分の思索力をちつと瞶めてベッドに掛けた。人生觀——さう云へば、俺は自分で自分の一生に對してどんな考へを持つてるだらう？　同船者の大多數と同じやうに、俺だつてやはり毎日食ふことと寢ること以外には何も考へてゐはしないのぢやないか？　それ以外に、あるひはそれ以上に、俺たちは何か考へてゐなけりや生きた甲斐がないのかしら？　俺は一體何のために生きて、こんな苦勞をしつづけてゐるのか？……から思ふと、俺の頭の中には、ぼんやりと村島の死骸の幻像が浮んで來た。

「君は、どんな人生觀を持つてるかね？」俺は聞きなほつて、から大貫に訊ねた。彼はこの意外な反問にちよつと度膽を拔かれたらしかつた。

「——さア、實は、さう云はれると困るんですが、僕の考へぢや強くならないといかんと思ひますよ、御互に。ニイチェではないが、何んで

も強い人間は、偉いですよ、と云ふのは僕が弱い人間だからさう思ふのかも知れませんがね、自然界でも人類の歴史でも、皆さうでしたからね、強い奴はどしどし自分の正義や道徳を他人に押しつけますよ。」

「頭で拵へた理窟だな、そりや。」俺はからきつぱり云つて、銜へてゐたパイプの灰を床板の上へあけた。

「どうしてです？」大貫はやつきとなつて訊き返した。

「強いの弱いのつて、いつたい誰がきめたんだね？ 俺たちはいくら威張つたつて、死ぬことに變りのない生身ぢやないか？ 君は「死」と云ふことを考へたことがあるかい？」

「死を想像したことはあるが、まア、實際面と對つてはないですな。」

俺はいつの間にか掛けてゐた自分のベッドの枕元から、煙草入れを探してゐた。

「人生觀と云ふか、俺には死ぬことを考へないで生きることを考へるのは無駄だと思ふな。どうせ俺たちは死ぬんだらう、生きてゐたと思ふとすぐ死ぬこともあるしな、生と死の境はほんのヨッテ一條の間もないことがあるよ。ま、待つてくれ、俺たちのうちでこの頃メキシコで死んだ奴がある、村島と云つてな、――こいつなどは、死ぬ二三日前までは、ぴんぴん跳ね廻つて、サノサ節をやつてゐた奴なんだ。熱病に罹つた、唄つてゐた、と思ふともう死んでしまつたんだ。この男が生きてゐて何をしたかと云ふに、ろくなことはないんだぜ、喧嘩をして、大飯を食つては、博奕を打つばかりが能だつたのだ。それから、おまけに兇状持ちと來てやがるんだ。何でも日本で女を強姦したとか云つて、とても再び歸れる體ぢやなかつたのだ。こんなことを考へると村島の野郎にとつては死んだ方が生きてごろごろしてゐるより樂だつたのかも知れないよ。――それでも俺たちはきまり切つた人生觀を持つてゐなけりやならないのかな？ 俺にはそこまで行くとわからないや。」

骰子に熱中してゐた谷と中塚と皆川は、佐藤の奇妙な問答を始めたぞと云ふやうな怪訝な顔をして、大貫と俺とを見くらべた。鮎貝は四角な鏡に向つて剃刀を動かしてゐた。

「どうもあんたのは哲學的ですね。」大貫は媚びるやうに、俺の顔を横から覗いて、勝つた風な物の云ひやうをした。

「何だか知らないが、俺には生きることも死ぬことも大したちがひがないやうに見えるが、どうだらう？」

「おい、耶蘇の坊主みたいなことアよせ、よせ。――とかく浮世は色と酒だい、――」鮎貝は、尻上りの奈良丸節になりながら、タオルでごしごし顔を擦り始めた。鏡の中の彼の顔は相變らず皮肉に笑つてゐた。

「村島、村島つて、いけねえよ、せつかく出た芽がすッ込んでしまひやがつた。おい「訓導」、お前はいつもろくなことを云ひ出したためしはねいぞ。」

中塚の窪んだ眼は、俺の方よりも大貫の顔の上へまともにむかつた。俺はずつと昔、日本にゐた時分、小學校に教鞭をとつたことがあるので、いまでも「訓導」だなんて綽名で呼ばれてゐるのだ。

「やかましい、手前らの知つたこつちやないんだ。見ろ、そこのベッドで村島が死んだんぢやないか？」

俺の指さしたベッドには、半日の勞働で疲れ切つたらしい雨靴を、いらない物のやうに動かしながら眼を細くした大貫が、安さうな煙草を喫つてゐた。

「また、村島か、――あアあ、俺らもう寢るぞ。」中塚はあきれ返つたやうに眼を瞠りながら、眉

くなつた赤裸の背の上を一跨ぎに跨いで、煙草の吸差しをスリッパーで踏み消すと、身輕に窓際の上のベッドへ飛び乘つて、褥の窪みにしまつてある煙草を一本抜き取つた。彼のゐなくなつた場所は、綺麗に髭を剃つた鮎貝の骨つぽい體で埋められた。

「貴樣か?」

「俺だがどうした?」

「手前、俺の番にやちつとも張りやがらねえ。」

「何を、から見えてもまだ梅原から借金はしてゐねえんだい。」

「さア、早く振つた、振つた、まごまごしてると骰子を取りあげるぜ。」

「よし來た。でつかいところを、一つ。そら出た。もつと張れ。けちけちしてやがるな。谷の野郎、もつと張れ、なーんと、どんなもんだい?」

「馬鹿野郎、そら、一六だい。」

「何を、そら五一、そら五一ツ。――これでもか!」

「太い野郎だ、仲仕錢代を稼がうつたつてさうはさせるもんか。」

しばらくの間、谷のむつしりした聲と、まだ[illegible]の拔けきれないやうな、ぶよぶよした皆川の體と、硬ばつた鮎貝の體との陰影が、白つぽい電燈の下で、三つ巴になつて、赤い骰子の轉げて行くごとに、苛性ソーダで磨き立てた床の上を、大童になつて組み合つたり、醉漢のやうにふらふらと一方へ崩れて行つたり、淋しくこちんと御互の場所に固まつたりしてるのが會話のとぎれた室内に目立つて見えたのであつた。

「賭博と云ふものは、そんなに面白いもんですかね?」

突然、大貫はから誰へともなく高飛車な質問をした。上のベッドに禿鷹のやうにうづくまつてゐた中塚の聲が、すかさず、そのあとを鋭い刃物かなんぞのやうに追ひかけた。

「まア君なんざアよした方がいいよ。」

俺は、ははア奴釣つてゐるなと思つた。それと前後して、俺の心の中には、大貫の執つたいまの態度がぐつと癪に觸つたのを覺えた。

「人生の一切が博奕ぢやないか?」

「――しかし、カイゼルの賭博の方が大きいですからね。」

彼の「賭博」と云ふ、いかにも三文記者の常套語みやうな、知識階級ぶつた聲からが、御前たちと僕は別な人間だよと云つてるかのやうに俺たちの耳を撲つて響いた。

「領事館」、馬鹿に大きく出やがつたな。手前一つ振つて見るか?」鮎貝は蛇のやうに首を擡げた。谷と皆川も屹とこちらをふり向いた。

「さア、第一、僕にはわからんからね。」大貫はふうはりと逃げようとした。

「まア、よした方がいいね。あんた方の手を出すもんぢやありませんよ。」中塚は馬鹿丁寧な語調で、谷へ胸しながら使嗾けた。

「一體どうするんです?」大貫はベッドから離れて一番口數の尠い皆川の側へぺつたりと坐つた。

「よした方がいいよ。敗けても勝つても、こればつかりは一生癖になるからな。」中塚は急いで上のベッドから飛び降りた。

「なあに、大したことはないよ、から骰子を振つて出た數を讀めばいいのさ。現金をから張つて……」

谷はむづ痒いやうな口吻で一々自分で振つて見せては、骰子の目を讀んで親と場の賭金の掛引を教へるのだつた。大貫は一種の優越感をでも持つてゐるかのやうな顔をして、相槌を打つてゐた。彼は最後に谷が、

「一番もやつて見るか?」と、むき出しに訊ねた

時、何食はぬ顔で、
「いくら賭けるんです？」と尋ねて、ズボンのポケットから、青札を一束引抜いた。彼の行動は俺たち一同への示威運動でもあつた。それでなくてさへまだ月給の使ひ殘りのある航海第一夜のことなので、油の乘りかかつてゐた鮎貝や中塚は、可笑しくもないのに、しきりとえへら笑ひをしながら、大貫の味方をし始めた。
「ははア、こりやいい運動ですな。」から云つて、大貫は居合拔きの氣合のやうな掛聲をしながら、慣れぬ手付で床板へ骰子を敲きつけた。四五回親が廻つた。煙草の煙、猿股の間、筋の張つた腕の蔭などから、兎の眼のやうな骰子がをりをり小さな陰影を伴つては轉がつて行つて、ほとんど肉と云ふ感じのしないほど黒い腿や、油じみたスリッパーなどの下に姿を消した。
「ははア、こりやいい運動だ。」
大貫のとぼけたやうな聲が、時折、他の四人の漁師聲にまじつて聞えて、その都度彼のもろ肌脱ぎになつた青白い骨の細りのない女のやうな肉が、異様に常盤の眼に反射するのであつた。
一伸をやるね。

「どうも運がいいや。」
「これで二十弗の損だ。」
「あれ、またやられた。これで鬮はねえや。」
四人の間には、半分嫉てるともつかず、ほんたうに囁き合つてるともつかぬ、そんな言葉がひそひそと交された。大貫は勝つ一方だつた。
一盲者蛇におおずとはこんなこつてせうよ。
——さア、僕のは張つたきり動かさないで置きますよ、倍になつたらまたその倍と。」大貫は謙遜した口調でさう云つて、手許に集まつた小百弗からの金を足の指ですこし押し出した。
「やめた、俺らブロークだ。」
「おい、「訓導」、すこし貸してくれ。」
俺は中塚の方へ向つて、頭を振つた。
「村島がたたつたな？——」
四人の顔には、この不屈な新参者に對する口惜しさと、憤怒と、博奕打だけの感ずる信仰にも近い恐怖心とが、次第々々に昂つて來たのであつた。

三

村田が他の子よりも大切にして居つたのは、前の航海でもさうであつたが、やはり砂糖だつた。

アメリカと云ふ邦が、好勝手な理窟からヨーロッパの戰爭に加擔してからと云ふもの、アメリカ近海に航行する船と云ふ船は、それからグリスリンを採つて彈藥の混和物にするとか云ふ理由のもとに、砂糖と糖分を加味した食物の大制限を蒙つた。俺たちの船は、謂はば社外船で、ヘンシイルヴァニア州のある私營石油會社のために、世界大のスタンダード・オイルの定期運送船と競爭で、メキシコに重油を買ひに行くのではあつたが、戰時禁止令の發布以來、どんな間接な手段を講じても、制限された以外には砂糖を船へ積むことが出來なかつた。つまらない、婦小兒の舐める物、と砂糖を輕蔑することは陸の上では許されないことだ。何となれば、船長の「鰊」はたとひどんな口實のもとにも、船員に一滴たりとも酒類を船へ携へて來ることを禁じてゐたから、過激な勞働に終日甲板の上で日に曝されてゐる水夫や皮膚一面に石炭屑を浴びて機關室に働いてゐる火夫にとつて、もつとも早くカロリーを攝取し得たのは砂糖であつた。そこで一人分日に幾グラムと定められた砂糖の量を補ふために、事務長は料理用としてメープル・シラツプや、赤砂糖や、モラシスなどを多量に仕入れて置かねばならなかつ

た。往復一ケ月の航海日數を、たつぷり四十五日に見積つて、梅原は自分の室の寝臺下になつてゐるソォア・キャッスルの鋼庫に、六袋の白砂糖と、二箱のモラシスと、大小取りまぜた砂糖類の罐を十五六本藏つて置いた。罐の方の容器庫で、食料品室の鑰は、谷の手から副技の別なく渡されたが、そこの鑰だけはいつも梅原の革帶に、時計の鎖といつしよに堅く結びつけられてあつた。

俺たちのうちで、誰しも厨長の機嫌を取らうとすれば、

「ミスチョージ、こんどは砂糖は澤山あるかね？」

と訊きさへすればよかつたのだ。

「こんどこそは君、あんなどぢは踏まないよ。」

と答へて、彼は第一航海にはからの、第二回目の港外碇泊には錨つたのと、さも得意げに話すに定まつてゐた。

それでも神經質に、幾度も幾度も前途を疑つておさへなほして見ねば氣の許せなかつた彼は、前の航海に驚かされて、日に二度の珈琲に砂糖は食卓のまん中へ、陶器の砂糖壺へふんだんに出して置くべきものを、角砂糖一人宛二つ三つならまだしものこと、珈琲釜へいかに牛乳と砂糖とを調へて、砂糖入珈琲の既成品を飲ませたのであつた。これには航海當日は無論のこと、船がノルフォーク沖へさしかかつて、さらぬだにしけ寒い暗流の流れてゐる邊に漕ぎつけた三日目の午後までつづいた。同じ珈琲を飲むにも、自分で欲しい分量だけの牛乳やクリームを注いで、生れるとから匙で掬ひ慣れたとほりの分量の砂糖を芳香の強いコップの中へ沈めるやうに突入れて、何か他のことをでも夢みながら匙を二三度無意識に攪廻して自分で溶消した味を樂しむ、と云つた風なのは毛唐一般のデリケートな風習らしい。それを、いくら化學的に定量を攝取すれば足りると云つたところが、ざんぶざんぶと大まかに廚房で調合して、さあ牛乳も砂糖も入つてゐる、これが珈琲だ、飲みなさい、おや、まるで暗の中で煙草を喫ふやうなものだ。こんな纖細な味覺の上の、多少なりと許された享樂を、こんで日本人流に無頓着に顧みなかつたことから、三日目の晩餐には、俺が船乗になつてから未だ曾て經驗したことのない馬鹿々々しい、小兒じみた騷動がもちあがつたのであつた。——

それはうすら寒い黄昏の日だつた。船のまはりにはどこを見ても鉛板のやうな淋い寒い霧、低くぶら下がつてゐて、その間からきれぎれに、見るさへひいやりとする鉛灰色の雲が、人間のもつてゐる小さな體温とか情熱とか云ふものを、どこまでも冷酷に瞰下してゐるやうな日だつた。俺たちは、用事さへなけりやストーヴの火の赫々と燃えてゐる廚房に塊り合つて、女の話や、日本の追憶などに氣をまぎらはしてゐた。たまに塵などを棄てに甲板へ出ると、皮膚一面に執拗く粘りつく冷たい飛沫を浴びて歸るのだつた。いつになく梅原も來合はしてゐて、士官どもの批評などをしてゐた。

谷と中塚と鮎貝と、大貫、梅原、俺の五人が集つてゐた。——皆川だけはいちばん人數の多い水夫部屋を受持つてゐるので、まだ仕事の手があかぬかしてあがつて來なかつた。

「どうだね、こんどの砂糖の供給法は、成功したぢやないか？」

梅原は思ひ出したやうに、室の隅にある眞鍮の珈琲釜へ眼を轉じてから得意げに云つた。しばらく誰も返事する者がなかつた。それもその筈だ、たとひ表面づらではいくらいくらと節約出來ても、實際にあたつてそれを飲ませる俺たちが、日に二度々々食堂でぶつくさ小言を云はれてゐては、何の效果もあがつてゐるわけのものぢやなかつたから。

すると、その時、誰かが表から扉の把手をぐいと捻る氣勢がしたと思ふと、意外にすさまじい勢ひで扉全體が煽りを食つて反對の方へ飛んで行つて、危いところを蝶番に支へられた。かいいつきりと電燈に浮き出た皆川の顔は、いつもの憫い無表情な落ちつきをなくしてゐて、すこし涙ぐんだ眼が殊さらひかつて見えた。

「コック、こんな珈琲、だめだ。――」

と、恨めしさうに口を尖らしたと思ふと、彼は片手にもつた大きい珈琲ポットを、入口の流し元へ投げ出して、意味ありげに谷の顔を瞶めた。彼の背後の方には、ノルフォークの燈臺が、かすかに赤くちらりとひかつて、流れるやうに消えてしまつた。

「……誰も飲みあしねえ。」から附け足して、一歩園を跨いで入ると、彼は険のある眼で梅原の横顔をじろりと睨めた。そりもそりだつたので、俺たちはひそかに心の中ではざまを見ろ、と思つて、竝んで尖つた鼻の兩脇の見る見る白くなつて行く梅原の顔を打守つたのであつた。

「――賊目かねえ。」谷は曇つた咳拂ひを一つした。

梅原が何か云はうとした時、俺たちは厨房の闇の中に、[illegible]シャツを[illegible]そりのそりと近づいて來る一群の水夫どもを發見したのであつた。日に焼けて、眼だけぎよろぎよろした、スウェーデン人、スペイン人、イタリア人、アメリカ人などの性質のよくない奴が、七八名づらりとそこへつツ立つたまま、無言で室内の様子を探るやうに窺つてゐるのだつた。彼等の一人々々はめいめいの珈琲コップを手にしてゐた。開けた口を、そのまま大きく開いた厨長は、威丈高になつて、

「何だ、何が欲しいんだ？」と、がさつな英語で呶鳴りつけた。

厨長などは士官の分に入らぬものと、頭からてんで日本人を馬鹿にし切つてゐるらしい水夫の一人が皆川の肩越しにぼそぼそした聲で云つた。

「俺たちはこの珈琲を貰ひに來たのさ。」

「非常に甘い珈琲だからもつと欲しいんだがね？」もう一人が珈琲コップを差し出しながらそれにつづいた。

「珈琲が欲しいなら、ボーイにさう云や食堂でいくらでも飲めるぢやないか？」

梅原は一段と聲を低めた。

「いや、ここで飲みたいんだから――。」若い伊太利人らしいのが鼻聲で附け足した。

「水夫長の許しを受けて來たのか？」梅原はなほも鋭く詰つた。

「水夫長の知つたことぢやないさ。」蔭に居る一人が横柄に梅原を撥ねのけた。

「ま、いいや、欲しいなら飲ましてやらうよ。」谷は下顎を動かして中塚へ云ひつけた。

「よしッ、珈琲かい、さアコップを出した。」中塚は元氣のいいブローク・エングリッシュの掛聲をして、珈琲釜の栓へ手を置いた。水夫たちはにやにや笑ひながら一人づつ把手のついたコップを差し出した。澤山になつた珈琲は、ごぼごぼと不味さうな音を立ててコップからコップへと注ぎ入れられた。一人々々姿をあらはしては、コップを持つて闇に消えて行く水夫たちは、口々に、「いゝ珈琲だ。」と合圖のやうに呟くのであつた。ものの十五六杯も注いだと思ふと、甲板の方をすかして見てゐた中塚が、仰山な聲を出した。

「ヤッ、みんな海ん中へぶちまけてるぞ。」

厨長と谷とがあたふたと階まで驅けつけた時には闇の中からわあーツと嗤ふ聲とともに、熊のやうな足拍子やコップを叩く音なども雜つて聞えた。梅原は、豪傑のやうに怒つた。

「人を馬鹿にしてる！」

俺たちも、外の喚聲に和して、大口を開いて笑つた。半分は梅原の顔の表情が可笑しかつたからでもあつた。

「船長に談じてひどい目に遇はせるぞ。砂糖の缺乏してるのは御前たちも承知してるぢやないか？」梅原は扉口の鐵柱をびしびし平手で敲きながら、甲板へ向つて喚鳴つた。彼の口先ばかりの氣焔は、甲板のどす太い水夫の聲にけもなく打消された。

「こんな溝水を誰が飲むかい？」

「砂糖、砂糖、ほんとの砂糖が欲しいんだ。」

「貴樣だつてこんな汚い物ア飲みやしない。」

「明日から珈琲は珈琲、砂糖は砂糖で出さねえと、こつちの方から船長へ云ひつけるぞ！ ゴッデム・シャップ！」

そんな最中へ、やうやく割つて入つたのが、日頃はあまり梅原と仲のよくない水夫長であつた。彼は水夫どもを一喝したあとで、いま水浴をとつたばかりらしい額を大きいタオルで拭きながら、苦勞人らしく梅原の顔を立てた上に、砂糖は砂糖、珈琲は珈琲と調合物は出さぬ約束を取つて、狹い入口を體を三つに折つて悠々と出て行つた。呆氣にとられて、口惜しさうに陰の中を見送つてゐた梅原の背後から、一部始終を默つて見てゐた大貫は、この時すこし傾いた船に片足を奪はれさうになつてついと出た。

「――甚だ失禮ですが、スチョージさん、一體砂糖はいくらあるんでせうか？」

梅原は赤らんだ眼を彼の太枠の眼鏡の上へじりじりと押しつけて、癇高に云つた。

「君なんか心配しなくともいいよ。默つて自分の仕事をしときへすりやそれでいいんぢや！」

「ですけど、僕も多少計算位は出來ますから、何なら御手傳ひしてもどうかと思ひましてね。」

大貫はけろりとしてつづけた。

「スチョージ、「領事館」はタイプライタアがやれるんだぜ。」皆川が使嗾け半分に言葉を挾んだ。俺たちは、海の者とはまた一風變つてゐる粘り強さを持つてゐる大貫のねちねちした態度に、呆れ氣味になつて、どうなることかと思つて彼等を眺めてゐた。

「砂糖はまア十分にあるつもりだが、こつちは萬一を慮つて節約してやつてるんだよ。――そりやいくらあるか見せてやつてもいいさ、どうせ僕らは保管する役目に過ぎないんだから。」

と云つた梅原の口吻は、ずうつと平常の穩健さを恢復してゐた。それから彼は、極り惡げに、ろくろく挨拶もせずに廚房の闇を越えて、二三歩行つたかと思ふと、闇の中から、「君――い、あとでやつて來給へ。」と大貫へ云つて、すたすた舳の方へ消えてしまつた。

この事件があつてから、梅原の部屋に大貫のロイド眼鏡を見受けることが當り前のやうになつた。中塚や皆川が、用事で廚長の部屋へ入ると、彼等は必らず祕書官然とタイプライタアの前に掛けて、船長の手紙の書き直しや、食料品の註文書などをかつかつ打つてゐる大貫をそこに發見したのであつた。

「あの野郎、スチョージを舐めてかかつてゐるぞ。」

「いけづうづうしい奴だよ。」

「博奕であんなに横取りしやがつて、――どうだい、みんなで一つ借りてやらうぢやねえか、糞ッ、業腹だ。」

俺たちの二三人は、急に高慢ちきに見え出した大貫の幻像を、目の前で叩き壞さうとするかのやうに、こんな蔭口をきいて、ますます自分たちを腹立たしい氣持に導いた。何となく五人の間には、やはり、もとからの五人はもとからの兄弟だつたな、と云ふ感じが再び根を卸すやうになつた。わけても有賀などは、いままで廚長に對して持つてゐた反感と好奇心の大部分を、

露骨に大貫に移して、機會があるごとにつらくあたる樣になつた。休息の時間や、就眠の時刻に部屋でいつしよになつた際でも、五人は五人だけで塊り合つて、滅多に彼に口をきく者とてはなかつた。大貫は大概、俺たちの本能的な憎みを避けるためのやうに梅原の部屋にゐるか、さもなくばベッドへ腰を掛けて『エヴレーマンス叢書』の赤表紙の古典物を、字引も使はずに讀み耽つてゐたりするのだつた。天候のゆるす時には、滑稽じみた額に、十分の自意識と警戒を見せながら、ひとりで海豚の群を眺めたり、都會で流行するらしい小唄を口笛に吹いたりしてゐる彼を見受けた。陸から來た新參者の癖に、別に挨拶一つするでもなく、小器用な都會の知識で當然仲間の[illegible]をつくすべき俺たちを差し措いて、士官室の方へばかり入り浸つてゐる、おまけに博奕は勝逃げをする、と云ふ、甚だ幼稚な低劣な猜疑心が、ひがみにひがんだ俺たちの心の隅に深い溝をかまへたのであつた。もう一人の[illegible]、めいめいの前に現はれたやうな氣持も迫つて來た。

船はフロリダ岬から、暗い西北に挾まれたメキシコ灣のひろい[illegible]のまん中へ向つて、一時間七浬かそこその自動力を持つたマッチ箱かなんぞのやうに小さく弄ばれながら日毎に進んで行つた。

事實、俺は嵐にひしがれたやうになつて、橋も煙突もブリッヂも肩を畏縮しながら、狂亂した怒濤の間を辛うじて船がくぐり拔けてゐる時も、日一日と士官や機關部の火夫の「ウォッチ」の交代勤務から、ひた趁りに南へ南へと進路を取つて行くその氣力を、さながら船そのものが村島の墓場へある微細な牽引力で魅引されてゐるのであるやうにさへ感じたのであつた。

鉛色の暑さにふやけて見えるパウロ・ブランカ沖の海の沈默が背後に敵を意識した場合と同じく、俺の氣持をそはそはさせた。俺はいく度か村島の死んだ時の光景を心に描いて戰慄した。

……すべてを覆ひつくす無氣味な、魂の底から底からと湧いて來る死の沈默の恐ろしさを、生きた人間の言葉で何と云ひ現はし得ようか？ そこからは[illegible]のやうな違つた幻覺がいくつもいくつも泛び出るのだ。[illegible]の實在——俺もいくどか考へかけて、わづかに人間の皮一重ぐらゐの厚みで俺の心を包んでゐる理性のために踏みとどまつた。さうだ、蒸氣[illegible]のやうに[illegible]一面に熱りを送る海だつた。白い衣類かなんぞのやうに、腹に泳ぎ出る鱶が、いく尾も船のまはりを取り卷いて、俺たちの捨てる食物の滓を意地汚く漁り廻つてゐた。小さな錐のやうな眼と獰猛な豹のやうな口と、水面へ近づくまではわからないほどの動作と——俺はよく陸に棲んでゐる人間が、眞夜中にガラス窓の外に、自分の動作を窺つてゐる者に對する同じ恐怖心で、あの惡食をする魚群を見たものであつた。鱶に對する恐怖は、どうしても、村島の死に就いての恐怖と混同して仕方がない。その時分に村島が死んだ、と云ふことよりもよく考へなほすと、村島の死骸が、ずぼりと海へ墮ちた途端に、はつとなつて鱶を思ひ出した、葬式當時の強迫觀念がどこまでもつきまとつてゐるのだつた。

氷の缺乏を苦にして、いちいち冷藏庫から自分で入つて氷を渡した梅原を、心から憎み出したのもその頃からだつた。鮎貝と梅原が眼から火の出るやうな口論をしたのも同じ氷に就いてであつた。二百ポンドからの氷を湯にしたあとで、村島は何も云はずに石のやうに冷たく堅くなつて、二十日目の朝、ブリッヂの水先案内者と事務長、珈琲を運んで行く役目の[illegible]によつて發見されたのであつた。[illegible]情な谷[illegible]、二十日前

に村島の働かないのをひどく叱りつけたといつて、男泣きに泣いたことが、どんなに俺たち一同の眼頭に熱い涙を湧かせたらう。惡疫の傳播せぬうちにといふので、手慣れた水夫長は船長の命令を聞くと、村島をすぐさま船底の石炭庫へ運んで行つて、誰も見ぬうちに五六人の水夫へ袋を縫はしてしばらくそこへ死體を安置したのであつた。葬式――眼と眼を見合はしてはすぐ横を向いてしまふ挨拶の仕方も忘れたやうに無言で居ならんで脱帽した遠慮深い一團の男たちの、黙りこくつた葬式がどうして記憶の底から抑ぎ去られようか。船は徐行した。死體の運搬を指圖してゐた水夫長の禿げた額には、赤道の眼のくらむやうな日光が、油の滴りのやうな汗を流さしてゐた。甲板の日光に俺たちは一種の刺戟を感じた。氣のせゐか、すべての人が村島一人の無くなつたために急に元氣が衰へたやうに見えた。船長の『禮』だけは、さすがに締まつた足取りでブリッヂから姿を現はした。彼の手にした聖書の天金がぴかりとすると、一同は自然に頭を胸へ惹きつけた。黒い物がやたらに列んでゐた。みんなの足だつた。その間に、白つ茶けた帆布の包が横はつてゐるのだ。包の持ち運ばれるのが、機械的に動く黒い物の間に、際立つて、幾十倍かの容積を増したやうに見えたのだ。動作も從つて幾十倍か遅く、重さうに見えた。海――敵のやうな、それでゐて、母親であるやうにも思はれる海が、唇をひろげて呼び取るやうに「甲板の外から、すこしづつ滑つて行く村島を……たうとう呑んでしまつた。ゆるい底濁りのした海のかすかな波動が、見る見る淺黄色な蜿りに掩はれたまま、船尾になつた。俺はその瞬間、村島の鳥打をかぶつた、團子鼻の、藪睨みの顔を、燐のやうな波の底に、帆布に包まれたままの姿で想像した。重い心で厨房へ引返す時、何氣なく覗いた海面には、鱶の群が夥しく跳り狂つてゐるのを、俺ははつと思つて眺めたのだつた。

それから俺たちは妙に淋しく涙ぐましくなつた。事につけて村島の話が出て、俺たちの氣をくさくさせた。牛の尻尾は、その後俺たちの間には誰にも手をつけられなかつた。博奕のやりとりにも、誰も引込めない端た金が殘ると、村島のポケットへ入れようと云つて、誰からともなく、いつも村島の胡坐をかいてゐた場所へ置くのだつた。……

俺はこんな記憶へ手をつツこんで掻き廻し始めると、それからそれへと切りのない探索にたつて行くのであつた。實際、船の中でいつたん一つ事を考へ始めると、煙草をむやみに喫つて、足を床板へぴつたり吸ひつけ、頭を拳で支へて、船の動搖に身を任せたまま、その事の解決がつくまで考へなければならない必然性があるやうだ。しかも、人間が「死」と云ふ問題を解決するには、いくどメキシコへ渡つたところがさう容易には出來さうにもないことだ。

俺の勞働がなかつたら、また、餓鬼のやうな船員一同の間にいろいろ下らない事件が起らなかつたら、俺は恐らくさうした苦惱を鬚が三尺も伸びるまでやつてゐたかも知れない。

四

船の事件と云ふのは大概の場合食慾から起つた。大の男が、三十や四十面を下げて、砂糖が欲しいのパンが不味いのと云つて、毆つたり殺したりすると云ふことは、陸では物笑ひになるほど想像されないことだ。しかし、生物が初まつてからこの方、食料問題を解決せぬところに平和のあつた例があらうか。

船の胃腑は巨きい。朝晝晩のウォッチの食物が、俺たち日本人を加へて四十五人の口へ入ることを考へると、その巨きさがほぼ想像される。

それは逞しい海の勞働者の、他のすべての慾望の否定されたあとに勃發する、しかも潮風と激勞とに磨ぎすまされた驚くべき嗜慾なのだ。水夫の働いてゐる側を通ると、

「おいメス、今夜は何を食はせるかね？」

と臆面もなく大聲で尋ねるほど、彼等の頭は食ふことをばかり考へてゐるのだ。そこで話がすこし理に落ちるかも知れないが、アメリカ政府の許してる一日の食糧は、一人につき二ポンドの肉類と三ポンド以上の野菜物や、その他の副食物であつた。かなり大まかな、ゆとりのある計算らしいが、さて實際に割り宛てたら、天候の肌寒い時などは、どうしてもそんな制限の度を遙かに越すのが例であつた。すくなくとも、四十五人の頭へ、日に六十ポンドの肉は必要であり、それでも不足たらたらな水夫や火夫は、夜中にこつそり廚房の窓からしのび込んで來てはハイを偸んだり、砂糖を珈琲で溶くやうにして匙で舐めたりするのだ。これは、何も俺が知つたかぶりをするのでなくて、

「油を積むのか糞を流すのが本職だかわかりませんよ。」

とこぼしながら廚長の梅原がをりをり廚房へ來てしやべるのを、それとなく聞き憶えたことに過ぎない。

ある朝のことだつた。みしみしと壓しつける暑さが、朝のうちから赤みを帶びた日光を煽動してゐて、海の上には低い靄が滑らかな波の肌にしつこくからみついていつまでもその暑苦しい抱擁から御互を離すまいとあせつてゐるやうに見えるのであつた。

朝食前に一通り甲板をホースで洗ひ流す習慣になつてゐた水夫の群も、氣だるい熱帶氣分にけおされて、何となく陰險な猛獸のやうに眼をひからして懶げに働いてゐた。

廚房のすぐ傍にある士官食堂には、特別御料理を持ち運んで出たり入つたりしてゐる鮎貝の姿が見えた。俺は受持の火夫の食物を運んでしまつてから、手があくと廚房へ來て、眠さうな顏をしてストーヴの前に汗を拭ひながらコルン・ミールを大匙で搔廻してゐる中塚と、取り留めもない雜談に耽つてゐた。谷は大概朝餐の準備を彼に任して朝寢をしてゐる習慣になつてゐる。すると、何やら騷々しい聲が士官食堂に聞えて、あわただしく鮎貝が驅けて來るけはひがした。

「おい、コツク！　谷はゐないのか？」

かう云つて飛び込んだ鮎貝は、呆けたほど鈍い動作で動いてゐる中塚の横顏をじろりと一目見ると、さもいまいましさうにぷいと飛び出して、スターボードの方へ全速力で驅けて行つた。

「どうしたんだ？」俺は、彼の前垂の紐のからみつく脚を、無理にひろげて驅けてゐる彼の姿を見送りながら云うた。

「鮎貝の氣狂奴、なんかまた一悶着起し居るんだろ。」

中塚は大匙を捨てたまま、案外平氣な顏で燃える海へ膨の粘つた眼を眩さうに向けた。

すこし經つと、士官食堂には、梅原の恐縮したやうな聲と、騷々しい士官たちの英語とが何かを掛け合つてゐるのが聞えた。

「卵を出せ、卵を出せ、卵を我々は要求するのだ……こんな腐つた肉なんか、我々の朝餐にならないんだ……君は卵で金でも儲けるのか？」

聲の主は、つねづね廚長と仲の良くない二等士官であつた。副船長の重苦しい聲もそれにつづいた。

「卵の方が輕くていいんだよ、廚長。」

梅原もいつにない尖つた聲で云ひ放つた。

「料理人の方でステーキと定めてるんだから、いまさら變更するわけには行かんぢやないです

か？……料理人任せなのだからどうも仕方がない。……」

毎日部屋に内から鑰をかけて、悪いことをする獨身者だと云ふボーイ仲間の噂にのぼつてゐる二等士官は、なほもアイルランド訛の英語を張りあげて叫んだ。

「……ジャップの貧弱な食物と、我々の食物とをいつしよにされて堪るもんかい……。」

どしんと卓を蹴る音と、フォークでも肉皿へ投りつけたらしい響とが、尖つた俺の神經に不安な幻覺を起させた。俺は甲板へ出て、圓窓から食堂を覗き見した。いつもの通り、日覆のついた海員帽をきちんとかぶつた梅原の鋭い顏と、すこし赧みを帶びた二等士官の赭ら顏とが卓を挾んで對峙してゐた。二人とも立つたままで、白い卓布の距離をもどかしさうに眼で計つてゐた。梅原の顏は多少の恐怖で白かつたが、二等士官の方はあくまで横柄づくで、歪んだ顏に醜い力を籠めてゐるのが、さもしく見えた。二等士官とならんで掛けてゐた副船長は、牛のやうに巨きい體を、廻轉椅子へ投げかけたまま、卓の上へ組んで兩手の拇指だけを鬼ごつこさせてゐた。給仕はサイドボードに、知らぬ顏で皿を拭いてゐた。

――よろしい、船長の意見を一應聞いて見ますから、待つてゐて下さい！――

梅原は卓から離れると、素早く身を扉の外へ跳らして、甲板の上をいつさんにブリッヂの方へ消えて行つた。

「あの廚長は、一にも二にも船長々々だ。おべつか野郎！」

二等士官は不興げに呟いた。

「たまには輕い朝餐の方がいいよ、この頃は毎朝肉ばつかりぢやないか？」

副船長も、組んだ手をほどいて、眼の前のビーフを載せた肉皿を押しやつて、相槌を打つた。

それでも、二人は船長のことが氣にかかるかして、しばらくの間、何かの命令を待つてゐる使者ででもあるかのやうに、無言で扉の方を瞶めてゐた。

梅原は大阪の紙に刷つた物をがさがさ翻しながら得意氣に驅け戻つた。食堂へ入ると、彼は何も言はずに、留鋲でその紙の四隅を、士官たちの眞向うの壁へぴつたりと貼りつけた。

――そりや何か？――

鋭く詰問する二等士官の言葉に對して、梅原の向けた顏は、いろいろな感情がごつちやになつてかち合つた顏だつた。

――……御覽なさい！……米國政府の食料制限表です！……船長の嚴命です！――

彼はいく度も唾を呑みながら、彼の知つてゐる最も正確な英語でさう云つて、細い體を弓のやうに外らした。

衝動的な動作で、二等士官は壁の方へ體を運んで行つて、表をじろりと一眼に取り入れるとともに手に持つたナフキンをいきなり食卓の上へ投りつけて、何も云はずに食堂から出て行つた。副船長も、吸ひ殘した珈琲だけを飲んでしまふと、

――御老爺の命令と云つたね？――」と胴から下の方に小さく緊まつて直立不動の姿勢を保つてゐる梅原へ蔑んだやうに訊ねながら、のつしのつしと歩いて行つた。

――馬鹿野郎！――

梅原は二人の姿がブリッヂの上に消えた頃、さう吐き出すやうに云つて、俺の顏を見ると鼻水を啜りあげた。

この事件は一先づ梅原自身に一時の愉快さを味はせただけでこんな風に解決されたのであつたが、船中の彼の評判は決してそれによつて惡化するとも善くはならなかつた。それにはまた理由があつた。梅原は賢い方か下手なのかそれ

とも安値で氷藏した品を買ふのか知れぬが、船へ積んだ鷄卵の三箱だけはすつかり腐りかけた品であつた。一箱二百四十個からの卵が三箱も腐つてゐると云ふことは限られた食料品の全般にかなりな打撃を蒙らしたことであつた。彼はそれを絶對に秘密にしてゐて、それと觀るや良い方の卵の箱を上積みにして、惡いのはある晩こつそり大貫に命じて、海へ投りこませたのであつた。

　それでも、一時に三箱ともなくなつた時には、物見高い俺たちの前にどうしてその事實を掩ふことが出來たらう！　ことに、鷄卵の一部が腐つてゐると知つてゐた鮎貝には、はつきりその秘密が讀めたのであつた。彼は士官たちのサラダを拵へるために、誰よりも良く冷藏庫の中へ出入りする、閑だつたから。

「野郎、奴さんずゐぶん儲つたらしいぞ。一つ脅かしてやらうか？」

　ある晩彼は俺にそつと耳打して、何かの用向きで俺たちが涼んでゐるのも知らずに、とつとと甲板の上を通り過ぎた大貫の姿をじろりと睨んだ。「俺は一應彼の言明を聽いてから、あまり確證もないことなのだから、もつとしつかりした證據と證人とをあげなければ、かへつて逆捩を食ふであらう、と忠告した。

　ところが、偶然にも事件は、誰の小細工も待たないで、ひとりでに解決した。それは、ちやうど十三日の航海も終つて、いよいよ明日はいつもの重油場へ着くと云ふ日から始まつたことであつた。

　いつたい俺たちの船には、政府の用船ではなかつたが、同じくアメリカ人の事業であると云ふ國際的な理由から、一門の小さな大砲と海軍から乘組ませられた十人の水兵とが三十五人の定員以外に寄食してゐたのだ。その一人は砲手の軍曹で、二十五六の顏の威かつい、手も肩もすべてが四角な感じのする男だつた。その外の者は、いづれも血氣盛りの、尻の大きい、だらしない、二十を越えたばかりの青年だつた。彼等の食慾と、砂糖の濫費とはいつも梅原の眉に皺を寄せさせてゐた。しかし、大貫が來てからは、彼の流暢な英語の力でどうやら不日氣と喧嘩たつぷりの水兵どもの亂暴も、目立たぬやうに思はれた。梅原はすつかり水兵の存在を忘れてしまつたやうに、水兵の惡口をつかなくなつた。殆ど忘れかけた水兵どもの存在を、どうしても梅原が思ひ出さねばならぬやうになつたことは、もつとこんぐらかつた事件の仕組にもなつたのであつた。

「船長、いま私の方の若い者の云ふことに、今朝ちつとも食べる物をあてがはれなかつたさうです。」

　毎朝、朝飯が終ると、役目のやうに船の甲板を一周して行く「鰯」の横合から、不意に白黒に塗つた水兵の食堂から飛び出て、さう報告したのは軍曹であつた。水兵の食堂は廚房のすぐ横手にあつて、いつも吃水が下つて暴風雨に遇ふごとに食器や椅子などの流されるやうだつた。二言三言の押問答があつて、船長と砲手長の聲が高まるにつれて、いままで谷とその日の獻立について話してゐた梅原が聞耳を立てた。

「スチョージ、なんか云つてるよ、あの軍曹の野郎が。」

　狭くもそれを耳にした晋川が、先つてさう云ひつけた。つかつかと進んで行つた梅原は、わいわい皿をナイフやフォークで敲きながら何かわめき立ててゐる水兵どもを尻目にかけながら、船長に一禮して、

「何か料理に就いてですか？」と訊ねた。

　砲手長は嶮しい表情で、はつきりと云つた。

「さやう。食ふ物がないと云つて若い者が喧い

でゐるんです。」

「食べる物がない？――」鸚鵡返しに云つた梅原は、汗のにじみ出た眼頭をしかめて、もう一度水兵の食堂を覗いて見たのち、

「さうですか？ 今朝はたしかビーフ・ステーキの御馳走だつた筈ですが。」とまで英語で云つて、あとは日本語で、「あれが、君、殘つてるなら持つて來てくれ給へ。」と食堂の中にうろうろしてゐる大貫に命じた。

大貫はちよつとどぎまぎして、

「彼等は皆な肉を塵埃捨用のバケツへ投り込んだのです。」と、『彼等』に力を籠めて、三人へ對つて云つた。

「あの肉がくはれないと云ふのぢや、朝飯を食ふ必要はないと思ひます。そんな口の奢つた人はこの船で食事を取るのは廢して貰ひませう。」

梅原は下腹部へ力を入れてずばずばと砲手長へ云つてのけた。砲手長の綺麗に剃つた顔の下半分が、血の氣を滲めて見えた。船長は、海へ一寸眼を投げて『又か？』と云ふやうな色を見せながら、

「ぢや、ともかくもその肉を見ようぢやないか？」と暗示した。

大貫の運んで來たバケツから、一片の牛肉が摑み出された。オート・ミールやパン屑に塗れた肉片が間も無く洗はれて廚長の手にぶら下つた。

「これが食へぬと云ふのですか？」

彼は矢のやうな質問を、船長とも砲手長ともつかずに放つて、振り返りざまに、廚房の圓窓からわざと英語で谷を呼びかけた。

「君、この肉だらう、今朝船員一同の朝飯に出したのは？」

「いいや、そりやすこしへんな臭がするから士官の方へは出さなかつたんだ。」

谷は日本語で答へた。梅原の眉がぴりりと蠢いた。

「クックは何と云つてるね？」砲手長は臭い物を嗅ぎつけたやうに梅原へ訊ねた。

「He says that was the very same meat that went on every table of this ship!」

大貫はけろりとした顔で、見んごと谷の言葉を裏返しにした譃を云つた。梅原は、無表情な顔で、「イエス、イエス」と叩頭いた。

一部始終を目擊してゐた俺たちのうちから、虚僞を憎む者の勇敢な聲があがつた。聲の主は思ひもよらぬ中塚だつた。

「そりや水兵の肉、士官の肉これだ。」さう支那人のやうな英語で云つて、厚切りの汁のじくじく滴るテンダーロインを肉叉に貫いて突き出した彼の顔は、異樣な顫へにをののいてゐた。

「君、默つてゐたまい！」梅原は白い眼でじろりと彼を睨めながら食ひ切つたやうな日本語で叱りつけた。

「譃ない、水兵の肉は別だ。」中塚はきつぱりと云つて、青白い顔で俺たち一同を顧みた。

「さうだ、さうだ。」鮎貝が彼に附和した。

「この船のある人間は近頃急に生意氣になりましたね。共同の食料品を保管しながら、それに自分勝手な細工をするんぢや、困るですよ。」

砲手長はまともに船長の顔を見てさう云つた。『鰯』は彼の言葉に耳を藉しながら、これほどこの男の眼が大きかつたかと疑はれるほど灰色な瞳を瞠いて、梅原の眼をぢいつと瞶めたのであつた。

「水兵は仕事もなくて遊んでるんですからな。」

梅原は横を向いて口の中でかう呟いた。彼の言葉が終るか終らぬうちに、船長の側にゐた砲手長の腰が三寸ほど前へ動いたかと思ふと、ど

しんと云ふ堅い板を打つた頭蓋骨の痛々しさうな響がして、廚長梅原が大貫のすぐ足元に身悶えしながら打仆れてゐたのであつた。砲手長の拳は鍛つた惰性に運ばれずに、隨意筋の働きですぐ彼の手元へ第二の身構をして待つてゐるのだつた。

「何をするかッ？」

「諸はわりに大きい聲を張りあげて、砲手長を叱りつけた。

「――貴方は、船中では何人と雖も他人を直接に制裁することが嚴禁してあるのを知つてるだらう？　私、私だけが、制裁の絶對權を持つてることも熟知してるだらう？　たとひ、廚長がどんな惡辣な奴でも、それを罰する權利は貴方にはない筈だ。よせ、拳を納めい！」

さう云つた彼の聲は、さすがは船長だと思はせるほど、凜として冴えた聲だつた。

「閣下、惡う御座いました、しかしあの侮辱は實にアメリカ海軍にとつて軍旗を汚されたも同然です。」砲手長は聲を曇らせて詫びるのだつた。

仆れた梅原は、大貫に助け起されて、下顎を押へながら、口惜し涙をいつぱい溜めて、しきりに英語とも日本語ともつかぬことを喚きにのぼせてゐた。日本語を唇の先で即座に英譯してゐるやうにも聞えたのであつた。

「よろしい、これから廚長は現在の食料品と在來までの消費額とを綿密に計上した報告書を私の許へ差し出して呉れ。――それから、砲手長、貴方もちよつと私の部屋まで御出でなさい。」

から命じたまま、船長は新しい葉卷をポケットから抜き取つて、尖端をいまいましさうに噛み出しながらブリッヂの方へさつさと歩いて行つた。

「君たちは、僕に使はれてるんぢやないか？――それに何だ、あんなことを云つて僕に恥をかかせるとは！」

つかつかと大貫の手を離れて廚房へ入つて来た梅原は、右の拳を握り締めながら中塚の片腕を捕つた。

大貫もあわてて廚長のあとから、くつついて入つた。

「やかましい、貴様に使はれた例はねえぞ、谷の手下なんだ、この野郎、生意氣ぬかすない」と云ふうちに、日本語となると達者になつた中塚が、梅原の手を振りほときながら、眼を吊りあげた。

鮎貝が出た。彼は物をも云はずに、横合からぽかぽかと廚長の頬を毆り始めて、毆りながらますます自分のしてゐることに夢中になつた。谷、皆川、俺、大貫の四人は四つの異つた場所から、一足飛びに三人の狂ひ合つた渦を中心として押寄せた。

「卵泥棒！」

「領事館、もやつつけろ！」

「貴様等、船ごろが何んだ！」

「危い！　危い！」

そんな聲々が、黒い、白い、赤い、めまぐるしい七人の動體から、狭い廚房の天井も墜ちよとばかりぐわんぐわん湧きあがつた。俺はジャック。ナイフを抜きにかかつた梅原の右手を、歯を食ひしばつて、摑へてゐた。谷の向う脛へ一生懸命にしがみついて引倒さうとしてゐる大貫の頭を、残忍な顔をして毆りつける鮎貝の姿がちらと幻影のやうに俺の眼の前を掠めたと思ふと、俺の鼻尖には、恐ろしく太い赤毛のもぢやもぢや生えた腕が、ぬつと現はれて、梅原のナイフをけろりともぎ取つたと思ふ間に、卒倒した七人は、血を流しながら、はげしく鼻孔で呼吸しながら、やたらにその腕を[illegible]、多勢の水夫の腕に一人づつ抱きすくめられて、[illegible]

距離にわけへだてられてゐるのだつた。
　そこへのそのそと割り込んだ水夫長は、長い髭の下から嗄びた聲で腹立たしげに吹鳴つた。
「大馬鹿奴！」
　廚房の扉口や室には、水兵の若々しい、ふざけ切つた顔が、キューピーをでも飾りつけたやうに、俺たちを見て笑つてゐるのだつた。

五

　梅原が俄かに絲を巻いたり、ハンマーを腰にさしたりして歩き始めたのはそれからのことだ。それでも、まつたく孤立の地位に陥つた自分を、非常に恐れたらしい彼は、船にある食料品と云ふ食料品を全部この航海で使つてしまはなければ置かぬやうに、どしどし御馳走し始めた。氣の毒ながら、彼の味方は一人も増えなかつた。
　俺たちも、もうこの船と廚長とに見切りをつけて、何でも彼でも投げやりにやつてのけて、出來るだけ働かない工夫をするやうになつた。寄ると觸ると、俺たちは自慢のやうに、幼い時分から何遍どんな喧嘩をしたとか、どこの國民が喧嘩に卑怯だとか、血腥い話だけで持ち切つた。激昂した神經は端と端とを接してゐても張りつめた弦のやうに顫動した。が、一方から云ふと、恐れるのは俺たちではなくて、俺たちが恐れられてゐるのだつたから、かなり傍若無人なことを云つたり、大將の顔へ吐きかけるやうに笑ひを浴びせたりしたのであつた。
　船長の方からは、別に誰に對しても手嚴い罰もなく済んだらしかつた。しかし、廚長だけは着港匆々解傭になるだらう、と云ふのが一般の風評だつた。妙にそはそは落ち着かぬ眼付で、甲板から冷藏庫へ、冷藏庫から廚房へ、口を「へ」の字に結んだままゴム靴で歩いてゐる梅原を見ると、どんなものか俺たちの心にも憐みが動くのであつた。時には、わざと話しかけて見ることもあつたが、梅原は聞かぬ振りをして顔を外向けてしまふのだつた。
　こんな状態で船はたうとう目的地點まで着いた。村島の埋められた場所などは、いつの間にか懐ひ出す暇もなく通過してしまつた。
　森のつづいた陸、赤い脂ぎつた海岸、緑に濁つた暑苦しい海、小さな艀でやつて來るまつ黒な土人、いくつもいくつも油のタンクの建てつづけられた砂濱、重油會社の監督らしい丈の高いメキシコ人、そんな風物の間に、俺たちはわづか半日だけ許されてある他の船員の上陸期間にいつしよになることも出來ず、黒い空氣に喘ぎ喘ぎ、感興のない勞働をしなければならなかつた。水兵や水夫などが、艀で上陸するのを羨ましさうに見送りながら、油を積み込む人夫の飯を食はせなければならなかつたことは、どんなに俺たちの人種的な侮蔑のやうに思はれたらう。
　船體のまん中へ、一斗樽ほどの太さの鐵管を据ゑつけて、船底へ熱湯のやうにどろどろした重油を、陸のタンクから注ぎこむまでの工事が、氣忙しく働いてゐる俺たちの汗みどろの眼に映じた。海賊のやうな赤い手巾をかぶつた土人が、逞しい腕で梃を押しながら、いくども船腹を往來した。長い髯を生やした監督の顔も、三度づつ士官食堂にあらはれた。いかにも賤民らしい土人の群が、がやがや罵り合ひながら、陸から次第々々に重油を送る鐵管を敷設して船へ近づいて來た。鐵管の一端が、船體へ觸れると、船からの管とぴつたり繼ぎ合はされて、赤旗の信號で、重油はぐびぐび船腹へ流れ込むのであつた。
　鐵管の横腹へ手を當てると、大動脈の血のやうに流れ込む重油が異常な脈動を俺たちの身内に傳へた。油の入るごとに一寸二寸と低

くなつて行く船の吃水を見て、
「もう八部通り入つた。明朝は出帆かな？
——」から云つて、谷がどろんと落ち窪んだ眼を、盛りあがつて來る水面に落したことなども、第一航海の場合と、第二航海の場合も、寸分のちがひもない擧動だつた。それが谷だけではなく、俺たちすべての上に急に老衰が來たやうに、何を云つても、どんなことをやつても、みな十年も前から遣り古した、倦き倦きしたことのやうに思はれたのであつた。

夜は、體を掩うた皮膚が邪魔なほど蒸暑い瘟氣が波の音一つ聞えない海の上をのろのろと滑り込んで來た。俺は寢られないために、甲板へ出て、すつ裸になつて寢ころんだ。北國の空とはちがつて、頭の上の星は手許にある金剛石のやうにごろごろ大粒に光つてゐた。深い天鵞絨のやうな蒼空の奥に、水晶の流れのやうに蜿つた銀河の中にも、五つ六つぎらぎらと悪光をはなつ星があつた。寒い冷たい天體に對する崇嚴な氣持や、人生の小さなことを感ぜしめる壓迫するやうな永劫性はそこにはなくて、どことなく明るみと暖かみと、毒々しさを含んだ宇宙の別な一面が見えるやうであつた。

したたかに重油を呑んだ船は、明る日のしらしら明けに沖合を出た。夜中働いてゐた土人は、みな小蒸氣に乘つて、白い水飲器や、空氣を搾取する手車や、バケツなぞの載つた甲板の上から赤い半巾をかぶつた額を振り立てて、アメリカの一片とも思はれる俺たちの船に對つて挨拶をした。船を繋いだ蛇のやうなロップが次第々々に船尾に退坐つて、曉の光を吸うた淺葱色の海は、織物かなんぞのやうにするすると船から滑り出るとともに、その一端を食ひ留めた陸を遠くへ遠くへと押距て去つたのであつた。

「これがメキシコへ御別れさ。」

さう云ふ言葉が、俺たちの胸に自然と湧いて、さすがに夏來ても秋來てもすこしも變つたところのない赤熱の邦の一端を、惜しいやうな氣持で見送るのであつた。

油を滿たした船は、水際から五尺とも離れぬほど低くなつて、艫の方などはをりをりがぶりを受けるやうになつた。

時間の變更から、群島の埋められたと思はれる邊は、夜のうちに過ぎてしまつた。この航海をやめてからの前途を考へてゐた俺たちには、だんだん[illegible]の死と云ふ感じが、一[illegible]前へ出て來る事に對するやうにうすらいで來た。牛の尻尾もいつの間にか、精分をつけるんだ、などと云つて食べるやうになつた。そして、これからどんな風に散り散りになつてしまふことかと思ふと、五人は急に反動的な親しみを增して、俺たちを仇敵あしらひする梅原や、大貫に對抗する氣持になつた。

北へ溯るに從つて海は荒んだ。曇り勝ちな場所へ深入りするのだつた。ペンキを甲板へ塗りなほしてゐた水夫が浪に追つかけられたりすることは別に珍らしくなくなつた。念のために、廚房の屋根に貯へてある馬鈴薯には新しい帆布がかけられて、太繩で結びつけられた。船室の窓は概ね閉ぢ切られたまま滅多に開かれなかつた。人間が、いぢいぢした心からその所有品や生命を保護すべくするあらゆる努力を重ねてゐる馬鹿々々しさを、片つぱしから切り崩して行く怒濤が、キューバ近くの海に入るに從つてそろそろ頭を擡げ始めた。空は次第々々に海を壓迫して來た。ところどころ螺のやうに濁明の漂うてゐる雲の明るみには、すさまじい嵐が籠つてゐた。不斷に水を引掻き廻す物音と、機關の底の何やらを搔きつけるやうな響とだけが、どうやら船が進んでゐるのだと云ふ危つかしい安堵の念を俺たちに與へるたけであ

った。

　はたして暴風雨がやつて來た。あらゆる角度から船を亂射する雨は、數千の白い馬が甲板を目がけて疾驅して來たやうな波濤と相俟つて、千噸をもつて計へられたる船を、時計の振子のやうに一秒ごとに右から左へと震盪せしめた。深い谷から波濤の連互に、死んだ物のやうに打ちあげられてはまたすぐ引込まれる船は、周圍幾哩かの水平線の一瞥をだにする暇もなくただもうぴちぴち泡立つた底氣味の惡い眼の前の水に、滿天の雨を浴びながら鰯の背へでも乘つた時のやうに飜弄されるのであつた。雨合羽をかぶり、腰まで屆く護謨靴をはいて、水夫は波に洗はれながら、異樣な恰好で甲板の油口の締木をなほしたり、ロップを捲きつけたりした。水夫長が廚房へ、甲板に打上げられてあつたのだと云つて、料理を頼んだ尺餘の飛魚なども暴風雨の日でなければ生れぬ產物だつた。

　やつてゐた仕事に間斷のないオーケストラのやうな悲壯な音調を與へる怒濤と風音に刺戟されて、俺はだんだん眞面目に生きることを考へて見なほさねばならぬやうな氣になつた。あらゆる騷音の底から、海底から傳はつて來るやうな、死そのもの、靜寂とも思はれる默した力が、だんだん俺の心に滲みとほつて來て、はかない生存の苦鬪をぢつと凝視しても恐ろしくないやうな勇氣が血液の中に流れ始めたやうに思はれた。

　暴風雨が霽ると、大氣は痲痺を感ずるほど寒くなつた。キイ・ウエストの沖からは、毛絲のジャケットを着込まないと、とても甲板を歩くことは出來なくなつた。

　二日、三日——寒い風に煽り立てられた濁つた海には、ミシシッピイの眞水が雜るやうになつた。冷酷な潮流の險所々々を巧みに避けて、船は引搔く物音と擲きつける響とを繼續して、頑強に同じ方向に進んで行つた。理想、責任、奮鬪、邁進……刻々それらを混亂の渦中に導く破壞の力に抵抗して生き動くのが船ならば、人間の一生とそれはどんな差異があるだらう。俺はこんなことをしみじみと感ずるやうになつた。

　待ちに待つた着陸の日が、寒い寒い雪雲の密封した一日にたうとう實現された。河口の檢疫が濟むと、汚いメタンの湧き立つ河を、いくつもの鐵橋をかい潛つて、疲れはてた旅人のやうな油船は、ハムマーの音や、蒸氣の音や、汽笛や、電車の鈴などの同じ部屋に喧噪してゐるいろいろな外國語のやうに響いてゐる兩岸を無言で通り拔けて、雪になつた午後三時過ぎのドックへ、ぐつたりと身を凭れかけたのであつた。

　俺たちは、嫌がる船長へ無理に强談判をして、その日のうちに月給と手當とを貰つた。別れる前に一言何か云つて行かうと思つて、五人が揃つて廚長の部屋へ行くと、彼は大貫を對手に熱心に事務引繼の手筈を定めてゐたのであつた。さすがにかうなると、彼も噤んだ口を開いて、

「君たちもよすかね？——いや、僕は首尾よく御拂ひ箱さ。」と苦笑しながら、大貫新廚長のためにせめて誰か三人ぐらゐは停まつてゐてくれまいかと賴むのであつた。

『領事館』も、ダンゴ眼鏡の曇りを拭きながら、懸命に愛想笑ひをして、同じことを賴んだ。

　俺たちは、至極卒氣ない返事をして、ポケットの紙幣をぎゆーッと片手に握りながら、元氣よく棧橋へ出た。

「おい、トニーんとこへ行かう。」皆川は版で捺したやうに同じ言葉で、一同の心を煽つた。

　それから俺たちは、トニーの酒場で飲んでゐた。何日飲み續けてゐたか、それが何日目の曉

だつたかは、はつきりしない。ただ、俺たちの眼からは無駄事のやうに見えるほど、酒場の人間が交る交るやつて來てがたぴしのストーヴに、ざらざらと小粒な石炭を十能で入れるごとに、俺は、トニーよ、寒いと石炭がいるな、と話したのを記憶してゐる。俺はもうとうに無一文になつてゐて、仲間の四人も醉つたまぎれにどこかへ行つてしまつたのだが、それでも石炭を入れる人間が來るごとに葡萄酒を命じて、鷹揚な顏をして、寒いと石炭がいるな、と言つた。終ひには、トニー云々と云ふ俺の言葉は、俺が最後に話すことの許された、たつた一鎖の英語ででもあるかのやうに、かなり複雑な意味がそれに籠まつて來たのだ。

――貴様は何を求めて、この汚い酒場に、孤獨だらけな人間と酒を飲んでゐるのか？　貴樣の飲んでゐる酒には何があるか？　時々聞える話聲は何だ？　人間の聲は？　ここはいつたいどこなのだ？――」

さう言ひつつゐながらも、俺には石炭がざらざらと一掬ひづつ眼の前のま赤なストーヴへ焼べられるごとに、トニーよ、寒いと石炭がいるな、としか言はなかつたのだ。それでをりをり、自分の耳に、勝手な働きに新たにしないやうな節が

あると、俺は大聲で何かを露骨に表現して見たいと思つて、また、

「トニーよ……」と呼びかけた。

單調な言葉ほど複雑なものはない。人間はべらべらと三文代言のやうに、むだごとを餘計しやべつてゐると、かへつて言葉の奥に潜んだ複雑な力を忘れてゐる。鳥や動物だつて、同じことだ、波羅門教の「オム」と言ふ讃嘆詞だつてさうさ。へぼ役者の臺詞がどれほど彼の靈の存在と關係してるか？　俺は、いつたい俺と云ふ人間は何の爲めに生きてるのか？――とまア、じれつたくなるといつもの癇癪玉を破裂させながらも、平然として、金持の娘が『オマア・カイヤム』でも口吟んでゐるかのやうに、トニーよとやつたんだ。

トニーは辛抱強い男だ。頑丈な、日本人ほど黒い髭を持つたイタリア人で、高い鼻から油氣のない顎ひげまで、とうも希臘人の血が通つてゐさうな、實は[illegible]商の男だ。トニーの酒場の者も、一人として辛抱強くない奴はない。[illegible]だつて、[illegible]だつて、給仕の何とかいふ若い者だつて、皆なさうだ。實には何十年來から下つて、未だに縁の切れない下手な[illegible]人ばかりある。天井は今にも落ちてきさうに、ひとつ電燈一塊り落ちて來はしない。卓はいつまでも俺の半身を支へてゐる。椅子、これもぢつと辛抱して俺の下に蹲まつてゐる。俺の眼に留まる物は皆忍耐心を持ち過ぎてゐる。それが、第何日かの俺の醉つ拂つた眼には、たまらなく癪に觸つてならない。何でもいい、乞食の帽子でも、女のスカートでも、皿一枚でもいいから、少しは不安定になつて、床の上へ落ちて、乞食なら可憐な聲を絞り、女ならあれ！　と叫び、皿なら皿らしく床板の堅さを證明するほどの響をあげて、くれりや、ちつたあ、俺の氣持も落ち着くのだが。

「おい、君は家がないのかね？」

時折、酒を持つて來たり、石炭を焼べに來たりするごとに、トニーは辛抱強い聲で、さう俺に訊くのだ。彼はかなり心配はしてゐるらしい。

「ああ、俺のゐるところが家なんだ。」

しまひにはあまり根氣よく訊くので、俺もさう答へた。

これもあんまりはつきりしないが、言つてから[illegible]つてぐでぐでになつてゐた第何日かに、突然、また客を連れて、中年、紳士、昔馴染の四人がそろそろと入つて來た。

[illegible]

嗅の……ここには、一人の女もゐなくなつて了ふまい。やがつた。お金諸とも、二人で共謀して嗅の金を盗んで逃げやがつたんだ……」

谷の云ふことも舌がもつれて、何のことだかよくわからなかつたが、それでも、

「ぢや、女の方はどうしてくれるんだい？」とひよろひよろ立ちあがりながら、俺は彼の胸倉へ縋りついた。

「やい、俺たちはこれから、一聯隊で、谷の嗅をみんなでさがしに行くんだ！」

から縺らぬ舌でしやべり立てたのは、甲斐だつた。何のためともなく、二人は彼の言葉に非常な偉いことをでも發見したやうに、椅子や卓にのぼりながら、大聲で喝采し拍手した。

「よし、俺たちで聞きだい、嗅の一人や二人はいつでもみつけて見せるぞ。べら棒め、あんな嗅なんざ俺たちの行くところにアどこにもごろごろしてゐるんだ。ふざけやい、野郎ども！」

彼はいい氣になつてゐる足元を踏み堪へて、腕まくりしながら大聲で怒鳴つた。

またまた拍手が起つた。いつの間にか俺たちは街に押し出されるやうに灯の入つた街へ出て居つた。

ここをどう歩いたか、長いこと方々を流浪つたあと、俺たちが谷の女房の支那街の家を一箇いたのは晩の九時頃だつた。青白い、多くの犯罪に汚された壁に、眼が慣れるよ、百色眼鏡を長いこと覗いてゐたあとのやうな、疼痛が眼の底からちくちく湧いた。

「おい、貴様たちはここで温和しく待つてゐろ！」

谷はさう云ひ捨てて、一人で扉をノックしながら、

「トーキョウ！　トーキョウ！」と二度ばかりわめき立てた。

扉が開いて、青い電燈燈に包まれた光が、ぼんやり谷の女房の横顔を闇の中に浮した。ブロンドの、小造りな、ちよつとトニーの嗅に似たやうなところもありながら、サクソン系を帯びた特色を、十分にその皮膚の色や、鼻の外り工合に見せてゐる女だつた。谷は頭を縮め切つたあとで、何やら家の中でがやがや罵つてゐる様子だつたが、しばらくすると、勢よく扉を開いて、

「Come in a time !」

と、誰がどこから這ひ出したものか、酒ぶつた聲で俺たちをせかせて、自分は一番背後に隠れて、禿げた頭をつるりと撫でた。扉の中へ、影畫になつてまつ先に千鳥足でよろけ込んだのは、日本ならばまだ徴兵適齢前でもあらうと思はれる、脂肪の固り切らぬ皆川だつた。

「野郎、早く出て來ねえと承知しねえぞ！」

中塚は拳を振りあげながら、彼の背後から寒さに震へた聲を長く引いて噛みつくやうに脅すのであつた。

俺はとても辛抱して待つ氣にはならなくなつたので、三人が留めるのも訊かずに、がたがた震ひながら、雪のフィラデルフィアへ迷ひ出て、「つまり寒かつたり暑かつたりするのが生存だ。いや、待てよ、何のこつたかさつぱりわからぬ……。」と呟きながら明るい方へ歩み出した。

伯父

一

「阿呆！」

中村春吉は、から叫んで、いきなり靴先にぶつかつた石ころを蹴つた。しかし、石ころはわづかに靴の底にかすられただけで、凍りついた地面にしつかとしがみついたまま、びくともするものではなかつた。彼は、意地づくで一歩あともどりして、わざわざ狙ひを定めて、爪尖がうづくほど、その醜い石ころをいやといふほど蹴り上げた。

い、い、べつかり氷から剝がれた石は、思つたよりも多角形なごつごつした體を、肥つた人間が手足を踏ん張つて轉んで行くやうに運んで、ころころと二叉にわれた太い方の路を、ものの三間も飛んだと思ふと、石板石の記念碑の根かたに仄黄ろい冬の日光を浴びながら、べつたりと納まりかへつてしまつた。彼は、ほんの視覺だけの好奇心から、記念碑の表になにが書いてあるかを讀まうとしたが、そのとき、

「萬歳ッ！」

「江藤進七君萬歳ッ！」

と、一途に湧いて來る群衆のどよめきに、思はず視線を轉じて、我と我が身の行爲に責任をもたぬもののやうに、ふらふらと横手の霜枯れのした小丘をのぼつて、マスクの間から深い吐息を洩らした。

もう、群集は、腹立たしいほど、多く集まつてゐた。

彼は、そこに、いろいろな字を書いたのぼりや旗を見た。まつ白い、寒さうな感じのするきれ地に子供の清書帳のやうな走り書きのしてあるのが目についた。旗といつしよに、いろいろな服裝をした人間が、冷たい日光に顏を曝したり、蔭になつて塊りあつたりして、枯草の上に動いてゐた。元氣らしい聲で語つてゐるものもあれば、ひつきりなしに煙草を喫ふものもあり、また、鹿爪らしく帽子を脱いで長たらしい挨拶をかはしてゐるものも見えた。折目のついた羽織袴に、太い白紐をむすんだ青年が、みんなから肩を叩かれて、擽つたいやうな笑ひにマスクの口をもぐもぐさせてゐるのもあつた。『す』と『し』の正反對になつた、重苦しい土地辯のごつごつした會話が、どの群にもどの列にも賑はつてゐた。

「なにがそんなに嬉しいんだ、愚者めッ！」

春吉は、から獨語つて、市役所の告附に指定されてあつた旗標をめあてに、霜の音を踏みながら、雜多な入營者と、見送人との間を、尋ね廻つた。やうやく探しあてて、その列のいちばんあとへ着くと、群中の淋しさが急にこみあげて來たかのやうに、俺は一人だ、といふ感じが犇と心を刻つた。

「いざとなると、いつも一人なのだ。」

強ひて、自分をまぎらはさうとして、からどんづまりの心理から打消してみても、すぐその下から、子供の無邪氣な顏が浮んで來た。

「そら、徹や、おとうちやんがおいでになるんだよ……おめめをさましなさい、さ、徹や！しばらく、おとうちやんはゐないゐないなんだよ。……」

さう云つて妻が搖り起さうとしても、子供はなかなか眼を醒まさなかつた。彼は、伯父の家の門口まで送つて來た妻の、胸元にまだ眠たさ

うな眼を瞠いてゐた子供の、柔かい髪の毛を、捲り取るやうに撫でて、涙ぐましい氣持で、ふいとそこを出てしまつたのだ。

ああ、なぜもう一年むかうで辛抱して、歸朝しなかつたのか？

なぜ、なぜ、なぜ！——眼の前に、まだ兵卒になりきらぬ民衆に對して、威嚴と矜負を示すための如く、外り身になつて一同をじろじろ睨め廻してゐる軍曹のあかつ面へ、漫罵を浴びせかけたやうに、春吉は、心の中でかう叫んで、外套のポケツトにいくども拳を握つたり開いたりした。

年にしたら、その軍曹なども、彼よりは一廻りもちがふと思はれるほど若い男だつた。

二

長い時間か、同じ營内のグランドを、ぐるぐる歩行させられて、頭から釘を打込むやうな旅團長らしい將校の武張つた訓示に耳を傾けたのち、口を開いてぼんやり見てゐる群集の前を、さまざまな號令か、行つたり來たりして、をりをりぴかりぴかりと劍が日光に反射した。士官といふ士官の顔は、どれもこれも同じやうに顎がつッ張つてゐて、冷酷な小さい眼と、鼻に力を籠めて書いた一の字のやうな口とか、外國の排日ポンチ繪に出て來る「ジャップ」の顔そつくりだつた。

ひときり、また、泥濘になつたグランドを、上官の人たちにみすぼらしい、不規律な後姿を見せるためのやうに、ぐるりと廻つて、反對の方を向くと、列の先頭に立つてゐた古參兵が、汗みどろな額に手をあてながら、

「一休めだ、しかし、列を亂れてはだめだぞ。」

と、仙臺辯で命じた。

はひつて來た門口の方を見ると、ゆらゆらと水蒸氣の立ち騰つてゐる數百の靴や足や下駄に踏み躪られこねかへされた赭黒いグランドをへだてて、無數の人間が、柵の間から首をさしのべて、こちらを眺めてゐるさまが、いかにも、二つに分けられた群集は、もう手と手を取りかはすことが出來ない距離に押しへだてられたかのやうに思はれるのだつた。春吉は、なんだか、今朝別れた自分の妻が、豐をかかへて、群集のうしろから、彼にむかつてしきりに「はいちや！」をやらしてゐるやうな氣がしてならなかつた。

暗い、冷たい伯父の家に、どうして、あの我ままを通したやつが、二年間も厄介になつて辛抱出來ようか？　中年ごろまでは、どうやら多年の開業の役得で地方の都會議員などもやつた伯父が、腦を煩つて、手に入れた田地も賣りつくしてしまつてから急に吝嗇になり、春吉が一年前に、ぶらりとアメリカから歸つたときも「ハワイと出稼ぎに行つてるこのへんの百姓だつて、お前、二千と三千と金を掴んでくるぢやないか！」と云つて、十二年ぶりで、無限のなつかしみをもつて歸つた彼に、庭の掃除をさせたほどの伯父、その男の下に長い長い二年の間、どうしてあの病身な、東京だけに棲みなれた女が男の子を一人かかへて暮らせようか？

から想像すればするほど、なまじひ、日曜日の外出に子供の顔が見られるなどといふなまやさしい量見を出さずに、妻と子を、彼女の實家の方へあづかつて貰へばよかつたに、と後悔されたのであつた。

春吉の眼は、だんだん霞んで行つて、しまひに、柵につかまつてゐる見送人の姿さへも朦朧となつてしまつた。彼は累發的に心の底から底からと押しあげて來る、涙の湧き出る前の、甘酸つぱいやうな[illegible]の苦しみを、いくどかぢつと怺へて、ほかのことに思念を轉じようと試みた。

「君は、どうしてここさ来たのしや、や？」
さつきの古參兵が、けげんさうな顏をして、あゆみ寄つて、から彼に訊ねた。
「僕、僕ですか？——永らく渡米してゐたんです、仕方がありませんや、どうせ、國家のためですからな、は、は、は、は——」
彼は、喘嗟の場合の心にもない言葉を、涙つぽい笑ひで誤魔化した。
「なにしてたんですかや？」
「職業ですか？——雜誌の編輯です。」
「雜誌ちうと、書く方でがすぺね？」
「さうです。」
「わだしあ知らねえけんど、まづ、あんだなざア、その方がよつぽど國家のためになんべえをね、こんなどこさ來ねえでも。」
「有難う。どうも運が悪いんですかな。」
「あとで、再檢査んどぎ、なんとかなりすべをや。」
「さうでせうか？」
そんなことは、もちろん杏吉にとつては、別に希望を置くに足ることではないと思はれた。現に、社會主義者を[illegible]にとらなかつた[illegible]ものが、最近では、ぼつぼつ入營させて、反つて彼等を[illegible]してしまふやうな[illegible]も時にはあつ

てゐた。それにつけても、なぜ、徴兵檢査に、銀座かどこかで素晴らしい路傍演説をやつて、Aの一番の黒表人物になれといふ、社の連中のヨタ氣分もまじつた忠告を聞かずに、おめおめ檢査などを受けたのか……。
そんなことを考へてゐる暇に、彼の同列の人々はしどろもどろな足取りで、とぎれる間々を埋めるやうに早足になつて、くわつと陽の照り返つた兵舍の白壁にむかつて進んでゐた。
「さあ、あんたがたア、これから軍人だからね。」
古參兵は振り向いて、憐むやうにも、一時の氣やすめのやうにもとれる言葉で、から注意して、ブルドッグのやうな顎にこびりついた泥の團塊を、重さうにべちやりべちやりと引擦つた。

三

よもや、と思つたのに、背嚢にも、雜具箱にも、寢臺にも、もうちやんと「中村杏吉」といふ名が、記してあつた。
一列となつてみると、さつきの同列のうち、いくらの人間も殘つてゐなかつた。隊の習慣らしく、新兵たけは、一つストーヴを圍んで、暫く時の間、お互に[illegible]の道づきを結ぶことを許された。みんなは思ひあはしたやうにマスクを口から外した。
どれもどれも、ずうずうの、魯鈍な顏をした、なんのために軍隊に徴集されたかも知らぬやうな青年たちばかりだつた。初對面の遠慮から、彼等は、ただ窮屈さうに、一等卒があてがつてくれる堅い椅子に、かけて、ストーヴへ翳した自分の不恰好な手だけをもの珍らしさうに眺めてゐるのだつた。抜け目のない班長が間に割り込んで、他の古參兵にいろいろな冗談を云ひかけながら、笑ひといふ共同心理で煽つて、どうやら人々の口を開かせた。
「あなたは、やはり東京に御いででしたか？」
一人の、頭も顏も圓々と肥つた青年が、杏吉のむつつりした、髭を蓄へた顏をのぞき込んで話しかけた。杏吉は、ふいに東京がなつかしくなつた。
「さうです、神田の方に。」
「さうですか、どうもこの土地にお住みの方とは見受けられなかつたですよ。わつしも、本所です。工場へ通つて居りましてね。」
「あ、さうですか、お互に、どうも御目出たいんですな。」
二人は顏を見あはせて苦笑した。

軍服の着初めか、かなりの時間を食つた。

そのどさくさの間に、いくどか士官らしい服が、戸口を出入りするのが見えた。その都度、長いサーベルが、柱や床に打當つて、人々の慣れない耳を、一種の緊張した氣持で引立てた。

ちやうど、班長や、一等卒が晝飯を運んで來て、室の一半を占めてゐる卓に、劒の釣り工合が横になつてゐたり、袖がながすぎたり、ズボンの下から靴下が食み出てゐたりした新兵が、一廉の軍人になつたやうな面をして、てんでの食器を運んで來たとき、戸口にあらはれた一人の士官が、中學校の先生のやうな聲で話しかけた。

「この班内に、誰か病氣の者がありあしないか？ あつたなら、いまのうちに軍醫にみて貰はなくちやいかんぜ。」

士官の言葉は、鸚鵡のやうな班長の舌先によつて仙臺辯に通譯された。食卓に集まりかけた新兵は、互にきよろきよろ眼と眼を見あはして、なにも云ふものがなかつた。

「私、實は心臟が惡いんですが――」

春吉は、思ひきつてから云ひ出した。

「お前か、よし、よし。飯イ食つたら檢査所さ降りて見て貰へ！ ほかにないがね？ いまのうちにみでもらはないとあとで云つて來たつてだめだぞ。」

念を押した上に、班長は、一人一人新兵を見廻して、春吉の名を手帳に控へて、士官のあとにつづいて出て行つた。

古參兵の指圖で、めいめいの飯盒は、大粒な大角豆で色づけした赤飯と、野菜や肉の煮染などを、取りいれた。『歡迎』と書かれたけばけばしい色彩の型菓子なども各自の前にくばられた。

「おらア、このお菓子、こんで三べん食えすぺをや。」

仁のよささうな上等兵の一人が、同僚にさう云つて白い齒の間に菓子をぼきりと缺いて、皺だらけな顏で笑ふ拍子に白い菓子粉を下向に熱心にアルミニュームの箸を動かしてゐる新兵の頭の上へふつと噴きかけた。

春吉は、菓子をポケットに捻ぢ込むと、まだ背廣の古服のまま立ちあがつた。

四

外は、人間を嘲るやうな日光に燃えてゐた。

春吉は、いくどか別な建築の中へ迷ひ込んでは、けんつくを食はされた。

やうやく探しあてると、檢査室の前廊に、下駄や靴でいつぱいに塡まつてゐた。もし、ひよいつとしてのがれることが出來たなら――と思ふと、犯してならない場所へ足を踏み入れたときのやうに、胸がわくわくして來て、坐つても立つても居られぬやうな氣がした。

彼は、澤山の壯丁の間に挾まつて、ぐいと膝頭を兩手で抱きながら、心配さうに、室のまん中の人だかりを見戍つた。

「二階堂忠二郎ッ――二階堂忠二郎。」

「第十一班の者は、こつちさ集れッ！」

「俺の番だ。」

「こら、そこから入つちやだめだぞ。」

「これほどの淋病なら、一向差支へはない、早く班へ歸れ！」

そんな癇高な言葉のきれぎれが、市場か魚河岸の競賣をでもやつてゐるときのやうな、雜然とした騷々しさのうちに彈機仕掛になつた器械が、突發的にほかの音響を彈き飛ばすときの勢ひで、板園ひの室内にひびいた。

「ここにゐたのが？」

さつきの班長が、紙片を手にして、春吉の側へやつて來た。

「こつちさ來て居れ、早くみてもらふやうにし

てやるから。」
さう親切に云つて、彼は、寒いのも忘れて肌を脱いだり、ズボンをとつたりして、待ちもどかしさうに順番の來るのを待つてゐる青年たちの間を縫うて軍醫の卓の前の繩張りしてある席へ、春吉を誘うた。
「中村すんきつ！　中村さん……」
はつと思つて立ちあがつて、呼びかけた軍醫のゐる卓の方へ歩み出すと、どきりどきりと氣味惡い心臓の鼓動が胸壁に波打つた。彼は、複雜な感覺で壓倒された人間のやうに、無言で軍醫の前に立つて、唾を嚥んだ。
「お前か、中村すんきつつうのな？」
「はい。」
軍醫は、卓の上のうづ高く積まれた書類のうちから、彼の戸籍謄本らしい罫紙をとりあげて、彼の顏を等分に見くらべた。
「永らくアメリカさ行つてたさうんだな？　昨年十月に歸つたのか？　職業は何だ？」
「雜誌記者です。」
「何の雜誌だ？」
「青年の雜誌です。」
「いや、その名は？」
「政治や文學などを取扱つた『世界主義』といふんで――」
「『世界主義』？　そりあ、社會主義とは關係があるんか、な？」
「まあ、あるやうな、ないやうな。インタアナショナリズムといふ言葉の譯語で、ロシア革命以後の萬國の無産階級――」春吉は、こんな言葉を、こんな男に話すのが、自分の主義に對する冒瀆のやうな氣がして、思はず、身内がぞくぞくした。
「よす、よす。それでえいんだ。さそつさ行つてよく再檢査をすて貰へ。」
指された卓には、四十恰好の眼の鋭い佐官級の軍醫が控へてゐて、さつきの卓から廻附された書類を手に取りながら、じろじろ春吉の七分三に分けた髮の毛を珍らしさうに睨めあげてゐた。
「わりに年をとつてるな。」
彼は家畜かなんかを品定めするときのやうに、かう呟いて、眼鏡を外すと、角ばつたゼスチュウアで、聽診器をとりあげた。
心臓が惡いなどと云つて、惡くなくて、忌避の嫌疑を受けて、これから二年間古參や士官たちに虐待されたところが、もうこの上は、仕方がないと思つて、軍醫の命ずるままに、胸部を出して、深呼吸をやつた。ぐるりを取り圍んだ壯丁たちの視線を十分に意識しながら、軍醫は春吉の胸を叩いて見たり、背中に聽診器をあてがつたりしてむつかしさうな表情をして首を捻つた。
「よろしい、上衣をつけていい。――どうも、すこし酒を飲み過ぎるな。生命を大切にせんといかん。一年間時休だ。なほ醫師にみて貰つて、よく自宅で靜養せんとならんぞ。つぎッ――」

五

春吉は、急流に弄ばれるやうな氣持で、町から町を飛んであるいた。
どうして歸つたか、ともかく、伯父の家の門口へはひつたときには、うそ寒い夕靄が庭木の間に降りてゐて、遠くの方から、豆腐屋のふれ聲がなびいて來た。あの[illegible]した若い者のかやした聲を[illegible]めた板圍ひの室内から、[illegible]り歸つて來て、しんとした[illegible]に反響する、豆腐屋のふれ聲を聞くことは、[illegible]だつた。彼は、久し振りで、[illegible]な[illegible]へ歸いたやうな氣がした。
電燈はついてゐたが、家の中はしづかだつた。[illegible]ガラスの[illegible]の[illegible]、[illegible]の時[illegible]を[illegible]

いた金文字だけが、夕闇の中にきらきら眼を射た。そんな文字でも妙になつかしかつた。

傭めしより、眼鏡をかけて、十燭ばかりの電燈の下で、一日讀み飽きた河北新報をまだがさがさ云はしてゐる伯父、まつ暗な臺所で鼾をたてゝゐる伯母、納戸の三疊にたゞん一つ押けたあんかに、微に添乳をしてやつてゐる妻、薬の香のぷーんと匂ふ取付の薬局、みしんみしんと柱の裂ける音のする奥の八疊の暗がり――から想像してみると、思はず何ともいへぬ歡喜の情に、眼がしらが熱くなつて來た。

がらりと、戸をあけた。玄關口が一體にぼーつと煙つたやうに見えた。なにかを呼びかけた。度はずれの大聲だつたのに氣がついた。誰かの足音がして、襖が、一二寸ひらかれた。黄ろい電燈の光が、[illegible]らしく、間の障子を照らした。ほのぼのと、人の囁く聲がして、鐵い手がたてつけの悪い障子の棧にかかつて、一二度突くと、さつと茶の間の電燈が、春吉の顔へ水のやうにかかつた。

「まあ――！」

妻だつた。腕を拱いてゐた。

「どうしたの？」

伯父の聲がした。おきおきと新聞を疊む手付が、その瞬間、春吉の頭の一隅に映つて、すぐ消えた。

「どうして歸つたの？」

妻は、尻上りな仰山な聲を出して、しばらく彼の顔をあかりにすかして見て居つたが、やがて急激に心理活動を刺戟されたもののやうに、ふり返つて茶の間の方へもつと大きい聲で叫んだ。

「春吉が歸つて參りましたの――」

「一年間歸休だとさ！」

彼も、もどかしさうに、靴の紐と爭ひながら、大聲になつた。

家の中は、大勢の人間が闖入したやうに、急に騒々しくなつた。はひつてみると、近在に嫁いでゐる春吉の實母も來あはしてゐた。伯父、伯母、母、妻の四人は、目新しさうに春吉の頭から爪先までを、じろじろと見廻した。呆れたやうな表情が、人々の顔に漂つた。

「心臓だそうです。心臓だなんて、實は口實らしいんですよ。聞かれるもんだからね、すこし立ち入つた説明をしたんです、すると、軍醫が、氣を利かして、自宅療養をやらんといかん、[illegible]かすこし過ぎるやうだ、なんとうまく撥ね合はしてくれたんです。」

春吉は、涙と笑ひと叫び聲と動作とをいつしよにして、ぺちやんと坐り込んだまま、長火鉢の前から立たうともしない母と伯母にむかつて、語つて聞かせた。

「まあ、よかつたわねえ。」

妻はまうしろから云つて、子供を抱きなほした。

「――どうも今朝から、わたし、そんなやうな氣がしたんですもの。なんだか、あなたが、ひよつとしたら、歸されて御いでになるやうな、ね。さう申しましたね、伯母さん。」

彼女は促すやうに、伯母の顔を覗いた。

「さうさう、富子さんも、なんだか、あの年齢になつて徴兵にとられるなんて、ほんとのやうな氣がしないつて、さつきも云つてたとこだをんしや。」

伯母は、やや東京語にちかい仙臺語で相槌をうつた。

「誰だ、軍醫は？」

職業から、伯父はそんなことを仔細らしい顔をして、訊ねた。

「や、おつかさん、つい御挨拶もしませんで。」

春吉は、田舎嫁らしく、眉毛を剃つて、鐵漿をつけた母親に、頭をさげた。

「まア、まア、よかつたぢやないか、それでは、これから、あんたも新田さんの仕事して、御恩になつた伯父さんさ、早く御恩返しするやうにするといゝんだね。」

母親は、伯父の新田よりも、もつと重苦しい言葉で義理のある兄の手前を憚つたやうに、かう云つた。

「伊作さん、今夜は伯父さんに御馳走を買ひませう！」

伊作は[illegible]云つて、酔つたやうな足取りで立ちあがつた。

六

[illegible]一升壜を注文して置くと、伯父は、[illegible]に、[illegible]伊作は[illegible]に[illegible]。

[illegible]

「そんなら、[illegible]」

[illegible]伯父もすこぶる[illegible]の[illegible]御利[illegible]を[illegible]、[illegible]。

[illegible]、しかし、[illegible]、[illegible]

[illegible]——

[illegible]、[illegible]を受けたやうに[illegible]に云つた。

「さう、ね。でも、なんでせう、それを話して太田さんに御願ひすりやなんとかなるんでせう。」

太田といふ「世界主義」の社長の記憶を、彼女は女らしい依頼心から呼び起したのであつた。

「うむ、どうせ、出るときにもあんなにまでしてくれたんだからな。よし、電報を打たう。——おつかさん久し振りですな、御馳走もありませんか？ 今夜は、ゆつくり飲みますよ。」

伊作はまた、意味ありげに云つて、[illegible]伯父の顔を見返した。

伯父は、にがにがしげに、口髭を噛んで、[illegible]を[illegible]しばたたきながら、ちいさく[illegible]の太田を想つてゐた。

伊作の母は、酒を[illegible]するために、一家を[illegible]伯父の家へ[illegible]、伯父[illegible]になつてゐるのだつた。

伯父は、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]で、[illegible]、いつもそこを追ひ出されては、[illegible]

[illegible]

せてゐた。ゆくゆくは、子供のない夫婦仲に、養子にするつもりらしく、自分の稼業の醫術を習はせようとしてゐた。伊作の母が、現在の田舎のある百姓家にかたづけられたのは彼が伯父と折りが合はずに、東京へ飛び出して、そこから、ある知人の世話でアメリカへ渡つてしまつたあとのことであつた。彼女は、北上川の沿岸の貧しい百姓村に、[illegible]として、若い後継者があれば、主人と共に隠居のやうに、全然家事に干渉しないといふ習慣上、良人と二人で村の往来の端に、雑貨や食物や酒類などを商つてゐた。ところが、田舎に酒を商ふことは、[illegible]に[illegible]を[illegible]、[illegible]酒を[illegible]ることになつた。[illegible]、酒の[illegible]

[illegible]

酒の商賣を廢めさへすりやいいぢやありませんか。眼の前に酒を置いて、飲むな飲むなといふは、云ふ方が惡いんだ。伯父さんだつて飲むし死んだ御祖母さんだつて飲んだのだし、それやおつかさんにだけ飲むなと云へるわけはないと思ひますか――」

伯父が、前から母親の品性を罵つたとき、春吉はさう云つて辯護して置いたのであつた。

「伯父さん、いかがです、もう一つ。」

春吉は、またあらためて盃の縁を拭いてゐた伯父にむかつて、自分の盃を差した。

「いや、俺はこれから病家を廻つて來るとこがあるんだ。お前たちの飲み助の相手は出來ねえ。」

から云つて、伯父は、春吉の盃を撥ね返すやうにして、禿げあがつた額をつるりと撫であげて、座を起つた。

「あなた、あんまりめしあがると、よくありませんよ。」

春吉の女房は、銚子をとりあげた良人の手を抑へた。

「まあまあ、兵隊の方さへきまれば結構なことさ。」

[illegible]」、酒氣でてりのした[illegible]を撫でて、興えつくやうな瞳の濃い眼元で、一生懸けたなかつて、ふくふく親子の挨拶もしかけない息子の成人した姿を、いまさらなつかしむやうに凝視めるのだつた。

七

伯父の歸りは遲かつた。

着て出た二重廻しには、砂糖のやうな雪が積りついて居つた。

「さあさあ、戸締りをして、お小夜、もう寢ろ、寢ろ！」

彼は叱責するやうに、まだ長火鉢のわきに坐つてゐる伯母に命じた。

春吉は、身内に廻る醉がすこしづつ心臟の鼓動を早めて行くのを感じたほど、快い氣分に浸つてゐた。飯をしまつて、伯母のあとに、風呂をもらつてゐるので、富子は座を外してゐた。

「おあんさん、降つて來したけえ？」

湯上りの、てかてかした額を、兄の方へむけて、すこし舌たるい口調で春吉の母親は訊ねた。

伯父は、春吉の前に、殘りすくなになつて立つてゐる一升壜や、チャブ臺の上の食ひ荒らした肴などを、坐つた眼で睨め廻して、病氣あがりらしい弛んだ頰の皮をびくびく云はして居つたが、妹の問に對して、無愛想に、

「ふむ。」

と答へたきり、あとは、頸を襟の中へ埋めて、投りばなしてある春吉の敷島の袋から、一本拔いて、火の氣のない火鉢の灰を掻き立てた。

「伯父さん、いかがです、一杯。御寒う御座いましたらうに。」

春吉は、あらたまつて、盃を差した。

「俺は飲まねえ。お小夜、その壜をかたづけてしまへ。あればいつまでも飲むんだから、この野郎は。」

不興げに、伯父はさう云つて、あらためて、春吉の胡坐をかいた姿を、親しみのない眼付でにらみつけた。

「いや、僕は今度は醉はして戴きたいんですが、伯父さん！」

「もう、酒はやめろ、飲むなら料理屋なりどこなり行つて、夜中になるほど飲め。」

「ですが、折角、からやつてお母つさんに御會ひしたんですしね、僕の歸休もあつたんですから、一晩位はいいでせう。まあ、さう被仰らず

て、伯父さんも、いつしよになつて綻びをわけて下さいな。――どうです。たつた一杯。」
　伶吉は、すこししつこくなつて、盃をすすめた。
「飲まねえわたらわからねえぞつたな、貴様も。」
　彼はそれから、高い鼻を、つんと上へむけて、煙草の煙を吐いた。彼の口角の中にはひつた、伯母と伶吉の母親とは、云ひ合はしたやうに顔を俯向けた。
「すんさで、貴様俺の家を潰すたと思つてるか？　この前、アメリカから歸つた當座のやうに、貴様はこの伯父を馬鹿にしに來たんだらう？――よし、俺も飲む。飲んですこし話がある！」
　伶吉は[illegible]顔を、[illegible]頭の中へ[illegible]、[illegible]伶吉の手から、銚子をひつたくると、[illegible]顔を[illegible]て、ありつたけの酒を[illegible]口の中へ流し込んだ。伶吉は、[illegible]伯父の[illegible]的な話題を待つてゐると、伯父は、はげしく咳込んで、[illegible]を出して痰を吐いた。
「[illegible]さん、もう一杯。」

と、伶吉の聲をさへぎつて、伯父は、居丈高になつた。
「つけんな！　酒はこんで澤山だ。――親子揃つて俺を侮辱しやがる。」
　ごくりと喉を鳴らしてさう云つたかと思ふと、彼は[illegible]、伶吉の方をむいて、
「俺は、お前がアメリカへ行くときの渡米費用を出したのは、俺が悪かつた。いま改めて、謝ります。」
「そりや、伯父さんから餞別は戴いたには戴いたんですけど、旅費は[illegible]さんに出して戴いたんですから……」
「なにしろ、俺の出した百圓はアメリカへ渡る旅費になつたらう？」
　伯父は、眼の縁をぼつと赧らめながら、そろそろ醉の[illegible]んだ理窟を云ひはじめた。伶吉は、またかと思つて横をむいた。

八

「俺の上から、[illegible]
[illegible]

天下に曝す。貴様のためにも、貴様のお袋のためにも、俺は、なぜ貴様なんどに百圓の金を與れたり、中學へなど通はせたかと、いまになつて後悔しとる。疊屋の餓鬼は疊屋にして置けばよかつたのだ。」
　伯父の[illegible]口調は、伶吉に、『河北新報』といふ新聞の社説を懐ひ出させた。
「そりや、伯父さんの被仰ることはわかつてゐます。――つまり、僕が、世間の奴らのやうに御恩返しが出來ないからなんでせう？　いつまでも、こんな境遇にぶらぶらしてゐて、またまた、御厄介にならうとして來たためでせう？」
「そんでねえ、貴様の性根が腐つてるからだ。」
「いいえ、金の話でせう？　ハワイへ出稼ぎに行つて百何十[illegible]やうに二千と三千とまとまつた金をもつて歸つて、土産でも小買ひにして、[illegible]歸[illegible]はなかつたもんだ、なんて世間に云はれたいためでせう。」
「[illegible]！　生意氣云ふと、毆りつける。」
　伶吉は[illegible]て、[illegible]の方へじりじりと詰め寄つた。
「よろしい、毆つてみなさい。決して御手向ひは

しません。僕も、伯父さんを對手に喧嘩したなんて云はれちや、男らしくないですからね。」

春吉は、チャブ臺の上へ、酒がむんむん云つて渦を卷いてゐるやうな、重苦しい顔を差しのべた。

「き、貴樣はツ、この伯父にいつ金を返したことがある！　この俺に厄介になつた昔を忘れて、よくもよくもけろりとして俺の家でこんな眞似が出來るな！　ふむ、俺は、俺は、今日限り、貴樣と絶縁するぞ。」

「絶縁と仰有るとツ？」

「絶縁さ、伯父でも甥でもねえのさ。さう申渡したから覺悟しろ！」

「しかし伯父さん、口では容易いが、仲々骨肉の關係は切れるもんぢやないでせうが――」

「ともかく、俺は切る。もう赤の他人だ。」

「ですが、僕も、生活に困つてるからこそ、まだ伯父さんには御恩返しが出來ないんですが、是非、僕の御恩返しが出來るまで、その御言葉はあづかつて置いて戴けませんでせうか？」

「恩を返すと返さんは、手前の勝手だ。貴樣には、全然、俺などを考へる氣はないんだから――」

から云はれた春吉は、眞赤になつて、伯父を見返した。

「そりあ、伯父さん、無理です。伯父さんは、すこしばかりの財産とか、金とかいふもの以外に、人間の價値のおわかりにならん方ですから申上げますが、僕には、そんなものはてんで眼中にないんです！　ちつとばかりの泡沫會社の株券がなんです？　次の時代にあ、そんなものは紙屑になつてるかも知れんぢやないですか！　それから報恩々々と、いやにしちくどく仰有るけれど、僕は、ここに居る母が勝手に生みつけて、貴方の手に賴んだ者の生長して今日になつたのであつて、なにも僕から甥にしてくれと申上げて約束付で生れたんぢやないではありませんか。貴方にして、自分の爲めにするところがあつてか、一時の玩弄物としてか、僕を引取つたに過ぎないと思ひます。僕は――僕は九つの時、貴方の家を飛び出したことがありました。僕の天性と思つた學問に、貴方はどれほどの同情と援助とを下すつたか？――正直を云ふと、僕には、親も伯父も親戚もないんです。僕の志すことは、たつた一つで、それがためには、足手纏ひになる家族なんてものは、どうでもいいんですよ。もつと、申しませうか？　僕は、伯父さんの前ですから、今まで默つて仰有る通りに、馬鹿になつてゐたんですが、そんなことを仰有ると、回復のつかぬことになりやしないかと思ひます。……」

伯父は、聞かぬふりをして、火箸で灰の上へなにやら文字らしいものを書いては消し、消しては書いてゐたが、春吉がここまで云ふと、からりと火箸を捨てて、血走つた眼で、彼をぢつと睨めながら、

「非國民！」

と喚つて、いきなり彼の髮を掻き撈るなり、下げた頭に、薪を割るやうな音を立てて、骨ばつた拳をつづけざまに打當てた。甥は笑ひながら、伯父の拳を受けてゐたが、そのうちに、拳の痛みよりも、悲しい氣持に襲はれて自然と、涙が滲み出て來るのを感じた。伯母が、駈け寄つて無理々々伯父を奧の間へ連れて行つた。

「まあ、なにごとが起つたんでせう？」

春吉の妻は、襦袢一枚の姿で、次ぎの間から首を出した。

「もつと御毆んなさい！　伯父さん！　伯父さんには、決して抵抗しませんから！　もつと御毆んなさい！　そんなことで參るやうな僕でもないですよ。」

春吉は、ぼろぼろと溢れ出る涙を拭ひなが

ら、狂人のやうな聲を立てた。
「あんたも、醉つてらつしやるとき、こんなこと仰有るちふことがあるもんですか！」
伯母のおろおろ聲が、伯父の體と押しあひながら奥の八疊に、寒さうにひびいた。
「よし、出る！　おい、支度をしろ。絶縁された家になんぞ、一刻もゐるもんか。」
春吉は、突然、胸のまん中を突刺したやうに憤怒に驅られて、ついと立ちあがつて、富子に命じた。
「こんな天氣に、出るも引くもあんめいッちゃや。」
母親は、あわてて春吉の手を取つて引留めた。
「なに、僕は、永久に仙臺とは用がないんだ。こんな牢獄のやうな家へ、誰が二度と足踏みをするもんか！」
云ひ捨てて、彼は、納戸の三疊へはひつた。
しばらく經つて、鞄をしつかりと背負つた富子を連れて、彼が、伯父の門口を滑り出ると、あとから、小聲で彼を呼び留める者があつたので振りむくと、雪に濡れきつた母親が、軒燈の蔭に彼を待つてゐるのだつた。彼女は、鼻にかかつた聲で、なにか、くどくどと云ひながら、無理に息子の手に五圓紙幣を一枚握らせるのだつた。
「荷物は、明日ホテルから取りによこさせます。おつかさんも、早く在へ御歸んなさい！」
春吉は、振り返りながらも、せはしく降りしきる雪が『中村醫院』と書いてある、燭力の弱い軒燈の陰影と共に、見る間に彼女の姿を呑んでしまふのを見た。
「これで完全なる非國民になつたわけだ、な……」
彼は、淋しさうにかう云つて、くらい空を振り仰いだ。

太陽の黒點

一

太田篤吉は、屑屋であつた。

勞働者に生れついた彼は、組合幹部の徽章をぶら下げたり、赤旗手の赤旗を握つたりすることが出來なかつたために、一番の職業に從事してゐた。もつとはつきり云へば、資本のない安價な商品を、三人のわかつた行商人として賣つて歩いた、といふ方が正しいかも知れない。つまり、自分の家一個の門を開く限界までに納豆を賣り、午前中は學校未滿の兒童を顧客にして飴を賣り、午後になつて、いろいろいたし儲飯の菜を賣るといふことが、それであつた。

この、屑屋の商賣は、それを商ふ方法に適手とした合理的でない小商ひにおかれなかつたが、それでも、一人の男の不自由な人間が、一日に三人を養れるに十分なほどの商法上の約束と變化はもつた。篤吉は長いことこの仕事をつづけて來た——紙屑は、買値一十五錢の十本が、計子だけ自分の持ちになつた。これは問屋で世話してくれる代りに殘品は引取らない。飴は、氣紛れな子供相手の商品なので、二十錢も仕入れると、まるまる賣れて、三十錢と儲からない。飯菜の方は、車、原料、鍋まで向ふ持ちで賣り子一枚に三十錢の、三枚以上を捌くことは不可能である。一軍の純益は五厘、とんとんに行つて、三枚四十五錢以上の純益はなかつた。そこで、彼は、朝は麁を資本にせいぜい二十錢ほどの利益を得、晝までには飴と麁を資本に二三十錢の賣り上げを見、晩は運の良くて五十錢近くの儲けを——都合、一日、約一圓弱の收入をもつて暮らしてゐたのである。

この顯微鏡で見なければ見えないやうな收入をもたらした勞働の合間には、彼は、そのために雜用の用を失つたほど、一生の習慣的になつてゐる在の家を曳摺つて古新聞の一面に瞠つてゐる家の中を絶えず歩き廻る習慣を持つてゐた。

母等の合理的な目的が、家を風を防ぐことにあつた家の大部分を保護してゐる古新聞紙は、次第に、篤吉の生涯に重大な役割を演ずることゝなつて、今は更らに合理的な第二の目的を帶びるやうになつてゐた。つまり、習慣の屋內散歩の際に、退屈しのぎに讀んだのが、いつの間にかそれを讀むことが日課になり、しまひには、それらの新聞紙は、人生の研究資料——篤吉の社會觀となつてしまつたのである。新しい新聞を讀むことの出來ない彼は、襖、障子、壁板、佛間、押入、天井の嫌ひなく貼りこくられた、三四年來の古新聞を讀んで世の中のことを知つた。

そんなわけから、篤吉の頭腦には、ヴイタミンAといふものも、勞働爭議といふことも、社會主義といふことも、あまり明瞭には系列とれてゐない、むしろエレメンタルな知識體系としてもうろうとした存在を潜んでゐた。

「治國平天下」といふミダシの下には、どうして支那の先代の王さまが、馮玉祥といふ男のために皇位を剥奪されて、一平民となつたかが書かれてあつた。さうかと思ふと、防火宣傳の映畫を見て焚火をした子供もあつた。「五年目で出獄即日また逮捕」とか「警官告發名の意味」などといふ記事は別な新聞にある、

文學の講話と略同じ程度に、彼をして人類生活の複雜なことを思はしめた。皮肉なことには、いつも細君の枕元には「誘惑される女」があり、自分の寢る場所には「生きた地獄」といふ記事があつた。

「震災のどさくさに妻を燒き殺す」とか、「不景氣に祟られて親子五人の身投げ」とか、「爭議遂に暴動化す」とか、「血に餓ゑた鼠ども」とか、「名古屋の八人斬り」とか――かういふもの凄い事件が、大小縱橫の活字で、彼の視力の達する範圍に、まるで彼一人に犯罪の祕密と記錄を託して置くかの如く潛伏してゐるのか、彼の家の構造であつた。燒けて、細かい記事の大部分は不明になつてゐたが、今では、どこの釘の傍にはどんな爭事があり、どこの壁板にはどんな學說、どんな殺人があつたか、場所と期日と出來事とか、學者の頭に術語や昆蟲の名が浮んで來るよりも速く憶ひ出せたのである。わけても、『東京朝日』の次のやうな記事は、讀むごとに、彼の胸を、古い電車の軌を辿つたときのやうに非常な興をもつて讀まずには置かなかつた。

「……小兒國有の理想が一躍かはしなくも此處に面白く現はれて來たのである。僕は將來のソギエトの小兒は總てあんな工合に養はれて行くのではないかと考へて見た。幼兒と十歲未滿の兒童と十歲以上の靑年期に入るまでの少年少女が極めて面白い工合に按配され、共同の家屋、共同の食堂、共同の庭園に樂しく生活しつつ、勞働の出來るものは養蜂、養雞、耕作又は花園の手入、編物、手工等に至る迄自分に一番趣味のあり可能性のあるものをやらせる。勞働の遊戲化は經營者の特に意を用ひた處であつて勞働は決して苦しい仕事でない、舞踏や唱歌と同じやうに人生になくてならぬ一種の享樂だといふことを道德的に說かずして實地にやらせてゐる。……資本主義の諸國家の家族制度は餘りに個人主義的（家族を單位とする、從つて相續財產を中心とする）に出來上つてゐるのであるから擴充せられた規律ある共同生活を行ふのは下手である。それに拘らず青年か一定の年齡に達すれば勞働者にせられたり兵隊にとられたりする。其處に個人主義的に教育された勞働者兵隊か共同奉仕をするのに大變な無理が出來る。從つて爲政者はどうしてもその一定的な生活を調和さすためにゴマかしの服從倫理を敎へなければならぬか、或ひは宗教を以て瞞着しなければならぬ。だからソギエト制度の將來では小兒を國有とする。國家で養ひ敎育して一人前の人格者に仕上げてやるやうにならねばならぬ……」

この記事は、續き物らしく、貼附けられてある三疊の間にも、その他家のどの隅にも『十』と『十三』章としかなく、題は「ソギエト露西亞で感じたこと」としてあつて、その下に『黑田禮二』といふ人間の名が記してあつた。恐らくそれは新聞社の通信員とでもいふ人の名前らしく思はれたが、もし、その人と何かの機會で爲吉か出遇すやうなことがあつたとすれば、彼は、その文章の一字一句まで書いた當人よりも良く諳んじてゐることによつて、黑田禮二氏を驚かすことが出來たであらう。

どうして、こんな見も知らぬ外國のことに彼が特別な感激を覺えたかといふに、その理由はきはめて簡單な左のやうな二三の生活事實にあつたのだ。

例へば、食事の際である。爲吉の家庭から飯時といふものを取去つたなら、何のために彼等が一家族を成してゐるかわからないと思はれる

ほど、食事は一家の重大な興味であつたが、その最も華かで、神聖であるべき場合に、彼と彼の妻とは、かつかつした小氣味良いほど動物的な食慾に支配され、一片でも多く[illegible]をよけいに貪らうと箸を操つて暗闘してゐる三人の子供達を、上から見おろしながら、すこぶる嘲笑的な、羨ぐましい微笑を交換するのであつた。

それから、産兒の問題である。現に、彼の妻の艶子は、人間のなさとして孕み得る責任數を超過して、十歳を頭にした三人の子供達と一人の乳呑兒と、おまけにもう一人懐妊してから五ケ月にもなるらしいのだ。

「みなな暮らしさへ立ててくれるんなら……わたしはいくら子供を産んだつて構はないんだけれど。——いやだよ、御前だけは、考へて見てもぞつとする!」

かういふ事は、ほとんど夜ごとにこの夫婦の間に繰返される、いたましい[illegible]的な行事であつた。[illegible]

た。子供を一人生むごとに彼女の高い鼻は益々高く、益々凹んで見えた。

夫には、子供の教育であつた。賢良なる國民の一人として、爲吉は子供達の普通教育に對する父としての義務は痛切に感じてゐた。しかし、實際のところ、長女たまと長男の力一は、彼の意志から通學してゐるのではなくて、學校で慈善的に通學させてくれてゐるのである。筆も紙も讀本も、みな教師が教員會議に提出した事情報告に基いて、學校の資金のうちから給與された。

この爲吉が、共同の家屋、共同の庭園、共同の食堂をさへも與へて子供を國家が育て上げてくれる場合を、羨ましい氣持で想像したのも無理のないことだらう。——しかし、悲しい哉、それは外國のことで、わが東京[illegible]の「黒田禮二氏」しか目撃してゐない邦のことであり、それも、もう貼られて三年あまりにもなる古新聞の上の事實でしかないのだ。人間には、幾分なりと新聞を讀ふ不能さへもあるのだ。

……そこで、かういふ矛盾した心理状態にある[illegible]爲吉が、更らに多くの矛盾を包含した環境——十三軒の町の中に見出されるのである。

二

東京の近郊でも、彼の棲んでゐる町ほど不思議な町はなからう。

その町といふのは、高い赭土の崖と、荒れはてた無住寺の境内とに挾まれた、恐ろしく窮屈な谷あひにあつて、戸數はずうつと前から十三軒しかなかつた。

谷のまん中には、いつも犬の糞と紙屑と石鹸水の溜つてゐる、火傷した額のやうな廣場があつて、周圍に、壁や廂を勝手な方へ突出して建て散らされてあるのが、その十三軒であつた。

この町の不思議さは、その不思議さを知らない町の人達からはじまつた。寺の境内は、その崖崩を打つた[illegible]の勾配と、[illegible]の鋭い藪や杉の密林と、墓地たちものの有つ憂鬱性とをもつて、一日の一定時間を、町から暖い日光を遮斷しただけではなく、絶えず町の近代化を脅かすことを怠らなかつた。この無住寺の正門からかけて、市電の停留場にいたるまでは、この界隈でもかなり繁華な要區なのだが、町の誰一人として、無住寺の境内を突切つて、せめて簡單な抜け道でも拵へようと思ひつくものさへない。況してや、生きて活動して、それぞれの勞働と税

金とを納めてゐる人間の住宅區域が江戸時代の古い骨骼を埋めた面積よりも遙かに狭い、と感づくものなぞは皆無であつたのである。墓地を五町も迂回した、その實、この町からは直徑四五十間の距離まで、瓦斯や水道や電話が來てゐるのに、谷あひへ追ひつめられたこの種族だけは、平氣でさういふ生活必需品を要求しようとは思はないのだ。

一方、崖の上には、太い起重機のやうな電柱が突立つてゐて、それから幾條の電線が、小さな町を宙に摑み上げるやうに、谷底の十三軒の屋根へ手を伸ばしてゐた。その崖のむかう側には、日あたりの良いなだらかな傾斜に、ラヂオを曳いた[illegible]住宅や、ピアノの鳴りひびくバンガローなども散見するが、それらは崖の下とは正反對の方向――文明の方をむいてゐるので、町とは[illegible]にも關係がない、崖には、昔からの[illegible]もなかつたし、それに、ここの住民は、[illegible]ところ[illegible]上げるやうな[illegible]もなかつたのである。

そこで、たつた一つある共同[illegible]にいつも[illegible]

[illegible]泄物の臭氣はあらゆる食物に加味し、震災以後牛小舍を建てなほして六軒に分割した鳶吉等の長屋には、永遠に牛の糞の臭が惡甘く漂つてゐた。

十三軒のうちの一軒は、町の入口のメリヤス工場であつて、煤つぽけた不眠症のガラス窓の下には、毎日十四五人の女工が、柿の蔕のやうに頭を鳩めて、どこから註文があるのか、誰も穿きさうにもないほど大きいズボンや、ダリヤ色の都腰卷などを無限に製造してゐた。工場の向ひは、鼻紙や懐爐やサックを商ふ紙細工のやうな煙草屋であつた。この二軒の入口を潛る路子に、寺の突端から折れて來る路は、全然[illegible]路といふものの性質を失つて、軍隊の[illegible]演習に踏み固められた田畔のやうに、必要のある地點へ最短距離をめがけて分岐してゐるだけで、[illegible]色の障子紙の破つてある三軒の藝者屋の[illegible]と、[illegible]向ひの、無住寺の境内へ[illegible]といふ[illegible]しの[illegible]孔を持つてゐる[illegible]といふ料理屋と、[illegible]から[illegible]を建てなほした[illegible]

[illegible]

に、いつも窓を半分開けて何かしてゐる栗山といふ男の家と、夜警の爺さんとその娘の家と、長唄の師匠なるものの家と、鳶吉と隣り合つたおちやら姐さんの家との四軒が挾まれてあつた。

これらの長屋から奥へ墓地寄りに、土盛一尺ほどの優越感を誇つてぽつんと建て離されてある平家が、或る請負師の妾をしてゐる「とんぼ」姐さんの家であつた。メリヤス工場、煙草屋、三軒の藝者屋、あいまいな料理屋、六軒長屋、一軒のしもたや――總じて十三軒。このほかに、鳶吉の長屋と隣つて、崖の下に設けられた鶏小舍を除いては、[illegible]物といふものは[illegible]になかつた。

この統計が示すとほり、崖の下の町は、藝者屋町としてはあまりにみすぼらしく、それかと云つて、貧民窟にしては地價や家賃の高過ぎる謂はば、そのどちらよりも劣つてゐる、最下級の藝者屋町――淫賣窟であつたのである。

この淫賣窟で、實際に[illegible]事してゐたのは、[illegible]の女[illegible]と[illegible]者、三軒の藝者屋の女[illegible]七八人、それに、[illegible]

[illegible]あつた。そのほかの[illegible]には、この[illegible]し

い婆さん、若者達の勢力圏内に、辛うじて自分達だけの職業を固守することによつて、その存在を認められるに過ぎなかつた。この町でも、やはり数は勢力であつた。いつも窓を半分開けて何かしてゐる栄由といふ男は、ときどき外へ出て行つては、なにくく降つてはらつて帰つた。夜番の爺さんは夜になるとこつそりほかの町へ柝を打ちに出た。鶯吉は鶯吉で、彼獨自の生活方法があり、メリヤス工場は無限に同じ型の猿股とズボンを編み出してゐたのである。

この町の人達の特色を挙げるとなると、私達は何を措いても、先づ彼等の無責任と利己主義とを挙げねばなるまい。その一つの例は、梅雨の流し元にある腐敗物から涌み出る、ぬるぬるしたどぶみが、いつも共同井戸から廣場へかけて、たゞ野良猫や掃除人夫の散らかしたままになつてゐるのに、つい眼と鼻の近間に、自分の家の廊下を半日かかりで磨いてゐる主婦が、一向に魚の骨や竹の皮や鶏の屑については懸念しないことである。それから、共同端を水源地として鶯吉の家からしこの溜桶へ流れる仕組みになつてゐる、下管を經過した溝渠であるが、これには、いつも長屋中の使ひ水があふれてこの小さな溝水の泥濘した溝渠には、飯粒、人間の毛、魚の頭、大根の尻尾、紙葉のきれなどといふやうな汚い廃棄物が、なか長いあひだに集き出あられたままになつたり、断腸の死体と同じ色に腐つたりしてゐても、誰一人としてそれを持ち去らうと試みた者はない。土管はところどころ折ぐになつて、そこから滲み出した汚水は、地面を腐触して床下に侵入し、息の塞りさうな臭氣の中にあらゆる種類の黴けらを培養してゐるのである。次に、この町のたつた一つの共有地とも云ふべき廣場であるが、そこへ立てかけられた高低十組の物干柱には、恥も外聞もなく町のどこからでも見よがしのつくやうに、一見眉をひそめさせるやうな色彩の不潔な、露骨に隣り合はせた、、、、や、道化じみた男の、、などが緑日の店へ高々と陳列される。それから、この物干柱に囲まれた廣場には、雨が降らないときは、どこから集まるともなく、あらゆる種類の子供達が、朝から晩まで様々の蟻よりも騒々しくむらがり立つてゐる。それらの子供達は、ただに廣場を排泄物や紙屑などで穢すだけではなく、彼等獨特の實社會の模倣を行ひ、泥棒ごつこ、戦争ごつこ、探偵ごつこ、あんたこ、賭け事、喧嘩ごつこにいたるまで、ことごとく人間の世の汚なさを演じつくし、その上に、内輪もめで家の者や隣人の軒下から大声で悪態をつきあふのである。彼等は仲間うちで、めいめいの縄張を奥張しあふやうな道徳を尊重し、隠されたものは猫の物でも奪ひ合つて、各自の奥や腹の廊下へ運び込んで分配し合ふ。警察権に見捨てられたやうなこの町では、深夜が夜の明けまでも、男女の痴話喧嘩があらうと、酔漢のごたくさがあらうと、三味線を鳴らさうと花札を引かうと、絶對にそのうちうちの勝手であつた。もちろん、刑事は巧みにさういふ時間以外のときしか、この町へ入つて来なかつた。師匠達の掻き鳴らす三味線や、料理屋藝者屋の亂痴氣騒ぎや、子供達の不斷の喧騒などは、崖と寺の境内とに三方を塞がれたこの町に反響し合つて、いつも何かの騒々しい取引に聲を張りあげたり、どうにかして人の注意を惹かうとして一手當り次第に器物を鳴らしたりしてゐる、場末の市場のやうな騒がしさを與へた。

どんなに長屋の亜鉛屋根が破損し、排水溝が塞がらうと、どんなに危険なガス管が廣場に散らばつてゐようと、どれほど結構屋の前に、、、、紙が汚れてゐようと、この町の女達から、化粧の本能を奪ひ去ることは出来

なかつた。だが、化粧といふことは、この町では衛生と婦人美を無視した、文字通り他人を一時的におさむく意味の化粧に過ぎなかつた。それは、大概の場合、錢湯で三日前に結つた髮へ更らに臭い油を加けることであり、頸から上だけを白く、あまりにも白く塗り立て、脂ぎつた足や、まつ黑な爪の變化した手は、全く自分と關係のない誰かの肉體でもあるかのやうに、自然のままに放置してゐる種類の美容術であつた。それと同樣に、この女達は、半襟と上衣一枚だけは比較的高價な物を着てゐたが、襦袢腰卷足袋履物などは、ほとんど實用性をさへ失ひかけた品物で間に合はせた。同じことが、彼等の會話、食物、流行、支出收入、心理生活の、すべてにも行亙つてゐた。そこで、性質上、清潔で派手であるべきこの町から、いろいろな汚らしい裏面が暴露した。――桔梗屋の二階には梅毒三期の瀕死の[illegible]とも親しい毎日女將に、、、、――死ぬのを待たれてゐた。

梅毒に抱への秀きちといふ藝妓は、何かの醜聞のために、決して電燈をともしては、、、、しなかつた。中村屋の女將は、首に出來てゐるぐりぐりを除かうとして年中半巾を巻いてゐた。[illegible]に、女達の不評判の祟つた[illegible]として、とんぼ姐さんの息子は癡呆症で、鰐口のやうな唇から留度なく涎を流してゐた。どこから來るのか、新しい田舍女が來たと思ふと、半月ほどで忽ち町の化粧法を覺え込み、眼藥を買つたり、洗滌劑を入れた罐を下げて病院通ひをしたりした。――

太田爲吉は、この十三軒の町を人間の創作し得る最極限度の地獄だと思つてゐた。しかし、人間は、どんな地獄の底に於いても何等かの方法で經濟生活を營んでゐるものだ。爲吉と彼の一家は、この地獄のどんづまりの牛小舍を建てなほした長屋に、一年半以上もの家賃の滯納を來してゐたのである。――私達は、そこで、爲吉のことと前後して、崖の下の鶏小舍のことを語りたい。それには、どこの町にもある鶏小舍といふものでさへも、この町では一つの不思議な存在であるといふ事實を、私達は見逃したくはないのだ。

第一、この小舍は爲吉の、三疊のつい窓の下にあつた。

三

その鶏小舍といふのは、何かの陰慘な大病院で、一息に創り上げられたやうな崖の二階へ、崖ゐぼろな亞鉛板と、姫婦のやうにたるみきつた金網とを結びつけ、單に家禽の脱出を防ぐといふだけの原始目的をもつて設けられた小舍で、それの創造主は、その小舍のやうに頭の單純な、爲吉とは壁一重隣りの、年增藝妓のおちやら姐さんであつた。

それが出來あがつた當座は、金網も亞鉛も新しく、姐さんの評判もよかつた。

「……あれがうまく行けあ、下手な情人など持たんでもいいわけだからな」――

彼女のだらしなさを知り拔いてゐる爲吉でさへもその當時は隣家へとどかぬほどの聲でから艶子へ語つたものであつた。もちろん、からいふ利殖の方法が、突如、町の傳統を破つておちやら姐さんの頭腦から發明されたについての驚嘆の裏には、この町の反面として、彼女が黑ん坊のやうに黑く、年配も惡あがきをし出す頃合ひの年增である縁に、どうも男に縁からすくて、いつも旦那に逃げられる女なのだから……といふ意味も潜めてあつた。

鶏はレグホンといふ種類であつた。髭でも生やしてゐさうな、逞しい一羽の雄鶏と、白い臆病な三羽の雌鶏――營利事業となるとどうしても十羽もなければいけない、それらが

輸入されてから、町の景氣がぐつと引立つやうに見えた。關係のないやうなことだつたが、爲吉の家の夫婦喧嘩でさへも、重心の置き處が、鷄小舍の方へ幾分移つて行つた。家禽といふものが、どんなに人間の社會へ貢獻するところの多いものであるかは、飼主の姐さんが急に早起きをするやうになつたり、サックを賣る煙草屋に「うみたての卵あり〼」と書いて卵の所在地とは反對の方を指さしてゐる指標が出たり、一栫鉢屋へ御用を聞きに來る鳥屋が鷄卵の値下げを斷行したりするやうな、有機的な變化よりも、むしろ、町に漂はすところの牧歌的な效果にあつたといふべきであらう。飽食した雄鷄が、鷄冠を振り立てながら、日ねもす蓄音機の西洋音樂のやうな音吐で、騷々しい甍の下の町へ、豐饒と幸福の歌を唄ひかける――それを聞いてゐて、心から伸び伸びとする村落的情緒にそそられぬものがない。更らに又、雌鷄のくらッく、くらッく、こう、こう、といふ家族的な聲を聞いてゐると何れの懷思からどんな無頼漢でも自分を生んだ母親を懷ひ出さずにはゐられない。町が町であつただけにかういふ微妙なニュアンスはむしろ否むべくもない錯誤としか思はれなかつたが、おそらく姐さん亭主へも淫賣業者以外の何かの家庭的な本能を持つてゐることを證明しただけでも、それ相應の價値があつたかも知れない。『うみたての卵』と小さな看板を揮毫したお禮として、爲吉一家が大小四つの卵を寄與され、それらを四日がかりで食べたことなども、恐らくはその餘德の一つであらう。

二三ケ月のうちに、幸福はレグホンの一夫三妻を見舞ひ、小舍には眞綿の團塊のやうにふくふくした、步行するのが不思議に思はれたほど玩具の雛つ子に似た、七羽の生きた小さな鷄が姿をあらはした。雛つ子のどれがどの母親の直系であるかは判明しなかつたが、いづれも兩親の茶褐に白まだらを遺傳してゐて、鷄としての立派な將來が彼等に約束されてゐた。それらを孵すまでの姐さんの苦心と、孵し終へてからの助産婦的雄辯とは、最も良く爲吉夫婦によつて耐へ忍ばれた。彼女は留度なく話すのである、まるで話してしまはないと忘れてしまふ惧れを感じてゐるやうに。――もちろん、泥水稼業にはうんざりしてゐた。この七羽の雛つ子が七七の四十九羽に殖えて見なさい、大小五十二羽の鷄を引率して、お天道さまがどこから上つてどこへ落ちるか見定めのつくやうな原つぱの一軒屋を借りなきあならぬ、さうなりや差し向き爲吉さんに小舍の掃除やら何かをお願ひして、毎日オムレツにチキンカツだけ食べてゐられる、――かういふ話に聞き惚れてゐると、[illegible]子の洗濯石鹼がひとりでに盥の水へ溶けてしまふのであつた。

しかし、鷄の運命といふものは、人間が鳥獸の一部を家畜化して以來、人間の社會組織と密接な關係のあることは、おちやら姐さん以外の大概の人が知つてゐる事實であつた。雛つ子が生れて、七七四十九羽どころか、野良猫のために二羽誘拐された頃から、何といふわけもなくおちやら姐さんの本職の方が揮はなくなつてしまつた。それには世の中全體が幾分不景氣になつたといふこともある。現に、爲吉でさへも毎朝納豆が六本しか賣れなくなつてゐた。それにしても、姐さんがあまりあけすけと泥水稼業を呪つたことが、檢番の方へひびいたといふこともあつたらしい。さうなると彼女もべんべんと鷄ばかり可愛がつては居られなくなつた。姐さんが躍起となつて稼ぎ出してから今度は、ほんたうに世の中の方で不景氣になり出した。世の中が不景氣になるといふことは、町の女達にとつては軒の角を曲つて二三町先きの檢番から形式だけにも來る迎ひの者が來な

くなるといふ現象以外に何もないのであるが、それが、彼女達には、検番といふ制度が世の中を不景氣にしてゐるとしか思へないのである。前から、検番といふ制度に、不自由と不經濟を感じてゐたじまへの女達や、そのためにいつも血税を絞られてゐた連中は、一途に、彼女達に小遣錢にさへもつましくならせてゐたものは検番であるといふことを觸れまはつた。そして、必然の結果として町には「、、、こみ」が殖えた。

「梅鉢」でも、師匠の家でも、桔梗屋でも、無断で女達が、、取つた。おちやら姐さんでさへも、町の外の安待合と結託して、ひそかに検番の方は迂回して裏道から通つた。待合で都合の悪いときには、構造の點に於いてそれと甲乙のない自宅へ大ぴらに、、連れ込んだ。爲吉の一家に皮肉な闘着が起つたのはその時分からである。長屋は、同じ棟つづきであつたところから、どこかの重畢が、、の經濟力を超過した場合には、、、お遠慮なく周圍に波及した。爲吉が、、、、、、、、、、、夜がおそくなつた。それと同時に、艶子の體には、妙に良人の人格、存在をすらも侮蔑するやうな表情が見えた。おそらく姐さんの方では、大部分は、ての上の亂行であつたとしても壁一重隔てた自由勞働者の家族には、、、最も深刻な問題が闘はれつつあつたのである。

爲吉は、竈を恨んだ。そのむかうにゐる黒ん坊のやうな年増藝妓を恨んだ。牛小舎を分割して貸す大家を恨んだ。

そのうちに、多産的な艶子が懐胎した。爲吉は失望した。彼は人生を呪つた。

町の女達の非公式振りがあまりにはけしかつたので、土地の三業組合から嚴重な抗議が出た。それにしても、場末の三業組合の勢力をもつてしては、不景氣といふ對手は少し大き過ぎた。組合よりも直接に、女達は不景氣の支配下にあつた。かういふ町の狀態の下で、鷄はぱつたり卵を生まなくなつた。彼等は單純な生物であつただけ、人間の女よりも食物と生理力との相關現象をより直接にあらはした。姐さんは打ちつづく飢餓と胃痿と貧乏とでろくにいゝだけ、野菜物は愚か水さへもあてがはなかつた。艶子と四つの子とは、長屋の溝板を傳はる人間の迷言に食餌をあてて金網の目へ突貫した。しかし、大抵の場合それは普通だけに終つた。たまに、爲吉などが近づいて見ると、鷄でも、は、首を一度も内方へ向けていぢらしい神経の手に食物があるかどうかを確めるのであつた。

彼は、一種の義憤を感じた。

「鷄を――あんたはどうするつもりですかね？　あれぢや、ひぼしになつちまひますぜ。」

彼は、二三度、午後になつてもまだ眠つてゐる姐さんを起した。姐さんはその都度何とかしてくれと云つて、云ひわけばかりに、爲吉に小錢を渡した。見るに見かねて、或る日、爲吉は「梅鉢」へ相談しに行つた。そして、その頃から「梅鉢」の殘り物や小糠などを、艶子が鷄小舎へ運んで行つてやることに定められた。

「今朝は卵を生まなかつて？――」

二三日經つとそんなことを姐さんか、艶子に訊ねた。聞き咎めに爲吉は堪らなくなつてから頭から怒鳴りつけた。

「卵を見たけりや、姐さん朝早く起きをなけりや駄目ですよ！」

「それがちつとも生まないんですよ、この頃は。」

爲吉の妻が傍から、自分のせゐでもあるかのやうに釈明した。

「一體よりも、此女の方が早く生むかも知れませんよ――お蔭さまで！」

「……あら！」

姐さんは顔の筋肉を螺旋形に歪めて、勝手元から家の中へ姿を消した。

かう云つた狀態が、しばらくつづいた。そのうちに、或る騷々しい晩、姐さんはどんな理由からか、狐のやうな、金縁眼鏡をかけて、頭髮をまん中から分けた、にやけた、若い男を長屋へ引つ張り込んでしまつた。その若い男は、夜が明けても、亦その次の日が暮れても、一向に長屋から去らうとする風がなかつた。

「なんだい、あのにきび野郎は？」

「朝つぱらから、二人で呑んでやがる。いい氣なもんさね。」

「世話はねえ、黄鷄は自分持ちと來てゐる――。」

――ともかく、やーな奴さ。

この町には、ほかの完備した自治體のやうな表向きの寄合機關はなかつたが、[illegible]へまはつては、やはり實際上、他人の私行所有權をも批判する無形の評議會があつて、その決議によると、若い男は[illegible]の洋食屋のコックであるらしいといふことになつた。その傍證的な推定として[illegible]に夥しい鷄の羽毛が散亂し、鷄小舍の鷄が三羽減つてゐたといふ事實が指摘された。それ[illegible]、もう二羽だけ姿を消したときにはそこにさまざまな物議が湧かざるを得なかつた。第一に、默つてゐなかつたのは爲吉であつた。――何のために、妻が料理屋の流し元から汚い物を運んだり、水を掬んだり、鷄舍を掃除したりして鷄を養つてやるのか？ あの狐のやうな若い男と年増女の酒盛の肴を提供するためか？ 人を馬鹿にするな！――そこへ狡猾な『梅鉢』の主婦が妥協案として、鷄を全部買收してしまはうと云ひ出した。しかし、その値段が法外な安値であつたものか、姐さんは殆んど喧嘩腰で、そんなに他人の鷄についてやきもきしないでも投つといておくれと云ひ切つた。

さうなると、意地にも鷄の世話をするものがなくなつた。ときたま狐のやうな若い男が生米や菜などを[illegible]いたりする樣子は見えたが、小舍はまるで投り放しであつたところから、惡食に下痢した鷄の排泄物が殘滓と[illegible]けのケーキのやうに堆積して、その上へ、頭を拔かした病人のやうな鷄がへたり坐り込んでゐることは珍らしくなかつた。間もなく、二羽の鷄が小舍から見えなくなつて、更に下の[illegible]屋の[illegible]の中へ、姿をあらはしたといふ噂が、眼の鋭い子供達によつて報告された。小舍に殘つた三羽は、みな羽虱に襲はれて、體じゆうを驅け廻る痒痛に怺へかね、互ひに咬み合つたり金網へ體を擦りつけたりするので、[illegible]のやうに赤剝けのした皮膚を曝け出してゐた。特に並の美しかつた雄鷄は、すつかり脫毛して、翼と胸骨は今にもうすい被膜を突破りさうに飛び出してゐた。煙草屋からは、いつの間にか『うみたての卵』の札が取去られた。かうなると、鷄小舍は、夜となく晝となく、この町にうろうろしてゐるあらゆる陰險な動物どもによつて狙はれた。對手の落ち目を窺ふのは動物の本能でもあつたし、それにこの町の動物は、ひどく空腹であつた。その間、鷄は、泥の中から『巢守り』のガラス玉をほじくり出したり、崖の粘土や小舍に散らばつた羽根を啄いたり、己が排泄物をまで啜つたりして生きてゐた。最後に、餓ゑた、逆上した[illegible]を[illegible]り立てて、たつた一羽の[illegible]つた子を襲撃させた。[illegible]の子は一たまりもなく、臨終の痙攣を黄ろな瘦せた脚に示して斃れた。殺して見ても、さすがに、わが見の[illegible]へだけは嘴を刺さなかつた。血みどろな[illegible]を擱りながら、[illegible]がけたたましく啼きたてた。自分の行爲を恥ぢたやうな[illegible]も、[illegible]と背を併せた。

三疊の窓から、この光景を眺めてゐた爲吉は、

「くそツ！」

と叫んで、いきなりおちやら姐さんの茶の間と隣り合つた壁板へ細長い體をどしんと打ちつけた。壁のむかう側には、目ざましと茶壺とが長火鉢の上へ轉がり落ちた。男と女の金切聲に對して、彼は、壁越しに、

「鷄を見ろ！」

と罵り返した。

翌朝、廣場の隅には、又、羽根枕を毀したほどの雌鷄の白毛が散らばつてゐた。最後に生き殘つた雄鷄は、それ以來、急に老衰して中風に罹つた人間のやうに絶えず體中にかすかな痙攣を見せ、いつも白い眼を瞑つてゐるので、眠つてゐるのか死んでゐるのかわからなかつた。

しかし、たしかに生きてゐたことは事實であつた。何となれば、夜の六七時頃になると、彼は突然甦えたやうに眼を瞠いて、血を吐くやうな刻を告げたのだから。

四

この憫むべき家禽と、人間太田爲吉との間には、別に直接の有機的な關係がある筈はなかつた。

しかし、最近、爲吉は、世界で一番よく自分に似てゐるものはその中風患者のやうな、ひとりぼつちの雄鷄であるやうな氣がしてならなかつた。

客に對して物を賣つたり、問屋の番頭と話したりしてゐながら、彼は、よく自分のみすぼらしい、左の脚を曳摺つた姿を心に描いた。さういふ空想は、いちじるしく彼を臆病にするやうだつた。尤もその姿は、決して、鷄ほどにみじめなものではなかつたが、居酒屋の壁のやうに褪せた色合の袢纏に包まれ、頸に箱を吊し、草履のやうにすりへつた下駄を穿き、いつも何か口走りながら町を歩き廻つてゐる自分のどこかに、あの鷄と共通した本質的な何物かがあるやうな悲哀に打たれるのであつた。

實際のところその雄鷄よりも彼は淋しかつたのだ。ただ彼に於てはほんたうに淋しい人間のやうに、それを口に出して云はなかつただけである。

單調な一日の生活を調べて見ると、よくそれがわかつた。――長屋で高く鳴る時計と云つては長唄の御師匠さんの家の柱に一つあるだけだつた。毎朝、それが、一軒むかうから、四つ打つと、爲吉は機械のやうに、がわりと跳ね起きた。納豆は、夜前に會社から届けてくれたのを、艶子とてんでの籠へ分けて、いつでも持つて行けるやうにしてあつた。顔を洗ふと直ちにその箱を頸へぶら下げた。家を出しなに、疲れはてて腐つたやうに眠つてゐる妻を、子供達の眼を醒さぬやうに揺り起した。町へ出ると、ぽつぽつ割引電車を利用する人達が、淡い電燈の下を歩いてゐた。納豆を賣り込むのは、割引電車を利用する家庭に限つた。――職工や、安月給取りや、電車の車掌の家族。からしてものの十二町も歩いた頃には、町の表面から靄がとれて、すべての物にくつきりした光と影が浮き出し、從つて、納豆といふ商品にもあかあかと幻滅的な日光が照りつけるのである。彼は疲れて、自分の家へ歸つた。それと前後して、いつも幾らか彼よりも賣高の尠い艶子が、ほかの町から鼻を赤くして歸つて來た。子供達はまだ眠つてゐる。だが、彼等の朝飯はまだはじまるのではない。爲吉は前代な首引いた金を殘らず彼女へ渡した。渡された金と、自分の方の賣り上げとを、掌の籔の中へ大事に疊んで、艶子は白米屋へ行くのである。夫婦は町の角まで同行して、そこで別れた。爲吉の頭には、今度は商

屋で貸してくれる木の箱がぶら下つてゐた。飴屋は長い坂を昇つた先の町にあつた。箱の中では、彼のぎくしやくした歩行に伴つて、錢が兵隊の軍器のやうに鳴つた。飴屋はいつも爲吉や彼の同輩を歡迎するやうに店を開いて待つてゐた。飴屋の主人は、脂つぽい手で、品物を三本づつ一摑みにして、莫大な取引きをでもするやうに、仰山に數を讀んだ。その傍らには、牛の角のやうな器械が、ひとりでに飴を伸ばしながら廻轉してゐた。三本が原價一錢、それを、小旗の景品を添へて一本一錢づつに賣るのだ。赤い繪具をなすりつけた小旗はそくの三錢五厘であつた。坂は昇りよりも下りに倍骨が折れた。爲吉は、左右の肩で舵を取り、右脚を挺子にして、滑るやうに無限の傾斜を下へ、下へと降りるのだ。息切れがして、何かにすがりつかうとして手を差伸べる頃に、やつと平らな町通りへ降り立つてゐた。一度などはそこに待合はしたやうに、頭も髪もまつ白な婆さんが立つてゐて、

「お取り。今日は、連れ合ひの亡くなつた日だもの――。」

と呼びかけて、穴のあいた五錢白銅をくれたことがあつた。彼は、往々乞食とも見做されることがある。ソギエト共和國の子供國有政策を知つてゐる、彼が！

ほんのすこし前までは、生命のない古ぼけた屋や、迫害的な門の連續であつた町へ、今度は爲吉は全く新鮮な人生觀で眼を配るのである。この場合の心理は、野犬撲殺人が犬のゐさうな横町や露地や藻つぽい廣場などを物色してゐるのと大差はない。彼は、小さな撞木で鉦をかんかん叩いて、一種の狩獵的本能から慴くその邊を窺つた。もしこのとき、小さな顔が、町のどこかの隅からちらりとでも露はれたなら、彼は急に活氣づいて、「サノサ節」や「ストトン節」を大聲で唄つた。

「おくれ！」

「頂戴な！」

子供達は、嚴密に彼の職業と人柄を檢査したあとで、そつと手を出すのであつた。一本三厘五毛の小旗は、たしかに彼等の購買慾をそそらずには置かなかつた。二人が三人になる。爲吉は、賣り出すと、むやみに大聲ではけた歌を唄つた、卑猥な歌――十三軒の町はその學校みたやうなものであつたのだ。子供達は、赤い小旗を振りながら、工場の從業團のやうに、猥褻た歌を唄ふ男についてまはつた。新しい參加者があるごとに、子供達は獨自の宣傳で互に勸誘し合つた。飴は子供達が朝飯を終へ、最初の小遣をねだつた一時間と、晝近くとが書入れどきであつた。しかし、非常に飽きの早い彼等はいつも同じ飴屋から同じ飴を買ふことを拒否した。もし爲吉の方で、執拗に同じ區域をまはらうと主張したとすれば、彼は、

「やアい、跛の馬鹿飴い！」

「跛、跛、ここまで御出で！」

「買つてやらないよウだ！」

と云ふやうな、腹立たしい非買同盟に出遇した。いつも區域を變へる必要があつた。

飴が終ると、爲吉は、あらゆる商工業組織の篩からふるひ落されたやうなそれらの銅貨を數へながら、頭のてつぺんまで空腹を感じて家へ戻つた。家では妻が飯臺の前で待つてゐた。子供達は、遊びに出るものは出、學校へ行くものは行つてゐた。爲吉は、飴箱を長押の一番高い釘へ吊して食事にかかつた。あかるい、簡素のむかうに、ぱりぱり漬物を嚙み、騒々しく粥を啜る妻のすさまじい食慾を目撃してゐると、いつも彼は、そのあさましさと同時に、憐むべからざるものを惜んでゐる氣まづさを自覺した。

三時頃には、饐え臭い、ひやりとした製麺會社の縞だらけな土間に立つてゐた。メリケン粉と水と機械力で、長い算盤を彈いてゐる會社は社是として、一玉の饂飩から、賣子と同じく五厘しか儲けないといふ利率の均等分配を誇つてゐたが、その實、個人賣子は一晩に五十玉とは賣り得ないところを、會社は雜多な手を經て、瀑布のやうにこの機械麺を市民へ供給してゐたのだ。爲吉の藍色の手車は朝晝と同じ陰鬱な輪郭の、しかし今は黄昏の迫つた町を、縮まりのない脊のやうな鈴を鳴らして、低く遠くまでさまよつた。夜の七時頃會社の店先へ車を留めると、帳場では賣れ殘りの分を控除して、一玉につき原價一錢五厘づつを請求した。帳場で拂つたあまりは、爲吉の全收入であつた。

一日の日光を收穫すると、勞働者の慾望は先づ胃の腑の一點に集中される。彼は寺の角を曲るときから臺所に煙を立ててゐる組の音を聽いた。途中で、乞食のやうな力一と留吉とが南京袋を抱へて、薪を拾つて歩くのに出遇すこともあつた。家族のものが、悶着でもあるにはせよ、けた膝を投げながら、その頬、膝の上はないこい、ないと疊の上へ蹲まつて、一心に彼の歸りを待つてゐることもあつた。然し場末、どこかうす闇の宙間に、腑甲斐ない人生を罵倒するやうに泣きわめいてゐることもあつた。

「歸つたよ、——ほら、米代！」

もの賣り人の常として、町へ出てゐるときは、顔面筋肉の上だけでも樂天的に口輕くしようとする僞造心理から、まだ全く脱けきらぬ爲吉が、戸口でかう高らかに叫ぶと、忽ちそこには無數の小刻みな動作を經た歡聲があがつた。父、母、子供達四人——家族はここにはじめて一日の最初の會見をするのだ。しかも、父親は米代を持つてゐた！

米屋へは五六町あつた。使ひはひさ子の役である。もつと近間にも店はあつたが、遠い方では、量もよかつたし、ときどきは子供に菓子や果物などをくれた。家はひさ子の歸りを待ちあぐむ。途中でこぼすといふ憂ひもある。誰か貧乏人に掠奪されるといふこともあつた。その間、子供達は、父親の命令で、いろいろな角度に缺けた食器類を母親の手から受け取つて、飯臺の方へ運んで来る。石油罐で拵へた竈の中には、町の四方から蒐集された燃料がいつぱいにつまつてゐる。皆はひさ子の姿が見えるまでは、不安を紛らはすために、いろいろに手足を動かす。米屋から家まで何分かかるか、秒は時計がなくともちやんと時間を知つてゐた。

……ひさ子が來た。米、米が來たのだ！ 爲吉の一家は、約束したやうに臺所の竈の前へ集まる。ろくに磨がれもせぬ米が、釜の中へあけられる。その上へ點火するのは、爲吉の嚴かな役目であつた。この家では、一個一錢もするマッチを、好奇心に富んだ子供達に玩具にさせることは許されない。竈の中には杉の葉木屑、古下駄、バナナの皮、ボール紙などが不規則な火焰をあげる。それらは大部分、火にならずに家中へ黒い白い怪物となつてとぐろを卷くのだ。次男の留吉が、竈の口へ小さな手を翳してせがむ。

「ごはん、まだア？ 早くよう、母ちやん。」

すると、いつもきまりきつた教訓をもつて、長男が、弟をたしなめた。

「先きにお櫃を取つて……それから。」

櫃は末女の赤ん坊へ、母の乳代りに與へるのだ。賢子は三人目の子供から乳がぼつたり留まつてゐた。櫃が釜から抱へ取られると、次に、釜の上の當座が、一握りの米といつしよにふりかけれ、更らに鍋の一滴蘭の水が釜の中一注ぎ込まれた。それから、ゆつくり勘定するまで、爲吉は、飯場食堂で食はせる、白つぽい粥

の揃つた炊き立ての丼飯や、もつと上等な黒い横へぎつしり詰まつて、蓋を取るとぷーんと好い香りのする鰻などを想像して、食慾を刺戟した。鍋が出來上つた。母親が上澄みと下のどろところを掻きまはすのも待ちきれずに、子供達は各自の茶碗を差し出して、熱い汁を立ちながら啜つた。

一度でいいから、俺あ鰻飯で焚き立ての白い飯が食つて見たいな！——

爲吉はよくこんな贅澤を云つた。

かういふ滔滔とした熱い流動物ですらも、腹へ詰められるだけ詰めたあとには、食後の満足といふものはあつた。その満足を出來るだけ長びかせながら、爲吉は、更に想像の世界へ走らせて、毎晩のやうにソヴエト・ロシアには子供達のための共同の食堂があつたのだと考へるのである。

——かういふ日々の生活は、彼に、一種の社會觀を與へた。それは、もし彼の周りの鶏小舎の雄鶏が社會觀といふものを持つてゐたとしたなら、その社會觀を人間大にした度合と相似てゐた。爲吉には、どんな人とどんな家、どんな町を見ても、それら、彼の、商品に對する需要力であるとしか思へなかつた。そして彼自身は鶏小舎の金網の目から一握の投げる餌を待つてゐる鶏のやうに、それらの町、横町や裏通りを、いろいろな聲音で觸れまはることによつて、誰かがそれに注意を惹かれて購買力を發揮するのを待つよりほかはなかつたといふことを知つてゐた。行商人としての彼の活動範圍はつまり、鶏の活動範圍を幾十倍にか擴大した區域に過ぎないといふ事實が近頃やつとはつきりと彼の頭に萌して來たのである。

かう考へることが、鶏でなかつた爲吉に、人間的な淋しさを誘つたことは爭はれない。

五

——と、同時に、不景氣といふ大きな力は、決して、鶏小舎の中とごく小量の物質だけで均衡を保つてゐる爲吉の一家だけを、切離してゐるわけではなかつた。

それは、實際、眼に見えて、十三軒の町を、日一日と萎縮させつつあつたのだ。それは先づ、首にぐりぐりのある女將によつて經營される藝者屋、中村屋、をしてこつそり町から夜逃げさせた。時間的に考合するとそれはおそらく爲吉ん の鶏小舎に、鶏が三羽しかゐなくなつた當時の事であつた。棺桶屋、——ときは、中村屋と、三軒ならんだ藝者屋のうちの、赭土の崖へ喰ひ込むやうに建てられてあつた最後の一軒が「中村屋」である。あとから債權者の一人によつて發見された空家の中には、無數の紙屑と、鼠のやうな古い壜と、しづく一滴も出て來ない「富久娘」の空壜とが發見された。空壜は直ちにその債權者の押收するところとなつた。

藝者屋が一軒廢業したといふこと、それだけでは町へ不可抗的な不景氣が侵入したといふ事實を立證すべくあまりに根據が薄弱であるが、その際、何よりも町の人達を脅かしたことは、今まで殆んど誰一人として氣がつかなかつた、この町の地主の出現といふことである。地主といふのは坂の上の町の、仁丹のイルミネーションの眞下にある、第×××銀行といふ、妙な數字で築き上げられた名の小さな銀行であつた。銀行の支配人をしてゐる、「仁丹」の紳士のやうな男が、「中村屋」の逃亡した一週間後に三人の、この町の家主達や藝者組合の役人達と會合して、酒を呑んだり藝者をあげたりしたあげく、恰も當夜の遊興の費用を、思ひつきで、町の人達に負擔させようと試みたやうに、地代の値上げを彼等だけで申合せたのである。家主達としては既に、彼等の借家人の大部分が家

滯納をしてゐる際であり、その上地代まで値上げをされたのでは立つ瀬がなかつたので、一齊に家賃の値上げを協議した。――銀行かどうして地代を値上げし、家主がどうして家賃をせり上げたかについては、他人の私行をせんさくするに妙を得た、町の無形な評議會と雖も、はつきりした理由を突き留めることが出來なかつた。彼等は、ただぼんやりと、一中横屋のぐりぐりの出來た女將の顔を瞼へ浮べて、何か彼女の逃亡と、値上げとの間に神秘な關係があるらしいとだけ推測するよりほかはなかつた。個人々々を疑ふことが出來ても、團體とか社會とかは、仲々疑ふのに骨の折れるものであつた。

家賃は、三割増――その噂が事實となつた時には、明日の見えない窮乏者を負うたやうな貧弱な、どの家にもびの字になつた。

家賃が上がつて十日目に、長屋に住んでゐる花香の爺さんと、その養女が、町の噂の渦を巻いて現れた。家賃の問題と密接な關係がないと言へばいへないこともないといつたとも云はれてゐたのである。しかし、町の人達は、その事件があつた當日の夜、お通夜をしようとして、爺さんの家へ行くとやはりその家にも古新聞がべつたり貼つてあつた、ちやうど爺さんの死骸の頭の上に大きい字で「太陽の黒點」といふ記事があつたのを見たのであつた。何げなくその古新聞の記事を讀んで見ると、在來まで相互的に何等のつながりのないもうろうとした知識體系にしか過ぎなかつた新聞紙の上のいろいろな出來事や、事件などの間に、共通した動機があり、どこかに連絡があるものだといふ、革命的な見方が彼の頭腦に閃いたのであつた。外國の或る博士の説として、複雜な氣象的關係から、太陽の表面に迸發する黒い瓦斯性の增加と人類社會の景氣不景氣は常に重大な關係を有つ――と書いてあるのがその記事であつて、單純な爺吉をして、卽座に、その新知識を轉じて、老人と娘は、太陽の黒點によつて縊り殺されたのであるとまで結論させてしまふほど、記事はあまり良く書いてあつた。太陽の黒點――卽ち不景氣――卽ち地代家賃の値上げ――卽ち老人親子の變死――から手取早く考へたところが、誰がまちがつてないと反證を示してくれるだらう? ただ、太陽の黒點とは拘らずほんたうのところ、爺さん親子の死はすこし[illegible]、爺さんは、[illegible]曲つた、眼窩の深い、[illegible]人主義者で長屋の交際は愚か晝はめつたに井戸端へさへも姿を見せないといふ――やはり、どこか偏屈なところのある老人だつた。長いこと、長町の師匠の向う隣りに住んでゐて誰もこの老人がどの町へ柝を打ちに行くのかを見定めたものがなかつた。養女といふのは、十八九の色のあさ黒いはつきりした顔立の娘で毎朝町の角のメリヤス工場へ通つて、ズボン下と腹卷を縫つて手間を稼いだ。その娘が、家賃の値上げ以來、工場の方の都合で、何の前觸れもなく、ほかの五人の女工とともに馘首されてしまつたのである。本來、このメリヤス工場といふのも、企業的基礎のあいまいな代物にはちがひなかつた。彼女が工場へ出なくなつてから、爺さんの家には、飲酒のことや何かで何となく龜裂が入つた瀬戸物のやうな響音が娘との間に湧き立ちそれが自然と近隣へもひびくやうになつた。

この二人の死因について、町の評議會が內偵した事情を物語るとざつとこんな風な、この町らしい原因があつたのである。――老人はその頃、長町の師匠の家に、彼の出勤する時刻の前後に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、氣を腐らしてゐた。三十五六の、肥ほぼ女盛りの師匠は、毎晩のやうに、、、、

、、唄つてはその隣りのおちやら姐さんに負けぬほどの亂痴氣騷ぎをした。長屋の構造がもともと一棟の牛小舍を改築したもので、各戸が互ひに造作の一部分を共通してゐる關係から、自然と人間の模倣性をそそるやうに出來てゐたのである。傳吉の一家が窘しめられたやうな惱みが、七十近いこの夜番の爺さんを巨きい手で押へつけるやうに囚へてしまつた。それは、つまり、不景氣によつて自宅へ客を取つたお師匠さんも惡かつたし、それと同時に、不景氣によつて解雇された養女が爺さんの陶醉狀態にある間知らず識らずに彼の、、、、をそそつたといふ、不景氣が二樣に作用した結果であつた、——一體、この夜番の爺さんの家には蒲團といふものは、冬になると一着分しかなかつたのである。晝は爺さんが、その中に寢て、夜は娘がそれに代つた。ところが一夜夜番の爺さんは、柝を打ちに町へ出る代りに、娘に買はせ、、、舌を吐いて、別々な杉の木へ首を吊つてゐたのである。——かう云つて見れば、やはり、傳吉の推理法のやうに、どこかに太陽の黑點の關係がないこともなからう。

警察から檢死官や幹部が來て、一時は他殺のやうな噂も立つたが、事件は、嚴重な死體の檢案とともに人生の不可解事の中へ自然消滅を遂げた。

そこで、町の中には、貸家が二軒になつた。

この忌はしい事件はあらゆる悲劇のやうに、突然として出來して長いこと、町の人達の氣分を支配した。夕方になると、どんな子供達も寺の境內へ足踏みするものがなくなつた。人達は、はじめて、この十三軒の町を脅かしてゐる陰慘な墓地の持つ、原始的な壓迫を感ずるやうになつた。迷信深い、病弱な女中は、夜二階の窓から、偶々その木立の間をすかして見ると、拍子木を持つた爺さんがよぼよぼと墓地の勾配を降りて來るのを見たとさへ言つた。

同じ不景氣が、一種の按分比例によつて、いつも桃色の溜息の散らばつてゐる、桔梗屋にも分け前を持ち運んだのを見逃すわけには行かない。

桔梗屋は、溫室のやうな恰好をした、その癖、日受けが一番いい筈の地位にありながら、いつも小寒いやうな感じのする頭でつかちな家である。無理に二階の後方をときはの緣先まで持ち出し、强ひてメリヤス工場の窓を覗くまいとして西側をすつかり塗り潰したせゐかも知れない。その女將は、眼の飛び出た、干鰯のやうな四十女であつたが、、、、、、するときには、ひどい癇癪を起した。町の無形の評議會は、ここでも雄辯に、彼女が秘藏してゐる、、、、、、、、、、、、、、の非常識な噂を成立としてゐたが、私達はそこまで好奇心を寛くする必要はあるまい。だが、これだけは、この女將について語り得る。——彼女は、何かしら彼女だけの理由から、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、あつたとも奴といふ病人へ向けたのであつた。とも奴といふ藝者はまた二十五六の、さほど醜い女ではなかつたのだが、氣多い男のうちから、、のやうに出來てゐる、眼からは絶えず、黃ろい

、、、、、、、、を流してゐた。爲吉は、よく自分の四疊半の障子を開けなくとも、紙の破れ目から斜かひに覗かれる、「桔梗屋」の裏側の一室に、髮の脱けあがつた、眉毛のない、箆のやうな顏の彼女が、欄干につかまつて、脊髓を鋸で挽き割るやうな咳をしてゐるのを見てぞつとするのであつた。一度などはちやうど家の眞下を通りかかつて、不圖、二階の方を振り向くと日向に何等の羞恥心もなく、着物をはだけて、體の腫物の、、、、、、、、、彼女を目擊したことがあつた。そのときのとも奴は、首筋一面に、赤い天然痘のやうな腫物がふき出、青筋の立つた手首には、赤インキの斑點のやうな腫れが見え、ぺちやんこになつた顏の半分を、燒けた毛絲の屑みたやうに亂れ髮が掩うてゐた。からもわざとらしく二階から、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、で出してゐる彼女には、恐らくこの種の彼女の最下層の苦惱を通過した女でなければ味ふことの出來ぬ、虚無的な健康に對する憎み、生に對する呪詛をそのままあけすけに表現されたといふ所に價値があつたものにちがひない。——このとも奴に對する女將の態度は、この時に於いてすらも寛容であると思はれたくらゐ同情的なものだつた。それは、つい最近まで、この重態患者であるとも奴が、、、、、、、、、、、、、、あさましい事實によつても證據立てられる。事實上、彼女はとうの昔に抱への資格を剝ぎ取られ鑑札は沒收されてゐたのだが、身動きさへならぬ重態であり、それに、身内といふものの皆無な彼女が芝居に出て來る孝行娘のやうに手を合はして泣きついたので、二階の納戸へ、押込んだりして、ろくに食物もあてがはずに、警察への屆けはいい加減にして、投り放しに飼ひ殺さうと目論んだのが主婦の腹であつたらしい。彼女は自分では一度も顏を出さずに、納戸の中へ敷きつばなしの汚い床の中にとも奴を放置して、わづかに日に二回、自分の食事のあまり物を、小婢に運ばせてやつたのであつた。それが、ともすると、いろいろな事情から、平均して日に一度の食事すら滿足に納戸へは運ばれなかつたといふことになるのだ。

主婦の千代が、顳顬をぴくぴくさして、やたらに煙管で火鉢の縁を叩きながら、

「まだ、今日もくたばらないのかい？　ほんとに、なんてまあしぶといふ淫賣だらう！」

と、小婢をつかまへて口汚く罵つたりしてゐるので、臺所で洗濯をしてゐる[illegible]の耳へ入ることがあつた。しかし、とも奴は決して死ななかつた。彼女に與へられた生命力は、お伽噺のやうな女將の呪詛だけで、蠟燭の火のやうに消えるわけはなかつた。彼女は生きた。、、、、、、、、、に身の皮がこびりついても生きた。そして、この生きた死人である彼女に、環境は絶えず慘虐な惡戲をして苦しめることを忘れなかつた。

それは、納戸といふ特別な室の設備が、わづかに紙で拵へた襖といふもの一重をへだてて、、、、、、、、、、、、次室へつづいてゐたといふ、ごく簡單な家の構造から起つたことである。彼女は、毎夜のやうに、惡夢のやうな次室の現象に反感と呪ひを感じた。ことに、この淫賣窟でのどん底まで落ちた彼女達をさへも道德的に辱しめたのは、桔梗屋の[illegible]のしめ子である。しめ子は、三日置、連續的に、、、、、、、、、、、、儀式を擧行すべく餘儀なくされた。しめ子といふのは十七になつたばかりの、[illegible]、いつもつんと澄ました顏をしてゐる、主婦の氣に入りであつたが、町のむかふの料理屋の[illegible]の許嫁で、[illegible]彼は或る桔梗屋の客間[illegible]彼は下町の或[illegible]から、この果物[illegible]に來た見ず知ら

ずの嫖客へ、更らに、坂の上の呉服屋の若主人へ、それぞれ初見得としての馬鹿騒ぎをしつくしたあとで、、、、、、、、、を取つたのであつた。とも奴は三晩つづけて、、、、、、、、、、、、、、ゐた。しめ子の執つた癡態は、たしかにあまりにも詐欺的だつた。主婦の入智慧によつたものにちがひないが、、。とも奴は、三晩目には、痒く齦を噛みしめて、男といふものの他愛なさを罵り女の底知れぬ惡魔性を呪ひ呪つた。

「譃つき！――大譃つきッ！」

彼女は、怺へきれずに、三晩目にはから襖のむかうに對して叫んだ。しかし、男はぐつすり寝込んでゐたし、その聲に眼を醒ましたしめ子は、

「姐さん、何を寝呆けてるのさ。」

と大人びた聲で云つて、寝返りを打つだけだつた。

すべて、これらの事情は、町の人達の噂であつたとともに、爲吉の妻が、その家々の勝手元の掃除やら、洗濯やら、風呂の水掬みに手傳はせられた關係から、直接に見聞きしていち早く爲吉の耳へ入れた報告である。かういふ十三軒の町のい、むらな諸現象は新聞記事のやうにちやんと纒まつてはゐなかつたが、その一つびとつを突詰めて行くと、やはり、學者が不景氣の原因の一つを太陽の黒點まで持つて行くやうに、何かの大きい社會的原因に遡ることが出來たのだ。見やうによつては、十三軒の町總體ですら、一つの大きい鶏小舍であり、そこの住民はみんな半死半生の雄鶏であつたり飢ゑに苛まれて自分の子供を突き殺した雌鶏であつたりするやうに考へられぬでもなかつた。――鶏を飼はうとしたのはおちやら姐さんであつたが、さてこの人間の鶏小舍をはじめたのはどこの誰、社會の何か――そこまでは、わが善良なる爲吉にはわからなかつた。それを知つてゐる男がこの不思議な町にたつた一人あつた。彼の名は甚作、姓は栗山、彼の家の窓はいつも半分しかあいて居らず、その下で、この男は、世間の資本家を欣ばすやうな『十圓で千圓儲ける法』などいふ雜誌の記事を書いて、年中貧乏してゐたのである。

六

どうして、栗山甚作と爲吉が知り合ひになつたかは、矢張、太陽の黒點といふものの手引によつたと云つてもよからう。

或る晩、彼は、納豆屋の店員が品物を分配してくれるのを待つてゐた。冬期にさしかかつて、食物の腐る惧れがなくなると、納豆の賣れ行きが激減するので、いつそ當分のうち、納豆の方は打切らうと思ひ、その談判をしようとしてゐたのであつた。

そこへ表の戸を開けて、ものを訊く男があつたので、出て見ると納豆屋の店員とは似ても似つかぬ和つぽいまん丸な顏の男が、垂氷のやうな水洟を光らせながら、土間に立つてゐるのに出逢した。

「栗山君？――や、お宅とはちがひますかな？」

「栗山――ですか？　うちではありませんが。」

「ここは皆同番地なんですね？」

「この長屋だけはさうですよ。わかつた、貴方の尋ねてゐられるのは長屋の端から二軒目の人ですよ。顏の長い、眼鏡を掛けた、何か物を書いてゐる商賣の……」

「さうです。その男ですよ。――このならびのむかうから二軒目なんですね？」

これだけの短い會話を交した爲吉は、出て行きしなに、その男の、、、、くるぶしが凍傷したや

うに青膨れになつてゐるのを見た。大體他人の足に對して、彼は普通人以上に神經質なところがあつた。翌る朝になつて、何げなく爲吉がその長屋の前を通るといつも半分閉まつてゐるそこの窓が、からりと開いてゐて、そこからもうもうと立ちあがる烟の中に、昨晩見た圓顔の男が口笛を吹きながら廣場の隅の塵埃溜を漁つてゐる野良犬を呼んでゐるのに出遇した。栗山がこんなに早起きをすることは絶對になかつた。

「やあ、昨晩は失禮。わかりましたよ。――君は、何をしてゐるのですか？」

その男は、から狎れ狎れしく爲吉に問ひかけた。尤もはじめてこの町へ來た人間で、爲吉の頸に吊された飴箱と、彼の不恰好な跛との對照に不審を抱かないものはないのだ。

「これですか？　飴ですよ。食ふに困るので、こんな物でも賣るよりほかはありませんよ。これから問屋へ行くところです。」

爲吉は、何の特色もないその男のうす汚い顔に、強ひてほかの部分よりも多少人間並であるといふまでの、黒味の勝つた眼を讃めた。それは正直な眼であつた。爲吉は安心して話の出來る人間だと思つた。

「飴とは面白いね。でも、何かほかにないもんですか？　――馬鹿々々しいぢやありませんか？」

「ところが、駄目なんですよ。脚が惡いのでね。一度なぞは、大崎の大正電機へコイル捲きに行つたんですが、試験のときは棒立ちになつて誤魔化せても監督の奴に作業中にめつかつてね、三日目に追拂はれましたよ。――栗山さんはゐますか？」

その男が何か云はうとして内を振り返つた途端に、奥から太いがすがすした聲で、無造作に爲吉へ答へた。

「あ、居るよ。――入り給へ。君はよく働く人だね。」

家は、爲吉の家と寸分ちがはぬ構造で、破損の程度から云へばむしろこの方がひどかつた。ただ、最も爲吉の眼を駭かしたのは、この家は一面にあらゆる形の古雜誌で埋まつてゐたといふことである。古いビール箱を造りつけた机が一つ、その傍に煙草の吸殻で盛りあがつた瀬戸火鉢があり、卵の殻のやうに裂けた電燈のかさが、その二つの道具の上に舞ひ下つてゐる――目ぼしい道具と云つてはこれだけだつた。栗山は、近眼の眼鏡を掛けて、臺所で古雜誌を引裂きながら七輪の火をおこしてゐた。

「全く、感心するよ、君には。毎朝よくあんなに早く起きられるもんだね。そりやさうと、僕んとこへは、昨晩から坊主頭の嬶が來てね。これで、當分は男やもめも淋しくはないといふところさ。」

彼は、どこか東北人らしい訛りを含んだ言葉で氣輕に話しながら、ちよいちよい眼鏡越しに相手を批評的に見る癖があつた。前から爲吉には、この男にはいろいろなことが訊ねて見たい氣持があつた。しかし世の中で、何が一番爲吉をおどかしたかといふと、それは眼鏡であつた。彼は先天的に眼鏡を掛けた人間は、自分とは絶對に別な階級に屬してゐる高尚な人間だと思ひ込んでゐた。

「貴方は――一體、何をなさるんですか、御商賣は――その、文士とでもいふんですか？」

彼はやつとこれだけを上り框から臺所へむかつて云ひ掛けた。この臆病たらしい質問は、二人の男達の突放すやうな笑ひ聲で打消されてしまつた。昨夜の男は、歩く拍子に、青膨れの足で室内の雜誌類を蹴飛ばしながら、

「まあ、そんなところに蹲んでないで入り給へ。」

と云つて、火鉢の傍へ、面倒臭さうに坐つた。
爲吉は顎から手をおろした。
「栗山は、かういふ大事業家だよ。
彼は、机の上に載つてゐる大判の實業雜誌を開いて、『腕一本の資本で五萬圓儲ける法』と書いてある記事を差して見せた。そのあとで二人は又聲を揃へて笑ひ出した。
「へえ――」
爲吉は、呆氣に取られて、雜誌を手に取つた。それは、或る種の實業雜誌で、老人に讀ませるやうな大きい活字で印刷してある、政治のことや、立身譚や、地方人向きの利殖法などを書き立てたものであつた。
「君も、金儲けがしたけりやかういふ學者に相談することだよ。」
その男は、癖らしい貧乏搖ぎをしながら、横から爲吉の顏をしげしげと見戍つた。
「この雜誌には、何か太陽の黒點と不景氣の關係について書いてはありませんか?――あのお天道さまに黒い點が見えるでせう、あれと世間の不景氣とが關係あるつてことを新聞で讀みましたがね……」
爲吉は、雜誌を押返しながら、突然かう質問した。このとき、七輪を兩手に抱へながら、とつと臺所を走り出た栗山が、ちよつと眉をひそめて彼を瞶めたが、やがて、瓦斯のやうな苦笑を洩らした。
「そりあ、世の中を不景氣にするのは、太陽の黒點よりも恐ろしい奴がゐるからだよ。――そんなことを云ふ奴に限つて、太陽の黒點のやうに腹黒い奴らの手先にちがひないよ。」
「いや。栗山はね、一圓の男は、火に手を翳しながら説明した。「十圓で千圓儲ける方法だとか、日銀の金利はどうだとか、そんな大きなことばかり書いてゐる癖に、當人はいつもぴいぴいなんだよ。」
その日の午後にもう一度遊びに行つて見ると、栗山はどこかへ外出して留守であつたが、昨晩の男だけがぽつねんと障子の下に胡坐をかきながら、バットを喫つてゐた。どういふわけかこの男ほど他人を珍らしがる人間はなかつた。彼は、爲吉といふ人間を、まるで骨董商が道具を捻くり廻すやうに、方々から眺めるやうな眼付をして見るのであつた。二つ三つちよつとした話をしたあとで、いきなりその男は、爲吉の度膽を拔くやうなことを語つた。
「ね、君。君は――僕が、北海道の監獄から出て來た人間だと知つたら驚くだらうね?」
爲吉の頭は非常な速度で、自分の家の新聞紙記事を隅から隅へ捜しまはつた。世間の出來事で、そこに貼付されてないものは殆んどなかつた筈だ。
「いつ頃のことですか?」
「君は、あの米騷動を知つてますか?」
「米騷動といふと、大正……ずうつと昔のことぢやないんですか?」
「まあ、寺内内閣當時だね。大正七年さ。――もちろん、米騷動とは別なんだが、やはりあれに關聯したことで、僕は網走へ收監されたのさ。それから、八年。見給へ、僕の手足はこんなにひどくなつちまつたんだ。――しかし、まあ、お蔭で僕はあの大震災當時のどさくさは遁れたわけだがね。」
「すると、何ですか、貴方は、何か、その主義者とでも云ふ方の――?」
「まあ、そんなものかね、――つまり寺内内閣の總辭職を少しは手傳つた方かも知れんて。」
爲吉は、壁板の『東京朝日』の記事について詳しいことを尋ねて見たかつた。しかし、考へて見ると、八年も刑務所にゐた人間が、三年前の記事のことについて知つてゐる筈もないと思つたので口を緘ぢた。對手はしみじみと、何かを

思ひあたるやうに述懐した。
「だが、何だね、僕も長いこと牢獄にゐたんだから、ちつとあ娑婆へ出る日にあ世の中が善くなつてゐるかと思ふと、――變つてゐるのは、監獄のことを刑務所だなんて鹿爪らしく呼ぶことぐらゐのもんさ。それで監獄と刑務所との間に、どれほど囚人待遇法が改善されてるかといふに……へツ、いや全くあきれた世の中だよ！――俺は、考へても腹が立つよ。何のために俺達がわざわざ辛い思ひをして、ソノ犠牲になつてるのかと思ふとね。……」
「變りませんかね？――でも、世の中つて、そんなに早く善くなるものぢやないでせうが。――ひよつとしたら、惡くなる一方の、」
爲吉は、西日を受けた古障子にぼんやり眼を向けた。
「そりや、僕達が急ぎ過ぎるといふことはある。しかし、もうロシアあたりでは、民衆は成功してるんだからな。――ともかく資本主義といふものが、矛盾を持ちながら大仕掛にどしどし行きつく處まで行かうとし、惰力といふ奴でどうしても引返しがつかなくなると、世の中も不景氣になる一方さ。」
かういふ話になると、この男は奥から奥からと、蜘蛛の絲みたやうな議論を無限に抽出してくれる人物らしかつた。監獄にゐながらやはりロシアのことなんかちやんと知つてゐた！「資本主義」なんてものも、野良猫の首筋を摑まへてゐるやうに、きゆうつと押へつけて話してゐる！
障子の表面がうす暗く蔭つた。爲吉は驚きの眼をもつて、そこに圓い人間の團塊になつたと見える網走とやらを出て來た男を瞶めた。對手は、しんみりとした口調で云つた。
「君も貧乏人だね。貧乏人は何のために貧乏してるかを悟らんといかぬよ。それがはつきりわかれば、僕達に力が出て來るんだ。むが夢中で、何年何十年――一生貧乏したつて、世の中は平氣だからな。そりや、俺が、監獄へ入つて、一人で焦躁つていらいらして、早く世の中を善くしたい、一日もこの格子と壁と板の間から飛び出したいと思つて、いさ出た、自由だと思つて來て見ると、一向に俺のやつた仕事が世の中に利き目がなかつたのを見ると、左程ちがつてはしないんだ。しかしだ、しかししつかりと理論を把握して資本主義の行くべき必然な徑路を見ながら、それを一日も早く促進したいと思つてする貧乏も、、、も、ただぼんやりとする貧乏や、、とちがつて、重大な意義があるよ。……」
雲切れがしたのか、障子の下の方がほんのりと白くなつて、そこだけ掌で掬つたほどの日光が射した。腰高障子の一番下の部分に廣場の物干柱の一本が淡い影になつて泛んで出た。と、對手の男の、圓い鼻のあたりに無數の針で突ついたやうな孔があいてゐて、そこからちかちかと白つぽい太陽の光がぢかに射込んで來た。
「太陽の黑點といふのは、やはり先刻栗山さんが仰有つたやうにあまり不景氣とは關係のないもんですかね？――私は、その記事をこの隣りの夜番の爺さんの死骸の枕元に見つけたのですがね。まだよう私には腑に落ちないんです。」
爲吉がから訊ねるまでには、障子は、もとのやうにあかあかした陽を受けてゐて、對手の顎の下には、長唄の御師匠さんの襦袢らしいものさへくつきりした片袖を見せてゐた。その男は、嚙んで哺めるやうに話した。
「ははア、そんな理由かね、その太陽の黑點といふのは、――そりや君、人類が太陽系の一惑星であるところの地球の上に繁殖してるんだから、いろいろな天文學的な意味で太陽の影響を

受けてることは事實なんだ。これで、この太陽といふ奴は、」彼はかう云ひさして、からりと窓をあけた。「地球の三十三萬四千倍もある、恐ろしく大い火の玉なんだからね。つまり太陽系つていふやつの親玉なのさ、こいつの引力で地球だの火星だの月だのといふ星が、かうやつてぐるぐる一定の軌道を運轉してるんだ。この太陽の火力が鈍りあ、自然と地球の上にも人類は滅びてしまふだらう。ほかの星でも、もう太陽の火力の及ばない、その星にも自分の熱がなくなつちまつて、とても温かい血を持つた人間の想像出來ぬほどの寒さに襲はれてゐるのがいくらも空にごろごろしてるさ。さて、それだからと云つてだね、俺達はむやみに天變の何十億年か經つ後のことを今から心配して、現在の地球の上の問題を投つとくわけには行かんだらう？いや、宇宙といふものを考へりあ考へるほど俺達は人間の生命といふものを尊重しなけりやならん。そこで、人類が歴史を創めてからやつて來た馬鹿げきつた同志打ちや、國と國との小さな戰爭なんてものを、一日も早く切りあげて、協力して地球といふものの持つあらゆる力を開發して、當然いつかやつて來る大寒時代といふやうなものや、雪や暴風雨や洪水なんてものの、防備をみんなで講じなけりやならないんだ。——いきなり、突飛に、太陽の黒點が餘計に現はれたから、地球の上は一大不景況に襲はれるなんてことを云つたとしたら、それこそ藥山ぢやないが爲めにする者の宣傳にしか過ぎないんだ。人類社會に、不景況を來させるやうな仕組みがあつて、それが必らず何年目かに襲つて來るといふ事がわかつてゐる現在だね、——さういふ經濟的根據を投つといてからに、それは太陽の黒點さまの仕業ですは、ちと蟲が良過ぎるよ——そんなのは、ざらにある低級な科學的迷信だ。ともかく、不景氣はでたらめな資本主義政策によつて起るものだ。太陽の黒點、糞喰へサ！」

云ひ終つて、その男は、メリヤス工場の屋根に引つかかつてゐる太陽の表面へ、挑戰するやうな拳をぬうと突出して見せた。

七

不景氣は爲吉の場合に於ても、二元的に作用してゐた。

彼の年來の二種類の商賣が、一向に振はなかつたことが一つの現象であつたとすれば、もう一つは心の中で彼の今迄の社會觀を隙鑿からなんぞのやうに腐蝕して行つた。この二つの現象は、決して離ればなれに爲吉といふ人間を表裏から攻めたのではなくて、そのどちらが先に來るともなく、相繼いで起つた破壞作用であつた。ただ、それらの內訌を來した根本の原因は、やはり不景氣といふことにあつた。

彼は、納豆をやめるとともに、飴の方も手を引いた。ゆでだし饂飩だけはどうやら續けて行つたが、それも、成績はむらであつた。日中の間は栗山とその同居人の貝島といふ男に勵まされて、方々の工場や、商店に、職業を探しに廻つた。電車賃ぐらゐは栗山が持つてくれた。

崖の下の町から出て見ると、黴臭い、窖のやうな自分の家で考へてゐるよりも、世の中はけばけばしい眼の眩むやうな服裝をしてゐる若い女も居れば、塗り立ての椀のやうな光澤の自動車も走つてゐた。高いビルディングには、何千人といふ人間がきちんとした洋服を着て、どこか不景氣といふ風が吹くかといふやうな、何やらめいめいの仕事を忙しさうにやつてゐた。活動寫眞はどこの町にも赤い旗を立ててゐたし、電車はどれもどれも滿員だつた。誤つて銀座あたりの大通りへでも踏み込まうものなら、カフェには綺麗な女が肥つた紳士に媚びて

ゐたし、呉服屋の百貨店の窓ガラスには飛び上るほどの高價な正札をつけた雜貨や呉服が大勢の通行人の足を留めてゐた。

「俺達が、あの崖の下の町で、あんなに苦しんでゐるのに、ここはまたどうしたことだらう？」

爲吉は馬車馬のやうに跛を曳きながら、から譯り譯り歩いた。

あるときは、錆びたボイラーの捨ててある河岸を歩いて、どろどろした、漆のやうな川に水上生活をしてゐる石炭舟を見た。頑丈な五十がらみの褌面の老爺が、腹掛一枚で何處か工場へ石炭を運んでゐた。舟の屋根の上には竹竿が立ててあつて、赤ん坊の襁褓が乾してあつた。バケツの蔭から、二三人の赭い顏の健康さうな子供が笑ひ顏を出した。彼はそこにも一團の家族のあることを知つた。團欒といふものがある。彼等の晩餐の食卓は、どんなに幸福で、どんなに賑かだらう——彼は崖の下のあばら家に一生くすぶつてゐる妻子を考へた。ひさ子、力、留吉、すゑ子——彼等の將來はどうなるだらう。

しかし、世間は表面の華美なわりに、中味はちつとも富んでゐなかつた。工場といふ工場には、一枚も人員募集の札がぶら下つてはゐなかつた。職業紹介所には、いつ行つてもバラック建の事務所から人間が喰み出てゐて、中に居る人間は、背後から押し潰されても痛い顏もせずに壇の下へ詰めかけ、役人がたまに持つて來る端切れ仕事を生命賭けで奪ひ合つた。獸のやうな咆哮が、一齊に手を差し伸べた勞働者の間から湧きあがつた。どんな紹介所でも跛の男を特に必要だといふ口がある筈はなかつた。土方、仲仕、人夫、雜役夫、炊事夫、火夫、運轉手、工夫……こんな名前だけの札がずらりと並んでゐて、それらが駄目だとなると、定まりきつて「樺太行」、「北海道行」といふ札順が眼につくのである。十日もあぶれたといふ朝鮮人の勞働者などは、まるで故意に紹介所が彼をボイコットでもしてゐるやうにかんかんになつて女事務員に怒つてゐた。

一日、彼は、ある工場の罷業團が、組合旗と警官を先に立てて示威行列をして來るのに出遇した。それは折惡しく、彼が職業を求めに行からとしてゐる工場であつた。實際、ストライキの示威運動に職工の數よりも警官の方が多いのは驚くほかなかつた。それでも職工達は靜肅にぞくりぞくりと砂利道を踏んで爲吉の傍を通つて行つた。たまに突發的に嫌味を云つたり、歌を唄はうとした者は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、容赦なく檢束された。

無言で、しかし何かの充ち溢れた力に自信してゐるやうに、砂利を踏んで行く百人近くの勞働者を見てゐると、爲吉は思はず「萬歳！」と叫びたくなつた。しかし、さう叫ぶ前に、彼の眼には、抑へきれぬ熱さがこみあげて來て、意氣地のない泪がぼろぼろとこぼれ出した。彼は、顏を掩うて横町へきれ込んだ。

「俺は、世の中から捨てられてるんだな。——俺にはストライキする權利さへないんだ。崖の下の町、さうだ、あすこでは、資本主義にむかつてストライキする奴は、死ぬよりほかはないんだ！」

かういふ氣持で、方々の町から、いろいろな實社會觀を持つて歸つて見ると、彼の棲んでゐる町は、まことに腑甲斐ない、まるで生活權を否定されてゐる、乞食——社會の寄生蟲みたやうな町に見えた。嚴密に云へば、それはたしかに寄生蟲生活を營んでゐるにはちがひなかつた。そこには、一軒のメリヤス工場を除くほか、どの家も、誰も、社會の生産に關係した職業を持つてゐるものはなかつたのだ。——爲吉はその後、山上貝原の議論に、かなり感化さ

れた自分を見出してゐた。
　わづかに、勞働者や嫖客達の性慾を調節する目的だけで出來あがつてゐるあの稼業！　彼等は、それを營む事業とすることに於いて、二重にも三重にも、社會の階級爭を隱蔽しようとする目的に使はれてゐるのだ。しかも、さうした彼等自身が苦しまずにやつて行けるかといふに、不景氣になると最つ先に困るのは彼等ではなかつたか。何故？　社會のほんたうの生産に參加してゐないからだ。
　彼は、日に日に、客足のうすれて行く「梅鉢」を見た。そこの三つに撮んで出してある盛り鹽は、日によつては誰にも踏まれないことすらあつた。ときはの藝妓の金太郎といふ女は、借金を踏み倒して客の一人と驅落をした。おちやら姐さんを、蛭のやうに吸ひつくした若い男は、いつの間にかこつそりと町から逃げてしまつた。一說には食ふべき鷄がなくなつたからだといふものもあるが、それは冗談だらう。ともかく姐さんは、毎日居るのか居ないのかわからぬほどひつそりとして、冬眠期に入つた蛇のやうに出て來なかつた。町の二軒の空家は、どんなことをしても借り手がつかぬらしく火が見えるとかお化の音がするとかいふ、女達の迷信の種を生むだけだつた。とんぼ姐さんの家では、毎晩のやうに請負師の旦那が來て、毆る蹴るの大喧嘩をやつた。家の地位が一段と高いところから、その喧嘩の內容が町中にひびき渡つた。この町でなくてならぬ物賣りの一人である花屋も冬期にさしかかつたせゐか、前のやうに鈴を鳴らしてやつて來なくなつた。客かと思ふと、へんなもおりを着たり自轉車へ乘つたりして來る借金の催促人が、いつも「桔梗屋」や「梅鉢」の前を出たり入つたりした。囃子の働きも、仕事はいくらあつても、一向金にはならなかつた。一體が派手で、一本五錢の大根を買つて貰ふにも十錢のチップを切つた連中も、その大根を手控へるやうになつた。
　一夜、「梅鉢」の奧座敷に警察の手入れがあつた。車座になつて、花を引いてゐた檢番の連中や、町の女たちや、當の主婦など八人が拘引された。現場にあつた二十五圓の現金が押收された。しかし、八人が二十五圓の賭博、とはこの町らしい小賭博ではなかつたか！　いづれにしても、この町が漸く警察署の眼を惹いただけでも、そこに何かの意義があつたのかも知れない。
　町そのものが、かういふ自ら架けた自壞作用を營みつつあつた間、この町とは何等の關係もない、お上の役所の別働隊として知られてゐる一つの財團法人が、この小さないぢけた町の地理に注目してこの地域內へ新しいアパートメントを建てようといふ決議をして、內々、それぞれの關係者が交渉を進めつつあつたのである。それは、主として、時の政府が苛辣な財政政策を行つて八方塞がりになつてゐたので、人氣取り政策として勞資協調主義の、社會政策といふ美名の下に都會の家賃に窮しない程度の小市民を對手にして西洋式な共同長屋を建てる趣旨から出發した一種の非公式な官營事業であつた。
　この町がすつかり全部その財團法人によつて買收される――かういふ噂が、どの新聞が書き立てるとなく流れたと思ふと、それを一番早く知つたのは西山長作であつた。
「そんな子供騙しのやうなアパートメントを建てたところが、この不景氣が收まると思ふのかい！　それでもつて、女學生の寄宿舍みたやうな眞似をしたところが、失業して家賃の拂へない連中をどうするんだ？　アパートメントを探してゐる人間より、職業のない、めしの食へない、家族の養へない人間の方がどれほど多くゐるか知れやしないんだ。」

或る晩、二人が昂奮して話し合つてゐるところへ入つて行つた爲吉は、からいふ栗山の話を聴いて、何かしら彼の生涯にも最後の決定すべき時が近づいたやうにどきりとした。

「ぢや、何ですか、そのアパートメントを建てるために私達を追拂はうとするんですか？」

「きつとさうだよ。いくらかの涙金を出して、ここを引移れと云ふにちがひないよ。いいかね、そのとき、三十や四十の端た金に目をくれて、はいと云つて追ん出て見給へ、君の家族は差向きその翌日からどこに棲むか？　家一軒借りるには愚劣な敷金なんてものを取る惡家主が多いんだ。その涙金は、敷金にも足らぬとしたら、どこへ行くんだ！　いいかね、太田君、もしそんなことが持ち上つたら、私達は團結するんだ。そして、飽くまでもここに住んでゐる權利を主張するのさ！」

人間の居住權の主張！

と貝島は、理窟つぽくそれを云つた。

八

艶子は、栗山と監獄から出た「前科者」とを、女として憎み得る限りの憎惡をもつて取扱つた。良人が、稼業の方はそつちのけにして、毎日ろくでもない長談議に耳を傾けてゐるのは、あの二人のためではなかつたか？　勞働者に何の理窟がいるものか——あんな下らないことを議論し合つたつて、この不景氣はどうなるといふのか、四人の子供達に何を食はさうといふのか？　このままで行くなら一家はみすみす乞食でもして、野斃れ死にするよりほかはないぢやないか？——から思ひ込むと、彼女は、顔を合せるごとに、あらゆる手段をつくしても、二人から爲吉を遠ざけようと試みた。二人の社會主義者は、彼女の主觀によつて、極端に漫畫化され、怪物化されなければならなかつた。およそ人間に生れた二人の男のうちで、栗山と貝島ほどに忌はしい、醜い、意氣地なしの、陰險な惡漢はなかつたのである。それも、一人は、監獄に八年もぶち込まれてゐた囚人ではなかつたか！

艶子のこの主張は、どんなことがあつても枉げらるべくもなかつた。家計が困れば困るほど、彼女の眼の前には、世の中を嘲笑つてゐる二人の惡漢の姿が、惡魔的に膨脹して行つた。彼女の雄辯の下に、二人は飴屋の機械によつて伸ばされたり捻られたりおされたりする飴のやうに變化した。

爲吉の一家は、實際、幸福ではなかつた。米がないと云つては夫婦は喧嘩し、米が漸く買へたと云つては又喧嘩した。子供達は父親がむきになつて母親を毆るのを、學生がラグビーの試合を見物するやうに囃し立てるほど、一家の不和は平氣で昂じて行つた。爛れた傷口を觸るやうに、雙方のどちらかがたつた一言云へば、それで今にも崖崩れのありさうな喧騒を惹起すに澤山であつた。これらの荒みきつた貧乏の象徴でもあるかのやうに、まだ乳離れのしない末子は、母親の背の上でめきめきと痩せ細つて行つた。長女と長男とは、學校の先生が月に三回も呼びに來たほど學校へ出なくなつた。彼等は、貧乏によつて、ますます密接に母親の手元へひきつけられるやうに見えた。艶子は、用のないときは、子供達をぐるりと自分のまはりに坐らせて、留度のない涙とともに父親の愚物であることを教へ込んだ。

どんなに節約しても、現代の世の中で、親子六人が、一日五十錢足らずの收入では食つて行けない。しかも、そのうちの四人は、無限大の食慾を持つた、子供達である。不幸なる兩親は、自分達の食物を減らして子供達へ分けてやつた。しかし、子供達には、不景氣はなかつた

のである。彼等は、兩親を斃してしまふまでも食はうとした。その主我主義にも當然の權利はあつた。

　かういふ間にも、無慈悲な思想が、ぐんぐん爲吉の心に成長しつつあつた。それは、個人の生活、家族の生活をば冷酷に振り向きもせずに、それ自身の成長を遂げようとしてゐた。泣きついて十錢の饂飩を買つて貰つてゐる爲吉の頭に、買つてくれてゐる當人をすらも、その同情をすらも、全然賣買制度から離れた、大きい社會構成の一階級層として取扱ふやうな皮肉な氣持が自然と湧いてゐた。爲吉は、普通の社會人のさうであるやうに、決して、窘しめられてゐる現在を苦痛だとは思はなかつた代りに、その現在の延長を惧れた。どこまで自分の思想が發展し、どこまで一家の貧乏が繼續するか――その二つの線がいつどんな場所で一家の上に非常な大爆發を作つて相交錯するか。それを考へると、彼は眼が眩んで一日も先きのことを想像することが苦しかつた。そして最も惡いことには、その爆發を作ふ交錯が無限に緩漫に、日一日と延期されて行くのであつた。昨日よりも今日は、すこしだけ苦しかつた。今日よりも明日は、もうすこしだけ苦しむにちがひない。そして一年の後には手も足も出ぬほどに苦しんでゐるにちがひない。それは、すこしづつの死であつた。――

　或る晩、爲吉は、珍らしく醉つぱらつた栗山と、坂の下でばつたり出遇した。それは、浮世のどこかにクリスマスといふ賑かな催しのある夜だつた。

「やあ、今日はすこし原稿料がはひつた、一杯やらう！」

　栗山は、古洋服のポケットに、銀貨をちやらちやら鳴らして見せた。

「いや、御機嫌ですな。」爲吉は淋しさうに笑つた。「駄目ですよ、私は。これから、米を買ふので。家で餓鬼が待つてますからね。」彼は、鷄だけの食ふくだけを食ふ四人の子供達の顏を、一瞬間胸の中に思ひ泛べてゐた。

「米――？　うむ、と。他人のパンを食はざる時、菓子を食ふ勿れか。よし、米は俺が買つてやる！　米屋へ行かう！」

　栗山はかう云つて、よろめきながら米屋の前に立つた。一圓だけの二等米を、彼は、酩酊らしい聲で註文した。

　それが濟むと、無理に爲吉の手を取つて、すこし後戻りしながら、泡盛屋の縄暖簾へ無理に引張り込んだ。

「さあ、米は買つたから、ともかく一杯交際へ！」

　栗山はかう云つて小婢の注いで出した厚手のコップをかちりと爲吉のへ打合はせた。爲吉は一刻も早くこの醉漢の手から遁れる唯一の方法は、一刻も早く電氣ブランを嚥み下すことにあつたと思つたので、鼻を衝く臭氣を我慢してぐつと嚥み下した。註文は重ねられた。恐ろしい艶子の尖つた鼻が爲吉の眼にちらついた。

「さあ、私はこれで失禮します。――餓鬼があんた待つてますのでな。可哀さうです、この頃は一日一食ですからな。」

　これを默つて聽いてゐた栗山は、急に立ちあがつて、ポケットから煙草の折れ屑や、紙片といつしよくたに、七八枚の五十錢銀貨や雜多な白銅などを摑み出した。

「さあ、取れ。金をやる。」

「私はね、金は欲しいが、あんたの金を戴かうとは思ひませんですよ。」

　爲吉は泣きさうな顏をして手を振つた。

「何ッ、俺の出したものを取らねえ？　ふざけるない。俺はな、一旦やるといつた物を、自分の手へ引込めるやうな人間ぢやねえんだ。取れ、

取らないか——何だ、こんな金なんざどうせ俺だつて他人の金を貰つて來てるんだ。取れ、こんな物に未練はありやしないんだ——取れ！ようし、取らねえな、そら、持つて行け！」かう云ひ捨てて、彼はいきなり掌の中の煙草屑やら銀貨やらを、精一杯に爲吉の頸の窪を目がけて投げつけた。銀貨は、店の中の數個所に鐵砲玉のやうに鋭い音を立てて散らばつた。呆れはてた爲吉は、脇に滑つた馬のやうに平突張つて、床の上や客の椅子の下などから銀貨を拾つてやらなければならなかつた。

酒場の人達は、一齊に大聲で笑ひ出した。それが、栗山を笑つてゐるのか、爲吉を笑つてゐるのか、薄つぺらな鈍い刃物で身内のどこかを快く剜られてゐるやうな醉ひにうつとりとなつた爲吉には、よくわからなかつた。彼は、人達の無制限な笑ひのうちに、その笑ひを打消すためだけにも、栗山の金を全部拾ひあつめてやらねばならぬやうな氣がして、長いこと膝を折つて蹲まつてゐる自分を意識した。

不圖、人達の笑ひ聲が頭の上で留まつた。

「三つ番だ！」

「火事だッ。」

「どこだ、どこだ！」

「寺の背後だ。」

「あ、あの崖の下か？」

はつと思つて立ちあがつた爲吉の耳に、鮮かに半鐘の音が、一つ、二つ、三つ——性急に打撃と打撃とが重り合つて、ひびき出した。それは、萬物が限りなく騷いでゐる上に、冷靜に冴えた聲で、世の中の終末を告げてゐるやうに聞えた。

彼は、何かを瞶めてゐる風に、宙に瞠つた栗山とぱつたり顏を合せると、殆ど對手を片手で曳摺るやうに、引張つて、

「行かう。大變だ——家が燒ける！」

と云つて跛と思はれぬほどの足取りで駈け出した。

無住寺の境内を駈け拔けたときには、町のまん中には凄じい火の屛風が立つてゐた。

「火元はどこだ、どこだ？」

やつと、足元に、自分達の長屋がまだ無事で橫はつてゐるのを見ると、彼はこんな役にも立たぬことを口走つてゐる自分に氣がついた。どこではぐれたのか、栗山は、もう側にゐなかつた。

燃えてゐるのは、「桔梗屋」と「ときは」であつた。東方の崖から渦を卷いて噴きあがる煙は、火焔に反射して、谷合一圓を眞赤に照り返してゐた。火は、狹苦しい二軒の藝者屋の屋根の下から窮處に押籠められてもがいてゐる怪獸のやうに、隙さへあれば手當り次第に何にでも摑みかかりさうな勢ひで、巨大な尻尾や四肢や鬣などをあらゆる障壁へ打當てた。そこから吐き出される怪獸のいぶきは、嚇と谷底全體を煽り立てて、見る見るすべての物を火力の焦點へ吸ひ込み捲き上げずには置かないやうに見えた。酸漿のやうに脹らんだ巨大な煙の層が、何かの加減でぱつと消えて、より黑い第二の煙團に移らうとする途端に、町角やメリヤス工場の屋根に詰めよつた人間の垣が、ひらひらと猛火のむかう岸に、小さな動作を營んでゐるのが見えた。早鐘の音が、悲しげに叫ぶ人間の聲と火勢の間に、無駄な礫つぶてを投げ込んでゐるやうに、ありありと縮小されて聞えた。

「馬鹿ッ、何をしてるの、この人は！」

爲吉は、勝手元で、鬼のやうに髮を振りかぶつた艶子に、びくんとするほど呶鳴りつけられた。そこは、氣のせゐか、もうぷーんと黄な臭い匂ひが漂つてゐた。次男の留吉が、四疊半の障子に映る火を見て、ほとんど拔けさうに立ちながら泣いてゐた。

「子供はどうした？――子供は？」
艶子はそんなことに答へようともせずに、爲吉の上半身をめがけてまつ黒な恐ろしい物の團塊を、異常な力をもつて投げつけた。爲吉は、前から約束してゐたもののやうに、ぐにやりと腕の間に柔かになつたその團塊を受取ると、
「留吉ッ！ 留公ッ！」
と、四邊にむかつて叫んだ。
子供は、いつの間にか、小脇にぴつたりと寄添うてゐた。
「子供達は、お寺の本堂だよう！」
艶子の金切聲があとから追ひかけた。
「早く來い、道具なぞどうでもいいから――。」
爲吉は、花子を片手に、足袋はだしで露地をうろうろしてゐるおちやら姐さんを押しのけながら、箪笥やら鏡臺やら米櫃などの引出された間を、夢中で寺の森林へ驅けあがり、そこで、
「ひさ子！ 力一！――ひさ公ッ！」
と呼び立てた。
墓地の中は、人間でいつぱいだつた。漸く本堂の方へ潜り拔ける、と、いろいろな提灯の下に、極度に昂奮して、何をいつてゐるのか自分達でもわかるまいと思はれるやうなことをてんでに口走つてうろうろしてゐる人達の顔が、もうろうとした他界の光景のやうに見えた。どんなに聲を嗄らして叫んでも人達の聲で爲吉の呼び聲は一般の騷動の中へ溶け込むだけであつた。彼は本堂の階段の處へ驅け寄ると、小脇に抱へた留吉を卸した。右手に抱へてゐる柔かい物が蒲團であることにはじめて氣がついた。
「ここにゐるんだぞ、いいか、御父さんが歸つて來るまでぢつとしてるんだぞ！」
彼はしくしく泣いじやくつてゐる子供を、しつかと蒲團でくるんで、階段の下へ寢かした。再び長屋まで取つて歸す間、彼は無駄とは知りながらも、まだ長女と長男の名を呼びつづけた。
ばりばりと木材の燃え裂ける音の中に、彼は、かすかに赤ん坊の泣き聲を聞いたやうな氣がした。しかし、それは、ほんの瞬間の、わづかに腦皮質を掠め去つた想像にしか過ぎなくて、次の瞬間には、
「あツ、『梅鉢』へ火が廻つたな。」
と叫びながら、我が家の中へ躍り込んでゐた。
艶子は、押入から引出したごたごたした諸道具を、室内へ積み重ねたり、その一つ一つへ手を掛けて見たり、さうかと思ふと、天井の墜落するのを惧れるやうに上の方を見凝つたりしてゐた。
今度は、爲吉の罵る番だつた。
彼は一枚の蒲團を抱へると、いきなり艶子の手を握つて、もと來た道を驅け出した。良人の姿を見て、急に氣が弱つたやうに彼女は半ば曳摺られながら、口惜しさうに聲を立てて泣いた。
坂のむかうの方から、蒸氣ポンプの疾驅して來る氣はいがした。『梅鉢』の角の、町の共同井戸から掬みつくせる丈の水が掬み出されたかして、ポンプの吸引力を失つた響が喘息病みのやうにかすれて聞えた。咄嗟の間に、平和狀態が自然力の闘爭へ急動員された。あらゆる身裝の人間が、防備の部署を捨てて、火を避けながら寺の境内へ押し寄せて來た。持ち出された道具類は、途中で何かの機みに顚落すると、忽ち人間の波に押しひしがれて、何の形をも留めなかつた。
消防隊、青年團、警官などの間から、避難民は狼狽した、顚狂な聲を立てて、各自の家族の名を呼び立てた。
――あのとも奴ださうですつてね、なんて鬼

のやうな女でせう。あんなことを――出來すたんて！」

「でも、あの女は燒け死んださうですよ。」

「自分で自分の體へ火をつけたんですつてさ。こともあらうに。」

人達の間には、火元の噂が立つた。それが何となくこの町の恐ろしい祕密をあとからあとから發き立てる最初の前兆のやうにひびいた。

爲吉と雙子とは、人間の一人一人の顏へ觸つて見るやうにして子供達を搜した。

と、ばつたり本堂の石燈籠の下に、貝島と佇んでゐる二人の子供達を發見した。

「まあ、なんて馬鹿なんだらうね！」

母親は腹立たしさうに、ぴしやりひさ子の頰を毆つた。それは、同時に、子供達を發見した嬉しさの表情でもあつた。

「長屋へ火が廻つた！」

誰かがさう叫んだ

「燒けろ！　燒けろ！　燒けちまへ！」

爲吉は思はず大きい聲で云つた。

燻る煙、彼等は、仄白い日光といふものの消え失せたやうな煙の下に、すべてが灰になつた十軒の町へ降りて行つた。いつそこへ現はれたかわからぬ栗山甚作は、突然人達の前へ大きい亞鉛屋根の一部を曳摺つて來て、

「さあ、バラックだ！　早くバラックを建てよう！」

と叫んだ。

いろいろな流言蜚語のうちにも、梅毒第三期のとも奴が、我と自分の部屋に火を放つて燒死したことと、慈惠會といふ財團法人が數名の役人をこの町へ送つて、現に燒け跡を見聞してるといふ噂とが、事實となつて殘つた。

その日の午後までに、粗末な亞鉛小屋が出來あがつて、それに爲吉の一家と栗山と貝島とが、燒けた材木の前に掛けてゐた。亞鉛はまだ人達の頭の上にほてつてゐた。小舍の前には「居住權獲得同盟」といふ紙へ大書した文字が見えた。

子供達は、青年團の焚き出しで、白い飯の食べられるのを欣んだ。

力一は、崖の下から、雄鷄の燒けた死體をぶら下げて來た。――それは、もう鷄ではなく、燃えさしの木の枝と大差のないものだつた。栗山は、午後になつて歸つて來て、一同へ云つた。

「さア、これから演說會を開くんだ。あの寺の境内で！」

拵へられた男（八場）

——Tom Mooney 事件の再錄——

人物

丈輔
友三郎
ダイク（勞働運動者）
ストロング（同）
キーフア（刑事部長）
ウイリアム（刑事）
酒場の主人
柘榴鼻の爺
ドイツ女の女中
係長
ペンキ屋二人
裁判長
その他、警官、辯護士、給仕、酒場の群集、通行人、傍聽者等大勢。

時　現代

處　アメリカの都會

第一場

酒場。晝。電氣がともつてゐる。

舞臺斜めにバアが設けられてある。大勢の群集がその前でビールやウイスキーを飲みながら、騒々しく談笑してゐる。バアのうしろに、酒場の主人が忙しさうに立ち働く姿。その頭上に午後一時五十分を指さした大時計が動いてゐる。酒場の奥から獣的なジャッヅ・バンドの騒音が群集を打ちのめすやうに響いて來る。日本人、丈輔、ひとり外國人の間に立つてうろうろしてゐる。

丈輔。（ポケットの金を探り出し）ええいッ——ゴソデム！　八仙しかありあしない。ま、飲むか！（バアへ向ひ）ビーアを呉れ給へ。

酒場の主人。ビーアと云つたね？

丈輔。イヤップ！（ビールのコップ受取る）

キーフア。（ウイリアムと共に突然丈輔を押退けるやうにして入り來り、何かの重い手鞄は足元へ置きながら）おい、ウイスキーをくれないか？　それから、葉卷もね。

ウイリアム。（稍低聲に）——その別嬪は、かっきり二時十分になつてるのかい？

キーフア。あ、二時十分が一秒たりとも狂つちやいけねえのさ。手筈はちあんときまつてるんだから、お互ひに飲み過ぎないやうにしないと險呑だぜ。

（丈輔隅の方からサンドウイッチを持ち來り、頰張りながらバアへ手をのばして自分のコップを取る。何氣なく二人の會話に耳を傾くる樣子）

ウイリアム。仕掛仕事ぢあ俺もちよいちよい君の厄介になるね。（ウイスキーのコップをかち合せ）ぢや、グッド・ラック！

キーフア。グッド・ラック！（乾す）おい、ウイスキーをもう二つ！

ウイリアム。聽けあ、トラストの親玉から五十

萬弗のティップが出るんださうぢやないか？

キーファ。マッカッシイの親方あ、こんだぎゆうぎゆう云はされて苦しんでるんで、さすがの握り屋も出すことになつたよ。（五本の指をひろげて見せる）

ウイリアム。二時十分だつけな？　俺あ、何だかこの足元の赤ん坊が、今にも大聲で泣き出しさうな氣がしてならないよ。（片足にて鞄を指し示す）

キーファ。（慌てて仰山に對手の足を摑む　よせよ！――君は、相變らず向う見ずな男だな？　まあ、飮まう。（時計を見上げながら飮む）

柘榴鼻の爺。（客から客へと粘りつこく纏り歩きながら、瑞と丈輔に行き會ふ）よう、こりあ珍らしい。――ジ、ジャップ先生で御座るな。（酔つてゐる）滿堂の酒呑み及び紳士諸君よ、諸君が、茲に發見せられるのは、名にし負ふ東洋の君子道の名人ジャップと御座い。彼等黄色怜悧なる猿と人間との混血兒は、頗る侵略的にして、日露戰爭に於て巨大なる熊ロシアを倒して以來、此の酒場のビーアの樽をこぼしたやうにアメリカ内地に御入來になり、ジュウジュッと稱する妙な術を以て我々ヤンキーを倒し、いつも國事探――いや、その、まあ、こんな事を云つたところが、（丈輔の胸を叩く）この先生には一向珍糞漢糞にはちげえねえんですがな――

丈輔。（ビールをぐつと乾して）やれ、やれ、もつとやつて見ろ！　俺だつてお前らの喋舌るぐらゐのヤンキー英語がわからないでどうする？（老人驚く）から見えてもな、このアメリカにあ十年近くもあまり旨くねえ珈琲を啜つてゐるんだ。いいか、君らのその偏狹な人種差別……迫害の氣持さ、それが、つい此頃まで働いてゐたペンキ屋から俺を追ひ出させたんだぞ！　俺あ癪に觸る！　俺だつてブラッシュとペンキ壺を持てあ生優しい勞働組合のペンキ職なんぞにあ負けちあゐないんだ。ペンキ塗職工の組合に入つてゐないと云つて俺は働き口を追ひ出されてしまつた、そんなら俺を組合へ入れるかと云ふに、組合ぢあ俺が日本人だから駄目だと拔かしあがる！　みんなお前のやうな人種差別待遇をするからだ！　もつと饒舌るなら、饒舌つて見ろ！　舌でなら敗けねえぞ！

柘榴鼻の爺。（恭々しく禿げちよろの山高を脱ぐ）ほほう、これは、これは。――いや、拙者、ジョウ爺、些か酩酊の加減で、こりあ一生の失敗を演じましたかな。いや、どうもミスター・ジャパニースがからも賢明であらうとは……。

群集一。ジャップ、しつかりやれ！

群集二。爺、むやみにへこたれるな！

群集三。日本人オーライだね！

群集四。まあ、喧嘩せずに一杯飮め！

キーファ。（丈輔をバアへ引き寄せ）偉い、偉い、で、君は殊のほか勞働組合が嫌ひらしいね。まあ、ウイスキーの一杯もやらんか？（酒を命ず）

ウイリアム。日本人でこんなうまい英語を饒舌るのは初めてだな、――え、君、大學へでも行つたのかね？

丈輔。（ウイスキーを飮みながら）何、勞働者ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあしませんよ。それでも、普通世間様の御話なら、まあ大抵のところは嗅ぎつけるつもりですがね。――貴方がたの最前からのお話だつて、ようく聽いてますよ。それ二時十分のフレーム・アップ仕掛仕事ね、それから、マッカッシイ・トラストの親玉が五十萬弗のティップ」でね、どうです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

ぢあありませんか？(稍醉ふ)うははは――はア！

キーフア。(急に眞劍な顏になり)お前、何か知つてるのか？

ウイリアム。貴樣、何だ？

丈輔。いいえ、私は――私は、ほんの、何も、いや、ただ貴方がたのお話もこの通り聽いて知つてると申し上げたまでなんですよ。その――その、つまり、內容ですな、お話の內容は何も知らないんです。

キーフア。(ウイリアムに眴せしながら)まあ、いい、さあ、葉卷でも吸ひ給へ。

丈輔。そりあさうと、旦那方、先刻のお話の時間もそろそろ迫つて來るぢあございませんか？

ウイリアム。ああ、うるさい奴だな！ お前の知つたこつちあないから、默つて飲むんだ！

キーフア。(手鞄を取り上げ)ビル、ぢあ、急がう。(酒場の主人に向ひ)おい、いくら？(銀貨を五六枚無造作に投り、そそくさと出て行かうとする。丈輔つかつかとあとを追ひ)

丈輔。ぢあ、グッド・バイですな。どうも御馳走さまでした。(手を差し出す)

キーフア。(腹立たしげに、握手を拒みながら)ジャップ奴！

――幕――

第二場

ロドニー・ホテル前の街角。同日、數分後。

右端にホテルの入口、建物は舞臺中央で一定の角度を持ちながら奥へ切れ込む。稍幅廣い街を隔て左端中程から奥へかけて、街の向側。そこには、店の前に古本が擴げてある。古本の前に「25」及び「50」の札が立て掛けてある。

街路燈。サイド・ウォークなど。

丈輔。(ホテルの前を逡巡勝ちに歩み來り)ゐるかな、ゐないかな？(ポケットの中から銅貨を一つ取り出し)奴が居れば名前だ。ゐなけりあ聖さ。(銅貨を指に彈きあげ、兩手を合して受け止む)名前だ！ ゐてもちよつと都合が惡いな。よし、今度は、貸すか貸さぬか、貸すなら名前。オーライ、シュート！(再び銅貨を飛ばし見る)何んだ、聖だ！ 畜生ツ、貸さねえのか？ この前から、もう七八十弗借りてるからな。――でも、俺がこんなに困つて、酒場を出ると、銅貨が三つしかない、なんて聽いたらやつぱりあいつも社會主義者だのなんのつてむづかしい本を讀んでるだけあつて、幾何か同情はしてくれるだらう。五弗でいいんだ……三弗でもいいや。今夜の宿賃が十仙、あと二弗九十仙ありあ、まあ明日明後日ぐらゐまでは支へられる。そのうちに桂庵へ通つてゐりあ、どうにかなるだらう。友三郎！ ――おい、居てくれ、貸してくれ！ マイ・ディア・トモ！ ああ少し醉つたかな。今のあの二人の奴等、一體何んだらう？ 拳鬪士みたいな凄い顏をしてやがるのと、もう一人は狐と狼の混血兒みたいな野郎だ。あんなのがゐるから、アメリカも物騷なわけだ。(古本屋の方へ歩み寄り、本の列をぼんやり眺め居る)

ダイク。(ホテル內からつかつかと歩み出づ。手に郵便物及び電報を持つ)おお――

ストロング(左端より旅行鞄を持ちて急ぎ來る)同志ダイク！

ダイク。同志ストロング、戰線はどう？

ストロング。(烈しく握手しながら)ケーブルのやうに緊張してるよ！ 久しぶりだね、本

部の連中は皆な達者か。

ダイク。鋼鐵のやうに頑丈だよ！　久しく會はなかつたが、ますます健康ぢやないか？　こちらは、いよいよマッカッシイ・トラストの爺め、悲鳴を上げて、新聞を買收してストライキについちあ一言半句も書かせやしないんだ。輿論を恐れ出したんだ。それに、聞くところによると、暴力團を列車買切りで送るさうだよ！

ストロング。ふむ、その話だがね。――まあ、立話も出來まい。俺も君の部屋でちよつと休まして貰ひたいんだが、何か用事で外出するところか？

ダイク。いや、電報を二三通、こいつだけはホテルのボーイになんぞ頼んだら早速スパイの手に渡るから、ちよつとそこまで行けあいいんだ。

（この對話の間、キーファとウイリアムの兩人、右端より旅客を装うて來かかり、ホテルの口に立ち止まつて、二人の對話に耳を傾ける）

ストロング。ぢあ、歩きながら話さうぢやないか？

ダイク。（後方をふりかへる。キーファとウイリアム、ぎよつとして、つかつかとホテル内へ入る）近頃は、どうも怪しい奴が始終このホテルに張り込んでゐるんで、うるさくて仕様がない。――行かう。（二人ホテルの壁に添うて奥へ退場）

丈輔。また、あの二人の野郎共が、――一體、今日の俺は何時になつたら彼奴らに會はずに濟むだらう？（左奥へ歩みながら）どれ、友三郎、五弗か、三弗か、――それとも機嫌がよくて、十弗貸してくれるか、もう一度銅貨を飛ばして見るか！　フリップ・ゼーア・イット・ゴース！（歩み行く）

――幕――

第三場

富豪の邸宅、地下室。同日、三四分後のこと。

灰色の天井の低い小部屋、右隅にベッド、右横に明り取りの小窓、それ等の前に一脚のテーブル、椅子二脚。左奥中に洋服その他を掛けたクロセット、その横手に形ばかりの切り爐。マントル・ピースの上に目覺時計、その傍に十一、二冊の部厚な洋書。爐の前方に小型のテーブル、その上に化粧用道具など。中央奥に、壁と同じ色のドア。ドアを開けると階上よりのセメントの段々が見える。天井に一つの電燈。

ドイツ女。（ドアを開けて）居りませんよ、ね、この通り。（電燈を點ける）

丈輔。二時十分。今頃何處へ行つたんだらう？　居ない筈はないんですがね。

ドイツ女。トモは買物に行くと云つて、お晝が濟むとすぐ出て行きましたよ。貴方は、ジョウ――ね、ミスター・ジョウでしたね。わたし知つてる。トモはすぐ歸るでせうよ。

丈輔。あんなに固く約束して置きながら失敬な奴だ。どうしても今日は會つて行かんとならんのでね。急用です――友人が死にかかつてゐる、嘘ぢやありません。僕、歸るまで待つてゐよう。構はない？――いいでせう？　友三郎君のたつた一人の親友の僕だもの。

ドイツ女。今日は、御主人も御留守なのでね。いつも休日は木曜日ときまつてゐるんだけど――わかつた、わかつた、ね、ジョウ、貴方、トモに近頃いい女でも出來たんぢやないかしら？　知らない？

丈輔。さあ、何んしろ友三郎は、あの通りな堅人で、道樂は社會主義の本を讀むことばつかり。それでなけれあ、新聞の切抜きさ。いつ來て見たつてあの男が新聞の切抜きをしてゐないことはないんだからね。――まさか、情婦でもあるまいぜ。第一、貴女も知つてるとほり、あの男つぷりではね――あははは!

ドイツ女。それあ、トモより、貴方の方が好い男だわよ。

丈輔。そんなに媚てたつてアイスクリームなんぞは奢りませんよ。兎も角、待つてゐるとしよう。まあ、こつちへ入り給へ。一寸接吻して上げようか?

ドイツ女。嫌だよ、この人は! わたし、貴方、紳士だと思つてゐたのに!(ドアより突ひながら逃げ去る)

(丈輔その邊を忍び足にて見廻す。と、この刹那、突然全都會を震憾せしむるやうな大音響が起り、ベッドの上の窓硝子、粉々に碎けて落ち來る。丈輔立ち竦む)

ドイツ女。(いきなりドアを開いて、蒼い顏を出す)何んです?

丈輔、地震かね、それとも、あ、わかつた、貴女がキッスさせないから神樣が怒つたんだよ。

ドイツ女。冗談云ふもんぢやないわ。地下鐵の工事ですよ。きつと土を掘るのにダイナマイトを使ひ過ぎたんだわ。

丈輔。ふむ――ダイナマイト。

ドイツ女。あれ、あんなに窓が毀れて。こりや大變ね、わたし二階へ行つて見なくちあ。(去る)

丈輔。……ダイナマイト――爆彈のことか。ああ、煙草が吸ひたくなつた。何處かに煙草がないかなあ? あの頑固屋の友三郎だから、煙草なんざあ間違つたつて置いときあしないにちがひないんだが。(テーブルやらマントル・ピース上、化粧臺のすべてを探す。明り取りの窓のそとに群集の駈けて行く跫音)

丈輔クロセットの友三郎の洋服を取り出し、陰險な眼付にてポケットの一つ一つを指にて探る)切抜きだ! 何んだ、これあ?――レーキ炭坑のストライキいよいよ實彈戰に入る」か! 社會主義新聞の附景氣かな! 逆さにふつても袂糞さへ出て來やしない。一體全體、山口友三郎が煙草を飲んでいかんといふ理窟は何處の社會主義が發明したんだ? その友三郎の友人の小山丈輔さんが、友三郎の洋服を逆さにして見ても五十仙銀貨一つ轉がり出ないといふ理窟は、何處の共産主義が發明したんだ? 俺は斷言する。――この山口友三郎なるものは、畢竟、社會主義の蟲だね! 彼は、世の中に社會主義といふ字の書いてある本と新聞なら、煙草の代りに、酒の代りに、いや、食物の代りに、喰つてゐてさへも常用するんだからな。――(洋服を元へ戻し終つて椅子へ掛く)あのドイツ女もゐなくなつた。淋しいな。……遲いな。畜生! 二時十五分! ええ、かうやつて、煙草に餓ゑ、食物に窮し、宿賃に差支へ、ポケットにあるのはわづかに三つのペニー、失業すること茲に一ケ月――完全なる悲劇の主人公である小山丈輔が、羊の肉に食ひ飽きた、富豪の屋敷のコック番、社會主義者の山口友三郎をべんべんとして待つてゐたところが、丈輔の社會的窮乏は救はれず、さりとて友三郎の社會主義改革意志は充實されるわけでもなし。はてな――何か、かう目ぼしい金目な物はこの邊に散在して居らんかな? ふむと、かう――洋服は持つて行くに目立つし、まさか二着の服は着て出られぬ。あつた! その部厚い洋書! 何んだ、ええ

と「カール・マルクス――資本論」か！ 旨い、三冊物だ。――あの古本屋！ それから友三郎に會はぬやうに、一直線に下町へ取つて歸す。あとは支那街のスウちやんか？ 占め、占め！ （マントル・ピースより赤い三冊の洋書を拔き取る）待てよ、いくら親友の間でも、一筆啓上とやつて置かうかい。（テーブルの上のペンとインキにて走り書きす）わが親愛なる友三郎よ、失業一ケ月にしてアイ・ム・オール・ダンかね。このハード・ラックを如何せんやだ。昔日の誼みに應じて、最後のヘルプを君に乞ふべく來りしが、矢も楯もたまらずに公然と茲に三册のマルクスを暫時拜借す。もともと、社會主義の原理たるや貧しき者を助くるに在りと君より聞くこと久し、マルクスも以て瞑すべしだね。友よ、恨むな、景氣が出たら金は返す。「資本論」は俺の生活の資本になるのだ。安心して可なりさ。親愛なるジョンより。……ヘン、どんなもんだい。必要は發明の母なりつてな、俺もこんな名文が書けるとは思はなかつた。ぢあ、グッド・バイ！ （片手に部屋一杯に向つて接吻を投げかけ）さてよ、周邊の形勢はどうだや？ （ドアを開けて外部を覗ふ）占め、占め！ （去るに臨みドアから首だけを出して）でも、社會主義者からマルクスを盜むなんて、世の中はよつぽど皮肉に出來てゐやがらア。ひヒヒヒ――。

――幕――

第四場

料理屋のカウンター。翌る朝。

安料理屋の汚らしげなカウンターが、舞臺中央奥から右端へ走つてゐる。客七八人目白押にスツールに掛けながら、食物を貪り居る。待ち遠しがつて皿を叩く者、薄汚いジャケツを着た給仕が註文品を奥へ通す聲。斜めに射込む日光に、食物の湯氣と煙草の煙が絡む。スツールの一つに、丈輔他の客を押しのけながら夢中で新聞を讀み居る。給仕その前に註文の品を置く。

丈輔。や、こいつは、何處かで見た男だよ。こいつは、確かに、確く最近――はてな、昨夜の支那街の女郎と一緒に飲んだ酒が祟つてるか、どうも今朝の頭は曇つてゐる。（客を押し退け、舞臺前方へ歩み出る。頻りに痛む頭を振る）ヨーク街爆彈事件の顚末。レーキ炭坑ストライキの指導者、巨魁ダイク、ストロングの兩名、現場に於て捕縛さる――マッカッシイ・トラスト直屬の銀行ユニオン銀行、強力なる爆彈によつて危く全部崩壞を免る――ストロングはレーキ炭坑よりひそかに銀行破壞を目論見て昨日當市に到着――ダイクの部屋に時計仕掛の爆彈數個及び手擲彈その他の兇器發見さる――連類者續々檢擧、全米の右傾勞働組合もその爲めの影響頗る大ならん――わかつた！ この二人は、あのホテルの前で出遇した二人だ！――待て、待て！ 最近急激に左傾したる作業團本部は、ストロングが到着するや否や、直ちにユニオン銀行へ向ひ、午後二時十分（正刻）に、二個の強烈なる爆彈を投じた――午後二時十分……待てよ、午後二時十分、これあ、確か、あの酒場の二人が云ひ合はした時間だぞ！ 午後二時十分――鞄の中の赤ん坊が大きな聲を立てる――マッカッシイ・トラストから五十萬弗――親方もいよいよ運の詰りだとか何とか云つたな！ ふむ、これあかうして居られない！ 兎も角銀行へ行つて見て、どんな事たか確めて見よう！ （丈輔、新聞を疊んであ

たふたと駈け出す。

給仕。おいおい、御客さん註文の品を食はないのかね？――待つた、待つた、金を拂つてくれよう！

丈輔。(振りかへり)金か？　金なら、マルクスを賣つた十五弗の殘りがまだあるよ。ほら――五十仙さ。(銀貨を給仕へ投げつく。)

(去る。)

給仕。(両手を腰谷の邊へ當てがひ、鳥の羽搏きするやうな恰好に動かし)あれもキ印か――

――幕――

第五場

街角。第四場より間もなく。

萠子屋の惡く毀れた煙草屋、それを鍵の手に圍繞して多數の見物人通行人の徘徊する廣い街路。破壞された銀行及び隣家は見えない。左端に、太い綱が張つてある。その前に群集。

見物人一。ひどい事になつたもんだね、それでも、銀行だけは助かつたらしいね。

見物人二。隣家の煙草屋、あれ御覽なさい、あの通りめちやめちやになつて、人死にがかなりあつたさうですよ。

見物人三。かうなると警官も邪魔なもんだね。僕達の好奇心を一向に滿足させてくれんからね。

見物人四。せめてから綱を張らないで、邸内へだけ入れないやうにするといいですがな。

見物人五。ところが、まだ死體は家の底に埋まつて發掘中ださうですからね。

見物人六。ほんとに社會主義者がやつたんでせうか？

見物人七。新聞に出てゐるところによると、かつきり午後二時十分となつてますが、わしの家の時計は二時十二分で止まつてゐましたよ。

見物人一。わしもその點はちよつと疑問を持つてるんですがね。しかし惡漢のホテルの部屋から爆彈が出たといふんぢや、やはりほんとなんでせうよ。

見物人三。すこしこの事件は臭いね。

見物人五。叱ッ。そんな事云つたら、貴方も連類者にされますよ。

見物人十。(演說口調にて)我々、アメリカの市民は、言論の自由を持つて居る――

警官。(左からあらはれて)こらッ、こんな處で演說をやる奴があるもんか。貴樣、怪しい奴だ。こちらへ來い。(舞臺奥へ引きずり去る)

丈輔。(群集の中より、ぼつくり顏を出す。手に澤山の新聞紙を固めて持ち居る)ひどい事になつたもんだな。きのふここに立つてゐて、あの大時計を眺めた時にちやうど二時と一分過ぎだつた。――あの時計はすつかり失くなつちまつたが、俺の記憶は確かなんだ、それからぶらぶら女三郎の働いてゐる家まで五町、古本屋の前で道草を食つて着いたのが、二時十分だ、あのドイツ女のおたんちんをからかつてゐて、彼女が顏を引込めると鳴り出したのがあの大爆發だ！　二時十二――四分、ときあ見ていいんだ、それと、新聞もちよつと、あ新聞も二時十分と書いてある。それから、あの酒場へ二人が打合せした時間が二時十分、これあ、どうも俺には腑に落ちない謎だ。(右端へ步み出て、立話してゐるキーファとウイリアムを發見する)おお、お早う！

キーファ。(呆然として)ああ、お前は――昨日の酒場の――

丈輔。昨日は非常に御馳走さま。それで、貴方

がた二人は（低聲に）此處にゐても大丈夫なんですかい？

ウイリアム。何が、どうしたと云ふんだ？

丈輔。（新聞紙を開き）私はね、この（低聲に）貴方がたの親方を、きのふ見ましたよ。ロドニー・ホテルの前で立話してるのをちあんと見たんでさあ。しかし、私は、默つてますよ。大丈夫！　その代り、早くお逃げなさい。日本にも警官がゐるんぢやありませんか。あんなに袖をタッチするのも何かの關係がある、といふ諺がありますよ。

キーファ。おい、おい、——お前、必要以上にこの事件に就いては知つとるやうだな？　どうして昨日から僕達を尾け狙つてゐるんだ？

ウイリアム。どうもこのジャップは怪しいね。一つ吐かして見ようぜ。

丈輔。何を云ふんです、貴方がたは。さういふ貴方達こそお尋ね者ぢあありませんか？　このダイヤとストロンガの乾分でせう？　私が親切にお逃げなさいと云つてるのを聞きちがへちあいけませんよ。

キーファ。（上衣の裏をめくり、合衆國政府警察官の徽章を示す）本官は、この大事件に就いて凡ゆる證據物件と目撃者とを探して居るんだ。お前の昨日からの擧動にはかなり不審の點がある、直ちに本署まで同行して貰はう。ビル、こいつを引立てろ！

丈輔。（泣き出しさうになりながら）旦那、御冗談でせう——私は、別に、この事件なぞは何も知らないんで。そんな、警察へ引かれるなんて惡い事あこれつぱしもしてはゐないんです。旦那！　どうぞ、旦那！（キーファ、ウイリアムへ頷き右端へ歩み出す、丈輔大聲に泣き出す）

丈輔。旦那、……旦那！——旦那ア……

——幕——

第六場

或る役所の一室。同じ日。

場内は無暗に高い、いろいろな鐵材によつて組み建てられたいくつもの梯子段が縱横に交錯してゐるやうな構造になつて居る場所。青い笠を被つた電燈の灯つた、高いデスクの上に係長、鉛筆を舐めながら、何かを帳簿に記入して居る。その傍に卓上電話。數段低く、暗黑の最下部に於て、二三の人間か格鬪してゐるやうな物音がする。

丈輔の聲。云ひます。——申します。

係長。よし、それでは此處へ上れ！（デスクの下を指さす）

丈輔。（ウイリアムに下から引き立てられながら、係長のデスクの一段下へ姿を現はす。全身水を浴びたやうに戰慄してゐる）はい、申し上げます。

係長。で、お前は、確かに一時十分に、お前の友人の働いて居るフランクリン氏の地下室に於いて、何かしら恐ろしい物音を聽いたのだな？——確かに、昨日午後一時十分であらう、な？

丈輔。へい。その、此處においでになるお二人の役人様が、角の酒場でマツカツシイ氏の親方から五十萬弗の金を貰ふ……。

キーファ。（突然として暗中より躍り出で）こらッ！（ぴしりと頰を毆る）係長閣下のお訊ねになる事に答へさへすりあいいんだ。餘計な事は饒舌るんぢやない！

丈輔。は、はい。——その、確かに、午後二時十——分でございました。へい、それに間違ひはないんで。フランクリン氏の地下室の女

人の時計は、確かに午後二時十分で止まりましたのを、私があとで氣がつきましてまた捲き直しまして置きましてございましてございます。

係長。ふむ、仲々悧巧な日本人だ。本官の暗示せぬ事まできつぱりと云つてのける。で、なにか、お前は、同じ言葉を最近開かれる公判廷の大陪審官達の前でも繰り返し得るか？ 證人の一言は、本事件にとつては實に重大な結果を及ぼすのであるぞ！ もし、お前が今申し述べたやうな證言を、公判廷に於いても繰り返したなら、本廳ではお前の僞らざる精神にめでて特別な手當をするだけではなく、次第によつては、被損害者側からの尠からざる報酬も來ようと云ふもんだ。もう一度練習のため繰り返して見ろ！

丈輔。よろしうございます。さうして戴けますものなら、この憎むべき社會主義者や勞働運動者達を徹底的にやつつけるやうな證言を申し上げませう。——酒場を出まして、このお二人と……

キーファ。このお二人の事なんどは一言も云ふ必要はない。お前の事だけを云へ！

丈輔。へい、一人で酒場を出まして、角の大時計を見ました時に、恰度二時一分——いや一時五十八分で御座いました。かつきりと一時五十八分で御座いました。それから御存じの通り、大通りを北へ切れまして、古本屋のある通りを三町、ロドニー・ホテルの前へさしかかりますと、二人の惡漢ダイクとストロング奴が、何やらひそひそ話をして、打合せをしてゐたやうな風でございました。一方のストロングといふ男は、重さうな旅行鞄を携帯しまして、何が入つて居るか存じませんが、頗るそれを大切にして、上へもおろしませんでな——。

係長。仲々味をやり居るな。その調子、その調子！

丈輔。すると、再び酒場でお會ひしたお二人が、あとからやはりホテルへお見えになりまして、何かこそこそお話……

ウイリアム。馬鹿ッ！

丈輔。いや、何——お二人のことは申しませんとすれば、この社會主義者二人は電報を打つとか云ひまして、横町を右へ郵便局の方へ曲つてまゐつたので御座います。

キーファ。右ぢやいかん。左にせい！——

丈輔。その、左へ即ちユニオン銀行の方で御座います。左へ曲つて行つたのを、私はこの二つの眼でちやんと睨んだので御座います。それから、二町、フランクリン氏邸の地下室へ行くまで、約二三分の時間を費したと思ひます。何となれば、私は今鐘の都合がありまして、少し早足になりましたからで御座います。地下室へまゐりまして、友人の留守の間、ほんの一分間も待つて居りますと、計らずもその時視線に觸れた目覺時計が二時十分、その時天地も割れるばかりの大爆音が生じました。私は、さては社會主義者の奴等がやつたな、レーキ炭坑の……

係長。もうよいよい。それ以上お前が知つてる筈はないではないか。あまり饒舌り過ぎてもいかん。——それで時計を捲き直したかな？

丈輔。へい、へい。そのとほりで。

係長。で、お前の現住所は何處だ？ 證人に呼び出す必要上これは訊いて置かんならん。

丈輔。旦那、それがどうも、お恥しいお話ですが、職業を失ひましてから、一ケ月住所不定で、今日はこちらの十仙宿、明晩は河向うの淫賣宿と申しますやうに、一向に定まつて居りませんので。最近——つまり、今朝ま

で居りましたのが、下町のオールスのホテルと申します二十五仙宿で御座います。

係長。ははあ。仲々難澁しとる様子だな。では、お前小遣も不自由であらう？

丈輔。まつたくもちまして、もう一仙も餘裕は持ち合はせないので。

係長。では、キーファ君、君、ちよつと會計へ傳票を書いてやるから、よろしく證人の手當をして置いてくれ！

（キーファ頷く）

丈輔。旦那、そりやほんとですか？

ウイリアム。お前さへしつかりしてりあ、一生この事件で樂に暮して行けるんだ！ だが、よく注意して置く――いいか、お前は、法律によつて、正當な理由から、謂はば、拵へられた男なんだ！ 決して今練習した言葉を忘れてはならんぞ。お前の役目はそれだけなのだ。それ以外の事を饒舌つても、又それを饒舌らないでも、お前の一生の幸福は來ないんだぞ！

係長。（立ち上り）拵へられた男、よくこの言葉を覺えておけ！

丈輔。（夢中で大聲で）拵へられた男――拵へられた男！ へえ、拵へられた男で……。

――暗轉――

第七場

丈輔の宿泊してゐる安ホテルの三階の一間。同じ日の数刻後。

中央右寄りに恐ろしく長い鐵の階段が上まで立つてゐる。階段の竭きた所にドア。其處から左奥へかけて、高く設けられた灰色の一室へ入る。

階段の上に一つの電燈が灯つてゐる。舞臺右と、部屋の下全部は暗黑である。

室内は、何處となく小ぢんまりしてゐて、舞臺奥と、左側とに開いた窓からの外光によつて不思議な光線の縞れを見せてゐるやうに明るい。左隅にベッド。その傍に椅子二脚、中央に丸テーブル。ベッドの下に靴。室の右隅に化粧臺、洗面器、タオルなど。もう一脚の椅子がテーブルの傍に置かれてある。安手のカーペッド。天井に電燈。

山口友三郎、獨りに丈輔の歸りを待ち侘びて、部屋の中を歩きまはつたり、正面奥の窓から街向うの建物を、二三人のペンキ屋が塗り變へようとして足場を拵へてゐる光景を眺めたりしてゐる。

丈輔。（階段を千鳥足で昇つて來る、口には金ぴかのレッテルを貼つた卷葉）たしかに、ホテルを左へ、ユニオン銀行の方へ曲つて行つたのを、私がこの二つの眼で睨んだので御座います――私は、法律の正當な理由によつて、謂はば、その、拵へられた男、へえ、その男で御座いまして、いや、こいつは必要以外のことであつたかな！ 二時十分ですよ！ それに間違ひこはないんです。（ドアの前で立ち止まる）おや、誰か御在宅かな？ 鍵は、この俺樣が一つ持つていらつしやる。（友三郎、丸テーブルの前に掛けて友人を待つてゐる）ほかのもう一つの鍵は、階下の帳場で持つてゐる。この鍵がひとりでに開くといふのは……（鍵を室内へ入れる）ヤツ！ 君か？――

友三郎。待つてゐた。

丈輔。（室内へ入る）やあ――君か？ 御免、無理もない、悪かつた。――ほんとに濟まん。實に、實に、悪い事をしたよ！

友三郎。つかつかと丈輔のそばへ歩み寄り、手から鍵を奪ひ取り、かちりと鍵を卸ろして、

その鍵を自分のポケットへ入れる）いいか、この鍵は、お前か俺か――どつちでも生き殘つてこの部屋を出て行く人間が使ふんだぞ！　醉つてゐやがる、間抜け奴！　椅子を取つて、掛けろ！

丈輔。（隅の椅子へ手をかけ）な、な、何を――解つたよ、それあ、君の留守の間部屋へ入つたことも惡かつたし、それから、あのマルクスだつてな……

友三郎。（丸テーブルの前の椅子を示し）茲へ來い！　掛けい！　今日は、今日こそは、貴樣と俺と生命の取りやりをしても話をつけるんだ！（丈輔、云はれる通りに椅子へ掛ける。友三郎、ベッドの前へ椅子を運び來り、腕組みしながら掛けて、對手を熟視す）

丈輔。（ポケットから夥しい紙幣束を取り出し）「資本論」の三册や三十册の金は、これ、この通り。な、山口、お前にもこの二三年はほんとに厄介ばかりかけて俺あ濟まなかつた。――（泣き出す）君の友情がなかつたら、どうして、この淋しい、淋しい外國で俺は暮して來れたらう？（狂的に）だが、喜んでくれ！　ほんとに、喜んでくれ！　この通りだ！　これから俺は一生樂に暮して行けるんだ！　俺は、たうとう「拵へられた男」――と呼ばれるまで出世したんだよ！　金は一生樂に食つて行けるほど、何處からでも降つて來る。君の社會主義の研究も、俺はこれからどしどし後援して立派にやり遂げさして見せるよ！……な、おい、友三郎、何か云へ。どうして、そんなに俺を睨めてゐるんだ？　二十弗で澤山か、それとも、この前の分も入れて、二十五弗――三十弗ぐらゐでいいか？

友三郎。馬鹿ッ！

丈輔。まあ、さう怒るなつてことよ、取り敢へずこれからそこへ一杯お祝ひに交き合つてくれないか？

友三郎。犬ッ！――この、日本人の皮を着やがつた獸奴！　べらべら饒舌らずに、默つて掛けとれ！

丈輔。何んだか知らないが、いやに今日はお天氣が惡いね――べらべら饒舌るなと云つたつてお前、このジョウ小山さんが、人並以上にアメリカのスラングやカッスや通俗語が達者なもんで、それあ、正當な學問こそしないが、英語を饒舌る段になつたら下手な外交官なんどより遙かに達者だからこそ、今度のやうな一生に一度の幸運に出遇したんだ。いいか、今ちよつと公判廷へ起つた時の證言の練習をして見せようか？

友三郎。（いきなり立ち上つて丈輔の頭を續けざまに十回ほど毆る）これでもか？――これでもか？――まだ、これでもか？（泣く）――口惜しいッ！　俺は、口惜しい！――この、犬ッ！

丈輔。（倒れて下から）ど、ど、如何したと云ふんだ？……おい、理由を云へ、理由を聞かせてくれ！

友三郎。（丸テーブルの上の新聞を取つて烈しくテーブルを叩く）畜生、理由が聞きたけれあこの夕刊を見ろ！

丈輔。（新聞へ顏を突つ込みながら）なあんだ――これだよ。これでこそ、俺が儲けることになつたんだよ。

友三郎。（烈しく友人を掴み立て、ドアへ押しこくりながら）この野郎、まだ、貴樣にはものが解らないんだな？――貴樣こんな事を正氣でやつてるのか？　それとも、貴樣は、アルコールのために、この醜い腸の底まで腐りきつてしまつたのか？　さあ、理由を話せ！　話せ！　どうして貴樣は犬になつたの

か？ 一體、貴樣には、この無產階級の身命を賭して闘つてゐる大闘爭がわからんのか？ ——云へ！ なぜ貴樣が僞りの證人に立たなければならないやうになつたのか、その次第をこの俺の前で逐一白狀しろ！ 貴樣、この銀行破壞事件がブルジョア新聞の「タイムス」や「ジャーナル」の書き立てるやうな、勞働運動者が窮餘の一策としてやつた、小泥棒式な事件だと思つてゐるのか。

丈輔。（したたかに友人によつてベッドの上へ叩きつけられ）俺、俺には、そんな事はちつとも解りあしないんだ。——俺は、そんなむづかしい事とは思つてやしないんだ。俺がどうして證人になつたかつて？——

友三郎。さうさ、僞りの證人さ！

丈輔。僞りだか何だか俺には解らない。——まあ聽け、それはかうだ。一昨日の晝過ぎよ、お前のところへ、困つたから金を借りに行かうと思つて、何氣なく酒場の前へ來かかると——あの大通りのキュウテーといふキャアバレのある酒場さ——あすこでビーアを一杯飲まうと思つて立ち寄ると、ごたごたしてゐるうちに、二人の毛唐にウイスキーを奢られたのさ。その毛唐が、ひそひそ話をしてゐるのを聞くと、何でも午後二時十分には手筈がきまつてゐる、仕掛仕事だ、マッカッシイ・トラストの親方から五十萬弗出るさうだ、彼奴等の持つてゐた手鞄の中の別嬪とか、赤ん坊とかが、今にも大聲で泣き出す——そんな話を聞いてゐたんだらう。それから、お前のとこの二町手前のロドニー・ホテルの前で、俺は、昨日の新聞に出てゐた、それ、大工さんだとか、何だとか云ふ二人の男の會ふのを見たんだよ。すると、不思議なことにあ、その二人のうしろへ、先刻酒場でウイスキーを奢つた二人の奴等がやつて來たぢやないか？——少し變だとは思つたが、俺の方はお前に會ふ用事を控へてゐたんで、そのままお前の部屋へ行つちまつたのさ。それあ、無斷でお前の部屋へ入つたり、又「資本論」を持ち出したりしたのは俺が惡かつた。しかし、滿更あのリーザの奴だつて知らんわけでもない。それに、お前、あの爆彈だらう——？

友三郎。お前は、あの爆彈の音のした時、何時だか覺えてゐるか？ 時計でも見たか？

丈輔。さうだ。——そん、[illegible]、俺の頭にこんぐらかつて解らないのは、爆彈の破裂した時間だよ。新聞ぢあ二時十分と云ふし、役所でも二時十分と云へといふし、何のために二時十分が大切なのか、一向に腑に落ちないんだ。そして、俺の見當ぢあ、どうあつたつて、二時十分にあ破裂してゐないんだ。午後二時と——十三、四分の間だね！ そいつだけいやに力を入れやがるんで、俺も、いくらアメリカの裁判だつて變挺なものだとは思ひだして來たんだよ。

友三郎。それが、お前、最も重大なところなんだ。——いいか、仕事は仕掛仕事さ。[illegible]から、役人と新聞社とトラストとが、三つ巴になつて、ちあんと諜し合はしてやつた仕事なんだ！ あの、ロドニー・ホテルのダイクの部屋へ兇器を持ち込んだ奴等が、ちよつとした酒場での飲み過ぎから、二分か三分遲れたんだ。手下を使へばよかつたのだらうが、それには祕密の洩れる恐れもある。奴さん達が、二分か三分の遲れで、新聞社の方ではちあんと刷り上がつてゐるものをどうとも出來ない、そこで二分か三分の遲れを誤魔化すためにそんなことを云つてるんだ。その證據にあ、一昨日の夕刊を見るがいい。俺達の社會主義新聞を讀むがいい。はつきりと示してこそはゐないが、どいつもこいつも皆午後二時

十分過ぎ」となつてゐるぢやないか！　それを、トラスト系の新聞が朝刊にさう書いたからと云つて、無理に十分に引き戻すといふのは怪しいぢやないか？　しかも、トラスト系でない夕刊の方では、誰がどうして銀行の附近へ爆彈を仕掛けたかをちつとも示してないぢやないか？　トラスト系の新聞だけが、警察と符諜を合せて「犯人」の一擧一動まで明細に洗ひ立ててゐるのも不思議だ。どうして、二三時間の相違で、夕刊と朝刊とがかうも記事を違へることが出來るのか？――朝刊は大概トラストに買收されたからだ。朝刊は、この事件が起る前から、犯人を知つてゐたからだ。朝刊は、トラストのために、ストライキに惱まされて、工場へ石炭の送れないマッカッシイ・トラストのために、役人と一緒になつて、前から犯人を拵へてゐたからだ。誰が、爆彈を投じたか？――朝刊だ！　トラストだ！　マッカッシイだ！　貴様、それを知らねえのか？

丈輔。（呆然としてゐる）うむ、俺は知らなかつた……

友三郎。貴様、何も知らずに、己が腹を肥やしたいたさに、小金に釣られて、むざむざと、百十三人の嫌疑者、わけても世界の無産階級運動史に力強い腕を揮つてゐる二人の闘士を――まかり間違へば死刑に處してしまはうとするのか？　レーキ炭坑の爭議に、百五十日も惡戰苦鬪してゐる、二萬五千の炭坑夫を、貴様の三寸の舌でむざむざと見殺しにしてしまふつもりか？

丈輔。……さうか？

友三郎。（躍りかかつて）さうかぢやない！　起て！――貴様の魂に、まだ人間の血が流れてゐるなら、よしや、日本人としての一片の封建的な虛榮心でもいい、男として貴様がほんとに生き返らうとしたら、この時だ！　いいか、お前のあの日見た通り、聞いた通り、役所でいひつかつた通り、時間の點を一秒、一分もおろそかにせずにそつくり、そのままを今度の公判廷でぶちまけるんだ！――出來るか！　（烈しく丈輔をゆすぶる）

丈輔。（泣きくづれる）……惡かつた！　濟まない！――俺は、こんな事とは思はなかつた。許してくれ！　ほんとにお前さへ許してくれるなら、俺は死んでもその事をやつて見せる！

友三郎。うむ、よく云つた！――死ね、よし、死んだらお前の骨は拾つてやる。立派にそれをやり遂げろ、いいか、お前が一言いふ爲めには、全世界の無産階級が力拳を入れてあとから助けて居るんだぞ！　あとから押してゐるんだぞ！

丈輔。（舞臺奥の窓から彼方を指さし）山口、俺は、ペンキ屋だつた。同じ職人が今二人、向側の建物を塗り直してゐる。あの黑いのがだんだん隅から赤くなつて行く――さうだ、俺も塗り直す！　人間だつて塗り直せんことはない！　やつて見せるぞ？（二人固く手を握る）

――幕――

第八場

法廷。數日後。

舞臺左前方から奧へかけて、高いデスクの列が聳えてゐる。その一段下の欄干。舞臺中央から右端かけて全部暗黑。幕切れの刹那、左端の光消えると同時に、中央から奧へかけての群集の顏の見える程度の光が射す。

幕開くと、法官二三人、デスクの背後に

控へ居る。欄干の前に、光を浴びた丈輔が、狂氣の如く手足を振りながら絶叫してゐる。

丈輔。……二時十分ぢあない！　二時十三分！二時十三分です！　私は拵へられた男ぢあないんだ！　私は世界の無產階級運動のために、二時十三分であつたことを主張します！――二時十三分！――午後二時十三分！――午後二時十三分！――午後二時十と三分ですよ！

法官の一人。警官、これは證人ではあるまい、この狂人を彼の屬する場所へ投り込んで置け！　神聖な法廷はこんな僞りの證人によつて汚さるべきものではない！

（突然暗黑中より警官二人躍り出で、丈輔を拉し去る）

丈輔。（なほ叫び狂ひながら、半ば闇の中にて）二時十三分です！……世界の無產階級運動……十三分！　（去る）

（突如法官の側の電燈消えて、舞臺暗黑になること、左端の傍聽席に群集り一齊に叫ぶ聲を一聲にして、電燈傍聽席の上に閃く。其處には、手を振り總立ちになつた傍聽者の姿が躍り出る。前方に友三郎の顏。）

――幕――

敗軍（一幕）

人

茶館の亭主（老人、好人物）
若い女の客（斷髮、輕裝）
逃げて行く男
その妻
雜役の農夫
黑い服の青年
將軍（古いタイプの軍人、いろいろ勳章をぶら下げてゐる、長髯）
副官（兵士らしい男）
兵卒二十人ほど（地方督辨によつて傭はれた寄せ集めの土匪である。灰色の服）
敵の便衣隊員（苦力に假裝した青年士官二名）
將軍の妾

時

現代、或る晴れた日の午後

處

中部支那、町はづれの茶館

舞臺

田舍らしい、古びた茶館の内部である。室内は、灰色な、ところどころ土の剝げ落ちた壁に包まれてある。この壁を刳り拔いて、三つの戸口が開けてある。——正面奧の左右兩端と、右手の壁の中ほどに一つ。左手の壁稍前方には、家の上方へ通ずるちよつとした上り段があつて、そこから梯子で二階へ昇る心。器具類は、正面奧の壁に凭せかけてある大型の卓、椅子二三脚その他、室内の隨所に客が掛けて茶を飲むやうに出來てゐる小卓と腰掛とが設けてあるほか、右手の汚い帳を垂れた廚房へ通ずる戸口の前にある木製の低い帳臺だけである。いづれも不完全なもの。打續く戰亂のために、すつかり荒廢した田舍の生活が暗さと貧窮の空氣に漂ふ。——蜘蛛の巣。紙屑。

この洞窟のやうな内部とコントラストして、外には、のんびりした春の日光が照り映えてゐる。正面二つの戸口からは、軒の柳や桃の花が見えて、いかにも大陸の春らしい、白いほこりつぽい往還がその下に横たはると、道路から一段低くなつて、なだらかな起伏を示す濃茶色の平原が、地平線まで伸びひろがつてゐる。ところどころ赭土の縞が陽炎つてゐる。青く澄みきつた空の下に、遠くの城壁の一部と矮小な塔がちよこなんとその上に載せてある。

車の轟き。群集の押犇いて逃げる音。豚が悲鳴をあげる。……遙かに銃聲。

幕あがると、茶館の亭主が、室の中央におろおろ天地四方へ合掌禮拜してゐるのが見出される。若い女の客、笑ひながら、階段の前の卓で茶を啜つてゐる。雜役の農夫、生きた二羽の鷄を左右の小脇へ抱へながら、正面の戸口を右から左へ、左

から右へ、つながれた驢馬のやうにぐるぐる廻りをしてゐる。

若い女の客　お爺さん、お湯をさして頂戴。

茶館の亭主　おら、お湯どころでねえだ。お前さま一人で注いで下され、臺所にわいてるだに。

若い女の客　そんなこと云ふもんぢやなくってよ、あたしは御客ぢやないの。そんなに拜んだって、戰爭が急になくなりやしまいしさ。――ごらんよ。あたし女でせう、女のあたしがちつとも怖がらないのに、お前さん、男の癖にみつともないぢやない！

茶館の亭主（氣がついて）まだ、お前さまそこにござつたかい？――さ、早く逃げなさい。危い、危い。若い女子があの狼共に掴まつたら、それこそ何をされるか知れたもんぢやない！

若い女の客　あたしの欲しいのは、お湯なんですよ！（茶碗を鳴らす）

遠くの銃聲。

茶館の亭主（茶碗へ半分手をかけて）まだお茶を飲むんですかい？――右手へ退きながら）おらがとこのお茶あ、よつぽど氣の强くなるお茶でもあるかな……。

逃げて行く男（左奥より登場、しきりに手招ぎしてその妻をうながす、やがて、息を喘ませて左戸口から駈け込む。その妻、彼につづく）爺さん、何故扉をしめねえのだ？

茶館の亭主　扉かい！――それだ、おれ何だか先刻から忘れてゐると思つた。（茶碗を取落して駈けつける）

この間、若い女の客、ピストルを取り出して彈丸をあらためて見る。逃げて行く男の妻、ばつたり右側に仆れる。

辮髪の農夫（立留り）おれも、先刻から何だか變だと思つてゐただよ。早くこの扉をしめなさせえ。

逃げて行く男（その妻を搖り起し）これ、お前、もう歩けねえのか？　ああ、困つたな。兵隊はどんどんやつて來るし、これ、これ！（妻かすかに頷く）お前、彼奴等來たらどんな惡さをされるか知れねえんだぞ！

若い女の客　どうしたの？

茶館の亭主、表の扉をしめはじめる。辮髪の農夫、手傳はうとしては鷄に逃げかけられ、鷄を掴へては地團太踏んでゐる。

逃げて行く男　意氣地のねえ奴でしてな、ほんの二里ばかり駈けるともうこの通りですよ。

若い女の客　そりや、貴方がた男の人が、いままで纏足などをして、女性を家の中へ閉ぢ込めてゐたからですわ。まあ、可哀さうに。（二階を指さし）あすこは、どう？

表の扉を全部しめきらうとする途端に、黑い服の青年が飛び込んで來る。茶館の亭主、扉へ閂をかける。黑い服の青年手傳ふ。

逃げて行く男（表の方を顧み、焦躁的に）ああ、もうからなつちや、逃げようつたつて逃げ終せるこつちやなし。――さうしませう、さう致します。（妻を抱き上げて階段へ昇る有難うございます。（去る）

表の扉が全部しまる。

黑い服の青年（若い女の客へ近より）おお、同志！――こんな處に？（手を伸べる）

若い女の客（握手）ここなら大丈夫――きつと來るわ。あたし、先刻から待つてるの！

ビラは？

黑い服の青年（馬褂の下から赤いビラの束を出して見せる、直ちにもとへ收める）もうここからあとは、町はないんでせう？

若い女の客　次は、嫦花村――それに、敵は土

氣が沮喪してゐます。何時叛亂するか知れない狀態にある。同志は、覺悟がついてゐます？——

黒い服の青年　常に、同志方春青！

茶館の亭主　進み出で一體、あんた方はどうなさるつもりかな？　表をしめきつてしまふと、この洞穴のやうな家には逃げ路はなくなるんです。——見たところ、この邊の人達でもなささうな方達だ。あの狼どもが押破つて來たら、錢でも着物でも何でも掠奪られつちまふだよ！　それから、若い女子の人なんぞ來たら、一溜りもなく女子でなくなるだでな。——ああ氣が氣でなんねえ——困つたな、二階へでも隱れるか、さうだ、二階にしなせえ。おらとこの爺さんとだけゐる分には、高をとられるもんと云つても知れたもんさ、この身の廻りと、おらの昨日つぶした仔豚の片身ぐれえなもんだ。さうしなせえ、早いがいいだよ！

若い女の客　お爺さん、すつかり御心配をかけて濟まないね。でも、あたしは此處にゐるわ。まだ、用があるわ。

辮髮の農夫　何だつてえ——物好きなあねさんだな。

黒い服の青年　僕もこの店を守つてゐて上げるよ。それはさうとお爺さん、前掛か何か、かうボーイの掛ける物はないかね、何でもいいや。汚れてゐる方がいいんだが？

銃聲次第に近づく。辮髮の農夫扉へ駈けつけて、外の樣子を窺ふ。

茶館の亭主　あれだ！　もう來る、やつて來るだに。

黒い服の青年　前掛だよ、給仕の締めるやうな！

茶館の亭主　ほんとにこの陽氣の良いのに、戰爭なんかおつぱじめる馬鹿の氣が知れねえだよ。——前掛か、前掛なら、うむ、おれの締めてるのを貸してやるべえ。（渡す）

若い女の客　昔から、春になると戰爭をはじめるのは、支那の病氣ですよ。でも今度の戰爭だけはちがふわ。これからすつかり戰爭をなくすための戰爭なんだから。

茶館の亭主　みんな戰爭する奴は、どいつもこいつもそんなことを云ふだよ。

黒い服の青年　ところが、今度のは北伐革命軍と云つて、わざわざ廣東から湖南、江西、湖北と惡い奴をみんな退治して來た新しい軍隊なんだよ。孫文先生の三民主義によつて聯俄容共の新戰術を講じ、民國革命の大業を完成するために、一氣に東三省まで攻め立てる革命なんだ。——

若い女の客　（笑つて）そんなこと云つたつてわかりやしないわよ。學生マルキストさん。それよりは、ボーイ支度が出來たらお茶を一杯おくれな！　（黒服の青年擧手の禮にて右手へ去る）

辮髮の農夫　（駈け戻り）來たよ、來たよ——やつて來るぞ。跫音がすらア……ぞく、ぞく、ぞく、とな。（顫へてる）

茶館の亭主　あれ、鐵砲の音も近くなつた。何だ、今のは——大筒の車か？

辮髮の農夫　爺さんや、二階さ逃げべえョ。（階段へ昇りかける）

茶館の亭主　（若い女の客へ）獸だよ。いいか、わかつたかな？　彼奴等に八裂にされたとて、おれを恨むこたアねえぞ、あんたア。少しづつ階段へにじり寄る。このとき、黒い服の青年、茶を捧げて來る　あれた、魂消た二人だな！　（昇りつつ）おら、お茶より生命の方が大事に……（農夫と共に去る）

若い女の客默つて茶を喫む。夥しい跫音が左から右へと近づいて來る。黒い服の

青年、寢臺から女の方を顧みる。跫音が過ぎて行く。號令の聲。跫音再びつゞく、左から右へと。砲車の轟き。馬蹄の音。遠くに銃聲……と、突然、算を亂して驅け戻る跫音、逆に右から左へ、號令の聲が、多數の叫び聲の中に散亂する。二三發の銃聲、ごく間近い。

黑い服の青年　（屹となつてピストルを表の方へ擬す）やつて來た！　來ました！

若い女の客　ボーイ、熱いタオルはないか？

黑い服の青年　は、見て參りませう。（硬ばつた笑で廚房へ退場）

表の扉を敲く音。次に銃の臺尻で毆る音。——左右の扉、閂を軋ませて烈しく搖ぶられる。若い女の客、シガレットへ火をつける。左扉の一端がばりばりと裂ける。二本の腕が閂を外す。扉ががたがたと外れる。黑い服の青年、ホット・タオルを盆へ載せて恭しく女に差し出す。七八名の兵卒がどやどやと雪崩れ入る。右扉、內扉から闖かれる。そこからも二三名の兵卒が駈け込む。兵卒等一同、二人の男女を見て踏み留まる。

間。

若い女の客、顏を拭いてタオルを渡し、卓へ置いたシガレットを摘み上げる。黑い服の青年一禮して廚房へ去らうとする。

兵卒の一　待て！

兵卒の二　二人とも手を擧げろ！（銃を擬す）

兵卒の三　怪しい奴だ！

兵卒の四　こりや、意外な獲物だな。

兵卒の五　別嬪だ——こいつア、おい、籤引だよ。

兵卒の六　スパイかも知れない。

兵卒の二　手を擧げろ、こつち向け！（二人命ぜられたとほりになる）

兵卒の一　もつとほかに逃げ込んでるかも知れない。家搜しをしろ！

兵卒の七　二階がある。——臭いぞ、この家は！

兵卒の八　用心しろよ、途中に爆彈が仕掛けてあるかも知れん。

兵卒の三　大丈夫さ、まさかこの二人が下にゐるんだもの。

兵卒の五　行かう。（一同躊躇する）

兵卒の九　意氣地なしだな。俺が先頭に立つ。

（四五名彼につづく、去る）

兵卒の二　誰か上官へ云つて來い。（兵卒の四、表へ驅け出す）

兵卒の一　次は食物だ！

兵卒の三　あるぞ、きつとある。こんな家に限つてしこたま隱してあるんだ。

兵卒の一　誰かもう一人來い、そこを見よう。（廚房へ兵卒の三と共に去る）

兵卒の六　（若い女の客に小腰を跼めながらそろそろ近よつて）堪らねえなア……どうだい、この脚は！

兵卒の四　（あわてて驅け戻り）おい、上官が見えるぞ！（兵卒の六、急に身を退く）

副官　（ピストルを手に、つかつかと入り來る）何だ？——捕虜か？（樣子を見て、頷きながら、兵卒達へ）よし、銃を下ろせ、俺が調べる。（男女の二人、手をおろす）

二階から悲鳴を擧げて、茶館の亭主、辮髮の農夫、逃げて行く男女、の四名が引立てられて來る。兵卒等銃を擬して、彼等を副官の前へ整列させる、鷄は兵卒の手にある。同時に、廚房から、豚の片身と菜つ葉を下げて二名の兵卒あらはれる。兵卒達、俄かにざわつく。或る者は奪ひ取らうとする。

副官　靜かにせい。みな、その食料品をここへ

置け。貴様は生きてろか、ぢや、足を縛れ。よし。（捕虜一同に對してピストルを突きつけ）お前達は、その寢臺の前方へ列べ。（若い女の客の卓へ置いたシガレツトを見て）ふむ、「キャプスタン」か？　洒落てるぞ、こいつ。（椅子へ掛ける。つゞいて、兵卒達へ）誰か、二人だけこいつらの番をして居れ。――ゆつくりと調べてやる。（兵卒二名、彼等に銃を擬す）

兵卒の二　閣下、ゆつくりは出來ません。敵は後方間近に迫つて居ります。

副官　やかましい、貴様等の知つたことか！（兵卒の一、他と顏を見合はせて引込む）ふむ――仔豚の鹽漬、鷄が二羽、油菜が少量、別に女が二人、あとは彈丸が三發で足りる野郎共。いや、まだある、口紅のついたキャプスタン！　どれ、間接接吻とは、どうかや！（煙草を喫ひながら一同をじろじろ眺める）ボーイはお前か？

黒い服の青年　へえ、私で。

副官　この茶館の主人は？

黒い服の青年　この人――これが、私の主人でございます。

副官　主人、この女は何だ？　若い女の客をピストルで指さす）

茶館の亭主　おいらにア、頓とその……、何です、御客さまでございやすだ。唯のお客さまで、はい。

副官　これは？（逃げて行く男の妻を指さす）

茶館の亭主　その方も、やはり、御客さまで、はい。

副官　この男は？（逃げて行く男を指さす）

茶館の亭主　やはり、さうで。

副官　その辮髪は？

茶館の亭主　近在のもので、陳明正といふ小百姓でございやすだ。

副官　よし、男子はみな死刑だ。女は、これへ進め、身體檢査をしてやる！（立ち上がる）

將軍、このとき何氣なく入つて來る。兵卒の十、五色旗を持つてついて來るが、軍旗は戸外に立てて置く。

將軍　待て、待て。その捕虜はわしだ、一應見てやる！（兵卒達一同敬禮する）ほほう、お前達の容易に退却せんのも無理はないな――こりや、なかなかの美人ぢや。副官、君も、ひどい男だ――かういふ意外な獲物を獨り占めにしようとは！（兵卒の一、腰掛を運び來る）よし、よし、暫時休息ぢや。から朝から退却ばかりしつづけては、お前達の足も堪るまい。さあ、すこし遠慮せい。今度の村は、まだ我軍の荒したことのない村だ。あすこへ着けば、お前達の思ひのままの掠奪をゆるしてやる。全く、この戰爭といふ奴は、たまに村の掠奪でもないと無聊きはまるもんでなら――。副官、阿片の用意は出來とるかな！

兵卒達やや遠退く。將軍歩み寄つてにやにやしながら、若い女の客の頬をちよつと突く。やがて、寢臺の上へ寢そべる。捕虜達位置を換へて、正面中央に立ち列ぶ。

副官　阿片は、この前の御休戰の時でちやうど切れましてございます。

將軍（憤然として起き上がる）何、阿片を切らした？　この馬鹿者め！　貴公は、何のためにわしの軍隊に高給を以て抱へられて居るか！――こともあらうに、陣中阿片を切らすとは、どうして戰爭が出來ると思ふか！（苛々してその邊を歩き廻る）よし、死を犯しても一小隊だけ何處からなりと阿片を調達して來い！（副官不承不承に戸外へ出る）ほう、なかなかに御馳走もあるな。（兵卒達へ）こら、炊事の係を呼べ！

兵卒達一同　私達は皆炊事係であります。

将軍　（苦笑）馬鹿な、お前達に任せたら、わしは何も食はんことになるよ。副官はどうした？　阿片で行つてるか？　誰か、その邊でこの鶏を裂け！　わしの眼に見えんところでやるんだぞ。君子は廚房を遠ざく、ぢや。生きた物を殺すのは、見るに忍びんこツちや。（兵卒の三、鶏を摑んで廚房へ去る）次には豚ぢや。（兵卒の四へ）お前、これを料つて來い、それから、お前、（兵卒の二へ）そこの大きい卓を掃除して、食卓の準備を。（兵卒の四去る）次に、お前だ、（兵卒の五へ）どこからか酒を見つけて來い。（兵卒の二、卓を引張つて來て、中央へ据ゑる）よく／＼この家のものどもに訊ねて見るがよい。（捕虜一同へ）お前達の生命は、わしの手にあるうちは安全ぢや。さあ、酒はどこにあるかの？　それを云へば、きつと保護してつかはす。どうぢや、誰か、この家の持主は？

茶館の亭主　わしでございますだ。――今仰有いました、生命だけは御助け下さるのでございませうか……？

将軍　お前か？　なかなか人相の良い老人だ。助けてつかはすとも。その代り、酒を出せ。酒に限らず、すべて、食料品は殘らず、正直にこれへ提供せい。兵卒共は空腹ぢや。これも皆その方達が、赤い軍隊に虐殺されるのを救ふために、かうやつてわしの軍隊が闘つとるのぢや。保護してとらせるから、安心して、貯藏品を全部これへ持て！

茶館の亭主　それなら、大將さま、ちよつと御腰をお上げ下さりませ。――實は、その寢臺の下へほんの少しばかり、わしの食ひ分だけ殘してありますので……。

将軍　よし、よし、自白すれば、それでよい。（兵卒の一へ）その下を探せ。（兵卒の六七へ）この老耄に用はない。外へ引出して銃殺せい！　慈悲の死刑ぢや、赤い軍隊に見つかつたら、それこそ車裂きに會はうも知れぬ奴だ。（茶館の亭主、兵卒二人に手を取られて、必死になつて爭ふ）これ、これ、手荒くしちやならん、憐みを加へてやれ！

茶館の亭主　（號泣する）……そりや、約束がちがひますだ！……約束がちがふ！……わしを何のために殺すのだ！――ええ、畜生ッ、鬼ッ！　惡魔！――（去る）

将軍　（兵卒二三へ）酒もある、肴もある、いや、いろいろとあの老耄め、貯へて置いたもんだ！　それを全部あちらへ運んで行け。久し振りの酒宴だ！――（兵卒二三廚房へ去る）

戸外に茶館の亭主の泣き叫ぶ聲。だんだん遠くなる――突然二發の銃聲。

将軍　（ほかの捕虜達を顧み）これは軍律ぢや。人道上忍び難いことぢやが、如何ともしがたい。お前がた、少しゆつくり休憩せい。（殘つてゐる兵士達に）別に危險はない。あちらへ行つてくれ！（黒い服を着た青年、頻りに若い女の客へ眴せする。後者は知らぬふりをして、椅子の一隅へ腰を下す。他の者もそれにならふ）

将軍　（ボーイの服装をした黒い服を着た青年へ）――お前は何か？

黒い服を着た青年　（暫く苦悶しながら）僕は――北伐革命軍政治部委員の一人だ！（一同愕然とする）

将軍　（突立ち上がり）何、何と云つた？――北伐革命軍……（慌てて腰のピストルを取出す）よし、お前の立場には同情する。その同情が、この彈丸だ！（ピストルを擬す）しかし、待てよ、わしは手づから生物を屠るのはわしの趣味でない。（戸外へ向つて）誰か、副官を呼べ！

間。

表の方が急に騒々しくなる。それと同時に、左奥の方から烈しい銃聲が近づく。兵卒十四五名、副官を先にして、つかつかと將軍の前へ進んで來る。ほかの兵卒達は、戸口でわいわい喚き立ててゐる。副官手にピストルを持ちながら兵卒達へ號令する。

副官　狙へ！

兵卒達將軍へ銃口を向ける。

將軍　な、何だ？――間違つちやいけない。狙撃するのはわしぢやないよ。それ、そこにゐる若い者だ。副官、感違ひをしちや困る。軍律は、何處までも軍律ぢや！

副官　〔氣色ばんで〕老將軍、もうその軍律は私達の間にはおしまひだ！　兵卒達は、女と酒と肉とが欲しいのだ。將軍の獨り占めにしてゐる物が全部欲しいのだ！　それを渡すか、それとも、この壁際で潔く往生するか、私は、兵卒全體の意志を代表して、貴方に宣言しに來たのだ！

將軍　さては、反逆だな！　〔口惜しさうに身悶えする〕よし、生物の血を見るのはわしの趣味ぢやない。――潔く、せつかくの女と、酒と、肉だが全部お前達にやらう。〔歎息しながら寢臺へどつかと腰を下す〕わしも、こんなに部下の者どもに見縊られるやうになつたのか？　世の中はだんだん逆になつて行く。強い者が弱くなり、弱い者が強くなる。頭のある人間が馬鹿になり、馬鹿な人間が賢くなる。金を持つた奴は貧乏になり、貧乏人は富豪になる。――あさましい世の中ぢや！

廚房に働いてゐた兵卒達、それぞれの料理や酒などを持ち運んで、中央の卓へ並べる。副官と彼の引率した兵卒達、それを見ると俄かに銃を棄てて卓へ押寄せる。この時黒い服を着た青年、飛鳥の如く身を躍らして、梯子段の上から食卓めがけて、赤いビラを叩きつける。と同時に、若い女の客、素早くその場をくぐり拔け、卓の一つへ馳け上がる。戸外の銃聲ますます近づく――將軍ぎよつとして起ち上がる。

若い女の客　〔一同へ呼びかける〕飢ゑたる兵士諸君、今諸君の手に取つてゐる傳單は、諸君が何故こんなに飢ゑてまで戰爭をしなければならないかといふ理由を、極く簡單に説明してゐる！　それは、諸君の、ほんたうの諸君の戰爭でないからである！　諸君は外國人の犬であるこの老猾な怪物の金によつて雇はれ、彼の私腹を肥すがためにのみ戰爭するからだ。諸君の戰爭がほんたうに正義の爲め人道の爲め、諸君自身の爲めならば――

副官　〔ピストルを向け〕赤賊だ！――ボルシェヴィキ！〔狙撃せんとす〕

黒い服を着た青年　〔副官を背後より射る。副官斃る〕皆な、默つて聽け！

若い女の客　――それは先づ、かういふ軍閥を餓死せしめてこそほんたうの戰爭としての意味を持つのだ。われわれ北伐革命軍は、さういふ主義のもとに廣東を出發した。われわれの軍隊は決して街や村を、戰爭の報酬として掠奪させはしない。諸君の妻や娘を、諸君自身に姦淫させるやうな惡虐な戰爭はわれわれの戰爭ではない。われわれは、中國四億の諸君と同じやうな民衆の中から生れた軍隊である。決して、個人督辦や地方の軍閥が金で集めた軍隊ではないのだ。しかし、韶關から長沙まで、長驅何千里の間、わが北伐軍は到る處諸君の喜び迎へる處となつてゐる！　それはどういふ理由か？――阿片を喫ひ、婦女子を弄び、私財を貯へ、外國の資本家の金に買はれて、戰爭を賭博だと心得てゐ

る、その將軍のやうな利己主義な怪物が、われわれの軍隊にはゐないからだ！　われわれの軍隊は、民衆によつて組織された大きい力だ！

苦力に變裝した、北伐軍の二人の偵察隊員、將軍の妾を引き立てて入り來る。將軍彼女を見て色を變へる。

將軍の妾　（號泣しながら）……閣下、御降伏なさい！　わたしはたうとう隱れ家から見出されました。しかし、いつもの戰爭とちがつて、この人達は何も惡いことはしませんでした。……お願ひです、降參して下さい！　（苦力の手から離れて將軍の膝元へ泣きくづれる）

將軍　（撫然として）どうも、世の中はすつかり逆さになつたやうな氣がしちよつた！　强い者が弱くなり、弱い者がだんだん强くなるんぢや！　（この時、苦力に扮したる偵察隊員、つかつかと詰め寄つて將軍の兩腕を捉へる）いや、御急ぎには當らん、わしもかういふことがあるかも知れんと思うてな、今度の戰爭へ出發するときから實はかういふ物をちやんと用意して居つたのぢや。これを見られい！

將軍懷中より折疊んだ、敵方の軍旗、靑天白日旗を取り出し、颯と一同へひろげて見せる。兵卒達、室の中央に茫然としてその旗の動くのを見戍つてゐる。

ごく間近に銃聲と吶喊の聲。

將軍　おいお前達、早くこの旗を軒端へ立てい。そしてあの古い旗は、引きおろして、そこに死んでゐるわしの參謀の死體を包んでやれ！（兵卒達五六名、彼の下知に從ふ）――さあ、敗軍の將だ。わしを何とでも勝手にしてくれ！

苦力に扮した偵察隊員の一人　いや、恐らく閣下は、このまま無抵抗で兵卒全部を擧げて御降伏になれば、わが軍では、閣下を再び起用して、新に北伐軍に編入することでせう！

若い女の客　兵士達諸君、これが支那の戰爭である！　われわれには、本來、敵も味方もなかつた筈だ！

――幕――

上海の宿

1

上海では、まる三月とも、同じ宿屋に居つた。——

この宿といふのが、頗る妙な場所にあつて、四方ともに藝者屋に圍まれてゐるといふ、全くの狹斜の巷だつたので、最初、私は、そこへ私を同伴して宿の主婦に紹介した、五十嵐君を、一種の憎しみと侮蔑とをもつて考へたのである。

それには、こちらにも幾分落度がないとは云はれない。はじめての支那への旅を、全然、無紹介で冒險した上に、着く當時からの秋くちの霖雨に、支那語のわからぬ支那へ來て礑と當惑したN・Y・K碼頭で、誰一人タキシーの乘りやうひとつ敎へてくれるものがゐないところから、ついそれまでデッキを散歩し合つたり、サロンでいつしよになつたりした五十嵐君に御案内を一任してしまつたのである。

「まあ、わしの宿へいらつしやい。」

氣輕にかう承諾してくれた、その宿が、かういふ場所柄だつたのである。

五十嵐君とは、長崎からずうつと同室で、その職業の造船　師であること、邸が長崎にあつて家族が幾たりゐること、上海にもと或る汽船會社の支店長をしてゐたこと……などを知つた上に、その特徴のある相貌に、性格に、多少行ずりの興味とでも云ふやうなものを感じてゐぬではなかつた。五十嵐棟助、といふ名前からして、どちらかと云へば、記憶に引つかかりやすいところがあつた。その五十嵐棟助君は、私達の眼から見ると、典型的な小ブルジョアであつたのである。大概の小ブルジョアがさうであるやうに、彼は、醜い趣味を持ち、不徹底な女性觀を抱き、あまり健康でない胃腑を所有してゐた。——かういふ抽象性の具體化を、私は、彼の相貌と、十二三籠の御みやげ物らしい松茸と、彪大な旅行鞄とに發見した。

一見、五十嵐君は、風采の揚らぬ紳士であつた。四十を越した自分などから見ても、もういい年配の、禿げのきは立つて來る頃合ひに見えたし、それに、胃腸病患者特有のあさぐろい皮膚と、栗の果のやうな頭に角ばつた顎を併有してゐて、おまけにひどい近眼であつたのである。この近視は、レンズの強度なせゐか、ときとすると眼鏡が裂けてゐるのではあるまいかと思はれるほど、彼の眼球に、異様なフォーカスの散大した瞳の持主であるやうな外見を與へた。最も彼の印象的であつたことは、その音聲である。アメリカに永らくゐた自分は、よくアメリカ人らしい日本語を話す高等移民を知つてゐるが、五十嵐君の長崎辯は、それにそつくりだつたのである。むやみに調子高で、これといふ可笑しみのない事柄にまで大聲で笑つたり、演説のやうな口の切りかたをするところなど——どうしても、加州邊ハチャーゴンで話し合ふ癇高さと共通した點を看遁すわけには行かなかつた。職業によつては、内地の、東京あたりでも、かういふものの云ひやうをする人間も見受けないではないが、あつてもごく罕である。

「むやみにしやべくる男だな。」

ふだんはむつつりやなので、私は、必要以上にわかりきつた話に力點を置く人間を嫌ふとこ

ろから、船の中では、なるべく自分だけの考へに心をまとめる方針でゐた。
　それが、碼頭の數百人の苦力の騷々しさの中へ投り出されて見ると、やむを得ず、より騷々しくない五十嵐君を賴るやうにさへなつたのである。
　宿屋は、支那家屋を無理に日本造作に起用したところから、よくニュー・コーク邊に見受けられる植民地式の日本間で、壁のペンキ塗りに天井のプラスター、それへ疊を敷いて、達磨の掛軸をぶら下げるといふ趣向なのである。雨の中を自動車で來て、何の豫想をめぐらす機會も與へられずに、暗い階段を案內されたのが、ガラス天井に雨がしきりと踊つてゐる、水族館の底のやうな部屋であつた。
　そこへ茶を運んで來て、旅館といふものに殘存する日本の封建主義を、そのまま一わたり踏襲して客に見せないと承知しないのか、主婦といふ忠實な女性である。ひどい骨ばつた長崎辯なので、こつちは、例の五十嵐君の場合よりももつと閉口したのであつたが、どうせわかつてもわからなくともいいやうな事柄をしやべつてゐないので、私は、匆々に食ふ物を呼んで、そのままふいと[illegible]にまで迫つてゐる支那の最初の夜を見物に表へ飛び出したものである。
　が、雨のさ中である。外套も洋傘も持ち合はさない自分は、昔のアメリカ放浪時代のやうに、サック・コートの襟を立てて、びしやびしや濡れたサイドウォークを歩いてゐたのであつたが、不圖、古着屋のいつぱいに立ならんだ通りへ出ると、せめて古物のレーン・コートでもひやかして見ようといふ氣になつた。
「ハオ・マッチ・ジスー？」
　大型の外套や、馬の毛で織つたやうな洋服などをぶら下げた支那人の店々を、いかにも支那人にわかりよささうな口調で云つて、値踏みをして歩いた。こちらで氣を利かして、わざとピッヂャン・イングリッシュを使つてゐても、一向それをわかつてくれずに、何やら大聲の支那語でわめき立てられるには、流石に苦勞かひがなかつた。だんだん考へて、私は手眞似を使用することとした。ともかく、同じやうな店を、十三四軒も漁つたのち、一着のレーン・コートを十一弗で購つた。それを着込んで、そのまま、途中でちらと見た日本料理店の電氣行燈の出てゐる家まで戻つて、頗る熱かつたり、反對に温るかつたりして出現する銚子を四五本乾すと、大體の道のりを教へて貰つて、上海の銀座である大馬路附近まで黃包車を賴んだ。
　見るもの聽くものが、全然目新しい支那であつたので、私には、特別に一般の風習になつてゐる「支那の淫賣を買ふ」といふやうな、選定された目的はなかつたのであるが、或る狹い露地に立つて、日本などでは緣日でもないと見受けられない賑かな光景を覗いてゐると、不意に横合からあらはれた婆さんと娘とが、私の鳥打を一人が、ステッキを娘がといふ風に、何のことはない强奪して行つて、何やら云ひながらどんどん奥へ逃げて行くので、急にむかつ腹が立つて、二人を追ひ驅けて行くと、それが私のやうな椋鳥を釣る手らしく、娘と婆とは、一軒の怪しげな家の中へ身を跳らして、中からお出でをして見せてゐるのであつた。
「畜生ッ、なるほど素速い！」
　私は、半ば苦笑しながら、その支那家屋へ飛び込んだ。
「あんたは、實に大膽だね、――無謀ですね。」
　あとでよく人からから注意されたのであつたが、考へて見りや、實際、中から何が飛び出すやらわかつた筈のものでなく、殊に多少なりと金を懷中してゐた關係上、現在の上海に於ては、かなり無謀な行爲にはちがひなかつた。全

然し支那人を慣れないことは、ときに支那人に全然こちらを慣れないことになり得るのである。

私達三人は、町の様子のやうに、その野鶏の巣窟である二階の一室に、わびしい雨の音を聴きながら、窓の下で老酒を酌んだ。料理を注文するにも、何が何やらさつぱりわからない自分は、原始的に筆と紙とを借りて蝦の畫を描いたり、雞といふ文字を書き込んだりした上に、大きく、老酒、一元、としるして、二枚の銀貨を婆さんへ投り出してやつた。

残された娘は、しきりに眼に垂れ下る前の切髪を吹きわけながら、いろいろと支那語で話しかけるのであつたが、言葉こそわからなくとも、その流暢と媚めかしく傾けた首の表情で、何を暗示してゐるかがわかつた私は、ノオ、ノオ、の一點張りで、酒を呑む恰好を示してゐた。

婆さんが、二本の銀の徳利と皿に盛せた料理を二品ほど運んで來た。先方でもわからぬ支那語を使ふのだからと思つて、こちらもどしどし日本語で物をいつてやつても、やはりそこには無理押から來るぎこちなさがあつて、結局、默つて噛むものは噛み、食ふものは食つてゐた方が、雙方の得手らしく思はれた。

酒盃の半ばに、婆さんは、しきりに手眞似をする恰好をして見せては、彼女として一番優雅な支那語を使用するらしかつたが、私達は、箸を持つた片手で小蝦の醃漬を叩いて見せて、

「食べろ！　食べろ！」

と大聲で喚鳴つた。

卓の上の物がすつかり竭きてしまふと、娘はしきりに私の手を引いて、隅の小さなベッドの方へ、連れて行きたがるのである。極端に性病を惧れる自分は、娘が上着と下着を外して、ペティコート一つだけになるのを見て、大股にそこを歩き出した。

皿を掃除してゐた婆さんが、階段の中しきりになつてゐるカーテンから首を出して、ベッドの方へ人さし指を突きつけながら、わいわい忠告するのであつたか、やや醉の廻つた自分は、口を大きく開けて婆さんの無表情な表情を笑つた。

娘はごく簡單な上下の着物を又着なほすと、ぶつくさいひながらベッドのカーテンをからりともとのやうに開いて、婆さんの方へ向き直ると高い聲で挑戰的に話しかけた。婆さんも敗けてはゐぬらしく、さかんに音樂的な雜言を飛ばす。かうして、つい十分前までは、二人が笑つてゐた一室が、俄に騒々しい言語の交戰場になつてしまつた。人間はごく簡單な感動詞を使用してゐる間は、そこに平和があるのかも知れない。

――や、喧嘩をはじめたぞ――こりや下手をすると八百長かも知れん。――かう思つた私は、無言で、女達の手の伸びない前に、ステッキと鳥打を掴むやいなや、段々の兩隅にだけペンキの痕跡の殘つてゐる階段を、逃げるやうに飛び降りて、雨の中を大通りへ駈け込んだ。角に一軒の果實屋がある。いきなりそこへ入つて行つた私は、食べたくもない蟹の燒賣を菜單の表から拾つて、餘計な酒を一本注文した。間もなく、私の豫想したとほり、婆さんと娘とは、きよろきよろ通りの邊を搜し廻りながら燒賣屋の前を急ぎ足で通つて行つた。……雨の上海の第一夜である。

――結局、安く濟んだといふものだ！

自分は、實際のところ、二階から降りる途端に、廊下で三人で雀をやつてゐたうちの一人が、屈強な若い壯漢であつたのに氣がついてゐたのである。

歸る頃、夜前の冒險を話すと、五十嵐君は、耳を敲き割るやうな聲で、

――あんた、上海がおはじめだなんて、私達を

騙しなはつたな！ ええこつちやござんせんぜ、そんげな譃つきなはつと！」

と云つて一向に取合はなかつた。

長崎辯と云つても、五十嵐君のそれは、多分に大阪調を加味した種類であつた。これは、彼の複雑な過去の經歷が、數ヶ所の語源を綜合化せしめた餘儀ない事情にもよることであらう。

2

私は、その翌日南京へ出發した。

内山書店の主人がわざわざ訪ねて來てくれて、一亙りの上海學を講義した上に、南京行の希望に對して、北ステーションまで見送るといふ最も具體的な面倒を見てくれたのであつた。

南京へ行くといふことは、私の元來の目的ではなかつたのだが、支那へ來て、ちよつと事情を説明して貰ひたかつた人が、私よりすこし先に着いて、南京へ出發したといふことであつたからである。南京への旅は、まる一日で終つて、會はうとした村松君にも會つたのち、私は、むしろ騷々しい上海に幾分なりと親しみを覺えて、三日目の朝、同伴の人に宿まで送つて貰つた。四十を出た男が、停車場から宿まで獨りで歸れない、といふ愚劣なほどの不便さには、流石に閉口した。

「どうしたら、支那語を習はずに、最も短時間のうちに支那を知ることが出來るか？」

こんな不自然な、矛盾そのものである命題から出發して、私は先づ手あたり次第に、支那に關する日本語や英語の書籍類新聞類を漁りはじめた。見るまに、私の卓の上には、もとは「上海」案内記しかなかつたものが、各種類の著書で山が築かれてしまつた。恐らく最近の私の生活で、上海へ着いた一ヶ月間ほど、活字と活字の間から何かを發見しようと思つて努力した時間はなからう。

新聞に名前などが出ると、半ば好奇心から、半ばは親切氣から、毎日のやうに宿へは人が訪ねて來たのであつたが、私は、出來る限りそれらの人達から彼等の經た支那生活を吸收しようと力め、能ふ限りの時間を割いて、いつしよに街へ出たのであつた。

一度などは、長い髯を生した老人がフロック・コートを着ていかめしい肩書を刷つた名刺を通じて訪ねて來たので、何かの反動團體の來訪かと思つたら、過去四十年間の上海生活を物語りはじめ、支那の電力會社に對して訴訟を起してゐるのだが、日本領事館では一向に取合つてくれないから、是非、この由を日本の言論界に訴へてはくれまいか――と云ひ出して、謄寫版刷の訴訟提起の始末書を置いて行つたやうな篤志な客もあつた。この篤志な客人は、本來同情すべき立場にあつた人らしいが、年々訴訟の延期されるにつけて、彼の損害賠償の要求額が多くなるとかいふので、實は上海での「奇人」の一人に數へられてゐる人物らしかつた。

一體に上海の共同裁判所である會審衙門は、陪審官は各國の副領事が出席し、檢事や判事は支那人がこれにあたり、訴訟を提起するには先拂で訴訟費用として一萬元を供託することが必要とされる。その金額を一應受理すると、法廷では第一審の開廷を通知して、型のやうな姓名年齡の訊問で閉廷する。それから原告も被告も、第二第三審といくら待つてゐても、訴訟に對する結審は更らにない。どうしてないかといふに、これは支那側では治外法權の撤廢を主張してゐるので、その國際的案件の整理を終ないうちは、本當の裁判は行はれないと云ふ理由からなのである。そのために、會審衙門には、無數の訴訟事件が時代の堆積で堆くなつて停滯してゐる始末であるが、それを外國人はどうともすることは出來ない。

私が殊更らに、こんな裁判の事情などを書いたのは、單に書記の長髯の老人を憶ひ出したが爲めではないので、實は、そのことが五十嵐棟助君の生活と、やゝ深い關係を存在したからである。——

彼等は、よく時偶の會話を挑む私を、「裁判、裁判」と云つては、逃げるやうにしてタキシイで何處かへ消え失せる習慣を持つてゐた。好奇心に驅られた私は、めしの給仕にやつて來る女中を捕まへて、

「一體、五十嵐君は、毎日何をしてるんだね？」——

と訊ねて見るのであつた。

「五十嵐さまでございますか、しよつちう御出かけでいらつしやいます。御いでになれば、書き物をなさつてでございます。電報だの、御手紙だの——何でもいつも御忙しくていらつしやいます。あの方も、貴方さまがどうしていらつしやるかつて、御飯のたんびに御訊ねなさいますか——」

受持の部屋を共通してゐる女中は、小さな眼をまぶしさうにしばたたいて、膝の上の盆を曲藝のやうに廻轉するのである。

五十嵐君の部屋は、家の東側にある、ほかの室から全く隔離した、うす暗い函のやうな一室で、物干臺をへだてて隣家の「梅もと」といふ藝者屋の窓と對してゐた。

ときには、同じ呆けた表情の女中は、

「ただいま、あの別嬪さんが來ていらつしやいます。」などと密告することもあつた。

そのうちに、私も一向に落ちつきのない自分の部屋を、ほかの静かな部屋と變へることになつた。

一體、この宿には、支那風な中庭を圍んで、四面に、兩端をぴんと張つた、細かい魚鱗のやうな甍を載せた二階があつて、かれこれ十四五室の客間を持つてゐるのであるが、あとから建増した分が、東側の五十嵐君の部屋と、西の隅つこにある私の移つた部屋とであつた。西の隅つこといふのは、二階へのぼつて階段のわきの、戸棚の蔭になつた入口を持つてゐる、殆ど誰にも氣づかれないやうな小さな部屋で、レベルも普通の廊下から三尺ほど低い、そこだけ支那人の住宅區域に突出てゐる一室であつた。

採光の方法などはてんで考慮に取入れられぬ支那家屋を、買ひ潰したのへ疊を敷いたものだけに、窓には鐵格子が張つてあり、空氣の流通が悪くて、日中は土牢のやうに暗かつた。窓の下には長方形な、壁に切られた、塵埃箱のある袋町があつて、そこには終日乞食や物賣りが大聲でわめいたり、子供が蹴鞠をやつたり、ホテルのボーイ達が來て博奕を打つたりするセメントの露路が展けてゐた。窓から見えぬ入口から、いろいろな女達が出て來たり、廣東風な人形芝居を催して客を接待する隣家の響などが聞えた。

「あの下のねえ、支那人がやかましうてな、どうぢやろと思うてですたい。」——

主婦はこんな云ひわけをして氣の毒がつた。

しかし、なまじ日本人の言葉などよりも、わからぬ支那語の方が、直接何の聯想も呼びおこさぬところから、それは苦ではなかつた。私は、そこへ古新聞の山を積み重ねた。一度に七八冊の本を開いておいて、革命以來の一人の人間の動きを調べたり、終日電燈の下で毛彫のやうな文字の散らばつた粗悪な地圖を眼が疼むまで瞶めたりした。部屋掃除の權利を主張する女中に、しばしばそこを追ひ出されることもあつた。

近代的な神經や感覺の持主にとつて、日本の舊式の旅館で二日以上を生活するといふことは、きはめて苦痛なこととなつて來た。そこには、封建時代からの追從と敬語とがあり、無意味な器物と眼だけの食料品がならべられ、あ

らゆる不便と不健康とを忍んで、客は高價な費用を負擔させられるだけなのだ。他人の邪魔をせずに廊下を散歩するわけには行かない。愚劣な會話の相手にならずに風呂を浴びることは出來ない。自分の行動をスパイされずに帳場から靴を取つて貰ふことは出來ない。嫌ひなキントンや蒲鉾を除けば、オムレツにはエキストラがつく。そして、無暗に嚥みたくもないお茶を注いで、取りかへしのつかぬほど遺憾な口調で、お天氣の曇つたことに運命的な弔みを述べる女中が存在するのである。

　私の上海の宿は、それに、一言の言語も通ぜぬ空漠とした支那の世界を迦らしたものであつた。その支那の世界から、時折、各自の好奇心を尊重する日本人の客がやつて來た。客の大部分の人は、妙に私が文學と議論とが好きなのだと空想して、部屋中をロシア文學談や支那革命の理論でいつぱいに滿たすか、さもなくば、四等品級の輸出稅を拂ふ日本酒を嚥んで、その隙に、何かしらアルコールの作用で常識から離れた行爲を營むかと思つて自分を觀察する眼を持つてゐた。それらの人達の多くは、何も知らないからこそ支那へ研究しに來た私に、支那に關するあらゆる意見を徵收した。一人の人間が、一日に一回私を訪問することは、その人にとつてはむしろ好意を示してくれることに該當するのであつたが、同じやうな好意の持主が同じ日に五人もあるとなると、好意といふものの限られた人間的表現に對して、それを受ける方がやや倦怠を覺えることは免れ難いのである。それは、人間が活字の上に眼をさらして居られる時間が絶對に無限でないと同じことであつた。又、それは、毎日十二時間づつ、若い議論好きな人と革命理論を議論し合ふことの不可能さとも共通してゐた。

　私はそろそろ苛々し出した。

　朝、眼がさめると、窓の下では、透き徹るやうな聲をした老人の配達が、新聞を觸れ廻つた。

「申報!……申民報!」

　それが濟むと、燒餅賣が來た。そのあとからは、西瓜子の女が「きやんわーつ!」といふやうな奇聲を張り上げて執念深く角に陣取つた。次には瀨戸物屋が茶碗をかち合はして大聲叱呼して退場すると、太鼓と鐘を串刺しにして、それに四つの分銅をぶら下げ、その樂器の柄を廻轉するごとに、日本のチンドン屋以上のオーケストラを出す小間物屋が、すこぶる猥褻な感じのする支那語で、總額で五元ともしないほどの荷物をむやみやたらに觸れ廻つて歩いた。これらのほかに無數の野菜賣り、太刀魚賣り、菓子賣りなどの立てるオペラ的叫喚ののちに一日が暮れると、今度は同じ執着性を持つた雲呑屋と、揚豆腐屋とが、夜の二時頃までは、日本の火の番よりも確實に大聲でその町を見廻るのである。ことに、雲呑屋のかち合はせる木製の樂器と來たら、雲呑の必要でない人間にとつては、純然たる耳の兇器であつた。

　これらの袋町の音樂をも、私の神經はだんだんに憎惡の對照として行つた。

「又、申報から、わんたんみいーンまでの一日か?――」

　私は活字に眼暈がし、支那の人名に瓦斯のやうな頭痛を感じ、議論の響きが鉄力屑を詰めた籠のやうに頭に充滿すると、怒りつぽく、狂人のやうに部屋の壁を蹴つたり、窓を開けてみたり、閉ぢたりした。

「何のために、あんな大聲でわめきやがるんだ、馬鹿ッ、ちやんころ!　そんな二束三文の品物を、誰が買はうつていんだい!」

　幽閉された惡魔のやうな私は、金網越しにから支那人一般をたけだけしく罵ることもあつた。私は、自分がすこしづつ神經衰弱症に犯

されて行くのを知つた。私の思想が、憂鬱な分解作用からニヒリズムに墮ちつゝあるのを知つた。私は、不意に誰かが私の部屋へ入つて來て、不必要な議論をすることを惧れた。それが女中であつて、無言で火鉢に炭をついで行くのでも、あらゆる場合に關する疑惑を彼女の一擧一動に感じた。

同じ礎がいつまでも足の下にあるといふことに、私は非常な腹立たしさを覺えた。ものを考へようとする私の頭腦が、まるで支那家屋そのもののやうに、單なる壁を持つた空洞であるやうな氣がした。机といふものの持久力、それに終日肘をついて暮す私が、だんだん、机と同じやうに四脚で自分を支へてゐる、平面な動物かなんぞのやうに想像されて來た。私は一日に幾度か、溺れかかつた嬰ん坊のやうに窓をあけて、新しい空氣を吸ひ込むのであつたが――窓の下を見るとぞつとした。そこには、無表情な支那人が、無表情に激動してゐるのである。その手や足や、汚い馬車や、騒々しい言語から、私は強い電流のやうなショックを受けた。彼等を心から同情してゐる當の私が、その癖、彼等とは一番關係の遠い人間のやうに思はれた。

次第に、私は、支那を知らうとしてゐる自分に疑ひを持つた。と同時に、私の心は、

「大衆へ！　大衆へ！」

と不斷の要求を感じてゐた。

むちやくちやに大道へ飛び出す日數がつづいた。ぢつとして蘇州河の河岸に佇んで、半日も荷役の苦力の喚き爭ひ、唾を吐き、一輪車を押し、銅貨一つで喧嘩をするのを眺めた。行ずりの黃包夫の肩を敲いて、彼等の好きな居酒屋へ同行して、銅片二三十枚の酒を鐵力罐であたためて嚥み合ふこともあつた。工場に、郊外に、大道に、露路に、商店に――私は、つとめて、それらの底に動いてゐる勞働を見ようとした、いつも、大衆を。

しかし、それだけが支那である筈はない。唯物的な賃銀の受渡し、がつがつした動物的な食慾、無慘な非衞生的な節操の切り賣り、最も大膽に、最も商品的に取引される人命、單純な無識から來る雷同性――かういふ民衆の間に通有現象は、上海といふ世界の資本主義が製造した人工裝飾の、ごく表面の動搖にだけ伴ふ支那大衆の衝動的な動きにしか過ぎない。輕薄なブルジョア文明の皮を剝げば、そこには太古からの無があるだけだつた。最も悪いことは、支那人自身が、この上海の文明が自分達の物と考へてゐないことだつた。

そとの世界に絕望して歸る私には、より憂鬱な自分の部屋が待つてゐた。その部屋には、人間一人を封鎖して置くだけの空間があるきりである。部屋の周圍には、現金を持つた人間だけを尊敬する植民地人が歩いてゐる。私は、終夜、その部屋の中で、急に白髮の殖えた髮を搔き挘つて、火のついた動物のやうに歩き廻つた。ときには、ヒステリー女のやうに涙を流した。又、ときには、自殺といふことの卑怯さを思ひながら、機械の廻轉に捲込まれるやうに、自殺した自分の姿を考へて見てゐた。部屋の隅には、鏡臺といふものがある。それに自分の顔を瞶めた私は、こんなことを鏡にむかつて語つた。

「お前、こりや、アメリカ時代の植民地生活と同じぢやないか！　お前の、あの時分の氣持に逆戾りしてゐるのか、それとも植民地には人間をかういふ風にする雰圍氣があるのか――そのどつちかだらう。しつかりしろ。眼を開けて、ほんとの支那を見ろ！」

私の小ブルジョア的な苦悶は、こんな風にしてつづいた。時は、指の間を洩れる水のやうに、何物も留めずに空しく過ぎ去りつつあつた。そ

して、自分の苦悶にだけ沒頭してゐた私は、いつの間にか、同宿者の五十嵐棟助君も、やはり東側の同じやうな部屋で、何かに煩悶してゐるだらうことをすつかり忘れてゐた。

はじめて、それと感づいたのは、玄關の横手に、止宿人の部屋番號と名前を書いてある札が、或る日、「五十嵐樣」と書いてある分だけが裏返しになつてあつたことからである。

3

「どうしたんだい、五十嵐君はゐないのかね？」

から訊ねると、デスクの番頭は、變色した金歯を見せて笑つた。

「おいでなんですが――ちよつと、その、理由がありまして。」

それから、私は、すぐさま、東側の暗い階段をのぼつて、彼の部屋をノックしてゐた。返事があつたので、ドアを開くと、すつかり瘦せ細つた五十嵐君が、丸々と肥つた女と酒を飮んでゐるのに出遭した。

「いいんですか？ 御邪魔ぢやありませんか？」

「いいえ、そげんこたなか――なかですばい。」

すつかり醉ひの廻つてゐた五十嵐君は、長崎辯と東京語をちやんぽんに使つて、私によりも、氣兼ねをしてゐる女の方へ片手を振つて見せた。二人の間には、花札が散亂してゐた。女が何か口のうちで挨拶をすると、猪口を取つて私にさした。膨んだ指に、深くルビーが食ひ込んでゐた。

「こりや、わしの神經衰弱の看護婦でしてな、よろしく。――どうです、瘦せたでせう？ 上海へ來てから、一貫五百目も減らしましたぜ。女子見たかて慾望なんかないんですが、獨りでゐますと堪りませんのでな。」

五十嵐君は笑ひながら、女の肩を敲いた。彈力のなささうな頰に、女は笑靨を見せた。

「なかなか良い看護婦ですね。――そりやさうと、訴訟の方は？」

「いや、この通り。もうわし一人ぢややりきれませんから、本社から誰かに來て貰ふことにしてますが。」

かう云つて彼の指さした机の上には、開いたままになつてゐる切拔帳と、英字新聞や日本語の新聞の切拔がこまごまと載つてゐて、その傍には「肉彈」といふ小說が置いてあつた。

「貴方も切拔をやるんですか？」

「そりや貴方がたのとはちがひましてな、わしのは、裁判事件の方のだけですぜ。」

「ふむ、事件と云へば、その事件は一體どんなことでしたつけね？」

五十嵐君は、ものぐささうな顏で、机の上の切拔帳を取り上げた。貼つてある記事は、私にも時折眼についた「新明號事件」といふ、支那の汽船と日本の社外船との衝突した事件であつた。

「あ、このことですか、貴方の關係して居られる裁判事件は？」

私の不用意さに對して、彼はすこしむつとしたやうな口調で答へた。

「この前話したやうに覺えてますが――しませんでしたかしら？ ともかく訴訟がややこしいんです。それに、支那側と英國人の辯護士が共謀になつてるんで――內々一二萬弗は貰つたでせうと思ひますが――わしの上海を留守にしをる間に、すつかり惡化しちまうたんです。」

私は、切拔帳から、その事件の發端とも思はれる個所を拾ひ讀みした。それによると、揚子江下流の黃浦江と呼ばれる上海に面した河の上で、支那側の汽船がジグ・ザグの航路を取つたために日本の第二淡路丸と衝突して、乘組人員二十五名は溺死してしまつた、衝突の前に、日

本汽船が霧笛を鳴らさないのが悪い、しかし、日本側から云はせると、當夜は濃霧で、迚も新明號の舷燈は見えなかつた、それに、ブイを境界線にした澪の問題があつて普通黄浦江の航路筋にあたつて、どれほどまでの角度で船が迂廻した際にはどういふ規則に觸れる……といふやうな、技術上のデリケートな問題まで書いてあつた。もうすこしめくると、今度は裁判所では、支那側に支拂ふべき日本の汽船會社の損害賠償は三百何十萬弗とかで、それ以外に溺死者の遺族へ、弔慰金を出さなければならぬ、といふ判決が下されたと書いてあつた。

「しかし、この裁判は引續返して見せますよ。それでわしは骨を折つてるわけでしてね。これこの通り、毎日内地へ送る電報だつて貴方下手な通信社どころぢやありませんて。いつそのこと、日支外交にでもなるとね——。」

やや興に乘つてここまで云ひさした彼は、このとき、急に氣變りがしたやうに、つまらなさうに横を向いて、盃の縁を舐めた。そして、女が空になつたのへ酒を注ぎ足すと、急いで口を持つて行つて、それを飲む代りに、

「——結局の話は負けてしまつたんです。」

と云つたあとで、口の中へ液體をあけた。

私は、直感的に、この五十嵐君の住んでゐる部屋にも、私の部屋と共通した何かがあるやうな氣がしたので、あらためてその變を見廻した。窓は二つあつたが、煤ぼけたガラスからは、一定の水滓を通過したやうな光線しか射して來なかつた。同じやうなペンキ塗の壁に、鼠色で描いた抗州あたりの風景畫の軸がかかつて居り、人間と同じに天井によつて壓迫される二三のキャビネットや机や火鉢が、小さく隅々に散らばつてゐるに過ぎなかつた。總じて、この部屋は、私のやうな無一文の人間ではない五十嵐君が入つてゐるところとしては、いろいろな點で不向であつた。第一に、彼の所有品である偉大なる鞄が、このペンキ塗の壁に不調和であつた。安物の宜興燒の火鉢の傍らには、金時計がころがつてゐた。それに、夏の白布をかぶせたままの座蒲團の上には、膝をくづした藝者が坐つてゐた。——私には、彼が、謂はば一大班級の彼が、何を好んでこんな一室に燻ぼつてゐるのかが疑問となつた。

五十嵐君は、女に命じて、隅の鈴を押させた。酒を追加するつもりらしかつた。暫くして出て來た女中は、私がこの部屋にゐるのをちよつと憚つたやうな顔をしてゐたが、銚子を置くと低聲でから囁いた。

「——あの、五十嵐さま、又、昨日の支那人が參りましてございますが……。」

それを聞いてゐた彼は、がりがりと爪の音を立てて頭を搔いた。

「ゐないと云へ！　貴樣等、あんなに云うとるに、わからんのか、馬鹿な奴ちやなう！　居らん、居りません、そえでいいのぢや！　ほかに、何も云ふことなか！」

恐ろしい權幕で女中は叱り飛ばされた。

「ですけれど……。」

「何がですけれどだ。——そのために名札ア返してあるんぢや、わからん奴ちやな！」

女中は泣きさうな顔をして引退つた。

「みんなでこのわしをいぢめよるんだからな……。」

から云つた五十嵐君を、側の女は、

「そんなことないわよ。」

となだめたのであつたが、彼はあわててその言葉を振りきるやうに片手を動かして、立ちあがると、廣くもない室内を、檻の中の動物と同じ歩調で歩きはじめた。

私も、氣の毒になつて、部屋を辭した。玄關へ降りたついでに、訪問して來た支那

人といふのを見ようとしたが、入口には風呂番と番頭が三人立ちはだかつてゐて、今しも訪問者を送りかへしたばかりの興奮を見せて聲高に罵つてゐた。

冷たい雨の降りつづく日が來た。日本の都會のやうに、泥濘と紙の扉から來る、限りない寒さと儚さはなかつたが、空虛な騷々しさと、憂鬱な建物や鋪石の上に降り濺ぐ雨には、しみじみと人間の窮迫を慘めに思はせる冷酷な無關心があつた。都會の底では、苦力は素足で車を曳いた。笠を着たり、傘をさしたりする勞働者は、殆どまれである。しとしとと降る雨の中に、都會はそろそろ冬に入つてゐたのだ。濡れたサイドウォークにぼんやり影を映してうろついて歩く失業者の群が多くなつた。牝猿のやうに子供を腹へ縛りつけて、藁の帶をしめた女乞食が、人を見ると二町も三町も濡れながら蹤いて來た。街角といふ街角は閉絕するやうに突出される掌でいつぱいになつた。茶館や料理屋には、野雞が客の數よりも夥しかつた。フランス租界のある支那旅館へ、人を訪ねて行くと、廊下にむらがる淫賣婦の數は、混み合つた電車を思ひ出させた。その一人一人が、飯店の扉をノックして、性の取引に從事してゐるのである。曾て、私が第一夜に飛び込んだ大馬路附近の淫賣窟は、市の新しい區劃整理のためにすつかり追拂はれて、女達は夜になると、永安公司の前や天蟾舞臺附近、さては北四川路の方へまで流れ込んで、寒さうに肩をすくめながら、男を漁つた。雨に搏たれた白蘭花は、通行人の鼻へ突きつけられても、それを嗅いでやるほどの嫖客もゐない。どの町へ出ても、あまりに多數の人間が、一度に街へ押寄せて來たやうな氣がした。

私が、五十嵐君によつて、近所の料理屋へ招待されたのは、かういふ一夜であつた。

「こつそりとね――わしは、いつも裏口から行つて、默つてずんずんわしの特別に上ることになつてる裏二階へ入るんです。それで、入口だつて、わざとこの汚い裏道を行くんですよ。」

彼は、宿の傘に隱れながら、先に立つて城壁の下のやうな小便臭い細い通りを歩いた。そこから、高い鐵柵のある門口へ來ると、横手には無數の貧民の手で掻き廻された塵埃箱があつて、紙屑と藁とがその邊へ氾濫してゐた。水溜りのある丸石の鋪いた通路の行詰つたところに、四角な電燈がついてゐて、その下に支那人の巡警が、私達の姿を見て、[illegible]まで[illegible]した。石段を三つほどあがると、あくどい衝立があつて、その蔭から中年の女があわてたやうに飛び出して來た。五十嵐君は默つて入つた。彼は何やら澁い色合の和服を着流してゐるのである。

二階――きはめて高い洋館の階段をあがると、倉庫のやうにがらんとした家のうちに三味線の音がした。素足に廊下がひたひたと粘りついた。二人は廊下の奧の別な階段をもう一つ下つて、逆に五六段のぼつた中二階めいた座敷へ通つた。

中年の女と彼は狎れ狎れしい口を利いたのち、一定の食物と酒とを註文した。あとからあとから、火や座蒲團や餉臺を据ゑにやつて來る女達とも、彼は、口を大きく開けて笑つたり、長崎辯で聲高に冗談を云つたりして、よほどその家には舊くから顏が知られてゐることを示した。

酒が出て、河豚料理が運ばれた。そこへ二人の女達が三味線を持つて入つて來た。河豚ちりを拵へてゐる中年の女と、三人の女性を對手にして五十嵐君は、さかんに上海のゴシップをはじめた。酒が廻るにつれて、彼の聲は徐々高くなり、話題はすつかり自己中心主義になつた。

「この男は、何のために俺をここへ引張つて來たのだらう？」

私はかう思ひながら、紹興酒を呑んでゐた。

「まあ、何か唄ひませう——お唄ひなさいよ。それら、いかが？ 一つお惚氣を？」

女達の一人は三味線を取上げると、撥で私の方を指した。これも植民地の脂肪に惡肥りのした女である。

「冗談、俺は呑む一方さ……」

私は所在なさに五十嵐君の方を向いた。彼は、その晩は、どうして自分の偉大な人物であるかを、あらゆる人間に見せようとする本能に驅られたかのやうに、痩せた體を膨らせていろいろなことを吹聽してゐた。總體に、頗る利己主義な酒らしい。

女の彈いた三味線は、締つた倉庫のやうな建物に二倍ほどの反響を伴つて鳴つた。ほかの女達も、一刻も早くその冷たい室内から、藝者屋特有の陰鬱な淋しさを驅逐してしまはうとするやうに、むやみにわからない言葉ではしやぎ立てた。厚い支那家屋の壁は、その騷々しさを、ぐわんぐわん音で敲かれるやうに反響した。だが、不思議に、さういふ努力にも拘らず、その室の空氣は一向に賑かにもならず、擾亂されたやうな景氣も湧かなかつた。だいぶ醉つて來た五十嵐君は、四角な顎を張つて、まだ大聲で自分のことを傍若無人にわめいてゐた。その姿は、私の眼には、一生懸命に息を吸つて自分の體軀を膨らせようと滑稽な仕事に從事してゐる、骨つぽい魚のやうに見えた。

その間、女達は、客には構はずに、自分達の氣分を進行させてゐた。ぢつと耳をすますと、その一人は、こんな歌を唄つてゐた。

「……川を渡つておそひ來る
不逞のやからの
そのために、
妻も——銃取り、應戰す。」

私はぐつと脣を咬んだ。

「何だ、そりや？」

「これですか、こりや、あんた、いま流行の鴨綠江ぶしですたい。」

一方、膨らむだけ自分を膨らませることに飽きたらしい五十嵐君は、今度は、もう忘れられてゐる筈の私の存在を憶ひ出したか、俄かに向きなほつて、かう云つた。

「——へ、へ、どうです、わしも一度は貴方へ上海を御目にかけようとは考へとりますたい！ ま、ま、一杯！ これで、折角、お近づきになりましても、あのな、支那人ゐがうるさうてな、よう御目に掛けれまへんのぢや。まことに、誠に失禮の段々……」

盃を受取らうとすると、もう彼はどかんと後ろへ倒れてゐた。

私は、禮を述べて、足に絡まる座蒲團を蹴ると、もう一度金屏風の衝立の前で、支那巡警の最敬禮を浴びながら、そとへ出た。

「——妙な男だな！」

4

四五日經つてから、恰度晩飯を濟ましたあとへ五十嵐君が、突然に、甚しく當惑したやうな表情でやつて來た。

この人が物を考へるときには、蟀谷の邊が蒼くなるのであつた。

「實はね、是非貴方の智慧を御借りしたいのです。——どんなもんでせう、この事件に下請をさせろと云つて來た支那人があるんですが、それがなかなかの強か者でしてね。これから會つて來ることになつてますが、その男は、俠客の親分みたいな人間でしてな、日本の役人達もよく知つてゐますよ。何か支那人と面倒が起つたときには、いつもその男が中へ入ることになつ

てるといふ風でね。こりや、ここだけの話ですが、祕密結社の親方なのですよ、凄い男です。人を殺してくれと云へば、いつでも殺つてくれる、ストライキを潰してくれと云へば苦もなくストライキのかたをつけてくれます。實に恐ろしい勢力を持つてる奴でしてね、今度の裁判事件も私の方の事情を嗅ぎつけてからに、賠償の半分ぐらゐは敗けるやうに運動してやらうと云ふんですよ。――どうでせうな、こんな男に頼んでみては？」

　この唐突な質問に對して、勿論、私に出來合ひの返答のあるべき筈はない。

「――ぢや、これからその男に會ふんですか？」

「會ひます。今、電話で私にこれこれの處で何時までに會はう――と會見を申込んで來てるんです。」

「頼んだとして結果はどうなるか？　法律上、それから社會問題として？」

「さアそこだが――こりや、やはり、會審衙門の陪審官に出る副領事の意見を聽いた方がいいかも知れんな。」

「一體その男はどんな人間ですか、風采とか性格などは？　支那にはそんなのが多いのですかね？――」

「立派な一流の紳士ですよ。ボスですね、つまり、そりや、貴方、支那には祕密結社といふものはいくらもありますよ。まア、この上海で羽振りを利かしてゐるのは青幇かね。この男は、青幇ぢやないがね。」

「そんなことまでして、汽船會社の賠償金を減らしてやる必要がどこにあるかしら？」

「――いや、今までにも、この事件を種に、隨分と強請に來る奴が多いのですぜ。だから、わしは隱れて會はんことにしてるんです。日本人方面に殊に多い。二百や三百の端た金をですね。それがどんなことを云つて來るかといふと、みんなやれ支那の輿論を左右してやるとか、大きい方面へ渡りをつけてやるとか、實にいい加減な嘘八百なんですがね、出さないと脅迫がましいことを云ひやがるんです。それから一番困るのは、遺族の奴等ですよ。」

「溺死した人間の？」

「それですよ。」

「本社では一體何と云ふのですか？」

「その本社といふのが、實に何もわからんのですからね。日本と支那の事情なぞはてんでわかつてゐない癖に、やれ強硬談判をせいとか、、、、、のことだから値切られるだけ値切れとか、非道い返電をよこすのですぜ。仲に入つたわしこそ、ほんとこんなになつてるんですからね。」

　彼は、頰のこけた顏を、冷たさうな指で撫でおろした。

「すると、貴方の立場は？」

「いや、これには前後の事情を御話せんとわからんのですが、わしはもと滿鐵の技師だつたのです。この汽船會社が上海に支店を持ちたいといふので、わしは滿鐵をやめて支店を取締ることに決定しました。その後、間もなくわしはその汽船會社と關係を絶つたのですが――事件といふのは、その後に起つたことなのです。しかし、いざとなると、かういふことに當る人間はないのです。わしも頼まれてみると氣の毒でもあり、多少の責任も感じますので、是非一肌ぬいで解決させてやらうと思つて來たわけなんです。ところが、實際にあたつて見ると、どうも問題が複雜してゐましてね、外國人が入る、支那人が騷ぐ、日本人が強請る――みんなで、この新明號事件を食ひ物にしようとしてかかつてるのです。全く以て御話にならない――。」

「ぢや、貴方が手を引いたらどうですか？」

「さあ、それも考へては見たのですが、どうもね、男として、今更投り出すといふことは。」

「だが、一體、この事件は、貴方が見てどちらが惡いと御考へなのですか？」

「わしの考へでは單なるアクシデントとしか思はれないのですが、――」

「では、日本側でそんなに大金の賠償を拂はねばならぬとはどういふ理由からですか？　何かそこに弱點がなくちや？」

「損害と人命の點ですな、ほかに何もないのです。ですが、現在の支那は金がなくて困つてるでせう――それで、何かしらからいふ口實をまうけては、外國から金を取らうとするんですよ。その遣り口は非常に惡辣です。」

突然憤慨し出した彼は、一紡績會社が職工の過失で死んだのに弔慰金を出さうとすると、その職工の家族なるものが四組も五組もやつて來て、終ひにはどれがほんたうの遺族であるかわからないところから、弔慰金を領事館へ委託して、警官立合の上で、送ることにすると、遺族と稱する者は、今度は大勢の無頼漢を驅り立てて、暴力をもつてその金を警官や役人から強奪して行つた、といふ一例を話した。

そこで、私は、最初は支那の民衆から國家の、、主義で分捕つたものを、支那の民衆が今ないくづしに恢復しつつあるのではないか、それが厭なら、日本人は全部支那から手を引いたら良からう――とまで註釋した。

彼は、それには答へずに、時間がないからと云つて、そそくさと部屋を出て行つた。

5

その後、私は、五十嵐君の事件がどうなつたか、暫く様子を聽く機會に接しなかつた。宿を變へようと思つても、前からの宿料を借りてゐるので、ついそれもずるずるになつて、一月もまぢかに迫つて來た。が、私の調べてゐる事柄にも、二三の有力な知人があらはれて、こちらの希望どほりの參考書を借り受けることも出來、やや系統立つた支那大衆の動行の方向についての示唆を得たやうな氣持になつた。

私は、それまで氣がつかなかつたが、カール・マルクスにこんな豫言があつたのであつた。――

「ヨーロッパの反動主義者どもが、追ひつめられて、アジアを通じて、逃亡を試みる際、最後に支那の壁に、原始的反動と、原始的保守主義の安全地帶に通ずる門に行きつくとき、誰か知る、その壁に『支那共和國、自由、平等、友愛』なる題字の書かれてあることを！」

マルクスのこの豫言は、レニンによつて忠實に科學的に研究されて、支那に於ける列國資本主義の亂舞に、強硬な無産階級的抗爭が試みられ、その方策は、レニンが死んでからも、スターリン、ブハーリンによつて受繼がれて居るのである。

現在の新興軍閥とブルジョア建設のための南京政府は、さういふ大きい史觀からすれば、或る程度までの過渡的役割を演じてゐるものとして、それにはその存在理由があつた。しかし、一面、新しい支那に新しい資本が集中すると同時に、世界の帝國主義戰爭の再勃發の危機は、刻々としてその裏に動き聚まつてゐるのだ。同時に、そのことは、かういふことを意味する。

一旦武漢政府の失敗と、廣東三日ソヴィエットの暴壓ののち、僅かに潛行戰術に、農民運動に方向を轉換した支那共産黨は、あらゆる機會に、あらゆる排外運動に、あらゆる勞働爭議に、あらゆるボイコットに、常に勞資間の空隙を求めて、幾萬人の犧牲の血で塗られた戰術的闘爭をゆるめないものだと。

私は、上海總工會の華々しかつた活動の歴史を辿つた。そして、文字の上でそれを知り、數字で記憶すると共に、暇にまかせて、日本人の自動車屋の大達公司といふギャラーヂのある横町を入つて行つては、その當時、反動白崇禧の軍隊と果敢な市街戰を挑んだ便衣隊のピストルの音を、その狹い小路から聽き取らうとした。閘北の商務印書館の一室には、總工會の前衞が軍隊に包圍されて歩哨解除を行はれた本部があつた。私は黄包夫を驅つて、現在の支那に、四十二事件當時の支那を夢みた。滬寧鐵道北ステーションの傍には、いまだに取除かれぬ、枯れた蔓草のやうな一連の鐵條網がある。黄浦江に面した、大阪商船會社碼頭の前の空地には、退却する北軍の捕虜を、英國軍が一週間雨の降る中に立たして置いて、日に一回づつパンを投つてやつたといふ空地がある。一度、足を南市の郊外に向けると、そこには、過去數ケ年の支那革命に重要な役割をはたした龍華といふ桃の名所がある。そこにある警備司令部は、たしかに上海のバスチールに相違ない。

私は次ぎ次ぎと、かういふ最近の史蹟をあさりはじめた。さうして、歩いてゐるうちに、私の頭の中には、最近の支那革命の生きた地圖が描かれて行つた。

フランス租界の Route de la Tour に、「觀我廬」といふ屋號を持つた、最近の蔣介石の住宅を發見した私は、どんなに發見の欣びを感じたことか！ そこへ、銃劍をつけた兵卒を、幅の大きい自動車の前後左右へ立たせて、出來るだけクッションにそりかへつて、宋美齡夫人と、英雄のやうに乘りつける新軍閥の面影を思ひ泛べて私はひそかに苦笑を禁じ得なかつた。私の手帳には、その第三百十一號といふ番地と、宏壯な純西洋風な建物のメモとが書き入れられた。

さういへば、現に、私達の泊つてゐる宿にも、一つの革命ローマンスがあつた筈だ。それは、番頭の一人に聽いた事であるが、李宗仁と關係のあつた一人の日本婦人が遙々李宗仁を訊ねて上海へ來て、彼に約束の履行を迫つたが、いくら書面を出しても彼は會見しなかつた。終ひに、番頭同道の上、彼をホテルへ訊ねて行つたが、廣西派の頭目である李宗仁はたうとう彼女に面會をゆるさなかつたといふことである。

――こんな事件の根を一つ一つ掘つて行くと、そこにはブルジョアジイが封建支那と代つて行く大きい時代の刻々の社會相が、激しい革命の渦にまきこまれたまま史實の金塊のやうにころがり出すのである。

私は本と新聞を離れて、地圖と足とで研究しはじめた。

かうした忙しい或る日、視察するところから歸つて來た私は、旅館の前に、異樣な人だかりのしてゐるのを見て、最初はいつもの物賣りぐらゐに思つて入つて行つたのであつたが、旅館の閾をまたぐと、そこに起つてゐる騷動の――しかもその中心に、五十嵐君の居るのを知つて、びつくりしたのであつた。

宿の玄關には、入る横手に洋館まがひの應接間が設けてあつて、來客はすべてそこで待つことになつてゐた。今その應接間の中央には、まつ蒼になつた五十嵐君が、しきりにもう一人の日本人と口論をしてゐるのである。對手の日本人といふのは、四十がらみのでつぷり肥つた、血色のいい男で、日本から來たばかりらしく、しきりに何かを日本語で呶鳴つて、

「君、これを通譯したまへ！」

と、五十嵐君に命令してゐた。

二人の前には、まだ辯髮をぐるぐる巻きにした苦力らしい男や、小さな支那帽を戴いた青服の勞働者や、だぶだぶの綿入れを着た黄包夫らしいのや、十四五人の汚い支那人がゐて、わんわ

ん騒ぎ合ひながら二人の方へ詰め寄せてゐた。それらの男達と、玄關から表の鋪道にはみ出てゐる二三十人の支那人とは、日頃は閑散な旅館の入口をまつ黒にして立ちはだかつてゐた。

「そんなことは、このわしには通譯出來ん！――第一わしを通譯だと思つたら間違ひや、あんたは！」

五十嵐君は頑固に頭を振つた。

「しかし、こんなちやんころに敗けてどうするのか、貴方は？――こいつらの云ふことをそのまま聽いてやつたら、日本國民の恥辱だぜ！――叱り飛ばして、さつさと退散するやうに話しなさいッ！」

新しく來た男の地位も漸くそれで讀めたやうに思はれた。彼は汽船會社の代理として、恐らく訴訟事件の事務引繼にやつて來たものであらう。

旅館の階段の前では、しきりに主婦が電話をかけて工部局を呼び出してゐた。

支那語のわからぬ私には、支那人達が何を要求してゐるのか皆目見當がつかなかつたが、それでも、めいめいに何か叫んでは二人の前へ拳を突出すので、大概の推察はついた。彼等は、新明號の溺死者の遺族と稱するものであらう。つひに五十嵐棟助君の懼れ避けてゐた事實は、到來したのであつた。

「あんたのやうな、支那の事情もわからん人が來たんぢや問題が紛糾するばかりぢや！　よろしい、それぢや、あんたは自分で通辯でも何でも賴んで、しやべりたいことをしやべるがいい。わしは、この事件から全然手を引くから！　さあ、勝手におやんなさい。」

かう云ひ捨てたと思ふと、五十嵐君は、横のドアから勝手へ拔けて、どこかへ姿を消してしまつた。あとに殘つた肥つた男は、しばらく眼の前の苦力達を睨め廻して立つてゐたが、急にまつ赤になつて、

「馬鹿野郎！」

と呶號すると、これも急いでドアから姿を消さうと、體をひるがへした。その途端に、相手を失はうとすると見た支那人達は、いきなり手を伸ばして、その男の體軀を八方から押へつけた。

「この俺をどうするんだ！」

押へられた方は、赭い顏に眼も鼻も口もいつしよに大きく開いて、波に搖られでもするやうに上下へ身悶えしながら絶叫した。

「馬鹿野郎――おい！　人殺す、金よこす、當り前！　金出せ、金出せ！」

一人の苦力が、隅の方から、かう日本語らしいもので叫んだ。

この混亂を、宿の者達はみなまつ蒼な顏をして、應接間の四方から眺めてゐるだけであつた。私も、むしろ、かういふ現象が必らずどこかで出現するであらうことを待つてゐた一人のやうに、空しく傍觀してゐるほかはなかつた。戸外の苦力達は、内の騷ぎに氣がつくと蠅のやうに戸外へ群れ集まつて、見る間にガラス戸を打毀してしまつた。土間を踏む、素足と支那靴の音が、ど、ど、ど――と人間の屍を踏みにじるやうに陰氣に響いた。

新しく日本から來た代理人鳥海吉次君が、この支那群集の數十本の手から救はれたのは、彼が殆ど氣を失ひかけた頃到着した一群のライフルを持つた巡警とピストルを持つた日本人の警官達によつたのである。……

私はこの事件のあつた翌る日廣東にむかつて出發した。

支那の現在の物語のやうに、この話にも別に結論といふものはないのである。

四十二歳の現在迄

私の貧弱な自傳は、概ね私自身だけの問題で埋まつてゐる。それが、讀者を裨益しようなどとは、どう考へても思はれない。要約して記述すると、それも、ごく簡單な左の數十行で終るのである。

明治二十一年十一月十三日が、私の生れた日である。場所は、東北の仙臺市、父は木工、母は藩の小祿ものの末女であつた。何かの手落から、私は戸籍面では、私生兒といふことになつてゐる。父母の結婚關係が圓滿に行かぬところから、私は幼年時代から伯父の要之助の手許に引取られ、東京や仙臺や、もつと北の田舍町へ轉々として移住した。伯父は開業醫であつた。小學校へ入つたのは、宮城縣と岩手縣の縣境の岩崎町といふところであつた。その高等科第二年で、仙臺の第一中學校へ入學し、十五歳頃から社會主義思潮の洗禮を受けて、消極的に官學を嫌つた。伯父の意志に反して十七の時に上京した。東京では苦學生のむさくるしい生活に沈湎した。十九歳の春、徳富健次郎先生に拾はれてアメリカへ渡つた。アメリカでは、與へられた限りの勞働に從事した。三十三歳の春、滿十三年半の異國放浪を切り上げて、再び生活難に面すべく歸國した。やがて雜誌「中外」の編輯に從事したのち、最初の小說『三等船客』を同誌に發表した。——震災、その他の日本に於ける特殊な反動思想と鬪ひつつ、依然として私自身の主義に據りながら、今日に到つてゐる。三十三歳の五月に結婚、現在四十二歳の五月までに、三人の子供達の父親となつてゐる。

特別な研究でない限り、これ以上を私については、自分で書きたくはない。それに、凡ての作家のやうに、私の大部分の經驗や思想や感情は、私も、自分の作物の多くにどんなかの形で發表してゐるのである。それから、又、私とても、まだまだ追懷に耽るやうな年齡でもないのだ。

しかし、この自傳の斷片が、ただそれだけに終らない爲めに、私は、書いた作物の發表されたそれぞれの時機にあたつての、社會的環境——狀勢ともいふべきものを、歷史の覗き眼鏡のやうに書いて見たいと思ふ。

私は、野心と希望と漠然ながらも社會主義的階級意識を持つて、三十三の春に日本へ歸つて來た。私の歸つた當時の日本の文學界は、狹い日本國中だけの汎日本主義思想が充溢してゐて、マルクス主義も一部の運動者や理論家だけの掌中篇となつてゐて、文學に於ける社會主義運動は、一向に發展の餘地がなかつた。私は、暫くデカダニズム、神祕主義、人道主義、古典主義、合理主義、自由主義などの諸思想の底にぢつとしてゐて、日本の文壇や劇壇の傾向を知らうと力めた。それを知るまでには、さほどの努力も必要としなかつた。

私は一つ新しい運動を起さうと思つた。それには、私小說でふやけきつた文壇の空氣を一掃するやうな物を發表することが動機とならねばならない。それには、新しい地平線を文壇へ展開する作物であらねばならない。私は、その

ヒントをフランスのジュール・ロマンのユナニミズムから得た。主人公のない小説、すべての人物が主人公となる小説、群集それ自身の占有する小説の研究——から企圖して描出したのは、「三等船客」である。

次に、私は、反抗意識を持つた貧乏人達を書からとした。「脱船以後」とか、「赤い馬車」、「熊さんの死」などは、かういふ漠然ながらも社會主義的目的を持つて書かれた作物である。

しかし同じ社會主義的作物であつても、讀者に讀まれる種類の作物でなければならない。それは[illegible]な社會主義童話であつてはならない。其中、それは先づ藝術品であることが必要だ。この決心から、私は、自分の知つてゐる限りの外國語の知識や漢語、日本語の知識を動員して、語彙を豐富にする努力をした。こんなことを云ふのもすこし氣障な話だが、「三等船客」としてあの船で日本へアメリカから歸る船路に、私は尨大な漢和大辭典を一冊、めずらしい字句や面白い文字を、毎日ハンモックの上で筆記して歸つたのだ。横濱へつく時、おそらく、字典一冊が不要になつて、私はそれを海へ沈めた。

これは一例であるが、文學の技術的方面に對する私の苦心は、著しく能動的であつた。

その當時、日本の文壇の一隅に、ごくさゝやかなうすつぺらな「種蒔く人」といふ國際主義の文學雜誌が出版された。私の妻が重病で、濱田病院に日に十圓以上もの金を使つて居り、私は失敗して無一文であり、書いた物も賣れず、といふ境遇にあつたが、私は、この「種蒔く人」の傾向に大體贊成であつた。まもなく、雜誌の禮狀を出すと小牧近江、村松正俊の二人が私を訪れ、その同人となることを奬めた。その前に、私も「自由」といふ雜誌を出したが、これは一號雜誌で最期を遂げた。そこで「種蒔く人」の同人となつて、私はその小さいながらも團結力の強い集團の一人として働いた。全然何もない私に、彼是一百圓ほどの負債を拵へて、妻は、一旦故郷の千葉縣へ病氣保養に行き、病院で危ふく流産することから救はれた長男「力」を生んだ。何か書かなくては食へぬ私は、「早稻田文學」とか、「[illegible]」とか、手當り次第の三流どころの雜誌へ投書した。そして少しの餘裕を作ると、千葉縣御宿町の一家にわび住ひを營み、はじめてあやす長男の泣聲を珍らしがりながら、取つて投げるやうに焦躁的な作物の山を築いた。この頃は、私の思想も、一番に瀰漫な濁みを作つてゐて、その頃の作物である「ロシアナ夫人の舞踏」とか、『裏切る者』などといふ一聯の平凡な作物を顧ると、今でもどうしてこんな物を書いてゐるかと思ふのである。

それから暫く「大毎」や「週刊朝日」、「サンデー毎日」などに關係がついて、『麺麭』、『脅威』、『拳銃を買つた男』などが發表された。中央の文壇と云つても、私を對手にしてくれたのは、わづかに「新潮」ぐらゐのところであつた。

しばらくして震災が襲到した。この震災は、大杉榮を殺し、平澤計七を屠り、私達をも反動思想の白刃で脅かした。一般に社會主義思想に對する國民のボイコットが開始された。プロレタリア文學を、「種蒔く人」を中心に提唱して來た私達が、すつかり職場封鎖を食つたのは、いかに日本の資本主義の根據が薄弱であつたかを示す好材料であらう。衣食の道を絶たれさうになつた私は、止むを得ざる方向轉換を行つて、出來るだけ技術方面の勝つた作物を書かうと思つた。『佐吉の父親』、『燕雀』、『三人の女』、『日學者』、『最後に笑ふ者』などといふ中篇は、この反動期の作物である。と云つて、私は、その當時の或る種のプロレタリア作家のやうに、反動思想に苟合したやうな作物だけは書

かなかつた。

つづいて、私は長篇「大暴風時代」を書いた。これは、私のアメリカ物の結末であつた。いままで、アメリカの勞働生活や、尠くとも私の目撃したアメリカだけを書いてゐた私は、これで總決算をして、今後は日本の無産階級生活の中へ食ひ入つて書くつもりであつた。しかし時代は、反動の波と、資本主義の周期的循環としての不景氣が跳梁してゐた。私は、日本のプロレタリア文學の戰術の新轉回の一助にもと、「アプトン・シンクレーア氏の『ジャングル』を譯した。續いて『ジミー・ヒギンス』。

さうしてゐる間に、日本のプロレタリア文學運動にも、一つの外在的な勢力が押し寄せて來て、私達の陣營を漸次に侵蝕して行つた。それは、根幹の方針を第三インターナショナルの指導方針に置いた、日本の共産主義運動の轉向によるインテリゲンツィア層の浸潤であつた。「種蒔く人」の震災以後の後繼者である「文藝戰線」には、ロシア流な帽子を横ちよにかぶつた青年が、冷然として私達を睥睨しながら、福本イズムを說いた。文藝の分野へ、直接の政治目的の置換へが行はれようとした。

私は、その時分に、急性の腎臓炎をわづらつて、「文藝戰線」とも「前衛座」とも直接に關係してゐることが出來なかつた。しかし、考へて見ると、實踐的に大衆の掴得出來ない極左的マルクス主義者が、學生運動だけで終始してゐるやうな「マルクス主義文學運動」に、私は贊成出來なかつた。その意味で、私は群馬縣から福本イズムに抗議を發表し、同じ意味からその年の「改造」の六月號に『太陽の黑點』を發表した。「現實の日本を看よ！」これが『太陽の黑點』のテーマであり、イデオロギーであつた。

「文藝戰線」は二回の脫退者を出して整理された。それは同人にとつて非常に力づよい刺戟であつたと共に、日本のプロレタリア文學運動にとつても、マルクス主義の再見直しに資するところの多い試煉であつた。私も及ばずながら、福本イズムに取つて代るべき純正マルクス主義の把握につとめた。その時代から今日までに書かれた作物が、主として『ムッソリーニ』や『獸籟』や『クレオパトラ』、「拵へられた男」のやうな暴露的題材を扱つたのは、かういふ理由からである。

昭和三年の十月に私は、南方支那の革命のあとを訪ねた。現在連載してゐる長篇「支那」の如き、この篇中に收められた「敗軍」の如き、支那革命運動に關する作物を、私は今後もどしどし書いて見たいと思つてゐる。

世界は、今後支那を中軸にして、一廻轉するかも知れないのだ。——

前田河廣一郎

村で一番の栗の木

落葉日記

紙風船

ぶらんこ

命を弄ぶ男ふたり

岸田國士

私はこれまで戯曲のために戯曲を書くことしか考へなかつた。人間の魂の最も韻律的な響きを捉へ、それを言葉の瞬間的生命として發見することは、私の創作活動を支配する興味の全部であつた。つまり、これまでの私は、何かを言はんために戯曲を書くのではなく、戯曲を書くために何か知ら言へばよかつたのである。

昭和四年六月

岸田國士

村で一番の栗の木（五場）

亮太郎
あや子
その他無言の人物數人

第一場

山間の小驛――待合室
眞夏の拂曉

發車の直後といふ氣配。

二三の旅客に交つて、都會のものらしい夫婦連れが、改札口の方から現れる。一隅を選んでそこに手荷物を置き、汗を拭ひ、左右を顧み、やがて、女が先に、男がそれに續いて腰を下ろす。

他の旅客は、待合室を通り過ぎるだけである。

男は出來合ひらしい白の洋服、女は現代風の可なり整つた身じまひ。――手荷物は、服裝の割に野暮な信玄袋と行李鞄、それに、中型のシューツケース。

亮太郎　疲れたらう。

あや子　やつぱり眠れなかつたわ。どつかに顏洗ふところないか知ら……。

亮太郎　朝飯を食へば、前の宿屋で洗へるけれど、まだ早すぎるだらう。それとも輕便を一つ待つて、六時のに乘つたつていいや。

あや子　六時のだと、何時に着くの。

亮太郎　七、八、九、まあ、九時だね。

あや子　それでもいいわね。折角買つたお辨當が無駄になるけど……。

亮太郎　お土産に丁度いいよ。

あや子　お辨當のお土産つて、あるか知ら……。

（間）あたし、さうする。

亮太郎　待てよ、一寸、見て來よう、もう起きてるかどうか。（出て行く）

あや子　（待つてる間、信玄袋の上に兩腕を託し、それに額を當ててゐる）

亮太郎　（首を振りながら入つて來る）駄目。駄目だ。あと一時間かかるつて……。それぢや六時のに間に合はない。

あや子　その次は何時？

亮太郎　（時間表を見ながら）六時の次が、七時三十分……その次が九時三十分……。

あや子　ぢやいいわ。まだおなかはすいてないし、それに、顏なんかどうだつていいんでせう。見る人なんかゐやしないわね。

亮太郎　見る人はゐるよ。みんな見るよ。それこそ、通る奴通る奴、みんな振り返つて見るよ。君のやうな女は、開闢以來、あの村に現れた例はないんだから……。

あや子　いやな方……。でも、お化粧なんか氣をつけて見る人はないでせう。これでいいのよ。

亮太郎　でも氣持がわるかないかい。

あや子　いいの、面倒臭いわ。

亮太郎　そんならいいさ。輕便一時間半、馬車一時間、谷を下り、坂を上ること二十分、橋を渡ること二度、梯子段十七段、門から玄關までざつと十間、廊下二十歩、それでやつと座敷へ通ると、おやぢとお袋の口上が短く

見積つて滔々十五分、着物を着替へて風呂へはひり、昨夜は寝てないからと云つて一休みするまで、なかなか暇がかかるぜ。

あや子　いくらなんだつて、着く早々寝られやしないわ。お母さんは優しい方?

亮太郎　だから不斷さう云つてるぢやないか——お袋は、僕の云ふことならなんでも聴く。恐らくお嫁さんにも同樣だらう。うちには女の子がゐないから、きつと珍しがるよ。甘えてやり給へ。

あや子　甘えられるお母さんだといいわね。

(間)ねむいのよ、あたし……。(また信玄袋の上に突つ伏す)

亮太郎　寝てろよ。まだ三十分ばかりある。

(間)恐ろしい霧だ。

間。

あや子　あれ、霧なの。さうだわ、變ね、あたし、さつきから、なぜ煙みたいなものが一杯あるのかと思つてたの。やつぱり氣候のせゐね。

亮太郎　氣候のせゐさ。海拔二千九百尺、これからまだ登りになるんだ。君は白樺と云ふ木を見たことはないだらう。それから、落葉松、えぞ松と云ふやつ……。(間)眠れるかい。

あや子　ええ。

亮太郎　話はやめようか。

あや子　いいのよ。聴きながら眠るから……。

亮太郎　洒落たこと云つてらあ……君に、栗の木のこと話したか知ら……。

あや子　なに?

亮太郎　栗の木さ……。屋敷にある大きな栗の木さ。

あや子　ええ。

亮太郎　話したかい。

あや子　ええ。

亮太郎　なんて話したつけな。

あや子　村で一番の栗の木だつて……。

亮太郎　あれや、全く見ものだよ。二抱へある栗の木つて云ふのは珍しいだらう。栗が落ちる頃は、毎朝、うちぢうの女が出て拾ふんだが、朝の間だけでは拾ひきれないほどなんだ。

あや子　……。

亮太郎　此の秋は、東京へ送らせることにしよう。獨りぢや、栗を燒いて食ふ氣にもならないからね……。(間)だけど、家ん中が穢いのをびつくりしちや駄目だよ。田舎の家なんていふものは、古いのを自慢にしてるんだからね。焚けるほど値打があると思つてるんだ。その代り、風が吹いたつてぐらぐらするやうなことはない。

あや子　もうあと幾分?

亮太郎　三十分。

あや子　まだ三十分?　さつきとおんなじね。

亮太郎　おんなじだ。

あや子　時計が止つてやしない?

亮太郎　止つてやしないよ。

あや子　……。

亮太郎　輕便まで誰か迎へに來てるかも知れないよ。弟が來てるか、おやぢが來てるか。

あや子　お父さん、そんなにお達者なの。

亮太郎　達者もなにも、急ぐ時でなきや、馬車なんかへ乗りやしないよ。

あや子　お歩きになるの、馬車で一時間の處を……?

亮太郎　あたり前さ。田舎者つて、そんなものだよ。畑だつて、自分でするんだよ。

あや子　あら……。だつて、人を使つていらつしやるんでせう。

亮太郎　使つてるさ。使ふもんも一緒になつて働くんだよ。

あや子　そんなもんなの。

亮太郎　そんなもんさ。

あや子　さうでせうね。あたし、早くお父さんが見たい。

亮太郎　おやぢの方で腰をぬかすか、君の方で眼をまはすか、僕も早くそれが見たいよ。

あや子　なぜ？

亮太郎　なぜつて、お互に意外だらうからね。君が想像してる僕のおやぢと、おやぢが想像してる僕の家内と、その兩方とも、僕にはどうやら見當がついてる。實際と違ふ程度が、どつちも同じやうなものだよ。

あや子　さうか知ら……。お父さん、お髭を生やしてらつしやる？

亮太郎　さあ、髭つていふより、毛に近いものを生やしてたかも知れない。どうして？

あや子　髪は分けてらつしやる？　それとも……。

亮太郎　禿げてるかつて云ふんだらう。まだ禿げてやしなかつたらう。薄いには薄いがね。だが、分けてるなんと思ふと大間違ひだぜ。第一……もう止さう、そんな馬鹿な話……。君は、駄目だよ。わからないかなあ、田舎の百姓が、どんな恰好をしてるか……。

あや子　百姓つたつて、普通のお百姓ぢやないんでせう。

亮太郎　その差大ならず。僕が櫛を使つてたら、息子が女の眞似をするやうになつたつて村中云ひふらしやがつた。

あや子　まさか。

亮太郎　（笑ひながら）まあ、そんなもんだよ。（間）今のうちに眠とけよ。

あや子　もうねむくなくなつたわ。少し寒いか知ら……。

亮太郎　自分はどうなんだい。羽織はすぐ出せるやうにしてあるんだらう。朝晩はこの調子だよ、これから……。

あや子　夏涼しいと變ね。

亮太郎　夏だと思はなけれやいいさ。なにしろ、裏の森ぢや鶯が啼いてるんだからね、今頃……。

あや子　さうですつてね、去年の夏、輕井澤へ行つた友達がさう云つてたわ。輕井澤とそんなに違はないんでせう。

亮太郎　もつといいとこだよ、變な毛唐なんかうろうろしてなくつて……。

あや子　あなたは西洋人が嫌ひね。

亮太郎　嫌ひだよ、あんな化物みたいなもの……。それはさうと、僕の方の田舎にね、初めて毛唐がやつて來たことがあるんだ。もう二十年も前だけれどね。それが、今で云へば山岳旅行をやつたんだね、毛唐のことだから……。すると、一人の百姓が、山の中でその毛唐に出くはしたらしいんだ。その百姓、びつくり仰天して、山を駈け降りて來たのさ。さうして天狗がゐた、天狗がゐたと、村の者に注進に及んだからたまらない、その頃は青年團なんていふものはなかつたから、屈強な若いものが、手に手に得物を提へて天狗退治に出かけた、と云ふのは嘘らしいが、兎に角、あとで、それが毛唐だとわかり、なるほど鼻は高かつたと、みんなが……。

あや子　うそばつかし、そんな話……。だけど、ありさうなことね。（と云つて、今度は、腹を抱へて笑ひ始める）

亮太郎　それ見ろ、面白いだらう。君、毛唐好きか。

あや子　好きでも嫌ひでもないわ。

亮太郎　そんならいいや。

あや子　何がいいのよ。

亮太郎　なんだか忘れた。

あや子　……。

亮太郎　兎に角、栗の木は見ものだよ。花が咲

いてれば、一里手前から見える。

さや子　あたし、お辨當たべようか知ら……。お茶がないわね。さうだ、お茶がない。どうするつもりだつたのか知ら……。

亮太郎　飲まないつもりだつたんだらう。水で我慢するさ。此の邊の水はいいよ。それに藥かも知れないよ。ラヂウムかなんか含んでて……。

あや子　そんなら、濟まないけど、汲んで來て頂戴。

亮太郎　何處へ？

あや子　何處かへよ、きまつてるぢやないの。その邊に空壜か何か落ちてないこと？

亮太郎　よし、君が、それだけ徹底して呉れりや、水も汲んで來甲斐がある。待つて給へ。（出て行く）

あや子　（辨當を開いて食ひ始める）

此の間に、温泉廻りの上方者らしい男が、藝者か仲居風の女を連れて、汽車の時間表を見に來る。が、しばらくすると、また何處へか行つてしまふ。

亮太郎　（ビール壜を提げて歸つて來る）

あや子　（片手でそれにさはつてみて）あら、熱いわね。お茶を貰つてらしつたの。

亮太郎　男子意氣に感ずれば、お茶ぐらゐ貰つて來るよ。僕も食ふぜ。（腰をおろし、辨當を食ひはじめる）此の魚、大丈夫か。

あや子　お茶、どうして飲むの。

亮太郎　自分で考へろ。

あや子　かうすんの？（と云ひながら、喇叭飲みをしようとするが、思はしく行かない。徒らに脣を尖らすばかり）

亮太郎　（素知らぬ顏で）飲んだら、こつちへよこせ。

あや子　（すぐに）ぢや、はい。

亮太郎　何だ。飲んでないぢやないか。（流石に、手際よく壜を傾ける）

あや子　これで、折角の、紳士旅行も臺なしね。

亮太郎　臺なしなもんか。

あや子　だつて、あの汽車の中の濟まし方はどう。あたし、可笑しくつて……。不斷のみもしない葉卷なんかふかしてさ……。脚をかう組んで、額に八の字をよせて、そして文藝春秋を讀んでる光景は、たしかに歴史的よ。

亮太郎　君はどうだ。……止さう、顏が赧くなる。

あや子　おつしやいよ。あたしのどこが可笑しい？

亮太郎　可笑しいさ、あんなに何遍も時計を見ちや……。

あや子　時計？　あら……。（笑ひながら）汽車に時間はつきものよ。

亮太郎　驛長ぢやあるまいし……。しかし、君は案外可愛らしいところがあるよ。四十圓の腕時計で、たうとう一晩の睡眠を棒に振るなんて。

あや子　（もう相手にならない）おいしくないのね、此のお辨當……（一寸顏をしかめ）どら、お茶を飲まして……。

亮太郎　おやぢより、弟を見てびつくりしやしないかなあ。

あや子　なぜ。

亮太郎　無愛想な奴だからさ。

あや子　そんな？

亮太郎　いつか、模範青年つて云ふんで縣で表彰されたんだがね、なんでも、その時、知事なんかゐる前で、此の免狀みたいなものは、なんにもならないから返すつて云つて、問題を起しやがつたんだ。

あや子　でも、痛快な方ね。

亮太郎　痛快でないこともないが、誰にでもその調子だからね。君なんかにも、平氣でどん

なことを云ふかも知れないよ。

あや子　それがわかつてればいいわ。でも……。

亮太郎　亂暴なことはしやしないよ。ゐるかゐないかわからないやうな男だからね。十日も口を利かないことがあるよ。

あや子　まあ。

亮太郎　だから、こつちから、あんまり話なんかしかけない方がいい。うるさいと思ふと、返事をしないんだ、誰にでも……。

あや子　あなたにでも……。

亮太郎　(曖昧に)うん。(間)自然、みんなとの折合が悪くつてね。それはまあ、近頃のことなんだがね。

あや子　みんなつて、おうちの方と……?

亮太郎　それより、村の顔役なんかとね。そのくせ傭人にはいいらしいんだ。變なもんだね。使つてるものの評判は馬鹿にいいんだ。

あや子　社會主義ぢやない?

亮太郎　さうかも知れんよ。(間)そんなこともあるまいがね。

あや子　ずつと、おうちにいらつしやるのね。

亮太郎　師範を中途でよしてね、嫌ひなんだ學校が……。本はなかなか讀むらしい、何處で探して來るか。

あや子　でも、さういふ方も面白いわね。あたし、朴訥な方、好きよ。

亮太郎　馬鹿ぢやないんだよ。

あや子　馬鹿なんて、そんな……。ぢや、東京の者なんかはお嫌ひでせう。

亮太郎　都會といふものを輕蔑はしてるね。あれで、なかなか、理窟を云はせると、云ふらしいね。

あや子　油斷がならないわね。兄さんを負かしやしない。

亮太郎　こつちは、理窟は苦手だからね。農村問題なんか、眞平だ。

あや子　あなたは、もうすつかり都會人ね。

亮太郎　さうでもないが、所謂根こぎにされたものの一人には違ひない。その點、弟の偉いところも、わかるにはわかるんだ。

あや子　それやさうだわ。生れた土地を離れないつて云ふことは、善し惡しは別として、美しいことだわね。

亮太郎　(妻の顔をつくづくと見つめ)君にしてその言あり、世は擧げて郷土主義に靡くかと思はれるね。あゝあ、山川にして情あらば、嘗て一度志を立てて郷關を出でたる我れ、今、身に錦は飾らずとも、美しき妻を携へて、再び汝の懐に還り來れるを喜び迎へよか。ブウブカドン、ブウドンドンだ。

あや子　おや、おや……。

亮太郎　(やけに茶を飲む)

長い沈默。

あや子　霧が霽れてよ。

亮太郎　霽れた。(時計を見て)さ、出掛けよう。もうあと十分で出る。

あや子　輕便までは遠かないんでせう。

亮太郎　一足だよ。そこに見えてるぢやないか。あれの一時間は優に汽車の五時間草臥れる。大丈夫か。

あや子　大丈夫よ。

亮太郎　大丈夫か。そいぢや、辨當の空なんかいつまでも持つてないで、そいつを一つ持つた。(シューツケースを顎で指し、自分は信玄袋と行李とを兩手に提げる)

あや子　(慌てて辨當の空を椅子の下に投げ込み、起ち上る)

亮太郎　(歩き出しながら)旅行といふものは不思議なもんだね。動くことが苦にならん。

あや子　(これも歩き出し)ねえ、あなた、一寸待つて頂戴、(と云つて背中を夫の方に向

け）帯、ちゃんとなつてる？

亮太郎　なつてる。

　　兩人、再び歩き出す。

第二場

山の中腹にある農家の前庭

日盛り――

大きな栗の木の根もとに、蓆が敷いてある。

亮太郎が蓆の上に腰をおろして、ぼんやり遠くを見てゐる。

そこへ、あや子が現れる。

あや子　もうおすみになつて。隨分長いお話ね。

亮太郎　……。

あや子　あたし、あゝいふ時、何處にゐていいかわからないから、困るわ。お母さんは、どうしても、あたしに、お仕事のお手傳ひをさして下さらないの……。

亮太郎　長くゐるんぢやないからいいけれど、もう少し、「うちのもの」になれないかなあ……。

あや子　あたし？

亮太郎　君が努めてるつていふことはわかるよ。努めたつて無理だつていふこともわかつてるんだが、どういふか、一々、いろんなことにこだはらずに、平氣でやれないもんかなあ。

あや子　どんなこと？

亮太郎　どんなことつて……例へば、芋の皮をむくんだつてさうだ。やれ、お手傳ひしませうとか、やれ上手にむけるか知らとか、やれ、何んだとか、かんだとか、わざわざ、自分を自分で特別扱ひにしてるところがあるよ。

あや子　保次郎さんが、何か、あたしのこと、おつしやつたんでせう？

亮太郎　保はなんにも云やしないよ、君のことなんか……まあ、あんまり、あれこれと氣を遣はない方がいいよ。どうせ、しつくりは行かないにきまつてるんだし、しつくり行つたところで、どうにもならない話なんだ。もつと、呑氣にして給へ、呑氣に……。その方が、お互に樂だよ。

あや子　あたしだつて、何も、それほど氣を遣つてるわけぢやないのよ。かういふ生活に慣れようと思へば、それや、もつと、どうにかしやうがあると思ふわ。だけど、やつぱり、お客さん氣分なんだから……。

亮太郎　それや、さうさ。僕が第一、さうなんだ。これが自分の家だと思つてみたところで、これをどうしようつていふ氣にはなれない。そのことで、今、保とも話をしたんだが、さしづめ、あいつから、無責任呼ばはりをされても仕方がないわけさ。

あや子　無責任だつておつしやるの。

亮太郎　まあ、さういふ意味なんだらう。それが、家運隆盛なら、僕が知らん顔をしてゐたつて、問題は起らないわけさ。――餘程苦しいらしいんだ。

あや子　……。

亮太郎　君は、こんな田舍で暮さうとは思はないだらう。

あや子　事情によつては、そんなこと云つちやをられないわ。

亮太郎　その覺悟があるか。

あや子　だけど、あなたがここにいらつしやれば、どうにかなるつていふの。

亮太郎　それや、わからないさ。保の言ひ分は、はつきりしてる。――ただ自分たちが働いただけでは追つ附かない、人の物を捲り取ら

なければ……と云ふんだ。物事をさういふ風に考へるやうになつてるんだよ、あいつはね。

あや子　何時でも何か考へてらつしやるやうね。――あの眼は、とても素敵だわ。此の間も、草鞋を作りながら、本を讀んでらつしやるのよ。あたしがそこへ行つたら、ぢいつと眼をあげて、こつちを見てゐるの。その眼の美しさつたらなかつたわ――澄んでゐて、深みがあつて、そのくせ、冷たい感じはしないの。

亮太郎　馬鹿に褒めるね。あいつは、案外、角が取れてゐるよ。もつとゴツゴツしてるかと思つたら……君なんかには、なかなか優しさうぢやないか。

あや子　ええ、それや優しいの。あなたのお話ぢや、どんなこはい方かと思つたわ。ただ、物を言ふのがお嫌ひね。どうかすると啞みたい。何を云つても、首を振るだけなの。張合ひがないつたら……。少し、恥かしいのね。まだ、子供よ。

亮太郎　さうかしら……だけど、何か君、見たつて云つてたぢやないか、二三日前……。

あや子　あれは、あなた……それや、子供つて云つたつて、丸つきり子供ぢやないんですもの……。それくらゐのこと……。でも、あれを見て、あたし、ほんたうに綺麗なものを見たやうな氣がしたわ。

亮太郎　綺麗なものか……。つまり、ロマンスにしてゐるのさ、君の方で……。

あや子　それはどうでもいいの。なんだか、あたしたちのさういふやうなものと、全く違つた種類の……別の世界にでなければないやうな、――だと思つたわ。

亮太郎　そんな大袈裟なものぢやないんだらう。――二十三にもなれば、男の戀愛は空想でなくなるよ。――誰もゐない川つ縁で、魚の泳ぐのを見てるやうなふりをして、そこへ來かかつた女の子を、呼び止めて見るぐらゐの度胸はついて來る。そればかりぢやない。何か手渡ししてたつていふぢやないか。

あや子　もう止しませう、そんな穿鑿は……。あたし、そんなつもりで云つたんぢやないの。ただ、さういふところを見て、自分でハッと顏を赧めるやうな、そんな印象を受けなかつたことが不思議に思へたからなの。つまり、それほど、現實ばなれがしてたんだわ。あの女の子、なんていふ名かしら　。何處の子かしら……、落葉搔きの歸りらしいのよ。

亮太郎　益々詩的ぢやないか。パストラルだね。

あや子　さうよ……。なに、そんな笑ひ方して……。いやな方ね。（間）また少し歩いてみないこと、その邊……。さうさう、あたしと一緒に歩くのは、何んとかつて云つてらしつたわね。

亮太郎　目立つんでね。

あや子　（溜息をつき）窮屈ね。

亮太郎　窮屈だが、仕方がないさ。強ひて周圍の感情と闘ふ必要もないさ。

あや子　さつきは、もつと平氣になれつておつしやつたくせに……。

亮太郎　だからさ、もつと平氣で土地についた生活をすればいいんだよ。わざわざ、都會人ぶらなくつたつて……。

あや子　變なことをおつしやるのね。もう、わからない、あたし……。あなたは、もつと、人の氣持のわかる方だと思つてゐたわ。丸で無茶よ、この頃、あなたのおつしやることは……。どうかしませうよ、このままぢや、お互がつまらないでせう。あなたは、何かの不滿を、あたしの處へばかり持つていらつし

やるんぢやない。

亮太郎　さうか……。さういふ處があるかも知れない。わるかつたよ。どうもいけないね、かういふ生活をしてると……。頭がすつかり惡くなる　感覺が鈍くなる。精神に潑剌としたところがなくなるよ。田舍の生活が必ずしもわるいんだとは思はないが、自分の生活でなくなるからいけないんだ。君は、今日は顏色が惡いね。氣分がわるいんぢやない。

あや子　今、おつしやつたこと、あなたも氣がついてらつしやるなら、あたし、安心だわ。でも、ほんとに氣をつけて頂戴ね。ここにゐる間だけなら、まだいいけれど、あなたが、ずつとさういふ風になつておしまひになるんぢやないかと思ふと、あたし、泣きたくなるわ。（間）さう云へば、あなたも、今日は、お顏色がよくないのね。さつきのお話で、また心配がふえたからでせう。（間）でも、保次郎さんは、あなたのことを惡くは思つていらつしやらないんでせう、そんなに……。

亮太郎　好く思つてるとも云へなからうね。

あや子　困るわね。

亮太郎　別段困りもしないさ。こつちが向うをわかつてやるほど、向うぢや、こつちがわからずにゐるだけさ。弟なんていふものは、そんなもんだよ。

あや子　あたしから　よくお話してみても駄目かしら……。

亮太郎　話すつて、何を話すんだい。

あや子　あなたの氣持なり何なり……。

亮太郎　僕の氣持を話したつてしやうがないさ。あいつに、どうして貰はうといふわけぢやないんだから……。

あや子　でも、誤解があつちや……。

亮太郎　面白くないといふのかい。しかし、それもね、時機の問題だと思ふんだ。今は何と云つたつて駄目だよ。僕が、家の金を使つて、都會に出て、學問をして、そして鄕里のことは顧みないで、下らない仕事をしてゐるといふのが、あいつの氣に喰はないんだ。そいぢや、自分は、どれだけ鄕里のために盡し、どれだけ有意義な仕事をしてゐるかといふと……（首をふり）いけない、どうも、頭が惡い。しかし、あいつはなんと云つたつて、子供ぢやないよ。なるほど、油斷のならないところがある。さつき云つたやうなことばかりでなく、僕自身が、なんだか、あいつに脅かされてゐるやうな氣がしてしやうがない。

あや子　それはあなたのひがみよ。

亮太郎　それが君にどうしてわかる。――いや、僕の云ふのはね、あいつに、何か企みがあるといふやうな、そんなことをぢやないんだ。もつと運命的な、どうすることも出來ない二人の關係によることらしい。はつきり云ひ表すことはできないがね。（間）以前はそんなことはなかつたんだよ、二人とも小さい時はね、どつちかつて云へば仲のいい兄弟だつた。（空を見上げ）よく此處で遊んだもんだ、此の栗の木の下で……。ある日、學校ごつこをしようつていふんで、僕が先生になつたわけさ。勿論、年上のものが先生になるのを當然と心得てゐたわけだが、あいつは、いきなり、ぢや、兄ちやんが先生ならおらは校長さんだと云ひ出しやがるんだ。それで學校ごつこはおじやん……。今度は、兵隊ごつこさ。その頃、松本の聯隊かなんかが村へ演習に來てね、子供たちは、盛んに兵隊ごつこをやつたもんだ――そこで、僕が軍曹になると云ひ出した。――可笑しいだらう、それはね、うちへ泊つた兵隊の頭が軍曹だつたんだ。さうすると、やつは、どうしてさういふ氣になつたか、いきなり、ぢや、おらは斥候だ、と云

つて駈け出したまゝ、何處へ行つたのか、晩まで歸つて來ないんだ。これには僕も閉口したよ。やつはどうも、見境を見境と思はないところがあつた―

あや子　それより、想像力があなた以上に發達してたわけよ。

亮太郎　想像力がね。うん、それはたしかにさういふところはあつた。（間）しかし、此の栗の木の下は懷しいよ。（また空を見上げ）五六年前に比べても、氣のせゐか、葉の茂り工合が、一層物々しくなつてゐる。東京附近に、こんな栗の木は一寸ないだらう。何しろ、此の村で一番大きいんだからね。樹なんていふものも、これくらゐになると、どことなく靈的な偉大さといふか、一種犯すべからざる威嚴を備へて來る。神秘的でさへある。それにいろいろな思ひ出が結びつき、家といふものの傳統的な觀念か加はつて、今の僕の生活に、何か大きな力が働きかけて來るやうな氣がするんだ。考へやうによつては、氣味がわるい。

あや子　あなたは、東京にいらつしやる時と、まるで違つておしまひになつたわね。

亮太郎　どういふ風に……。

あや子　物事を妙に考へ込むやうになつてらつしやるわ。そんなぢやなかつたんだけれど。

亮太郎　（強ひて快活に）なに、考へてる最中のことを口へ出して云ふのと、考へてしまつたあとで、何か別のことを云ふのとの違ひさ。新しい刺激がないと、同じことばかり考へるやうになる。ああ考へてみたり、かう考へてみたりするんだ。同じ頭で、同じ事をひねくつてゐるほど馬鹿げたことはないよ。（間）處で、今晩はね、一寸長野まで行かなきやならん用事ができたんだ。寂しいだらうけど、留守番をしててくれる？

あや子　どんな御用なの……。あたし、行つちや、いけない？

亮太郎　中學の同級會なんだよ。別に行つたつてしやうがないんだが、家のことで、また何かと世話になる奴も來るしするから、顏だけ出しとかうと思ふんだ。遲くなつても泊らずに歸つて來る。終列車で、あすの晝は歸れるから……。

あや子　さう……。ぢや、しかたがないわね。そいで、もうすぐお出かけになるの。

亮太郎　今、馬車を呼びにやつてある。（間）洋服にしようか。

あや子　どちらでも……。白いのなら、洗濯をしなくつちや駄目でせう。着てらつしたまゝよ。ああいふもんの洗濯なんか、一體どうするの、――さうさう、訊いとかうと思つて……。

亮太郎　ぢや、和服にしよう。

あや子　でも、袴がいるでせう。

亮太郎　いらないさ。いるもんか。（間）ぢや、出してくれ。（起ち上る）

あや子　（やや聲を落して）昨夕ね、お母さんがおつしやつたのよ――あのね、保次郎さんの單衣が、もう着られるのがないんですつて……。だから、古いんでいいから、亮太郎のを一枚やつてくれつておつしやるの。

亮太郎　やつたらいいぢやないか。

あや子　ええ、それがね、浴衣なら二枚あるけど……單衣は、ちよいちよい着と、よそ行と、一枚づつきや持つて來なかつたでせう。どうしようか知ら……。

亮太郎　よそ行をやつたらいいだらう。

あや子　でも……あなたが……。

亮太郎　いいから、やれよ。今日は、ぢや、少し暑いけど、もう一つの洋服を着てから。

あや子　さうなさる？

亮太郎　さうするより、しやうがないだらう。

あや子　今日は、いい方を着てらしつて、それを、あした、なにしたらどう……。一日ぐらゐのびたつて……。

亮太郎　それぢや、まづいよ。すぐ出してやり給へ……。

あや子　お母さんは、やつぱり、保次郎さんが可愛いのね。

亮太郎　だから僕が可愛くないつていふわけぢやないよ。

あや子　いいえ、少し變だと思ふわ。あたし、そんなこと、云はれてするのは、いやよ。だつて、あの方、着物なんて召すことがある？　ないぢやないの。あたしが、行李を開けるのを御覽になつて、急にそんなことおつしやるのよ、お母さんは……。ちやんとわかるわ。年寄りつていやなものね。

亮太郎　おい。

あや子　はい……。御免なさい……。（間）あ、あの馬車でせう。あんなに埃を立てて……。

兩人去る。

舞臺、しばらく空虚。

保次郎、うつむき加減に、鍬を肩にかついで、ゆるやかに歩を運んで來る。彼は、古い紺のズボンに脚絆をつけ、上はシャツ一枚、無帽で髪の毛を長く伸ばしてゐる。一寸立ち止つて、あたりを見まはす。また歩き出す。栗の木の根もとに、鍬を投げ出し、兩腕を腰にあてて、一時、眼を細くして遠くの方を見入つてゐる。不圖、何か考へ込むやうに、空を仰ぐ。溜息をつく。どつかと、蓆の上に腰をおろす。小型の書物を取り出して、頁を繰るが、それを讀み續けるでもなく、下に置いてまた溜息をつく。首をやけに振る。頭を木の幹にもたせかける。

第三場

前場と同じ。

月夜。

遠くで太鼓の音がする。

あや子が栗の木の下にしやがんでゐる。

亮太郎が現れる。

あや子　何處を歩いてらしつたの……、こんなに遲くまで……。みんな心配してたのよ。

亮太郎　心配することはないさ。まさか自殺もすまいからね。

あや子　そんな心配ぢやないのよ。あなたは、すぐそれね……。（間）途で、保次郎さんにお遇ひにならなかつた？

亮太郎　保は、今、そこにゐたぢやないか。逢ふかい。いや、遇はなかつたよ。月夜で道を迷ふ心配はないし、水車を抜けて、釣橋のところまでぶらぶら歩いて行つたよ。頭が痛いのもなほつた。

あや子　それやよかつたわね。あたし、また、何處へいらしつたのかと思つて……。散歩の時は、何時でもさう云つて出てらつしやるのに……。

亮太郎　その邊を一寸ひと廻りして來るつもりだつたのが、つい、引張られて行つてしまつたんだ。

あや子　……。

亮太郎　月の光にさ……。月の光といふものは、人をどこまでも引張つて行くものだよ。あれや、確に魔だ。吸ひ込まれて行くとでもいふか、自分が歩いてゐるんぢやない、自分のまはりにある空氣が、からだを包んだまま

流れて行くやうな氣がするんだ。

あや子　もう遲いのよ。何時だと思つてらつしやる？　やすみませうよ。

亮太郎　まあ聽けよ。此處に立つてゐると、此の栗の木の下は暗いやうだらう……。葉が茂つてゐて、此處だけが影になつてゐるせゐだ。處が、遠くから見ると、そら、あの道の曲つてるところね、あの邊から見ると、此處のところだけが、うつすらと、妙に光つて見えるんだ。木の葉を透して來た月の光は、やつぱり青くなるのかね。青く、しかも、濡れたやうな光り方がする。その光の中に、無論、君のさうしてゐる姿が浮き出してゐたよ。誰かもう一人ゐたやうだつたが、それははつきり見えなかつた。おほかた、君の影だらう。それとも、木の枝の影か……。さうだ、此の枝だ……（頭の上の枝を仰いで見る）なるほど、此處にかうしてゐると、自分のゐるところさへわからないね。（間）をかしな木だよ、此の栗の木は……。夜見るとなほ不思議だ。まるで、木の下にゐるといふ氣持はしない。何か、かう、覆ひかぶさつて來るね。この二三日來にさう思ふんだが、この木は、何か待つてゐるよ。何かしようと思つてるよ。人が此處へ來ると、奇妙に枝が垂れ下つて來る。さうして、頭の上に重たいものを積み上げるんだ。すると、なんだか、からだがしびれるやうな風になる。呼吸がつまつて來る。ぢつと立つてゐられなくなる。（間）そら、もう、脚がふるへて來た。こら、（と云つて心臟に手をあてて）ここがこんなに……（さう云ひながら、ぐつたりと、そこへ腰をおろしてしまふ）

あや子　（あつけに取られて、そこに立ちすくむ。が、氣を取り直して）あなたは、たしかにおつむが疲れていらつしやるのよ。神經衰弱つていふんだわ。一度お醫者さんに見ておもらひになつたら……？

亮太郎　大丈夫だよ。（間）そのくせ、此處へはよく足が向くんだ。そればかりぢやない。おやぢに用がある。――おやぢはよく此處で仕事をしてゐる。靜かに本を讀まうと思ふ。――此處が一番靜かだ。話相手が欲しい。――此處へ來れば誰かゐる。殊に、君の側に行きたいと思へば、此處に來さへすればいい。――僕は、此處よりほか氣に入つた場處はないらしい。

あや子　そんなことはないんですけれど……。

亮太郎　別に惡いことぢやないからいいさ。だが、僕はもう、この木の下は御免だ。今日限り、此處へは來ないよ。（間）どうしてそんな處に立つてるの……。もつと側へ寄れよ。誰も見てやしないよ。さ、ここが平でいい。

あや子　（云はれるままに腰をおろす）

亮太郎　そろそろ東京へ歸りたくなつたらう。それより、もうとつくに此處がいやになつてるかも知れない。よく辛抱してくれたね。

あや子　どうしてそんなことおつしやるの。ちつともいやになんかなりやしませんわ。ただね……？

亮太郎　ただ……？

あや子　ただ、あなたが、あんまり鬱いでばかりいらつしやるから……。

亮太郎　さうか、それぢやもつと愉快にならう。（間）君、今日は、午前中、何をした。

あや子　今日はね、此間から溜つてる新聞を讀んでしまつたの。

亮太郎　何か面白いことがあつたか。

あや子　あなた、御覽になつたんぢやない。

亮太郎　漫畫だけさ。それと讀物……。「ダブとドフ」ね、時事の附錄さ、あれは傑作だね。

あや子　さう？　あたし見ない。

亮太郎　お話にならん、あれを見ないなん

て……。

あや子　どういふ話なの？

亮太郎　どういふ話つて……いろいろあるさ。それから、笑話にもなかなかいいのがある。近頃感心したのにこんなのがある――男が、女を自分の横に坐らせて自動車を走らせて來る。奴さん、片手にハンドルを握り、もう一方の手で女を抱いてゐるんだ。それで、お巡りさんが、「こら、こら、兩手で持たにやいかん」と注意したもんだ。すると「自動車がどつちへ行くかわかりません」とやつたね。

あや子　（ぽかんとしてゐる）

亮太郎　わからんのか。

あや子　（やつとわかり）ああ、さう……。面白いわね。

亮太郎　面白くなささうな面白がり方だな。そいぢや、これはどうだ。（間）おい、聽いてるのか。

あや子　聽いてますわ、（間）でも、あなた御自身が、無理に面白がつてらつしやるんぢやない、今日は……。お加減が悪いなら、もう家の中へおはひりになつたらいかが……？　だんだん冷えて來ましたわ、また風邪でもめすと……。

亮太郎　もう少し、ね、いいだらう。もう少し饒舌らしてくれ。面白くなければ、默つてほかのことを考へてゐてもいい。饒舌りたいといふ本能は死も恐れないといふ話がある。このまま默つて寢ろと云はれれば、僕は、潔く死を選ぶ。そこでだ、ええと、なんだつけな、君は、僕のうちを、もう少しどうかしたうちだと思つてたらう。かう聞くと君は、なんと答へていいか解るまい。ぢや、言ひ直さう。僕がどうして君をこの家に連れて來たかと云へばだね、勿論、こんなぼろ家を見せたいからでもなければ、おやぢやお袋に君を引合はせて、大に孝行振りを示さうとしたわけでもない。君はどう思つてるか知らんが、それは發つ前にも云つた通り、おやぢもだんだん年を取るし、弟は家の身代を固めるといふことに興味も希望ももつてゐないし、やつぱり僕が一度歸つて、おやぢが死ぬまで相當に暮して行くだけのことはして置かなければならんと氣がついたからなんだ。そこで、歸つて見ると、もう遲い。少しばかりあつた山も畑も、大方は人手に渡らうとしてゐる。君は、その時だね、ある失望を感じやしなかつたか。

あや子　……。

亮太郎　この栗の木も、そのうちに、誰かが來て、伐り倒して行くかも知れない。さういふ日が來るやうな氣がするんだ。

あや子　あなたの心配してらつしやることは、あたしには、ちつともわかりませんわ。あなたのおうちの財産がどうであらうと、それが、あなたに取つてどうもなければ、あたしだつてどうもありませんわ。あなたは、そんなことを氣に病んでいらつしやるの。

亮太郎　そんならいいさ。ぢや、もうなんにも云ふことはないよ。（頭を抱へて、かすかに身悶えする）僕は、やつぱり東京へ歸らうと思ふ。その方がほんとだといふ氣がする。つまらんと云へばつまらんが、あんなものの研究も、しかけてみれば、續けてやりたい氣もするしね。さう云へば、此の邊には、蝙蝠が多いんだよ。そら、昨夕も臺所にゐたぢやないか。今、巣を見つけてゐるんだ。

あや子　ぢや、毎日、森の中を歩いていらつしやるのは、それなの……？　お父さんが笑つてらしつたわ。子供の時分は、あんなぢやなかつたつて……。いやね、默つて……。

亮太郎　（妻の意外にも快活な調子に惹き入れ

られて――云ふとまた五月蠅いからさ。子供の時分つて、俺が子供の時分は、おやぢはうちにゐた例はないんだからね。祖父がうちにゐて畑をする、おやぢは材木を伐り出しちや、車に積んで町へ運んだもんだ。その頃が森原家も得意の絶頂だつたらしい。おやぢは、何か君にこぼしやしないかい。

あや子　いいえ、別に……。でも、お父さんは面白い方ね。時々人を笑はせるやうなことをおつしやるのね。

亮太郎　どんなこと……？

あや子　をかしいからよすわ。

亮太郎　いいから云つてみ給へ。

あや子　あたしが歸つて來たので……よしませう、つまらないことだから……。

亮太郎　そんなこと云つてるひまに云つたらいいぢやないか。君が歸つて來たので……？

あや子　村中の男がおめかしをし出したつて……。

亮太郎　馬鹿な……。

あや子　それ御覽なさい。

　長い沈默。

亮太郎　そんなこと云ふもんかい。君がさう思ふから云つたんだらう。白状しろ。

あや子　いいわ、そんなら……。

亮太郎　怒らなくつたつていいさ。（間）さつきから太鼓の音がしてるね。お祭の稽古だな。

　長い沈默。

第四場

前場と同じ。

朝――雪が降つてゐる。

遙かに騒々しい聲が聞える。その中で、亮太郎の怒氣を含んだ喚聲が一段高く耳につく。最後に、「馬鹿ツ」と一聲、あとは靜寂。

あや子が、亮太郎を抱くやうにして、素足のまま、後ろを振り返りながら現れる。栗の木の根もとに亮太郎を寝かせ、額の毛を撫で上げ、その顔をのぞき込む。

亮太郎は、眼をつぶつて、苦しさうに呼吸をしてゐる。――あや子の絶望に近き表情。

あや子　あなた、しつかりして下さい。お苦しかありませんか。大丈夫ですか。おつむり冷やしませうか。待つてて頂戴……。（起ち上り、その邊を見まはす）誰か、一寸來て下さい。（返事がないので、自分で母屋の方へ走つて行く）

　やや長い間。

亮太郎　（かすかに眼を開いて、手を額のへんに當ててみる。それから、喉をさする）

あや子　（金盥に水を入れて持つて來る）いますぐ……（かう云ひながら、甲斐々々しく手拭を絞り、それを額に當て）いやよ、あなた、あんなことなすつちや……（夫の胸に泣き伏す）

亮太郎　（割合にはつきり）保を見て來い。

あや子　いいえ、あの人は大丈夫……。

亮太郎　怪我はさせやしなかつたか。

あや子　いいえ、大丈夫……。でも、あぶな御座んしたわ、兩方とも……。（間）あなたがおわるいのよ、あんなことをおつしやるから……。もつとひどい怪我でもなすつて御覽なさい……それこそ……。どうしてまた、あんな亂暴をなすつたの……。いや、いい。

亮太郎　少し亂暴だつたな。（間）保を呼んで來てくれ。

あや子　まだいけません。もつとあとにしませ

う。（額を手でさはつてみて）此處、お痛いでせう…。お氣分はどうもありません、もう…？

亮太郎　どうもない…。さつき、少しふらふらしただけだ。

あや子　さうですとも、あんな太いもので…。だけど、當りどこがよかつたんですわ。

亮太郎　（苦笑しながら）うまく當ててくれたんだらう。こつちは夢中だつたが…。

あや子　あなたのは、そんなにひどく當つてません。だつて、丁度あん時、手でよけたの、あの人…。

亮太郎　詳しく見てたね。

あや子　さうぢやないけど…。あぶなくつて留められないんですもの…。それに、あの人たち、見てる人も見てる人ですわ。

亮太郎　あの人たちは、自分でやりたい人たちだ。人のでも、止めるのは、勿體ないと思つてる。（急に跳ね起き）もういい。（さう云つたものの、ぐらぐらと眩暈が來て、思はず妻の肩に手をかける）

あや子　あぶない。だから、もつと靜かにしてらつしやい、ね、もうしばらく[illegible]…

（そつと亮太郎を寢させる）ひどい[illegible]、[illegible]にも來ないで…。このままうつちやらかしとくなんて…。

亮太郎　おやぢは…？

あや子　向うにいらつしやるでせう。

亮太郎　お袋が心配してるといけないから、一寸、もう何でもないつて云つて來てくれ。

あや子　あつちからいらつしやるのが當り前ですわ。

亮太郎　外のもんの手前、來れないんだよ。一寸行つて來てくれ。それから、傑にも、氣の鎭まるやうに、僕がわるかつたつて謝つて來てくれ。

あや子　あたし、いや、そのお使ひは…。

亮太郎　おい、そんなことを云つてないで…。あそこへ來てる奴等には、どうした方がいいんだ。おれは、弟と喧嘩をして、此の家を出て行く氣にはなれない。まして親類の奴等から後ろ指をさされるのはいやだ。あとになると工合がわるいから、今のうち、あつさり下手に出て置かう。おれもよつぽど馬鹿だよ。

あや子　それぢや、あなた、[illegible]

亮太郎　[illegible]向つてああ云つた。――百姓の子は百姓をしろと云つた。それをむきになつて怒れば怒る方がわるい。

あや子　でも、あんな云ひ方をしなくつたつて…。

亮太郎　そこだよ。あいつの腹は解つてゐる。こつちを侮辱することは、自分の主張を燃え立たせる手段なんだ。あの時代には考へさうなことだ。あん時は、どういふものか相手が弟だといふ氣はしなかつた。なんだか、仕事の敵といふやうな氣がした。いや、それより、不思議なことは…自分の生活を脅す…[illegible]のやうな氣までしたのだ。

長い沈默。

あや子　また頭痛なさりやしない？

亮太郎　僕は、かう見えて、[illegible]なんだよ。（また頭を上げようとする）もうよからう。

あや子　（押へつけるやうにして）後生だから、もう少し[illegible]になつてて頂戴。

亮太郎　（[illegible]ながら）だつて、ここはお前、寢るやうにできてないんだぜ。（頭を振つてみて）どうもないよ。こら、どうもない。ぢや、少しもたれさせてくれ。（半身を起し、妻の方に倚りかかる）[illegible]、かうして

るのも……。

あや子　あたし、もう、こゝ、いや……。なんて違つた生活なんでせう。二人つきりであれば、どんなに苦しんだつて苦しみ甲斐があるわ。道は一筋といふ氣がするんですもの……。

亮太郎　だから、東京へ歸るよ。明日にでも歸るよ。（不圖耳をそばだて）また向うが騷がしいぜ。どうしたんだか、見て來て御覽。

間。

あれ、保の聲だらう。何んと云つてる？誰だい、あの聲は……。おやぢぢやないか。これや、いかん。早く見て來い。

あや子（夫から離れ、用心深い足取りで奥に去る）

長い間。——此の間に、亮太郎は、靜かに起ち上り、栗の木に手を支へながら、首を伸すやうにして奥の樣子に聽き耳を立てる。

再び騷々しい喚聲が聞える。それが一しきり鎮まると、今度は、年を取つた女の、かき口說くやうな泣き聲が、手に取るやうに聞えて來る。

あや子（足音を忍ばせて歸つて來る。）

亮太郎　なんだ。

あや子　保次郎さんが、またお父さんと……。

亮太郎　なんだつて……。

あや子　よくわからないけど、お父さんは、今すぐに出て行け、貴樣こそなんとかつて大變な劍幕なの。保次郎さんの方は、變に皮肉な笑ひ方をしながら、勿論、なんとかとなんとかは兩立しないんだから、こんな家にはゐられないつて、さつさと脚絆を穿かうとしてるの。それをお母さんが泣いて止めてらつしやるとこ……。

亮太郎　耳を傾けながら、（制するやうに）よし、よし……。

第五場

第一場と同じ。

深夜——

あや子が腰かけてゐる。その前を亮太郎が行つたり來たりしてゐる。

やや長い間。

あや子　あなた、腰かけていらしつたら……。何んだか、氣がせかせかして、なほ時間がたつのが遲いやうだわ。

間。

亮太郎　靜かになつたね。雨も止んだやうだ。

あや子　もつとひどい嵐になるかと思つてたのに……。

亮太郎　あゝいふ時、君はなかなか勇敢だね。雷が鳴るたんびに、眼の色は變つてたが、あれツとかなんとか云つて、人に抱きつかないところは、たしかに女丈夫の面影がある。

あや子　おだてないで頂戴。

亮太郎　おだてるんぢやないが、あれでは、側についてる男が物足らないよ。こつちは、一通り壯烈な氣持になつて、君の出方一つでは、僕がついてるから安心し給へツてなことを、涙ぐらゐ眼にためてだね、あれでも、云つてみたかつたんだ。

あや子　馬鹿にしてるわ。

亮太郎　僕には、どうも近頃、さういふ欲求があるやうだ。

あや子　あたしが、勝氣すぎるつておつしやるんでせう。

亮太郎　さういふわけぢやない。

長い沈默。

あや子　あしたの朝、着いたら、すぐ髪を洗ふ

の。

亮太郎　君はもうさういふことを考へてゐるのか。（間）保の奴、きつと東京へ出て來るぜ。

あや子　……。

亮太郎　保のことを云ふと、君はすぐ變な顏をするが、あれでも、僕に取つては一人きりの弟だ。ああして家を出ては行つたものの、今頃、何處で何をしてるかと思ふと、一寸暗い氣持になるよ。同じ家を出るのにしても、僕たちのやうに、ほかに生活の基礎があれば、また別だがね。（間。突然、窓の外に向ひ）誰だ、そこに立つてるのは……。

あや子　（ギョッとして、そつちの方を見る）

亮太郎　なあんだ、電柱か……。

長い沈默。

あや子　あなたは、ほんとに、どうかしてらしつてよ。

亮太郎　どうかしてるね、確に……。あの栗の木の下がいけないと思つてゐたんだが、此の停車場もよくない。ああ、眼が痛みさうだ。（こつかと腰をおろし、頭を兩手でかかへる）

あや子　靜かにさうしてらつしやい、默つてね……。つまらないことばかりおつしやるからいけないの。なんでもないことを變にお取りになるからいけないのよ。

亮太郎　それやさうだ。君はなんでも知つてる筈だ。早く東京へ歸らう。

あや子　ええ、歸りませう。

間。

亮太郎　田舍つていふところは、どうして、かう、總てが陰氣に出來てるんだらう。山も陰氣だ。森も陰氣だ。谷も陰氣だ。家も木も草も、動物も人間も、みんな陰氣だ。陰氣なばかりぢやない。毒氣を含んでゐる。僕だけか知ら、さう思ふのは……？

あや子　あなただけよ。あなたのさういふ氣持が、あたしにもうつつたといふだけよ。

亮太郎　君にもうつつたつてね。それぢや、君は、なにか、あの家を、初めは陰氣だとは思はなかつたかい。

あや子　陰氣だとは思はなかつたわ。

亮太郎　それぢや、どう思つた。

あや子　どうつて別に……。

亮太郎　あの栗の木だつてさうだ。

あや子　また栗の木……。

亮太郎　さうだ、よさう。（間）だがね……、さうだ、よさう。

長い沈默。

あや子　東京はまだ暑いでせうね。

亮太郎　暑いだらうね。（間）どうして、そんな暗い方ばかり向いてるの。誰かそこにゐるの？

あや子　（哀願するやうに）あなた……。

亮太郎　（自分を叱るやうに）馬鹿なことを云ふもんぢやない。（起ち上り、またその邊を歩き廻る）おやぢはね、おれが死ぬまで歸つて來んでもいいつて云ふんだ。それはよらいふ意味だと思ふ。君には、あまり口を利かないやうだつたね。

あや子　ええ。

亮太郎　しかし、君のことを感心してたよ、よく氣がつくつてね。田舍者が感心するつて云へばそれくらゐのとこさ。（間）お袋は、君を人間扱ひにはしてなかつたね。いや、ほんとだよ。少くとも、ただの人間だとは思つてなかつたよ。お辭儀ばかりしてたぢやないか。あれも、變な癖さ。笑ふつていふことを忘れてしまつたんだね。

あや子　ほんとに……。

亮太郎　昔から、あの村では、村で一番の何々つていふ工合に、いろんな名物を數へ上げて、

それを事毎に噂し合つたもんだ。村で一番の金持が誰、村で一番の年寄が何處の誰つていふ、それをまた、子供達までが聞き覺えてね。隨分滑稽な話さ。僕なんか、小さいくせに、その頃村で一番の美人だつたお初さんといふ娘を見に、そつと、その家の庭へ忍び込んで行つたもんだ。勿論、一人でぢやないよ。（間）今ぢやもう、そんなことを問題にしなくなつたらしいね。世間が廣くなつたんだ。（間）村で一番の栗の木つて云へば、だから、その時分は、相當自慢の種さ。どうして笑ふの。だから、今ぢや、自慢にもならないつて云つてるぢやないか。（間）君は、今度、僕の家つてものを見て、がつかりしたらう。

あや子　また、そんなこと……。

亮太郎　やつぱり、あの栗の木だけかな、さうしてみると、君に見せるつて云へば……。

（間。）

あや子　それを伐らしておしまひになるのは惜しいわ。

亮太郎　どうせおやぢが承知しやしないよ。そこで、もうこつちは、栗の木なんかに用はないんだから、さつさと、こんな處は引上げて、もつと氣の利いた生活を始めると、それでいいぢやないか。（間）さ、もう少し愉快な話をしよう。

あや子　……。

亮太郎　僕はね、今度東京へ歸つたら、どつかで借金をして、家を一軒建てるよ。自分で設計をしてさ。此の間うちから、それを考へてるんだが、庭はどういふ風にしよう。木を植ゑるとすると、どんな木がいいかね。

あや子　サルスベリつていふ木ね、あの木、あたし好き……。

亮太郎　サルスベリか、あれもいいね。

あや子　栗の木は……？

亮太郎　おい、よせ。

（長い沈默。）

あや子　なによ、そんなに大きな聲を出して、見つともないぢやありませんか。

亮太郎　やつぱり云つてしまはう。いいか、君は、僕にかくしてることがあるだらう。栗の木が何んだ。どうして、君は、そんなことを云ひ出すんだ。栗の木の下でどうしたと云ふんだ。それを云つてみ給へ。

あや子　なにおつしやるの、あなたは……。

亮太郎　なんにも云やしないよ。君が云ひ出すのを待つてるんだ。今日まで、どんなに我慢をしたか。もうよからう、この邊で、解決をつけよう。

あや子　なんの解決……？

亮太郎　駄目だ。君にさう出られると、やつぱりこつちの負けだ。なんでもない、其處で、その庭だ。サルスベリを一本と……。

あや子　なによ、はつきりおつしやいよ。栗の木つて云つたのがわるかつたの。

亮太郎　惡かないよ。まあ僕の云ふことを聽け。庭にはサルスベリを一本と……。僕はね、伊太利風の庭園にしようかと思つてるんだが、どうだらう。

あや子　どうも變だと思つたら、やつぱり、さうなのね。そんならさうと、どうしてもつと早くおつしやらなかつたの。

亮太郎　なんでもないつて云つてるぢやないか。それとも、少し植木に鋏をかけて、純日本風の庭をこさへようか。サルスベリだつて植ゑられるよ。

あや子　ねえ、あなた、今のお話、ちやんとして下さらない。何時までも、そんな風に思つてらつしやるといやだから……。

亮太郎　もういいんだよ。僕が惡かつたよ。家の方は、そんなに廣くなくつてもいいね、

あや子　そんなこと、いや、誤魔化さうとなすつちや……。あたし、聽かないから……（首を振る）

亮太郎　だから、僕がわるかつたつて云つてるぢやないか。もうわかつたよ。何とも思つてやしないよ。

あや子　ほんとね。

亮太郎　ああ、ほんとだよ。

あや子　きつとね。

亮太郎　きつとだよ。そんなにむきになる奴があるかい。冗談なんだよ、あれや……。

あや子　また、そんな……。

亮太郎　だから、それでいいつて云ふのに……。うるさいなあ。（いきなり、急ぎ足で外に出る。が、しばらくして、戻つて來る）綺麗に晴れてる。星が一杯だよ、空は……。此處へ着いた時は朝だつたね。さうさう、そこで辨當を食つたつけな。あん時は、それでも、大いに騎者氣分かなんかで、輕便の時間を待ち遠しがつたもんだ。一月のうちに、變れば變るもんだね、氣持なんていふものは……。しかし、人間には、ほんたうに故郷といふものが必要なのかねえ。君なんかどうだい。東京が戀しいといふのは、故郷だからといふよりも、都會だからといふ理由の方が主だらう。僕が東京を戀しがるのと同じわけに違ひない。都會は住んでみないと、ほんたうの有難味がわからない。田舍の生活は、想像してゐる方が樂しいといふのは眞理だね。

あや子　それも、人によりはしないこと？

亮太郎　人によるかも知れないが、田舍はもう懲り懲りだ。

あや子　やつぱり、家といふものが中心にならなければ……。

亮太郎　それや、さうだ。結局、情愛の問題だね。親とか、兄弟とか――君はまあ、さういふものはないからいいけれど――煩はしい關係といふ以外に意味のないものかも知れないよ、どうかするとね。

あや子　それが不思議よ、あたし……。

亮太郎　僕だつて、不思議でないことはないさ。こんな筈ぢやないと思ふこともあるが、さう思つても、やつぱりどうすることもできないんだからしやうがない。

あや子　不幸ね。

亮太郎　フカウ……？

あや子　ふしあはせね。

亮太郎　ああ、さうさね……。まあ、しかし、それもどうだかわからないさ。肉親の愛だけが、人間を育てて行くわけのものぢやないからね。

あや子　夫婦の愛は……？

亮太郎　それは口に出すべきことぢやない。

あや子　あら、どうして……？

亮太郎　さういふものなんだよ。（時計を見ながら）もう、ぼつぼつ、切符を賣りさうなものだね。（切符賣場の方へ近づく）

あや子　秋みたいね、今夜は……。

亮太郎　……。

あや子　全く秋だわ。

亮太郎　しみじみとかい？

あや子　ええ、しみじみと……。

亮太郎　駄目ぢやないか、先を云はなけれや……。

あや子　だつて、何にも云ふことはないわ。

亮太郎　ぢや、しかたがない。（朗吟するやうに）

けふつくづくと眺むれば
悲みの色口にあり
たれもつらくはあたらぬを
なぜに心の悲しめる。
……………。

あや子　それ、なんの歌……？

亮太郎　知らないのか。秋の歌さ。――秋風わたる青木立……と續くんだが、それはまあ、それとして、向うから、誰か提灯をつけてやつて來た。

あや子　この汽車に乘るんでせう。

亮太郎　提灯は二つだ。發つ人、送る人か。

あや子　……。

亮太郎　（あや子の傍に座を占め）此の停車場も、これでしばらく見納めだ。

あや子　さう思ふと、やつぱり、一寸變でせう。

亮太郎　變なもんかい。（間）しかし、君はうれしさうだね。ほんとにうれしいのかい。東京へ歸るのが、そんなにうれしいか。

あや子　ええ、うれしいわ。

亮太郎　もう、二度と此處へは來たくないか。

あや子　來たくない。

亮太郎　どんなことがあつてもか。

あや子　どんなことがあつても……。

亮太郎　そんなら、いつまでも、僕のそばを離れないか。

あや子　離れない。

亮太郎　どんなことがあつてもか。

あや子　（うなづく）

亮太郎　（起ち上り）よし……。

あや子　（顏をそむけ、指の先で、そつと涙をふく）

亮太郎　（その邊を歩きまはりながら）村で一番の栗の木よ、今年もうんと實が生れ。

――幕――

落葉日記（三場）

一

東京の近郊——
雑木林を背にしたヴィラのテラス

老婦人
収
アンリエット
弘

秋の午後——

長椅子が二つ、その一方に老婦人、もう一方に青年が倚りかかつてゐる。それが毎日の習慣になつてでもゐるらしく、二人とも、極めて自然に、ゆつたりとした落ちつきを見せて、静かに読書をしてゐる。

老婦人は、純日本式の不断着、ただ、肩から無造作に投げかけた毛皮の襟巻が、さほど不調和に見えないほどの身ごしらへ、身ごなし。

青年は軽快な散歩服。無帽。

収 （書物が手から滑り落ちるのを拾はうともしないで）少し歩きませう。

老婦人 （書物から目をはなさずに）もうあと二三枚……。

収 （起ち上り、黙つて相手が読み終るのを待つ。が、なかなか済みさうもないので、また腰をおろす）

老婦人 （目をあげずに）静かになさいよ。

収 （漠然と）静かにしてゐます。

長い沈黙。

収 （独言のやうに）あなたほどのお年になられても、まだ、ものに凝るやうなことがおありと見えますね。

老婦人 ……。

収 ものに凝るといつても、そのことに熱中する、つまり、われを忘れてどうからどうといふやうなことはおありにならないでせう。やめようと思へば、何時でもおやめになれる……。それをやめないでいらつしやるのは、ただ、ほかになさることがないからなんでせう。少くとも、ほかのことをなさるのと、別に違ひはないからでせう……。さうでせう。してみると……。

老婦人 （相変らず目を伏せたまま）また、うるさいから……。

収 （突然ながら、しつつこく）ねえ、お祖母さま、あなたは、世の中の人間が、みんな、さういふ風に、老眼鏡をかけ、背中を丸くして、宗教の本を読んでゐれば、それで間違はないと思つておいでになるんでせう。

老婦人 間違がなけれや、どうなのさ。やかましいね、ほんとに——書物を青年の鼻先につきつけ——これが宗教の本ですか。

収 （聊か拍子抜けしたやうに）なんだ、アナトオル・フランスか……。Elle……。La vie……。あんな爺にかかり合つてると、ひどい目にあひますよ。

老婦人 馬鹿なことを言つてないで、用意をなさい。（腰を上らうとする）

牧　（それを制して）その前に、お祖母さま、一寸、お話しておきたいことがあるんです。（間）此處でもいいでせう。

老婦人　……？

牧　それぢやどうぞ……（と、老婦人を再び座につかせて）變だな、すこし……？

老婦人　なにさ、早く云つたら……。

牧　今、言ひます。かういふ話をする時は、そんなに顔を見ないで下さい。

老婦人　あなたが下を向いてゐればいいでせう。それで、わたしに、どうしろといふのさ。

牧　もう御存じなんですか。

老婦人　なにを……。まあ、いいから云つてごらん。

牧　（間）お祖母さまは、アンリエットをどういふ處へお嫁にやらうと思つていらつしやるんです。

老婦人　あの娘をお嫁にやるのは、わたしぢやない。立派なお父さんがあるんだもの……。

牧　しかし、そのお父さんは、外國にばかりいらつしやるし、お母さんが亡くなられてからは、お祖母さまのあなたが、何もかも引受けていらつしやるんでせう。さうすると結婚のことだつて、あなたが、いいつておつしやれば……。

老婦人　まあ、お待ち……。わたしには、それや、幾分の責任はある。しかし、ただそれだけさ。あの娘は、自分で自分の道を選ぶやうに教育してあるんです。

牧　どうかしら……。

老婦人　なんです、失敬な……。お前こそ、まだ海のものとも、山のものともわからないぢやないか。今やつてゐる法律なんか、何になるものか。アンリエットは、あれで、なかなか頭のいい娘だからね。

牧　僕には勿體ない……。お祖母さまは一體、どういふ男が、お好きなんですか。

老婦人　わたしがかい。

牧　（一寸まごついて）お年は別として……。

老婦人　どうして？　だから、お前は駄目なんだよ。若いばかりが女ぢやあるまい。笑ふなら云つてあげようか、氣障でしやうがない、お前みたいな男は……（怒つたふりをする）

牧　（とぼけて）お髪に松葉がひかつかつてゐますよ。

老婦人　（こだはらずに、取つて棄てる）

牧　お祖母さまは、いくつの年にお嫁にいらつしやつたんです。

老婦人　どうして？

牧　どうしてでも……。

老婦人　わたしは、早かつた……。十八の春……。アンエリットの年に、わたしは、もう女學校をすまして、例のパリアニさん、あの人のお母さまのキリガさんのところで、伊太利語の勉強をしてゐたものだ。

牧　お祖父さまが、羅馬から迎ひに來て下さるのを待つていらつしやつたわけですね、お祖父さまが、その頃……？

老婦人　お年かい？　さあ、兎に角、お前みたいに若くはなかつたよ。口髭を生やして、堂々たる紳士だつたから……。

牧　堂々たるはいいな。お祖母さまも、その頃は、楚々たる令孃で……。

老婦人　あたり前さ。お前のお母さんほど丈は高くなかつたけれど、アンリエットみたいに、いいおちびさんでもなくさ……。

牧　さうですとも……。その上、乘馬と幅跳びがお得意でね……。

老婦人　（笑ひながら）それはうそ……。

牧　ねえ、お祖母さま、あなたが、お祖父さま

と御一緒に巴里でお寫しになつた寫眞が、この間、お母さまの手文庫から出て來たんですよ。裾のしぼんだ黒いカアプを、から、輕くひつかけて……。あれは、ルュクサンブゥルでせう、誰かの像の前で、鳩に餌をやつてらつしやるところ……からいふ手つきで……。それを見て、僕は、「へえ」つて云つたきり、そこへすわつてしまひました。

老婦人　そんな寫眞があつたかね、お祖父さまはどうしてるのさ。

牧　お祖父さまは、これはまた、どうかなさればよささうなものを、ステッキを兩手で、から、水平に持つたまま――器械體操でもするやうにね――つくねんと、若い美しいお祖母さまの横顔を見つめておいでになるのです。

老婦人　何を云ふんです。

牧　なるほど、蛇だけは立派ですね。

老婦人　さうですか。

牧　さうです。

老婦人　あの頃の寫眞は、もう、随分長く出して見ないから……わたしの處にも　そんなのがあつた……いえ……おや、あん時だ、きつと……。

牧　（長い沈默。）
お祖父さまと云ひ、うちのお父さまと云ひ、アンリエットのお母さまと云ひ、みんな早死をしたんですね。

老婦人　早死をしたね。イヴォンヌなんか、まだ三十にもなつてなかつたんだからね。

牧　僕も早死をしさうだな。今度は、まあ助かつたやうなものだけれど……。

老婦人　お前は、それがいけないんだよ。すぐに自分を弱いものと決めてしまつて……。

牧　決めてやしませんよ。だから、今日だつて、テニスをやらうつて云へば、例の、柔道二段が、君は駄目だつて、やらせないんです。アンリエットはまた、それをいいことにして、僕の方を振り向きもしないんです。

老婦人　Tu es bête !

長い沈默。

老婦人　寒くないかい、お前、何も上へ着なくつて……。今日は、風が冷たい。

牧　一月ぐらゐ、すぐたつてしまひますね。（間）ここへ來た時は、まだ白楊の葉が、こんなに黄色くなつてゐませんでした。兎に角、もう、病人とは見えないでせう。

老婦人　見えない。たけど、もうあと、一年間は用心をするんだね。また何時かのやうなことがあると……。

牧　（急に暗い顔をする）海岸行きを止めて、もう少し、ここにゐたいなあ。

間。

老婦人　寒くさへならなけれやねえ……。何しろ、冬向きぢやないよ。ここは……。

牧　どつち道、僕はここにゐない方がよささうですね。

老婦人　どうして？

牧　どうしてつて……。お祖母さまは、一番、そのわけを御存じなんでせう。

老婦人　さ、もう、そのことを云ふのはおよし。男らしく、さつさと發つておしまひ、ね。お祖母さまもわるかつた。もつと早く、お前の心持を酌んで、できるだけのことをすればよかつたんだけれど……。もう、今になつては、どうすることもできない。お前はこれから、どんな幸福でも……。

牧　得られるつておつしやるんでせう。僕が……それを望めばね。しかし、お祖母さま、僕は今が一番幸福なんですよ。いいえ、ほんとです。アンリエットは、まだ時々は僕と二人きりで遊んでくれます。朝の食卓は、毎

日傭たち二人たちの為めに用意されてあるでせう——お祖母さまは、早くお目覚めですからね。

老婦人 Pierre Pierre！

牧 今だつて、御免なさい、もう日が暮れるまでたつた二人きりになれる。さう思つただけで、気分がこんなに、いいぢやありませんか……。

老婦人 （青年の肩に手をかけて）気分がいいなら、泣くのはおよし。さ、その邊を一廻りして来よう。

牧 ……。

老婦人 さ、お出でな……。

この時、運動服装の少女が、ラケットを握りながら、現れる。

アンリエット ああ、喉が渇いた。

老婦人 もう済んだの。

アンリエット だつて、ボールが見えないんですもの、暗くつて……。

老婦人 それや、さうだらう。

アンリエット でも、まだ御飯ぢやないでせう。あら、どうなすつたの、牧兄さまは？

老婦人 シャトオ・ティエリイに行きたいんですつてさ。

アンリエット 小説を読んでお泣きになつたの？ 可笑しいわ。

老婦人 それより、お前、弘さんは……。

アンリエット ええ、それがね、お祖母さまのところへ、左様ならをしに来ようとしてらしつたのよ。さうしたら、そら、あの柿の木を見て、柿を取るつてきかないの。だから、あたし、お祖母さまに伺つて来るから、待つてらつしやいつて、いま走つて来たの。

老婦人 まだ熟してやしないでせう。

アンリエット でも甘いことは甘いわよ。だから、取つていいことよ。

老婦人 ああ、それやいいけれど、怪我をしないやうになさいよ。

アンリエット ええ。（行きかける）

牧 （起ち上り）僕も取らう。（かう云つて少女の後を追ふ）

老婦人 いい、つるやにさう云つて、物乾竿を出してお貰ひ。

牧 ああ、さうだ。（表の方へ走つて行く）

老婦人 （叱るやうに）また、走るんぢやありません。

すると、入れ替りに弘が現れる。

アンリエット あら！

弘 もう遅いから、僕、帰りますよ。また叱られちやわ……。

アンリエット （つまらなさうに）どうして……。

弘 僕は明日でいいでせう。

アンリエット 明日でいいでせうつて、御自分で云ひ出したくせして……。

弘 （快活に笑ひながら）さよなら、小母さん。（帽子を脱ぐと、いきなり、全速力で走り出す）

老婦人 みなさんによろしく。

弘が去つた後へ、牧が竹竿を持つて出て来る。

アンリエット （その竹竿を取らうとする）どら、貸して……。

牧 君ぢや駄目だよ。

アンリエット いや、あたしが取る。

老婦人 アンリエット！

アンリエット （その方をちらと見て、投げ出すやうに竹竿を牧の手に渡す）あたしにも取らしてね。

二人姿を消す。

老婦人 （両人を見送つた後、再び書物の頁を繰る）

長い沈黙。

アンリエットの聲　あれがいいわ。もつと、こつち…、そら、そこよ…。赤いのがあるぢやないの…盲ね。

老婦人　（時々聲のする方に氣を取られるらしい。それでも、すぐに、書物の上に目をおとす、音讀をし始める）J'étais loin d'être un beau garçon et le pis est que je manquais de hardiesse. Cela me nuisait auprès des femmes.

アンリエットの聲　まあ。そんなにひどくしちや、傷がついてよ…。あたしに貸して…（間）大丈夫よ…見てらつしやい。

老婦人　（音讀する）Car j'estimais que le plus grand péché d'une femme est de n'être pas belle.

アンリエットの聲　どうするの。樹へ登るの…。あぶないわよ。

老婦人　（一寸、耳を欹てる。が、すぐに）Je remarquais que dans le monde, beaucoup de jeunes gens, qui ne me valaient pas, plaisaient et réussissaient mieux que moi.

アンリエットの聲　その枝に、いつぱい赤いのがお生つてるぢやないの。ええ、それ、あなたが乘つてらつしやる枝…。

老婦人　J'ai toujours cru que la seule chose raisonnable est de chercher le plaisir.

アンリエットの聲　（一段聲を張り上げて）あら、お祖母さま、あのねえ、牧兄さまがね、柿の樹の高い處へ登りました。

老婦人　（顏を上げて、心持眉をひそめるが、すぐにまた目をおとし）Il n'est pas difficile de s'apercevoir si un homme est heureux ou malheureux. La joie et la douleur sont ce qu'on dissimule le moins, surtout dans la jeunesse.

アンリエットの聲　いやよ、いやだつてば…。お祖母さま、牧兄さまが、あたしに、澁柿をぶつけます。（はしやいで）そんなことをすると、かうしてよ。

長い沈默。

老婦人　Ils étaient jaloux, haineux, ambitieux, j'étais indulgent et paisible; j'ignorais l'ambition.

アンリエットの聲　あら、いいの、そんな無茶なことをして…。

老婦人　Il y a de ces passions violentes qui font les grands hommes et dont je n'avais pas l'étoffe.

アンリエットの聲　お祖母さま、牧兄さまがね、柿を皮ごとたべますよ。…よろしいんですか。ずるいわ、そんな…。

老婦人　（だんだん、落ちつかぬ樣子を示しだす。目を書物から放し、時々、聲のする方を見る）

アンリエットの聲　お祖母さま。

老婦人　なんです、やかましい。

アンリエット　お祖母さま、あのねつ（姿を現はす）あのね、牧兄さまがね、柿の樹の上でお晝寢をするんですつて…。目をつぶつて、腕組みをして、眠てるの。いくら棒でつツついても、起きないわよ。

老婦人　いたづらするんぢやありませんよ。もう降りるやうに、さうお言ひ…。

アンリエット　（笑ひながら去る）

老婦人　（しばらく沈默を續けてゐる）

アンリエットの聲　牧兄さま、早く採つて頂戴、暗くなつてよ。聞いやれ、もう少し右、右よ、右だつたら…。それや、何かないの、…そこよ、手がはつてるのにわからないの、それ、それ、ええ、それ

よ。

老婦人　（再び音讀を始める）Mais ce dont je m'aperçus après une longue observation, c'est que le désir embellit les objets sur lesquels il pose ses ailes de feu, que sa satisfaction, décevante le plus souvent, est la ruine de l'illusion, seul vrai bien des hommes.

アンリエットの聲　もういいわ、それくらゐで……。ほんとに、いいのよ、もう澤山……。（聲がふるへる）もうよして頂戴……、そんなに上は、あぶなくつてよ、ねえ、牧兄さま、もういいつて云ふのに……（泣聲になる。急に、高い聲で）お祖母さま、牧兄さまが、云ふことを聽きません。ずんずん高い處へ登つて行くんですよ……細い枝のところへ……。

老婦人　（びくつとする）牧、もういい加減にしないかい。

（長い沈默。）

アンリエットの聲　それ御覽なさい。（間）えー！みんなで……？　隨分あるわ……。一い、二う、三い、四う、五つ、六う、七、八あ、九、十、十一、十二……十三……。

老婦人　（また、讀む。今度は、やや、高い調子で）

O Thébains ! Jusqu'au jour qui termine la vie.

Ne regardons personne avec un oeil d'envie.

Peut-on jamais Prévoir les derniers coups du sort?

Ne proclamons heureux nul homme avant sa mort.

アンリエットの聲　あら、どうするの、そんな上へ登つて……牧兄さま、駄目よ、駄目よ、その枝は駄目、……後生だから、降りて……。

老婦人　（此の時、突然何かに怯えたやうに、書物を放した手を、痙攣的に、目のところにもつて行く。そして、アンリエットの「あッ、あぶないッ！」といふけたたましい叫び聲が聞える前に、もう立ち上つてゐる）

――幕――

二

老婦人
アンリエット
一枝
弘
つる

翌年の三月下旬の朝――

前と同じ長椅子が二つ、その一方に老婦人、もう一方にアンリエットが倚りかかつてゐる。

二人とも、讀みかけの書物を膝の上にのせたまま、默つて、何か考へてゐる。

少女は喉に濕布をしてゐる。

老婦人　もうぢき本郷のお叔母さまが見えたら、御挨拶だけして、すぐあしたのおさらひをするんですよ。

アンリエット　ええ、でも、十時には弘さんがいらつしやるのよ。

老婦人　今日は、まだ、テニスはいけません。

アンリエット　どうして……？

老婦人　どうしてつて、お前、やうやく熱がとれたばかりぢやありませんか。

アンリエット　ぢや散歩は……？

老婦人　今日、一日、ぢつとしておいで、ね、

好い子だから……。この次の日曜は、テニスでもなんでもなさい。弘さんには、蓄音機でも聴かせておあげ……。

アンリエット　あの方、蓄音機なんかお嫌ひよ。

老婦人　そいぢや何が好きなのさ。

アンリエット　あたしの聲を聞くのが好きなんですつて……。

老婦人（可笑しさをこらへて）お前の歌かい？

アンリエット　歌でもなんでもよ。あたしが默つてると怒るわよ。

老婦人「怒る」とはなんです。

アンリエット　お怒りになります。そいぢや……。

老婦人　やれやれ……。お前のお相手には持つて來いの人だ。ぢや、お祖母さんには、後生だから、もう少し默つてておくれ。お前と一緒にゐると本なんか讀めやしない。

アンリエット　だつて、お祖母さまは……。

老婦人　もう澤山……。口を縫ひつけとくから……。

アンリエット（脣を噛んだまま――口を縫はれたつもりで――聲を立てて笑ふ）

老婦人（それには相手にならずに、書物の頁をくる）

　長い間。

　つる現る。

つる　お手紙が參りました。

老婦人（手紙を受け取り、開封する）本郷へ電話をかけてね、もう奧さんはお出掛けになつたかつて聞いてごらん。

つる　はい。（去る）

老婦人（手紙を讀む。手紙は外國郵便である。可なり長文である。それは、身内の者からの懐しい便りに相違ない。それはまた、ある重大な意味を含んだものでもあるらしい。そして、最後に、いろいろな云ひ知れぬ感動を、讀むものの心の隅々に殘すものでなければならない）

アンリエット（この間、祖母の顏色と、その心持ふるへてゐる手先に、不斷の注意を拂つてゐる。つひに堪りかねて）お父さまからでせう。

老婦人（默つてうなづく）

アンリエット（雀躍して）なんて……。あたしには……。

老婦人（手紙の頁を、一枚一枚あらためて見る。封筒の中をのぞく。御免、御免、これがさうだ……。さ、あつちへ行つて、ゆつくりお讀み……。

アンリエット　どうして、此處で讀んぢやいけないの。

老婦人　此處でもいいさ……。少し、靜かにして……。（讀みつづける）

アンリエット（これも夢中になつて、手紙を讀む）

老婦人（一度讀みをはつて、更に讀み返す）

　つる現る。

つる　あの、本郷の奧さまは、もう一時間ばかりまへにお出掛けになつたさうでございます。

老婦人　ああさう。ぢや、もう見える時分だから、用意をしてね。

つる　はい。（去る）

老婦人（手紙を封筒にしまひながら）お父さまから、なんて？

アンリエット　一寸待つて頂戴よ。むつかしいことが書いてあるの。あたし、わからないわ、こんとこ……。

老婦人　讀んでごらん。

アンリエット　いやあよ。

老婦人　おや、お祖母さんにも……？

アンリエット　だつて……。ぢや、お祖母さまのところへは、なんて……？　あたしのこと書いてある。

老婦人　書いてあるとも……。お前のことばかりさ。

アンリエット　ほんと？　何か、あたしのこと、云つておあげになつたんでせう。ひどいわよ、お祖母さまつてば……。

老婦人　どら、讀んでごらん。

アンリエット　ぢや、あたしがいいとこだけね。……――「十一月二十日出の手紙、旅をしてゐたので、今日やつと受け取りました。字も文章も、だんだん上手になつて……」――いやなお父さまね、ここはいや……――「あの寫眞で見ると、ずゐぶん肥つたやうだが、なかなか可愛らしい……――お笑ひになるから、いや。駄目だわ、どこを讀んでも……。

老婦人　そんなことばかり云つてないで、みんな讀んだらいいぢやないか。

アンリエット　ぢや、ここだけね。――「收さんはお氣の毒なことだつた。その場にゐたお前もさぞかしびつくりしたらう。止めても聽かなかつたと云ふのだから、お前に罪はないわけだが、一緒に遊ぶときは、誰とでも、よく氣をつけないと、さういふ取り返しのつかないことになる。お前に怪我がなくつて、まあ、よかつたが、木登りなんか、女の子はしない方がいい」――しない方がいいですつて……。

老婦人　（目に涙をためて）收のことはそれだけ……？

アンリエット　ええ、それから、ここは飛ばしてと……。

老婦人　どこを飛ばすのさ。

アンリエット　――「この次は佛蘭西語で手紙を書いてごらん。お祖母さまに直していただかないでだよ」おつと……讀んぢやつた。

この時、つるに案内されて、一枝が現れる。喪中に相應はしい日本服。

一枝　お變りはいらつしやいませんか。

老婦人　ありがたう。あんたこそ……。

一枝　御勉強？　アンリエットさん。

アンリエット　（會釋）

一枝　お風邪はいかが……。もう、およろしいの。

老婦人　家に引込んでるのが嫌ひな娘で……しやうがないんだよ。よく、早く出て來られたね。

一枝　でも、樂しみにしてゐたんですもの。（あたりを見廻し）一箇月ぶりですわね。すつかり春らしくなつて……。

老婦人　ぢや、あつちへ行かうか。

一枝　いいえ、ここがよろしいの。（椅子を引き寄せる。すわる）

アンリエット　ぢや、叔母さま、御ゆつくり……（去らうとする）

一枝　あら……どこへ？

老婦人　あんまり長く外にゐると、またなんだから……。あとで、呼んであげます。

アンリエット　（去る）

一枝　もう大丈夫だと思つてゐましたのに、此處へ來ると、やつぱり……。（目にハンケチを當てる）

老婦人　それや、さうだらう。

長い沈默。

一枝　柿の木、もうお伐らせになりましたのね。

老婦人　あれで、なかなか手間が取れたんだよ、運び出すのに……。まる一日がかりだつた。倒したのを見ると、隨分、大きな樹さ。根も掘り出して、持つて行かせたの。あの跡には收の好きだつた「もつこう薔薇」でも植ゑよう

かと思つて……。
一枚　……。
老婦人　わたしも、秋から、すつかり老い込んでしまつた。
一枚　そんな心細いことをおつしやらないで下さい。お母さまは、あたくしなどよりは、ずつとお元氣ですわ。お樂しみがおありになるせゐでせうね。
老婦人　樂しみつて、あんた……。
一枚　あたくしなんか、その後、本を讀む氣もしませんもの……。
老婦人　それはまた、別さ。わたしのは、これや、病氣だもの。
一枚　そんな御病氣なら結構ですわ。でも、こんなことぢやいけないとは思ひますの。近頃、また、更紗を描いてみてるんですのよ。碌なものは出來ませんけれど、あれでまあ、暇潰しにはなりますから……。
老婦人　それはいい。こんだ、見せて貰ひに行かう。それから、もつと氣の晴れるやうなことしてみるんだね。もう、テニスなんか、駄目かね。
一枚　あたくしおですが。おやおや、どんな恰好でせう。
老婦人　恰好なんかどうだつて、やつぱり氣持を明るくするのは、運動に限るやうだね。
一枚　……。
老婦人　音樂なんかも、いいだらうけれど、あれは、また、自分で自分に強ひることができないから……。
一枚　さうですわ……。多少、機械的にでもできることでなければね。
老婦人　相手がゐてくれるといいんだよ。
　長い間。
一枚　相手がゐてくれるといいんですわ。どんな相手でも……。
　長い間。
老婦人　收なんかも、病氣のせゐもあつたらうけれど、何か運動のやうなことをしてゐる時だけだつたからね、快活らしく見えたのは……。
一枚　あの子は、運動は、あんまり好きぢやなかつたんですけれどね……。
老婦人　それが、やれば、ああなるんだから……元氣さうに……。面白さうに……。
一枚　アンリエットさんと一緒だつたからでせう、それは……。
老婦人　それはさうかもしれないよ。
　長い沈默。
一枚　子供の時から、木登りなんか、ただの一度だつてしたことはないんですけれどね。全く不思議なくらゐですわ……。あの日に限つて……なんだつて、また……。
老婦人　もう、それを云つたつて、仕方がないさ。（手紙を見せながら）今、兄からも云つて來たんだけれど……。
一枚　お兄さまは、もう御存じなんですの。
老婦人　あの知らせを讀んだのが、二月二十日と書いてある。——冬の間、アルヂェリヤの方をまはつてゐたらしい。
一枚　よく旅にお厭きになりませんわね。
老婦人　あれから、もう十年、地中海のぐるりを歩きまはつてゐるんだからね。——娘の大きくなるのも見ずに……。
一枚　お獨りでね。
老婦人　……。
一枚　アンリエットさんをお呼びにならうとはなさいませんの。
老婦人　若い娘が、旅で一生を送る考古學者についてまはつても仕方があるまい。以前のやうに、巴里に落ちついて、研究をしてゐる
[illegible]

一枝　（長い沈默。）あたくしね、昨日、本棚の整理をしてゐましたら、牧の日記を見つけましたの。

老婦人　日記をつけてゐたのかい、あの子……。

一枝　飛び飛びなんですけれどね……。どの日の頁を見ても、Hがどう云つたの、Hがどうしたのつて書いてありますでせう。Hつて誰かと思ひましたら……。

老婦人　アンリエットのことだらう。

一枝　ええ。あたくし……始めて知りましたの。

（間。）

老婦人　Pauvre garçon!

（長い沈默。）

一枝　ちつとも、氣がつきませんでしたわ。（間）——隨分苦しんだらしいんですの。

老婦人　よく默つてゐてくれたよ。——自分でも、いろいろ考へてゐたらう、出來ない相談だといふことを……。

一枝　従兄妹同志ですけれどね……。

老婦人　それにしてもさ……。よく默つてゐてくれた……。

一枝　ええ。

老婦人　それに、アンリエットは、あの通り陽氣な娘だから、牧にはどうかね。今更、そんなことを云つたつて始まらないけれど……。

一枝　西洋人の血が交ると、ああなるもんですかね。

老婦人　なにがさ。

一枝　いいえ、氣性がね。

老婦人　氣性は、あんた、お父さん似だよ。

一枝　さうでせうかしら……。さう云へば、牧もお父さん似ですわね。

老婦人　あんたのとこのは、弟のくせに、誰からでも兄さんと間違へられるほど大人しかつた。やつぱり、早死をする子さ。——さういふことを、つくづく、此頃、思ふやうになつたよ。（ボンボンを一つ口に入れ）どう、一つ……。いいボンボンだよ。

一枝　ありがたう、たくさん……。

この時、奥から、蓄音機で、マスネエのエレジイが聞えて來る。

一枝　どなたか來てらつしやるんですか。

老婦人　弘さんだらう。アンリエットのテニスのお相手でね、なかなかしつかりした青年だよ。

一枝　ああ、何時か、いらしつた、あの元氣のいい……。

老婦人　少し仲がよすぎるやうだけれど、まあ、まあ……。（微笑）

一枝　（これも、強ひて、笑顔をつくり）さうですわ。——なかなかね。

（長い沈默。）

老婦人　兄も、無頓着なやうで、やつぱり、殘して行つた娘のことは氣になると見えて、今日なんかも、先々のことを、色々相談して來てゐるんだがね、——わたしも先は見えてゐるんだし、かうして手許へ置くのも、少し氣がかりになり出したよ。

一枝　……。

老婦人　その時になれば、どうかなるとは思ふんだが……やつぱりね。

一枝　……。

老婦人　イヴォンヌは、どうしてか日本の氣候に慣れないで、たうとうあんなことになつてしまつたけれど、母親の無い女の子は可哀さうだね。「ありがたう」と「今日は」といふ言葉を憶えに、遙々海を渡つて來たやうなものだつた……。アンリエットのお母さんは……。

一枝　ほんとですわ。

老婦人　今日は、どうしてまた、こんな話ばかりするんだらう。

一枝　あたくしの滅入つた顏を御覽になつたからですわ　來るときは、それは晴れ晴れした氣持で出かけて來るんですのに……。

室内に慌しい足音が聞えると、急に、窓のカーテンが開く。アンリエットの姿があらはれる。

アンリエット　ここから御免遊ばせ。あのね、お祖母さま……弘さんが急に大阪へいらつしやることになつたんですつて……。

老婦人　なんだつてさ……。

アンリエット　どうしてですか。

老婦人　へえ。弘さんに、ここへいらつしやいつて……。

アンリエット　（走り去る）

老婦人　アンリエットの顏を見たかい。

一枝　（うなづく）

蓄音機が止る。――弘、アンリエットと共に現る。

老婦人　ほんと、大阪へいらつしやるつて……。

弘　（一枝と老婦人に會釋した後）今朝おやぢから云ひ渡されたんです。出し拔けなもんだから、面喰つちまひました。

老婦人　大阪へは、お勤めの口がきまつたんですか。

弘　それもあるんですけれど……。ええ、まあさうなんです。

老婦人　それはおめでたう。會社？　銀行？

弘　さあ、どつちへ廻されますか。はじめ、いろんなことをやらされるらしいんです。

老婦人　實地研究といふわけですね。大阪には、お知合ひがおありになるんでしたね。

弘　ええ、おやぢが心易くしてゐる人で、いろんな事業に手を出してる人なんですがね……。その人のうちへ、まあ、預けられるわけなんです。

老婦人　それで、何時、おたち？

弘　それが可笑しいんです、この月曜なんですつて……。服を作るひまもないんですからね。

老婦人　この月曜つていふと、（指を折り）あと四日ですね。前から、ちつともお話はなかつたんですの。

弘　僕が行くことですか。それが、前から、僕をくれつていふ話だけはあつたんです。

老婦人　おや、お養子にいらつしやるんですか。

弘　ええ、まあ、早く云ふと、さうなんです。

このあたりから、アンリエットは、今にも泣きだしさうな表情になる

老婦人　（この樣子を見てとつて）アンリエット、あつち行つてね、つるやに、お晝の用意はどうか聞いておいで……。もうぼつぼつかかるやうにつてね。

アンリエット　（縛めを解かれた小羊のやうに走り去る）

一枝　失禮ですが、向うのお孃さんは……？

弘　（手眞似で）これつぱかりの子供ですよ。

一枝　でも、あなたが、まだお若いから……。それや、お樂しみですわね。

弘　（笑つてゐる）

老婦人　まだお決まりになつてるわけぢやないんですね。

弘　まあ、決まつたやうなものです。考へたつてしやうがありませんからね。その代り、いやだつたら、何時でも出て來ますよ。

一枝　まさか……。

老婦人　そのお孃さまとは、もう何遍もお會ひになつてるんでせう、きつと……。

弘　二度……三度……でしたかな。たつて、十六なんですよ。

老婦人　可愛らしい奧さまができるでせう。

弘　すぐ結婚しやしませんよ。

老婦人　（笑ひながら）それや、さうでせう、ど

うしたつて…。

一枚 (一笑ふ)

弘 (頭を掻きながら) 弦子つて、いやなもんですつてね。

老婦人 さうとも限りませんわ。おや、なんでよね、東京へは滅多に出ておいでになれませんね。

弘 (快活に) 出て来ますよ。アンリエットさんがどうしてるか、見に来なくつちや…。

老婦人 (一枚を顧み) まあ…それは、それは…。

弘 当分は日本にいらつしやるんでせう。

老婦人 ゐますとも…。わたしをはふつて、何処へ行くもんですか。ねえ、一枚…。

一枚 (目で笑ひながら、うなづく)

弘 (少しまごまごして) それでも、また、お父さまの御都合で…。

老婦人 あ、それは、どうなるか、わかりません。どうせ、何時か、わたしは、一人きりになるでせう。

一枚 あたくしがゐますわ。(弘に) ねえ。

弘 さうですとも…。

老婦人 一人になるのが寂しいと思つたのは、もう五六年も前のことですよ。

一枚 あたくしなんか、お母さまのやうには、なれませんわ。

弘 僕の母も寂しがりで、今朝から泣き通しなんです。

一枚 やつぱりね、下がおありにならないから…。

老婦人 なあに、子供は親のことなんか考へてやしないからね。

一枚 ……。

老婦人 行きたい処へは、さつさと行くし。……死にたい時には、さつさと死ぬし…。

一枚 (寂しい微笑)

弘 いやだなあ、小母さんは、皮肉で…。

老婦人 (笑ひながら) 日曜毎に、テニスをしにいらしつた家を、お忘れになつちやいけませんよ。

一枚 (これも、強ひて笑顔を泛べ) それから、梨の木から落ちて死んだ男の子のゐた家をね。

老婦人 さう。

弘 (面を伏せ) 忘れません。

老婦人 アンリエットも、これから、テニスのお相手がなくつて、寂しがるでせう。

この時、突然、窓のかげで、アンリエットの啜り泣く声が聞える。一同、その方を見る。

老婦人 (異様に緊張した表情で) 弘さん、それおや、今日は、お話はこれだけにして置きませう。おたちになる前に、もう一度いらしつて下さい。お別れに、お茶でも飲みませう。アンリエットは、少し気分が悪いやうですから、失礼させて頂きます。

弘 はあ、では、御免下さい。いづれ、また…。

(会釈して去る)

沈黙。

老婦人 アンリエット…… (返事がない) アンリエット…… (静かに起ち上り奥にはひる)

やがて、彼女は、アンリエットの肩に手をかけ、いたはるやうにして現れる。

一枚 どうしたんですの。

老婦人 (元の座につき、アンリエットを膝の上に抱きながら) 泣くひとがありますか、そんなことぐらゐで…。

アンリエット (恥かしさうに老婦人の胸に顔を埋める。が、何を思つたか、急に、其処を離れて、奥へ逃れ去る。階段を駆け上る足音)

老婦人 (あつけに取られて、一枚と顔を見合せるが、不図、或る予感が頭をかすめたらしく、

急に席を起つ。しかし、思ひ直して、今度は、足音を忍ばせながら、靜かにアンリエットの後をつける）

一枝　（獨り取殘された形で、無意識に席は立つたものの、ぼつねんと、二階の上を見上げてゐる）

長い沈默。

暫くして、老婦人が相變らず足音を忍ばせながら現れる。極度の不安から解放された時の、やや疲れたらしい顔つき。

一枝　大丈夫ですの。

老婦人　なにが？　アンリエットかい。（それに答へず）やつぱり、いけなかつたね。

一枝　でもね……。さういふもんですわ。

老婦人　（溜息をつき）またかと思つた。

一枝　え？　またかとは……？

老婦人　さうだ……泣きたいだけ泣くがいい。女は……、若い女は、涙と一緒に悲しみを流してしまへるんだからね。

――幕――

三

老婦人
アンリエット
つる
醫師

その年の秋の午後――葉の落ちつくしたポプラ

窓が開いてゐる。室内は、よくは見えないが、ただ、老婦人が、忙しさうに出たりはひつたりしてゐる樣子が見える。

アンリエットの、「お祖母さま、一寸、いらしつて……」といふ聲が二階から聞える。

つるが、家から出たりはひつたりする。

やがて、外出の服裝をしたアンリエットが先に立ち、老婦人、續いてつるが現れる。

老婦人　（時計を見ながら）まだ少し早いね。今から行くと、一時間も待たなくちやなるまい。

アンリエット　少し早いめに行つた方がいいことよ。叔母さま、五時に向うに行つてらつしやる筈よ。

老婦人　え、さうさう、お父さんは、お前にキッスをなさるかもしれないから、びつくりしちや駄目だよ。

アンリエット　キッスなんかなんでもないわ。あたし、お父さまがお立ちになる時のこと覺えてるの。お髭が痛くつて、どうしようかと思つたわ。お祖母さまはなさらないの。

老婦人　お祖母さんもしたいんだけれど、これは、お父さんの方で、びつくりするだらう。

から云ふと、急に、片手を額にあて、もう一方の手を、アンリエットの肩に支へて、ひよろひよろッと前にのめらうとする。アンリエットと、つるが、慌てて、抱き止める。

アンリエット　お祖母さま、どうなすつたの。

つる　御隱居さま……。

兩人は、老婦人を、長椅子に倚らせる。

つる　お醫者樣をお呼び致しませうか。

アンリエット　一寸、電話をかけて……溝口先生のところ……早くよ……。

つる　（走り去る）

アンリエット　（泣聲で）お祖母さま、お氣分がおわるいの。何かお[illegible]は……？

老婦人　（力なく手を振る）

アンリエット　（老婦人の額に手をあて）おつむり、下げていらしつた方がよくはありませんの。

老婦人　（角の立たないほどに）お前が、あんまりせかすからさ。（間）——心配しないでいいよ。

長い沈默。

アンリエット　あつち、どうしませう。

老婦人　もう少し休んで……。すぐなほるだらう。

つる現る。

つる　今すぐお見えになります。丁度、お出かけにならうとしてらつしやる處でございました。

老婦人　なに、一寸眩暈がしただけさ。お醫者さんなんか、よかつたのに……。少し喉がかわくやうだから、熱いお茶を一杯入れて來ておくれ。

つる　はい。（去る）

アンリエット　今日は、いらつしやらない方がよくはないことよ？

老婦人　なあに、大したことはあるまい。——わたしが、迎ひに行かないつて法はないよ。

アンリエット　でも、かうやつてると、遲くなりはしないかしら……。

老婦人　うるさい娘だね、大丈夫だよ、時間はあるつて云つてるぢやないか。——お前だけが待ち遠しいんぢやありませんよ。お父さんだつて、お前一人がお迎へに出てゐても、およろこびになりはしないよ。

長い沈默。

つる、茶を持つて來る。

老婦人　（靜かに、茶を飲む）應接間を綺麗に片づけてね。それから、食堂の電球を取替へておくこと、忘れないでね。

つる　はい。

老婦人　（自分で脈をみながら、獨言のやうに）年を取ると意氣地がなくなるね。——御免よ、アンリエット。お祖母さんは、今、少し意地の惡いことを云つたね。さうぢやない。お前のお父さんは、お前の顏を見に歸つてらつしやるんだ。だから、お前が一番にお父さんの前に出て、「お歸りなさい」つて云ふんですよ。さうしたら、何んておつしやるだらう。お父さんは、先づお前を兩手で抱いて、「よく、長い間おとなしくお留守をしてゐたね」つて……。それから、お前の頬をさすりながら、「お母さんそつくりになつた」つておつしやるだらう。（間）つるや、もうここはいいから、早く晩の支度をしておいで……。よしやはまだ歸らないかい。

つる　はい、まだ……。あの人はお使ひが遲いんで困ります。

老婦人　お前だつて早い方ぢやないよ。さ、お醫者さんが見えたら、ここぢやなんだから、上へ上らう。（時間を見て）まだ二十分は大丈夫……。（起ち上らうとするが、また椅子に倚りかかる）をかしいね、どうもまだいけない。

アンリエット　もう少し、このままにしてらしつた方がいいことよ。（外の方を見る）お苦しいんですの？

老婦人　いいや、かうしてれば、どうもない。——誰か、このまま、そつと、東京驛まで連れて行つてくれるものはないかしら……。

アンリエット　（面白がつて）椅子ごと？

老婦人　ああ、椅子ごと擔いで……。なんだと思ふだらう、みんな……。

アンリエット　人がたかつて來るわね。

老婦人　息子の歸りを出迎へに來た、年取つた母親が、惨めな姿だと知れば、笑ふものもあるまい。どら、その襟卷を取つておくれ。

アンリエット（老婦人の肩に毛皮の襟巻を着せかける）

老婦人　かうしてると、裾が寒い。何かかけるものを……。

つる（膝にはひる）

アンリエット　そんなにお動きになつちや駄目よ。

老婦人　お前も、そこへ掛けたらどう。立つてちや草臥れるだらう。（アンリエットの、帽子からはみ出てゐる髪の毛を直してやりなどする）お前にこの帽子は一番よく似合ふね。どれ、あつちを向いてごらん。よし、よし……。お父さんに會つたら、なんて云ふの。

アンリエット（云ひにくがつて、からだをひねる）

老婦人　なんて云ふのさ。――默つて、さうしてるのかい。

アンリエット　ほかに澤山人がゐるの。

老婦人　さあ、どうだか……。誰にも知らせなかつたかもしれないね、あの人のことだから……尤も新聞には出てゐたんだから、歸つて來ることは知つてても、着く時間なんかわかるまいしね。昔のお友達やなんかとは、どうなつてゐるんだか……。

アンリエット　でも、お父さまは、有名な學者なんでせう。

老婦人　佛蘭西ではね。それが却つて、日本の學界に容れられない理由らしいね。收のお父さんなんかは、あれで、三十そこそこで博士になつたんだけれど、お前のお父さんからは馬鹿にされてゐた。學問の系統が違ふと、ああまで排斥し合はなくつちやならないのかね。

アンリエット　收兄さまのお父さまは、人類學の方でせう。

老婦人　ああ、さうだ。それや、アルケオロオグとしちや、お前のお父さんは、世界でも、第一人者だよ、今ぢや……。

つるが、羽根蒲團を持つて來る。

つる（それを着せながら）あの、先生がお見えになりました。

老婦人　それぢや、失禮ですが、こちらへつて……。

つる去る。やがて、醫師を案内して來る。

醫師　どうなさいました。

老婦人（元氣を裝つて）いえ、なんでもないんでございますよ。一寸眩暈がいたしましたの……此間中からの疲れが出たんでございませう。

醫師　ははあ、今日は、いよいよ、お着きの日ですな。今、お出掛けのところだつたんですか。

老婦人　はあ、丁度出掛けようとして、ここまで參りましたら、ふらふらッといたしましたものですから、かうやつて、休んでをりましたんですの。

醫師　ここぢや御窮屈でせう。まだ、ふらふらなさいますか。

老婦人　今、ここぢやあんまりだと思ひまして起ちかけたんでございますけれど、なんですか、まだ……。

醫師（脈をとりながら）ははあ……。

老婦人　何時か、かういふことがあるだらうと覺悟はしてをりましたんですけれど……。

醫師　覺悟は大袈裟ですな。いや、大したことはありません。

老婦人　例のぢやございますまいか。

醫師　いや、いや、それとは違ひます。やはり、輕い腦貧血でせう。大分、お氣をお使ひになりましたらうからな。

老婦人　ええ、もう二度とないことでございますから……。

醫師　お召を一寸……。は、結構……。（脈などを見たる後）それでは、お胸をさつと拜見して置きませう。念のために……（胸に聽心器をあてる）たしかなものです。御心配はいりません。ですが、今日は、安靜になすつていらしつた方がいいでせう。

老婦人　無理でございませうか。

醫師　御用心をなさるに越したことはありませんな。私が伺つた以上は、お止め申すより外はありません。

老婦人　少しぐらゐの無理なら……。

醫師　それがいけません。平常、人並はづれて御養生家でいらしやるのに、今日はまた……。それや、特別のなんでせうが、一つ御辛抱を願ひます。（頭を掻きながら）驚きましたな、どうも……、奥さまに、私から、こんなことを申し上げなければならないなんて……世の中も變れば變るものです。

老婦人　から、意氣地がございません、かうなりますと……。

醫師　お察しします。

老婦人　（涙をふきながら）諦めませう。アンリエット、それちや、お前、一人で行つておいで……。行けるね。本當の叔母さまを見つけてね、一緒にお父さまを探してお貰ひ……。つるやを連れて行くかい。

アンリエット　いいえ。

老婦人　途中は大丈夫だね。いや、やつぱりつるやを連れておいで。

アンリエット　いいのよ、お祖母さま。東京驛なら、わかるわ。

老婦人　さうかい。本郷の叔母さまは、婦人待合室で待つてらつしやる筈だからね。時間はまだゆつくりだから、慌てないでもいいよ。

アンリエット　お父さまは、どんな服を召していらつしやるかしら……。

老婦人　さあ、それはわからない。お前、お顔をよく覺えてないんだね。叔母さまは、いくらなんだつて、覺えてる筈だ。（考へて）おやね、かうするといい。――この寫眞を持つて行つて、見くらべてみるさ、汽車から降りる人の顔を一々……（さう云つて、笑ひながら、頸にかけた鎖を外し、アンリエットの頸にかけてやる）

アンリエット　（その寫眞を一時見つめてゐる）

老婦人　鼻の横に大きなホクロがあるから、それを目標にしてね。（醫師に笑ひかけ）丸で昔の、親を尋ねて歩いたですわね。叔母さまが訊いたら、一寸氣分がわるいのでつて云つておくれ。お父さんにも、出かけに眩暈がして倒れたなんて云つちやいけませんよ。さあ、あんまり遲くならないうちに、出掛けなさい。（つるに）運轉手は、何處かへ行つてやしないかい。

つる　（走つて外に出る）

アンリエット　（いそいそと）行つて參ります。（走り去る）

老婦人　（黙つて、それを見送る）

長い沈黙。

醫師　お孃さんを御覽になるのがお樂しみでせうな。

老婦人　倖でございますか。ええ、それや、もう……。年寄なんか、こちらでいくら待つてゐましても……。

醫師　なに、それは、また、別ですよ。

長い沈黙。

老婦人　長年の今頃も、先生がかうして駈けつけて下さいました。

醫師　ああ、とうとう……。しかし、どちらも、違つた意味で、私が不必要でしたな。――あの時は、全く、手の下しやうがありませんで

した。

老婦人　あたくしが、ここに、からして、書物を讀んでゐましたんですよ。

醫師　さうでしたか。お驚きになつたでせう。

老婦人　變なものですわね。あの子が――收つて申しますんですが――柿の木へ登つて柿を取つてゐることは知つてゐたんでございますよ。危いことをする、早くやめてくれればいい、さう思ひながら、つい、止めることもせず讀む方にばかり氣を取られてゐたんでございませう。

醫師　よくあることです。たしか、お孃さんもその場にいらしつたんでしたな。

老婦人　あれが何か、大きな聲で、しきりにあたくしに云ひつけてをりますのがお耳に入りながら、どうしたと云ふんでせう……あれで、一度か、二度、注意はしたと思ひますんですけれど……。

醫師　どうも怪我といふものは、こいつ、豫め、なんとするわけにも行きませんしな。

老婦人　それがね、後から考へてみますと、ただ、怪我ぢやないらしいんですの。こんなこと、申し上げていいかどうか存じませんけれど……

醫師　いや、それは何ひますまい。醫者はただ、與へられた場合の處置さへ講じればよろしいのです。立ち入つたお話は、お互のためによくはありますまい。それに、あまり、また、お話が過ぎると、お疲れになりますから……。もう暫く、からしてゐて、お部屋へお連れしませう。大分、冷えて來ました。

老婦人　あの柿の木は、その後、伐らせてしまひましたの。

醫師　何ひました。

老婦人　その跡へ、「もつこう薔薇」を植ゑさせましたんですけれど、よくつかないらしいんですの。收といふ子が、あの花が好きでしてね。

醫師　はあ。（脈をみる）

長い沈默。

老婦人　なんですか、胸騷ぎがして……。

醫師　（默つて脈を見つづける）

つる現る

つる　（醫師に）何か御用はございませんですか。

醫師　あ、それぢや、一寸、わたしの家へ行つてね、……いや、供のものにこれを取りにやつて下さい。（紙片に何か書きつけて渡す）

つる　はい。（退場）

醫師　御氣分は……？

老婦人　少し頭痛が……。

醫師　靜かになすつていらつしやい。すぐよくなります。汽車は、何時ですか。

老婦人　五時三十分……。

醫師　（時計を見ながら）五時三十分と……。

老婦人　間に合ひませうか。

醫師　何がですか。

老婦人　お隱しになつてはいけません。仰しやつて下さい。ほんたうのことを……。

醫師　ほんたうのことと云ひますと……。

老婦人　丁度必要なだけ……。（溜息）

醫師　なにがです。

老婦人　あたくしの命が……。

醫師。御冗談おつしやつちやいけません。

老婦人　（苦しさうに）ここでは困ります。

醫師　ええ、今……。

老婦人　つるや……。

醫師　女中さん……。

つる、急いで現る。

老婦人　つるや、わたしを、向うへ連れて行つておくれ。

醫師　いや、一寸待つて……。實さん、なんで

もありませんよ。これくらゐのことはざらにあります。
老婦人　それやさうでせう。
醫師　お連れする前に、一寸、カンフルを一本射しときませう。
老婦人　注射ですか。
醫師　必要はあるまいと思ひますが……。
老婦人　そんなら、よしませう。痛い思ひをするだけ損ですわ。
醫師　そんなことおつしやらないで……。
老婦人　そんなら、このまま、ぢつとしてゐませう。
醫師　それだけはつきりなすつていらつしやれば文句はありません。（つるに）お床の用意は出來てゐるんですか。
つる　はい。
醫師　お二階でしたな。（間）それではと……（考へる）何か、下に敷くものはありませんか。もう暫く、このままの方がいいでせう。
つる（奥に去る。やがて、クッションを二つ三つ持つて來る。）
醫師　そいつは結構。（老婦人の頸の下、肩の下などに敷く）いかゞです、お痛いところはありませんか。
老婦人　頭が……。
醫師　（脈をとりながら）それは、御心配いりません。平常、あゝいふ風に申し上げてあつたものだから、嘸しやとお思ひになるのでせうが、この通り、心臓はたしかなのですから、決して怖くはありません。動脈硬化も、奥さんぐらゐの程度なら、まだまだ……（間）お顔色がだんだんよくなつて來ました。（つるに）お宅には、ウヰスキーかなにかありませんか……葡萄酒でもよろしい。
つる　葡萄酒ならございます。
醫師　少しどうぞ……。
つる（奥に去る。やがて、葡萄酒を持つて來る）
醫師　（それを老婦人に飲ませる）平生、少しづつ、召上つていらしつたんですな。（瓶を檢めながら）これは、なんですか……ハ……ウ……テ……サ……ウテルネ。
つる　オート・ソーテルヌでございませう。
醫師　（つるの顔を見上げ）なるほど、耳學問といふやつで……。
つる　（口を抑へ、聲を立てずに笑ふ。が、急に眞顔になり）御隠居樣、お寒くはございませんか。
醫師　さやう、少し、薄いやうですね。もう一枚、何か……（湯湯婆を換させる）
つる、奥にはひり、別の掛蒲團を持つて來る。
老婦人　先生はお寒くはありませんか。
醫師　いや、わたしは、太つてますからな。
老婦人　もう何時でございませう。
醫師　今が、きつかり五時です。
老婦人　……。
醫師　折角の日を、どうも殘念でしたな。
老婦人　あたくしは、もう息子を一人失くし、孫を一人失くしたんですからね。それから、もう一人の息子は、十年間もあたくしをうつちやらかして、旅へ出たまま歸つて來ようとはしなかつたんですもの。それでも、自分の手許には、ときどきその孫娘を、世の中にたつた一つしかない寶のやうに、大切に預つて、可愛がれるだけ可愛がつて來ましたのが……それさへ、今日、赤の他人に奪はれてしまふんです。赤の他人も同樣です。それは、旅から歸つて來る倅のことを申すのではありません。もう一人の男です。もう一人の、何處からか、不意に現れて、あたくしの息子たちに代つて、大きな顔をして

ゐる男です。
醫師 ……。
老婦人 これは自分の娘だ――さう云つて、また、あたくしの手から、あのアンリエットを攫つて行かうとしてゐるんです。あたくしの倅なら、そんなことはしない筈です。ねえ、さうぢやございませんか。
醫師 ……。（體溫器を外して見る。首を傾ける。不安らしい表情）
老婦人 あのアンリエットの爲めには、あたくしは、殆ど、一人の男をさへ殺しました。その男とは、やはり、あたくしの可愛がつてゐた孫です。父親を失くして、一生日を暮らせてゐるのかと思はれるやうな、あの寂しい男の子。……このあたくしですよ、あの牧を殺しましたのは……。（溜息）
醫師 奥さん。
老婦人 ええ、さうです、柿の木から……あの柿の木のてつぺんに、アンリエットの心臟が、赤く、ぶら下つてゐたんですもの……
醫師 奥さん。
老婦人 （殆ど口の中で）頭が……頭が……。
長い沈默。
老婦人 （だんだん興奮狀態になる）一枝、おろしておくれ。お前の、かけがへのない一人息子が、ああまで思ひつめてゐたアンリエットの日に、その頃から、弘といふ青年が映つてゐた――それから、その青年の方でも、アンリエットを――から思ひ込んでゐたわたしが、この春、どんな悲劇を見せられたか、一枝、お前だけは、ちやんと、それを知つてゐるね。
醫師 （老婦人の脈をとる）
老婦人 お前は、その時、牧のことを思ひ出してゐた。さうして、わたしを、例の目で見てゐた。わたしは、この一年間、お前のその目を、どれだけ避けようとしてゐたか。お前は、なんにも知らないといふだらう。誰がそれを知つてゐよう。だが、お前は、やつぱり、母親だもの……。子供の運命については、神の聲を聞くことのできる母親だもの……。お前は、その鋭感な母親の鼻で、わたしの罪を嗅ぎ當ててゐたんだね。
醫師 （益々不安な表情）
老婦人 （息苦しさうに、しかし、朗らかな聲で）
O Thébains ! Jusqu'au jour qui termine la vie......
長い沈默。
つるが、白い布の包みを持つて、恐る恐る近づいて來る。醫師の手に包みを渡し、何やら小聲で囁く。醫師、うなづく。
醫師 （老婦人の耳許に口を寄せ）大分およろしいやうですから、向うへお連れしませう。
老婦人 お默り……。お前はお父さんと何處へでも行くがいい。お祖母さんは、もう用のないからだだから、お前たちの邪魔にならない處にゐよう。
醫師 風邪でもお引きになるといけませんからな。
老婦人 アンリエット……。どうして、お前は、何時までも、そつちを向いてるの。怒つたのかい。何も、そんなに怒ることはないぢやないか。
醫師 （つるに目くばせしながら、老婦人のからだを起さうとする）
つる （それを、向う側に廻つて、手傳ふ）
醫師 （突然）あ、いけない、いけない。（手を放す。急いで、注射の用意をする）本郷に御親戚がおありでしたな。電話がありますか。
つる はい。
醫師 あまり、びつくりなさらんやうに……そ

れでも、至急、おいでを願つて下さい。

つる　御前様へ、申し上げてもよろしいんでございますか。

醫師　勿論、さう云つて……。

つる　本郷の奥様は、只今、停車場の方へ、お宅の旦那様をお迎へに行つておいでになる筈でございますが……

醫師　こちらへ、御一緒に見えるんですか。

つる　さあ、それは……。

醫師　兎に角、お知らせだけしといて……。ほかには別に、お知らせするところはありませんな。

つる　あたくしでは、一寸わかり兼ねますが……。

醫師　よろしい　取敢へずお願ひします。

つる、急いで退場。醫師、注射をする。

老婦人　アンリエット……アンリエット……。

醫師　今、すぐ……。もうぢきです

老婦人　收、何をそんな顔をして見てるんです。そんな處に、誰もゐやしないよ

醫師　（老婦人の手をとる）

長い沈黙。

この間から、夕日がへやのあかりを強め、老婦人の顔に、一種、狂氣な光を漂はせはじめる。

老婦人　（やや穏やかな調子に復し）さうら、歸つて來た……。もう少し遅いと、母さんは、お前の顔が見えなかつたんだ。さ、こつちへおいで……。海は荒れなかつたかい？（間）よく歸つて來てくれたね。あんまり遅いので、母さんは、お前が道に迷つたんぢやないかと思つて心配したよ。まあ、どうしたの、その埃は……。

長い沈黙。

みんな揃つたかい。收はどうした、收は……。（間）あ、誰か、早く……。（間）死しておくれ、みんな、死しておくれ……。わたしは、ただ、少し、長生きをしすぎただけだ……。ただそれだけだ……。

日が沈み終つて、舞臺、次第に暗くなる。

——幕——

紙風船（一幕）

晴れた日曜の午後――庭に面した座敷。

夫。縁側の籐椅子に倚り、新聞を讀んでゐる――「米國フォード會社のターナー支配人が、目白文化村を訪れて、おおロスアンゼルスの樂園よ！と申しましたやうに、目白文化村は今日清新たる美しい住宅地になりました――」

妻。――縁側近く座蒲團を敷き、編物をしてゐる――なに、それは。

夫。（讀み續ける）「同村の特徴には、整然たる道路、衛生的な下水道電燈瓦斯給水設備、テニスコート等の設備があり多くの小綺麗なバンガローや莊重なライト式建築、さては優雅な別莊風の日本建築など、富士の眺めや樹木に富む高臺一帶の晴れやかな環境に包まれて――」新聞を投げ出し――おい、散歩でもして見るか。

妻。いいから川上さんとこへ行つてらつしやいよ。

夫。是非行かなくつてもいいんだよ。

妻。あたしは、思ひ立つた時すぐでなけれやいやなの。

夫。散歩か。

妻。散歩でもなんでも……。

（間）

夫。散歩でもなんでもつたつて、ほかに何かすることがあるかい。

妻。ないから、それでいいぢやないの。

夫。ああ。

妻。川上さんとこへいらつしつたらどう、そんなこと云つてないで。

夫。もう行きたくないよ。

妻。行つてらつしやいよ、ね。

夫。行かないよ、お前のそばにゐたいんだよ。わからない奴だなア。

妻。わかつてますよ、憚りさま。

（間）

夫。ああ、これがたまの日曜か。

妻。ほんとよ。

夫。（また新聞を拾ひ上げ、讀むともなしに）新聞からいふ場合の處置なんていふことを、新聞で懸賞募集でもして見たら、面白いだらうな。

妻。あたし出すわ。

夫。（新聞に見入りながら、興味がなささうに）何て出す。

妻。問題はなんて云ふの。

夫。問題か……問題はね、結婚後一年の日曜日を如何に過すか……。

妻。それぢや、わからないわ。

夫。わからないことはないさ。ぢや、お前云つて見ろ。

妻。日曜日に妻が退屈しない方法。

夫。そして、夫も迷惑しない方法……。

妻。いいわ。

夫。名案があるのかい。

妻。あるわ。先づ女は、朝起きたら、早速お湯に行つて、ちやんとお化粧をすまして、着物を着替へ、一寸お友達の處へ行つて來ますつて云ふの。

夫。すると……。

妻。すると、男は、きつといやな顔をするにきまつてるでせう。
夫。きまつてやしないさ。
妻。あなたのことよ。
夫。おれが何時いやな顔をした。
妻。しないの。
夫。まあいい、それからどうする。
妻。いやな顔をするでせう。さうしたら、かう云ふの――實は、あんまり行きたくもないんだけれど、うちでぶらぶらしてたつていふことが後でわかると工合が悪いから……それが、會ふたんびに、一度遊びに来い、日曜なら主人もゐるし、一緒に芝居にでもつて、さう云はれるんでせう、今日は、どうせあなたもうちにゐて下さるんだし、一寸行つて来ようと思ふの。それとも、何か御都合でもあればつて優しく訊いて見るの、それとなくよ。
夫。それとなくね。いや、別に、おれの方はかまはないが、お前がゐなくつて、晝飯はどうする。
妻。お晝は、お茶漬の用意をして置きました。
夫。晩は。
妻。晩は、出かけにあそこへ寄つて、親子でもさう云つて置きませう。
夫。また親子か。歸りは遅くなるだらう。
妻。さうね、まあ、はつきりわからないけれど、十時になつたら、お床を敷いて寝てて頂戴。
夫。金は持つてるかい。
妻。それがもう、すつかりなの。
夫。ぢや、これを渡しとかう。さ、十圓。
妻。ありがたう。
夫。夜風はもう寒いよ、襟巻を持つてけ。
妻。ええ。
夫。さて、おれは、これからゆつくり本でも讀まう。湯だけ沸くやうにしといてくれ。客が来たら、ビスケットの殘りがまだあると……。髭も今日は剃るまい。あゝあ、長閑な日曜だ。
妻。（默つて下を向いてゐる）
夫。どうしたい。
妻。あなたは、もう駄目。
夫。どうして。
妻。どうしてでも。
夫。（新聞を投げだし）さうか、それぢや、お前若し男だつたら、さういふ時、どうする。
妻。さういふ時つて……。
夫。止めるかい。
妻。止めるわ、なんとか云つて。
夫。何んて云つて止める。
妻。是非行かなくつても濟むんなら、今日は、おれと芝居を附合はないか、とか何んとか……。
夫。なるほど。附合はうつて云はれたらどうする。
妻。行けばいいわ。
夫。行けばいいさ。しかし、行きたくなかつたらどうする。行きたくつても、事情が許さなかつたらどうする。今日見たいに。
妻。ぢや、芝居が活動になつたつていいぢやないの。
夫。活動か……あれや、お前、夫婦で見に行くもんぢやないよ。
妻。なぜ。
夫。誰にでも訊いて見ろ。
妻。それがいけないの、あなたは。あたしはほかの女と遊びますよ。
夫。遊ぶだらう。遊ぶから、なほあぶない。
妻。何を云つてるの。
夫。やつぱり出るといふものは、止めない方がいいやうだな。

妻。さうね、だから行つてらつしやい、川上さんとこへでもなんでも。

夫。しつこいな。今朝お前は何んて云つた。おれが、川上の處へ行つて來るつて云つたら、川上さん川上さんつて毎日社で顔を合はせてる人を、なんだつてさう戀しがるんでせうね、日曜ぐらゐ一日うちにいらつしつたつて損はないでせう。何んの爲めにあたしがかうしてゐるんです。さう云つたね。

妻。それがどうしたの。

夫。どうもしないさ。問題は、お前が、何んの爲めにかうしてゐるかつていふことだ。

妻。（ややむきになり）あら、かうしてゐてはいけないの。

夫。かうしてゐるにも、かうしてゐやうがあるぢやないか。おれが新聞を讀む。お前は編物をしはじめる。おれが溜息を吐く。お前も溜息を吐く。おれが欠伸をする。お前も欠伸をする。おれが……

妻。だから、どつかへ行きませうて云へば、あなたが、なんとか、かんとか云つて……。

夫。よし、それはわかつた。だが、おれたちは、日曜にどつかへ行く爲めに、夫婦になつたわけぢやあるまい。うちにゐたつて、もう少し陽氣な生活ができる筈だ。

妻。あなたが話をなさらないからよ。

夫。話……どんな話がある。

妻。話は「する」ものよ。「ある」もんぢやないわ。

夫。なんだ、それや……。哲學か。よし、話は「する」ものとして置かう。お前だつて話をしないぢやないか。

妻。うるさいつておつしやるからよ。

夫。何かしてる時に喋舌るからさ。

妻。うそよ、寝てからでもよ。

夫。ねむいからさ。

妻。（しんみり）ほんとを云ふと、あたしは、默つてあなたのそばにゐさへすれば、それで滿足なの。あなたが、もう少しあたしに氣をつけて下さると、それこそ、どんなにいい方だか知れないんだけれど……。

夫。（小鼻をうごめかし）晩飯の菜はなんだい。

妻。（快活に）未定よ、今日の成績次第。

夫。（その氣持に入り兼ねて）お前はいつまでも女學生だね。

妻。どういふ意味。あたし、何時でもさう思ふわ、日曜なんか、それや餘裕がある時は、お芝居を見に行くなり、何かおいしいものを食べに行くなり、さういふこともあつていいけれど、そんなことは第二として、もつと家庭らしい樂しみが、いくらだつてあると思ふの。お庭だつても、これぢやあんまりだわ。あなたが手傳つて下されば、一寸した花壇ぐらゐこしらへるのは、それこそなんでもないわ。今頃、コスモスなんかがいつぱい咲いてて御覽なさい。外から見ても綺麗ぢやないの。

夫。だからお前は女學生だよ。

妻。そんなら、あなたは小學校の生徒よ。

夫。（笑ひながら）さういふところがあるかい。

妻。あつてよ。

夫。おい、散歩しよう。

妻。もう遅いわ。

夫。その邊でもいいや。

妻。どこ、井の頭。

夫。多摩川でもいい。

妻。そんならもつとゆつくりした時にしませうよ。どつかでお晝でも食べるつていふやうにしなくつちや、つまらないわ。

夫。お前の歳はいくつある。

妻。もういや、今日は、そんな話は。

夫。（指を折りながら）十六、十七、十八、十九……。

妻。それこそ、朝から用意をして、朝御飯を食べたらすぐ出掛けるくらゐでなけれや……。
夫。前の晩に話をきめといてくれ。
妻。さうよ、何處なら何處へ行くつて。
夫。日歸りで鎌倉あたりへ行くのもいいな。
妻。行きたい處があるわ。
夫。さうするつていふと、東京驛を八時何分かに出る汽車がある。
妻。一等よ。
夫。當り前さ。早くあの窓ぎはの向ひ合つた席を占領するんだなあ。おれのステッキとお前のパラソルとを、おれが、から網の上にのせる……。
妻。あたし、持つてる方がいいの。
夫。さうか。後からはひつて來る奴らは、おれ達を見て、ははあ、やつてるなと思ひながら、成るべく近くに席を取るに違ひない。
妻。馬鹿ね。
夫。汽車が動き出す。
妻。窓を開けて頂戴。
夫。煤がはひるよ。あれ御覽、濱離宮の跡だ。
妻。まあ。
夫。品川、品川、山手線乘換。
妻。早いのね、あたし、キャラメルを買ふの。
夫。よし、おい、キャラメル。
妻。あなたはいかが。
夫。もらはう。大森は通過、もうぢき社長の家が見える。
妻。あれかさう、けちな家ね。
夫。けちな家だ。蒲田、川崎は飛ばして横濱と。こんな處にも用はない。程ケ谷、戸塚、さあ大船へ來た。
妻。あたし、サンドウヰッチを買ふの。
夫。よし、おい、サンドウヰッチ。
妻。あなたはいかが。
夫。うむ、もらはう。
妻。いいわよ、一人でたべちや。
夫。さ、降りる用意をした。下駄を穿いて……。
妻。坐つてなんかゐません、そんな……。
夫。先づ行くとすると八幡宮だらうな。知つてるか。
妻。知つてますよ。それより、海岸へ行つて見ませうよ。
夫。それもよからう。ええと……。
妻。自動車を呼べばいいわ。
夫。さうか、おい、タクシー。さあ、お前先へ乘れ。
妻。ぢや、御免遊ばせ。
夫。そこで、煙草に火をつけると。
妻。その前に、行先をおつしやいよ、運轉手に。
夫。海岸でいいぢやないか。
妻。をかしいわ、海岸までなんて。一寸、運轉手さん、海濱ホテル。
夫。海濱ホテルは閉まつてやしないか。
妻。うそおつしやい。
夫。しやうがない。行つちまへ。ブウ、ブウ、ブウ……。
妻。何よ、それや。もう來たのよ。
夫。やれやれ。ぢや、見晴しのいい部屋へ通してくれ給へ。
妻。食堂でいいぢやないの。
夫。さうさ、だから、お前、何か註文しろ。
妻。あなたは。
夫。おれはなんでもいい。
妻。ぢや、カルピスを一つ、冷たいのね。
夫。おい、君、君、晝まではまだ間があるから、少しその邊を歩いて來よう。十二時には歸つて來るから、何か美味いものを食はして吳れ。
妻。さう。
夫。それから當分滯在したいんだが、いい部屋があいてるかい。バスルームのついた

妻。バスルームつて……お風呂場ね。
夫。しッ。あ、さう。ぢや、それにしよう。いや、見ないでもいい。それから君のうちに飛行機はないの。
妻。あなた。
夫。ない。それぢや仕方がない。歩いて行かう。さ、おれのステッキは……。
妻。また汽車の中に忘れて来やしない。
夫。いや、ボーイに渡した。ああ、それだ。
妻。どつちへ行くの。
夫。向うに見えるのが江の島だ。
妻。いい景色ね。
夫。気をつけないと轉ぶよ。どら、手を曳いてやらう。
妻。人が見るわよ。
夫。見る奴が損をする。草臥れたか。ぢや、この邊で一休みしよう。なんなら、海へはひつてもいいよ。
妻。あたし、はいるわ。
夫。はひれ。うむ、お前も裸になると、なかなか好い體格だ。あんまり遠くへ行くな。
妻。大丈夫よ。
夫。待て、待て。そこで、さうしてて見ろ。寫眞を一枚撮つて置かう。さ、いいかい。うむ、これや素敵だ。（だんだん興奮して来る）今迄、お前が、こんなに美しく見えたことはない。どうだい、その形は……。なんといふ素晴らしい色だ。さうさう、やあ、お前の髪の毛は、そんなに長かつたのか。お前の胸は、そんなにふつくらしてゐたのか。あ、笑つてるね。こつちを向いて御覧。うん、それがお前の眼だつたのか。ああその口は……（われを忘れたやうに叫ぶ）
妻。（はじめて顔を上げ、たしなめるやうに）あなた。

（長い沈黙）

夫。ここへ来て見ろ。
妻。（笑つてゐる）
夫。（両手を差出し）来て御覧。
妻。いや。
夫。来て御覧つてば。
妻。（立ち上り、夫の両手を取り、それを振りながら）あなたには、丁度いいつていふところがないのね。
夫。どういふ風に。（妻を引寄せようとする）
妻。いや、そんなことしちや。
夫。（妻の手を取りたるまま）お前は、ほんとに、おれがいやになりやしないか。おれとかうしてゐるのか……。
妻。あなたはどうなの。
夫。おれは、お前とかうしてゐることが、だんだんうれしくなつて来た、それは事實だ。しかし、お前がゐなくなつた時のことを考へると、立つても坐つてもゐられないやうな気がする。それも、ほんとだ。
妻。どつちがほんとなの。
夫。どつちもほんとだ。（間）だから、おれは、こんなことぢやいけないと思ふ。が、どうにもならないんだ。（間）お前が、さうして、おれのそばで、黙つて編物をしてゐる。お前は一體、なんで満足なのか。そんな筈はない。おれの留守中に、お前は、どこか部屋の隅つこで、たつた一人、ぼんやり考へ込んでゐるやうなことがあるだらう。おれは外にゐて、お前のその淋しさうな姿を、いつも頭に描いて見る。百圓足らずの金を、毎月、如何にして盛大に使ふか、さういふことにしか興味のないおれたちの生活が、つくづくいやになりやしないか。今更そんなことを云つてもしかたがないと諦めてゐるかも知れない。しかし、お前は決して理想のない女ぢやないからね。おれは、今のお前がどんなことを

わかつてゐるか。それが知りたいんだ。からいふ生活を續けて行くうちに、おれたちはどうなるかつていふことだらう。違ふか。それとも、お前が、娘時代に描いてゐた夢を、もう一度繰り返して見てゐるのか。

妻。あなたは馬鹿よ。（笑はうとしてつい泣顔になる）

夫。人間はみんな馬鹿さ。自分のことがわからずにゐるんだ。さ、もうよさう、こんな話は。

妻。でも久しぶりよ、泣いたのは。

夫。おれが、日曜日にお前をはふつて外へ遊びに出る。それをお前が不滿に思ふのは當り前だ。たまには氣晴らしがしたいだらう。活動ぐらゐなんでもない。夕飯でも食つたら、出掛けるか。

妻。（うなづく）

夫。行かう。そんならそれで、早く風呂へでもはひつて來い。

妻。（涙を拭きながら）今日はいいの。

夫。どうして……

妻。あなたこそ、今日で三日目よ。

夫。さう、少し寢坊過ぎたかな……まあ、今日はよさう。それより、今は三時半だから……さうだ、夕飯までに一寸出て來るからね。

妻。（元の座に着き、恨めしげに）どこへいらつしやるの。

夫。なに、ぢき歸つて來る。

妻。（夫の顔を見つめ、何か云はうとして、急にうつむき）ええ、いいわ。

夫。（もぢもぢしながら）川上さんとこぢやないよ。

妻。（氣まづげに）何處だつていいことよ。

夫。（妻の傍にしやがみ）玉突だと思つてるんだらう。

妻。（その方は見ずに）いいから、行つてらつしやいよ。

夫。怒つたのか。

妻。（また泣いてゐる）

夫。（途方に暮れて）どうしたんだい、一體。

妻。あたしが惡かつたの。

夫。いいも惡いもないぢやないか。だから、後で活動へ行くんだよ。

妻。（溜息を吐き）もう、わかつたの。

夫。何がわかつたんだい。

妻。もういい加減に諦めるわ。

夫。なにを……

妻。御覽なさい。

夫。變だぞ。

妻。をかしなものね。よその奥さんたちは、旦那さんがお留守だと、けつく氣樂だつてよろこんでゐるの。だけど、あたし、それが不思議だつたの。

夫。それや、不思議なのが當り前さ。

妻。それが今日、やつと不思議でなくなつたの。

夫。え。

妻。男つていふものは、やつぱり、朝出て、晩歸つて來るやうに出來てゐるのね。

夫。（苦笑する）

妻。男つていふものは、家にゐることを、どうしてさう恩に着せるんでせう。女は、それがたまらないのね。

夫。何も恩に着せるわけぢやないさ。

妻。だから、行く處があつたら、さつさと行つて頂戴。その方が、ずつと氣持がいいわ。

夫。（また椅子にかけて、新聞を讀み始める）

妻。あたし、田舍であそびたいの。

夫。おれもおそろしい。

（間）

妻。あなたは、あしたは、あたしを甘やかし過

ぎるのよ。(編物をし始める)
夫。さうでもあるまい。
妻。いいえ、さうなのよ。
夫。むづかしいもんだな。
妻。よそのうちを御覧なさいよ。
夫。見てるよ。
妻。あの通りになさいよ。
夫。出來ないよ。
妻。女はつけ上るものよ。
夫。知つてるよ。
妻。そいぢやいいわ。
(長い沈默)
夫。おれたちは、これで、うまく行つてる方ぢやないかなあ。
妻。もう少しつていふ處ね。
夫。金かい。
妻。さうぢやないのよ。
(長い沈默)
夫。犬でも飼はうか。
妻。小鳥の方がよかない。
(長い沈默)
夫。(欠伸をする)
妻。(欠伸をする)
(間)

夫。おい、話をしてやらうか。
妻。ええ。
夫。昔々ある處に、男と女とがあつた。男は學校を出るとすぐ會社に勤めた。女は、まだ女學校に通つてゐた。二人は毎朝、同じ時刻に、郊外の同じ停車場で顔を合せた。そのうちに、二人は、お辭儀をするやうになつた。男が早く來た時には、男は女の來るのを待つた。女が早く來た時には、女は‥‥
妻。先へ行つてしまつた‥‥。
夫。さういふこともあつた。
(此の時「あらッ」といふ女の子の叫び聲が聞える。庭の中に、大きな紙風船が轉がつて來る)
夫。(新聞を投げ出し、庭に降りて風船を拾ふ)
妻。(獨言のやうに)千枝子ちやんは、おうちにゐるの、今日は。
夫。(默つて風船をつきはじめる)
妻。およしなさいよ、あなた‥‥(大きな聲で)千枝子ちやん、いらつしやい。をばちやんと風船をついて遊びませう。
夫。(相變らず一生懸命に風船をつく)
妻。(起ち上り、玄關から下駄を持つて來て庭に降り)あなた、駄目よ、そんなに力を入れちや‥‥(子供が垣根の向うにゐるらしい、)それにさ、をばちやんとつきませう。(から云ひながら、夫のついてゐる風船を奪ひ取るやうにしてつく)千枝子ちやん、あつちから廻つていらつしやい。
夫。(妻の後を追ひながら、じれつたさうに)どら、貸して見ろ、おい‥‥。

——幕——

ぶらんこ（一幕）

夫
妻
夫の同僚

茶の間　朝

妻。（チャブ臺の上に食器を並べながら）あなた、さ、もう起きて下さい。

夫。（奥より）起きてるよ。一體何時だい。

妻。毎朝、わかつてるぢやありませんか。

夫。そんな時間か。

妻。いやね、どんな時間だと思つてらつしやるの。

夫。（跳ね起きるらしく）さうか。（間）カマキリは、まだ來ないだらう。

妻。あなたは[illegible]を兼ね、おとしなさいよ、へんな人[illegible]

夫。（頭を[illegible]）昨夜はね、[illegible]もなく面白い夢を見たよ。

妻。（相手にならずに）齒磨のチューブが破れてるから、氣をつけて頂戴。

夫。（臺所へ行きながら）鼠は出なかつたかい、昨夜は。

妻。（相變らず膳の上に氣を取られて）あなた、昨日の朝、何處へお置きになつたの。昨夕お湯へはいらつしやらなかつたし……。

夫。（楊枝を使ひながら）今日は、一つ、風呂へはひるかな。

妻。もう駄目ね、一昨日の牛蒡は……。

夫。さあ……。おれも、今迄、いろんな夢を見たが、これくらゐ不思議な夢を見たことがない。

（間）

實に愉快な夢なんだ。

妻、手拭はあつたの。

夫。あつた。

夢だからつて馬鹿にはできない。

おまへ、から[illegible]と、お前はすぐに、夢があてになるもんですかと來る。

それや、夢で金持ちになつたからつて、何も、ほんとに、金持ちになると限つちやゐないさ。

そんなことを、あてにする馬鹿があるもんか。

（間）

夢は、どこまでも夢さ。

それでいいんだ。

ところで、夢といふやつは、空想とは、また違ふんだ。

夢は、やつぱり、一生のうちで、實際に在つたことなんだ。

眠つてゐる間に、ちやんと起つたことなんだ。

妻。葱が煮え過ぎても知りませんよ。

夫。葱……今日は、葱の汁か……。

さうか。

（顔を洗ふ音。やがて、手拭で顔を拭きながら現る。）

妻は、入れ違ひに、臺所から釜を提げて來る

妻。お[illegible]はもう、[illegible]

夫。（手拭を釘に掛け、長火鉢の前にすわり）煙草[illegible]

妻。いいわ、時計と相談してれ。

夫。（煙草に火をつけながら）まだ大丈夫だ。（外を見るやうにして）好い天気だな。

（間）

つまり、夢に對するおれの興味は、夢そのものの面白さに在るんだ。

妻。（飯をよそふ）

夫。夢は、おれを退屈さから救つてくれる。夢は、おれに、人生の不思議を教へてくれる。

妻。（汁をつける）

夫。昨日と今日……今日と明日……その間に、おれは、この分からない旅をする。樂しい旅だ。おれに取つて、夢は、現實の一部なんだ。希望だとか、理想だとか……そんな空虚なもんぢやない。

妻。（箸を取り上げ）あなたは、よくさう、夢が見られるのね。

夫。羨ましいか。そこで、昨夜の夢だが……

（[illegible]）

妻。その前に、[illegible]出て[illegible]新聞を、早く取つて來て頂戴。

夫。あ、[illegible]、日曜[illegible]……といふことを、[illegible]いい……[illegible]、[illegible]、今日は、是非、取つて來る。

（沈默）

妻。今朝は、卵なしよ。

夫。どうして。

妻。買つとくのを忘れたの。

夫。よし、さう出なくつちや……。（忘れた……）何んといふ好い言葉だ。一切の醜さ、一切の暗さ、一切の苦しみ、恐ろしさを覆ふ言葉だ。忘れてくれ、忘れて……何もかも、忘れてくれ。

妻。（きまりわるさうに）あら、ほんとに忘れたのよ。

夫。ますますいい。（間）それに、今日の飯は、上出來だ。

妻。（[illegible]笑顔を作り）炭がね……。

夫。（妻の顔を見て）あ、ほんとだよ。

妻。さう？……（涙ぐむ）

夫。馬鹿、馬鹿……お前は、夢を見ないから、いけないんだ。たまに見れば下らない夢しか見ない。

妻。だつて、どんな夢が面白いんだか、わからないんですもの。

夫。なるほど、いつか話した夢は、あんまり込み入つてて、お前にはわからなかつた。わからなかつたから、面白くなかつたんだ。昨夜のは、きつと、わかる。わかるやうに、話してやる。お前は、おれの妻だ。おれが、どんな夢を見たか

それくらゐのことは、知つてなけれや。

妻。（夫の茶碗を取り、飯をつける）たくさんつけてよ。

夫。おい、おい。

妻。また、お晝までに、お腹が空くわよ。

夫。（茶碗を受け取りながら）それは、また、おれが小さい時分のことらしい。小さいと云つても、十六か十七……[illegible]に世の中が寂しい頃だ。

（間）

いつも云ふ通り、おれには、友達といふものが無かつた。遊ぶとなれば一人で蜻蛉を捕るか、さもなら日の暮れる[illegible]で

[illegible]くの指を
毎日毎日
毎日よく――
それは[illegible]とも言つた。

妻。いやよ、あなたに、お醤油をかけちや。

夫。おれは、子供の時分、よく醤油を、飯にかけて食つたよ。

妻。出たわ。

夫。お前は、何んでも、毒にしちまふね。

そこで、その夢だ。
おれは、あてもなく
その森の中へ、はひつて行つた。
往日、繪にかいた、その森さ。
夜なんだよ、それがね。

妻。それより、こつちのが漬かり加減よ。

夫。夜なんだ、それが……
奥へはひつて見ると
森は――その繪にかいた森は
とてつもなく、大きな森なんだ。
露西亜か、南米か……
そんな處に在りさうな
人跡未踏の大森林さ。

妻。（何か云はうとする）

夫。まあ、黙つて聴いてろ。

夜なんだぜ、それが……。
おれは怖いとは思はなかつた。
ちつとも怖いとは思はなかつた。
ただ、むやみに、悲しかつた。
おれは、不圖、自殺を思ひ立つた。

妻。もう澤山、そんな話は……。いいの、あなた、そんなにゆつくりしてゐて……。

夫。いいから、しまひまで聴け。
自殺を思ひ立つた。
そこで
一本の樹の枝を見つけて
それへ帯をひつかけた
頭の上で、その兩端を結びつけ
いよいよ
首を吊らうとしたんだ。

妻。（顔をそむけ）あなた！

夫。いいか
するとだよ……
すると、誰かが、後ろから、おれの肩を叩くぢやないか。

妻。人がゐたの。

夫。人なもんか。可愛い娘さ、それがね、十二三の……。
笑ひながら、おれの顔を見てるぢやないか。

（間。妻は夫が膳の上に置いた茶碗を取つて再び手に持たせる）

見てるんだよ。
どつかで會つたことがあるなあ――
さう思ひはしたが、どうしても思ひ出せない。

妻。あとで、わかつたの。

夫。待て待て。
（急いで飯をかきこみ）
すると、向うから、馴れ馴れしく
――何にしてるの――つて訊くんだ。
おれは
ブランコをこしらへてるんだつて云ふと
――ぢや、一緒に乘つて、遊びませう――つて云ふから
おれは
帯が、これぢや、短か過ぎるつて云つたんだ。

妻。（吹き出す）そんな……。

夫。（眞面目に）さう云つたんだ。
（間）
すると
――そんなら、あたしのを繋ぎませう――つて

メリンスの、赤い帯をほどくんだ。

妻。（笑ふ）いやよ。

夫。ほどくんだよ。

（間）

仕方がないから

ブランコをこしらへて

二人で乘つたよ。

（間）

木の幹がぐらぐらッと搖れる。

頭の上で、だしぬけに、けたたましい羽ばたきが聞えたと思ふと……

森中の鳥が、一どきにガヤガヤと啼き出した。

二人は

思はず、ブランコの上で抱き合つたさ。

妻。（やや暗い顏になり）もう、お茶……？

夫。お茶だ。

（間）

お茶だけれど……

それから先さ、面白いのは……。

妻。おや、その先は、今夜ね。もう、お靴を穿く時間よ。

夫。今日は、ブッドッヤにしよう。磨いてあるね。

妻。（起ち上つて洋服を出す）

夫。（それとなく、妻の方を見ながら）その時だよ。その娘の顏を、よくよく視たのは。

わからない。が……誰かに似てるんだ。

どこかで見たか、會つたか、話をしたか……。

妻。（靴下を檢めながら）今日は、何處へも上らないでせう。

夫。上らない……つもりだ。む、待つてくれ……よし、上らない。

兎に角

何時か、何處かで、どうかした女なんだ。

誰だと思ふ。

妻。わかつてますよ、そんなこと、さ、また、待つて頂くのは、お氣の毒ですわ。

夫。誰だと思ふ。

妻。誰でもよござんすよ。

あなたは、いつでもよ……朝の忙しい時に限つてそれなんですもの。

晩なら、もつと、ゆつくりするでせう。

夫。ゆつくりする。

しかし、もう、印象が新鮮でない。

頭の後ろの方か、まだ、夢に漬かつてゐるやうな朝の氣持……

こいつは、晩まで、もたないよ。

事務所の、埃臭い空氣を吸ふと、もう駄目だ。

恐ろしいものさ。

歸つて來て、お前の顏を見ると、それや、元氣は出る。

元氣は出る……が、ただそれだけだ。

お前は、あんまりはつきり見えすぎるよ。

（間）

しかし、もう着換へる。

カマキリの奴、今日は遲いぢやないか。

（茶を一息に飲み干し、起ち上つて、着物を脱ぎ始める）

妻。（手傳ひながら）もう、これぢや暑いわね。

夫。（喉の奥から妙な聲を出して唱ふ）

タラ　ララ　ララ　ララ　ララ

タララ　タララ　タララア

タララ　ララ

タララ　ララ

タララ　ラ　ラ　ラ　ラア

妻。（腹の底を擽りながら、優しく放け出すやうに）

何を無茶苦茶歌つてるの！

夫。無茶苦茶だ？

自分が知らない歌はなんでも無茶苦茶か、

（間）
處で、お前は、わかつてると云つたね。
その娘が、似てゐるといふ女は、誰だ。
をかしいぢやないか……。
だつて、おれが、お前を初めて見たのは、お前が幾歳の時だ。
十九か……
いや、二十か……
さうだね。
お前が十二三の頃は、どんな顔をしてゐたか、それが、おれに、わかる筈はないぢやないか。

妻。寫眞を見たでせう。

夫。さうか……
なるほどね。
お前は、また、恐ろしく、落つ着き拂つてるね。
痛快だよ……しかし……
疑ひも、そこまで、無くなれば。
序に、おれが、どんなに幸福かといふことも信じてほしいね。

妻。あたしも……幸福よ。

夫。うまい、うまい、その調子……。
（間）
いいかい
その娘が、どこか、お前に似てるんだよ。
いいや、それより、お前そつくりなんだ。
つまりお前なんだ。
しかし、そこが、夢の面白い處さ。
おれは、さう氣がついて、驚きもしなければ、まごつきもしない。
十六のおれは
十二のお前を抱いて
悠々
ブランコの上で夜を明かした。

妻。はい、チヨツキ。

夫。ブランコは
力を入れないでも、樂に滑けた。
（間）
房々したお前の髮の毛が、前にかがむ度毎に、おれの顔に、もつれかかる。
お前は、それが面白いと云つて、わざわざ顔を近づけて來るんだ。

妻。（笑ひながら）まあ……

夫。ブランコは
ひとりでに、搖れてゐるやうだつた……。
（間）
木の葉を洩れてくる薄明りが
仰向くたんびに
今度は
お前の顔を銀色に染めるんだ。
おれは
貪るやうにお前の眼を見つめた。
……お前は、やつぱり、笑つてゐるんだ。

妻。（夫の肩に頭をもたせかける）

夫。が、やがて、お前は、うとうとと眠り出した。
おれも、うとうとと眠り出した。
（長い沈默）
それから先は、お前が知つてゐる通りなんだ。
勿論、世界は、丸で違ふさ。
（間）
さうさう、覺えてるかい……
あの翌朝、おれたちは、すぐ、この家へ引越して來たね。
なんだ、これや。（部屋ぢうを見廻す）
これでも、人間の住む家か……
人間が愛し合ふ家か。
（間）
處が、昨夜はさうぢやないんだ。
春だと思つたのは、宮殿さ。

ブランコのつもりでゐたのは、やはらかな、あたたかい、天鵞絨の吊床なんだ。

妻。吊床つて、なあに

夫。吊床を知らないのか。吊床さ、そら……大人の寢る搖籃さ。

妻。宮殿なの……？

夫。うん……。その宮殿が、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやない。

（外の格子戸が開く音）

聲。おい、まだか。

妻。（慌てて夫の肩より離れ）それ御覧なさい、また遲れたわ。

夫。（慌ててチヨッキの釦をはめながら）いやいや、遲れない。（大聲にて）なんだ、やつぱり行くのか。今日は休むのかと思つてた。

聲。どら……。

（聲の主、茶の間に首を出す）

妻。あら、いけません、こんなとこへ……。

同僚。おや、もう、歸つて來たのか。や、奥さん、お早う。

妻。いくらせかしても、これですの。

夫。丁度いい。まあ、話の先を聽け。その宮殿と云ふのが、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやないんだ。

妻。（上着を着せながら）そこは違ひますよ。もつと上……。

夫。宮殿といふ言葉は惡いかも知れない。一切の裝飾が、ただ、住むものの爲めの裝飾なんだ。

同僚。面白いぢやないか。しかし、さういふ裝飾があり得るかね。

夫。あり得るさ。第一、吊床が奇拔なんだ。そのブランコさ、つまり……。

同僚。どのブランコ……。

夫。どのつて……。

妻。いやな片桐さん、ほん氣になつて聞いてらつしやるわ。（夫に）およしなさいよ、もう、あなた。

同僚。一體、何の話だい。

妻。夢なんですよ、この人の……。そら、例のですよ。

（夫にハンケチ、時計、金入などを渡す）

同僚。なあんだ、さうか。

夫。君は、しかし、夢の面白さがわかる男だ。ただ、自分では、一向、見ないやうだね。

同僚。見ない。所で、奥さん……。

夫。君は、ブランコに乘つたことがあるか。

同僚。ないよ。實はね……。

夫。よしよし、その話は後で聽く。昨夜の夢といふのはかうなんだ。

（卷煙草に火を點けながら）

おれが、まだ、十六七の頃……世の中が、變に、から、寂しい頃だ。

（玄關の方に行きながら）

それでゐて、いろいろの事を、知るともなしに、覺える頃だ。

（姿が消える）

同僚。實はね、僕、弱つたことになつたんだ。

夫の聲。弱ることはないぢやないか。

妻。（玄關に出る）

同僚。（起き上らうともせず、言葉つきは夫に、心持は妻にと云つた工合に）いや、それがね、急に、國から、おやぢがやつて來るつて云ふんでね、やつて來るのは、かまはないが……。

夫の聲。さ、行かう、行かう。

同僚。行くさ。そこで、どうでせう、奥さん、今晩だけ……。

夫の聲。いいよ、いいよ、どうにかなるよ。さあ……（同僚の手を引張るらしく）おれの夢を聽いてからにしろ。

同僚一（[illegible]起き上る。[illegible]がかくれる）それかれ、
[illegible]さん……。
た[illegible]よし、よし、こいつの知つたことぢや
ないつて、出ろ、出ろ。
[illegible]……[illegible]、何かに[illegible]いて行つて
しまへ[illegible]。
（[illegible]の閉[illegible]音）
[illegible]る。長火鉢に向かつて[illegible]をつく。ひとり
では、[illegible]
[illegible]く、そこで、おれは十六の少年
だ　。
世の中が
變に……
おい、何處へ行くんだ。
同僚の聲。一寸、待て……急用だ。
[illegible]の聲。こん畜生……早く、しちまへ。人が來
るぞ。
（[illegible]締めるともなく、一人が[illegible]子
[illegible]、一時、縺れるやうに[illegible]
てくる）

――幕――

命を弄ぶ男ふたり（一幕）

人物
眼鏡をかけた男
繃帯をした男

鐵道線路の土手――その下が、材木の置場らしい僅かの空地、黒く濕つた土の、ところどころに、踏み躙られた雑草。
遠くに、シグナルの赤い灯。
どこかに、月が出てゐるのだらう。

眼鏡をかけた男――二十四五ぐらゐに見える――が、ぽつねんと、材木に腰をかけてゐる。考へ込む。溜息をつく。洟をかむ。眼鏡を外して拭く。髪の毛をむしる。腕組みをする。眼の皺を伸ばす。舌を出す。
繃帯をした男が現れる。つまり、顔中繃帯で包んでゐるわけであるが、両方の眼と、鼻の孔と、口の全部、それだけが切り抜いてある。眼鏡をかけた男の前を行つたり來たりする。そこに人がゐるのを知らないやうにも思はれる。土手の上にあがるが、すぐ降りて來る。

眼鏡。君、君、踏切はもつと先ですよ。
繃帯。（別段驚いた様子もなく）さうですか。（獨言のやうに）踏切はもつと先……と。（眼鏡をかけた男と並んで腰をかける）
眼鏡。どこかへいらつしやるんですか。
繃帯。行かうと思ふんですがね。君も、どつかへいらつしやるんですか。
眼鏡。行かうか、どうしようかと思つてるんです。
繃帯。なるほど。行くのもいいが、どんなもんですかね。うまく、一思ひに、行けますかね。
眼鏡。まあ、行つて見ないことにや、わかりませんな。

繃帯。（長い沈黙）君は、どう思ひます、此の邊ぢや、やつぱり、此處でせうな。
眼鏡。さうですな、まあ、此處らあたりでせうな。
繃帯。迷ふことはないんだが、さて、迷ひますな。
眼鏡。いろいろ考へるからですな。どうにもしやうがないといふ場合に、これですからな。
繃帯。僕は、かう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男ですがね。書置一つしてないんです。それといふのが、理由ははつきりしてゐるし、これがまた、至極、散文的でしてね。
眼鏡。いや、その點では、僕なども同様ですよ。それや、人によつては、別の道を選ぶかも知れませんが、結局、癒らない病は癒らないんですからね。
繃帯。君の云はれることは、どうもよくわかりませんが、さういふ意味でなく、僕は、死といふことによつて、或る問題を解決しようとしてゐるんではなく、既に死人に等しい自分のからだを、自分で始末しようとしてゐるだ

けなんです。だから、何も、今更、英雄的な覺悟や、非現實的な空想で、此の一瞬間を、悲壯な物語りに作り上げる必要はないんです。

眼鏡。僕も、それを云ふんです。どうせ自分は意氣地なしだ。人生の敗殘者だ。運命の犧牲者だ。さう思へばこそ……。

繃帶。いや、いや、君はわかつてゐないんです。それや、その筈だ。君は、かう云つちやなんだが、一時の出來心でせう。戀人に捨てられたとか、會社の金を遣ひ込んだとか、誤つて人を殺したとか……。

眼鏡。はゝゝゝ。さう見えますかね。いや、もう何んにも云ひますまい。人の苦しみを、一人の男の苦しみを、さう簡單に片づけられちや、たまらない。

繃帶。わかりますか。まあ、それならそれでいい。お互に、かうして、偶然、同じ死に場所を選んで、そこへ同時刻に落ち合つた、ただそれだけの事實に、さうこだはることはない。どうぞ、僕にはおかまひなく……。

眼鏡。いや、君の方こそ、どうぞ……。然し、僕はまだ血の通つてゐる人間です。眼の前で、勝手なことをされては迷惑です。踏切も、そんなに遠くはない。どうです、人を呼びませうか。

繃帶。人を呼ぶ……。呼んでどうするんです。(間)邪魔はしつこなしにしようぢやありませんか。

眼鏡。かう見えて、僕は、人一倍、物事を考へる方なんです。輕率だとか、向う見ずだとか云はれることが、一番不愉快なんです。

繃帶。ああ、それだからですね。ぢや、一つ、その理由といふやつを、伺ふことにしませうか。

眼鏡。それはお話してもよござんすがね。それより、君は一體、どういふんです。さう深い事情も、おありにならないやうだが……。

繃帶。さう見えますか。それならそれでかまひませんがね。はゝゝゝ、此の繃帶がわかりませんか。

眼鏡。火傷でもなすつたんですか。

繃帶。さうあつさり云つてのけられたんぢやね……。まあ、よしませう。

眼鏡。火傷には、實によく效く藥があるんですがね。

繃帶。火傷なら、火傷として置きませう。それが癒つたら、どうなるんです。

眼鏡。いいぢやありませんか。

繃帶。顏中にひッつりが出來ても……。二眼とは見られない顏になつても……。

眼鏡。御商賣は。

繃帶。僕は商賣人ぢやないんです。應用化學の研究をしてゐる、つまり、學者なんです。人造ダイヤモンドの發明に沒頭してゐたんです。もう九分九厘まで成功しかけてゐたんです。處が、一寸したことから、藥品が爆發しましてね。

眼鏡。それなら、猶更ぢやありませんか。折角九分九厘まで出來上つてゐる、その研究の方を續けておやりになれば、それが出來ないことはないんでせう。顏がなんです。男振りがなんです。元來、君のやうな仕事をやつてをられる方は、却つて……。

繃帶。まあ、お待ちなさい。僕は、これで、まだ獨り者なんです。

眼鏡。丁度いいぢやありませんか。

繃帶。許嫁があるんです。

眼鏡。その人はどう云ふんです。

繃帶。かまはないと云ふんです。

眼鏡。そんなら、何も云ふことはないぢやありませんか。なあんだ、それぢや、僕、駄

一……。

繃帯。それと云ふのが、その女は、僕を愛してゐるんです。

眼鏡。さうでせうとも。

繃帯。僕は、或る時、思ひきつて、繃帯を取つて、此の顔を見せてやつたんです。

眼鏡。それでもいいつて云ふんでせう。

繃帯。（うなづいて）さうして、僕の胸に顔を押しあてて、泣くんです。悲しくはないつて云ひながら泣くんです。

眼鏡。わかりますね、その気持は。

繃帯。僕にはわからない。

（やや長い沈黙）

眼鏡。わかるぢやありませんか。

繃帯。わかるとすれば、彼女が嘘をついてゐるといふことです。

（やや長い沈黙）

眼鏡。僕は、決心しました。決心したといふよりも、諦めました。さうです、諦めたんです。

眼鏡。さう、諦めたんですなあ。

繃帯。まあ、さう云へば、至極簡單です。（間）僕は、あなたに見えて、センチメンタルなことが、嫌ひな質なんです。

眼鏡。僕も、さう見えて、人一倍、物事を気に

ゐるたちなんです。僕は俳優です、まあ名前を云へば、御承知かも知れませんが、それはいひますまい。僕は俳優なんです、新劇の方では、相当認められてゐる俳優なんです。八歳の時に両親を失くして、伯父にあたる――これも名前を云へば御承知かも知れませんが、まあ、云はずに置きませう――その伯父の家に引取られたのですが、そこに、一人、娘がありましてね。

繃帯。もうその先は、何はなくつてもわかるやうな気がしますが、それぢや、ただの恋愛事件ですね。

眼鏡。ただのとは、どういふんです。おや、君のは何んです、そんな、つまらない義理立てぐらゐで、人が参ると思ふんですか。

繃帯。参る……。それで、結局、どうなつたんです。

眼鏡。その先がわかつてゐるなら、云ふ必要はないでせう。

繃帯。まあ、さう怒り給ふな。

眼鏡。話を始めるか始めないうちに、それで結局どうなつたなんて訊く法がありますか。結局どうなつたもなにもあつたもんぢやない。

繃帯。さうまた、張合ひのないわけですね、話が話なんだから。つまり、その娘さんと添ひ遂げられなくなつた。それで悲観の末、と、かういふところらしいな。

眼鏡。何が、ところらしいんです。違ふも違ふも大違ひだ。はゝは、人のことつていふものはわからんもんだなあ。その娘は、たうとう病気で死んだんです、涙ぐんで可哀さうなことをしました。その病気も、僕が種をつくつたやうなもんなんです。僕が、或る女優と、どうのかうのつていふ噂が立つた。そんなことは絶対にないんです。それを苦にして、つまり、ほんとだと思つて、日夜煩悶したんです。一人で、小さな胸を痛めたんです。その女優が、……座の座頭と、名を云へば御承知でせう、然し、それはいひますまい、その座頭と結婚した、そのことが新聞に出るまで、その女は僕の云ふことを信用しなかつたんです、然し、疑ひが晴れた時は、もう遅かつた。彼女は、病院のベットの上に、痩せ衰へたからだを横たへてゐたんです。涙を拭き、手を握り……僕は馬鹿でした。意気地なしでした。今から考へると、なぜ、その時、すぐに、役者なんか止して、これ御覧と云つてやらなかつたか、それを思ふと、なま

と、線路だとうのかうのと夢中になつて、下らない議論やなんかばかり、聞えようとしてゐた、あの頃の自分が、情けなくもあり、憎らしくもある。僕は、今までなかつた、死んだ女の心持や、自分の心の中に活かさう、さうして、その女の魂を慰はうと決心したんです。

繃帯。そいつは、つまらない考へだな。君が死んだら、どうなるんです。その娘さんのそばに、行けるとでも思つてるんですか。まさか、さういふわけぢやないでせう。なるほど、君の悲しみは、十分察しられる。然し、決して、永久に忘れることの出来ない悲しみぢやない。今は、それや、さうは考へられないでせう。そこがまた、君の美しい處なんだ。時に、君はいくつです。

眼鏡。いくつに見えます。（間）

繃帯。いくつでもいい。君はまだ若い。人生の花は、これからぢやありませんか。

眼鏡。君はいくつです。

繃帯。僕ですか。あてて御覧なさい。と云つたら、君は困るでせう。三十五ですよ。だが、僕の場合、年は問題ぢやない。

（やゝ長い沈黙）

眼鏡。誰か来たやうですよ。見つかると厄介だ。（起き上る）

繃帯。線路巡視ですね。どれ、隠れるかな。

（両人、姿をかくす。
土手の上を、人が通る。安全燈の火影が、ちよつと、線路をかすめる。
汽笛。
汽車の音近づく）

眼鏡。（姿を現し）もう、大丈夫ですよ。

繃帯。（續いて現れ）下りですね。

眼鏡。神戸行の急行です。

繃帯。（顔を曝し）君こそ、思ひ止まるんですね。早まつたことはしないがいい。

（汽車が土手の上を通る。両人、それを見送る）

眼鏡。混んでるやうですね。

繃帯。混んでましたか。夜汽車は陰気だなあ。

（間）

眼鏡。あなたこそ、立派な仕事がおありなんだから、それだけで、生きてゐる甲斐がありさうなもんですがなあ。

繃帯。生存の意義なんかどうでもいい。仕事は仕事、人生は人生です。君なんか、まだこれから、どんな仕事でも出来る。どんな戀でもできる。第一に、藝術家と云へば、仕事そのものが戀人ぢやないんですか。まあ、さう云つたやうなもんぢやないんですか。僕らにや、よくは飲み込めないが、かう、なんと云ふか、一種のヴォルルストとでもいふかな、さういふもんがあるんぢやないんですか。からだのすくむやうな、ぞくぞくするやうな、融け込むやうな、さういふ状態に、何時でもなれるんぢやないんですか。

眼鏡。そんなことなら、あなた方のお仕事でも、やつぱり、戀人に對するやうな心持になれるでせう。食ふことも寝ることも忘れてまで、仕事に夢中になるなんていふこと、世間の話や、家庭のことを全く棄てて顧みないつていふことや、よくそんな話を聞くぢやありませんか。

繃帯。そりや違ひますよ。それはなるほど、學者の一面には、さういふところもあるでせう。一面を見ないとわからない。つまり、人間の問題ですよ。理窟ぢやない。さうでせう、君と同じ境遇にある、もう一人の青年に就いて御覧なさい。その青年は、君と同じ悲しみ、君と同じ惱みを、君のやうな方法で解決する

かどうかわからない。いや、寧ろ、さうしないのが普通でせう。しない方が正しいんだ。

眼鏡。正しいとは限りません。

繃帯。僕は飽くまで反對するな。(間)どうです、警察へ引渡しませうか。

眼鏡。警察へ……。さうして、どうするんです、(間)お互に、邪魔をしつこなしにしようぢやありませんか。僕こそ、あなたの不心得を諭してあげたいくらゐなんだ。

繃帯。諭すはいゝな。君こそ、家へ歸つたらどうです。惡いことは云ひませんよ、年長者の言葉を信用し給へ。

(汽笛、汽車の音)

眼鏡。(起ち上り)もう、何にも云はないで下さい。(土手の上に驅け上らうとする)

繃帯。(その袖をとらへ)よし給へ、君。それや、なんにもならんよ。

眼鏡。(振り放さうと藻掻きながら)放して下さい。僕のからだは僕のものです。勝手にさして下さい。

繃帯。それや、君のもんさ、君のからだは。だから、つまらんことは止せと云ふんだ。僕は、かう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男だ。死なしていいもんなら死なせるさ。(突然、聲を荒らげて)馬鹿! しつかりしろ!

(引摺りおろす)

眼鏡。(此の語勢に氣を拔かれて)それぢや、あなたは、どうなさるんです。

繃帯。(此のひまに相手を突き退け)僕は、かうする。(土手の上に走り上る)

(此の刹那、汽車が通る。繃帯した男の姿が消える)

眼鏡。あッ、やつたな。(間)たうとう、やりやがつた。畜生。

(さう云つてゐると、土手の上から、繃帯をした男が、のつそり降りて來る)

眼鏡。なあんだ、やらなかつたのか。

繃帯。やつたさ、やつたけれど、早すぎたんだ。正確に云へば、勢をつけ過ぎたんだ。線路の向うへ飛び込んだんだ。しくじつた。此の次だ。(息をはずませてゐる)

眼鏡。だから、僕に先へやらせればいいのに。

繃帯。さうはいかんさ。君に先へやらせちや、僕の顏が立たん。君の自殺には、僕は反對なんだ。見て見ないふりは出來ない。僕は、自分のことさへどうでもよけりや、君を家へ送り届けるなり、警察へ引渡すなりする處だ。然し、それができない。君が僕の言ふことを聞かない以上、君のやりたいことは、僕のゐない處でやり給へ。場所も此處と限つたわけぢやないんだらうから。

眼鏡。此處を先へ見つけたのは僕なんだ。

繃帯。あと先の話をしてるんぢやない。僕が生きて居る間、君を殺すわけには行かないから、さう思ひ給へ。

眼鏡。ぢや、僕を生かす爲めに、あなたも生きることを考へたらどうです。それなら、話はわかる。

繃帯。さうか、君は、ほんとに死ぬ氣はないんだな。さうだらう。それでわかつた。それなら、それで、こんな處に、何時までもゐるのはよし給へ。もう、君、遲いぜ。今のが十時の濱松行だ。

眼鏡　死ぬ氣がないのは、あなたのことでせう。鐵道自殺のやり損ひなんていふのは、あんまり流行らないからな。

(この時、また汽笛が響く、と、やがて、列車の近づく音)

繃帯。よし、そんなら、見てろ。(土手を登りかける)

眼鏡　今度は、僕だ。(繃帯した男を引摺りおろす)

綳帶。なにするんだ。

眼鏡。（この間に、素早く土手の上に駈け上る。汽車が通る。姿が消える）

綳帶。たうとう、やりやがつた。ほんとに、やりやがつた。畜生。こいつは、やつぱり、後おや、工合が惡い。

（から呟く、が、不圖、土手の上を見ると、眼鏡をかけた男が、眼をこすりながら、とぼ〱と降りて來る）

綳帶。おや、こいつも擦れ違ひか。

眼鏡。駄目だ、貨物列車だ。

綳帶。貨物…？

眼鏡。ああ、痛え。（眼をこする）煤がはひりやがつた。こいつはいかん。とても痛い。あいたた、た…（間）すみませんが、ちよつと、見て下さい。

綳帶。（見ながら）見るのはいいが、此の明りぢや、君…。どら、もつと、上を向き給へ。さ、瞼に力を入れちや駄目だよ。

眼鏡。（瞼を兩手で引きあげるやうにして）ありましたか、右の方ですよ。

綳帶。見えるもんか、これぢや。

（汽笛、汽車の音）

さ、來た、一人でゆつくり取り給へ。（土手の上にあがらうとする）

眼鏡。痛い、痛い。（綳帶をした男に縋りつき）後生だから、こいつを取つてからにして下さい。

綳帶。だつて、君…（もう一度、眼の中をのぞき込みながら）見えないものをとれたつて、それや無理だらう。

（汽車の音近づく）

痛いついでに、それぢや、一思ひにやつて來たまへ、丁度いいや。

眼鏡。そんな無茶なことを云はないで、どうかして下さい。これぢやどうすることもできやしない。

（汽車が土手の上を通り過ぎる。辨當の空が二人の傍に飛んで來る）

綳帶。（それを拾ひあげて）綺麗に食つてあらあ。

眼鏡。あいたた、あいたた…。さ、早く…。

綳帶。（辨當の空を棄て）どら、厄介な男だなあ、ハンケチかなんか出し給へ。

眼鏡。ポケットにはひつてるやつを出して下さい。

綳帶。（ポケットからハンケチを引き摺り出す）これでいいの。（そのはずみに、寫眞のやうなものが落ちる）おや、何か出たぜ。（あたりを探す。一枚の寫眞を拾ひあげる）寫眞だな。どれ…（明りにすかしながら）なるほど、これか。桃割だね。や、これや素敵だ、どうだい、この笑ひ方は…。

眼鏡。さ、そんなことは後にして…。

綳帶。まあ、待ち給へ、これが第一ぢやないか。しかし、いい眼だなあ。これだけの眼は、君、一寸ないよ。

眼鏡。さうでせうか。（間）その眼が、もう永久に眠つてるんです。

綳帶。この眼がね、惜しいことをしたもんだなあ。此の口元だつて、大したもんだよ。此の年にしちや、珍しく蠱惑的だね。

眼鏡。その口が、堪忍して頂戴と云つたんです。（泣聲になる）それが最後でした。

綳帶。この口がね。

眼鏡。ええ、さう云つたんです。

綳帶。それが、此の手を見たまへ。何んといふ、あどけなさだ。お手玉を握るためにできてゐる手だ。

眼鏡。いいえ、それが、僕の手を握つたんです。（聲をあげて泣く）か、か、堪忍、堪忍、して頂戴、から云ひながら、兩、兩手で、僕の

手を、に、握り締めるんです。もう、もう、力が、力が、な、ないんです。（泣き崩れる）

繃帶。この手でね。（かう云つたかと思ふと、手に持つたハンケチで、自分の眼をおさへ）畜生、涙みたいなものが出て來やがる。（間）

眼鏡。僕は、かう見えて、人一倍、物事を考へるたちなんです。この決心をするには、それだけの理由があるんです。

繃帶。これぢや、なるほど、無理もない。君に取つちや、生きてゐるといふことは無意味だ。そこへ行くと、僕なんかは、なんと云つても、まだ、問題はこれからなんだ。つまり、僕は、自分の立場を悲觀的に解釋してゐる。そこなんです、事の起りは。僕が、許嫁の心持を忖度するにしても、考へやうによつては、もつと、積極的に、有利に、素直に、考へて見ることも出來るわけなんです。自分の存在が、相手の幸福を妨げるといふ考へ、これや、もう、理窟ぢやない。自分がさう思つても、相手はさう思つてゐないかも知れない。現に、・・この手紙です。（ポケットから一通の手紙を取り出し）まあ、讀んで御覽なさい。

眼鏡。（それを受け取る。開いて讀まうとするが、よく見えない）

繃帶。見えませんか。（手紙を見ずに）かう書いてあるんです。「お手紙拜見いたしました。あなたは誤解をしていらつしやるんです。それや、あのときは、ただ何となく涙が出ました。泣くといふことが、それほど單純な氣持からだと思つていただいては困ります。一番心配してゐたあなたの御眼が、元の通り完全に見える、さうなつたことだけでも、泣きたいほどうれしいのです。お顏の疵がなんです。あなたの肉體が、若し、わたくしに取つて大切なものであるなら、それは、ただ、あなたのお心が、そこにあるといふ目印としてなのです。…

「お別れしてゐた五年間、二十の春から二十五の秋まで、わたくしは、あなたの御寫眞を一度も出して見ませんでした。今だから申します。それは、物を言はない影、心に觸れられない姿が、どんなにつまらないものかといふことを知つてゐたからです。あなたは、やつぱり獨逸にいらつしやる。伯林大學の研究室で、せつせと勉強していらつしやる。さう思つてゐるだけが、せめてもの慰めだつたのです、時たま下さる、あの電報のやうなあのお端書、あれが、あなたのお聲、あなたからの愛の言葉だつたのです。あなたと云ふ方は、わたくしには、一つの神祕な存在です。いつでも、何か考へておいでになる、あのお顏は、決して、女に親しみを感じさせる顏ではありません。ですから、わたくしは、あなたが、あなたのお書齋で、何かお仕事をなさる、その時を選んで、あなたの後姿を、いつも見に行くことにしてゐました。兩手で頭をかかへて、本を讀んでおいでになる、その頸筋から肩へ、肩から腰へ、その餘念のない後姿を、そこから感じられる落ちついた息づかひ、お笑ひになつてはいやですわ、ただそれだけが、わたくしのものといふ氣がしたのです、それと、あのお聲、今もちつとも變らないあのお聲、『美いちやん、お茶』つておつしやるあのお聲・・・。あれもわたくしのものよ。」（だんだん聲がるんで來る）ここだけ、「よ」で結んである。

眼鏡。實に感心な方ですね、その方は。然しどんなものですかね、そいつをそのまま受け取るのは、なるほど、蟲がよすぎますね。聞いてゐても胸がつまる。それだけ、その手紙の一句一句には苦しい努力が隱されてゐる。あ

なたとしては、やつぱり、その方を自由にしてあげる義務がありますね。それでよく事情がわかりました。あなたは、生きてゐちやいけない。

繃帶。（その邊を歩きまはりながら）どうして、世の中の女は、もつと冷酷に出來てゐないんでせう。君の、此の娘さんにしても、僕の、此の許嫁にしても、あんまり温かすぎる。僕たちを苦しめるのは、その温かい心なのです。少くとも、その思ひ出なのです。

眼鏡。さうとばかりも云へません。隨分冷たい心をもつた女もゐます。

繃帶。さういふ女は男を惱まさない。男がなやまされない。一度或る女の、温い心に觸れたら、その女が、どんなに冷酷な態度を示さうと、男の心は、その女から離れきることが出來ない、それはつまり、女といふものが、優しすぎるんです。生れつき温い心の持主なんです。僕はつくづくさう思ひました。さうして、その女のうちでも、僕の許嫁は特別な女なんです。まあ、此の手紙をしまひまで讀んで御覧なさい。

眼鏡。ええ、もうわかつてます。

繃帶。わかつてるでせう。わからなければ嘘だ。何と書いてあります。―あなたが御自分の姿を、それほど醜いと思召すなら、わたくしも、自分が醜くなるやうに努めます。世間に對してならば、どんなことでもします。炭を顔に塗つて外へも出ます。しかし、わたくしは、女です。少しでも美しく、さう思つて大事にする見目かたちは、ただあなたへのささやかな心盡しなのです。わたくしが美しくないといふことは、あなたに才能がないといふことほど、恐ろしいことなのです。二人にとつて恐ろしいことなのです。それ以外のことは、ただ心と心との問題です。わたくしの、空つぽな頭を、あなたは輕蔑もしずにゐて下さる。あなたのお顔や、お姿を、それが、わたくしに敵意を示したものでさへなければ、何んで、美しいとか醜いとか申しませう　どうです。ここに至つて、僕はもう返す言葉がない。僕は、これでも不幸でせうか。僕は何を苦しんでゐるのだ。僕は、なぜ死ななければならないんだ。

眼鏡。そこが、男の意地ですよ。與へるといふものを、受け取つてはならないことがある。あなたは、世間の男のやうに、エゴイストではない。エゴイストでありたくない。さういふ信念をもつてをられればこそ、かういふ決心ができたんです。しかし、實に偉大ですよ、そのへんは。

繃帶。だが、君のやうに、純な氣持ちやない。そこが、僕自身も不滿なんです。「堪忍して頂戴……」桃割の少女が、死に臨んで、若い戀人の胸もとに囁いたこの一句は、男一人の命には代へられない。僕が――それは何時のことだか知らないが――今夜まで生きのびてゐたこと、そのことが既に不思議なくらゐだ。幻を追ふものは山を見ず、谷を見ず……まして汽車くらゐなんだ。

眼鏡。そんなことはありませんよ。僕なんかこそ、云はば自由なんですからね。その幻なら幻を、絶えずかうして頭の中に描いてゐること、それがもう、一つの意義のある生き方なんですからね。僕達二人の間には、例の一件を除いては、何も暗い思ひ出といふものはない。最後までの一月はその中でも樂しい、そして靜かな、初戀の思ひ出に應はしい朝夕でした。ミルクをかけた苺を、あの、小さな心臓のやうな苺を、僕が、一つ一つ、匙であの脣にはさませてやりました。さうすると、例の、あの眼を細くして、「サンキュー」といふ

んです。「サンキュー」ああ、サンキュー、サンキュー、こればかりは、幾度聞いても聞き飽きません。あの苺一つで、口が一杯になるらしいんです。「サンキュー」が、時とすると「チャンピュー」と聞えたり、「シャンチュー」と聞えたりするんです。それから、また、それを云ふ口つきです。ああ、たまらない、たまらない。僕は、それが面白さに、どれだけ苺を食べさせたでせう。

繃帯。（獨言のやうに）無茶だね……。

（長い沈默）

眼鏡。さう、云はば僕は自由なんです。ただ自分の氣持だけなんですからね。それが、あなたの場合だと、苟くも一人の女を、これから幸福にするか、不幸にするかの問題なんだから、まるで、決心のつけ方が違ひますよ。さう云ふ風なら、事は早い方がいいですね。

繃帯。やらうと思や、いつでもやれるさ。

（やや長い沈默）

眼鏡。然し、やつぱり、話は聞いて見ないとわからんもんですね。

繃帯。處で、眼の方は、もういいのかい。

眼鏡。さつき、泣いたもんですから、どつかへ行つちまひました。

（間）

繃帯。今夜は、偶然、君といふ人に會つて、いろいろ話をしたが、兎に角、死ぬといふことは理窟ぢやいかんのだし、これから次の汽車を待つにしても、また後先の爭ひが起るにきまつてゐるんだから、どうです、その邊で一杯やつて、何れそのうち、別々にやることにしようぢやないか。

眼鏡。別々にね。（間）なんなら、今夜は、あんたがおやりになつて、僕が見屆け役になつてもいいな。

繃帯。見屆け役か、そいつはいいな。どうだい、君が先にやつちや。

（間。兩人笑ふ）

眼鏡。しかし、笑ひごとぢやない。

（長い沈默。兩人、また笑ふ）

繃帯。こんなことをするのにや、見物はない方がいいだらう、いくら御商賣が御商賣でも……。

眼鏡。つまらんことになるもんだなあ。

繃帯。かうなると命なんていふものは、誰のもんだかわからなくなるね。

眼鏡。人のものでないことは確かだ。

繃帯。たしかですか、それが。（間）

眼鏡。まあ、もう少し考へさせて下さい。（間）一體、僕は、何しに此處に來たんだらう。

繃帯。さあ、自分の命が人の命よりも大事だといふことを知りに來たんだね。

眼鏡。僕はどうしても自分の命が、そんなに大事なものだとは思へない。

繃帯。君にとつて、それよりもつともつと大事でない命が、もう一つ此處にあるわけなんだ。

眼鏡。さうか知ら。しかし、僕は、あれほど決心してゐたんです。

（汽笛。つづいて汽車の音が聞える）

繃帯。おや、その決心を斷行し給へ。さ、僕がゐて邪魔なら、僕は歸るよ。それとも、元氣をつけてあげようか。

（汽車の音、次第に近づく）

眼鏡。（しをしをと起ち上り）その寫眞を下さい。（寫眞を受け取つて、つくづく眺めたから）さうだ、こんな意氣地のないことぢや駄目だ。（急に繃帯をした男の手を取り）さあ、あなたも一緒に來て下さい。一緒に死にませう。

繃帯。（引張られながら、とう云はずに、まあ君からやり給へ。僕は急ぐ必要はないんだ。い

ろいろ計畫もあるしするから……。

眼鏡。（無理矢理に相手を引摺り上げようとして）なんです、今になつて、卑怯な。

繃帯。卑怯なのは君のことだ。（相手の手を振りはらつて、後ろへ飛び退り、腰に手をかけて土手の下に押し上げながら）愚図々々してないで、さつさと行き給へ。

眼鏡。（押し上げられようとするからだを手と足で突つ張り）それや無茶だ。そんな法はない。

繃帯。（かまはずに、どんどん押し上げる）

眼鏡。そ、そ、そんな馬鹿な……そこは痛いんだ、痛い、痛い、痛いつたら……。

（汽車の音、いよいよ近づく）

繃帯。（手を放し）さ、今だ。

眼鏡。（転がるやうに駈け降り）あんまり亂暴ですよ、あなたは。

繃帯。（じつと枕木に耳を押し）失敬、失敬。

（汽車が、土手の上を通過する）

眼鏡。（黙つて、うつむいたまま、これも枕木の上に腰をかける）

（長い沈黙）

繃帯。もういいだらう、君。（起ちあがり、促すやうにして）さ、そろそろ引上げよう。

眼鏡。（機械的に起ち上り、ふらふらと歩き出す）

繃帯。（その後を追ふやうに、眼鏡をかけた男に寄り添ひ）僕はかう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男だ。（しんみり）しかし、なんですよ、今、君を死なせるくらゐなら、僕が先へ死にますよ。ほんとですよ。

——幕——

年譜

明治二十三年十一月二日、東京四谷に生る。

同三十一年、四谷尋常高等小學校に入る。

同三十三年、名古屋に轉住。椎棠小學校に入る。

同三十五年、名古屋市立第二高等小學校に轉ず。

同三十七年、日露戰役の起ると共に、父は野戰砲兵第三聯隊大隊長として從軍す。

同年九月、名古屋陸軍地方幼年學校に入る。

同四十年九月 東京陸軍中央幼年學校に進み、佛蘭西文學に興味をもちはじむ。

同四十三年六月卒業、士官候補生として久留米歩兵聯隊に入隊。十二月、陸軍士官學校に入校、シャトオブリヤン、ジャン・ジャック・ルソオを耽讀す。また、ツルゲエニエフの佛譯を讀み、露西亞文學の一端を知る。これより、露西亞小說の翻譯を漁り、同時に、佛蘭西近代作家の著作に親しみはじむ。

同四十五年、士官學校を卒へ、見習士官として再び久留米聯隊に歸る。

大正元年十二月、少尉に任官。

同三年七月、動員下令、補充隊附を命ぜられ、十一月、凱旋と同時に、病と稱し軍職を去る。

やがて東京に歸り、八方、自活の道を求む。

偶々、當時、母校幼年學校教官たる緣故を以て、内藤濯氏の門を叩き、佛文學研究の方針につき教を乞ふ。氏の紹介により、大宰施門氏の自宅教授を受く。

同六年、帝國大學佛文科選科に入學す。

同七年、白水社發行「佛和辭典」の編纂を手傳ひ、海外旅行の計畫を樹つ。

同八年八月、日本を離れ、臺灣、香港、印度支那を經て、翌九年一月巴里に着す。

日本大使館囑託、墺伊國境劃定委員通譯、國際聯盟事務局囑託などの職を得、傍ら、演劇研究に沒頭す。主として、ジャック・コポオ經營のヴィユウ・コロンビエ座、並にピトエフ夫妻の一座に出入、演出法を見學す。

同十一年夏、試みに戲曲「古い玩具」を書き、ピトエフに示す。

十一月、父の訃報に接す。

十二月、突然、肺患の徵候を發見す。

同十二年七月、老母及年少の弟妹を見棄て難く、志半ばにして歸國す。

八月、豐島與志雄氏の紹介にて、山本有三氏を訪ひ、「古い玩具」の一讀を乞ふ。

同十三年三月、「古い玩具」を「演劇新潮」に、九月、「チルルの秋」を同誌に發表す。

同十四年一月、「命を弄ぶ男ふたり」を「新小說」に、四月、『ぶらんこ』を「演劇新潮」に、五月、「紙風船」を「文藝春秋」に發表。六月、房州館山に旅行中、肺患再發、八月、危篤に陷る。

同十五年四月、「葉櫻」を「女性」に、六月、映畫脚本『ゼイマイの戲れ』を「改造」に、九月、『戀愛恐怖病』を同誌に、十月、「驟雨」を「文藝春秋」に、十一月、「村で一番の栗の木」を「女性」に發表す。

昭和二年一月、「温室の前」を「中央公論」に。

十一月、結婚す。

昭和三年一月、「明日は天氣」を「改造」に、四月、『落葉日記』を「中央公論」に。

十月、雜誌「悲劇喜劇」を創刊す。

昭和四年一月、「長閑なる反目」を「改造」に、『牛山ホテル』を「中央公論」に發表す。

芋と指環

マルクスの審判

蠅

無礼な街

ナポレオンと田虫

園

街へ出るトンネル

青い大尉

眼に見えた虱

日輪

横光利一

後には鬼がゐるに
笑ってゐるのぢや
龍之介

上海九華堂寶記製箋

芋と指環

一

川の上から微風が吹くと、萬の家の屋根の上では雜草が一齊に頭を振つた。すると、軒に下つた洗濯物は乾き出した。萬の妻女はまだ歩かれない娘のみいいを背負つてゐた。彼女は洗濯物に觸つてみると、ついでに柴を一束かかへて圍爐裏の傍へ持ち込んだ。米を磨がねばならぬ、が、ふと米のないのに氣がついた。彼女は米箱を傾かせてとんとんと叩きながら、角へ辷り溜つた米粒を手で計つた。

「二合はあるな。隅は割りに餘計なもんぢや。三合かな――三合とすると。」

彼女は明日の朝は米に水を澤山割り入れて間に合せようと考へついたとき、「ありやッ」と云つて、背中の娘の足さきへ手をあてた。

「こいつ、また漏らくさつた！」

彼女は娘を降ろすと、背中の下がべつとり濡れてゐて、それだけ色濃い端片を繼ぎたしたやうに見えてゐた。

「さアさア、厄介な小女郎ぢやなう。」

彼女はぴんぴん跳ねる娘の小さな足をひつ摑まへて、手早く布切れをひき拔いた。そこへ、良人の萬が黄色な小蜂の巣を一つ持つて歸つて來た。

「どこへ行つとつたのぢやな？」

「田螺とりぢや。」

「田螺なら、音がとつて來るぢやないの、それより檀那の所へ行つて、錢を貰うて來ておくれつてば。今日はどうしてでも取つて來にや。」

萬は默つてまた出て行きかけた。

「良いかいな。今日はどうしてでもとつて來にや。あいつ、いつまで待たすつもりぢやろ。」

「蜂の巣は食へるかなう？」

「それからな。音がそのあたり居つたら、直ぐ歸れつて云うとくれ。遊んでばつかりゐくさつて。」

「こいつ食へんかなう。」

「そんなもの食へるものか。」

「食へるつて云うとつたぞ。」

「早う行かいな、明日の米がないぞな。」

萬は蜂の巣を捨て難さうに眺めながら出て行つた。

妻は燈明だけは切らせてならないと考へた。立ち上つて圍爐裏の上の神棚の油壺を覗いてみた。

もし今日こそ、堺を手傳つた良人の工賃が貰へないとしたならば？――彼女は表の方へ走り出た。實をつけた茶の木畑の上で、良人の賴りない歪んだ肩が搖れてゐた。

「良いかいなア。きつと貰うて來にやいかんぞなア。警察へ願ふ云うても、無理にとつて來にや、一寸でもくれつて、もう米がちよつぴりもないぞな、良いかな、醬油も油もないし。」

萬はリウマチスにかかつてゐるその不具な片腕を採みながら、丘の方へ歩いていつた。

萬の妻は臺所へ戻つて來ると、醬油の甁を振つてみた。それから再び米箱を自分の膝へ倒してみた。

「三合はあるな。三合あつたら、芋を入れたら五合になるわ。五合とすると、何アに。」

娘は急に泣き出した。萬の妻は娘の傍へよつて行つた。そして彼女の頭を撫でながら、

「ああさうか、みいを抛つておいたか、みいをなア、ああよしよし。まアどうぢや。この子、頭ばつかり大きうなつて。」と呟いた。

二

萬の膝には草の實がたかつてゐた。彼は鰻のゐさうな河原の石垣を見つつ土手の上へ出た。すると、他家の芋畑の中に蹲んでゐる息子の音の後姿が眼についた。

「音う。」

息子は蔓のついた芋を投げ出した。と、萬とは反對の刈田の方へ馳け出した。

「音う。」

息子は二度呼ばれると、走り停つて萬の方をくるりと向いた。

「お父うか。」

「歸んで來い。」

音はもとの所へ戻つて來ると、投げ捨てた芋を拾つて父親の傍へ寄つて來た。

「お父う、芋や。」

「よこせ。」

「赤芋や、うまいぞな。」

萬は息子から土のついた芋を一本受けとつた。それを二つに折つて一口咬んだ。

「赤芋や、お父う、うまかろが？」

「歸ねよ。」

萬は芋の皮を吐き出しながらまた丘の方へ歩いて行つた。音は土手の蓬の中へ坐り込んだ。彼は腹這ひになり、仰向きに寝そべつて生芋をかじり出した。風が吹くと頭を低める蓬の上から、音の露出した白い腹が空に向つて息をしてゐた、時々柿の木から柿の木へ渡る群雀が、彼の白い腹の上を波を打たせて渡つていつた。

三

丘へ登る坂路には、蜜柑の林が續いてゐた。坂の上には、白木の塀を繞らせた新しい家が立つてゐた。

今、その家の主人は、豪壮な風格で一人の恭客を送り出すと、玄關の沓脱石を見下した。さうして、またも、有り合せ物の石塊が思つたごとく果して役に立つたと思つてゐると、瞬間、蜜柑の林と林の切れ目から、萬の黒い小さな顔がちらりと見えた。彼は影でも踏むやうに一飛び横へ飛び下つて、それから奥の間へ馳け込んだ。

「おい、おい。」「おい、おい。」

[illegible]で三味線と遊山[illegible]を、[illegible]び[illegible]れた手で、此ノ家の妻女は、箒を[illegible]さうに引き摺つて現れた。

「阿呆萬がやつて來やがつたで、俺がをらんと云うておけ。」

「また？」

「良いからさう云へ。」

「私もういやだわ。いつだつて私ぢやないの。」

「ぐづぐづ云ふな。」

「だつて、可哀想だわ、これで八度目よ。」

「不足なら、貴樣、指環を萬にやれ。俺はどうでも良いのぢやからな。」

「けちんぼ！」

「何にツ。」

「けちんぼだわ。」

「おい、もう來るぢやないか。」

「知らん。」

妻女は良人の代りに箒を蹴倒すやうにして、ひとり茶の間へ戻つて來た。

主人は、萬の工賃の催促に來ることが七度目かそれとも八度目かと考へ合せながら、丸桐の火鉢の[illegible]に灰を被せた。

丁度そのとき、萬と擦れ違つて下つて來た恭客は、坂路の中程で、今朝見た暦のことを思ひ出した。

一八白、先勝、結納吉か、ははア、俺には縁談

は離れたいわい。待てよ。あの後妻め、俺に今日は三度も奇妙な眼つきをしよつたぞ。」

ふとそのとき、碁客は、自分の兩手が空虚のまま、持つて歸る可き物を忘れてぶらりと膝から下つてゐるのに氣がついた。

「おつと、待つた。」と、彼は頭へ手を乗せて再び店の上へ引き返した。

四

萬は店の家の玄關から犬のやうに覗いてゐた。

「檀那、檀那はおいでますかいな。」

茶の間で俯ち伏せてゐた美しい後妻は、萬を見るなり悲しさうな顔をした。

「まアまア、今日も良人は不在ですのよ。どうしませう。」

しかし、何ぜか彼女は、その悲しみの中から微笑を花のやうに生々と開かせた。

「どうぞ、まア、お上り下さいな。あのね、いつも萬さんにお待たせして、すまないすまないつて申してをりますの。さア、そこではいけませんわ。」

「はア。」

「お氣の毒ですわねえ。」と、彼女はいかにも悲しげな顔をして、「この、それ、選擧でね、選擧があるでせう？」

「はア。」

「それでね、もうもう、そりや忙しがつてをりますの。」

「檀那はお出かけですかな？」

妻女は、今迄の心の張りが急に抜けると、「まア、何んて馬鹿なんだらう。」と云ふやうに、

「ええ、昨晩からなの、朝から出かけてゐますのよ。夜だつて、そりや遅いの。もうねえ、私、困つてしまひますわ。」

突然萬は頭を下げた。妻女はいぶかしさうに萬の顔を眺めてゐた。

「どこへいらつしやるの？」

「はい、また參じましよ。」

「もうお歸りになるの？」

「はい。」

「さうですか。それはそれは。」と、妻女は急に萬に生々となり出した。さうして、萬が二度目のお辭儀をして帰らうとしたときに、

「あの、ちよつと萬さん。」と云つて彼女は萬を呼び止めた。

彼女は茶の間へ菓子を包みに立つていつた。

その後へ、あの碁客は、強ひて周章てた風を裝ひながら戻つて來た。彼に萬のゐるのは眼にかけず、宛も主人が前にゐるかのやうに、

「どうも早や、稀に勝たせて貰ふとこれでして。」と呟きながら、頭を掻き掻き奥の間の方へ突進した。

奥の間では、主人はその足音を聞くと、火箸を持つたまま突き立つた。さうして、その豪壯な首筋を周章てて押入の中へ突き入れようとしたときに、

「どうも早や、稀に勝たせて貰ふとこれでして。」

げらげら後で笑ふ聲に主人は振り返ると、碁客は、床の碁笥を拾ひ上げて耳の横で振つてゐた。

主人はひと言何か言葉を云はねばならなかつた。しかし、彼には玄關にゐる萬の耳が恐かつた。そこで、彼は碁客の失態に應へるために、顔を殺して笑顔を押入の前で作つてゐた。

茶の間では、白紙包みを作つてゐた後妻は、碁客の話聲が奥の間から突然に上つたのを聞きつけると、良人の難澁が眼に見えた。で、碁客の去つた氣配を窺ふと、直ぐさま彼女はわざわざ奥の間の方を廻つていつて、碁客の話聲の對照が自分であると云ふことを、萬に知らせる

手段として、良人の聲を殺した笑顔をそのまま引き次いで、玄關の方へ出て行つた。

「まア隨分お待たせしましたわね。これはほんの少しなのよ。坊つちやんに上げて下さいな。遠い所をすみませんでしたのね、私、良人が歸つたら、さう申しておきますわ。ほんたうに幾度もね。」

「はい、ありがたうございましてな、はい。」

萬の姿が見えなくなると、後妻は、巧みに萬を追ひ返し、良人の危難を救ひ得た誇りと悦びで快活に主人の前へ戻つて來た。しかし、主人は、妻の不注意から不意の闖入者に驚かされた鬱憤に苦かつた。彼は妻を見るなり聲を上げた。

「馬鹿ッ、貴樣は、誰の番をしてたんだ！」

妻は賞讃の代りに受けた此の叱責の聲を聞くと腹を立てた。彼女は暫く良人の怒つた顏を見てゐたが、急に唾でも吐くやうに、

「勝手になさい。」と云つて横を向いた。

主人の顏は赤くなつた。

「もう一度云つて見ろ。」

「知らない。」

「何にッ。」

主人は倒れてゐた箒を取ると、妻の背中をひつ叩いた。振り返つた妻の顏は青くなつた。

「叩けッ、叩けッ。」

妻は肩を聳立てて良人の胸元へ詰めよつた。良人はその肩口を突飛ばした。妻の身體は踊子のやうに美しく襖の足を脫して轉つた。主人は、「これは過ぎた。」と思つたらしく、急に箒を投げ出すと、火鉢の傍へ悠々と片膝ついて煙管に煙草をつめた。しかし、一方妻の怒りは激しくなつた。彼女は髷をぐたぐたと搖がせながら起き上ると、手元にあつた碁石の箱を、良人の肩へ投げつけた。良人は無數の石を頭から浴びながら、口元に微笑を浮べてゆるゆると煙を吐いた。と、再び妻の投げつけた碁箱の石が、煙の中を降つて來た。良人は妻の方を一寸睥むと、

「こいつ。」と云つて立ち上つた。

妻も急いで一寸恐さうに立ち上つたが、なほ青ざめて良人の顏を睥んでゐた。その顏が良人にはいつの妻の顏よりも美しかつた。

「さア來い。」

良人は角力を取りでもするやうに身構へると、妻の首と腰とに手をかけて、彼女を横に輕々と抱き上げた。

「知らない、知らない。」

びんびんと足を跳ねながら、妻は癇高く叫んで良人の頤を押しのけた。良人は妻を火鉢の傍まで抱いて來て、座蒲團の上へ人形のやうに坐らせた。

「怒るな、馬鹿め、貴樣が萬を歸しさへすりや、誰があんなに狼狽てるものか。」

「あなたぢやないの、あなたが惡いんぢやないの。」

「何が惡い！」

「惡いわよ。」

「お前が玄關に出てゐたら、誰が默つて上つて來る。」

「私だつて用があるわ。七度も八度も通はせておいて、誰が手ぶらで歸せるものか！」

「何をやつたんだ？」

「知らない！　私、あなたのやうなけちんぼぢやないわ。」

「まだ云ふな！」と、良人は云ふと妻を打つ眞似をして手を上げた。

「けちんぼ。」

「ようし。」

と、良人は云つて妻の手を捻ぢ上げながら、彼女の身體を膝の上へ引きよせた。妻は良人の手首に齒を立てた。

「痛ッ、痛ッ。」と良人は聲を立てると、噛まれ

た手首を振り振り妻の歯の痕を眺めてみた。
　これは過ぎた、と云ふかのやうに妻は良人の痛さうな顔を見ると初めて笑顔になつた。
「いい氣味だわ。」
「何が氣味だ。」
「けちつくからよ。」
「こいつ、人を馬鹿にするな。いつ俺はけちついた！　萬にやるだけ貴樣の指環を買つたんぢやないか！」
「あんなもの、入らないわ。」
「やつて了へ！」
「やるわよう。」
　妻は叩かれた背中のあとを壓へながら茶の間の方へ立つていつた。

五

　丁度、丘の家の奥の間で、主人と妻女の爭ひが漸く主人の敗北となりかけたときであつた。蜜柑林の下では、棊客は坂路の中途で、足駄の嚙んだ石塊を拔きとるために蹲んでゐた。彼は木の根に足駄をかんかんと叩きつけながら、
「此の月の八日は、大したものぢや。何もかも、ぼろ儲ぢや。ぼろ儲ぢや。」と、唄のやうに云つてゐた。

　そのとき坂を下つて來た萬は棊客に追ひつくと、立ち停つて彼の足駄を眺めてゐた。棊客は一寸萬の方を振り向くと、また足駄を叩きつけながら、
「萬さん、取れぬがどうぢや、取れぬがどうぢや。」と云ひ出した。
「檀那はどこへお出かけなしたかな！」と萬は訊ねた。
「わしか、あつこぢや。こいつ、なかなか。」
「山の檀那や？」
「あ、山のか。ゐたゐた。こいつめ、食ひついたら放さぬと云ふ奴ぢや。あはははははは。」
　延び上つて背中を叩きながら哄笑してゐる棊客の横で、萬は白紙包みをほり落した。包みの中からは、圓い黄色な蒸し菓子が飛び出ると、砂をつけてころころと坂路をころげていつた。
「こりやどうぢや。」と、棊客は云ふと、足駄を持つたままぼんやりと萬の顔を眺めてゐた。と、棊客は突然笑ひ出した。
　萬はひとりまた坂路を下つていつた。

六

　みいを背負つて鍋の下を焚きつけてゐる萬の妻女は、薄明りの中で、襤褸切れのやうに見えてゐた。瀬の上を渡つて來た夜寒は、茶の木畑の方から家の中へ流れて來た。音は母親の傍に坐つて、圍爐裏の灰の中へ芋を埋めた。
「お母ア、音はここへ芋を埋けたぞな。見いつて、お母ア。ここの芋、音のぢやぞ。」
　母親は默つて立ち上ると、神棚の燈明に火を點けた。それから彼女はその夜の祈りを毎夜のやうにし始めた。先づ最初は娘のみいの痙攣と良人のリウマチスの一日も早く癒るやう、醫者にかかることの出來るやう。自分の乳がなほ澤山に出るやうに、さうして、良人の仕事が早く手について彼の意氣地なしの直るやう、音が良人に似ぬやうに。と、これだけは彼女の毎夜の祈りの言葉と同じであつた。が、次に、今日こそ、丘の家から良人がうまく工賃を貰つて歸るやうと願ひ終つて、最後を彼女は何心なくから結んだ。
「南無三寶あらたかな荒神樣、どうぞ私のお願ひをおとり上げなさりますやうに、お願ひいたしますでございます。どうぞ、南無三寶あらたかな荒神樣、もしこのお願ひをおとり上げ下さいますなら、私の命を十年お早めなさつてもかまひません。どうぞ、南無三寶あらたかな荒神さま。私のお願ひをお取り上げくださ

いますやうに。」

しかし、此の願ひは願ひ終つた彼女を責めた。もし、十年いのちが縮つたとしたならば、明日にも彼女のいのちが亡くなるかも分らなかつた。もし明日彼女のいのちがなくなつたとしたならば、彼女の願ひのかなつた日の悦びは彼女のために何んにならう。彼女は煮立つた割り粥の中へ、鹽をぱらぱらと振り撒きながら、

「南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ五年にして下さいますやう。どうぞ五年にお直し下さりますやう。」と、口の中で呟いた。

しかし、彼女は裏の井戸端で釣瓶の竹竿を繰り上げる頃には、なほますます恐怖に狩り立てられた。もし五年いのちが縮つたとしたならば、何はさておき音の出世も見られないやうに思はれた。

「あらたかな荒神様、どうぞ音が嫁を貰ふまでお延ばし下さいますやうに。どうぞあらたかな荒神様、せめて音が學校を出るまででも宜しゆございます。どうぞ私のいのちをお延ばしなされて下さりませ。」

しかし、ふとまた彼女は、自分の慾の深さに氣がついた。慾が深ければ、「御利益」の代りに、「御罰」を貰ふ。これが彼女を再び責め始めると、最早や彼女は自分の仕事が手につかなくなつて來た。彼女はまた神棚の前へ戻つて最初から祈り直した。

「南無三寶あらたかな荒神様、どうぞみいの痙攣の一日も早う癒りますやうに、萬のリウマチを一日も早うお癒し下さいますやうに、お醫者さまにかかることが出來ますやうにお願ひいたすでございます。南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ私の乳を仰山にお出し下さいますやうに、萬の仕事が一日も早う出來ますやうにお願ひいたします。南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ萬の意氣地なしをお直し下さいますやうに、音が萬に似ぬやうにどうぞお願ひいたします。南無三寶荒神様、萬が今日はきつと工賃を貰うて歸つて來ますやうにお手傳ひなされて下さりませ。南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ私のお願ひをおとり上げ下さりますやうにお願ひいたします。もしこのお願ひをおとり上げくださりますなら、私のいのちを十年お早めなさつて下さりませ。南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ私の慾の深さをお赦しなされて下さりませ。」

彼女は必死に祈り終つて頭を下げた。が、頭を上げると、神前の燈明の光りが自分の壽命を十年縮めてゐる魔のやうに思はれた。しかし、十年縮めた自分の壽命で、良人と息子と娘の幸福が、やがて來るにちがひないと思ふと急にまた彼女は晴やかになつて來た。さうして、此の大膽な祈りを二度までも繰り返して敢てしたといふ自分の熱心さに對してさへも、どうして神は無慈悲のままでゐられようと思へば思ふほど、三人の上に降り下る幸福は、手にとるやうに判然と感じられた。と同時に、自分の縮つてゐる十年の命も、自分の知らぬ間にまた十年延ばされてゐるやうな氣持がして、彼女はなほも生々と安心した。

七

闇はだんだんと濃くなつた。萬が歸ると、家の中では暗い水壺の傍で、手杓の水を飲み込む音の咽喉だけがごくごくと鳴つてゐた。萬は默つて痛む右腕を揉みながら圍爐裏の傍へ寝た。

「お父う、そこな芋、音のぢやぞ。」

音は手杓を投げ出して爐の傍へ駈け寄ると、灰の中から周章て二つ芋を掘り出した。さうして、それを兩手の中で轉ばしながらふツふツと吹いた。吹き吹き表の方へ駈け出していつたとき、彼は戸口に置かれた道具箱の端に躓いた。

と、丸木のやうにぶつ倒れた。一際泣いた。が、直ぐぱたりと泣きやむと、掌から飛び出た芋の所在を搜さうとして庭の上を這ひ廻つた。

　そのとき、萬の妻女は裏口から手桶を提げて入つて來た。彼女は萬を見ると、丁度大きな希望の實つてゐるのを見るかのやうに微笑した。

「歸つたのか？ いくらくれた、皆くれたか？」

　萬は黙つて鍋の手蔓を眺めてゐた。

「どうぢやつた？ くれたぢやらう？」

　萬はしかし答へなかつた。妻の顔は曇つて來た。

「ちよつとぐらゐは呉れたぢやろ？」

「踏しよつた。」

「踏しよつた？ ちよつともくれぬのか？」

　萬は矢張りいつまでも鍋の手蔓を眺めてゐた。妻は黙つて萬の顔を見續けてゐたが、急に前掛を握り上げると、

「のたれ死にぢや！」と一口言つた。

　庭を這ひ廻つてゐた音は、床の下から、

「お母ア、音の芋がどこへやら行きよつたア。」

と、大聲に呼び始めた。

「どうして食ふつもりぢやろ、私やもう知らん。」と彼女は云つた。

「お母ア、音の芋、どこへやら行きよつたア。」

「のたれ死にぢや！ 明日から乞食ぢや！」

「芋がないわア。」

　床の下では息子が大聲で泣き出した。

「わしが男やつたら、あんな家、火つけて焚いてやるわ。甲斐性なしッ、極道者ッ、どうして食ふつもりぢや！ あ奴も、あ奴ぢや！ 嚊に食はれて、他人の金も拂ひくさらぬ我鬼ぢや！」

「お母ア。」

「くそやかましッ！」

「芋がどこへやら行きよつたア。」

「あアいもう、どうにでもなるわさ、知らぬことぢや、知らぬことぢや！」

　妻は前掛の端で一寸眼を拭くと、がたがたと手桶を鳴らせて輪のきれたお櫃の中へ水を汲み分けた。

　音が泣きやんで庭から立ち上つたとき、家の中は、周圍から流れ込む霧のためにぼんやりと曇つてゐた。音は芋のことを思ひ切ると、爐の傍へ戻つて鍋の蓋をとつてみた。白い湯氣が煮粥の上から勇しくもうもうと立ち昇つた。

「お母ア、煮えたぞな。お母ア。お母アたら。」

　返事もせぬ母親の後姿は、湯氣の向うでぴりぴりと震れて見えた。音は鍋の蓋をすると父親の傍へ寢轉んだ。彼は父親の眞似をして響く片腕を揉みながら竹の天井を眺めてゐた。

「南無三寶荒神樣、南無三寶荒神樣、お父う、今日なア、天井から鼠の子が落ちよつた。ちゆうッちゆうッて鳴きよつたぞな。あいつお父う、眼がありやせんのぢやなア？」

　誰も音には答へなかつた。

「手へ灸すゑてやらうか、え、お父う？」

「そんなもの、お父うぢやないわ。」と、母親は食器の音をさせながら強く云つた。

　音は母親の方へくるりと向いた。

「何ぜぢやな、お母ア？」

「お父うにきけ。」

　音は萬の方へくるりと向いた。

「お父う、なぜぢやな？」

　矢張り父親は黙つてゐた。音は父親の脊筋に沿うて拳をぐりぐりと擦りつけながら、

「お父う、どうぢや擽いか？ 音ら何んでもないわ。お父う、音のを擽つてみい、音ら擽いないわ。」

　いつまでも父親が黙つてゐるので、音は仰向きになると天井の竹板を數へ出した。

「お父う、お父う。鼠を役場へ持つて行くと錢が貰へるのぢやなう？」

　誰も音には答へなかつた。

「うちの天井には、鼠が澤山ゐよるで良えなう。お父う、鼠の卵どんなんぢや？」
「あつちへ行け。」と父親は云つた。
「お母ア、鼠の卵どんなんぢや？」
「翌朝から乞食に歩くのぢやぞ。」と、母親は云つた。
「何ぜぢやな？」
「うるさい！」
「宮さん所にをる乞食はお母ア、澤山錢もつてゐよつたわ。銀貨も持つてよつた。」
「お前、明日から貰ひに歩け。」
「どうぞ一文やつておくれ、どうぞ一文やつておくれ。さう云ふのぢやらうがな？　お母アいつぺん云うてみい。」
「お父うに云うて貰へ。」
「お母ア、音、乞食きらひぢや。乞食になつたらお母ア、源ら云ひあてよるわ。」
「お父うが阿呆ぢやで。もう飯が食へんぞ。」
「音を阿呆萬の子ぢやつて云ひよつたわ。阿呆萬つて、お母ア、お父うのことか？」
「阿呆萬どころか、そんなもの、苦倒れ萬ぢやわ。」
音は父親の方へ向き返ると、
「くたばれ萬、こりや、萬、萬。」と云ひながら父親の背中を叩いた。それから足を萬の胴へひつかけて馬乗りにまたがると、笑ひながらその脇の下を擽り出した。
萬は急に音を肱で抛り落して起き上つた。彼は暫くあたりを見廻してゐたが、そのまま暗い表の方へ出て行つた。

八

煮粥は鍋の中で冷え始めた。霧はますます濃くなつて來た。しかし、萬はいつまでも歸つて來なかつた。萬の妻は附近の家々へ良人を搜しに音をやつたがそれも歸つて來なかつた。娘のみいは母親の背中の上で、激しく反り返つて泣き出した。彼女はそれが娘の痙攣の前徴であるのを知つてゐた。で、娘を降すと反らさないやうに抱き締めながら靜に乳房をふくませた。
「ほんとに困つた人や。醬油も油もないし。なうみい。お前のお父うは困つた人ぢやぞ、困つた人ぢやぞ、困つた困つた困つた、アアさうかいなア。」と、彼女はみいの頰に額を擦りつけた。
暫くすると、娘のみいは母親の乳房を銜へたまま眠りに落ちた。家の中が靜まると、萬の妻は立ち上つて表の方を眺めてみた。外一面に立ち籠めた濃霧はひたひたと彼女の乳房に迫つて來た。
「音う。」
河の中では霧の底で農夫が馬を洗つてゐた。
「音う。」
遠くの路を提灯の火が一つぶらぶらと搖れて來た。暫くすると、音の聲だけが霧の中から聞えて來た。
「お母ア、お父うはどこにもをらんぞな。」
「もういつぺん搜して來い。」
「お母ア、お父うはどこにもをらんぞな。」
そのうちに音の聲は勝手に唄に變り出した。
「お父うがをらんと飯が食へんぞ。」
「お母ア、源とこの犬、耳をかまれよつたわ。」
音は戸口から家の中へ入つて來た、するとまた道具箱の端に躓いた。すると、ふと忘れてゐた芋のことを思ひ出した。彼はまた暗い庭の上を蟇のやうに這ひながら廻り始めた。
「お母ア、音の芋、ひろたやろか？」
そのとき萬は戸口から歸つて來た。彼は霧に額を濡らしながら顎を歪めて入つて來た。妻は良人の顔を強く睨んだ。
「宵がけから、どこへ行つとつたのぢやな？」
「火つけてやつた！」
「火つけた？」

頭は闇へ出した。頭は闇の傍にでてゐる。寝棺
ボト、女の頬に口の両側を縫ひ止した。女の顔は
たんたんと青くなつた。と、急に、
「阿呆ッ阿呆ッ阿呆ッ。」と一口叫んだ。
彼女は直ぐ表の方へ駆け出したが、丘の上
は真暗だつた。
「誰や！」と彼女は呟くと一寸立つた。
「お月ア、昔の事、拾うたやろか？」
彼女は畑の中をまた小走りに駆けていつた。
そして、茶の木畑を突き抜け、稲田の畔から河岸へ駆けて、丘の上へ登つて行くと、新建の家の裏からは釣瓶の滑車の音が、平和にからからと響いて来た。
「誰や誰や。」
彼女は荒い呼吸を肩でしながら落ちついて微笑した。彼女は直に門の前を通つて軒へ廻つた。すると、綿らしい夜具の片端が、黒く大きな舌で舐められたやうに焦げてゐた。
「あら。」と云ふと、彼女の身體はまた前のやうに慄へて来た。
焦げた夜具の下には、半ば灰になつた枯草が蒲に詰つて沈んでゐた。彼女は直ぐ片足の草履を脱いだ。さうして、蹲み込むと夜具に身をよせて、草履で黒い焦げ痕を擦り始めた。

九

しかし、彼女は擦りながらも擦る自分の草履の音におびやかされた。もし今の姿を見られたなら、焚き手は自分であると思はれるのは定つてゐた。またもし自分が見られなかつたとしても完全にその焦げ痕を消し去ることが出来ないから、いづれ放火の主は良人であると思はれるのも定つてゐた。それかと云つてその焦げ痕をもとの白木のままに直すには、自分の草履の力ではどうすることも出来なかつた。それなら、今は逃ければよい。もし今の中に逃げたなら、たとひ焚き手が良人であると知られたとて、最後まで知らぬ知らぬと云ひはればよい。もしそれでも罪が良人にかかるものなら、そこで初めて良人の受ける工賃の割増だけ焚いてやつたと云へばすむ。なほもしそれでもいけないとしたならば、それなら何故良人の工賃を払はぬかと迫ればよい。――彼女は夜具を擦つてゐるその草履を足に履いた。さうして、足もとの枯草をかき集めて灌木林の中へ入つて行くと、ばらばらそれを振り撒きながら霧にまぎれて丘を下つた。しかし、彼女は幾らか落ちつき始めると、また帰つた家の米箱が浮んで来た。「醤油もないし、油もないし。――」とは云へ彼女は二度と丘の家へ足を運ぶことは出来なかつた。が、もしまたこのままばたりと行かなくなつたとしてみれば、塀の焚き手はなほ彼女の家の仕業だと睨まれるのは定つてゐた。が、さてそれから焚き手が彼女の家だと分つてゐて、なほ焚き手が彼女の家ではないと云ふことを知らせるために、わざわざ図々しく出かけて行つたとしたならば？
―南無三宝あらたかな荒神様、どうぞ私をお助けなすつて下さりませ。どうぞ萬のしたことが分りませぬやうに。どうぞ萬をお救ひなさりませ。悪いのは私で萬ではござりません。檀那とふの嫁どのが悪いのでござります。どうぞあらたかな荒神様、可哀想な私と萬とをお助けなされて下さりませ。瞞されたのはあの意気地なしの萬の方でござります。」

十

萬の眞間、家へ帰ると、良人はまだ爐の傍に寝轉んだまま片腕を採つてゐた。萬は大概横で、仰向きに寝ながら固くなつて自分の足の指を噛んでゐた。
彼女はもう良人に怒る元気も出なかつた。べたりと上り框に腰を下ろして黙つてゐた。彼女

は暫くは何ごとも考へはしなかつた。が、涙が不思議に流れ出した。

「ああ米がない。」ふと米箱のことをまた思ふと、彼女は米を借りるべき家を捜してみた。しかし、それらの家のどの家も最早や幾度も幾度も彼女の家の米箱を滿たしてゐた。

「芋を食はう。芋があるわ。何ァに明日から芋を食はう。」

しかし、またその芋は、と考へたとき、彼女の頭に浮んだ最初のものは、土手の下の芋畑であつた。それに外の闇には一面の夜霧が張り詰めてゐた。もし他家の芋畑へ忍び込むなら今であつた。

「音う。」

子は銜へてゐた足の指を放すと、爆けたやうに起き上つた。

「何や？」

「お母アについて來い。」

彼女はひとり先になつて戸口の方へ出て行つた。しかし、彼女の足は慄へてゐた。

「お母ア、どこへ行くんぢやな？」

音は下へ降りると馳け出した。母親は默つて周圍を見廻しながら、河原の方へ歩いていつた。

「お母ア、どこへ行くんぢやな？」

「やかまし。」

音は露に濡れた路傍の草を蹴りつけながら、默つて母親の後からついていつた。時々高い笑ひ聲が霧の底から聞えて來た。その度に、母親は立ち停ると霧を透かしてぼやけた人家の燈火の方を眺めてみた。

二人が土手の上まで來たとき、母親は音をそこに立停らせて小聲で云つた。

「お前、人が來るか見とれよ。」

「お母ア、芋とるのか？」

「やかましッ。」

「音もとるう。」

「やかましッたら。」

母親の姿は芋畑の霧の中へ蹲みながら消えていつた。音はひとりになると、土手の草の中に立つたまま周圍の夜闇の中を眺めてゐた。野の木立や刈田の杭は霧の中にぼんやりとその頭だけを浮べてゐた。河からは、岩を渡る水の音が聞えて來た。音は母親の方を眺めてみた。彼には母親が他家の芋畑へ恐さうに忍び込むのを見たのは初めてのことであつた。それが、何か彼には母親が昔に云つた乞食に彼女がなることと係りがありさうに思はれた。すると、音の頭には、村の子供等が乞食に石を投げつけてゐる所が浮んで來た。

「お母ア。」

芋畑の霧の中では、急に何かを抛り落す物音がした。と、母親は音の方へばたばたと馳けて來た。そして、周章て慄へながら彼の手を持つと、また土手の上を家の方へ馳け出さうとした。しかし、音は動かなかつた。

「お母ア。」

「どこへ來た？」

「乞食きらひや。」

「阿呆ッ。」と云ふと、母親は土の附いた手で續けさまに音の頭をばちばち毆打つた。

音は頭をかかへて草の中で搖めいた。と、彼は聲を張り上げて泣き出した。母親は打つ手をやめて周圍の霧の中を眺め廻した。それから芋畑の方を眺めてみた。が、彼女は再びその芋畑の中へ忍び込むには、もう此の夜あまり幾度となく脅かされた。彼女の動悸は激しかつた。

「泣くな、阿呆ッ。」

彼女はまた一つ音の頭をぱちりと叩いた。音は草の中へ坐り込むと、泣きながら兩足でばたばたと草を打つた。彼女は荒々しく音の手を持つて引き上げた。そして、片手で子を曳きながら村の燈火の方へ歸つていつた。

マルクスの審判

市街を貫いて來た一條の道路が遊廓街へ入らうとする直ぐの所を鐵道が横切つてゐる。其處は危險なので、被告はその踏切の番人である。彼は先夜遲く、道路を横木で遮斷したとき一人の醉漢と言ひ争つた。醉漢は番人の引き止めてゐるその手を振り切つて無理にぐんぐんと前へ出た。丁度そのとき下りの貨物列車が踏切を通過した。醉漢は跳ね飛ばされて轢死した。

そこで、豫審判事は、番人とはかやうな轢死を未然に防ぐがための番人である以上、泥醉者の轢死は故殺であるかそれとも偶然の死であるかを探るがためばかりにさへも、そのときの爭ひの作用した番人の心理の上に十分の疑ひを持たねばならなかつた。それに彼はその疑ひをなほ一層確實に疑ひ得られる樣々の材料を發見した。第一に番人は貧しい獨身者であつた。第二に轢死者は資産家の蕩兒であつた。第三に番人のゐる踏切が遊廓街の入口であつた。しかし、此の被告の上に明確な判決を下すことは、事件そのものが心理的なものであるだけに容易なことではなかつた。先づその事件の現狀を目撃したものがなかつたと云ふことでさへ、判事にとつて此の審問方法は普通の手ではとても無駄だと分つてゐた。

「お前は四十一だと云つたね。妻を貰つたならどうだ。生活に困るのかな。」

「いえ、別に困りはいたしません。」

「と云ふと、望ましいのがないからか。」

「來てくれる者がないんです。」

「ふむ、では、呉れ手のあるまで搜せばよいではないか。」

「私はこれでもう三度妻を變へたのです。」

「三度な?」と云つて判事は一寸笑つた。「それはまたどうしたのだね。」

「皆死んで了つたんです。」

「ふむ、死んだのか、それでその來るものがないと云ふのか。」

「いえ、三人とも同じ病氣で死んだからだと思ひます。」

「三人とも同じ病氣か、成る程ね、そして、それはどう云ふ病氣かね。」

さう聞いたとき、判事は被告の潜んだ眼窩の底から恐怖を感じさせる一種不思議な微笑を見てとつた。これは烈しい神經衰弱にかかつてゐるなと思ひながらも、彼は被告の答へた[illegible]と云ふ婦人病の四番目の文字が「月」であつたかそれとも「シ」であつたかと一寸考へてみてから直ぐ又質問を次へ移した。

「それで何か、その夜お前は酒を少しも飮んでゐなかつたか。」

「飮みませんでした。」

「いつもは飮むんだらうね。」

「さう飮むと云ふほどは飮めません。」

「お前はあの踏切の最初からの番人だつたのだね。」

「はい。」

「失策が一度もなかつたさうだが、それはほんたうか。」

「妻のゐる頃は妻が時々やりました。私にはありませんでした。」

「何年踏切につとめてゐる?」

「十九年です。」

「十九年か、ふむ。」これはなかなか氣の小さい

男だと判事は思つた。

「十九年と云ふと、お前の幾つの時からかね、二十？」

「二十五の時からです。初めはちよいちよい失策をやりました。でも私で失策つたと思ひましても他人には解らずにすみました。」

何ぜ彼者がさう云ふことを自分から云ひ出すのか、よく判事には分らなかつた。「私の失策と云ふと、つまりどう云ふんだね。」

「列車の來る時が來ればシグナルを見なくても少々遠くにゐても分りますが、考へごとをしてゐると直ぐ傍へ來なければ分りません。さう云ふときこれは失敗つたと思ひ、まーて周章てて鎖を引きますが、いつも半分程通つてからです。」

「つまり考へごとをするといけないと云ふのか。」

「はい、考へごとをするといけません。」

「考へごとと云ふと、どんな種類の考へごとかな、どう云つたやうな？」

「家内のことを考へます。」

「家内がないと云つたぢやないか、ア、さうか、つまり三人の妻のことなのか、それでどの家内に一番心をひかれたね。」

「一番目の家内です。」

「優しかつたのか。」

「いえ。」

「お前が愛してゐたのだね。」

「さう云ふわけぢやございませんが、何ぜだか最初のがよく心に浮んで參ります。」

「最初のがね、ふむ、その頃は樂しかつたと見えるな。樂しかつたかね。」

「今から思ふとさう思ひます。」

「此の頃はもう樂しみなことはないか。」

「ありません。」

「何もないか。」

「はい。」

「では、勤めもいやなことだらうね。」

「はい。」

「いやか、勤めは？」

「はい、あまり好きではございません。」

「ふむ、それでお前は何か、お前の踏切でお前の勤務時間以外のときに轢死人があつても、お前に責任がないと云ふことを知つてゐるだらうね。」

「はい、それはよく存じてをります。」

「三日の夜の轢死人は泥醉してゐたと云ふが事實であらうな。」

「はい。」

「ではそのときの様子を成る可く精細に話してみよ。譃を云つてはならぬぞ。」

「はい、さうでございますれ、あのう十二時二十分の貨物列車の下つて來るまでは少々間がありましたので、それで、私は夕暮に植ゑた孟宗竹を見に行つたのです。」

「あゝ一寸待て、獨り暮しになつてからどれほどになるな。」

「四年になります。」

「四年か、ふむ、植木は好きかな。」

「はい、いたつて好きでございます。」

「よしよし、それからどうした。」

「それから何かしたいと思ひましたが、することがなかつたので鎖を曳いて了ひました。そこへ泥醉人が坂を下つて來て通せと云ふのです。」

「そのとき貨物の音はしてゐたか。」

「はい、もうしてをりました。」

「通してやればよかつたではないか。」

「はい、私はいつも一度鎖を引けば通る程の時間がございましても通さないことにしてをります。そのときも矢張り通しませんでした。するとあの男は、それぢや俺が通つてやると云つ

て私の引つ張つてゐる鎖の中間の所へ腕をあてて出ようとしたんです。私は必死の力で引いてゐたのですが、そのうちに私もそれについて二足三足曳かれてゆきました。そのとき、来たな、と思ひました。あなたさまは貨物列車の音を御存知でせうか。貨物の音は普通の客車とは違つて奇妙な音なんです。あの車の音は少し遠くにゐるときも傍まで来たときも同じほどの激しさなんです。それに、あの夜は真暗な所へもつて来て貨物列車が又真黒な物ですから、そこまで来てゐたのだかはつきりしなかつたんです。貨物はそれで一番恐ろしうございます。私はそのとき鎖を、から必死に引つ張つたんです。あの男はもう鉄道線路の近くまで出てをりました。もつとも私が傍まで行つて突き飛ばすか引き戻すかしてやれば、あの男も助かつてゐたと思ひますが、何分そのときはもう度胸がぬけてをりましたし、それに、あの貨物の音を前途で聞きますし、それですつかり変な気になつて了ふのです。何と云ひませうかね、もうただ圧へつけられて了ふのですよ。風に吸ひ込まれるやうな、何だか息がぐつとつまつて、眼まひがするのです。それでも私はよほどぐつと鎖をひつぱつたつもりなんですが、その中に、風がザッと来たと思つたら、私の鎖を持つてゐる手がいくく軽かつたのを覚えてをります。さうしたら、何でもあの男は私の眼の前を勢ひよくはつと横に飛んで行きました。」

判事は被告の話し方があまり整ひすぎてゐると思つた。

「ちよつと待て、そのとき、誰か見てゐたものがあつたかね。」と彼は訊かうとしたが、それではこちらの気持を知らしめる恐れがあつたので、

「誰か傍に人でもゐたかね。」と訊いてみた。

「いいえ、をりませんでした。」

と被告は直ぐに答へた。この場合その直ぐ明瞭に答へ得られたと云ふことは、被告が犯罪の際人目のないと云ふことを意識してゐたと思はれて、また判事の疑ひを尚強めた。

「ふむ、ゐなかつたか。しかし、見てゐたと云ふ者があるのだが、その者の云ふこととお前の云ふこととは少し相違してゐるやうであるぞ。偽りはないかね。」と判事は嘘を云つた。

「それは分らなかつたのでせう。何しろ暗かつたのでよく分らなかつたんでせう。どちらの眼にをりました？」と被告は少しうろたへた様子で訊き返した。彼のうろたへたと云ふことは彼の陳述に不純な気持と作り事とが交つてゐたと云ふことを一層濃く、判事に教へたにすぎなかつた。

「お前はその酔漢が鎖を引き摺つて出ようとしたとき、何で手で引きとめなかつたか。」

「鎖で間に合ふと思つてゐました。」

「お前はその男をとめるのに何とか言葉をかけたのかね。」

「いいえ、酒を飲んでゐるなと思ひましたので、相手になりませんでした。」

「ふむ、なる程。しかし、酒を飲んでゐると気附いたなら、なほ鎖でとめると云ふことがいけないぢやないか。」

「いいえ、それはちがひますよ。鎖の方がまださうございます。普通の方はどなたもさうお思ひになりませうが、この道の者なら誰だつて鎖でとめると思ひます。それに、手でとめましては相手が相手ですから、なほ喧嘩になつてしまひますよ。」

「それはさうだね。喧嘩になりさうだ。で、何かね、その男が誰だつたかお前は最初から知つてゐたんかね。」

「それは見覚えはございませんでした。」

「その男は最初に何とかお前に云はなかつたか。鎖でお前がとめたときに何とか。」

「さうですね、云ひました。何だか云つてたやうです。何をしやがる、ふざけるない、つてそんなことを云ひましたよ。」
「それだけかな。」
「いゝえ、まだ何とか云ひました。私は默つてゐたのですよ。」
「何を云つた、その男は。」
「俺をとめるつてことがあるかい、俺はね、俺は通つてやるぞ、つてそんなことも云ひましたね。」
「ふむ、さうして、それだけか、まだ何とか云はなかつたか。」
「もう覺えてはをりません。何だかまるつきり他のことを饒舌つてゐたやうですが、何のことだかよく私には分りませんでした。」
「お前は日頃通行人を餘り早くから止めると云ふ評判だが、それはどう云ふつもりかな。」
「早くとめる方が安全で良からうと思ふのです。」
「事實それだけかな。」
「はい、それだけです。」
「止めることを面白いと思つたやうなことは一度もなかつたか。」
「さうでございますね、さう云はれますとそんな氣のすることも時々はございました。」
「何ぜ面白いと思ひ出したかね。」
「それは解りません。」
「いつ頃からそんな面白味を知り始めたのか分らないか。」
「最初からのやうです。
「矢張り面白いといつも思つてゐたのであらう。」
「そんなことはございませんよ。」
「お前は近年道路を遮斷するとき、通行人とよく爭ふと云ふことだがそんな覺えはあるかな。」
「はい。」
「爭ふかね。」
はい少し早い加減にとめる時よくそんなことがございます。」
「それで近年になつてひどくなつて來たと云ふことだが、事實であらうな。」
「さうでございます。少しひどくなつたやうにも思はれます。」
「面白味を知り始めたと云ふのも、獨身者になつてからではないかな。」
「いえ、そりや、さうではございません。」
「ふむ、しかし、路を止めると云ふことは、そんなに面白いものかな。」
「何ぜだか、この踏は俺の領分だと云つたやうな、そんな氣がするんです。」
「成る程ね、お前の職業はただ氣ばかり使ふだけで實の上らぬ仕事だから、面白くはなからうの。」
「はい。」
「疲れはせぬかな。」
「疲れます。」
「さうだらう。十九年もよく勤まつたな。病氣にはかかつたことがあるかな。」
「時々はかかりました。」
「ふむ、遊廓には行くかな。」
「行きません。」
「行きたくはないのか。」
「行つてみたいこともございます。」
「では行けばよいではないか。」
「行つたつてつまらないんです。」
「どうしてだ。」
「つまりませんよ、馬鹿らしうて。」
「金がないのか。」
「金にございます。」と被告は云ふと、暫くして、「困りますよ。」と低く俯向いて云つた。
「ふむふむ、おや何か、そのお前の噂が廓に

まで捕つてゐるとか云ふね。」
神谷は困つてゐた。
「いつ頃から行かなくなつたのだね。」
「もう一年以上行きません。」
「さうか、そして、その最後のときはどうだつた。つまりどんな目に合つたかと云ふのだ。何かつまらないと思ふやうなことでもあつたのかね。」
「彼所へ行くといやな感じをします。」
「ふむふむ、いやな氣をね、何とか云ふのか。」
「はい。」
「何と云つたのだ。」
「幽靈が來ると申します。」
「ふむ、それはどう云ふ意味のことだかお前知つてゐるのかね。もつともお前に關したことだらうか、成る程、ははア幽靈か。」
「案内のことだらうと思ひます。」
「ふむ、成る程、それは困つたことだ。遠くの墓へ墓に行かにはよいではないか。それとも何か行かなくともいいやうな所があるのかね」
「いゝえ、ございません。」
「ないのか、なくては困るであらう。夜はよく眠れるかな。」
「眠れません。」

「さうであらう。夢を見るかな。」
「はい、夢はよく見ます。」
「どう云ふ種類の夢を一番よく見るか。」
「首の拔ける夢をよく見ます。それから、熱怖かへたべた落ちる夢も時々みます。」
「ははア、醉漢の通つた前夜はどんな夢を見たかな。」
「それはよく覺えてをりません。」
「ふむ、覺えてはゐないか。お前はその醉漢を見たとき、どう思つたか、粹客だとは思つたらうね。」
「はい、いづれ遊興に行くとは思ひました。」
「その男は金持だつたかね。」
「はい。」
「お前はいつも粹客を見たとき、どんな氣持が起るかね。」
「慣れてゐますから、別にどうと云ふ氣も起りません。」
「お前の勤務時間は夜の十二時だつたね。」
「はい。」
「それにしては、お前の勤め時間以外のときまで見張りをすると云ふのはどうしたことかな。」
「それは癖になつてゐるのです。眠れないときだけは、いつも番をすることにしてをりまその方が私には都合が良うございます。」
「都合と云ふと。」
「その方がつまりまア樂な氣がするのです。」
「人々のためを思つてではないのだね。」
「はい。」
「あの通りは坂になつてゐるし、それにお前の踏切は人通りが多いから、遲くまで見張りをしてやる方がいいではないか。」
「そんなことなど思つてはゐられませんよ。直ぐには寢つかれませんから見張りでもしてゐないと苦しくつて困ります。」
「通行人や近所の者達は、お前があまり早くから鎖をひいたり夜遲くまで見張りをしたりすることについて、どのやうな評判をするか考へたことがあるかね。」
「はい、それはいづれよく云はれてゐないとは思つてゐます。」
「では人々から惡く思はれないやうに心掛けるよりも、自分の面白いことをしてゐたいと云ふのかね。」
「まア、さう云はれるとそのやうなものですが、もう私は他人の云ふやうなことなぞに氣をかけないでゐるつもりです。そんなことを氣にして

ゐた日にや、馬鹿らしくてとてもあんな仕事なんかしてゐられませんよ。」
　被告は一寸言葉を切ると、
「もう私はどうされたつてようございますよ。」と云つて判事を見上げ出した。
　先手に來たな、と判事は思つた。最早やここまで來れば少し被告の頭を飜弄してかからなければ駄目だと知つた。それに被告の先手を打つたその顏が、眞面目であればある程それがいかにも圖々しく思はれた。が、又一方その圖太さが二人の間の心理關係を複雜に押し進めては行くものの、却つて自分の疑つてゐる事件の中心に割り込み易い隙間を作るにちがひないとも思はれた。
「お前には世間の者らが自分の味方のやうに見えるかね。」
「そんなことは私は考へたことがございません。」
「お前が踏切を遮斷するとき、人々が敵のやうに思へたことはなかつたかな。」
「はい、ございませんでした。」
「いや、お前に限らず踏切の番人には、心理學的に云つて、即ち學問上から考察した場合必ず起らなければならない氣持なんだが、それでもなかつたとお前は云ふか。」
「それは何んでございます。幾らかございました。」
「お前はその夜、醉漢を引きとめるとき、誰もあたりに見てゐないと云ふことを知つてゐたらうね。」
「いえ、そんなことは存じませんでした。」
「前に知つてゐたと答へたではないか。」
「いえ、そんなことは申しませんよ。そんなことは申し上げません。」
「では、何ぜ知らないとさうきつぱり云ひたいのかな。」
　被告は微笑を洩らすと下脣を嚙んで俯向いた。
「お前はその夜の行爲について萬事正當だと思つてゐるかね。」
「はい。」
「では、知らないと云つても、知つてゐたと云つても、お前には少しも差し閊へのない筈ではないか。」
「はい、さやうでございます。」
「お前はその夜、醉漢を引きとめる際、あの男を敵のやうには思はなかつたか。」
「いえ、そりやそんな氣が起りませんでした。」
「お前は前に社會主義に關する何かの書物でも見たことがあつたかね。」
「いえ。」
「誰からかさう云ふ書物に書いてあることを訊いた覺えはないか。」
「はい。ございません。」
「お前は傭員が時間短縮を鐵道局へ迫つたとき、それに連名してゐたと云ふではないか。」
「はい。」
「では、何ぜあのやうな社會主義的な訴へに連名してゐたのかな。」
「それは仕方がなかつたのです。私にはあんなことをするのが社會主義のやることだかどうかは知りませんでした。ただ入れと云はれましたので入つただけでございます。」
「お前はいつも金持をどんな風に思つてゐるな。」
「別にどうとも思ひません。」
「金持にはなりたくないのか。」
「そりやならしてやらうと仰言ればなりたうございます。」
「お前に連名をすすめたものは誰かな。誰かあつたであらう。」
「誰もございません。紙が廻つて來たので見ま

すと、それには私の名がちやんと書いてあつたのです。それには名前の上へ賛成のものは印を捺すやうと書いてございましたので、ただ印を捺しましただけでございます。」

「誰がこの紙を持つて来たのか。」

「それは私の名の前に書いてあつた服部勘次と云ふ男です。」

「その男の職業は何かな。」

「同じ踏切番でございます。ただあの男は乙種の方です。」

「乙種と云ふと。」

「夜の間だけ番をするのです。」

「お前は甲種と云ふのかな。」

「はい。」

判事はこのかなりに長い時間から、自分の質問の中心點である被告の、性的な嫉妬から薄情を轢殺したのか、それとも階級的な反感から轢殺したものかと云ふ疑ひを、相手に知らしめて了つたただけで、ただ得たものは自身のその疑ひを僅かに强めることの出来たにすぎないと思ふと、彼の氣持は一刻も早く被告に自白を迫りたくなつて来た。それには、先づ何より被告の頭に激動を與へてかからなければ無駄だと知つた。

「お前が早くから獨居を希望すると云ふのは、晝間のものが敵のやうに見えたからであらうがな。」

「いいえ、それはさうではございません。」

「あの道が自分のものだと思ひ出したのも、お前が獨身者になつてからのことであらう。」

「いいえ、さうではございませんよ。それはもう、私が勤め出したときからでございます。」

「僞りを云つてはならぬ。」

「はい。それはもう最初からさう思つてをりました。」

「お前は夜遅く廓へ通ふ者達を見ると、敵のやうに思ふであらう。」

「御冗談を仰言つては困りますよ。私は決してそんな考へは起しません。」

「何ぜ困るのか。」

「そんなことを仰言つては困りますよ。」

「お前に都合が悪いのか。」

「都合が悪いと云ふわけではございませんが、そんな考へなぞ起したことはございません。」

「お前は都合のよいときばかり、はいはいと云つてゐたのか。」

被告は何か云ひたさうに口を動かしたが默つてゐた。ただ小鼻がひこりひこりと動いてゐた。すると、彼の顔は眼の縁を殘して少し青味を帯んで来た。

「お前はあの醉漢を金持と見たとき、敵のやうに思つたのであらう。」

「はい。」

「事件の當夜、お前は汽車の来たのを見はからつてその醉漢を突き飛ばしたのであらう。」

被告は窓の外を見たまま傲然として、

「はい。」と云つた。

「さうであらう。」

被告は默つてゐた。

「どうだ。」

「もうどうなりと勝手にして下さい。」

判事は被告の怒つた顔を見てゐると、事實事件の當夜の被告の行爲が自分の疑ひと一致してゐるとすれば、まさか今の場合さうむきに怒ることが出来なからうと思はれて、今迄感じてゐた自分の疑ひもいくらか解けた。しかし、被告の怒りもこちらの横車を押した無理のために怒つたものと思へないではなかつた。してみれば、被告の怒りも、別に心に覺えのないことをあるやうに云はれたときの根深い怒りとも思はれなくなつて来て、結局判事にはまた以前の疑ひが疑ひとして[illegible]て来た。しかし、

なほこれ以上審問を續けて行くとすれば、被告の反感を解いてかからなければならなかつた。判事は顔に微笑を湛へながら靜に優しく問ひ續けた。

「お前はあの轢死人に妻のあるのを知つてゐるだらうね。」

被告はまだ窓の外を見たまま答へなかつた。

「子供もたしかあつた筈だつたが、それを知つてゐるのかね。」

被告は矢張り默つてゐた。

「少しもお前は知らないのかな。どうなのだ。」

「知つてゐます。」と被告は敵意を含んだ聲で強く云つた。

「さうか、知つてゐるのか。お前がもしそのとき醉漢を引きとめずに、素直に通してやつたら、あの男を死なさずに濟んだであらうとは思はないかな。」

被告は默つてゐた。

「もしお前がいつも通行人に對して、優しい心を持つてゐたなら、そのときたつた一つ故意に鐵の權利で引きとめないで通しておいたと思ふであらう。轢死人も惡い。だが、お前にしても全然いいことをしたものではなからう。たとひお前がどれほど正直であるにしろ、お前はあの踏切で、さう云ふ轢死人のないためにと置かれた番人ではないか。それにお前があの男の傍にゐなかつたらともかく、さうではなくてお前が現にその傍についてゐたのだからね。それぱかりではない、お前がもしそのとき、そこにゐなかつたなら、却つてあの男も助かつてゐただらう。それにお前がゐたばかりにあの男は死んだのだ。あの男の妻はお前のことをどんな風に思つてゐるか考へたことはないかな。」

判事の方を見た被告の眼は急に光つて來た。

「お前は妻のあつたときは樂しかつたであらう。」

「はい。」と被告は小さく云つた。

「お前は妻と子のある立派な一人の男を殺したのだとは思はないか。お前には樂しいことが何もないと云つたが、それは成程よく分る。だが、あの男にはまだ樂しいことがあつたのだ。世の中が面白かつたのだ。さう思ふであらう。」

被告は默つて俯向いた。

「あの男が死んだなら、妻と子供はどんなに困ると思ふ。お前はいい。お前はひとりで淋しく暮さねばならぬと云つてもそれは仕方がない。だが、殘つたあの男の妻と子供は、何もわざわざ淋しく暮さないでもよいものを、一生淋しく暮さねばならないのだ。お前はたとひ自分のしたことが正當だと思つても、死人の妻や子はいつまでもお前を恨んでゐるにちがひない。矢張りお前に殺されたのだと思つてゐるにちがひない。それはお前がいくら正當だと云ひ張つたにしろ、さうは思ふまい。矢張り殺したのはお前であつて他の誰でもないのだからな。」

判事は被告の頭がだんだん垂れ下つて行くのを眺めてゐた。

「ここだッ。」と判事は思つた。彼は勝ち誇つた氣持になつた。「お前はその男を突き飛ばしたのであらう。」と云ひたかつた。が、そのとき、被告は急に頭を上げると怒つたやうな表情をして判事を睨んだ。すると、突然腹痛でも起つたかのやうに急に彼の顏が顰み出すと、涙が頬を傳つて落ち始めた。

「私が殺しました。殺しました。」

何かにひつかかるやうな聲で被告は云つた。

判事は譯の分らぬ悲哀を感じ出した。

「お前はまた踏切番がしたいかな。」と判事はまるきり心にもないことを訊いて了つた。

被告は椅子の上へ腰を下ろすと頭をかかへ込んで了ひ、動かなかつた。

判事はかう手早く喝破して来た被告を思ふと、急に今迄の勝ち誇つた気持が薄らぐのを感じた。それればかりではなかつた。彼は彼自身漸く握り得たと思つた疑ひの確證さへも再び前のやうに取り失つた。何ぜかと云へば、彼は自分の手段が自分ながらいかにも巧妙だつたと賞讃したい程であつたから。實際いかなるものと云へども、譬へばもしも明らかに故意の殺人ではなかつたと知り得ることの出來る判事自身でさへ、被告の立場に置かれたとき、その巧みな判事の言葉のために被告と同じ悲しみの言動に落されない者はあつたであらうか。それを思ふと、判事の疑ひは却つて彼自身の辯舌の巧みさに邪魔されてまた悉く迷蒙の中に入つていつた。しかし、それかと云つて彼はまだ自分の疑ひを捨て去ることは出來なかつた。そこで彼は被告から最も信用すべき自白の言葉をきくためには、今一度被告に投げ與へた悲しみを逆に取り消して掛らなければならなかつた。

「お前は前にあの醉漢を見たと云つたね。」

被告は答へなかつた。

「よく知つてゐたのかな。」

被告は何かを飲み込むやうに「はい。」と云つた。

「あの男はいつも泥醉してゐたのかね。」

「はい。」

「お前は妻のあつたとき、廓へは行つたことがあつたかね。」

「ございません。」と被告は鼻聲で云ふと赤くなつた眼で判事を見た。

「ふむ、お前はあの男の妻が困つてゐたのを知つてゐたのか。あの妻は困つてゐたのだ。毎夜毎夜良人が夜遊びをして家を空けるので困つてゐたと云ふことだ。お前は何かね、あの男と妻とがいつも爭ひをしてゐたのも知らなかつたのかね。」

被告は「はい。」と云つて鼻を拭いたが、直ぐまた頭をかかへて凋れてゐた。

「あの男は妻から離縁を迫られてゐたさうだ。ああ云ふ放蕩者は實際の所を云ふと、死んでも別に差し閊へがないのだが、本官は一應取り検べる必要上お前を悲しませてみただけである。さう悲しまなくともよい。多分お前は列車の近づくのが分らなかつたのであらうな。」

被告は默つてゐた。

「お前は最後までその男の出て行くのを引きとめてゐたのであらうな。」

矢張り被告は答へなかつた。

「そこが大切な所ではないか。どうだ。さうであらう。」

「はい。」

さう被告は低く答へると涙がまた頬を傳つて流れ出した。

自分の言葉のために被告の態度がどんなに變つてゆくかと云ふことを眺めてゐた判事には、被告の樣子がまだいかにも悲しさうに見えた。しかし、彼には被告の悲しみは自分に悲しめられた名殘りの悲しみであるのか、それとも被告自身の祕めた行爲を意識しての悲しみであるのか明瞭に見極めることが出來なかつた。そして、最早や判事は自分の疑ひを確證するいかなる方法をも案出することが出來なくなると、やむなくその日の審問はそれで終らなければならなかつた。

その夜判事は床へ入るとまたその日の審問を思ひ廻らした。――事實、被告は醉漢を突き飛ばしたものであらうか、それとも醉漢の死は被告の云つたやうに偶然の死であつたか――それにしても被告は自身に危險な言葉に對して、何ぜあれほども敏感であり得たか、それにも拘らず何ぜあれほど白々しく先手を打つて出て來た

か。この二つの反した態度を審問に應じて巧みに變化さし得た被告を思ふと判事の疑ひは又深まりかけた。しかし、一方は落されまいとし、一方は落さうと努めなければならない場合が場合であるだけに、それを感じた以上守らうとすることに專念する被告の氣持はいづれ正當なものに違ひなかつた。所詮判事は書の迷ひを迷ひ續ける以外に何の得る所もなくなつた。しかし、それかといつて一度は判決を下さなければならない以上そのまま捨てて置くわけにもいかなかつた。これは判事を苦しめた。が、ここまで來れば、判事として最も正しい判決を下す方法は、逆に自分自身の心理に向つて審問してみることであると氣がついた。一體何故に自分は自分の疑ひを疑ひとして持ち始めたか。何故自分は疑ひを疑ひとして深めてゆくことに努めたか。何故に自分は自分の疑ひの正當である可きことを確信したか。と、さう彼は考へ始めたとき、彼は自分が近年ひどく疑ひ深くなつて來てゐることを發見した。それには永年の判事生活から來る習慣が手傳つてゐることは勿論であるとしても、しかしただそれだけではなく自分の[illegible]に對する深い自信と、それになほ油をかける[illegible]衰弱とが原因してゐた。此の外にまだ大きな原因が一つあつた。それは彼が前に現下の最も人心の歸趨に多く關係を持つ思想と犯罪との接觸點を檢點しようとして、社會主義思想の書物を選んだ時、彼の手に入つたものは「マルクスの思想と評傳」といふ書物であつた。これを見ると、彼は世界の人心が目下の所、資産家階級を撲滅しようとしてゐる無産階級の團流と、それに對抗して無産階級の力を壓殺しようとしてゐる資産家階級の團流とのこの二つの階級が、絶えず爭つてゐるのを知つた。そのときから、十數萬圓の家産を持つてゐる判事の感情は、彼の理智がマルクスの理論の堂々とした正しさを肯定すればするほど、その系統に屬する一切の社會思想に反感と恐怖と敵意とを持つにいたつた。この彼の感情は頻々として起る様々な社會運動の勃發する度毎に、極めて鋭敏に恐怖をもつて激しく搖れた。このため彼の正しくあらねばならなかつた審問と判決との上に、どれほど多くの影響を與へてゐたかといふことを考へたことはまだ彼には曾てなかつた。しかし、今判事の理智はその方へと向つて來た。彼は前に被告が備員の時間[illegible]を鐵道局へ迫つた事件に關係してゐたと云ふことを知つたとき、直ちに自分の社會運動を防衛したがる習慣的な恐怖が、審問の最初から自然被告を敵の立場に置いてかかつてゐたことに氣がついた。勿論役目の立場として被告に疑ひを向けてかからなければならないのは分つてゐるとしても、しかし事實自分の疑ひはただ單にそのためばかりに深められてゐたとは判事にも思へなかつた。それを知ると、被告の貧しい上に勞働が激しければ激しいほど、他人から時間短縮の訴へに誘はれれば教養のない程度に比例して、それだけ被告のその運動に熱情の出ることは別に何の不思議もないやうに思はれ出した。それに被告が無智であればあるほど富貴な蕩兒に反感を持つたに違ひないとの前の自分の推斷は、論理に於て一見正しさうではあるが、その實、それは逆に無智であればあるほど相手の富貴が直接に影響を被告に與へてゐない限り、なほそれだけ相手に反感を持ち得なささうに思へば思ふことが出來て來た。無論被告と醉漢とが爭つた以上は、そこに何かの反感のあつたことは疑ひない事實ではあつた。だがそれとて、自分が被告に向けてゐた敵のやうな反感とはちがつて、被告の反感はただ自由な蕩兒を羨むありふれたものであつたにちがひないと思はれ出すと、今迄自分にしつこくつき纏つて

ゐた被告に對する質問も、故意に嘲弄を突き飛ばしてまで胸中にいたる種類の反感であつたとは、どうしても思はれなくなつて來た。すると、ただ勝手に自分が被告を危險思想を抱いてゐる者として、ただ勝手に被告を敵の立場に置いてかかつた自分の恐怖心が判事には急に馬鹿らしく淋しくなつて來た。それに判事は自分のために悲しみを投げつけられたそのときの被告のいかにも悲しさうな顔つきを思ひ出した。これは判事の氣持を被告の孤獨な氣持の中へ全く職權から放れて入り込ませるのに力があつた。それはいかに考へても淋しいものにちがひなかつた。總ての生活に樂しみを運命的に奪はれてゐる男、その運命をつき拔けて行けない男、それが絶えず最も樂しみの焦點である街の入口で、絶えずそれらの歡樂を眺め續け、そこへ入り込む者達のために危險を教へ續けてゐなければならないと云ふ事は、とにかく想像しても最も苦痛な生活の一つであるのは分つてゐた。然し、判事は自分のただ一片の不純な恐怖のために、無罪で濟まされる可きその憐れな男を今にも重罪に落し込まうとしてゐた自分のことを考へた。彼は自分の罪を感じてひやりとなつた。

―無罪にしよう。無罪だ。」

さう彼はひとり決定すると、決定したと云ふことで俄に却つてマルクスの脅威から解放された。と、彼は急に掌を返すやうに爽快な氣持になつた。

「こりや俺の罪ぢやないぞ。マルクスの罪だ！」

彼は突然に大聲で笑ひ出した。

「マルクスの奴め、マルクスの奴め！　いや、何、かまつたことではない。證據物件として何がある。蕩兒よりも番人だ！」

今は判事も全く晴れ晴れとした氣持であつた。

暫くすると、彼は安らかに眠つてゐた。丁度、マルクスに無罪を宣言された罪人であるかのやうに。

蠅

一

真夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の網にひつかかると、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れてゐた。と、豆のやうにぼたりと落ちた。さうして、馬糞の重みに斜めに突き立つてゐる藁の端から、裸體にされた馬の背中まで這ひ上つた。

二

馬は一條の枯草を奥歯にひつ掛けたまま、猫背の老いた馭者の姿を捜してゐる。

馭者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、将棋を三番さして負け通した。

「何に、文句を云ふな。もう一番ぢや。」

すると、廂を脱れた日の光は、彼の腰から、円い荷物のやうな猫背の上へ乗りかかつて来た。

三

宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が馳けつけた。彼女は此の朝早く、街に勤めてゐる息子から危篤の電報を受けとつた。それから露に濕つた三里の山路を馳け續けた。

「馬車はまだかなう?」

彼女は馭者部屋を覗いて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかなう?」

歪んだ畳の上には湯飲みが一つ轉つてゐて、中から酒色の番茶がひとり静に流れてゐた。農婦はうろうろと場庭を廻ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかなう?」

「先刻出ましたぞ。」

答へたのはその家の主婦である。

「出たかなう。馬車はもう出ましたかなう。いつ出ましたな。もうちと早よ来ると良かつたのぢやが、もう出ぬぢやろか?」

農婦は性急な泣き聲でさう云ふ中に、早や泣き出した。が、涙も拭かず、往還の中央に突き立つてゐてから、街の方へすたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馭者は将棋盤を見詰めたまま農婦に云つた。農婦は歩みを停めると、くるりと向き返つてその淡い眉毛を吊り上げた。

「出るかの。直ぐ出るかの。倅が死にかけてをるのぢやが、間に合はせておくれかの?」

「桂馬と来たな。」

「まアまア嬉しや。街まで何程かかるぢやろ。いつ出しておくれるなう。」

「二番が出るわい。」と馭者はぽんと歩を打つた。

「出ますかな、街までは三時間もかかりますかいな。三時間はたつぷりかかりますやろ。倅が死にかけてゐますのぢやが、間に合はせておくれかなう?」

四

野末の陽炎の中から、種蓮華を叩く音が聞え

若者と娘は宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

「持たう。」

「何アに。」

「重たからうが。」

若者は默つていかにも輕さうな容子を見せた。が、額から流れる汗は鹽辛かつた。

「馬車はもう出たかしら。」と娘は呟いた。

若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、

「一寸暑うなつたな、まだぢやらう。」

「誰ぞもう追ひかけて來てゐるね。」

若者は默つてゐた。

「お母が泣いてるわ。きつと。」

「馬車屋はもう直ぐそこぢや。」

二人は默つて了つた。牛の鳴き聲がした。

「知れたらどうしよう。」と娘は云ふと一寸泣きさうな顏をした。

種蓮を叩く音だけが、閑かに足音のやうに追つて來る。娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物へまた手をかけた。

「私が持たう。もう肩が直つたえ。」

若者はやはり默つてどしどしと歩き續けた。が、突然、

「知れたら又逃げるだけぢや。」と呟いた。

五

宿場の場庭へ、母親に手を曳かれた男の子が指を銜へて入つて來た。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ馳けて來た。さうして二間程離れた場庭の中から馬を見ながら、

「こりやッ、こりやッ。」と叫んで片足で地を打つた。

馬は首を擡げて耳を立てた。男の子は馬の眞似をして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただ矢鱈に馬の前で顏を顰めると、再び「こりやッ、こりやッ。」と叫んで地を打つた。

馬は槽の手蔓に口をひつ掛けながら、又その中へ顏を隱して馬草を食つた。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」

六

「おつと、待てよ。これは悴の下駄を買ふのを忘れたぞ。あ奴は西瓜が好きぢや。西瓜を買ふと、俺もあ奴も好きぢやで兩得ぢや。」

田舍紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戰ひ續けた效あつて、昨夜漸く春蠶の仲買で八百圓を手に入れた。今彼の胸は未來の計畫のために詰つてゐる。けれども、昨夜錢湯へ行つたとき、八百圓の札束を鞄に入れて洗ひ場まで持つて入つて、笑はれた記憶については忘れてゐた。

農婦は場庭の床几から立ち上ると、彼の傍へよつて來た。

「馬車はいつ出るのでございませうな。悴が死にかかつてゐますので、早よ街へ行かんと死に目に逢へまいと思ひましてな。」

「そりやいかん。」

「もう出るのでございませうな、もう出るつてさつき云はしやつたがの。」

「さアて、何しとるやらな。」

若者と娘は場庭の中へ入つて來た。農婦はまた二人の傍へ近寄つた。

「馬車に乘りなさるのかな、馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者は訊き返した。

「出ませんの？」と娘は云つた。

―もう二時間も待つてますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつてゐますかな。街へ着くと正午になりますやろか。

―そりや正午や。と田舎紳士は横から云つた。

農婦はくるりと彼の方をまた向いて、

―正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。

と云ふ中にまた泣き出した。が、直ぐ饅頭屋の店頭へ駈けて行つた。

―まだかなう。馬車はまだなかなか出ぬぢやろか？

猫背の馭者は将棋盤を枕にして仰向きになつたまま、簀の子を洗つてゐる饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまた蒸さらんかいの？」

七

馬車は何時になつたら出るのであらう。宿場に集つた人々の汗は乾いた。併し、馬車は何時になつたら出るのであらう。これは誰も知らない。だが、もし知り得ることの出来るものがあつたとすれば、それは饅頭屋の竈の中で、漸く脹れ始めた饅頭であつた。何故かと云へば、此の宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつけると云ふことが、それほどの潔癖から長い月日の間独身で暮さねばならなかつたと云ふ、彼のその日その日の、最高の慰めとなつてゐたのであつたから。

八

宿場の時計が十時を打つた。饅頭屋の竈は湯気を立てて鳴り出した。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切つた。馬は猫背の横で、水を十分飲み溜めた。

九

馬は馬車の車体に結ばれた。農婦は真先に車体の中へ乗り込むと、街の方を見続けた。

―乗つとくれやア。と猫背は云つた。

五人の乗客は、傾く踏み段に気をつけて農婦の傍へ乗り始めた。

猫背の馭者は、饅頭屋の簀の子の上で、綿のやうに脹らんでゐる饅頭を腹掛の中へ押し込むと、馭者台の上にその背を曲げた。喇叭が鳴つた。鞭が鳴つた。

眼の大きなかの一疋の蠅は馬の腰の余肉の匂ひの中から飛び立つた。さうして、車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、漸く蜘蛛の網からその生命をとり戻した身体を休めて、馬車と一緒に揺れていつた。

馬車は炎天の下を走り通した。さうして並木をぬけ、長く続いた小豆畑の横を通り、亜麻畑と桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、漸く溜つた馬の額の汗に映つて逆さまに揺めいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饒舌が、早くも人々を五年以来の知己にした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握つて、その生々とした眼で野の中を見続けた。

―お母ア、梨々。」

―ああ、梨々。

馭者台では鞭が動き停つた。農婦は田舎紳士の帯の鎖に眼をつけた。

―もう幾時ですかいな。十二時は過ぎました

かいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

御者臺では喇叭が鳴らなくなつた。さうして、腹掛の饅頭を、今や盡く胃の腑の中へ落し込んで了つた馭者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きな蠅が押し默つた數段の梨畑を眺め、眞夏の太陽の光を受けて眞赤に榮えた赤土の斷崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下して、さうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたと軋み出す音を聞いてもまだ續いた。併し、乘客の中で、その馭者の居眠りを知つてゐた者は、僅かにただ蠅一疋であるらしかつた。蠅は車體の屋根の上から、馭者の垂れ下つた半白の頭に飛び移り、それから、濡れた馬の背中に留つて汗を舐めた。

馬車は崖の頂上へさしかかつた。馬は前方に現れた眼匿しの中の路に從つて柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車體の幅とを考へることが出來なかつた。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車體に引かれて突き立つた。瞬間、蠅は飛び上つた。と、車體と一緒に崖の下へ墜落して行く放埒な馬の腹が眼についた。さうして、人馬の悲鳴が高く一聲發せられると、河原の上では、壓し重なつた人と馬と板片との塊りが、沈默したまま動かなかつた。が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まつたその羽根に力を籠めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいつた。

無禮な街

街は祭りだ。樹のない萌れかかつた夜の街の兩側には、泥溝の傍まで露店の天幕が竝んでゐた。人波は汗ばんで甘い塵埃の匂ひがした。私は人々の顏をきよろきよろ見廻しながら歩いた。何を搜してゐたのか。逃げた妻がもし氣まぐれにでも流れ込んで來てゐたなら？　さう云ふ私の感じは人波にもまれたときのいつものことで今に限つたことではない。何か他に。私は漠然と掏摸を搜してゐたのだ。掏摸の顏と云ふものはどこかに面白味があるにちがひない。これこそ人間の代表的な顏だと思へるものは掏摸仲間にありさうに思はれた。しかし、もう人々の身體に突きあたつて行くのはいやだ。私は街を外れた。人々は祭りにひきつけられてゐて露路は空虚だつた。細い新月が[illegible]の歪んだ廂の上で蕭條として光つてゐる。泥溝には油が浮いてゐた。私は空の烟筒を數へてみた。一本の烟は[illegible]と横に靡いてゐた。暗い露路を幾つも曲つてもまだ[illegible]は追ひかけた。[illegible]つく乾た[illegible]私の家の上で[illegible]を擴げて[illegible]つてゐた。暗い中で水道栓が鳴つてゐる。塀板の上からは鉢の花薔薇が生々と覗いてゐた。

——ちよつと御覽なさいな。いいわね。私、此の薔薇に香水をかけてやるの。——

妻のゐたとき、妻はさう云つて或る夜その薔薇の鉢を快活に抱きかかへて歸つて來た。

私は家の中へ入つた。忘れた。花豌豆を買ふのであつた。私の汚い部屋の中にはいたる所の花瓶や花筒に花豌豆が插してある。その色とりどりの花々はあながち孤獨な純情な生活によりいささかの生氣を放たんがためばかりではなかつた。私は此のまる一年と云ふもの雌蕊の夜眠りの研究に沒頭して來た。妻は何ぜ逃げたのか。私にもよくは分らない。恐らく貧困のためであらう。それ以外のことを考へると云ふことは、とにかく考へ得られるにしてもあまりに自分の妻を見下げることだ。私は彼女を愛してゐる。何ぜか、愛してゐる。私が初めてスヰートピーを買つて來たとき、妻は寢衣に帶を締めかけてゐた所であつた

「あら、まア、スヰートピーね。スヰートピーだわ。まア、綺麗だわねえ。」

彼女は私の持つてゐる花束を奪ひとると、ぱらりと帶を捨てて高く兩手でその花束をささげながら云つた。

「あなた、これ一寸スヰートピーよ。まア、美しいわね。」

彼女は、直ぐ帶も締めずにふはふはとそのまま流しもとの水の傍へ飛んでいつた。一束の花にも、それほど心を奪はれる彼女であつた。敏感と云ふことが、もし鈍感のやうに沈着に重々しいものであつたなら、私の生活は定に惹かれぬ一對の花のやうにいつまでも幸福であつたらう。

私は花瓶に水を入れ變へるとその杓で冷たい水を一口飲んだ。何もすまい、こぼれた花瓣もまだ昨日のままに散つてゐた。風情がある！　私の慰めとは、これだ。逃げられた男の恍惚とは逃げた妻の美しい習慣を忘れぬことだ。窓が閉まつてゐた。私は窓を開けて風を入れた。カーテンを開けねばならない。猫がひらり何處かで飛び降りた。新月がひとり空に殘つてゐる。

「笑ふべき現象だね。」と私は云つた。

とにかく彼に向つて云つたのかよく分らぬが、この苦しつくるから逃げられた男なとり空を仰いでゐるといふことは！ 黙つてゐるのに何だか私は瞬間とも黙つてはゐないやうに思はれる。私は家の中から何か新らしいものを發見しようとして部屋の隅々を眺め廻した。まだ見たこともない節穴や木目の形まで捜へながら。しかし、それもうるさくなつた。私はバナナの皮を剝いて食べ出した。その匂ひがどこかの誰かの愛人の匂ひのやうにまことに特殊なかで香氣があつて、と私は考へると淋しくなつた。

「果實」

さう私は何かともなく呟いた。遠く祭りのざわめきが聞えて來た。彼らは何をするのか？ 何かに耳を傾けるやうにふと私は心をそのことに集中した。

「われわれは遊んで了ふ。」といきなり私は感じた。

私はバナナを食べた。悲しくもなければ淋しくもない。ここには何か分らぬ眞理が儼然としてゐるに相違ない。

「これはバナナだ！」

夜が更けていつた。空氣が冷たく濕り出した。街の祭りのざわめきがただただ低まつて來た。私は呆けた様の釘を古新聞の文鎭で打ちつけた。それから眼鏡のレンズを脱して拭き始めた。夜の私の仕事はいつもそれから明け方まで續いて行く。ふとそのとき私は玄關から物音をききつけた。

誰かな？

妻かな？

風かな？

「どなた？」と私は云つた。

返事がない。

「どなた？」

私は玄關へ立つていつた。すると、見たこともない女が私に背中を向けて戸を締めてゐた。

「誰方ですか？」

女はこちらを向くと息をはずませて默つてゐた。若い女だ。顔がひどく蒼ざめてゐて、彼女は私の顔も見ずどこか私の周圍を見廻してゐた。何かに餘ほど脅かされてゐるらしかつた。

「間違ひでせう？」と私は云つてみた。

女は私を見て一寸笑顔になつた。

「上がつてもよくて？」

「どうぞ。」と私は云つた。

云ふや否や、女はもう下駄を脫ぎにかかつてゐた。左の頰に一つ眼に立つ黑子があつた。

私は座敷へ入つて座蒲團をすすめた。女は早やべたりと坐つてゐて自分で締めた後ろの襖の隙間を見詰めてゐた。私は何と云つてよいのか分らなかつた。何かの間違ひにちがひない。

「遅くなつて了つたわ。」と女は云つた。

「いや。」

「蒸しむしするのね。」

「どうかなすつたのですか？」

「あなた、ひとり？」

「ひとり者ですよ。」

「ア、血が。」と女は云つて私の手の指を指差した。

いつの間にか私の指からは釘を打ちつけたときの痛まぬ傷口から血が出てゐた。しかし、此の女は不思議にも馴々しい魅力があつた。女は袂から紙を出さうとして周章ててゐた。

「いいんですよ。どうかなすつたんですか。」

「さうぢやないの。」と女は云つた。

何ぜさう云ふ風なことを云ふのであるか。私の疑ひ深さうな眼つきから考へて、私の考察を訂正しようとするかのやうだ。全く私に限らず彼女をひと目見たものは、彼女のその態度から險しい生活の匂ひを嗅ぎつけたにちがひない。しかし私にはそんなことからだ私の眼

色を甦へさせたそれほど何の重大なかかはりがあるものか。ただ私にとつて興味があつたと云ふことは、此の不意に飛び込んで來た女の得體の知れぬ馴々しい色彩が、とにかく一寸黑い花でも見るやうな不安な魅力を感じたことだ。

私は指の血を散つてゐたスヰートピーの柔かい花瓣で拭きとつた。女は壁に貼りつけてあるモナ・リザの版畫を眺めてゐた。その繪は妻が繪の中の女の微笑を見習ふためにわざわざ貼りつけたものである。

「あの繪、キリストさんのね。」と女は云つた。

思ふにこれは何處かでマリヤの繪でも見て來てそれをキリスト教の何かと關係があるらしい聖像を誰かに聞いたものに相違なかつた。聖母とリザとを間違へる程度の見識で、なほ全然私の世界に無智ではないと云ふことを示したい彼女の願ひに私は好意を持たう。が、私のしかつめらしい鄭重な言葉が彼女の馴々しさに不似合な感じを持つて響いて行くのがあつた。これは私は夢想家だ!

「あの繪はマリヤさんのだ。」

「ま、さうさう。マリヤさんね。キリストさんはもつと恐い顏をしてるわね。」

「キリストさんは男だよ。」

女は何だかふふ。と笑つた。何故私はさう云ふ可哀想なことを云ひ出したか。しかし、女は私のその侮辱も私の汚い變化にもさして氣にする所がなかつた。私が慰めようとして優しい言葉を搜してゐる暇に、彼女は入つて來た襖の方を振り向いてそはそはしく膝を動かしてゐた。しきりに戸の外が氣になるらしい。祭りの響は消えてゐた。女は誰かに追ひつめられて迷ひ込んで來たにちがひない。私の家は露路裏の袋の底のどん底だ。もし逃げるなら此の窓を飛び越すより仕方がなかつた。

「誰か來るのかね?」

「私、歸りたくないの。」

どうして若い女がただひとりの家へ飛び込んで來たのかまた私は知りたくなつた。前から私の家には若い男がひとりであると云ふことを知つて來たのか。それとも他の誰かの家へ來るつもりで偶然私の家へ入つて來たのか、また私のゐない前に此の家には彼女の知り合ひの誰かがゐたのであるか、そのどちらであるかをはつきりと知りたかつた。

「あなたは此の家へいつか來たことがあるのかね?」

「ええ、來たわ。」

「いつ?」

「一度、たつた一度きりよ。」

「僕のゐるとき來たのかね?」

「あのときあなたゐたの?」

をかしい。これは私のゐる前に彼女が此の家へ來てそのとき彼女の知らない澤山の若者が集つてゐたのかも分らなかつた。

「僕はそのときゐなかつたんだよ。」

「さうお。松山さんも?」

「松山さんて知らないがね。」

「あなた知らないの。」

「君は僕が此の家へ入る前の人のときに來たんぢやないかね?」

女は一寸驚いたらしく口を開けた。

「私、あなたを見たことがないわ。」

「そりやさうだらうとも。」

「ぢや私、間ちがつたんだわね。」

「さうだよ。僕はあんたなんか見たことがないよ。」

女は默つて眉を動かした、が、直ぐ晴れやかに笑ひ出した。

「困つちやつたわ。」

「これから遠くまで歸るんですか?」

「ええ。さやうなら。」と女は突然云つて頭を

下げた。
「君、外へ出ると困るんぢやないですか。困るのならここにゐたつていいんですよ。」
　すると、女は歸りさうにもせず暫く默つて部屋の中を見廻してゐた。どこかさう云ふときに限つてぼんやりする顔だ。圓く全く思慮の缺けた愛すべき顔つきで、その物腰に飄々とした不安定な動きがあつた。
「もう幾時頃かしら。」と女は呟いた。
「十二時少し廻つてゐるね。」
「さうだわね。」
　女の顔には落ちついた樣子がみえた。すると、彼女の顔は遽に快活になり出した。
「あなた、花が好きなの？」
「いや。」
「澤山あるわね。」
「君は好きかね？」
「好きだわ。綺麗だわね。あの花もいいわ。直ぐ凋んでは了ない？」
「凋むよ。」
「豌豆？」
「さう。」
　女はまたくるくる部屋の中を見廻した。
「あ、蒸しつく。私、今頃から歸れない。」

よければ泊つて行くがいい、と私は云はうとした。が、一組より蒲團がない。暫く默つてゐると、女が袂で顔を煽ぎながら、
「今夜ここにゐてもよくて？」と云つた。
「いいとも、だけど君の寢る蒲團がないのだが。ア、さうだ、借りて來よう。」
「いいわ。私、寢ないわ。あなた、もう寢るんでせう。」
「いや、寢ない。僕は夜は寢ないんだから。さうだね、僕の蒲團で寢るといいよ。」
「どうして寢ないの？」
「僕の商賣は人と違ふんだから、晝寢て夜起きると云ふやつなんだから、いいよ。誰か來たら、ゐないと云つておけばいいんでせう？」
「さう云つてよ。」
　女は煽ぐ袂を放して喜ばしさうな顔をした。矢張り何かが恐いのだ。
「泊めて、ね？」
「どうぞ。」と私は輕く云つた。
「ありがたいわ。」
　女は片方の袂の中からチョコレートを取り出すと銀紙を剝ぎ始めた。
「ここ變つたのね、前に來たときには支那人がゐたわ。」

「はア。」
　此の女はその支那人とも何か關係があつたにちがひない。男の家から家へと泊り渡つてゐる特種の女らしかつた。それにしても一體何者が此の女を追つ驅けてゐるのだらう。それが私には問題となり出した。
「あなた、奥樣があるの？」
「あるやうに見えるかね？」
「あんな鏡臺なんか贅澤だわ。」
「家内はあつたんだよ。」
「死んだの？」
「死なない。」
「ぢや今はゐないのね。」
「逃げたんだよ。」
「ふーむ。」と女は不思議さうな顔をした。
「興味があるかね。」
「ひどいわね。」
「君もさう思ふかね？」
「だつてひどい女だわ。」
「さう云つてくれる者が一人ぐらゐ欲しいんだよ。」
「いつ逃げたの？」
「よほど興味があると見えるね。」
「でも、あなたが可哀想だわ。」

「良人を抛つたらかして逃げて行くなんて、面白くないね。」
「あなた一人なら部屋が汚くなる筈だわ。」
「そんなに汚いか。」
「汚いつたらありやしない。」
女は疊の上を吹いてみてゐた。
「私、あとで掃除してあげてよ。こんなに塵埃がたまつてるんですもの。フッ、フッ。」
「吹いちやいかんよ。」
「まア隨分ほこりがあつてよ。家も惡いんだわね。ざらざらしてゐるぢやないの。これぢや風が吹いたらたまらないわ。」
私はすつかり忘れてゐた顯微鏡にレンズを入れた。
「何に、それ？」と女は訊きながら寄つて來た。
「知らないか？」
「顯微鏡？」
「さうだよ。」
「大きく見えるんだわね。」
「うむ、さうだよ。花を見るんだよ。こんな小い花の雌蕊なんだ。面白いかね？」
「見せてよ。」
「一寸待つた。」
私は指の先で抜いたスヰートピーの花瓣を鏡臺の上に置いて度を強めた。
「さア見た。」
女は口を開けて顯微鏡の上へ顏を俯向けた。
「見えるかね。」
「變だわね。」
「何んだかぼやぼやしてゐるわ。」
「血が見えるだらう。」
「赤いのがさうなの？」
「白いのもさうだよ。雲のやうな形のものがあるでせう。」
「白いわね。」
「白いのも血だよ。」
女は默つて顎を鏡の口の上で動かしてゐた。
「女の血を見ると、あの白い物の形が違ふんだよ。愛人男と面白いことをしたかつて云ふことだつて、あの形でちやんと分るんだよ。どの男とさう云ふことをしたことも勿論分るし、面白いかね？」
「恐いわね。」
女は眉をしかめて私の顏を眺めてゐた。その冴えた表情には別に惡さうな所もなかつた。
「あのね、自由な男と一緒になると子供が出來ないの？」と女は突然そんなことを云ひ出した。どこかに何かを隱したやうな顏つきだ。
「そりや出來るさ。」
「出來ないつていつたけど、嘘だわね。」
「そりや嘘だ。」
女は默つて片方の膝を動かしながらチョコレートの紙をもみ出した。私はその女の血球を鏡臺に乘せてみたい興味があつた。私は前に一度妻の血球を驗べて見ようとしたことがあつた。しかし、私は恐くてやめた。疑ふと云ふことは、疑ふ可き價値があつても罪惡である。私は考へた。總ての世の中の結婚にもし顯微鏡が必要となつたなら。恐慌の後に不安が來るだらう、人々はその恐慌の時代に自分自身を置くことを嫌ふ。時代の自力は功利である。少くとも時代自身はまだ見えない時代の犠牲と、なることが、明らかに進歩を來すにちがひないと思はれる時に於てさへ、なほ彼しは犠牲の苦しみを厭ふ」と私は考へた。
「君、眠けりや付き合ひなんかしなくつて眠るがいいよ。僕は眠かないんだから。」
「さうお。」
「眠いんでせう？」
「どこで寢るの？」
「向うの部屋で寢る方がいいだらうね。どこで

嘘だつていいか。」
　女は私の指差した次の三疊の部屋へ行かうとして立上ると、袂の中から殘りのチョコレートを出して私の上へ投げ出した。
「君は誰かに追つかけられてるんぢやないか？」
　女は振り向いて、
「何故？　嘘よ。」と云つた。
「どうもさうらしい。」
「そんなことはないわ。」
「そはそはしてゐる。僕には心配なんかしなくつていいよ。先刻から變だ。」
「私、赤ちやんを捨てて來たの。」女は平氣な顏をして云つた。私は一寸ショックを受けた。
「捨兒かい？」
「うるさいんですもの。」
「誰の子だ？」
「私の。」
「君の子を捨てたのか！」
「捨てちやつたのさ。」
　女は赤い顏して大眞に頰をふくらませた。
「そりやいかん！　いつだね？」
「さつき。」
「來る前だね？」
「ええ。」
「嘘ついてるんぢやないか？」
「あちらに芝園があるの？」
「どこだ！」
「何に？」
「赤ちやんどこへ捨てたんだね？」
「八幡さんの中へ置いといたの。」
「坂の上の？」
「ええ。」
　女は三疊の部屋へ入らうとした所で、襖を縱に腹へあてながら口を鳴らしてゐた。
「早く拾つて來るといい。今ならいいよ。」
「うるさいわ。」と女は云つた。
「いかん。」
　私は直ぐ外へ出ようとした。
「邪魔つけぢやないの。今頃拾はれて了つてるわよ。」
　私は外へ出た。歩きながら、私は何ぜか嘘にひつかかつてゐるやうな氣持がした。露路を出て泥溝の傍を通つていつた。しかし、嘘にしても捨兒をしたと云ふ嘘は嘘らしくない嘘であつた。あまり上手いのだか、もし本當だとすればいま少しあの娘に何かの愁ひがある筈であつた。それがない。愁ひの代りにいくらかの恐怖はあつた。捨兒をして來た女が、愁ひよりも恐怖を多く感じると云ふことはあり得るとして、しかしそれでもどこかのんきな所に嘘だと思はす感じが殘つた。無論それは捨兒をすることがあまり事件の性質として突發的な變態的な所が多いためであるかもしれなかつた。が、もし本當だとしても捨兒はそこにはゐないと云ふ感じがした。拾はれて了つたがためにゐないと思はれるのではなく、嘘らしい事件の性質がそんな風に思はせた。
　祭りの跡では露店の天幕が疊まれてゐた。濁つたやうな夜氣の中で醉漢が蹌めいてゐた。挽かれて行く植木屋の車の上では賣れ殘りの花が慄へてゐた。私は人通りのなくなつた橋を渡つて女の云つた境内の方へ歩いていつた。が、ふと私は困つた。一體その捨兒を拾つて來て私はどうしようとするのか。兒を捨てようと考へて、さうして捨て得られた母親にその兒を再び強ひたとしてもその子も母も不幸であるのは分つてゐた。それかと云つて、私自身でその兒を育てて行く考への無い以上、私はその子を拾ひ上げたとしても仕方がない。それよりそのままにしておけばやがてはその兒を拾ふであらう人達の誰よりも恐らく愛を持たない私やその

母の手へその子が歸るより、われわれよりも子を欲するであらうそれらの人々の手へその子の落ちることこそは子にとつてより幸ひな運命となりさうに思はれた。實際捨兒に出逢つた人々は凡そ私と同じ氣持になつて見捨てるものとして見た場合、もしその兒を拾つた人があつたとすればその人はなみ通常の人情家であらう筈はない。とにかく、その兒は早や母に捨てられたと云ふことに於て既に此の人生の出發點で不幸であつたのだ。しかし、それはまたいかにさやうであつたとしても私は今更引き返すことは出來なかつた。さう云ふ事實に今明瞭に出逢つたと云ふことが私に避く可からざるある責務を生じさせたのだ。既にそのことに何かを感じたと云ふことに於てだけさへもその兒の運命を見届けなければならないと云ふ義務が生じてゐるやうに思はれた。なほその上にその兒の母を知つてゐるものがまさにその子の拾ひ手とならうとしてゐる私であるとして見れば、これはいよいよ複雑な問題とならねばならなかつた。ともかく私は私としてまづ何はさておきその兒を母の愛に訴へて彼女に返す必要があつた。彼女がもしそこで知らないと云つたなら、私はその兒の母を全く知らないものとして誰か子を欲する適當な人々の申し出のあるまで出來得べくんば養つてやらうと考へた。しかし、それにしても何ぜ彼女は私にこのやうな重大な自身の祕密を輕々と打ち開けたのか。それが私には分らなくなつて來た。それは彼女本來の輕率からだとばかりに思つた場合すこぶる明瞭なことであつた。が、更にその他に何かがないか、何か子に對する愛情が、もしその祕密を打ち開けたとき相手のものが狼狽て私のやうにその子を拾ひに走るであらうと推察しての好奇心が彼女にあつたと思へば思はれないこともない。それにたとひまことに問題とはならぬ閃きのやうな些細なものであつたとしても、そのかけひき的な氣持の動きからは拾はれぬ子に對する彼女の愛情がちらりと覗いてゐるやうに思はれた。そこから、彼女を攻めかけて反省させればまさられる。いづれ他人の手より子にとつては母の手だ。もしそこで彼女がその子をいやだと云へば私は云はう。

「私に知らさずに、もう一度捨てるがいい。」

それでも私はまた彼女の辯にひつかかつてゐるやうな氣持がした。私は教會堂の横を通つて坂を登つた。私はふと妻のことを思ひ出した。何ぜだか私はここを通る度にいつも必ず妻のことを思ひ出す。勿論そのあたりには私に妻を思ひ出さしめる何らの特種な現象もない筈だのに。何かそこの空氣の中には確かに、眼に見えぬが何かがあるに相違ない。八幡の境内はその坂の上にあつた。櫻が枝を垂れて繁つてゐた。私は低い石段を登り、鳥居を潜つて石疊の上を歩いていつた。周圍は森のやうに沈まつて暗く、樹の幹が時々立ち停つてゐる人のやうに見えた。すると拜殿の前に一人の黑い人影が鈍く静に動いてゐた。私はその男らしい人影を見ると立ち停つた。もしその者も前に一度そこを通りすぎたとき捨兒に逢つて、さうしてそのまま逃げ出したものの、またそれが心にかかつて舞ひ戻つて來たのではなからうか。實際、捨兒に逢つたものはたとひ全く拾ふ意志がないものにとつてでも長く氣にかかるにちがひない。私はその人の傍に近寄つて行つて捨兒のことを訊ねてみようかと思つた。が、訊ねて見て、捨兒があつたと答へられても見當らない限り仕方がなく、訊ねたと云ふことで、その捨兒と何かの關係がありさうに思はれると云ふことも不快であり、訊ねて知らないと云はれたときはまたその人に自分と同じ動搖を與へさうで氣の毒で、よしまたたとひ捨兒を知つてゐたとしても拾はな

かつた限り知らなかつたと答へるにちがひはなく、が、しかし何かの方法で確かに捨兒があつたと云ふことをその者から知りとることが出來たとすれば、私は私一個の感情の整理に役立つのだ。永らく此の後とてもその捨兒のことが氣にかからねばならないと云ふことは私としては困つたことだ。で私はその人影の方へ近寄つて默つてその者の擧動を觀察しようと考へた。

私はもはや捨兒はこの境内にゐないことを直感した。私はその兒を搜すことは第二として、その男の傍へだんだんと近づいた。するとその男は男の方から私の方へ近寄つて來た。片手を帶へ挾み、片手を懷へ入れてゐてどこか萎れた樣子が見えた。はて此の男。私がこの男を觀察しようとしてゐるやうに、此の男も同じ心理で私を嗅ぎつけようとしてゐるのではないか。私はその男の傍を擦れ擦れに通つて顏を見た。暗い顏の眞中からその男の眼がまた私の顏を覗き込んだ。疑ひ深さうなその眼の光りが私には不快であつた。さう云ふ光りの眼とはいつも私は爭ひさうな氣持がした。が、男の歩く方向は鳥居の方の出口とすれば斜めに少し外れてゐる。これではまた散歩のやうにぐるりと廻つて私の後を追つて來さうに思はれた。

私は拜殿の裏へ廻つた。もし捨兒をした所が八幡の裏であつたとしたならそれは高い石垣だつた。いづれするなら此の拜殿の周圍に違ひなかつた。捨兒をする以上靜で人眼にかかる所でなければならぬ。が、ゐない。しかし、あの男は何ぜいつまでこの周圍をうろついてゐるのであらう。手洗鉢の石の中で、樹の間を洩れた月の光りが水に映つてきらりと一つ光つてゐた。私はその男の歩行に感覺を働かせながら捨兒の所在を搜し廻つた。が、ゐない。男はときどきこちらの方を向きながら石疊の上で足數を算へるやうに俯向いて歩いた。ふと、私はその男が誰かとそこで待ち合せてゐるのではないかと考へた。もしそれが媾曳だとしたら彼にとつて私のゐるのは明らかに邪魔だつた。私はそれ以上境内にゐる必要もなにもなかつた。捨兒は譃だ。さう云ふ珍事があつたとも思はれない程あたりは靜に落ちついてゐるではないか。もう私は捨兒を搜す氣がなくなつて來た。そのまま直ぐ境内を出て坂を降りた。歸つて女の譃をせめてやらう。そのときの答辯の仕方で捨兒は事實であつたかどうかを判斷しよう。が、それがもし事實であるとしてみれば私は捨兒を拾ひに出て來たのを彼女が知つてゐるからは彼女は私の留守に逃げ出してゐるやうにも思はれた。が、もし彼女に幾らかの我が子に對する愛情がある限り恐らく逃げ出すやうなこともなからうと思はれる。またもし捨兒が譃であつたとしてみれば、なほ彼女は彼女の譃にかかつて飛び出て來た私の愛情に對してでも逃げ出してゐるだらう。して見れば、彼女の逃げ出してゐるゐないは、別に彼女が捨兒したしないに明確な判斷を與へるに何らの手がかりにもなりさうにも思へなかつた。と、また私は其のことが頭の中に浮んで來た。側の坂だ。私は坂の中途に立ち停つて周圍を眺め廻して見た。が、やめた。危く私は私を見詰める妻の表情で萎れさうになつて來た。闇と瞑想とはいつの場合でも禁物だ。私は足早やに歩き出した。私は元氣を出した。邪魔するものを蹴りつけよう。私は泥溝に添つて歩いてゐた。暑いのに寒氣がする。出るときとは違つて高い倉庫の横から私は露路へ入つた。家へ着くと女は額に疊の痕をつけて起上つた。私は私から捨兒のことを言つてはまづいと考へた。

「氷を飲みたくはないかね。」

「ゐて？」と女は訊いた。

「君は譃を云つたんだね――

「何を？」
「そんなもんなんかゐなかつたよ。」
「あら、さう。」と女は云ふと、眼を大きく開けて私の顔を眺めてゐた。「どうしたんでせう」とでも云ふやうに彼女の脣の片端は少し吊り上り、幽かな笑顔となつて何か遠くの聞き馴れぬをかしな物音を聞きつけたかのやうな感じがあつた。私の疑ひなどはてんで受けつけないと云ふかのやうなその彼女の様子には、私のしつこい疑ひも全くとれた。
「可哀想だとは思はないかね。」
「おや、誰か連れてつたんだわね。」
「君は何とも思はないか？」
「だつて仕方がないぢやないの。」
「仕方がないことはないよ。どうにでもなつたんだよ。」
「ほんたうにゐなかつた？」とまた女は訊いた。
「あんまりのん氣だよ。自分の子供を捨てといて、そんなにのん氣になれると云ふのはどうかしてゐるよ。とにかく人間ではないね。」
「殺すよりいいと思つたのさ。」
「殺すのも沢山あるだらうね。」
「ええ、ええ。」女は自分に元氣をつけるやうに云つた。
「君は實際をかしな女だよ。それで少しも氣にかからないかね。」
「私捨てて來るとき見つかるかと思つて恐かつたわ。」
「さう云ふんぢやない。子供のことが何も心配にならないかと云ふんだよ。」
「そりやなるわ。」
「僕には心配してゐないやうに見えるがね。」
「だつて心配したつて仕方がないわ。」
「それが僕には分らないんだ。子が可愛くはないのかね。」
女は膝を立てると默つて拗ねたやうな顏をして襖の隙間を閉めた。
「どこへ捨てといたんだね。」
「手洗水の横へ置いといたの。」
「そこも見たよ。」
「あの子、眠つてたのよ。」
「もし僕が拾つて歸つて來たらどうしたかね？」
「そしたら私育てるわ。」
「そんなら何で捨てたりなんかしたんだね。」
「今急に可愛くなつて來たの。」
「とにかく馬鹿なことをしたもんだ。」
「もう誰か拾つたわね。」
「定つてるさ。」
「誰が拾つたのかしら？」
「分つたらまた貰ひに行くかね。」
「いい家だつたら捨てとくわ。」
「君の名は何て云ふの。」
「石。」
「石？」
「ええ。」
「何と云ふ石だ？」
女は答へずに笑ひ出した。私はさう云ふ變な訊き方をするつもりぢやなかつた。が、もう一度名前を明瞭に訊き質さうと思ふ氣も起らなかつた。暫く默つてゐると、
「私部屋を掃除しといたのよ。綺麗になつたでせう。」と、女は言つた。
「ともかくもう眠るといい。起きてゐても仕方がないよ。僕は寝ないんだから。」
「ぢや私寝るわ。」
「うむ、疲れたから寝床を敷くのはもう堪忍して貰はう。向うの押入に蒲團があるんだが。分るかね。」
女は立つて二階の部屋へ入つて行つた。
「分るかね？」

女は返事もせずに寢室で何處かへ突きあたるやうな音を立ててゐた。暫くすると彼女は荒々しく蒲團を踏みつけながら勝手に床を敷き始めた。私は彼女の無造作なその樣子を見ると身體が何となく浮き立つて晴やかな氣持になつた。女は蒲團を敷き終るとまた襖の所へ顏を出した。

「寢卷はないよ。」と私は云つた。

「いいわ。」

女は私を見て一寸笑つた。それは媚びでもなければ勿論をかしくもなささうな、いかにもかう云ふ場合間を次ぐに適當な感じのいい微笑であつた。

「眠くなれば起すよ。いいかね。」

「起して。私、寢坊よ。」

女は別に何の暗示も殘さずに直ぐ襖を閉めた。それが私に思はず一滴の美しい感じを落してくれた。此の場合その美しい感じを感じ得られたと云ふこともまた私にとつてはなかなかの大切な誇りであつた。

「あなた、チョコレート食べてもよくてよ。」と、襖越しに女は云つた。彼女は床へ入つたらしい。私はチョコレートを搜したがどこにもない。

街の道路のどこからか徹夜を働く夜業の音が聞えて來た。私は少し落ちつきをなくしてゐた。が、私はその隣室の女に落ちるには臆病にも謙遜であつた。寔に謙遜は自分にとつても美德である。

「あなたは可哀想な方ね。」と暫くしてから女は云つた。

「何ぜだね？」

「奧さまが逃げちやつてさ。」

「それでかね？」

「ひどい女だわね。」

「君は僕に同情するかね。」

「全くひどい女だわ。」

「君の方がひどいよ。子供を捨てたりなんかして、全くひどいぢやないか。僕は子供に同情するね。」

「だつて、子供を捨てるより男を捨てる方がひどいわ。私なんか、捨てられたことはあるけれど男を捨てたことなんか一度もないわ。」

「さうかね、さう云ふのはいいね。賴母しい。」

「ほんとよ。私、自分から男を捨てたことつてなくてよ。捨てられてばつかりよ。捨てられると口惜しいわね。」

「そりや口惜しい。君はそんなに何度も捨てられたのかね。」

「ええ。五度、六度目よ。」

「さうかね。」

「あなたは一度目でせう？」

「一度目だ。いやだね。君なんかはあまり我ままをするからだよ。」

「さうぢやないわ。男が惡いのよ。私なんかそりや親切にしてやるのよ。それでも男つて現金なものね。私にお金がある間うまいことばつかり云つてるのさ。」

「君は金なんか貯めたんかね？」

「貯めたわ。私なんかお金でも持つてなけりや相手にしないわ。もうすつかりとられちやつたのよ。」

「それで赤ちやんを捨てたんかね？」

「ええ、さうよ、よく知つてるわね。」

「そりや僕も貧乏したよ。」

「いやだわね。」

「いやなもんだ。」

「赤ちやんなんか育てられやしないわ。ええ。あなただつたらどうして？」

私だつたらどうするか。私にも分らなかつた。ただ私は妻に逃げられただけである。

「私、こんどからお金を貯めても無いやうな顏

をしてゐるの、持つてても困るもんだわ。」
これは面白い。實際持つてゐても困るのだ。有るが故に愛されるとは悲劇である。
「所が金がないと、僕のやうに逃げられるよ。」
女は隣室でからからと高く笑ひ出した。
「あなた、お金がなくて逃げられたの？」
「さうだよ。」
「馬鹿々々しいわね。」
「實際馬鹿な話だよ。こんなことつてない方がいいね。」
「奥さんに今度出逢つたらどうするの？」
「それが困るのさ、まさかよく逃げてくれたとも云へないし。」
「ひつぱたいてやるといいわ」
「君だつて今に子供にひつぱたかれるぞ。」と私は笑ひながら云つた。
すると、女は急に黙つて了つた。それぎり彼女は何事も云はなかつた。ふと彼女は泣いてゐるのではないかと私は思つた。實際のん氣に見える女性と云ふものは人々の思はぬときに不意に涙を出すものだ。彼女らの本能は生活の享樂的な部分にのみ生きる草花の様で、しかしながら生活してゐると云ふ事の重い面から[illegible]反面として小さな[illegible]か、それだけにまた突然として彼女の精神の弱つた一部をめがけて斬り込んで來るにちがひない。此のため彼女らにとつて最も大切な生活上の武器は忘却性をとり上げて了つた代りに、慎ましやかな悔恨を强ひ續けていくとしたら恐らく彼女らは餘りに重いその人生の苦痛のために根を拔かれた草の様に滅びて了ふであらう。私は隣室の女にさう云ふ彼女の弱點について何事も言つてはならなかつたのだと云ふ事に氣がついた。彼女は彼女の性格からもつとも子供のためにも自分の爲めにも都合のいい方法を取つたのだ。今の場合われわれの忠言や批評は何らの建設的な[illegible]にさへもならないと思はれた。見るがいい。彼女は子を奪はれてさも安らかに喜んで居るではないか。
[illegible]風が夜の窓から流れて來た。花の匂ひがかする。[illegible]が窓にかかつたまま[illegible]に[illegible]を[illegible]かせてゐた。私は暫く窓に頭を下ろしてゐた。それからいつものやうに花屋のショーウインドーを覗きに[illegible]つた街へ出ていつた。花屋の窓の青い[illegible]にはぜりーと百合と薔薇とが[illegible]なつた矢車草とか[illegible]つてゐた。その一隅と低い下にはずつと[illegible]に[illegible]つた花瓶か、[illegible]と薔薇と[illegible]は[illegible]の花[illegible]を[illegible]けて[illegible]つてゐた。葉は庭を埋めて青々と水に打たれて光つてゐた。花々は花屋の人の眠りのためにそれだけ今は靜にのびのびと自由に見えた。しかし、傷つけられた醜い紫陽花の数輪は束ね解かれたまま堅い土間の上に躰を横へて萎れてゐた。私はその夜遅くまで街を歩いてゐた。家へ歸つたときはどこかで雨が鳴いてゐた。足がひどく汚れてゐて着物が肩に重く濡りついた。私は足を洗つて着物を着更へると先づ煙草を一服ゆるると喫つた。空は靜に紫色に變つて來た。空氣は夜明けの色の中で一層冷たくなつた。私は竈に火を焚きつけて湯を沸かした。やがて部屋は霧を立ち籠めたまま、だんだんと明るくなつた。遠くの高い建物の硝子は最初の曙日を受けて桃色にきらきらと輝き出した。雀は勇敢であつた。彼らは屋根から屋根を一團となつて躍りつけるやうに活潑に鳴つてゐた。
湯が沸き立つて來た頃、女は起きて來た。
「よく眠れたかね。」と私は訊いてみた。
女は默つて笑ひながら眼をこすつた。
「君は寝坊をしないね。」
「私、夢ばつかり見てゐたわ。」
女が[illegible]を[illegible]ふ[illegible]に私は茶を淹れた。

「とらぞ」

私は彼女の前に銭を差し出した。女は私の仕打ちを皮肉にとつて笑つてゐた。

「私、直ぐこれから行かなくちやならないんだわ。」

無論私はとめなかつた。

「ね、私、これから八幡様へ一度行つて來たいわ。それから行かうかしら。」

「それもいいね。」

「あなたあそこまで一緒に行つてよ。」

「行かう。」

二人は茶を飮んでそれから家を出て行つた。路傍の水道栓には一人の主婦の傍ですがすがしく水を吐き出してゐた。街の屋根看板は露に濡れて新らしく光つてゐた。家々の戸は開けられ出した。

「あなたまだ寢ないんだわね。」

「寢ない。」

「そんなことしちや毒よ。」

「早く死ぬかもしれないね。」

「さうよ。早くいい奥さんを搜すといいわ。」

「ないよ。」

「あつてよ。あなたにはいい奥さんを持たしたいわ。」

「資格があるかね。」

「あなたの奥様にや私のやうな女は駄目よ。」

私は何とも云へなかつた。

「俺も駄目だ。」

坂を登り出したとき、朝日はいよいよ明るく輝き出した。教會の尖塔は傾いた丘の上で、新鮮な樹の緑の波を突き切つてひとり空高く聳えてゐた。煙は家々の屋根の上に棚曳いたまま動かなかつた。神社内へ入つたとき、女は濕つたやうな石疊の上を、ひとり奥の方へ馳けていつた。

「ゐないわね。ここよ。」彼女は手洗鉢の石の前に立ち停つてその下を指差した。

「そこも見たよ。」

女は暫く物珍らしさうな微笑を浮べながらその石のあたりを眺めてゐた。

「あの子、泣いたんだわね。」

私は默つてゐた。露が樹の枝から落ちて來た。今は私は何事も云つてはならぬ。

「可愛らしい子よ。女の子。座蒲團へ卷いといたのよ。ゐないわ。」

「いい人に拾はれたらいいがね。」

「さうよ。ねえ？」と女は私の顔を見上げた。

私は高い石垣の上から妻と捨兒を飮み込んでゐる街を見下ろした。街は壯大な花のやうであつた。街は大きく起伏しながら朝日の光りの中で洋々として咲き誇つてゐた。

「おや、私歸るわ。すまなかつたわね。」と女は云つた。

私は女の方を振り向いて頷いた。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

暫くして、女は朗らかな朝の空氣の中を身輕に街のどこかへ消えて了つた。

「俺は何物をも肯定する。」と、街は後に殘つてひとり傲然として云つてゐた。

私はその無禮な街に對抗しようとして息を大きく吸ひ込んだ。

「お前は錯誤の連續した結晶だ。」

私は反り返つて威張り出した。街が私の脚下に横はつてゐると云ふことが、私には晴れ晴れとして爽快であつた。私は樹の下から一歩出た。と、朝日は私の脚を眼がけて殺到した。

ナポレオンと田蟲

一

ナポレオン・ボナパルトの腹は、チュイレリーの觀臺の上で、折からの虹と對戰するかのやうに張り合つてゐた。その剛壯な腹の頂點では、コルシカ產の瑪瑙の釦が巴里の半景を歪ませながら、幽かに妃の指紋のために曇つてゐた。

ネー將軍はナポレオンの背後から、ルクサンブールの空にその先端を消してゐる虹の足を眺めてゐた。すると、ナポレオンは不意にネーの肩に手をかけた。

「お前はヨーロッパを征服する奴は何者だと思ふ。」

「それは陛下が、一番よく御存知でございませう。」

「いや、余よりもよく知つてゐる奴がゐるさうに思ふ。」

「何者でございます。」

ナポレオンは答への代りに、いきなりネーのバンドの留金がチョッキの下から、きらきらと夕榮に輝く程強く彼の肩を搖つて笑ひ出した。

ネーにはナポレオンの此の奇怪な哄笑の心理が分らなかつた。ただ彼に搖られながら、恐るべき易ひから逃がれた蠻人のやうな、大きな哄笑を身近に感じただけである。

「陛下、いかがなさいました。」

彼は語尾の言葉のままに口を開けて、暫くナポレオンの脣を眺めてゐた。ナポレオンの脣は、間もなくリュクサンブールの白い街道の遠景の上で、皮肉な線を描き出した。ネーには、此のグロテスクな中に興味を示したナポレオンの風貌は初めてであつた。

「陛下、そのヨーロッパを征服する奴は何者でございます？」

「余だ、余だ。」とナポレオンは片手を上げて冗談を示すと、階段の方へ歩き出した。

ネーは彼の後から、いつもと違つたナポレオンの尖つた高い肩の均衡を見詰めてゐた。

「ネー、今夜はモロッコの燕の巣をお前にやらう。ダントンがそれを食ひたさに、椅子から轉がり落ちたと云ふ代物だ。」

二

その日のナポレオンの奇怪な哄笑に驚いたネー將軍の感覺は正當であつた。ナポレオンの腹の上では、徑五寸の田蟲が地圖のやうに猖獗を極めてゐた。此の事實を知つてゐたものは、貞淑無二な彼の前皇后ジョセフィヌただ一人であつた。

彼の肉體に此の植物の繁茂し始めた歷史の最初は、彼の雄圖を確證した伊太利征伐のロデイの戰の時である。彼の眼前で彼の率ゐた一兵卒が、彈丸に擊ち拔かれて轉倒した。彼はその銃を拾ひ上げると、先頭を切つて敵陣の中へ突入した。それに續いて、一隊の兵卒は動き出した。それに續いて一大隊が、一聯隊が、さうして敵軍は崩れ出した。ナポレオンの燦然たる榮光はその時から輝き立つた。だが、彼の生涯を通じて、アングロサクソンのやうに彼を苦しめた田蟲もまた、同時にそのときの一兵卒の銃から彼へ移つて來た。

ナポレオンの田蟲は頑癬の一種であつた。それは總ゆる皮膚病の中で、最も頑強な痒さを

興へて輪郭的に擴がる性質をもつてゐた。掻けば花瓣を踏みにじつたやうな汁が出た。乾けば素焼のやうに素朴な白色を現した。だが、その表面に一度爪が當つたときは、此の濕疹性の白癬は、全圖を擧げて猛然と活動を開始した。

或る日、ナポレオンは侍醫を密かに呼ぶと、古い太鼓の皮のやうに光澤の消えた腹を出した。侍醫は彼の腹の傍へ、恭倹な禿頭を近寄せて呟いた。

「Trichophycia, Eczema, Marginatum.」

彼は頭を傾け變るとボナパルトに云つた。

「閣下、これは東洋の墨をお用ひにならなければなりません。」

此の時から、ナポレオンの腹の上には、東洋の墨が田蟲の輪郭に從つて、黒々と大きな地圖を描き出した。しかし、ナポレオンの田蟲は西班牙とはちがつてゐた。彼の爪が勃々たる雄圖をもつて、彼の腹を引つ掻き廻せば廻すほど、田蟲はますます横に分裂した。ナポレオンの腹の上で、東洋の墨はますますその版圖を擴張した。恰もそれは、ナポレオンの軍馬が、破竹のごとくオーストリアの領土を侵蝕して行く地圖の姿に相似してゐた。――此の時から、ナポレオンの奇怪な哄笑は深夜の部屋の中で人知れず始められた。

彼の田蟲の活動はナポレオンの全身を戰慄させた。その活動の最高頂は常に深夜に定つてゐた。彼の肉體が毛布の中で自分の溫度のために膨脹する。彼の田蟲は分裂する。彼の爪は痒さに從つて活動する。すると、ますます活動するのは田蟲であつた。ナポレオンの爪は、彼の強烈な意志のままに暴力を振つて對抗した。しかし、田蟲には意志がなかつた。ナポレオンの爪に猛烈な征服慾があればあるほど、田蟲の戰闘力は紫色を呈して強まつた。全世界を震撼させたナポレオンの一個の意志は、全力を上げて、一枚の紙のごとき田蟲と共に格闘した。しかし、最後にのた打ちながら屈服しなければならなかつたものは、ナポレオン・ボナパルトであつた。彼は高價な寝臺の彫刻に腹を當てて、打ちひしがれた獅子のやうに腹這ひながら、奇怪な哄笑を洩すのだ。

「余はナポレオン・ボナパルトだ。余は何者をも恐れぬぞ。余はナポレオン・ボナパルトだ。」

かうしてボナパルトの知られざる夜はいつも長く明けていつた。その翌日になると、彼の政務の執行力は、論理のままに異常な果斷を猛々しく現すのが常であつた。それは丁度、彼の猛烈な活力が昨夜の頓挫に復讐してゐるかのやうであつた。

さうして、彼は伊太利を征服し、西班牙を牽制し、エヂプトへ突入し、オーストリアとデンマルクとスエーデンとを侵略してフランスの皇帝の位についた。

此の間、彼の此の異常な果斷のために戰死したフランスの壯丁は、百七十萬人を數へられた。國内には廢兵が充滿した。禱りの聲が各戸の入口から聞えて來た。行人の喪章は到る所に見受けられた。しかし、ナポレオンは、まだ密かにロシアを遠征する機會を狙つてやめなかつた。此の蓋世不抜の一代の英氣は、またナポレオンの腹の田蟲をいつまでも癒す暇を與へなかつた。さうして彼の田蟲は彼の腹へ癌のやうにますます深刻に根を張つていつた。此の腹に田蟲を繁茂させながら、なほ且つヨーロッパの天地を攪亂させてゐるナポレオンの姿を見てゐると、それは丁度、彼の腹の上の奇怪な田蟲が、黙々としてヨーロッパの天地を攪亂してゐるかのやうであつた。

三

ナポレオンはジェーエーブローの條約を締結

してオーストリアから凱旋すると、彼の糟糠の妻ジョセフィヌを離婚した。さうして、彼はフランス皇帝の權威を完全に確立せんがため、新らしき皇妃、十八歳のマリア・ルイザを彼の敵國オーストリアから迎へた。彼女はハプスブルグ家、オーストリア神聖羅馬皇帝の娘である。彼女の部屋はチュレリーの宮殿の中で、ナポレオンの寢室の隣りに設けられた。しかし、新らしきナポレオン・ボナパルトは、また此の古い宮殿の寢室の中で、彼の尨大な田蟲の輪郭と格鬪を續けなければならなかつた。

ナポレオンは若くして麗しいルイザを愛した。彼の前皇后ジョセフィヌはロベスピエールに殺されたボルネー伯の妻であつた。彼女はナポレオンより六歳の年上で先夫の子を二人までも持つてゐた。今、彼はルイザを見ると、その若々しい肉體はジョセフィヌに比べて、割られた果實のやうに新鮮に感じられた。だが、そのとき彼自身の年齡は最早や四十一歳の坂にゐた。彼は自身の田蟲を持つた古々しい平民の血統と、ルイザの若々しい十八の高貴なハプスブルグの血統とを比べることは淋しかつた。彼は絶えず、前皇后ジョセフィヌが彼から離反を感じたと同樣に、今度はハプスブルグの娘、ルイザから壓迫されねばならなかつた。此のため、彼は彼女の肉體からの壓迫を押しつけ返すためにさへも、なほ自身の版圖をますますヨーロッパに擴げねばならなかつた。何ぜなら、コルシカの平民ナポレオンが、オーストリアの皇女ハプスブルグのかくも若く美しき娘を持ち得たことは、彼がヨーロッパに百萬の兵士を殺して贏ち得た彼の版圖の強大な力であつたから。彼はルイザを見たと同時に、油を注かれた火のやうにいよいよロシア侵略の壯圖を胸に描いた。殊に彼はルイザを皇后に決定する以前、彼の選定した女はロシアの皇帝の妹アンナであつた。しかし、ロシアは彼の懇望を拒絶した。さうして、第二に選ばれたものは此のハプスブルグの娘ルイザである。ルイザにとつて、ロシアは良人の心を牽きつけた美しきアンナの住ふ國であつた。だが、ナポレオンにとつては、ロシアは彼の愛するルイザの微笑を見んがためばかりにさへも、征服せらるべき國であつた。左樣に彼はルイザを愛し出した。彼が彼女を愛すれば愛するほど、彼は何よりも恐れ始めたことは、此の新らしい崇高優大なハプスブルグの娘に、彼の醜い田蟲の痕跡を見られることとなつて來た。もし出來得ることであるならば、彼は此のとき、フランス皇帝ナポレオン・ボナパルトの莊嚴な肉體の價値のために、彼の伊太利と腹の田蟲とを交換したかも知れなかつた。

さうして森嚴な傳統の娘、ハプスブルグのルイザを妻としたコルシカ島の平民ナポレオンは、一度ヨーロッパ最高の君主となつて納まると、今迄彼の幸運を支へて來た彼自身の恵れた英氣は、俄然として虚榮心に變つて來た。此のときから、彼のさしもの天賦の幸運は搖れ始めた。それは丁度、彼の田蟲が彼を幸福の絶頂から引き摺り落すべき醜惡な平民の體臭を、彼の腹から嗅ぎつけたかのやうであつた。

四

千八百十一年、パリーの春は深まつていつた。さうして、ロシアの大平原からは氷が溶けた。或る日、ナポレオンはその勃々たる傲慢な虚榮のままに、いよいよ國民にとつて最も苦痛なロシア遠征を決議せんとして重臣を宮殿に集合した。その夜、軍議の進行するに連れて、思はずもナポレオンの無謀な野心に反對する不吉な論者が續々と現れ出した。此のためナポレオンは、終に遠征の反對者、將軍アクレスと數時間に渉つて論爭を闘はさなければならなかつた。デ

クレスはナポレオンの征戰に次ぐ征戰のため、フランス國の財政の窮乏と人口の減少と、人民の怨嗟と疲れに對する國民の倦怠とを指摘してナポレオンに詰め寄つた。だが、ナポレオンはヨーロツパの平和克復の使命を楯にとつて應じなかつた。デクレスは最後に席を蹴つて立ち上ると、出發する傍のネー將軍に向つて云つた。

「陛下は氣が狂つた。陛下は全フランスを殺すであらう。萬事終つた。ネー將軍よ、さらばである。」

ナポレオンはデクレスが歸ると、憤懣の色を表してひとり自分の寢室へ戻つて來た。だが、彼は此の大遠征の計畫の裏に、絶えず自分のルイザに對する弱い歡心が潛んでゐたのを考へた。殊にそのため部下の諸將と爭はなければならなかつた此の夜の會議の終局を思ふと、彼は腹立たしい淋しさの中で次第にルイザが不快に苦々しくなつて來た。さうして、彼の胴體からは古いジョセフィヌの愛がちらちらと光りを上げた。彼は其の夜、そのまま皇妃ルイザにも逢はず、[illegible]眠りについた。

ナポレオンの寢室では、寒水石の寢臺が、ペルシヤの麑を浮べた錦の緞帳に圍まれて彼の寢顏を掲げてゐた。夜は更けていつた。廣い宮殿の廻廊からは人影が消えて、ただ裸像の彫刻だけが默然と立つてゐた。すると、突然、ナポレオンの腹の上で、彼の太い十本の指が固まつた鍵のやうに動き出した。指は彼の寢衣を掻きむしつた。彼の腹は古地のやうな田蟲を浮べて寢衣の襟の中から現れた。彼の爪は再び迅速な速さで腹の頑癬を掻き始めた。頑癬からは白い腹皮がめくれて來た。さうして、暫くは森閑とした宮殿の中で、腹皮を掻きむしるナポレオンの爪音だけが呟くやうにぼりぼりと聞えてゐた。と、俄に彼の太い眉毛は、全身の苦痛を受け留めて慄へて來た。

—余はナポレオン・ボナパルトだ。余はナポレオン・ボナパルトだ。—

彼は足に纏はる絹の夜具を蹴りつけた。

—余は、余は—

彼は張り切つた綱が切れたやうに、突如として笑ひ出した。だが、忽ち彼の笑聲が鎭まると、彼の腹は、風を入れた袋のやうに波打ち出した。彼はがばと齒を喰ひ縛つた。彼の右手は寢臺の緞帳をひつ摑んだ。緞帳の襞は重い襞を一聲の音の中に集めながら、一齊に環を鳴らして辷り出した。彼は枕を摑んで投げつけた。彼はピラミッドを浮べた寢臺の彫刻へ廣い額を擦りつけた。ナポレオンの汗はピラミッドの斜線の中へにじみ込んだ。緞帳は搖れ續けた。と、彼は寢臺の上に跳ね起きた。すると、再び彼は笑ひ出した。

「余は、余は、何物をも恐れはせぬぞ。余はアルプスを征服した。余はプロシャを撃ち破つた。余はオーストリアを蹂躙した。」だが、又しても絶えずナポレオンの爪はまた[illegible]された機械のやうに腹の頑癬を掻き始めた。彼は寢臺から飛び降りると、床の上へべたりと腹を押しつけた。彼の寢衣の背中に刺繍されたアフガニスタンの金の猛鳥は、彼を鋭い爪で押しつけてゐた。と、見る間に、ナポレオンの口の下で、大理石の響きは彼の苦悶の息のために曇つて來た。彼は腹の下の大理石が温まり始めると、新鮮な水を追ふ魚のやうに、また大理石の新らしい冷たさの上を這ひ廻つた。

丁度その時、鏡のやうな廻廊から、近侍を映して近寄つて來るルイザの桃色の寢衣姿を彼は見た。

彼は起き上ることが出來なかつた。何ぜなら、彼はまだ、ハプスブルグの娘、ルイザに腹の田蟲を見せたことがなかつたから。ルイザは

果然として、皇帝ナポレオン・ボナハルトが射られた獸のやうに床の上に倒れてゐる姿を眺めてゐた。

「陛下。いかがなさいました。」

ボナハルトは自分の傍に蹲み込む妃の體温を身に感じた。

「ルイザ、お前は何しに來た？」

「陛下のお部屋から、激しい呻きが聞えました。」

ルイザはナポレオンの兩脇に手をかけて起さうとした。ナポレオンは周章てて擴つた寢衣の襟をかき合せると起き上つた。

「陛下、いかがなされたのでございます。」

「余は恐ろしい夢を見た。」

「マルメーゾンのジョセフィヌさまのお夢でございませう。」

「いや、余はモローの奴が生き返つた夢を見た。」

と、ナポレオンはいひながら、執拗な痒さのためにまた下身を慄はせた。

「陛下、お寒いのでございますか。」

「余は胸が痛むのだ。」

「侍醫をお呼びいたしませうか。」

「いや、余は寧ろ、お前と一緒に眠れば良い。」

ナポレオンはルイザの肩に手をかけた。ルイザはナポレオンの腕から戰慄を嚙み殺した力強い痙攣を感じながら、二つの鐶のひき千切れた緞帳の方へ近寄つた。そこには常に良人の脱さなかつた胴衣が蹴られたやうに垂れ落ちて縮んでゐた。絹の敷布は寢臺の上から搔き落されて、開いた緞帳の口から濁つた枕と一緒にはみ出てゐた。

ナポレオンは寢臺に腰を下ろすとルイザの細やかな腰に片手をかけた。だが、彼は、今はハプスブルグの娘に自分の腹を隱し通した苦痛な時間が腹立たしくなつて來た。彼は腹部の醜い病態をルイザの眼前に晒したかつた。その高貴をもつて全ヨーロッパに鳴り響いたハプスブルグの女の頭上へ、彼は平民の病を堂々と押しつけてやりたい衝動を感じ出した。——余は一平民の息子である。余はフランスを征服した。余は伊太利を征服した。余は西班牙とプロシャとオーストリアを征服した。余はロシアを蹂躙するであらう。余はイギリスと東洋を蹂躙する。見よ、ハプスブルグの娘——

ナポレオンは抱き剝ぐやうに、寢衣の兩襟をかき擴げた。

ルイザの視線はナポレオンの腹部に落ちた。

ナポレオンの腹は、猛鳥の爪の刺繡の中で、毛を落した犬のやうに汁を浮べて爛れてゐた。

「ルイザ、余と眠れ。」

だが、ルイザはナポレオンの權威に壓迫されてゐたと同樣に、彼の腹の、その刺繡のやうな毒々しい頑癬からも壓迫された。オーストリアの皇女、ハプスブルグの娘は、今初めて平民の醜さを眼前に見たのである。

ナポレオンは彼女の傍へ身を近づけた。ルイザは緞帳の襞を踏みながら、恐怖の眉を顰めて反り返つた。今はナポレオンは妻の表情から敵を感じた。彼は彼女の手首をとつて引き寄せた。

「寄れ、ルイザ。」

「陛下、侍醫をお呼びいたしませう。暫くお待ちなされませ。」

「寄れ。」

彼女は緞帳の襞に踵を突き當て、翻るやうに身を飜らせて、扉間の方へ駈け出した。ナポレオンは明らかに貴族の娘の侮辱を見た。彼は彼の何者よりも高き自尊心を打ち挫かれた。彼は突つ立ち上ると、大理石の鏡面を片影のやうに辷つて行くハプスブルグの娘の後姿を睨んでゐた。

「ルイザ。」と彼は叫んだ。

彼女の青ざめた顔が裸像の彫刻の間から振り返つた。ナポレオンの炯々とした眼は緞帳の奥から輝いてゐた。すると、最早や彼女の足は慄へたまま動けなかつた。ナポレオンは寝衣の襟を掻き合せたままルイザの方へ進んでいつた。彼女はまたナポレオンの眼を見た。縮まり返つた彼の寝衣の一隅から、湿疹の地図のやうな怪物が口を開けて迫々と進んで来た。

「陛下、お待ちなさいませ、陛下。」

彼女は寝衣の胸間を押しつけるやうに両手を上げた。

「陛下、暫くでございます。侍醫をお呼びいたします。」

ナポレオンは妃の腕を攫んだ。彼は黙つて寝臺の方へ引き返さうとした。

「陛下、お放しなされませ。御無理をなされますと、私はウィーンへ帰ります。」

蠟燭の立てた大理石の三面鏡に包まれた光りの中で、ナポレオンとルイザとは明暗を閃かせつつ、格闘し錯綜した。襲ふ色彩の尖影が、屈折しながら鏡面に明滅した。

「陛下、お気が狂はれたのでございます。」

「陛下、お放しなされませ。」

しかし、ナポレオンの腕は彼女の首に絡まりついた。彼女の髪は金色の渦を巻いてきらきらと慄へてゐた。ナポレオンの残忍性は、ルイザが藻掻けば藻掻くほど怒りと共に募進した。彼は片手に彼女の頭髪を縄のやうに巻きつけた。

――逃げよ。余はコルシカの平民の息子である。余はフランスの貴族を滅ぼした。余は全世界の貴族を滅ぼすであらう。逃げよ。ハプスブルグの女。余は高貴と若さを誇る汝の肉體に、平民の病を植ゑつけてやるであらう。――

ルイザはナポレオンに引き摺られてよろめいた。二人の争ひは、トルコの香料の匂ひを馥郁と撒き散らしながら、寝臺の方へ近づいて行つた。緞帳が閉められた。ペルシャの鹿の模様は暫く緞帳の襞の上で、中から突き上げられる度毎に脹れ上つて揺れてゐた。

「陛下、お気をお沈めなさりませ。私はジョセフィヌさまへお告け申すでございませう。」

緞帳の間から逞しい一本の手が延びると、床の上にはみ出てゐた枕を中へ引き摺り込んだ。

「陛下、今宵は静にお休みなされませ。陛下はお狂ひなされたのでございます。」

ペルシャの鹿の模様は静まつた。彫刻の裸像はひとり圓柱の傍で光つた床の上の自身の姿を見詰めてゐた。すると、突然、緋の緞帳の裾から、桃色のルイザが、吹きつけられた花のやうに転がり出した。裳裾が空宙で花開いた。緞帳は静まつた。ルイザは引き裂かれた寝衣の切れ口から露はな肩を出して倒れてゐた。彼女は暫く床の上から起き上らうとしなかつた。掻き乱された彼女の金髪は、波打つたまま大理石の床の上へ投げ出された。

彼女は漸く起き上ると、青ざめた頬を涙で濡らしながら歩き出した。彼女の長い裳裾は、彼女の苦痛な足跡を示しつつ緞帳の下から一襞に繰り出されて曳かれていつた。

ナポレオンの部屋の重々しい緞帳は、そのまま濕つた旗のやうに明方まで動かなかつた。

五

その翌日、ナポレオンは何者の反対をも切り抜けて露西亜遠征の決行を發表した。此の現象は、丁度彼がその前夜、彼自身の平民の腹の田蟲をハプスブルグの娘に見せた失敗を、再び一時も早く取り返さうとしてゐるかのやうに敏活であつた。殊に彼はルイザを娶つてから、彼に皇帝の重さを與へた彼の最も得意とする

外征の手腕を、まだ一度も彼女に見せたことがなかつた。

ナポレオン・ボナパルトの此の大遠征の規模莊嚴の華大さは、彼の全生涯を通じて最も莊觀を極めてゐた。彼は國内の三十萬の青年に動員令に對する準備を命じた。更に健全な國内の壯丁九十萬人を國境と沿海線の守備に充てた。なほその上に、彼はフランス本國から二十萬人を、ライン同盟國から十四萬七千人、伊太利から八萬人を、波蘭とプロシャとオーストリアから十一萬人、これに屬領各地から出さしめた軍隊を合せて七十萬人に、加ふるに豫備隊を合して總數百十萬餘人の軍勢をドレスデンへ集中させた。さうして、ナポレオンは、彼の朝のごとき皇后ルイザを連れてパリーからドレスデンまで出て行つた。ドレスデンではルイザの父のオーストリア皇帝、プロシャ皇帝、同盟各國の最高君主が一團となつて、百十萬餘人の軍隊と共に彼ら二人を出迎へた。

此の古今未曾有の壯觀な動きは、それは丁度、コルシカの一平民ナポレオン・ボナパルトの腹の田蟲を見た一少女、ハプスブルグの娘、ルイザのその田蟲を恐怖せしめんとしてゐる必死の戯れのやうであつた。

さうして、ナポレオンは彼の大軍を、いよいよフリードランドの大原野の中へ進軍させた。

六

ナポレオンの腹の上では、今や田蟲の版圖は徑六寸を越して擴つてゐた。その圭角をなくした圓やかな地圖の輪郭は、長閑な雲のやうに柔軟な線を張つて歪んでゐた。侵略された内部の皮膚は乾燥した白い細粉を全面に漲らせ、荒された茫々たる沙漠のやうな色の中で、僅かに貧しい細毛が處どころ昔の激烈な爭ひを物語りながら枯れかかつて生えてゐた。だが、その版圖の前線一圓に渡つては數千萬の田蟲の列が紫色の塹壕を築いてゐた。塹壕の中には膿を湛へた分泌物が溜つてゐた。そこで田蟲の群團は、脚毛を振りながら、雜然と縱横に重なり合ひ、各々横に分裂しつつ二倍の軍團となつて、腹の濁つた縮毛の森林の中を食ひ破つていつた。

フリードランドの平原では、朝日が昇ると、ナポレオンの右翼の一大軍がニエメン河を横斷してロシアの陣營へ進つていつた。しかし、今や彼らは進軍前の光の一點で、赤く彼らの連隊に反射した黄色のために霧が狂つてゐた。

ナポレオンは河岸の丘の上からそれらの軍兵を眺めてゐた。騎兵と歩兵と砲兵と、服色燦爛たる數十萬の狂人の大軍が林の中から、三色の雲となつて層々と進軍した。砲車の轍の連續は響を立てた河原のやうであつた。朝日に輝いた銃劍の波頭は空中に虹を撒いた。栗毛の馬の平原は狂人を載せてうねりながら、黒い地平線を截つて、潮のやうに沒落へと溢れていつた。

園

一

暫くの間ばかり醫者が出て來た。彼は手をして來たやうな顏をして、彼は醫者の表情に注意すると、不快であつた。醫者は困つたやうな顏をしてゐた。鼻の穴が擴がると此の醫者は嘘をついてゐるのに定つてゐた。

「妹はどうです？」

「お變りはないやうです。」

——彼た——醫者は粗略に彼の手の脈を見た——見ても駄目だ、もう此の患者は優生學に殺された——

「病氣は？」

「今日はありません。」

醫者の襟飾の針に嵌め込んだ圖の中が光つた。ナプリずみから流れたスペクトルは間斷なく彼の視野の上へ、拡がれてゐた。

「熱はひけてをりますね。」

「これからが早いでせう？」

「何時です？」

「いや。」

彼は舌を鳴らしてゐた。が、逆に此の健康者の心臓を破つてみたくなつた。

「死ぬのはいつです。」

醫者は彼を見たまま口を歪めて默つてゐた。

「妹の方が早いでせう？」

醫者は生々しく笑ひ出した。だが、兄と妹の肺臓が壁を隔てて腐つて行く。これは事實だ。二人はその病を死んだ兄から傳染された。

醫者は鼻の穴を擴げながら壁の獵銃を睨んで歸つて行つた。僧侶を呼べと云ふやうに急ぎながら。外では雪の上で黒い鳥が亂れてゐた。海岸の砂の上で燈臺が光り出した。

彼は直ぐ自分の仕事をし續けた。彼の仕事は自分の死後の靈魂が木星の大赤點へ到着する時間の測定であつた。彼は靈魂が一秒に十五萬粁の速度を持つてゐることを信仰した。彼の此の信仰した假説は空氣と死者の靈魂との摩擦から發する輝きの光度から計算された。だが、その自分の靈魂の發出する時日は目前に迫つてゐる。

彼は自分の靈魂が一直線に馳けるものとは思はなかつた。雲と空氣の濛氣差があつた。星雲と月と太陽の引力に屈折した。なほ三十個の木星族の彗星が邪魔をした。今、彼の此の必死の遊戲を苦しめてゐるものは、木星を巡る九つの衛星に反應する靈魂の屈折率である。

「兄さん。」

隣室から妹の弱々しい聲がした。彼は默つてホイルの法則にかじりついた。

$$\therefore \frac{P}{P}\cdot\frac{1}{1+mt}=\frac{Po}{PO}\cdot\frac{1}{1+moto}\cdots\cdots$$

「兄さん。」

$$\therefore \frac{1+Rp}{1+Rpo}\div 1\frac{d}{r}\div 1\cdots\cdots$$

「カーテンを開けてよ。」

「待て。」

$$\therefore \frac{a}{r}1-S-\frac{a}{r^2}dv=-dS\left(\frac{a}{r}\right)^2dr=adS\cdots\cdots$$

「もうお日様が入るでせう。」

彼は顏を上げた。太陽はぼやけながら海の中へ沈り出した。ふと彼は一度その上を歩いてみたくなつた。もう永らく彼は天界のことを考へた、今一度、窓口の葉を落した枯枝を、し折つ

て出て來る氷々しい粘液を指さきに感じてみたい。だが、彼はベッドから降りると獵銃を取り上げた。銃身は掌の中でひやりとした。幻の中を逆樣に一疋の鳥が落ちて來た。テリアがひらりと枕頭を飛び越えた。――

彼は銃口を太陽に向けて狙つてみた。太陽は銃口の先で輝きながらきりきりと廻轉した。一個の異意が光線と等速度をもつて太陽に逆行した。一瞬、二十萬年の倒逆の歴史が銃口の先端へ集合した。

「撃てッ！」

銃口がはたりと落ちた。彼は敷布を摑んで咳き出した。一本の綠線が太陽から閃いた。彼は苦しさうに銃をついて果樹園の方を見た。林檎は間もなくあの枝を撓めるにちがひない。間もなく町子は垣の上で處女を落すにちがひない。そして、彼は戀愛と童貞とを苦々しく輕蔑した。隣室からまた妹の聲が苦々しく聞えて來た。

「婆や。」

「婆や。」

二

沼の暗い、[illegible]の上から鳥が鳴つた。町子の聲だ。彼は煖爐の傍から立ち上つた。馬橇の青い提灯が雪の中を搖れて來た。彼は頁を伏せて外へ出た。雪は彼の眉毛に降りかかつた。果樹園の路へ降りるとテリアが波のやうに馳けて來た。彼は憂鬱に立ち停つて沼から下る青い提灯を眺めてゐた。

橇は動き停つた。幌の中から町子の降りる姿が見えた。灣は彼女の後で黑々と靜まつてゐた。彼は町子から眼を外らした。彼は町子と逢はねばならぬことを後悔した。

テリアは彼の腰に飛びつきながら頭の雪を擦りつけた。

町子は彼の前まで來ると立ち停つたが默つてゐた。遠く埠頭で警羅船が横樣に凍つてゐた。

「風がなくていいわ。」

町子は垂れ下つた毛皮の首卷を肩へ投げた。空虛の橇が港の方へ動き出した。

「どうしてこんな所に立つてらつしやるの。」

「あなたは、どこかへ行くんですか。」

「私、來てはいけなかつたの。」

彼は默つて戸口の方へ歩いた。足の裏で雪が鳴つた。いま町子に逢へば、また彼女と逢ひたくなるのは分つてゐた。町子は戸口の切石の上で雪を拂つてゐた。

「どうしてあんな所に立つていらつしつたの？」

「あなたが來ると困ると思つたんです。」

「そんなに私が恐いの？」

「まアお入りなさい。」

「私、歸つたつていいのよ。」

彼は家の中へ入ると煖爐へ炭を投げ込んだ。町子は椅子に腰を下ろすと圓く蹲んだ彼の背中に手を乘せた。

「ね、私、手紙を昨日も書いたの。だけど、もら出すのがいやになつたの。」

「僕も昨日手紙を書いたんです。」

「まア、どんなお手紙、ね、教へてよ。下さらなかつたんでせう。」

彼の眼の横で町子の[illegible]が[illegible]にしさうに動いてゐた。此の唇よ！ 悲しみとは何か、[illegible]力の不足である。――

「あなたのお手紙、いいお手紙だつたんでせう。私、いやな、手紙嫌ひよ。綺麗な手紙がいいの。私、ちやんとあなたの手紙を[illegible]つてゐるの。」

「もう炭はこれ位でいいでせう？」

「ええ澤山。私、雪で顏がほてつて仕樣がないわ。」

窓を眼がけて飛びつくテリアの爪音が外でした。雪が窓の敷居で凍つてゐた。彼は煖爐の傍へ椅子を引きよせた。

「あなた、悲しさうなお顔ね。」と町子は云つた。

彼は黙つて町子の顔を見た。電燈の光りを横に、彼女の顔は眉をひそめてゐた。

「どうなすつたの。」

「ロウ・スピリットです。」

「あまり考へるからよ。もつと、……私、毎日來てあげたつていいんだけど。」

「あなたは成るたけ自由に愉快にしてらつしやい。」

「まア。」

「いや、皮肉ぢやありません。僕はとても愉快になれないんだから、愉快ぢやなくてはいけません。一體、不愉快な顔が何の功徳になるんです？」

「あなた、一寸、あの音は何んでせう。」

町子は恐さうに首を立てた。

「テリアですよ。」

「さうかしら、私、此の頃何にでもびくびくするのよ。どうしてかうなんでせうね？」

「あまり愉快すぎるんでせう。」

「まア。」

「さう云ふものですよ。女の人が愉快な時は、一寸變つたことがあつても非常に恐く思ふんです。」

「あなたはちつとも私の心持を御存知ないんだわ。私、愉快なことつてちつともなくつてよ。」

「そりやいけない。」

「だつて、さうぢやありませんか。」

「あなたはいくらだつて愉快になれる。」

「あなた、そんなに起きていらしつていいの？」

悪い、と彼は思つた。だが、今寝てはなほ悪い。——

「あなたは僕の所へそんなに來てゐたつていいんですか。」

彼女は煖爐の火へ眼を落した。彼女の母が彼女を食ひとめてゐるのは分つてゐた。彼は胸を突かれた町子の胸の騒ぎを感じたいとは思はなかつた。だが、何もかも今暫くだ。

「あなたは誰かに結婚を迫られてゐるんぢやありませんか。」

「どうしてそんなことを仰言るの？」

「いや、たださう思つただけなんです。」

「どうして分つて？」

「あなたの思つてゐることなら、大抵僕には分ります。」

「でも私、謝絶つたのよ。」

だが、いづれ謝絶出來ないときが來るだらう。次には、處女を落す祝賀である。次に子供だ。彼は壁にかかつた黒々とした天體の圖に眼を向けた。

「私、今夜はもつと面白いお話を聞きたかつたの。」

「あなたにはどんな話が面白いんです？」

「私、あなたがきつと私をいやうにして下さると思つてゐましたの。」

「どうして？」

「あなたは御存知ぢやありませんか。」

「あなたは僕が毎日何を考へてゐるのか知つてゐるんですか。」

「ええ、知つてますわ。」

「僕はね町子さん。云つてみれば、あなたが毎日何を考へていらつしやるのかとそればつかり考へてゐたんです。」

「私もさうよ。」

「だけど僕は、あなたのことを考へるのがもういやなんです。殊に此の頃はなほいやです。」

「ぢや來なければ良かつたのね。」
町子は頬をふくらませた。愛の反語を間違へたのだ。だが、彼はもう饒舌りたくはなかつた。だが、今饒舌らなければ、一つの誤解を殘して死ぬにちがひない。だが、愛しながら愛してはならぬとなると、いづれ一つの誤解は殘るだらう。しかし、愛とは何か。時には反語を說明する努力である。——
「何ぜあなたに逢ふのがいやかと云ふと、町子さん、さう怒つてはいけません。僕はこんな說明をするのももういやなんです。僕の病氣は人を愛してはいけないんです。」
「もう分つてゐますわ。」
「僕は話が自分の病氣に觸れて來ると、いつも後がたまらないんです。もう何千回同じことを考へたか。いくら考へたつていつも考へる範圍は定つてゐるんです。第一あなたのことで、第二にまたあなたのことで、そして最後があなたのことで。僕はもうこれが苦痛だ。どうにもなりはしない。」
急に町子は彼の顔へ觸れて來た。あまり不意だ。彼は冷淡に彼女の首を見詰めてゐた。
「さア、立ち給へ。」
「いや、いや。」
町子の熱を含んだ身體が彼の胸の上で圓々と藻搔き出した。彼は彼女を元の姿勢に返さうとした。椅子が鳴つた。町子の身體はまた彼の胸へ跳ね返つて來た。
「君、傳染る！」
「いや、いや。」
「まア待ち給へ。」
突然彼は片手で町子の細の背中を抱いたまま悲しくなつた。何ぜ、死に行く胸へ處女の身體を投げつけるのか！ 悲劇ではない。嗤つてくれ。腕が慄へる。脣が脣へ。死が乘り移るのだ！——彼は立ち上つた。櫛が落ちた。町子の口へ觸れようとした彼の脣は結ばれたまま慄へてゐた。町子は涙に亂れた數本の頭髮を頰につけてうな垂れた。
嵐はやんだ。と彼は思つた。また一つの處女と童貞とは依然と平行線の上を駈けて行く。恐らく二線は交はることはないだらう。彼はその交はる無限の極の輻射點を考へた。もしも愛がそのときに生れるものであるならば、今は潔く死ぬが良い。肉體とは愛への二つの平行線の距離である。靈魂とは愛への輻射點への運行だ。——彼は平靜に歸つて來た。彼は閉つた窓の硝子戸を開けた。凍つた雪の塊りが戸の上から落ちて來た。冷たい空氣が部屋の中へ流れ込んだ。黒い人影が果樹園の雪の中を歩いてゐた。彼は沼の上の空を見た。夜は盛り上つた雪線の上で茫々としてゐた。彼は夜の高さを考へた。そして、自分の高さを考へて死を待つた。
「町子さん。あなたは僕にお伽話をきかしてくれなければいけません。僕は今はもう非常にあれが好きなんです。」
「私、寒くなりましたから御免なさいな。」
町子は首卷を肩へかけた。
「今夜はいつもより靜ですね。梢がちつとも鳴りませんよ。」
町子は默つて寒さに身を慄はせた。彼は窓の明るみの太さに出て行く湯氣の塊りを眺めてゐた。町子は櫛を拾つて頭へ差した。
「あのう、私、もうこれから來ない方がいいんでせうか？」
彼は默つてゐた。
「私、分らなくなりましたわ。」
「僕にさう云ふことをきくのはいけませんね。」
「でも。——」
「お母さんの御言つたやうになされば、それが一番いいと僕は思つてゐます。」

町子は暫く、唇をひき締めて默つてゐた。と、急に彼女は手に首卷を卷きつけて立ち上つた。

「あなたは怒つてらつしやるんですか。」と彼は云つた。

町子はドアーの傍まで行くと彼の方を見た。眼が涙で光つてゐた。

「さやうなら。」

「町子さん、悪い意味にとつてはいけません。僕は決して悪いつもりで云つたのぢやありません。」

彼は町子の方へ近寄つた。町子はドアーの外へ出て行つた。彼は彼女の後を追はうとした。が、やめた。——生ける者を追つてはならぬ——

彼はハンドルに片手をかけて町子の後姿を見送つてゐた。

彼女は雪の中をうな垂れながら、黒く樹道の方へ曲つて行つた。

——俺は愛してゐるんだ！

——俺は逢つてはならんのだ！

——俺の眼は曇つて行く！

彼は入口の扉から雪の上に倒れてゐる光線へ眼を落した。——人間が一つ生と死の間へ落された。——だが、愛しないと云ふことが、常に、最も愛すると云ふことに變るのだ。それが愛の最高の理論である。——

彼は戸を閉めると力なく煖爐の前へ戻つて來た。

すると、ふと彼は亡兄の彫りつけていつたいつもの慘酷な壁の羅甸語が眼についた。

Quis veni in horto nostro ?

我らが園に入り來る者は誰ぞ、（と彼は讀んだ。今、その毒園に押し籠められてゐる者は二人である。二人は兄から毒を傳染された。それに！　彼は兄のその嘲笑的な壁の文字にまた新らしく胸を突き刺された。彼は忘れてゐた憎惡を再び兄の靈魂へ向つて投げかけた。

「汝の選んだ者は、汝の弟と妹だ！」

彼は兄に飛びかかるやうにナイフを持つて、壁へ自分の怨恨を彫りつけようとした。だが、彼は自分達に傳染されて直ぐ次ぎに閉ぢ込められる者の心を考へた。——今に來る。今に此の壁と向つて日々同じことを考へる者があるにちがひない。そして、彼らは、軈て自分達のために殺されて行くにちがひない。——

彼はまた冷靜に落ちつき出した。彼はそれらの者に後から來る運ばれた不幸な者達のために、ソクラテスの穩かな言葉を書き出した。自分の心をなだめるやうに。生前の知識を壁の上で兄と二人で競ひながら。

Si morten timenus, semper aligui terror nobis impendent.

彼は壁の兄と自分の言葉とを詳細に比較した。すると、兄の動詞の使用法が間違つてゐるのを發見した。

「兄よ、お前の古典は永久に意味が通じないで濟むだらう。俺はお前の嘲笑を默殺する。」

三

雪は朝日に輝いてゐた。沼の彼方で銃が鳴つた。馬は朝日を割つて雪の上を驅けて來た。

彼は微風を避けて家の前へ出た。彼は考へることが何もなかつた。心はほのぼのとしてゐた。灣の上では白帆が風を孕んでゐた。鴎は低く海流に戲れてゐた。漁夫は眼下で賑はひ出した。一服の煙草が果樹園の方から匂つて來た。

「お早うございます。」

「お早うございます。」

健康な若者が朝の料理を運んで行つた。水々しい緑の若菜が包んだ雪袖の下へ僅かに隱れていつた。

彼は壁の傍から道へ出た。一人の老人が道の眞中に立ち停つて不思議さうに彼の家の方を見つめてゐた。ふと、彼は妹が家の中で默つて死んでゐるやうな氣持がした。朝起きてからまだ彼は妹の容子を見なかつた。窓が閉つてゐる。彼は直ぐ家の方へ引き返した。郵便物が投げ込まれた。妹は隣室の壁の中で眠つてゐた。

「良し。」

彼は足音を忍ばせて窓を開けた。抜け毛が明るくなつた部屋の隅で浮き上つた。婆やが跛足をひきながら沼の方へ血痰を捨てに行くのが見えた。林檎の細枝が密く彼女の背中の上で茂つてゐた。彼は痩せた妹の部屋へ華やかなプリズムを持つて來た。（それから花を取り寄せよう。）少女の眠さめた寝臺の上で七色のスペクトルが花開いた。赤、橙、黄、緑、鼻は鋭い青藍色の雌蕊となつて高まつた。

妹は眼を醒した。醒めた此の造花は默つて部屋の中を見廻した。

「兄さん、私、夕べ死ななくつて？」

彼は默つて妹の瞳を見た。——もう遠くはない！——

「誰だかコツコツ、コツコツ窓を叩くのよ。」

「本當かね？」

「ええ、そしたらお爺さんがゐて、私に、お前死んだつて云ふのよ。私、死にやしないつて云ふのに、死んだんだ死んだんだつて云ふの。」

「夢を見たんだよ。」

「さうかしら。」

「夢なんだよ。何んでもないよ。」

彼は自分の部屋へ戻つて來た。

「あれは危い。もう駄目だ！」

しかし、彼はもう何事も考へたくはなかつた。

「何んでもないんだ。何んでもないんだ。」

一つの彼の小さな頭腦の組織の中を、十三萬の宇宙の大群が悠々と静な魚族のやうに廻轉した。その大宇宙の極みは何處にあるのか？そのまた大宇宙の極みは何處にあるのか？彼は涙がにじんで來た。

「神よ、御名を明し給へ！」

テリアはひとり断崖の上で跳ねてゐた。燈臺のガラスの光りが彼の眼を貫いた。彼は郵便物を持つて沼の方へ行かうとした。すると、老人はまだ彼の家の方を鳥のやうに眺めて立つてゐた。彼が近づくと老人は不意に笑ひ出した。

「あれは避病院でございますか。」

狂人だ。斬新な生活が始つてゐる。遠く子供の歡聲が窪地の雪の中から上つて來た。赤い船が半島の横へ現れた。

彼は郵便物の一つを切つた。都會の變名したKからだ。Kは彼の親しいソーシャリストである。

——Hは投獄された。

——Tはロシアへ逃亡した。

——Sは行方不明。

——Mは死亡。

——Uは殺された。

彼は手紙を懐へ押し込んだ。周章てゐた。俺の料理されるのも、もう直ぐだ！　何んでもない、何んでもない。——

沼は雪の中で靜まつてゐた。枯れ折れた蘆の間から數本の芽が鋭く空を狙つてゐた。一羽の鳥が静に雪の上へ降りた。婆やが鍋を抱いて水際から戻つて來た。

「お早うございます。もう御飯の用意は出來てをりますでございます。」

「ああ。」

彼は野氣の立つた爽々しい朝の食卓の前で、健康さうに今は靜に箸を取つてみたくなつた。

[illegible]はまた湯婆を抱きながら跛足をひいて雪の坂路を下つていつた。

四

月曜の夜が廻つて来た。婦女の月経が亂れて来た。濱に打ち寄せる波足が狂ひ出した。その夜、彼の妹の靈魂が速力を出し始めた。

「兄さん、兄さん。」

「ここにゐるぞ！」

「兄さん。」

「よしッ、ここだ。」

「兄さん……」

「兄さん……」

「兄さん。」

…………

…………

街へ出るトンネル

一

計介は通りすがりに自分の家へ寄つた。妹はダイナマイトを積み上げた箱の傍で、コッソリ鏡を覗いてゐた。彼は庭に立つたまま妹が誰を思つてゐるのかと一寸考へた。

「あら、兄さん、街へいらつしつたんぢやなかつたの。」

「うむ。」

「あのね、私、今日ラ・パロマを彈いたのよ。」

彼は默つてまた表へ出ると、峽谷の片側にかかつた枕木の上を渡り出した。ふと彼はそこから谷の下へ墜落したトロッコの有様を眼に浮べた。滿載された人々の身體が一齊に口を開け、岩角に衝突しながら淵の中へ突き刺さるやうに落ち込んでいつた。だが、彼には人々の落ちる赤い口だけが、蝶々のやうにいつまでも眼に映つた。——

彼はいつものトンネルの入口へ來かかつた時、お熊は岩角へ太股を擦りつけて足の裏の泥を拭いてゐた。計介は羊齒の叢の中から、新らしいお熊の股と岩とを眺めてゐた。暫くすると、お熊は歪んだトンネルの口から穴の中を覗きながら、にやりと誰かに腐つたやうな微笑を投げかけた。と、代りにころころ石ころが轉んで來た。

計介はポケットから卷尺を出してお熊の傍へ出ていつた。彼はこれからトンネルの中へ入つて今日の進行を計らなければならなかつた。だが、それが彼には此の頃は無氣味であつた。彼の父が穴の中で働いてゐる坑夫達の單價を上げずに頑張り出してからは、計介には誰も彼もが自分に向つて絶えず飛びかからうとしてゐるやうに思はれた。彼は右手のポケットに實彈を込めたピストルを入れてゐた。彼は恐怖を感じる毎に、そのピストルの口徑の數字を呪文のやうに呟くのだ。

「何アに、どんと一發さ。殺す奴は殺すがいい。」

しかし、彼はいつか自分達一家の者は、自分も父親も妹も、墜落したトロッコ同樣峽谷の淵の中へ投げ込まれるにちがひないと思つてゐた。實はあのトロッコと一緒に墜落した人々も、計介一家の利益を上げる過程への犧牲だと云へば云へた。だが、彼にして見れば、さうは簡單に社會學の抽斗を開けて見る氣はしなかつた。それは峽谷の河口で發展する港が悪いのだ。港の電力が此の水道工事の作業を勝手に必要としてゐるからだと彼は思つた。また彼は自分達の一家に迫つてゐる今の恐怖さへ、實は港の發展に與へられてゐる一つの犧牲だと思つてゐた。

「とにかく俺は知るものか。あの下の港に訊くが良い。あ奴はひとり何もかも飲み込んでゐる怪物なんだ。」

そして彼はただ峽谷の横腹に掘られてゐるトンネルが、日々幾尺の岩石をぶち拔いて港の口中へ進みつつあるかを尋常に計つてゐればそれで良いのだと思つた。

「若旦那、もう直き晝になりますぜ。」

お熊は腰を振りながら、空虚のトロッコを穴の中へ押し始めた。濃霧は河口から噴き上げて來た。峽谷の黒い岩肌が潮のやうに湧き出した。すると、濃霧は岩を溶かした峽谷の水の上

を、攻め込むやうに唸りながら昇つて來た。

二

　計介は冷たい岩を探りながら穴の奥へ入つて行つた。水が雫のやうに首筋へ滴つた。時々奥の方でカンテラの光りが揺めくと、突如として行手の凹つた岩肌が、峻烈の陰影を浮べて明滅した。壓縮された空氣がシャベルの音と一緒に、突き衝つて戻つて來た。

　奥では壁に引つ掛かつたカンテラの光りの中で、二人の男がダイナマイトを差し込む穴を掘つてゐた。一人が鏨を握りながら、鐵槌を打ち下ろす。すると、一人が掛け聲かけて鐵槌を振り上げる。此のリズムに調子を打つて、二人の尻に下つてゐる腰の[illegible]がぺたぺたと二人の尻を叩いてゐた。一度叩く度毎に、二人の打ち込む鏨は、奥へ、奥へ、その奥の口を狙つて進んで行く。

――「アー、お前さまと昇ろと穴の中。」

――「そら來た。」

――「お陽さま入つてら穴の中。」

――「よいしよ。」

――「アー、くらくら廻つて目が眩れた。」

――「どつこいな。」

　鏨が止むと、二人の男は鏨と槌とを投げ出して計介の方を振り返つた。彼は卷尺の端を穴の先端へ當てさせ、その月初めの進行起點まで卷尺を曳き延ばした。

「十六尺三寸。」と彼は目盛を讀み上げた。

「すると、どうなりますかね？」

「九寸三分の進行だ。」

「石が悪いんだ。」と默つてゐた男が不平さうに横から云つた。

　計介は卷尺を卷きながらも男達の様子に絶えず注意をはらつてゐた。お熊は兩足をふん張つて轉げてゐる石塊を胸に抱き上げた。と、どつとトロ箱の中へ投げ込んだ。計介の卷いてゐる鋼鐵の卷尺だけは、岩を擦つてささやかな流れのやうな物優しい音を立ててゐた。

「お熊、今夜は誰と寝る番ぢや？」と坐つた男が云つた。

「お前とぢや。」

　と、お熊は[illegible]と、「そら來た。」と掛け聲もろともまた一つの岩塊を、男を抱くやうに抱き上げた。

　男はにやにや笑ひながら蠟燭のやうなダイナマイトを横に銜へた。ダイナマイトの影は、横に大きく彼の口を斬り下げて怒り出した。彼は雷管へ導火線を差し嵌めると、それをまた銜へてゐるダイナマイトの中へ突き込んだ。

「おい、お熊、うろうろしてゐると、どてつ腹へ風穴通してやるぞ。」

　計介はその男の言葉が自分に向つて投げつけられたのだと云ふこと位は分つてゐた。彼は出口の方へ歩き出した。と、彼の後で、もうダイナマイトの導火線が火花を吹き出しながら、岩の中へ、燃え込んでゐた。後から、人影が岩壁の上へ折れ重なつたまま殺到して來た。彼はピストルを構へて出口の方へ駆け出した。

三

　計介は九號を濟ますと十號の穴へ來た。穴は峡谷の一方の岩壁に添つて二十二ヶ所に掘られてゐた。此の二十二ヶ所の穴は全部一里に亘る街までのトンネルを、やがて一直線に連結しようとする小口の穴である。

　十號の穴の中では、白衣を着た三人の囚人が、水の中に浸つたまま黙々として岩を掘つてゐた。計介はその黒い岩と對面しながら、金槌のやうに何事も考へてゐなさうな彼らを後ろから見てゐると、憂鬱になつて來た。此れは、自分に世の中で最も同情されるべき存在だ。その

絶えず黙つて見てゐるものは黒色である。その黒色の中で蓬々と鳥のやうに髪を延ばした彼等は、一體何事を考へてゐるのか、と彼は考へた。

「しかし、俺の方は危いんだ。俺は殺されようとしてゐる。俺は殺されるべき理窟を發見されたのだ。其の理窟が俺を絶えず追つ驅け廻してゐるではないか。」

彼は進行を計り終ると直ぐ十號の穴から外へ出て來た。――俺を守つてくれるものは何もない。ただ一本、引金を引く俺の人差指だけだ。これだ。」と彼は人差指を出して見た。

彼は此の危險な仕事をしてゐる自分の家から逃げ出すことが出來なかつた。もし彼が此の危險の中に踏みとまつてゐるなら父と妹はそれだけ助かるにちがひないのだ。いつか前に、彼等は坑夫達の須川が代表となつて、父の所へ要求を持ち出しに來た五六回目の夜であつた。謙介はその席で父に坑夫達の要求のまま單價を上げてはどうかと勧めたことがあつた。すると父はいきなり彼の記入簿を開けて彼に云つた。

「わしは資本家ぢやないのだ。資本家は市役所だ。あれが資本家だ。わしの入札して落した額は、どんなことがあらうとも絶對に動かすことが出來ないんだ。もし、坑夫達の要求の通り單價の一割を値上げとする。すると、良いか、わしの利益は一日平均たつた六十圓だ。」

「そんなにあればいいですな。」と彼は云つた。

「うむ、良い。しかし、お前はまだこれから物價が騰ると云ふことを考へてゐないのだ。」

「物價が騰れば坑夫達の諸式も高くなるでせう。さうしたらなほ單價を上げてやらなきア。」

「それは誰でもさう思ふ。それでわしは困るのだ。米や味噌が上ると單價を上げよと云つて來る。もしわしが坑夫の單價を上げるとする。するとわしの損はそれだけぢや濟まないのだ。それだけの損ならわしは我慢するのだ。所が、わしの方でわしの家の味噌や醬油である火薬や鐵やコンクリートや煉瓦の高くなる損まで引き受けねばならんのだ。此の損はわしはどこへも持つて行き場がないのだよ。もし持つて行き場があるなら、上げよと云ふ坑夫の單價を、こちらから下げよと云ふより仕方がない。しかし、いまわしが上げる代りに下げたとする。すると、彼等は云はないでも分るだらう。所が、いま物價がずんずん上つてゐる。まだまだ上るにちがひないのだ。」

「ぢや、結局工事を投げ出すより仕方がないぢやないですか。」と彼は云つた。

「うむ、そりや物價次第だ。」と父は答へた。

「物價がトンネルを掘つてゐると云ふんですか。」

「さうだよさうだよ。しかし、わしは一つ鑿岩機を買はうかと思つてゐる。これを一臺買へば三十人の坑夫が要らなくなる。いくら物價が高くなつても機械は單價を上げてくれとは云はないからの。」

「しかし、そんなことをするなら、もつと初めからしなければ。」

「そこだて、だから坑夫の知らない間にこつそり買ふんだ。知らして了へば何をし出すかしれないからな。」

謙介はいま彼の家で秘密にその鑿岩機の註文してあることを思ひ出した。一臺の鑿岩機が三十人の人間の愛慾と食慾とを奪ひ上げる。その結果は？ 彼はそれを想像することが出來なかつた。しかも事實は日々その結果の方へ進んでゐる。彼は地下の土を歩きながら、絶えず大きな賭博を打つてゐるやうな氣がして來た。

四

　訃介は首筋へ流れ込む霧を防ぐために上着の襟を立てて歩いた。石竹の花を全身に咲かせた岩層が霧の中に斑らを打つて延び出てゐた。

　譬へば今五人の男が不意に凶器を持つてあの岩の角から現れたとする。すると、俺はどうすれば良いか。――彼はその岩層の向ふに折れ込んでゐる霧に埋まつた見えない路が不安になつた。路はトロツコのレールと人道とを傭れた幅三尺程の崖である。崖の上には十数丈の絶壁で足の下は數百尺の斷崖だ。ここで挾み打ちに合はされれば一挺のピストルで間に合ふか。

　これが彼のいつもの最後の問題である。

　彼はその最後のときの練習のために、石竹の花の描いた白い曲線の下部を狙つてピストルを差し向ける姿勢をとりながら、岩角の先端へ身を現した。すると、茫々とした霧の中から、ダイナマイトの箱が徐々に押されながら浮んで来た。それは街から今日、訃介の家へ着く筈の荷物であつた。霧には此の霧のことは分らない妹が一人家の中で彼を待つてゐる筈だと彼は思ひ出した。

　彼は暫くそこに立つてゐてから霧のやうにダイナマイトを押して来る二人の人夫の後について引き返した。人夫は訃介の家の前まで来るとトロ箱から荷を降ろして擔ぎ出した。ダイナマイトは二人の肩の上に並んだまま、岩石の間を黙々として動いていつた。二層の莊嚴な峽谷の胸はその小さな物體を見下ろして靜まつてゐた。だが、今はダイナマイトは黙つてゐた。

　訃介が勝手口から草履りして家へ入ると、妹は周章てて袂の中へ紙片を押し込んだ。

「一人かい？」

「ええ」

「誰か来たか？」

「いいえ。」

「父さんは？」

「まだよ。」

　妹は彼に背を向けて答へると青くなつたまま直ぐヴイオリンを彈き始めた。ふと彼はいま妹が誰かに忍び込まれて接吻された所ではないかと思つた。彼は立つたまま變化する妹の耳の色を見詰めてゐた。

　階へ上るヴイオリンの音に迎へられてダイナマイトが入つて来た。彼は人夫の差し出した傳票に印を済ますと記入簿へ書き入れた。

　一雷管三百個、導火線三百條、ダイナマイト三百本、十三號へは十五個行き過ぎ。一

　此の行き過ぎ十五個のダイナマイトの用途は訃介にとつて疑問であつた。凡そ一日の工事の進行度合とダイナマイトの使用量とは比例すべき原則である。しかるに十三號の進行度合は、その部面の岩質の硬度と比較してさへも、ダイナマイトの使用量は多過ぎる。此のダイナマイト使用統計表に狂ひの現れた部分には、常に何らかの生活的な興奮が、密かにそのメートルを上げてゐると見らるべき素質があつた。

　訃介は、一瀧川飯場、十三號と云ふ個所に警戒の線を引いた。ここの飯場には確に前から無用のダイナマイトを蓄積してゐる者が潜んでゐた。少なくとも今迄の統計表に現れてゐる限りに於ては、百本のダイナマイトが黙つて誰かの懐中に隠れたままうろついてゐる。訃介は自分を狙つてどこからともなく突いてゐるその百本のダイナマイトの無氣味な沈黙を嗅ぎつけると寒くなつた。

　しかし、間もなく妹のヴイオリンは霧の中で[illegible]を弾き出した。すると、忽ち行方不明の百本のダイナマイトは彼の頭の中で踊り出した。彼は浮き立つた心を耳に集めて拍子をとつた。――誰が喜びよりも苦しみを欲するものか――歌へ、歌へ――彼は不意に街の

お柳を攫へて、こつそりキスしたときの煌く欲情を思ひ出した。

——あのお柳は今頃は、港の窓から火の點いた船を算へてゐるにちがひない。——

白眼の下男が火のつかぬランプをさげて、俵の間からむつくりと入つて來た。

霧は峽谷の中で渦巻きながら雨になり出した、

五

山蟻は截り倒された高木の幹の上を急がしさうに往つたり來たりしてゐた。計介は更らに仲間の死骸を銜へてよろめいてゐる一匹の蟻を見詰めてゐた。

そのとき、濡れた崖の横腹から一臺のトロッコが現れると、雨の中を傾いて彼の方へ駈け降りて來た。ブレーキを持つて突つ立つてゐる坑夫は顔面に筋を立てて叫び出した。

「十四號で、やられたぞオ。」

計介は其の方へ駈け出してみた。壞れかかつたレールの下を疾走して來るトロッコの上に、血にまみれた若者が合羽を冠つて倒れてゐた。

「やられた、やられた。」

負傷者を乘せたトロッコは彼の前で一度と喚くと、颯爽としてまた岩蔭へ辷り込んだ。

後では峽谷の風景が雨に濡れたまま蕭條と靜まつてゐた。遠くの岩角を墨汁のやうに浮き上らせた霧の中から、弱々しい蟲の聲が聞えて來た。

計介は此の靜まつた峽谷の中を、街の病院まで血をつけて駈け拔けて行くその一隊の狂暴な空氣が恐ろしかつた。

それは丁度計介一家に反感を持つてゐる峽谷の人々の臉へ、火をつけながら駈け下つてゐるやうなものだつた。彼は直ぐそのまま、火事場へ飛込む氣持で、現場の十四號の隧道へ行つてみた。

十四號の入口からは、物々しい顔をした坑夫達がトロッコを押して崖の方へ進んで來た。トロッコの上には、鋭い角を並べた兇惡な相貌の岩塊が、一つ傲然と乘つてゐた。

「これが犯人だな。」

「こいつですよ。こいつがビッと天井から來やがつたんですサ。筋が五六枚折れましたかな。あの男は新米ですからハッパの後へ飛び込んでいつたんですよ。馬鹿な。」

十四號の飯場頭は計介を見ると、血のにじんだ岩塊の頭を足で踏みつけながら云つた。穴の中ではダイナマイトをかけた直後が一番危險なときである。計介には隙間の弛んだ岩穴の中へ輕卒に飛び込んでいつたその男の樣子が眼に見えた。

「保ちさうかね。」

「いや、街へ行きつくまでに參りますア。一體ア、後から行つたんだが、アッと驚かすと、もう此の石をひつ抱いてやがつた。」と一人が云つた。

負傷者の友人の一人は彼の言ひ方が計介に話しかけるのを腹立たしさうに舌打した。男は青ざめた顔を怒らせてその岩塊に手をかけた。

「おい抛り込め。」

「よし來た。」

忽ち數人の手の中で、黒い岩塊は血潮を噴した兇賊のやうに、悠々と崖の端へ顔を出した。

「よいか、やるぞ。」

「いち、にい、さん。」

「こん畜生め。」と聲が揃つた。

岩塊は一叢の羊齒の葉を突き破つて轉がると、がッと唸つて崖の中途で飛び上つた。と、あたりの岩片を蹴りつけながら、猛烈な生物のやうに渦の中へ飛び込んだ。

離方六すむと計介は坑夫達が一齊に自分の方を見たと思つた。自分を投げ込んだ彼らの手際を示すかのやうに、

――こら、この通り。と彼も彼もの顔が嘲笑してゐた。彼は發作的に自暴な笑ひを噴き出した。

彼はふと闇の中途を見ると、雨に濡れた羊歯の葉が破れたまま、未だしなやかに揺れながら雨に打たれてゐた。

――よし、俺もやつてくれ。

彼はいきなり彼らに背を向けると、眞つ先に立つて、斷崖の先端の描いた線の上を、怒りに屹立した一本の棒のやうに歩き出した。彼の後から坑夫達は默つて來た。彼の背中は後に潜んだ沈默に吸ひ込まれて縮まりながら、前へ前へと一團の沈默を引き摺つて前進した。瞬間、彼は自分の兩眼で、自分の肉體に妨げられて後を同時に見ることが出來ないと云ふ人間の形態を痛感した。

彼は坑夫達からひとり離れて安全になると、初めて恐怖のために疲れてゐる自分の心臟を感じた。此の恐怖に自分の收縮してゐる一個の心臟の血脈は、峡谷の中を進んでゐるトンネルの前進にどれほどの影響を與へて行くか、それを思ふと、彼は自分の恐怖の進行の形が俄かに面白くなつて來た。自分の心臟から恐怖を要求することは、トンネルの意志なのだ。トンネルは自身の成長する養分として、その横たへた身體に附着して生活してゐる人間の群れから、絶えず適宜の感情の食物を吸收する。さうして、彼が街まで延びたとき、彼は二倍の光度をもつて燦然と輝くのだ――

――しかし、それがどうしたんだ。

計介はいつのまにか雨に濡れて鼬のやうにびしよびしよになつてゐた。彼は學生時代に習つた地形學の原論をふと思ひ出して呟いた。

――地表に働く勢力の最後の目的は、總て、太陽の均平作用である。

六

峡谷は日の下で鉛の山のやうに光つてゐた。

計介は十三號の飯場からお熊を誘ひ出さうと計畫した。彼はもう直ぐ街から掘鑿する筈の峯岩層が、坑夫達に嗅ぎつけられてゐるかどうかを知りたかつたからである。

彼は飯場へ行くと、水車にかかつた筧の水を跨いで裏口から覗いてみた。すると、お熊は、立ち上つた男の腕へ猛鳥のやうに飛びかかつた。

「ぶち斷るぞ。」と男は叫んだ。

男はお熊の首へ手を卷くと、ぶるぶる左右に搖れ出した。お熊は男の片足をひつかかへて押しつけた。と、男の頭はどつと後の藁叢の中へ突き刺さつた。

計介は此の二人の格鬪を別に珍らしいとも思はなかつた。これはいつでも起るお熊と男との痴情の果だ。

男は藁の中へ頭を突き込んだまま、逞しい片足を觸角のやうに振り廻して呻いてゐた。その暇にお熊は素早く表の方へ飛び出した。彼女は月に誘ひ出された猫のやうに、どこかの岩蔭に隱れてゐる新らしい男の所へ行くのである。

計介は小屋の横へ廻つて、お熊の行く先きを眺めてゐた。彼女は太股に月の光りを踊らせながら、勇ましく枕木の上を驅けていつた。暫くすると彼女の後からビール壜をひつさげた男が靜まり返つた殺氣を含んですたすたと驅けて來た。

丁度お熊が岩角の先端を廻らうとしたときである。「待てツ。」と男は叫ぶと、お熊を目がけてビール壜を投げつけた。壜は一閃、岩角に當つて碎けると、月の破片のやうにばらばらと飛

の下へ散つていつた。
　計介はお熊の行方を追跡することを斷念した。今數分の後、岩蔭で野蠻な喃々の聲が二つ洩れれば濟みさうに思はれたからだつた。彼は暫く筧の傍の苔の上に腰を下ろしてお熊の歸るのを待つてゐた。
　隣りの小屋の湯氣に滿ちた裏窓からは、滿面に腫物を咲かせた坑夫の子の寢顔が菌のやうに見えてゐた。その顔の横からは、怠惰な足が一本鬚を生やして延びて出てゐた。その足と寢顔の上で、時々大きな母親の影が湯氣と一緒に搖れてゐた。
　その横の飯場頭の部屋の中では、渡り者の坑夫達が轉がりながら放埒な殺人法を物語つてゐるのに相違なかつた。ここの頭の瀧川はもう人を三人殺して來た男である。人を一人殺す度に彼は部下の者から尊敬された。さうして、彼はまたより部下の信頼を得んがために計介の父の所へ坑夫達の代表となつて要求を持ち込んで來るのが例であつた。その度、彼は計介の父が利益を得てゐる歩合よりも、時にはより多く坑夫達の割前を刎ねてゐた。實はトンネルが一日街へ近づけば、その近づいた程度に應じた金額を計介の父から受けとるものは、坑夫達ではなくして此の飯場を持つた飯場頭である。彼はその金の中から、坑夫達の食費と、頭として尊敬された滿足な代償とを引きとつた殘金を、單價に從つて下の坑夫達に與へるのだ。さうして、坑夫達は、ただ此の頭の命のままに、何らの不平をも赦されず決定された日給額をもつて、日々岩石と格闘を續けて行く。もし彼らが一尺トンネルを街へ向つて押し出せば、その上へ落ち込んで來る街からの利得は、計介の父と飯場頭とが、ただ無爲の報酬として簡潔に取り去つて了ふだけなのだ。此のため、トンネルの進行と共に起る爭ひは常に計介の父と飯場頭とのあひだに於て續けられた。飯場頭は部下の坑夫達の暴力を背景にもつて計介の父を壓迫した。
　しかし、計介の父は、ただ飯場頭を選定し得る權力と、所得を誤魔化し得る地位以外の何物も持つてゐなかつた。
　計介は飯場頭の中でも特に瀧川にもつとも反感を感じてゐた。瀧川は部下の坑夫達を壓迫するために用ひる力さへ、彼の殺人して來た頭數と、その屏風のやうな肩とであつた。

七

　計介はふと瀧川飯場の坑夫達が隱してゐるダイナマイトのことを思ひ出すと、小屋の外から藁壁の裾を手探つて歩いてみた。彼の影の移動につれて、踏まれる菌の花の中でキリギリスが鳴きやんだ。
　彼が足音を忍ばせて月光の中から軒蔭へ廻らうとしたときである。不意に軒の闇の中で二人の男女がゆれ出した。計介は小川を飛び越すやうに、小屋と小屋との間をひらりと飛んだ。だが、飛んだ瞬間、彼は眼の一角で、濃艶な瀧川の妻の亂れた赤い姿を見てとつた。
　計介は瀧川がゐないと知ると、表へ廻つて彼の小屋へいつてみた。中には坑夫が一人火の消えたバットを銜へたまま眠つてゐた。彼は今すぐにも入つて來るにちがひない瀧川の妻の亂れた樣子を眺めるのに興味をもつた。彼は藁の上に腰を下ろして部屋の中を見廻した。此の部屋の中のどこかにダイナマイトが隱れてゐる。それを思ふと、彼は今此の家に火を點けて、次から次へと正直に自分の所在を爆發させて行くダイナマイトの顔が見たくなつた。
「あーら、いらつしやい。」
　暫くすると瀧川の妻のお品が入つて來た。
「今晩は。泥棒がしたくなつたので坐り込んでゐるんだよ。誰もゐないぢやないか。」

「ええ、坑夫が二人逃げたので皆が追つかけていきましたの。」
「いつ逃げたんだ。」
「さられ、今頃は崖から抛り込まれてゐる頃よ。」
良人の留守を適用しても此の若い女は湯から上つたやうにとぼけてゐた。
「二人逃げたとすると、三百圓の損か。」
「さうよ、でも、こんな處から逃げないものは馬鹿だわね。私、あの二人の逃げるのはちやんと前から知つてゐたの。」彼女は聲を潛めて囁くやうに彼に云つた。
「ちぇ、默つてゐたのはをかしいぞ。」
「だつて、私だつて逃げたいのよ。」
計介は全く思ひがけないお品の言葉に默つて了つた。何故自分にさう云ふことを彼女は言ひ出したのか、それが彼には分らなかつた。
「僕は瀧川が嫌ひかね。」
「ええ、私、瞞されて來たんですもの。」
「ぢや、逃げるんだ。」
「逃げるなら、こんなときだわね。」
「瀧川と一緒になつてどれほどになるんかね。」
「半年ほどよ。でも木山さん、私、逃げたいんだけど。」

そこまで云ふと、急にお品はうなだれて默り出した。彼は一寸釣られて此の峽谷から逃げ出す方法を考へた。
「でも、私が逃げたら、瀧川はきつと私を殺して了つてよ。」
「そりや分らないな、しかし、あんな男だからそのうちにまた他の女を見つけるさ。」
計介はふとその話とは全く別の、瀧川が自分達一家の者にどんな計畫を立ててゐるかと云ふことを知りたくなつた。
「瀧川は俺の親父のことなんか何んとか、云つてゐなかつたかね。」
「云つてゐたわ。怒つてゐてよ。」
「そりや怒る。」
「あなたのお父さんが單價を上げないものだから、私、まだ着物も買つて貰へないの。」
「實は、俺もこの山にはもうゐたくないんだが、どうも思ふやうに行かなくて。」
「あなたなんかいいぢやないの。お金はあるし、身體はきくし。私なんか一寸思ふやうに動くと殺されるんだから。」
「そんな風に見えるかね。俺だつていつ殺されるか知れたものぢやないんだが。」
「どうしてさ?」

「現に瀧川なんか、俺の親父を敵のやうに思つてゐるんだからね。」
彼女は暫く默つてゐてから眠つてゐる男の方を窺つた。
「あの男も、もう直きに逃げ出してよ。そりや氣の毒なほど瀧川になぐられ通しなの。」
「とにかく、お品さんや坑夫はただ上手に逃げればそれでいいんだ。しかし、俺はさうはいかない。第一俺なんか一人で逃げたつて、後に親父や妹がゐるんだからね、それが始終氣になつて。」
「ほんとにここにゐると、始終びくびくしなきやならないわね。今日逃げた坑夫だつて、昨夕はビール壜で頭をなぐられたのよ。」
「どうしたんだ。」
「ただね、風邪を引いて寢てただけなの。」
二人は呼吸が詰つたやうに默つてゐた。
「私、思ひ切つて逃げようかしら。」とお品は云つた。
「そりやさうするに限る。」
「でも、私、うまく逃げられるかしら。」
「逃げてからが難かしいよ、逃げてからどうするんだ。」
「そりや何んでもないわ、あのね。」とお品は云

ふと立ち上つて、「一寸」と云つた。
彼女は裏口へ出ると、月の光りの中からすらりと彼の方を振り返つた。彼はお品の後からついて出た。筧の下の蘭の白い花の中で、入れ忘れられた釜が月光を含んだまま傾いてゐた。
お品は斷崖の端の窪んだ岩蔭の闇へ來ると、あたりを見透かしながら息づく大輪のやうな華やかな顔を近づけた。
「ね、木山さん、私、ほんたうに逃げるつもりなんだから。」
「うむ。」
彼の呼吸は彼女の忙しい胸の起伏に引き摺られた。
「あなたに迷惑はかけないわ。私、とうから逃げようと思つてたんですもの。」
「うむ。」
「私、瀧川に騙されて來たんだから、摑まれば警察へ云へばいいわね。」
「騙されたつて？」
「私、お父さんがここにゐるつて云はれたもんだから、瀧川について來たの。そしたら、みんな嘘だつたのよ。ね、逃げるんだつたら、今からがいいかしら。」
「[illegible]出た。」

「夜明け前の方がいいかしら。」
「うむ、今夜は皆が坑夫を捜すのに疲れてゐるから、その方がいい。」
「さうね、ぢや私、さうするわ。」
計介は大瀧へ乘り出したやうに緊きしまつて來た。
「一人で逃げるのかね。」
「ええ、何ぜ？」
「連れがあるんだらう。」
「いやよ、さつきはお金を借りてたの。」
「いや、ある方が心配がないからさ。」
「一人よ。あなたも逃げてくれればいいんだけど。」
「そのうちに行く。だけど、お品さん、逃げてからどうするんだ。」
「私女給になるの。前にもさうだつたのよ。」
「危いね。」
「ね、ね、どうかしてよ。」
「よし。」
彼は片手で[illegible]を摑んだまま、お品の背中に手を廻した。[illegible]、[illegible]なお品のやうに迫つて來た。女の身體が彼の腕の中で、[illegible]しなり出した。と、羊歯の[illegible]彼女の頭髪に[illegible]められて[illegible]上つた。

「私、ほんとに待つててよ。」
「ああ。」
「街へ行つたら直ぐ手紙を出すわ。」
「うむ、金がいつたら送つてやる。」
「私、お金よりあなたに來て貰ひたいの。」
「分つた。」
「その方がどんなに嬉しいか知れないわ。」
「うむ。」
「何だかあなた、ほんほん云つて、私、私、ほんとに來てよ。私、さうおもはなけりや、私、私。」
とお品は云ひながら計介の胸を持つて搖り動かした。

八

計介はその夜床の中へ入つても眠れなかつた。絶えず雨戸の外から音を踏んで近寄る瀧川の足音を身に感じた。胸が鎮まると、耳元のピストルに手を觸れて冷たい銃身の感覺に氣を鎮めた。時計の音がたんたん[illegible]彼の心臓を狙つて迫つて來た。と、彼は廊下の方から[illegible]むしろ[illegible]音をききつけた。彼は[illegible]障子を開けた。と、彼の大きな影が靜まつた廊下の中へ流れたまま默つて彼を見詰めてゐた。彼は一[illegible]に[illegible]口を向けられたやうに身が[illegible]た。彼

は呼吸をすくめてランプを消すと闇になつた。流されたやうに静かな峡谷が、忽然として月光の中へ屹立した。彼の怯えた心は峡谷にそそがらせを向いて一途に傾めた。すると、彼は闇かなく月に誑らせられるやうに眠りだした。眼が醒めると峡谷は晴れ渡つてゐた。詰介はもう瀧川のことを思ひ出しても昨夜のやうな恐怖は感じなかつた。

彼はお品が逃げ出したといふ噂を聞いたのは、その日の午後であつた。

瀧川はお品を逃がした手引きが紫昏の老婆だと睨んだらしく、街へお品を捜しに行く途中、ダイナマイトをもつて直ぐ紫昏に駈込んだと云ふ噂も聞えて来た。

詰介は蛇行を辿る寄り道に、瀧川の飯場を覗いて見たが、するとうそ、誰もゐない部屋の中に、お品の古い古布の裏が殺されたやうに引き摺られてのめつてゐた。

「やられたか。」彼は背中を叩かれたやうに動悸が打つた。

彼は昨夜お品の瞳が芳香を放つて反り返つた断崖の傍へ行つてみた。彼が彼女を抱きかかへたときに堕つた青竜は、まだ落したままに捲りむけて青い顔を出してゐた。ふと彼は、お品の胸から股へ走つた冷酷な黒い一定の線を思ひ出した。

それは昨夜から絶えず彼の脳中に入り浸つてゐる一個の鋭さを持つた生物だつた。此のお品の冷力に満ちた黒線が揺めく度に、彼は彼女に逢ひたくなつて堪らなかつた。

遠くの一面の白い花の中で、黒い花のやうに開いたトンネルの口から、坑夫達は鍛冶場へ退散のやうに飛び降りてゐた。続いてダイナマイトの爆発する音響が、次ぎ次ぎに峡谷の中で震動した。

詰介は筧の水を飲みながら、瀧川飯場から坑夫達が続々逃亡することを希望した。もし瀧川が日々お品を街へ捜しに出歩いてゐるとするなら、瀧川飯場が潰れて行くにちがひなかつた。もし瀧川飯場が潰れたなら、街から来る鑿岩機を瀧川の持場の十三号のトンネルへ据ゑつけなければ良いと詰介は考へた。もしまた、その十三号が彼自身の自由になる日が来たならば彼はそれから上る利益を直接坑夫達へ分配しようと計画した。すればピストルは不用になる。労働の累積が恐るゝに足らなくなる。坑夫達の生活は豊かになる。負傷者の家族は安心する。父と娘の危険が救はれる。さうして、街へ出るトンネルは、日々、その進行能率を平和に増進さすにちがひない。――

詰介はお品の逃亡を感謝した。ただ今は、もつとも健全にトンネルを街へ進行さすための問題として、瀧川の理性がお品の逃亡によつてどれほど狂ひを生じてゐるかと云ふことが残されてゐるだけだつた。それを思ふと、彼はまたあのお品の胸から股へ走つた溌剌とした一定の熱線を思ひ出した。もし瀧川の頭に狂ひが激しく生じたとしたならば、それはお品の胸から股へ走つた熱線が、街へ走つたからにちがひないのだ。――

つまる所、お品の一定の線が街へトンネルを押し出す線であつたのだ。――詰介は、此の突如として峡谷の中からめくれ上つて来た一本の新鮮な理論を発見すると、にやにや躊躇者のやうに笑ひ出した。

――構はぬか、あの線は俺の胸へひつ着いた線なんだ。

――あの線は俺の云ふままになる筈だ。

九

その日の夕暮、瀧川飯場からまた三人の坑夫が逃げ出した。しかし、お品を捜しに行つた瀧

川はまだ街から歸つて來なかつた。

次の日の夕暮が再び來た。

すると、白眼の下男が青ざめた額をして、レールに躓きながら計介の方へ駈けて來た。

計介は不吉な風を感じて立ち上つた。

「旦那さまが、旦那さまが。」

下男は吃つたまま計介の手を引つ張つた。

「やられたのか。」

「旦那さまが。」

計介は下男の指差してゐる斷崖の方へ駈け出した。やつて來たな。と彼は思つた。

峽谷は眞白な嵐に見えた。

峽谷は廻つてゐる車輪に見えた。

——だが、どこへ行くんだ。——

彼は光つたレールに曳かれて岩層を一つ廻つた。

と、斷崖の上で、彼の父と瀧川が抱き合つたまま俯いてゐた。

彼は空中を狙つてピストルを二發放つた。

彼はしなしな風に吹かれたやうに傾く二人の方へ近づいた。

計介の父は、下から瀧川を睨むと、最後の言葉を一口云つた。

「貴樣、話では分らぬのか。」

すると、突然、瀧川は、平手で打たれたやうに引き下つた。

クライマックスの頂點で、瀧川は脆くも一滴、彼の虛榮心へ注射されたのだ。

計介の父は眞直ぐに立ち直ると、汗をかいたまま威張り出した。

「話があるなら、今晩來い。」

「はア。」と瀧川は頭を下げた。

父と息子は歸つて來た。二人は並んだまま、鼓動の高さを驗べるやうに默つてゐた。

計介は瀧川の怒りがお品の逃亡と徒勞な彼の探索からだと云ふことは直ぐ分つた。瀧川はお品の逃げた原因を、彼女の着物を買はなかつたがためだと思つてゐる。彼のお品を繋ぎとめてゐた綱が、一枚の晴着だつたとしたならば、瀧川に晴着を買はさなかつた計介の父が突きかかられるのは定つてゐた。

——しかし、お品を逃がしたのは此の俺だ。

——お品の線がトンネルを押し出す前に、親父の身體が押し出された。

計介は悲慘と喜劇の境界線が何處にあるのか分らなかつた。

だが、彼は瀧川に對する反感から今は少しも彼に恐怖を感じなかつた。ただ恐怖に代つて腹立たしさが昂じて來た。二人が家へ歸ると、妹は窓へ投げかけられた着物のやうに、俯いたまま窓の外へ折れてゐた。霧が煙のやうに峽谷へ流れて來た。下男は物音を潛めて夕食の準備を始めた。霧の中を一列に並んだ坑夫の足が影のやうに通つていつた。計介の父はランプが點いても默つてゐた。夕餉の時にも默つてゐた。恐らく頑固な父の腕で、恐怖が嵐のやうに吹き捲くつてゐるのに相違ない。——ふと計介は、父が坑夫の單價を上げ出すことを考へてゐるのではないかと考へた。

「お父うさん、危いですからもう單價を上げてやつたらどうですか。」

彼は夕食をすませてから、父の傍で煙草を吸ひながら一滴の注射をやつた。だが、父は起されたやうにむつとして默つてゐた。

「お父うさんはいいでせうが、傍にゐる者が心配でいけませんよ。」

「うむ。」と父は初めて云ひ出した。

「上げてやつても根つから損はしないでせう。僕は損をするより、今日のやうな危いことのない方がいいですな。」

「お前のやうなものは、此の商賣は出來んわい。」

また、生意氣なと彼は思つた。

二人はそのまま默り込んだ。しかし、計介は父が弱味を見せない範圍に於て、間もなく確に單價を上げて行くにちがひないのを見てとつた。彼は街へ逃げ出したお品の線が、今頃默つて父の心臟を狙つて來たのを感じると、霧で曇つたランプの下でまたにやりにやりと笑ひ出した。

十

計介は坑夫の單價の上ることが、トンネルの構成上喜ぶ可きことであるとしても、坑夫の單價が上ることによつて、瀧川が一層坑夫達の中で勢力を振り出すのが不快であつた。彼は出來ることなら、此の機會を利用して瀧川を完全に峽谷から追放したかつた。彼が峽谷に動いてゐる限り、計介の父が坑夫の單價をいくら上げたとしても同じであつた。

瀧川は、その上つた單價に從つて、また下の坑夫からそれだけ絞り上げるのは定つてゐた。

——あの山はトンネルを食ふ蟲だ。

——あいつは坑夫を痩せさすバチルスだ。

——あ奴が居れば、今にそこからトンネルは腐るのだ。

しかし、ただ三人の人間を殺して來たと云ふに過ぎない瀧川の一個の過去が、何故かくも大きなトンネルを腐らすのか。計介は今はただ瀧川の狂暴な性格をめがけて突きかかつて行きたくなつた。

——他のことは後廻しだ。

——あ奴をここから拋り出すのだ。

彼はふと今日瀧川の飯場から、三人の坑夫が逃亡したのを思ひ出した。——これで總計五人の坑夫が逃亡した。五人の勞力がなくなると、瀧川の隧口からは一日平均二尺の進行が遲れて行く。すると、彼の損害は一日平均十圓だ。今だ。

——今一人逃亡すればあ奴は完全に立てなくなる。

——すればあ奴は逃げ出すより仕方がない。

——お品萬歳！

——俺は彼の後へ鑿岩機を据ゑつけるのだ。鑿岩機が追ひ出す人間だけは他の隧口へ廻せば良い。

計介は萬事今暫く待つて瀧川の樣子を見ようと考へた。今はトンネルを最も立派に進行さす條件として殘されてゐる問題は、鑿岩機が到着する時機よりも、瀧川の逃亡する時機の方が早かるべき必要のあることだつた。もし瀧川が鑿岩機の到着を嗅ぎつければ、彼は此の峽谷から動かないのに定つてゐた。もしそれを強ひて追放するとすれば、彼は此の峽谷の中で暴動をひき起こすのは明かなことであつた。

しかし、計介には瀧川の逃亡の後、瀧川の唯一の功績である單價の引上げ運動の結末をいかに處分すべきかが問題となつて來た。恐らく計介の父は、瀧川のゐない限り、單價を上げようとはしないにちがひないのだ。

——よし、そのときはその時だ。

——俺は瀧川に代つて親父とどこまでも爭ひを續けてやる。

もし——それでも親父が俺の云ふことを聞かないなら、俺は親父を守ることは斷然やめだ。

しかし、瀧川は逃亡した坑夫の頭數だけ、再び坑夫を募集し始めたとしたならば！　これがまた計介の新らしい問題となつて彼の頭に殘り出した。だが、瀧川が五人の坑夫を集めるには少くとも三百圓の現金が必要だつた。彼に今三百圓の金が出來るとすれば、いづれ計介の父から借りるのは分つてゐた。

——そこで、一つ瀧川に嘘をついてやるのである。

「いや、お前の所のトンネルは、まだまだこれか

ら石が硬くなるばかりだと技師は云つてゐる。お前の所へ金を注ぎこんでばかりゐては、他の飯場が怒り出すに定つてゐる。—

計介の頭は此の噂と事實の丸藥を考へ出すと、初めて軽くなつて來た。だが、もし此の寸法に一分の狂ひでも出來始めたら、トンネルは峡谷の横腹で漏穴になるにちがひないと彼は思つた。

十一

翌日、お品から計介の所へ變名の手紙が來た。

—私たうとうこんな所へ來たわ。こゝは汚いカフェーよ。お別れした晩は眠られませんでした。私の名前はお鶴さんつていふの、早く來て下さいな。ずつと一緒に居て下さいなんて云はなくつてよ。御身分が違ふんですもの。でも、一日でもいいから來てちやうだい。早くよ、遅くなれば私、どんなになつてゐるか知れないわ。私もう瀧川に逢ふのなんか堪らないの。私、あなたにお逢ひしたい一心なの。もうずつと山にゐるときから私、あなたのことばかり思つてゐましたの。でも、あなたはいつも横ばかり見て塞ぎ込んでいらつしやるんですもの。私だつて仕方がないわ。ね、ね、早くよ、下から呼ぶからこゝで、ね、—

計介はお品に襟首を掴まれて揺られてゐるやうな感じがした。

行く行く、だが、まア待つてくれ。

今直ぐ行つては、瀧川と父とのその後の様子が分らなかつた。彼はお品に返事を書かうと思つて手近の紙片を捜し出した。積み上げられたダイナマイトの箱の上に用紙が見えた。彼は周章てながら下からその用紙の片端を持つて、上に乗つてゐる塵紙の包み物のまま引き摺つた。と、塵紙の中から數百枚の紙幣が乾いたビラの様に、彼の頭の上へ降つて來た。彼は、水を冠つた猫の様に紙幣を浴びて動けなかつた。彼はふためきながら散亂してゐる紙幣を掻き集めようとした。だが、ふと彼は、紙幣に叩かれて化石してゐる自分の心臓を感じると、ぐつと腹が立つて來た。彼は意地になり出した。數枚の紙幣の群れが、微風に漂ひつゝ縁側の方へ辷つていつた。

—俺は拾つてやるものか。

紙幣の群れは、彼の背後を馳走する無數の蝶敏な魚に見えた。

—此奴だ。

—此奴が人間を馬鹿にした奴だ。

彼は僅かな十圓紙幣の畑の中に坐り込むと、直ぐお品へやる返文を書き始めた。

「俺はあのときからあなたに逢ひたくて仕方がない。しかし、今直ぐに逢ひに行つては後が困るのだ。長くは必ず待たせないから、いま暫くだ。ぐたぐたしないで音無しくしてゐてくれ。金は暫くすれば持つて行く。」

彼は手元にひつかかつた十圓札を四五枚つかんで手紙の中へ巻き込んだ。午前のダイナマイトが地の底で弾け出した。

—いや待て、と彼は思つた。

此の金は親父が坑夫へ支拂ふ此の月の給金にちがひない。すると？

—俺の撒き散らした金は坑夫の給金だ。

續いてまたダイナマイトが八發で爆發した。

—今俺が此の金を一枚失へば、七人の坑夫の今日の生活が吹き飛んで了ふのだ。

—それを三百枚としてみると？

—二千人の人間だ！

また十發と五發とで爆發した。と、續いて五

頭の彼の直下で爆發した。

彼は狙はれたやうに發車へ出すと、ひらひら舞ひ落ちながら旋回してゐる紙幣の渦の中を追ひ廻つた。

「あらあら、兄さん。」

母は夾竹桃の花束を持つて新鮮な顔で入つて來た。彼女は暫く手品師でも見るやうに、ぼんやりと彼を見下ろしたまま立つてゐた。

「それ、お父さんが紙で包んでおきなすつたお金でせう?」

「あ、へッ。」と彼はいつた。

母は縁側から庭の方へ降り立たうとする紙幣の群れを、夾竹桃の花束で掃きよせ出した。紙くの紙幣は上下から、ダイナマイトの爆發する度に散らばるやうに舞つて來た。

暫くすると、線を寄せられた紙幣が盛り上つた更紗の模様のやうに二人の前で浮揚した。

「私、折角買つて來た花が目茶苦茶になつちやつたわ。どうなすつたの。」

「此の金を縫つてくれ。」

「でも、お母さん、今日はお金を帶びなくて、自分お母さんに持つて當んでいらしつてよ」

誹介には、父が此の紙幣の金を故意に紙代の鼻紙の中にくるめて出て行つた大切な心理が直ぐ讀み込めた。金庫の中に藏められた金よりも、鼻紙の中に包まれた金の方が、いつの場合に於ても、より鼻紙に見えるにちがひないのだ。

彼は母が紙幣を揃へてゐる間に、お品と自分の手紙をポケットの中へ押し込んだ。

――しかし、金は?

今は手紙にくるんだそのままをお品へやらうと彼は思つた。

――今にお品が坑夫の單價を上に出すのだ。その他の譯でもない。これは明かなことではないか。

彼はお品にやつた見らない坑夫の金だけは、やがてお品が灘川を追放させる條件として、父がそれだけ負擔すべきが當然だとも考へた。彼は直ぐポストのある岐路の村の方へ下つていつた。

十二

誹介が村から歸つて來ると、彼の家の方から灘川が歸つて來た。二人は當然一本の道を行き合はねばならなかつた。だが、誹介には、灘川の顔がまるで一度の敗つた一定の家畜に見えた。彼は自分がかうして此の灘川を恐れてゐたのが分らなかつた。彼は灘川を見下すやうに、彼から二人の距離を縮め出した。

「ヤア。」と灘川は猾さうに笑ひかけた。

「ヤア。」と彼はいつた。

二人はその儘肩を擦り合つて狹い枕木の上を行き違ひた。誹介は二人の間をかすめた風からお品の匂ひを嗅がうとした。

――だが、あの曲者め、俺の家で、何をやらかして來たのかな。

ふと彼は父が紙め彼されてゐる所が浮んで來た。彼は急いで家へ入ると、父はよろめきながらズボンへ片足を入れてゐた。

「今、灘川が來たでせう。」

「うむ。」と父はいつた。

「何しにやつて來たんです?」

「鑛山權が來たら、あ奴に借してやることにしてやつた。」

トンネルが彼に彼の頭の中で崩れ出した。

「あ奴に借してやりたいと、灘行かむつかしい。」と父はいつた。

――親父には灘川が恐いのだ!

彼は腹立たしさに黙り込んだ。

――俺が灘川を、有高しめてゐるときに、灘川は、香助けてゐたのは俺の親父だ。

――勝負の勝負は決定した。

——滝川が勝つたのだ。

計介は一切の苦しみを振り捨てて、今は、滝川に復讐してやるために、街のお品の所へ馳け出して行きたくなつた。

「いや、何に、利益は俺と滝川とで分けるのさ。」

と父は云ふと笑ひ出した。

彼は横を向きたくなつた。

——もう單價は上ることがないだらう。坑夫達は鑿岩機に食はれて了ふにちがひない。

「それで他の者が、指を銜へてをればいいですね。」と彼は云つた。

「何アに。」

「第一もう物價が騰つて來るぢやないですか。」

「さうしたら、それまでさ。」

「まだまだ滝川のやうな奴の出て來るのは、これからですよ。」

「貴樣は默つてゐりやそれでいいんだ。」

父の鼻は赤い鱗の眞ん中で膨れ出した。

「來ましたね。」

「何をッ。」と父は叫んだ。

彼は横づらを殴打られると、反り返つた。と、また父の拳が振り上つた。彼は表の方へ飛び出した。

——誰がこんな苦しみをするものか。

——今にトンネルは洞穴になるだらう。

——今に親父の死骸が洞穴のまん中で寝轉んでゐるだらう。

彼はトロッコを拾ふと、お品のゐる街の方へ疾走した。岩壁のカーブを乗り切る度に、峡谷の風光は明るく河口の方へ展開した。晴れ渡つた河口からは、濃藍色の鰯の群れが峡谷の中へ登つて來た。彼は初めて、トンネルを抜け出るやうに刻々幸福な速力を感じ出した。

青い大尉

父が突然死んで了つた。私は海峡を渡ると、バナナを四日間食べ續けてまだ知らぬ街まで出かけていつた。

母はとある街角の三角形の奇怪な硝子張りの家の中で、ひとり机のやうにぼんやりと坐つてゐた。

「どうしたんです。」

「死んだ。」と母は云つた。

それはさうにちがひない。私はその日から、忽ち債鬼となつて活動をし始めた。

「金をくれ、親父が死んだ。」

「金を寄こせ、親父が死んだ。」

債鬼の歌ふ歌はかうであつた。

私は先づ法務局の役人と、織工所のある技師と、府廳の書記と時計屋の主人の所へと談判した。しかし、金は下手な債鬼の歌に踊るものでは決してない。そこで、私は義理を輕蔑して一番弱い隣家の家へ肉迫した。すると、隣家の退役大尉は赤痢になつて死にかかつてゐた。娘と弟とは薄暗い家の中で、黙つて店の饅頭を燒いてゐた。

私はもう金に踊らせられるのがいやになつた。

朝な朝な涼しい驢馬が鈴を鳴らせて通つて行つた。辻では騎馬の警官が眼の光つた鮮人の顔を睨んでゐた。

私は殘して來た戀人にあてて手紙を書いた。

「もうあなたと結婚は出來ません。父に金が何もないのを知りました。無論、僕もありません。歸る船賃さへも、まだこれから取るのです。あなたは僕を好きだと云つてはいけません。僕は、あなたと僕とを引き裂いた金が欲しくなつては、困るのです。」

私は悲しくなると骨壺から父の骨をとり出した。

「これが親父か。こんな親父はあるものか。これは石灰と云ふものだ。」

私は父の骨を摑みながら、一片づつ骨壺の中へ投げ込んだ。チャリン、チャリンと父は淸らかな音を立ててゐた。私は父と角力をとつて、父を投げつけたときのことを思ひ出した。

外では支那人と朝鮮人とが殴り合つてゐた。鮮人は紙屑の中へ押し倒されると、片足を上げて儚なげに唸つてゐた。

隣家の大尉が入院すると、娘は擔保に柄のない刀を持つて私の家へ入つて來た。

「いいんですよ。いいんですよ。」

「でも。」

「いいんです。」と私は云つた。

次の日から、娘は裏口からこつそりと足音を忍ばせて覗き出した。

細い路をへだてた横の屑屋では、積み上げられた紙屑の隅で勝手にごそごそ鮮人達がモヒの注射をやつてゐた。彼らの一人は角の潰れたシルクハットを冠つてゐた。一人は骨の突き出た洋傘を持つてゐた。一人は跛足で跛足の半靴を履いてゐた。

「あれは何んです。あれは？」

「あれは、お前、泥棒と乞食だよ。」と母は云つた。

乞食と泥棒の顔は叩き落された瓦のやうで、

いつ見ても笑つてゐることはつひぞなかつた。いつも彼らはぶらぶらしながら煙草を吹かせては注射をした。ときには、彼らは無表情な鈍い顔のそのままで喧嘩をやつた。

シルクハットはお洒落であつた。彼は膝に縛りつけた手巾の中から注射器を取り出した。跛足は頭の鉢巻の中から取り出した。彼はいつでも紙屑の中に埋まつて死にかかつた犬のやうにびりびりと慄へてゐた。

或る夜、私は時計屋の前で病院から帰つて来た隣家の娘と行き逢つた。私は一寸立ち停ると、娘も何か云ひたさうな眼をして立ち停つた。

「お父うさんは？」と私は訊いてみた。

娘は黙つて笑つてゐた。

「いい方ですか。」

「いいえ。」と彼女は云つた。

辻の暗い街燈が娘のお下げの後で光つてゐた。暗い時計屋の陳列の中から跛足の眼がちらつく[illegible]さうに慄へてゐた。

「あなたは幾つ？」と私は訊いてみた。

「十六ですわ。」

「さう。僕の父が亡くなつたとき、あなたはいろいろ手傳つて下さつたさうですね。」

「いいえ、何んにも。」と娘は云つた。

「母が喜んでゐましたよ。」

「あのね、今日、お母アさんが、あなたの所のお手傳ひをするやうにつて、さう云ひましたわ。」

「ありがたう。お母アさんも病院へ行ききりなんですか。」

「ええ。あのう、ピストルね。」と娘は云つた。

「ピストルつて何んです。」

「ピストルをお渡ししておけつて、お父うさんが云つてましたわ。」

「ピストルなんか、あるんですか。」

「ええ、これ。」と云つて娘はいきなり包みの中から黒いピストルを取り出した。

私はピストルを受けると掌の上へ載せてみた。手應へのある重い把握力が私に武装の快感を感じさせた。

「これはあなたが持つてゐては危いから、暫く僕が持つてゐて上げますよ。」

「ええ、そして、これも。」と娘は云ふと弾丸を差し出した。

私は初めてピストルと弾丸とを持つたのだ。

「よし。」と私は呟いた。

私はそれから毎夜、こつそりと青い街燈の光りでピストルの銃身を青く光らせてみるのが好きになつた。その横の紙屑の山の隅では、またいつも跛足のモヒ中毒者が慄へてゐた。シルクハットは時々蕭洒としてステッキを片腕にかけながら、破れた靴を履いて帰つて来た。

「しかし、金は？」

金のことを思ふと、私は毎朝晴れた高い空の下で淋しくなつた。学校をやめねばならぬ。母を養つて行かねばならぬ。私は自分の肩の痩せてゐるのが氣になつた。しかし、何よりも船賃だ。あの海峡の緑の波が、どうして無数の牙のやうに見えるのだらう。私は懐にピストルを忍ばせてまたあきらめてゐた債鬼の歌を歌ひ歩いた。

しかし、法務局の役人は電話を、臺詞をつく機械にして了つた。鐵工所の技師は鐵の錆びた看板を借金の楯に應用した。府廳の書記は私の言葉を聞く代りに金の輕さを私に吹聴した。時計屋の親父は休んでゐる時計の時間を飽く迄正當と心得た。さうして、私と母とを船に乗せて海峡を渡らせてくれるものは、今は死にかかつてゐる青い大尉のピストルだけになつて来た。

隣家の娘は毎夜辻の街燈の下で、お下げを弄びながら私を待つてゐた。或夜私が出て行くと、彼女は母の悪口を云ひ出した。

「お母アさんを、あなたはそんなに嫌ひなの？」と私は訊いてみた。

「ええ、嫌ひ。私、ほんたうのお母アさんに逢ひたいわ。」と娘は云つた。

「おや、ああお母アさんは伯母さんなの？」

「違ふの。あれは私の家の女中だつたの。」

「さう、おや、ほんとのお母アさんは？」

「死んだの。」

「死んだ。」

「お父うさんは私のことで、いつでもお母アさんと喧嘩ばかりしてるの。」

「おや、お父うさんがおなくなつたら、どうするの？」

「分らないわ。」と娘は云つた。

しかし、娘は死にかかつてゐる父のことを云はれても別に悲しさうな顔をしなかつた。

「あなたは、お父うさんが好きなんですか。」

「いいえ、ちつとも。」と娘は云つた。

それなら彼女にはどう云ふことが悲しいのか、それが私には分らなかつた。

娘は私に見られるといつも俯向いて黙つてゐた。

「あなた、いつ帰るの？」と娘は訊いた。

「もう直き、紙屑籠にならないと、危いから。」

私は傍を通つた騎馬の警官に眼をひかれた。辮髪の支那人が悠々と車をひいて暗い路の中へ入つていつた。

暫くすると、娘は突然眼に両手をあてて泣き出した。

「何を泣くの。泣くんぢやない、泣くんぢやない。」

私は娘の背中に手を廻すと、街燈の光りのとどかぬ屑屋の暗い物置の傍へ連れていつた。紙屑の中では、また何時もの跛足が青い眼を光らせて慄へてゐた。阿片の匂ひが鼻を突いた。

「あなた、帰つちやいや、帰つちやいや。」と娘は云つた。

私は紙屑の中の跛足の動かぬ暗い穴のやうな顔を見守りながら、娘のおさげの端を指の先に巻きつけた。

次の日病院から娘の母が急いで一寸帰つて来た。帰ると彼女は直ぐその夜、また病院へ出かけて行つた。出かけるとき、私はカーテンの隙間から彼女の後姿を見つめてゐた。彼女は裏口から霧の立ち籠めた表へソッと出て行くと、屑屋の小舎の前で待たせてあつた男と聲をひそめて話し出した。男は肩で彼女の肩を押し着けた。すると、彼女は戯れながら男の肩を押し返した。

これでは多分、あの青い大尉は死ぬことを祈られてゐるに相違ないと私は考へた。暫くして二人が病院の方へ消えた頃、隣家の裏口がまた開いた。中から娘の顔が母親を窺ひながら静かにソッと現れた。彼女は街燈の下まで小走りに駈け出して来ると、母親の去つた霧の中を首を延ばして眺めてゐた。それから彼女はまた私の家の方を見詰め出した。私は母の眼を盗んで娘の傍まで出かけていつた。

「お父うさんは？」

「お父うさん、もう駄目なんですつて。」と娘は云つた。

「おや、あなたは行かなけりや、いけないでせう。」

娘は黙つてまた母親の消えた方を眺めてゐた。

「今夜これから行つてはどう？」

「私、行きたくないの。」

「しかし、そりや、行かなけりや。」

「お母アさんが、いま行つたわ。」

「お母アさんが、行つたつて。」

「私、お父うさんが死んだら、お母アさんと一

緒にゐなくていいから、嬉しいの。」と彼女は云つた。
私は默つて了つた。
「お父さんは、そりや私を強く打つの。繩でくくつて竹で叩くのよ。あれ、お母アさんが惡いのね。お母アさんつてば、私が叩かれれば、はアはア云つて笑つてゐるの。私、憎らしいから、一度夜中に警察へ飛び出しちやつたわ。そしたら、お父さんが叱られてるの。」
「しかし、お父さんは、あなたを憎くつて叩くんぢやないんですよ。お父さんは、あなたのことを心配して叩くんです。だから、早くお父さんの所へお行きなさい。」
「あたし、ちよつと行つて來ようかしら。」
「うむ、そりや、行かなくちや。」
「でも、」と娘は云つて動かなかつた。
「ひとりで行くのは恐いのですか。」
「あなた、まだここにいらしやるの？」
「うむ、ここにゐますから、お行きなさい。」
「ぢや、あたしも、ここにゐるわ。」と娘は云つた。
「それなら僕は歸ります。」
「いや、いや。」
「しかし、あなたはお父さんの所へ行かなけりやいけません。」
「いや。」
「それなら僕は、もう知らない。」
すると、娘はまた前夜のやうに泣き始めた。私は霧で曇つた街燈の青い光りの下で、しくしく泣いてゐる娘のお下げを見てゐるのが好きであつた。支那人の車が忍びやかな影繪のやうに霧の中へ消えていつた。
「ぢや、あなたは病院へ行きますか。」
彼女は泣きながら頷いた。
「ぢや、こちらへいらつしやい。」
私は娘を連れてまた屑屋の物置の前まで歩いて來た。私はあの紙屑の中に坐つて慄へてゐるであらう跛足の無表情な顏の前で、一度娘に大きな接吻をしてみたかつた。
「さア、泣いちやいけない。泣いちや。」と私は云つた。
娘は私の前で立ち停つた。
「さア、顏を上げなさい。」
娘は俯向けてゐる顏を一寸眞直ぐにしたかまた直ぐ俯向けた。私は彼女の頸を片手で上げると首をぐつとひき寄せた。彼女は苦しさうに私の腕へ手をかけた。そのとき、ふと私は先刻娘の母親がこの同じ所で男と戯れてゐたのを思ひ出した。すると、青い大尉の顏が匂ひのやうに浮んで來た。私はもう娘に接吻するのが不快になつた。
「さア、お父さんの所へ、直ぐいらつしやい。直ぐ。」と私は云つた。
娘は默つて私の顏を見上げてゐた。
「行かないんですか。」
しかし、彼女は私の前にいつまでも立つてゐた。私は勝手に自分の家の方へ歩き出した。すると、娘は凋れながら靜に街燈の光りの方へ歩いていつた。
私は立ち停つて霧の中へぼけ込んで行く娘の後姿を眺めてゐた。
私はその夜から急にまた内地へ殘して來た戀人に逢ひたくなつた。丁度隣家の娘が父が死にかかつてゐるにも拘らず、私の傍で泣くやうに、私も父が死んだにも拘らず、戀人の匂ひが慕はしくてならなかつた。
私は再び債鬼の旗を押したてた、あの時計屋の休んでゐる時計を動かして、時日の經過を示さなければ――私は時計屋へ出かけていくと最後に云つた。
「あなたの店のこの時計は、皆休んでゐる時計

ばつかりなんですよ。そんな時計を信用されては、僕はいつまでたつても歸れないんです。いい加減に金を下さい。金を。」

すると、時計屋は漸々半値の金を出して來た。次に私は法務局へ廻つてみた。

「金を下さい。金を。もし僕らが歸らなければ、こちらにゐる間の費用だけ、全部あなたの所へ押しつけますよ。」

すると、ここでは、いま一週間だけ待つてくれと歎願した。私には歎願は苦手である。私は苦い顏をして歸つて來た。歸ると、隣家へ押しかけていつたらしい債鬼が一人私の家で母と一緒に話してゐた。

「それでですね、あなたの所が、お隣りからあの栗田口の刀をお取りになつて、私はピストルをとると、かうしようぢやありませんか。あの栗田口は忠綱ですから、時價で、まア二百圓にはなりますよ。」

「ぢや、あのピストルは？」と、私は彼の話を横取りした。

「あれですか、あれは、さうですね、まア、九十圓の代物ですね。しかし、何んです。あれは、あなたん所のお父さんもよく御承知ですが今なかなか手に入らないピストルですよ。しかし、これはあなたん所の御主人とよく一度お話してからにしたいと思ひますが、とにかく、隣家の主人はもう危いですから、今の中にはつきりさせておきませんと。」

「僕の親父はゐませんよ。」と私は云つた。

「ああ、さうですか。どこへお出でになりました。」

「死んだんです。」

「えッ。」と男は云つた。

「此の月の初めに亡くなりました。」

「でも、つい先日、ぴんぴんしてらつしやつたぢやありませんか。」

「ええ、突然でしたものですから。」

男は急に逃げ腰になると部屋の中を呆然と眺め出した。

「あそこに骨があるでせう。あれですの。」と母は父の骨を指差した。

男はだんだん恐さうに眼を光らせながら、默つて暫く骨を見てゐたが、

「もう生きてゐるのが、いやになつた。」と呟いた。

彼は直ぐそれから急いでこそこそと會釋もせずに歸つていつた。

隣家の大尉は妻と子から死なれることを待たれながら、まだなかなか死なかつた。

或る朝、私は母に起された。すると、紙屑の中でいつも慄へてゐた跛足の乞食が、雨の上つた泥濘の中へ顏を俯向けたままに死んでゐた。その傍で、シルクハットは默つて煙草を吸ひながら跛足の背中を眺めてゐた。驢馬は涼しく朝の勤めに鈴を鳴らして通つていつた。

「シャゴ、シャゴ、シャゴ、シャゴ。」

暫くすると警官が人夫を連れてやつて來た。人夫達は乞食に莚を被せて擔ぎ上げると、また警官の後から去つていつた。後の泥の中には、深い一つの死面がくつきりと殘つてゐた。

私は硝子の三角形の家の中から、彫られた乞食の死面を見詰めてゐた。誰があのマスクを第一番に蹂躙つて行くであらうかと考へながら。

シルクハットは死んだ跛足のゐたあの紙屑の中に半身を埋めながら、膝から注射器を取り出すと腕にぷつぷつ針を打ち出した。

その日も夜になると、また私は隣家の少女を泣かしに街燈の下へ出ていつた。思ふに彼女はそこで泣くのが樂しみに相違ない。そこの青い

街燈は、少女の眼から涙を絞り出すに相應しいそこはかとなき水のやうなメランコリアを持つてゐた。

「ね、あのう、あなたとこの小母さんがね。」と彼女は私を見るといきなり胸の前へ擦り添つて來て囁いた。

「お父うさんは?」

「あなたとこの小母さんがもう直ぐ日本へ歸るんですつて。

「そりや、歸ることは歸りますよ。早く海が静まつてくれればいいと思つてるんだけど。」

「私も早く歸りたい。」

「あなただつて、もう直きに歸れます。」

「だつて、そんなこと、いつだか分らないわ。」

「心配しなくたつて、ぢつとしてれば歸れるやうになりますよ。もしお父うさんでも死んだら、僕がピストルを賣る店を教へといてあげるから、そこでお賣りなさい。あなたの歸れるだけのお金は、あのピストルから出て來ますから。」

「だつて、お母アさんは、そんなこと承知しないわ。」

「そしたら、あなたはそれをもつてこつそり賣つて了へばいい。それから、あなたの所には、大切な刀があるから、あれも今からあなたは隱しておかなきアいけませんよ。あれを欲しがつて、狙つてゐる人が澤山ゐるから、そ奴らに渡して了つちやいけませんよ。」

「あたし、あなたと一緒に歸りたい。」と娘は云つた。

「そりや、僕が歸るまでに、あなたも歸れるやうになればいいけど。」

「お父うさん、早く死ねばいいわ。」と娘は小聲で囁いた。

「そんなこと云ふ子は、僕は嫌ひだ。もう知らないから、お歸りなさい。」と私は強く云つた。

すると、娘は初めて泣き出した。私はまたひそやかな快感を感じ出した。私は娘の背中に手をあてると、巡禮のやうに人目の屆かぬ暗い陋屋の小屋の前まで連れて來た。

小屋の紙屑の中には、いつもの慄へる乞食がもうゐなかつた。ただ靜かな紙屑が黑い塊のやうに積つたまま黙つてゐた。私はふとあの跛足の死面を思ひ出した。あのマスクのあつた所はどこだつたか。私はマッチを擦ると足もとの暗い泥濘の上を捜し廻つた。マッチの光りに照らされた泥の皺は、油を塗られた皮膚のやうに艶やきながら私の顔を映し出した。と、泥の中から、額を靴で踏みつけられた犬のやうに無表情な一つの凹んだ面を見た。私は動きを停つた。これだ。私は周章ててマッチを擦り變へると近々と顔を面の傍へ近寄せた。と、私はそのデッドマスクの中から、歪んだ自分の顔を見附け出した。私は思はずマッチを泥の中へ投げ捨てた。私は自分の顔を撫で廻した。が、いくら撫でても跛足の慄へる顔が、眼前で生々と、無數に慄へる吸盤のやうに慄へ出した。私は家の中へ驅け込んだ。と、父の骨がぢつと私を見据ゑてゐた。私は飛びかかるやうに父の骨を抱き上げると、がらがら激しく左右に揺り始めた。

「ちよつとお待ち。」と母は云つた。

私は骨壺を抱いたまま初めて母の顔を見た。母は白毛の垂れた首を傾けて暫く隣家の物音に聞き入つてから、小聲で云つた。

「お前、お隣りのお父うさんも、死んだらしいね。」

私には母の顔までが一本の石碑のやうに見えて來た。

眼に見えた虱

一

夏季期の都會はさびれて來た。人けのない商店の中で煽風器が空廻りをやつてゐる。軒を竝べたそれらの店の空巣のやうな店の中を、次から次へと風に吹かれて渡つていつた、この昆蟲のやうな私の動作は思はぬ幸福な出來事であつた。

私はいかに困窮をしようとも、生活に關して他人を煩ますことを自分の恥辱だと思つてゐる。私は生活の樂しみを知らねばならぬ。

二

プラツトホームへ通じる地下道の中で、前を步いて行く女がしきりに咳をし始めた。私は深海の魚が空中に上げられると、今まで海水の重力に抵抗してゐた内部の壓力で、破裂すると云ふ素晴らしい光景を考へてゐたのである。が、私は女の咳に動かされた。擦れ擦れになつたとき、ふと横顔を覗くと、女は私の別れた妻であつた。病が出たのであらうか。

私は辰子と肩を竝べるやうにして默つたまま一緒に步いていつた。が、彼女は私だとはまだ氣附かずに肩を縮めて步いてゐる。貨物の欄干が見えると地下道は階段になつた。私は此のまま辰子と別れて行かうと考へた。

私は彼女と一緒に生活をしてゐるとき、彼女の内部を確實に見てとつたのはたつた口の中三寸までの深さだけだつた。その奥はいつも眞暗で見えなかつたのを覺えてゐる。そのため彼女を一日に一度は曲者だと思ふ習慣がついてゐた。が、今は、私は彼女のその内部から何物をも貰ひたいとは思はない。人はただ妻と云ふ一個の肉體を自分の周圍でぐるぐる廻旋さすことによつて、自分の領域を確定する。が、何が二人の間で切斷されたのであらう。とにかく、彼女はいつ見ても眼を光らせてゐる梟のやうだ。

彼女は額を上げた。と、三年の間別れてゐた自由な二人の眼が逢つた。彼女はひどく周章てて横を向いた。あの袋の中では、私に影響された昔の古い細胞が混亂してゐるのにちがひない。私は意地惡く彼女と竝んで步いてみた。私は彼女がどんな言葉を出すであらうか試驗してみたかつたのだ。此の女は私の死ぬことを幾度願つてゐたか知れなかつた女である。私がいつまでも默つてゐると彼女もいつまでも默つてゐた。多分彼女の身體は私のある半面に鳥肌を立ててゐるのに相違ない。私は彼女の膝に流れてゐる下等な表情から過去を考へてゐるだけだ。だが、何故に過去の最も醜い風情のみが、かくばかり鮮明なのであらうか。

「あなた、どこにいらつしやるの。」と彼女は訊いた。

私は住所を云ふと、さやうならをするつもりで笑つてみた。前には、私は此の微笑で彼女を妻にすることが出來たのだ。

ホームへ電車が入つて來ると二人はどちらもお辭儀をした。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

お辭儀と云ふものは、何と物柔かなものであらう。私は善行を積んだ騎士のやうに道徳的な

[illegible]をもつて、車と一緒に去つていつた。

三

私は果物店の前まで近眼のＨと一緒に歩いて来た。レンズで磨きあげた彼は逢ふ度に[illegible]愛を捜してゐた。彼は自分の貧しさを勇敢に無視しながら、いつもステッキの先でこつこつ道をついてゐた。彼は果物店の喫茶室へ入ると私に云つた。

「われわれは、[illegible]」さうして彼は周囲にゐるものを[illegible]「[illegible]、語られた[illegible]な[illegible]や大口ばかりだ」と[illegible]、安心して[illegible]舌を出した。

「われわれは[illegible]も、戀愛をしては[illegible]戀愛し、[illegible]は愛情し、さうしてなほ[illegible]生きていくより仕方がない。」

所が、私には戀愛さへ[illegible]見当らない。時たま私を驚かすものは[illegible]、[illegible]つたポスターの女の顔だ。

「君、職業はないかね。」[illegible]と私は云つた。

「君は職業を捜してゐるのか。」

「俺は戀愛を捜してゐる」と、彼は云つた。

彼は黙つて立ち上ると、[illegible]を抱きながら戀愛を捜しに街の中へ出かけていつた。私は彼を想像する度に、いつも彼のステッキが鋭い嗅覚を持つた鼻のやうに見えて来る。彼の孝順な後姿は街頭を見廻しながら、

「俺に惚れねば駄目だよ、俺に惚れねば駄目だよ。」と絶えず説諭してゐる教師のやうだ。

だが、私は彼のステッキの先にひつかかつて来た戀愛を、まだ一度も見たことがない。

四

どの方角へ歩いていつても[illegible]社会と愛の話ばかりを[illegible]。その日、私は今日は一日中舗道に下つた看板に頭を打つたりして[illegible]抜けた。街の[illegible]を覗いてみるとネクタイの[illegible]濡れた髪のやうに沈んでゐる。私は[illegible]の上から泥溝の水をぢつと見てゐた。すると、不意に貧しい女優のＳが後から私の肩を叩いて云つた。

「[illegible]、まだ死んでよ。ね、[illegible]目よ。こんな泥溝ばかり見たりして、駄目ぢやないの。」

彼女は[illegible]と云ふと[illegible]の方へ、きつきと活潑に歩いていつた。

私も活潑に歩き出した。が、何を活潑に歩いてゐるのか。私は立ち停つた。眼の前のガラスの中に煙草が山のやうに積もつてゐる。私はどこへ行つても同じことなのだ。それに、何の方へ歩き出すのか。もう、私の心はいつの間にか不必要なものばかりになつてゐるのだ。

五

Ｈの世話で大学の[illegible]に勤め出した。死人係りだ。私は覚悟を持つてゐる。私の身体までが既に不必要なものであるといふことを。私は最早人間を[illegible]練習をし出すのだ。[illegible]いかなることにも驚嘆しないであらう。

私は闇の中で[illegible]のやうなホルマリンの池を長い熊手で掻き廻した。黒く濁つた水面で死人の[illegible]熊手の先へあたつて来た。私はその中の一人をひつかけた。と、死人は水面からすうと[illegible]のやうに水面に上つて来た。私は足に縛りつけられた木札を調べてみた。[illegible]行路病者だ。

私は[illegible]死人の[illegible]を持つてコンクリートの上へ抜き出した。彼は死人の[illegible]で死[illegible]時間を管理する。彼は爪先になつつい

た死人の濡れた皮膚をさすりながら私に云つた。

「おい、此奴ア、お前に似てらア。よく見とくがいゝぜ。」

勿論、私は私を眼に見えた風だと思つてゐる。

この夜目に行路病者を見たときにはもう彼は人間の形を無くしてゐた。私は既に消えてゐる物んでゐるやうな車を箒で掃き消すなから、敏捷に動いてゐる二匹の蠅の動作に眼をとめてゐた。

このとき、私は私といふ存在が、生きてゐるより死んだときに於て有用な物質となると云ふことを發見した。

六

誰もゐるべき筈のない私の家の中で、人の影が動いてゐる。

「御免なさい。」と私は戸口に立つて云つてみた。

すると出て來たのは私の馴れた女であつた。

「あたし、あなたがもう歸つていらつしやることだとばかり思つてゐたの。でも、來てみたら、いつまでたつてもからつぽでせう、これぢや一寸、不用心だわ。」

「他の留守へ入つて來る奴なんて、お前ぐらゐなもんだ。」

私は彼女が家出をしたときにも默つてゐた。が、今も私は默つて彼女を見てゐてやらう。私は上つて煙草を一服吸ひ始めた。

「あたし、實は、あなたの噂はいつも聞いて知つてるの。」

「それは、馬鹿な證據だよ。」と私は云つた。

彼女は明るい媚びを眉の片端に釣り上げた。

「ね、あたし、もう一度ここにゐてもいい。」

「そんなことは、他にきかずにお前にきけ。」

「そりやさうね。だけど、あたしが勝手に出ていつて、勝手に歸つて來たんだから、あなただつて、あきらめるより仕方がないわ。」

「うむ、そりや、さうだ。」と私は笑つて云つた。

彼女は私の留守を利用して、こつそり客をとらうと云ふ腹であることぐらゐは分つてゐる。だが、私は昔の馴染のために、私の家と蒲團を借してやらう。

七

樂しみと云ふものは探せばいくらでも出て來るらしい。Hはだんだん醉つぱらつて來た。

私はだんだん默り出した。Hの片方の義眼がテーブルの上でひとり生々と冴えて來た。彼は女給を摑まへて饒舌り出した。

「おい、君、君、女が、何故かくも淫奔であるかと云ふことを、說明するためにはだ。良いか、聞くんだよ。女が、何故に淫奔であるかと云ふことを、說明するためにはだ、男がかくも猥褻なるズボンと云ふものを、何故に發明して來たかと云ふことを、考へればいいのだ。分つたね、おい、ズボンだよ、先のズボンだ。あはははは、寒はせやからア」

女が逃げて了ふと私と彼とは肩を組んで表へ出た。ポールが火花を落して曲つていく。Hは電柱にもたれたままげらげらと笑ひ出した。私はHの手をひつ張つて暗い街の方へ歩いていつた。彼はひよろけながらがくがく首を垂れては、「寒はせやかア」を連發する。

喧囂自動車が襲つたガラスのやうに近づいて來ると、首が出た。窓に寄つた建物の影で[illegible]がひとり饒舌つてゐる。Hはポケツトの中へ小石を詰め込みながら私の後で唸つてゐた。

「おい、金を拾へ、金を拾はんと云ふことが、あるもんか。」

彼はひよろひよろしながら石を握つて鸚鵡の傍へ近寄つた。鸚鵡は逆さまに籠にとまると彼の動かぬ義眼の前で饒舌り出した。

「ポーッポ、ポッポト、トンデコイ。」

「笑はせやがらァ。」

と彼は云つた。彼はまたげらげら笑ひながら私の後からついて来ると、青い燈のついた酒場の廻轉ドアの中へ首を突つ込んで、蛾のやうによろけ出した。

八

私は辰子が三人の男を自由に切り廻してゐることを知つてゐる。彼女は殆ど小遣に困つたことがない。前に私が製作所の書記をしてゐた頃よりも彼女が金錢に悩まされないと云ふことは、それだけ彼女の墮落を示してゐるのであらうか。彼女に貞操を賣らしたのは私の他の誰でもない。だが、私はそれ故に彼女を愛し續けなければならないのであらうか。私は彼女に金錢を與へることが出來なかつた代りに絶體の自由を與へた。すると、彼女は私の與へた自由を賣つて金を勝手に買つたのだ。だが、われわれのいかなる器官が、その器官を賣らずに金を買ふことが出來たであらうか。われわれは永久買ひ手のつく器官から賣つていかねばならんのだ。

九

今は、私と辰子とはただ生活の賑やかさのためのみに對立してゐるだけである。

「あなた、もう御飯が出來たのよ。」と彼女は云ふ。

そこで、私と彼女とは華やかに向ひ合ひながら湯氣の立つた飯を食ふ。何が悪いのであらう。彼女が私の行ひについて、私が彼女の行ひについて、吟味の眼を光らせる必要は少しもない。全く、これは、互に愛し合つてゐる所が一點たりともないからだ。人は完全に愛し合ふ場合と、全く愛さない場合との二種の形が、恰も眞似するごとく似通つてゐると云ふことは、興味がある。もう彼女は前のやうに私の死ぬことを願ふ必要は少しもない。私は云つた。

「お前は前に、夜中に寝られぬ夜なんか、こつそり俺が死ねばいいと思つたことがあるだらう。」

「ええ、そりやね。」と彼女は云つた。

「ぢや、今はどうだ。」

「今は、さうね、あたし、何だかあなたが、早く出世をなされればいいと思ふだけだわ。」

「お前は正直だよ。俺も正直な所があるが、どうもあまり正直者同志がよると、人間は不幸になつて行くらしい。」

私は譃について考へる。人間は總て幸福にならんがために譃を造るのだと云ふことを。

十

私は辰子に訊いてみた。

「お前は俺に愛する者があると思つたことはないのかね。」

「だつて、もしお有りだつたら、あたしがかうしてゐて、平氣でいらつしやる筈がないわ。」と彼女は云つた。

「ぢや、俺はお前が歸つて來たので、そんなに嬉しさうな顏をしてゐるかい。」

「あたしは、あなたがあたしのしたことに一言も仰言らない所が、何だか賞めて上げたいくらゐなの。あたしはあなたが、どつか人と違つたお豪い所がありさうな氣がして來たのよ、近頃よ。」

「ぢや、少々は、ちよつと惜しいことをしたとも思つてゐるんだな。」

「ええ、そりやさうよ。惜しいわ。けれど、も

「あたしがあなたから逃げなかつたら、いつまでたつても、分らなかつたわ。」
「おや、俺のためには、いいことをしてくれたと云ふ腹でもあるんだな。」
「そりや、さう云ふ理窟になつて來るのね。ぢや、あたしは、ほんとに、いいことをしたのかしら。まさかね。」と彼女はさう云ふと自分から笑ひ出した。

十一

私は辰子と一緒に街を歩きながら訊ねてみた。
「お前は、俺と別れてゐる間に、まア凡そ、何人ほどの男を知つて來たんだい。」
「さうね、百人ぐらゐはあるかしら。」と彼女は云つた。
「それで、お前の氣に入つた男と云ふのは、どう云ふたちの男だつた。」
「あたしは、結局あなたが一番好きよ。」
「俺は、お前から今頃お愛想を聞かうとは思つてゐないよ。」
「あたしだつて、あなたにいまさらお愛想でもないぢやないの。」
「それぢや、お前は俺を愛してゐると云ふのかい。」
「まア、さう云はれれば、そんな氣もするわ。だけど、愛だなんて、何んだか水に浮いた油みたいで、人間が悪いぢやないの。」
「もうそんな年でもないか。」
「さうよ。」
「所が、俺は、かう見えても必死になつて、その羞しい奴をせつせと毎日捜してゐる一人なんだよ。」
「それでも、あれから一人もないの。」
「うむ、ない。俺は毎日、死人ばかり見てるんだ。」
「それぢや、つまんない筈だわ。もつと、あなたは生きてる人を追つ駈けなくちや駄目よ。」
「さうだ。追つ駈けなくちや、いけない。」私は云つた。「しかし、女から見ると、いつたい、俺は好かれる方の男かい。」
「あなたは、好かれるわ。きつと今に良くつてよ。」
「所が、たまに俺の追つ駈けた女だと、そ奴が逃げたりしやがるし。」
彼女は反り返つて笑ひ出した。
「だつて、また歸つて來たぢやないの。」
「いや、昔から、歸つて來た奴にはろくな奴がないもんだ。」
すると、私は打たれたやうに悲しくなつた。私は彼女を愛してゐたのだ。昔から。それに、今は。
私は辰子をひつぱり廻して最後に橋の上までやつて來た。二人は欄干に肱をついて橋の下の泥溝をぢつと眺めてゐた。

十二

小さな劇場がはねると樂屋口から降りて來るSとはつたり一緒になつた。Sは石段を降りて來ると後に連れてゐる十四五の少女を私に紹介した。
「これが、葉ちやん。」
Sの弟子の一人であらう。
「こんな子供でも、もう追つ駈けられてゐるんだから、輕蔑しないでやつて頂戴な。」
私はあらためて葉子を見た。「此の白いハンカチを、誰があの黒い煙突の上へかけようとするのか。」と、驚いたことには、もう彼女は處女ではなかつた。彼女の眼つきは私の肩からもうぴくぴくと希望を吸ひ取らうとしてゐるではないか。すると突然、Sは息も切れさうな嬉しさを示して云つた。

「昨夕はあたし、それは素晴らしいブルジョアになつたのよ。ね、からなの。あたしが樂屋から出て來ると、それは素敵なパッカードが一臺待つてるの、それで、あたし、まアどんなことをやつたとお思ひになつて……」

「その話は喜んで聞きますが、もう死ぬのはよしたんですか。」

「ああ、さうさう。あたしは死ぬ筈だつたのね。だけど、あなただつて、まるで死にさうな恰好で泥溝なんか見てらつしやつたぢやありませんか。」

お蔭で私は彼女がどうして一夜だけブルジョアになつたかと云ふ話を聞かずにすんだ。が、人は、突然幸運に忍び込まれる瞬間を十分に持つものだと云ふことには、頷かう。私は幸運が何より好きだ。われわれは、人に同情を與へるための準備として、絶えず悲運を心掛けてゐなければならない運命に、いつたいいつまでゐるのであらう。

十三

人々は己れの過で生れた場合、此の社會の綱の直下、己れの[illegible]を結び合ふ[illegible]に張られてゐると云ふことには氣が付かないであらう。今日は私はそれを見た。乞食が一人の橋の上で死んでゐた。此の死體の乘つてゐる地上の一點はどこの管轄に屬するかと云ふ問題だ。橋より以東の管轄權は私の勤めてゐる解剖室が持つてゐる。橋より西はN大學だ。行路病者の死體は下駄のやうに無數に有り得るものではない。そこで、死體の掠奪戰は絶えず白熱するのである。

此の橋の上の死體は兩區の管轄地帶を騷がせながら、私の守つてゐるホルマリンの池の中へ辿り込んだ。倒れてゐた死體の頭が東を向いてゐたと云ふ理由のもとに、生前の意志が東にあつたことを推測されたわけである。

一個の死體のために、それを選る醫師の卵は、いかなる養分をとるよりも發育力を盛んにする。さうして間もなく、彼らは世の病者を救ふであらう。此の現象を考察すると、一個の死體はいかに多くの生者を救助するかと云ふ問題が起つて來る。私もまたキリストのやうに、やがては多くの人々を救ふことが出來るであらう。此の一點に見えた[illegible]

十四

警[illegible]すると[illegible]した。すると、[illegible]官がやつて來た。私を辰子の何だと訊く。昨夜から辰子はゐないのだ。多分これでは檢束されてゐるにちがひない。

「あれは私の家内です。」と私は云つた。

「あれが君の家内なら、もつと然るべく取締る法があるだらう。」

「承知しました。」

「以後氣をつけてくれ給へ。君の留守に、どうもあの女は怪しからん振舞が多過ぎる。」

「何とか注意いたしませう。」

何とか注意するだけでは、納まるまい。

「しかし、私は何も知らないもんですから。どうも、御迷惑をおかけしまして。」

良人は良人らしく、一家を納めるべき義務があると云ふことぐらゐ、心得ておいてもいいぢやないか。

「有難うございます。」

「今日の夕暮放免するから、以後、こんなことのないやうに。分つたね。」

「承知しました。」

全く、警官は正しかつた。不貞な妻を今頃は良人に代つて罰してくれてゐる最中であらう。私の眼めは、[illegible]こんな[illegible]まで[illegible]を[illegible]めてゐる。

十五

夕霧が降りて來た。辰子は子供の戯れてゐる透明な空地の中を青ざめて歸つて來た。

「おい、お前の留守に、やつて來たぞ。」と私は云つた。

「あら、さう、あたし、すつかり疲れちやつた。何とか云つてゐて。」

―云つてゐた。俺はひどく叱られた。

「まア、だつて、あなたが叱られる理由がないわ。」

「所が、俺も馬鹿だつたんだ。お前が俺の何だと訊くから、家内だと云つたんだ。さうしたら、良人は良人らしくすべき義務があるつて、やつつけられた。」

辰子は襟に顔を埋めたまま黙つてゐた。多分彼女はその恰好で、一夜を車にもたれて送つて來たのであらう。

―あたしも來た所で、あなたに御迷惑をかけたわね。」と辰子は云つた。

―良人が、良人らしくしなければ、家内がそんな目に逢ふのはあたり前だ。」

私は彼女の食ひ物を整へに外へ出ていつた。が、私は彼女を憐れと思ふことは出來なかつた。寧ろ私は彼女の姿から勇敢な戦士を目へ感じて來た。

私は夕食をとるとき、辰子の睡れた身體に客のやうな秋波を送りながら眺めてゐた。私の悲しみは最早そんな所まで進んでゐた。間もなく、私は金を拂つて彼女の身體を買ふだらう。そのとき、彼女は私に向つてどんな顔をするであらうか。私の悲しみは日々新らしく増して行くのだ。

十六

遂にそのときがやつて來た。これは私の辰子に與へる野生の復讐だ。彼女は私を見詰めながら黙々として脣の片端を吊り上げた。と、彼女は突然云ひ出した。

―あなたはやつぱり、あたしにいつも怒つていらしつたのね。だけど、あたしは、あなたにどんな侮辱をされたつて、感じないのよ。よくつて。」

―いや、お前と俺との生活では、もうこんなことをするより他には面白味がなくなつてゐるんだ、その金をとつてくれ。」

―おや、いただいとくわ。」

―うむ、それから、俺とお前とがかうしてゐる以上は、もう出來得る限り愉快な方面ばかりを考へよう。お前と俺との關係では、何か人には見られぬ愉快なことが、どこかにあるにちがひないのだ。

―あなたは、あたしの身體をよほど汚いと思つていらつしやるのね。そりや、あたしは汚くつてもう駄目よ。だけど、あたしの心は、まだあなたの思つてらつしやるほどぢやないことよ。」

―俺は、昔から、心と云ふものについては相當研究をして來たんだが、お前ほど分らぬ心を持つてゐる奴には、まだ逢はない。」

―だつて、そりや、あなただつてさうだわ。あたし、まだあなたみたいな人に逢つたことなんか、なくつてよ。」

―俺は、お前のやうな分らぬ心に逢つたからこそ、ますます俺の心がをかしくなつて來たんだ。俺はもとはかうぢやなかつた。これもみんな、實を云へばお前の仕業だ。」

―そんなことを云ひ出せば、あたしだつてさうよ。あたしはもとからこんなぢやないわ。あなたに逢つてからあたしはもう目茶苦茶になつたのよ。」

―お前を目茶苦茶にしたのは、俺かも知れない。

しかし、甘い苦茶になつたのはお前だ。目茶苦茶にたらなくてもすむ所を、お前は勝手になつたのだ。お前を目茶苦茶にした責任は俺にはあるが、目茶苦茶になつた方の責任は、お前にあるんだ。こんなことはお前には分るまい。」

「もうそんなことなんか、今頃分つたつて仕様がないわ。」

「仕様がない。だから、俺は困つてるんだ。俺には時々、お前を殺してやらうと思ふことがあるのを知つてるか。」

「うるさい人ね。」と彼女はいふと眉を顰めて横を見た。

私は彼女の襟首をかつ摑むと寝台の上へ捻ぢ伏せた。私は彼女を続けさまに叩いた。彼女は鰈のやうに寝台の上に突つ伏したまま黙つてゐた。私は彼女を引き摺り上げると用紙の傍へ投げつけた。と、彼女は倒れたまま、私を見上げて油のやうににたりにたりと笑ひ出した。

私は私の頭が一つ、何かここまで来てゐることに気がついた。最早や私は彼女にたたはいかなることをしても良いのである。既に此の調和、この愉快な幸福で、無意に不幸な二人の生活の中から爽かに首を出して来たのである。私は此の次には何をするだらう。さうしてその次は、そのまた次は、私は私の興味の展開して行く自由の深さに對して今は新鮮な恐怖をさへ感じて來た。

十七

標本室の棚の上には色んな妊婦の内臓がアルコールに浸つて並んでゐた。乳房や肥満にされた人の胴、子宮、肝臓、胃袋、腸、それは日の光りの中に沈んでゐる。私はそれらの器官の前に立つてゐると、心臓と子宮の間からK博士の鋭い眼鏡が光つて來た。博士は煙草を吸ひながら私の傍まで來るといつた。

「君は妊婦体りたんか、どうしてする気になつたんだね。」

「からいふことも一度しておいたつて、いいと思つてるだけなんです。」

すると博士は私の顔をたちを経して見詰めながらいつた。

「君の顔は面白い顔だね、此の頃の若い人の顔だね。」

「え。」

「まア、さう云ふ顔は、一般人に、一人もゐるかないかだ。君は何か何になつてゐたら、さう云ふことに一番頭がよくあつたがね。」

「あまり、これといつて何も興味が起りません。」

「ふむ、君は創作のやうなものをやつてゐないかね。」

「時々、随筆のやうなものはやつてみましたが、どうも自信がないのでよしました。」

「おや、一度一つ何でもいいから、持つて來て見せてくれ給へ。」

多分、博士は私の精神鑑定をする氣にちがひない。私も博士がさうなると、眼前に並んだ妊婦の子を産む古びた器官を眺めながら、何時かはこの瓶の上へ並べて欲しい希望を書いてみようと考へた。

十八

K博士が私を研究するそれのやうに、私は前からもう一つのことを、私を實験してみなくてはならなかつた。私は妻子に博士の私に云つたことを説明して、私のモデルになるやうにすすめてみた。それは妙であつた。私が私の一室に籠居してゐるときに、妻子が私の隣室で寝をとるといふ事實である。私はそのときの私の精神が自然の中で、いかなる推移を始めるかそれを一つ試験にかけて観察しようと思つていた。それには私は妻子と私との關係について書かなければならぬ。私は此の一篇を内容の象徴と

して、ネロニヤスのやうに眼に見えた虱と名付けて書き出さう。

だが、辰子は私に云つた。

「あなたは、そんなことばかり面白がつて、どうなさるの？」

「お前には云つたつて分らないが、俺はこれでもなかなか馬鹿の出来ない學者なんだ。俺はお前と俺との精神作用を愛し、遂に一博士になるのだ。」と私は眉を顰めて云つて來た。

「おや、あたしのすることは、何でもあなたの役に立つのね。」

「うむ、さうだ。だからお前は俺の云ふことなら、何でもきくやうにしてゐてくれ。」

私の愉樂は生活の中で、恰も草や毛物のやうに充ち滿ちて行くばかりである。

十九

いよいよ約束してゐた夜になつた。私は隣室を覗き眺められる裝置をした唐紙の中に隠れてゐた。辰子は頭の禿げた逞しい四十五六の男と一緒に入つて來た。彼女は私を樂しめるために無言な命りを見つて大きな表情を造つてゐる。男は煙草を吹かせながら相場の話をし出した。が、話がすむと、男は煙草の火を火鉢の縁でにじり消して、彼の本能に火を點けた。すると急に辰子の身體は微動する刺青のやうになまめかしい動物に變つて來た。思ふに辰子は突如として私に復讐する快感に醉はれたのであらう。だが、今は、私の體内からは道徳的な桎梏が悉く崩壊した。此の私の顔を見るが良い。私は墮落の頂點に達してゐる。辰子は私に對する復讐に滿ち足りたかのやうに憎悪極まる美しい線を描いてゐる。だが、何といふこれは絢爛な歓びであらう。が、ふと私は眼前の光景とは全く別な、闇室の水面にひよつこり浮き上つた死體の姿を思ひ出した。私の精神は再び落ちつきを取り戻した。私は自分を欺くために傍にあつた鉛筆をとると、眼にしてゐる華やかな風景を寫生し始めた。と、私は彼女が嘗て私の愛人であつた昔の可憐な姿を思ひ出した。これが人生の眞相であらうか。これが、此の變化か。と、私は突然聲を放つて泣き出した。が、その聲が咽喉まで上つて來ると、忽ちそこで奇怪な笑ひ聲に變つていつた。私の腹は團扇のやうに波打ち出した。私は唐紙を掴むとがたがたと揺れるやうに揺り動かした。私は隣室へ飛び込んだ。すると、辰子は母親のやうに澄して煙草を喫つて私を見上げてゐた。私は捲けた袖を小指の先で摑へられたと同様だ。私は逃げて歸つた客の後へ坐ると眞正面から辰子の顔を眺めてゐた。

「こんどは、どんなことをするの。」と辰子は云つた。

此のとき、ふと私は彼女を教唆して私を殺させてみたい誘惑を感じて來た。私は云つた。

「こんどは、俺を殺すのだ。」

「まう、おや。」と彼女は云ふと、客の忘れていつた煙草を抜いてすはりすはりと吸ひ始めた。

私は自殺したければ、私は彼女の斯うした落付いた色彩に見て頼もしさを感じ始めたのだ。

私は明らかに彼女との勝負には敗北した。すると、不意に私には彼女の肉體の美しさが分かるやうに、彼女の内臓を分裂させてみたい欲望を感じて來た。

「おい。」と私は云つた。

「何に。」

「俺はお前にやきもちを焼き出したんだ。これは、俺がどんなに威張つたつて、お前を愛し出したと云ふ證據だ。だから、お前はもうここに

ゐてはいけない。行く所があるなら今の中だ。もしお前がこれ以上ここにをれば、俺はお前を殺すかもしれないぞ。」

「殺したいなら、殺しなさいよ。」と彼女は云つた。

「お前は恐くはないのか。」

「あたし、恐いことなんて、この世の中に何にもないわ。」

「おや、結構な話だ。しかし、お前が俺の傍にをれば、もう今迄のやうな工合にはいかないぞ。それでもいいか。」

「いいわ。だつて、あたしは今迄のやうなことには、もう倦き倦きしちやつたの。」

彼女は覚悟を定めたらしい。

二十

私はたうとう薬局室から砒素を盗んで帰つて来た。私は辰子と向ひ合ふと、紙に包んだままその砒素を机の上へ置いて云つた。

「これは砒素だ。いいかい。これを飲むと眠るやうに死ねるんだよ。俺はこれを此の机の引出へ入れておく。お前、これがなくなつたときは俺かお前か、どちらかが飲まされたときだ。分つたね。」

辰子は私の顔色を窺ふやうに冷たく黙つて私を眺めてゐた。

私は砒素を机の中へ入れるとまた彼女に云つた。

「これは、俺が飲まされるかお前が飲まされるか、どつちかは分らないが、飲まされた方は自殺になるんだよ。分つたね。」

「だつて、あなたは、まだ死にたくはないんでせう。」

「いや、俺はもう生きてゐる資格のない人間だ。そりや、死ぬのは恐いと思へば恐いのだが、恐くないと思へば恐くないと云つた程度のものだから、俺ひとりだといつまでたつたつて、自分で死ねさうな気がしないのだ。しかし、結局は死ぬ方がいいんだから、遠慮はいらない。」

事実、私は彼女を殺さうとしてゐるのか、彼女に私を殺させようとしてゐるのか、[illegible]私の実験精神なのか、それさへ私には朦朧としてゐて分らないのだ。しかし、それなら、いつたい辰子は私を殺さうと思つてゐるのか。彼女は二度目に私と逢つてから私の云ふことに反対したためしが一度もない。さうと思へば彼女は何事でもやつてのける所がある。ただ、辰子は私を殺して何になるか。しかし、私に殺されると思へば彼女から先に私を殺さないとは限らないのだ。彼女としてもまた私のことを、私が彼女について考へてゐるのと同様に、考へてゐるのにちがひあるまい。

二十一

食事のときが来ると私はいつも机の中の砒素のことを思ひ出した。私は辰子の惣菜の盛り方を眺めながら、もしや此の中にと思ふのだ。辰子は無表情な[illegible]のやうに平然として私に云ふ。

「さア、お上りなさいな。」

私は此の大胆不敵な女に興味を見てゐるのではないのだ。私は厳しい[illegible]に刺されながら茶碗を持つた。私は自分の顔の[illegible]で彼女の表情を見詰めながら食物を口の中へ投げ入れた。すると、彼女も私の食べた食ひ物に手をつけた。

此の女は俺と一緒に死にたいんだ、ふとさう思ふと、私は彼女の[illegible]に手を触れてみずにはをれなかつた。

「お前は、何のために生きてゐる。」

「そんなこと知らないわ。」

[illegible]彼女の[illegible]な目を見せる

ると、私はまた平氣になつてすごすごと箸をとつた。時々私は食事の後に急に眠けに襲はれた。「やられた」と思ふと砒素の入つた机の引出を見たくなつた。が、彼女のことをそれほどまでに心の問題にしてゐたことに氣がつくと自分が憐れに思はれてならなかつた。私は思ひとまつてそのまま床の中に入つて了ふ。すると、幾時が來ても私は眠れないのだ。私は眠れないままに夜中眼を開けた。すると、辰子の眼は皮膚を破つてぢつと私を見詰めてゐた。二人の眼と眼は無言のまま互に心を見ようとした。

「あなたはいつ殺すの。」

「お前はいつだ。」と瞳の中で探り合ふ。

二人は自分の尖端がカチリと觸れ合つた刹那のやうに、驚いてどちらも眼を閉ぢた。

二十二

私は「眼に見えた虱」の最後に解剖室の感想を持つて來て、結句をエビングハウスの心理學の中から抜萃した。實はその句で死人を常に脅迫してゐるＫ博士の胸を一突き突きたかつたのだ。

"He whose eye is so keen that he sees the dead in the grave no longer sees the flowers blooming."

實に此の皮肉な句は私を此の世から救つてくれたと同然だつた。虚榮心と云ふものは有難い。Ｋ博士は私を呼ぶと、「眼に見えた虱」を知人のある雜誌編輯者に紹介しようと云つてくれた。その時博士は最後の句のことを話して私に云つた。「君はエビングハウスを讀んだかね。あの最後は、一寸僕にあたつてゐるね。」

「いえ、あれは僕自身に云つたんです。」

「いや、まアそれはいいが、もう僕もあまり死人を見ないやうに心掛けないと、花はいつまでたつても咲かないよ。」と博士は笑つて云つた。

私は逆襲されたのだ。だが、此の逆襲ほど私に光明を與へてくれたことはまたとあらうか。私は此のときから、死が僕に恐ろしくなり出したのだ。私は厭世主義について簡潔明瞭な答へを云ふ。

「それは、光明がないからだ。」と。

私はかく急變した私について考へた。私は安價な人間に生きなかつたのであらうかと。だが、私は直ちに辰子に別れを告げた解答を、一時も早くしてみたくてならなかつた。

「何故にわれわれは、あの重々しい厭世と云ふ贅澤品と此の輕快な喜びとを交換してはいけないのか。」

私は家へ歸ると辰子の知らない間に砒素を取り出して捨てて了つた。私は天上を仰ぐ鯉のやうに、浮き上つた瞬間たりとも光りを眺めてゐたい平凡な人間の一人となつた。われわれは出世をしない限り、われわれの中から平凡さはいつまでたつても脱けないのだ。

二十三

夜中眼が醒めると辰子は私を激しく搖り起してゐた。

「あなた、あなた。」

「何だ。」

「あなた、飲んだでせう。」と彼女は云つた。捨てて了つた砒素のことだ。

「うむ。」と私は云つた。

「いやだ、いやだ。」

「俺が死んだつて、お前は寢てれば、それでいいんだ。」

「あなたが死ぬなら、あたしも死ぬ。」

「馬鹿を云へ。」

「いやだ、いやだ。」

「寝ろ。」と私は云つた。
彼女は私の胸の上へ額をつけるといつまでも泣きじやくつてゐた。
私は此の思はぬ彼女の不意打ちを利用して、出来得る限り彼女の美しさを認めてやらうと努めた。そこで、私はますます深く彼女の悲しさを誘ひ出さうとして黙つてゐた。すると、辰子は急に飛び起きて表の方へ駈け出さうとした。看護婦を呼びに行くのにちがひない。私は彼女の飛び立つ片足を摑まへた。
「どこへも行くな。」
彼女は私を突き放さうとした。私は彼女の片腕を摑んでまた云つた。
「俺の云ふことをきけ。俺はお前に云ふことがある。」
辰子は私の傍らへ帰ると静かに私の頸を抱き出して、私の戯れはいつの間にかまたここまで展開して了つた。だが、私はあまりに朗らか過ぎたこの結論にてれて了つて黙つてゐた。此の私の沈黙は深夜の魔力のために彼女には荘厳なまでに見えたにちがひない。彼女は突然また私の胸の上へ崩れて泣き出した。もう仕方がない。私は明日の朝まで辰子の此の必死の真面目さを尊重してゐなければならないのだ。しかし、この考へは咄嗟に私の奇怪な復讐心に火を點けた。私は彼女に對して受けた屈辱に復讐しない限り、斷して後悔はしないであらう。私は死に近く眞似をしながら愛について厳粛に考へた。だが、辰子の此の私に與へてゐる今の擧動は愛でなくてなんであらうか。とは云へ私の此の擧動もまた愛でなくて何であらう。私は彼女の愛を見たいのだ。
「おい、俺は前からお前に、俺の子供を産んで貰ひたいと思つてゐたのを知つてゐるか。」と私は云つた。
すると、辰子の途切れてゐた泣き聲は、再び喰び込むやうに高まつた。私は私の動作が全く僞りであると云ふことを告げる機會がますますなくなつて来たのである。もう私はそのままぢつと寝てゐることが出来なくなつた。私は起き上ると外へ出ようとして戸口の方へ歩き出した。すると、辰子は私とは反對の方へ立つていつた。私は振り向いて、彼女は机の引出から剃刀を取り出して握つてゐた。私は彼女の背後から飛びかかると剃刀を押へて云つた。
「馬鹿な、よせ。」
瞬間、私は私もまた驚かされてゐたやうな氣持になつた。私は剃刀を取り上げると辰子の動かぬ後姿を眺めながら、此の女は俺より深刻に芝居を打つてゐたのではないかと思ひ出した。
私は辰子を床につかせて了ふと自分も寝た。どちらもいつまでも黙つてゐた。思ふに辰子は私の僞りを知つたのにちがひないのだ。

二十四

「眼に見えた風」と書いた雑誌の廣告が新聞に出た。私の名前がそこに出てゐる。私は朝の茶を飲みながら辰子に新聞を見せて云つた。
「おい、お前も俺に出世をさせてくれたらしいぞ。もつと、うんと悪いことをしてくれよ。」
「あら、あら。」と、辰子は云つて新聞を眺めてゐた。
彼女の喜びに満ちた顔は、彼女から見てゐても分つたに違ひない。私は彼女のその驚きを疑ふほど、彼女から絶望を奪ひられなかつた過去の私に感謝する。
「今日は何かお祝ひしなくちやならないわ。」と辰子は云つた。
「うむ、祝つてくれ。」
「あなたがこんなに出世をなすつたんだから、お祝ひにあたしがここから出ていくわ。」

それが、私と彼女との最後の楽しみになるものであらうか。私は云つた。

「出て行きたいなら、出て行くがいい。しかし、もう僕なんか捨てたぢやないか。」

「だつて、あなたには、いい奥さんがいくらでも来てよ。」

「女と云ふものは、そんなもんかい。」

「ええ、さう。だつて、あたしだつて、さうなんですもの。」

「おや、女と云ふものは、俺がかうなると出て行くものか。」

「そりやそんなものだわ。だつて、あたしはもう汚いわ。あなたから嫌はれないうちに、行かなくちや。」と彼女は云ふと、ぼんやり落ちついて煙草を吸つた。

いつたい何が辰子をこんなにも美しく洗濯してゐたのであらう。此の見えざる洗濯屋は私であつたのか。だが私は彼女にとつては惨忍冷酷な良人であつた。

二十五

辰子が私の留守に家出をしてから一週間もたつた頃、各新聞は一齊に私の眼に見えた虱について批評をし始めた。

T新聞の批評家は次のやうに云つてゐる。

「――此の作者の名には初めて接するが、作中の辰子たる賣笑婦はあまりに類型的にて面白くなし。しかし、私なる人物の辰子を愛してゐる苦惱や懊惱としたがら陰鬱な所、男の氣持がよく分る。見るべきものなり。」

A新聞の評――「私なる人物の實驗者に出逢ふ辰子の態度は宜し。男の方あまりに自己満足の嫌ひあるは作者の未だ社會を見てゐざる證據である。」

U新聞曰く――「辰子のことについて今少し書くべき必要がある。私なる人物が死に關係りをしてゐると云ふことについて辰子が何らかの關心を持つべきであらう。もし、私なる人物が虚榮のために秘してゐるとすれば、あまりに此の人物らしからざることではないか。」

F新聞曰く――「最初はだらだらしてゐるが私は終ひには胸を打たれた。賣笑婦になつて歸つて來た辰子の中から、作者は出來得る限り、汚れざる、面を見ようとしてゐる。そこが少し古い美しさだとは思つたが、これは近來の傑作だ。」

私は新聞の批評を見ると憂鬱になつた。此の程度の出世で、一人の女が家出をしたと云ふことは、社會がいかに奇妙な廻轉を、絶えず企てゐるかと云ふことを教へただけだ。

私はテーブルから離れると箒木を持つて解剖室の床の上を掃き始めた。私は一人の掃除夫にすぎないと云ふことを認識するために、腸や、足や、首や胃袋の間を渡りながら。

が、私は私の頭が、ホルマリンの池の中から浮き上つた曾てのあの死人の頭に似てゐたと云ふことで、博士に認められた男である。

もし頭の形がその者の運命を現してゐるものなら、と私は呟いた。

私は盆の上に載つてゐる斬られた首の滑らかな斬り口を、横目でちらりと眺めてみた。

二十六

S子は私に逢ふといきなり云つた。

「あなた、見てよ、あの方どうしてらつしやるの。」

「ああ、あれですか、あの女は家出をしましたよ。」

「まア、さう、まるで、あたしみたいな方ね。あたしもあんな目に逢つたのよ。」

「あなたも？」

「ええ、あたしは、でも、相手があなたのやうぢ

やなかつたわ。もつとやきもち焼きで貧乏で、うるさいの。

「おや、やつぱり、僕みたいなもんですね。」

「あら、さうぢやないわ。あたし、あなたみたいな方だつたら、初めから家出なんかするものですか。あたしはあなたの、あんな所が好きなのよ。ほら、あんな、ね。」

ふと私は、此の汚れたハンカチのやうな女を、もう一枚洗濯させられるのではないかと考へた。そのとき、もうS子は私と肩を並べて勇しく街頭を歩いてゐた。私は汚れた女を洗へば洗ふほど、だんだん私だけが汚くなつていくのではあるまいか。此の眼に見えた風の中の、見えないにも、と、私の一歩一歩は、ホルマリンの池の中へずるずる辷り込むために動いてゐるやうに思はれて来てたまらなかつた。が、私はもう私を捨てねばならぬ。私は私を憐んではならぬ。私は一發の彈丸のやうに、私をしてあくまで無力な一つの思想の眼に見えぬ風、を切り裂かせなければならぬと考へた。

日輪

序章

乙女達の一團は、水甕を頭に載せて、小丘の中腹にある泉の傍から、唄ひながら、合歡木の林の中に隱れて行つた。後の泉を包んだ岩の上には、まだ濕つた馬醉木の花が、水甕の破片とともに踏みにじられて殘つてゐた。さうして、岡に圍まれた湖は、この小丘の裾遠く、濱に沿つた葦間の入江の上に、長く曲折しつつ遙か水平線の涯に消え入り、白い砂丘の上に、今は冷くその光りを投げてゐた。乙女達の合唱は靜かな湖面を渡つて響いて來た。さうして、林を拔けると、再び、人家を包む森の中から濃綠色の槲葉となつて、森の中へ、吸はれて行つた。四邊の風景は、何一つとして動くものは見えなかつた。

そのとき、今迄、泉の上の小丘を蔽つて靜まつてゐた若い樹蔭の一點が、こまかに割れてざわめいた。すると、割れ目は樹枝の擦れ合ふ響きと、互とを擦り合はせつつ、次第に泉の方へ眞直ぐに延びて來た。さうして、間もなく、泉の水面に映つてゐる、白雲の一列が裂かれたとき、そこには弦の切れた短弓を握つた一人の若者が立つてゐた。彼の大きく窪んだ眼窩や、その突起した顴骨や、その鷲のやうに鋭角な鼻の色には、遠くに逃げた者の極度の疲勞と憔悴の苦痛が現れてゐた。彼は這ひながら岩の上に降りて來ると、弓杖ついて、崩れた角髮をかき上げながら、渇く樣な青苔を擦いた唇を、泉につけた。彼の首から垂れ下つた一連の白瑪瑙の勾玉は、音も立てず水に浸つて、靜に藻を食ふ魚のやうに光つてゐた。

一

太陽は入江の水平線へ一線の一點となつて沒していつた。不彌の宮の高殿では、桐木の木蔭に吊り下げられた鳥籠の中で、鸚鵡が習ひ覺えた卑彌呼の名を、一聲呼んで眠りに落ちた。磯からは、滿潮のさざめきを寄せる波の音が、刻々に高まりながら、濱藻の匂ひを籠めた微風に送られて響いて來た。卑彌呼は薄桃色の染衣に身を包んで、寵愛の彼女の良人となるべき卑狗の大兄と向き合ひながら、鹿の毛皮の上で管玉と勾玉とを選り分けてゐた。卑狗の大兄は、砂濱に輝き始めた漁夫の松明の明りを、振り向いて眺めてゐた。

「見よ、大兄、爾の勾玉は亥猪の爪のやうに穢れてゐる。」と、卑彌呼は云つて、大兄の勾玉を彼の方へ差し示した。

「やめよ、爾の管玉は病める蠶のやうに曇つてゐる。」

卑彌呼のめでたきまでに玲瓏とした顔は、曇り大兄を睨んで默つてゐた。

「大兄、以後我は玉の代りに、眞砂を爾に見せるであらう。」

「爾の玉は爾の小指のやうに穢れてゐることと、」大兄は云ふと、その皮肉な微笑を浮べた顔を、再び砂濱の松明の方へ、振り向けた。「見よ、松明は輝き出した。」

「此處を去れ、此處は爾のごとき男の入る可き處ではない。」

「我は歸るであらう。我は爾の管玉を奪へば爾を置いて歸るであらう。」

「我の玉は爾に穢された吾身のやうに穢れてゐる

る。行け。」
「待て、爾の玉は爾の靈よりも光つてゐる。玉を與へよ。爾は玉を與へると我に云つた。」
「行け。」
卑狗の大兄は笑ひながら、自分の勾玉をさらさらと小壺に入れて立ち上つた。
「今宵は何處で逢はう？」
「行け。」
「高屋で待たう。」
「行け。」
大兄は遣戸の外へ出て行つた。卑彌呼は殘つた管玉を引きちぎれた裳裾の端で掃き散らしながら、彼の方へ走り寄つた。
「大兄、我は高倉の傍で爾を待たう。」
「我はひとり月を待たう。今宵の月は滿月である。」
「待て、大兄、我は爾に玉を與へよう。」
「爾の玉は、眞に與へられた僞のやうに輝いてゐる。」
大兄の跫音は、忍竹を連ねた瑞籬の横で起ると、夕闇の微風に揺れてゐる萩の葉擦れの中に續いていつた。卑彌呼は素衣の袖を胸に組みながら、遠く萩の葉の中へ消えて行く大兄の頭を見詰めてゐた。

二

夜は暗かつた。卑彌呼は鹿の毛皮に身を包んで宮殿から脱け出ると、高倉の藁戸に添つて大兄を待つた。栗鼠は頭の上で、栗の梢の枝を揺めて音を立てた。
「大兄。」
野兎は茴麻の茂みの中で、眞に狙はれた青鷹の夢を見た。さうして、彼は飛び跳ねると、苺の蔓に突きあたりながら、榊子の葉叢の中へ馳け込んだ。
「大兄。」
梟は木患樹の梢を降りて来た。そして、嫁菜を踏みながら、落ちる萱茨の下を潜つて青蛙に飛びついた。
「大兄。」
併し、卑狗の大兄はまだ来なかつた。卑彌呼は藁戸の下へ蹲ると、ひとり、萩を引いては投げ、引いては投げた。月は高倉の千木を浸して現れた。萩の梢の露をふくんだ葉叢は、一齊に濡れた銀の鱗のやうに輝き出した。そのとき、鋭い口笛が萱叢の茂みの上から聞えて来た。卑彌呼は藁戸から身を起すと、萱叢の穂波の上に、半身を浸して立つてゐる、卑狗の大兄の方へ歩いていつた。
「大兄、大兄。」彼女は鹿の毛皮を後ろに跳ねて、彼の傍へ近寄つた。「夜は間もなく明けるであらう。」
併し、大兄は、輝く月から眼を放さずに立つてゐた。
「大兄よ、我は管玉を持つて来た。爾は受けよ。」と、卑彌呼は云つて玉を大兄の前へ差し出した。
「爾は何故にここへ来た？　我はひとり月を眺めにここへ来た。」と大兄は云つた。
「我は爾に玉を與へにここへ来た。受けよ、我は玉を與へると爾に云つた。」
大兄は卑彌呼の管玉を摑んでとつた。
「我は爾に逢はんがために、ここへ来た。ここへ来た。爾は我に玉を與へに、ここへ来た。爾は歸れ。」と大兄は云つて、再び空の月へ眼を向けた。
卑彌呼は黙つて萱叢の實をしごき取ると、大兄の横顔へ投げつけた。大兄は笑ひながら、急に卑彌呼の方へ振り向いた。さうして、彼は、彼女の肩へ兩手をかけて、彼女を引き寄せようとすると、彼女は大兄の腕を突いて身を放した。
「我は歸るであらう。我は爾に玉を與へた。我は

は歸るであらう。」

「よし、爾は歸れ、爾は歸れ。」と、大兄は云ひながら、彼女が振り放さうとする兩手を持つた。さうして、彼は、彼女を引き寄せた。

「放せ、放せ。」

「歸れ、歸れ。」

大兄は荒搔く卑彌呼を横に輕々と抱き上げると、どつと草叢の中へ腰を落した。さらさらと搖めいた草叢は、その實を擦つて二人の上で鳴つてゐた。

「卑彌呼、見よ、爾は彼方の月のやうに美しい。」

彼女は大兄の腕の中に抱かれたまま、今は靜に眼を閉ぢて、彼の胸の上へ頰をつけた。

「卑彌呼、もし爾が我が子を産めば、姫を産め。我は爾のごとき姫を欲する。もし爾が彦を産めば、我のごとき彦を産め。我は、爾を愛してゐる。爾は我を愛するか。」

しかし、卑彌呼は大兄を見上げて默つたまま、片手で彼の髮を撫でてゐた。

「ああ、爾は月のやうに默つてゐる。冷たき月は缺けるであらう。爾は歸れ。」

大兄は卑彌呼を搖つて捕まへた。が、彼女は微笑しながら、靜に大兄の顏を見上げて默つてゐた。

「歸れ、歸れ。」

と大兄は云ひつつ彼女を抱いた兩腕に力を籠めた。卑彌呼は大兄の首へ手を卷いた。さうして二人は默つてゐた。月は青い光りを二人の上へ投げながら、彼方の森からだんだん高く昇つていつた。そのとき、一人の痩せた若者が生薑を嚙みつつ木槵樹の下へ現れた。彼は破れた輕い麻鞋を水に浸つた袋のやうに重々しく運びながら、次第に草叢の茂みの方へ近寄つて來た。卑狗の大兄は足音を聞くと立ち上つた。

「爾は誰か。」

若者は立ち停ると、生薑を投げ捨てた手で、劒の頭椎を握つて默つてゐた。

「爾は誰か。」と再び大兄は云つた。

「我は路に迷へる者。」

「爾は何處の者か。」

「我は旅の者、我に糧を與へよ。我は爾に劒と勾玉とを與へるであらう。」

大兄は卑彌呼の方を振り向いて彼女に云つた。

「爾の早き夜は、不吉である。」

「大兄、旅の者に食を與へよ。」

「爾は彼を共なうて、食を與へよ。」

「良きか、旅の者は病者のやうに痩せてゐる。」

大兄は默つて若者の顏を眺めてゐた。

「大兄、爾はここにゐて、我を待て、我は彼を宮殿へ共なはう。」卑彌呼は毛皮を被つて、若者の方を振り向いた。「我に從つて爾は來れ。我は爾に食を與へよう。」

「卑彌呼、我は最早や月を見た。我はひとり歸るであらう。」と、大兄は彼女を睥んで云つた。

「待て、大兄、我は直ちに歸るであらう。」

「行け。」

「大兄よ、爾は我に代つて彼を共なへ、我はここで爾を待たう。」

「行け、行け、我は爾を待つてゐる。」

「良きか。」

「良し。」

「來れ。」と卑彌呼は若者に再び云つた。

若者は、月の光りに咲き出た夜の花のやうな卑彌呼の姿を、茫然として眺めてゐた。彼女は大兄に微笑を與へると、先に立つて宮殿の身屋の方へ、歩いていつた。若者は漸く麻鞋を動かした。さうして、彼女の影を踏みながら、その後から從つた。大兄の顏は顰んで來た。彼は小石を拾ふと森の中へ投げ込んだ。森は[illegible]の槲の

葉から、月光を拂ひ落して呟いた。

三

身屋の贄殿の二つの隅には、松明が燃えてゐた。一人の膳夫は、松明の焔の上で、鹿の骨を焙りながら、明日の運命を占つてゐた。彼の恐怖を浮べた赭い横顏は、立ち昇る煙を見詰めながら、だんだんと悦びの色に破れて來た。そのとき、入口の戸が押し開けられて、後に一人の若者を從へた王女、卑彌呼が入つて來た。膳夫は振り向くと、火のついた鹿の骨を握つたまま、眞菰の上へ跪拜いた。卑彌呼は後の若者を指差して、膳夫に云つた。

「彼は路に迷へる旅の者。彼に爾は食を與へよ。彼のために、爾は臥所を作れ。」

「酒は？」

「與へよ。」

「栗は？」

「與へよ。」

卑彌呼は若者の方を振り向いて彼に云つた。

「我は爾を殘して行くであらう。爾は爾の欲する物を彼に命じよ。」

卑彌呼は鬘に插つた瑪瑙の勾玉を松明に輝かせながら、再び戸の外へ出て行つた。若者は眞菰の上に突き立つたまま、その落ち窪んだ眼を光らせて彼女の去つた戸の方を見つめてゐた。

「旅の者よ。」と、膳夫の聲が横でした。

若者は膳夫の顏へ眼を向けた。さうして、彼の指差してゐる下を見た。そこには、海水を湛へた盌の中に、海螺と山蛤が浸してあつた。

「彼の女は何者か。」

「此の宮の姫、卑彌呼と云ふ。」

「卑彌呼。」

膳夫は彼の傍から隣室の方へ下つていつた。軈て、數種の行器が若者の前に運ばれた。その中には、野老と蘿蔔と、朱實と栗とがはひつてゐた。槲の木の心から製した醯の酒は、その傍の酒瓮の中で、薫ばしい香氣を立てて、まだ波々と搖いでゐた。若者は片手で栗を摘むと、「卑彌呼」と一言呟いた。

そのとき、君長の階前から下つて來た一人の年老いた宿禰が、八尋殿を通つて贄殿の方へ來た。

彼は痼疾の中に衰へる老躯を、數人の使部に護られて、若者の傍まで來ると立ち停つた。

「爾は何處の者か。」

宿禰の垂れ下つた白い眉毛は、若者を見詰めてゐる眼の上で慄へてゐた。

「我は路に迷へる旅の者。」

「爾の額の刺青は玦である。爾は奴國の者であらう。」

「否。」

「爾の顎の刺青は月である。爾は奴國の貴族であらう。」

「否。」

「爾の脣の刺青は蔓である。爾は奴國の王子であらう。」

「否、我は路に迷へる旅の者。」

「やめよ。爾の祖父は不彌の王母を掠奪した。爾の父は不彌の靈床に火を放つた。彼を殺せ。」

宿禰の茨の根で作つた杖は、若者の方へ差し向けられた。忽ち、使部達の劍は鳴いた。若者は突つ立ち上ると、摑んだ栗を眞先に肉迫する使部の面部へ投げつけた。劍を拔いた。と見る間に、使部の片手は、劍を握つたまま、刎ねられて酒の中へ落ち込んだ。使部達は立ち停つた。若者は身を退くと、杉戸を背にして突き立つた。彼を目がけて劍が飛んだ。行器が飛んだ。毀つた酒瓮から酒が流れた。さうして、

海蟹や朱實が立ち籠めた酒氣の中を、杉戶に當つて散亂すると、再び數本の劍は、一齊に若者の胸を狙つて進んで來た。身屋の外では、法螺が鳴つた。若者は劍を揮はせて使部達の劍の中へ馳け込んだ。さうして、その背後で瘋疾に慄へてゐる宿禰の上へ、飛びかかると、彼を眞菰の上へ押しつけた。使部達の劍は再び彼に襲つて來た。彼は宿禰の胸へ、その劍の尖をさし向けると彼らに云つた。

「我を殺せ、我の劍も動くであらう。」

使部達は若者を包んだまま、動くことが出來なかつた。宿禰は若者の膝の下で、なほその老軀を慄はせながら、彼らに云つた。

「我を捨てよ。彼を刺せ、不彌のために、奴國の王子を刺し殺せ。」

併し、使部達の劍は振り上つたまま、下らなかつた。法螺はただ一つ、ますます高く月の下を鳴り續けた。銅鑼が鳴つた。兵士達の銅鉾を叩いて馳せ寄る響が、武器庫の方へ押し寄せ、更に貴殿へ向つて、雪崩れて來た。

「奴國の者が宮に入つた。」

「姫を奪ひに。」

「鏡を掠りに。」

騷ぎは人々の口から耳へ、耳から口へと、靜まつた身屋を包んで、波紋のやうに擴がつた。やがて、貴殿の內外は、兵士達の鉾尖のために明るくなつた。

「奴國の者は何處へ行つた。」

「奴國の者を外へ出せ。」

貴殿の入口は、動亂する兵士達の肩口で押し破られた。そのとき、彼らの間を分けて、一人、卑彌呼が進んで來た。兵士達は爭つて彼女の前に道を開いた。彼女は貴殿の中へ入ると、使部達の劍に包まれた若者の姿を眼にとめた。

「待て、彼は道に迷ひし旅の者。」

「彼は奴國の王子である。」

「彼は我の共なひし者。」

「彼の祖父は、不彌の王母を掠奪した。」

「劍を下げよ。」

「彼の父は、不彌の神庫に火を放つた。」

卑彌呼は使部達の劍の下を通つて、若者の傍に出た。

「我は爾に食を與へた。爾は爾の國へ直ちに歸れ。」

若者は踏み敷いた宿禰を捨てて、劍を投げた。さうして、卑彌呼の前に跪拜くと、彼は、亂れた角髮の下から眼を光らせて、彼女に云つた。

「姫よ。我を爾の傍におけ、我は爾の下僕にならう。」

「爾は歸れ。」

「姫よ。我は爾に、我の骨を捧げよう。」

「去れ。」

「姫よ。」

「彼を出せ。」

使部達は劍を下げて、若者の腕を握つた。さうして、彼を戶外の月の光りの下へ引き出すと、若者は彼らを突き伏せ、再び貴殿の中へ馳け込んだ。

「姫よ。」

「去れ。」

「姫よ。」

「去れ。」

「爾は我の命を奪ふであらう。」

忽ち、兵士達の鉾尖は、勾玉の垂れた若者の胸へ向つて押し寄せた。若者は鉾先の映つた銀色の眼で、卑彌呼を見詰めながら、再び戶外へ退けられた。さうして、彼は數人の兵士に守られつつ、月の光りに靜まつた萩と紫苑の花壇を通り、紫竹の茂つた玉垣の間を白洲へぬけて、磯まで來ると、兵士達の嘲笑とともに、轟ツと濱藻の上へ投げ出された。一連の波が襲つて來

た。さうして、彼の頭の上を乘り越えて消えて行くと、彼は漸く半身を起して宮殿の方を見續けた。

四

「王子は歸つた。」

「呪禁師の言はあたつた。」

「峠を越えて。」

「矛木のやうに、痩せて歸つた。」

奴國の宮は、山の麓の篠屋の中から騷ぎ始めた。さうして、この騷ぎは宮を横切つて、宮殿の中に入つて行くと、夜になつて、神庫の前の庭園で、盛大な饗宴となつて變つて來た。

松明を咬んだ火串は圓形にその草野を包んで立てられた。集つた宮人達には、鹿の肉片と、松葉で造つた麁酒や醴の酒が配られ、大夫や使部には、和稻から作つた諸白酒が與へられた。さうして、宮の婦女達は彼らの前で、まだ花咲かぬ忍冬を頭に卷いた鈿女となつて、酒樂の歌を唄ひながら、踊り始めた。數人の若者から成る樂人は、樽や土器を叩きつつ、二絃の琴に拍子を打つた。

肥え太つた奴國の宮の君長は、[illegible]と二人の宿禰とを從へて、櫓の上で、痩せ細つた王子の長羅と並んでゐた。長羅は過ぎた狩獵の日、行方不明となつて奴國の宮を騷がせた。彼は十數日の間、深い山々を廻つてゐた。さうして、彼は不彌へ出た。曾てあの不彌の宮で、生命を斷たれようとした若者は彼であつた。

「長羅よ、見よ、奴國の女は美しい。」と君長は云つて踊る婦女子を指差した。「我は爾に妻を與へよう。爾は爾の好む女を捜せ。」

長羅の父の君長は、妃を失つて以來、饗宴を催すことが最大の慰藉であつた。何ぜなら、それは、彼の面前で踊る婦女達の間から、彼の欲する淫蕩な一夜の肉體を選擇するに自由であつたから。さうして、彼は、回を重ねるに從つて常に一夜の肉體を捜し得た。今又彼は、櫓の上から二人の婦女に眼をつけた。

「見よ、長羅、彼方の女の踊りは見事であらう。」

長羅の細まつた憂鬱な眼は、踊りを外れて森の方を眺めてゐた。君長は空虚の酒盃を持つたまま、忙しさうに踊りの中へ眼を走らせながら、再び一人の婦女を指差して云つた。

「彼方の女は、子を産む猪のやうに太つてゐる。見よ、長羅、彼方の女は、子を孕んだ冬の狐のやうに太つてゐる。」

饗宴は酒甕から酒の減るにつれて亂れて來た。鹿は醉ひ潰れた若者達の間を漫歩しながら、酢漿草の葉を食べた。やがて一團の若者達は裸體となつて、榊の枝を振りながら婦女達の踊りの中へ流れ込んだ。このとき、人波の中から、絶えず櫓の上の長羅の顏を見詰めてゐる女が、二人あつた。一人は踊りの中で、君長の視線の的となつてゐた、濃艷な若い大夫の妻であつた。一人は松明の明りの下で、兄の訶和郎と竝んで立つてゐる、兵部の宿禰の娘、香取であつた。彼女は、奴國の宮の乙女達の中では、その美しい氣品の高さに於て嶄然として優れてゐた。

「ああ長羅、見よ、彼方に爾の妻がゐる。」と、君長は云つて、長羅の肩を叩きながら、香取の方を指差した。

香取の氣高き顏は、松明の下で、淡紅の朝顏のやうに、赧らんで俯向いた。

「王子よ、我の酒盃を爾は受けよ。」と、兵部の宿禰は傍から云つて、馬爪で作つた酒盃を長羅の方へ差し延べた。何ぜなら、彼の胸中に長く潜まつてゐた最大の希望は、今、漸く君長の脣から、流れ出たのであつたから。

併し、長羅の頭は、重く默つて横に振られ

た。彼の眼の向けられた彼方では、松明の一塊が、火串の蘿蔓を焼き切つて、赫々と草の上へ崩れ落ちた。一疋の鹿は、飛び上つた。さうして、踊りの中へ角を傾けて驅け込んだ。

「父よ、我は臥所を欲する。我を救せ。」

長羅はひとり立ち上つて櫓を降りた。彼は人波の後をぬけ、神庫の前を通つて暗い櫟の下まで來かかつた。そのとき、踊りの群から脱け出した一人の女が、後から馳けて來た。彼女は大夫の若い妻であつた。

「待て、王子よ。」と彼女は云つた。

長羅は立ち停つて後を向いた。

「我は爾の歸るを、月と星とに祈つてゐた。」

長羅は默つて再び母屋の方へ歩いていつた。

「待て、王子よ。我は夜の來る度に、爾の夢を見た。」

併し、長羅の足はとまらなかつた。

「ああ、王子よ。爾は我に言葉をかけよ。爾は我を、森へ共なへ。我は我の祈りのために、再び爾を櫓の上で見た。」

そのとき、二人の後から、一人の足音が蹤けて來た。それは、女の良人の痩せ細つた、若い大夫であつた。彼は青ざめた顔をして、慄へながら長羅に云つた。

「王子よ、女は我の妻である。願はくば、妻を斬れ。」

長羅は默つて、母屋の踏段に足をかけた。大夫の妻は、長羅の腕を握つてひきとめた。

「王子よ。我を共なへ、我は今宵とともに、死ぬるであらう。」

大夫は妻の首を掴んで、引き戻さうとした。

「爾は我を欺いた。爾は狂つた。」

「放せ、我は爾の妻ではない。」

「ああ、妻よ、爾は、我を欺いた。」

大夫は妻の髪を掴んで引き伏せようとしたときに、再び新しい一人の足音が、蹌踉めきながら、二人の方へ馳けて來た。それは酒盞を片手に持つた長羅の父の君長であつた。彼は踏み辷ると、土を片頬に塗りつけて起き上つた。

「女よ、我は爾を捜してゐた。爾の踊りは何物よりも見事であつた。來れ。我は今宵爾に、奴國の宮を與へよう。」

君長は女の腕を握つて踏段を昇つていつた。大夫は女の後から馳け登ると、再び妻の手を持つた。

「王よ、女は我の妻である。妻を救せ。」

「爾の妻か、良し。」

君長は、女を放して劍を抜いた。大夫の首は、地に落ちた。續いて胴が、高縁に倒れると、杉菜の中に靜まつてゐる自分の首を覗いて、動かなかつた。

「來れ。」と君長は女に云つて、その手を持つた。

「王子よ、王子よ、我を救へ。」

「來れ。」

女は君長を突き跳ねた。君長は大夫の胴の上へ仰向きに倒れると、露な二本の足を空間に跳ねながら、起き上つた。彼は酒氣を吐きつつ、その劍を振り上げた。

「王子よ、王子よ。」

女は呼びながら長羅の胸へ身を投げかけた。が、長羅の身體は立木のやうに堅かつた。劍は降りた。女の肩は二つに裂けると、良人の胴を叩いて轉がつた。

「長羅よ、酒樂は彼方である。朝はまだ來ぬ。行け。女は彼方で待つてゐる。」

君長は劍を下げたまま松明の輝いた草野の方へ、再び蹌踉めきながら第三の女を捜しに行つた。

長羅は突き立つたまま、二つの死體を眺めてゐた。さうして、彼は西の方を眺めると、

「卑彌呼。」と一言呟いた。

五

奴國の宮の鹿と馬とはだんだんと肥えて來た。しかし、長羅の頰は、日々に落ち込んだ。彼は夜が明けると、櫓の上へ昇つて不彌の國の山を見た。夜が昇ると頭首を垂れた。さうして、彼の脣からは、微笑と言葉が流れた星のやうに消えていつた。彼のこの憂鬱に最も愁傷した者は、彼を愛する叔父の祭司の宿禰と、香取を愛する兵部の宿禰の二人であつた。ある日、祭司の宿禰は、長羅の行方不明となつたとき、彼の行方を占はせた呪禁師を再び呼んで、長羅の病を占はせた。廣間の中央には、忍冬の模樣を描いた大きな薫壺が据ゑられた。その中の、菱殻の[illegible]の黄色い灰の上では、櫻の枝と鹿の肩骨とが積み上げられて燃え上つた。呪禁師はその立ち籠めた煙の中で、片手で玉串を上げ、片手で抜き放つた劍を持つて舞を舞つた。さうして、彼は薫壺の上で波紋を描く煙の姿を見詰めながら、今や神託の言葉を傳へようとしたとき、突然長羅は彼の傍へ、猛鳥のやうに馳けて來た。彼は呪禁師の劍を奪ひとると、再び萩の咲き亂れた庭園の中へ、馳け降りた。さうして、彼は[illegible]に[illegible]れかかつてゐた一疋の牝鹿を見とめると、一撃のもとにその首を斬り落して、呪禁師の方を振り向いた。

「來れ。」

呆然としてゐた呪禁師は、慄へながら長羅の傍へ近寄つて來た。

「我の望は西にある。いかが。」

「ああ、王子よ。」と、呪禁師は云ふと、彼の慄へる脣は、紫の色に變つて來た。

長羅は血の滴る劍を彼の胸さきへ差し向けた。

「云へ、我の望は西にある。良きか。」

「良し。」

「良きか。」

「良し。」と云ふと、呪禁師は仰向きに、嫁菜の上へ覆つた。

長羅は劍をひつ下げたまま、彼を押し開けて、八尋殿の君長の前へ馳けていつた。そこでは、君長は二人の童男に鹿の毛皮を着せて、交尾の眞似をさせてゐた。

「父よ、我に兵を與へよ。」

「長羅、爾の顏は瓜のやうに青ざめてゐる。爾は猪と鶴とを食へ。」

「父よ、我に兵を與へよ。」

「聞け、長羅、猪は爾の[illegible]を[illegible]らせるであらう。鶴は爾の顏を、朱に染めるであらう。爾の母は、我に猪と鶴とを食はしめた。」

「父よ、我は不彌を攻める。我に爾は兵を與へよ。」

「不彌は海の國、爾は魚を奪ふか。」

「奪ふ。」

「不彌は玉の國、爾は玉を奪ふか。」

「奪ふ。」

「不彌は美女の國、爾は美女を奪うて歸れ。」

「我は奪ふ、父よ、我は奪ふ。」

「行け。」

「ああ、父よ、我は爾に、不彌の寶を持ち歸るであらう。」

長羅は君長の前を下ると、兵部の宿禰を呼んで、直ちに兵を召集することを彼に命じた。しかし、兵部の宿禰は、此の突然の出兵が、娘、香取の上に、何事か悲しむ可き結果を齎すであらうことを洞察した。

「王子よ、爾は一戰にして勝たんことを欲するか。」

「我は欲す。」

「然らば、爾は我が言葉に從つて、時を待て。」

「爾は老者、時は壯者にとりては、無用である。」

一やめよ。我の言葉は、爾の希望のごとく重いであらう。」

長羅は唇を咬み締めて宿禰を見詰めてゐた。宿禰は吐息を吐いて、長羅の前から立ち去つた。

六

奴國の宮からは、兵部の玦璫の紺青を塗り潰された五人の使部が、偵察兵となつて不彌の國へ發せられた。さうして、森からは弓材になる梔や檀や梓が切り出され、鹿矢の骨片の矢の根は、征矢の兩端になつた矢竹とともに變へられた。猪の脂と松脂とを煮詰めた樹根は、弓弦を強めるために新しく武器庫の前で集せられた。兵士達は、この常とは變つて悠々とした戰ひの準備を、心密に嗤つてゐた。しかし、彼らの一人として、奴を憶ふ兵部の宿禰の計畫を洞察し得た者は、誰もなかつた。

偵察兵の歸りを待つ長羅の顔は、昂奮と決意のために、再び以前のやうに、男々しく逞しく輝き出した。彼は毎日武器庫の前の廣場で、馬を走らせながら劍を振り、敵陣めがけて突入する有様を眞似てゐた。しかし、卑彌呼を奪ふ日が、尚依然として判明せず焦躁さに耐へ得ることが出來なくなると、彼は一人、國境の方へ偵察兵を迎ひに馬を走らせた。

或る日、長羅は國境の方から歸つて來ると、泉の傍に立つてゐた兵部の宿禰の子の訶和郎が、彼の方へ進んで來た。彼は長羅の馬の擴がつた鼻孔を指差して、彼に云つた。

「王子よ、爾は爾の馬に水を飲ましめよ。爾の馬の呼吸は、切れてゐる。」

長羅は彼に從つて馬から降りた。そのとき、一人の乙女が垂れ下つた柳の絲の中から、揃へる兩腕に水甕を持つて現れた。それは兵部の宿禰の命を受けた、訶和郎の妹の香取であつた。彼女は美しく裝ひを凝した淡竹色の裳裾を曳きながら、泉の傍へ近寄つて水を汲んだ。彼女の肩から辷り落ちた一束の黑髪は、差し延べた白い片腕に絡まりながら、太陽の光りを受けた明るい泉の水面へ擴がつた。長羅は馬の手綱を握つたまま彼女の姿を眺めてゐた。彼女は汲み上げた水壺の水を、長羅の馬の前へ靜に置くと、赧らめた顔を俯向けて、垂れ下つた柳の絲を胸の上で結び始めた。

やがて、馬は水甕の中から頭を上げた。

「奴國の宮で、もつとも美しき者は爾である。」

と長羅は、云ふと、馬の上へ飛び乘つた。

香取の一層赧らんだ氣高い顔は、柳の絲で隱された。馬は再び王宮の方へ駈けて行つた。

併し、長羅は武器庫の前まで來たときに、三人の兵士が水壺の中へ、蒴藋木の汁を搾つてゐるのを眼にとめた。

「爾の汁は？」と長羅は馬の上から彼らに訊いた。

「矢鏃に塗つて、不彌の者を我らは攻める。」と彼らの一人は彼に答へた。

長羅の眼には、その矢を受けて倒れてゐる卑彌呼の姿が浮び上つた。彼は鞭を振り上げて、馬の上から飛び降りた。兵士達は跪拜いた。

「王子よ、赦せ、我らの罪は、直ちに一人を殺すであらう。」と一人は云つた。

長羅は毒壺を足で蹴つた。泡を立てた綠色の汁は、倒れた壺から草の中へ滲み流れた。

「王子よ、赦せ、我らに命じた者は宿禰である。」

と、一人は云つた。

忽ち毒汁の泡の上には、無數の山蟻の死骸が浮き上つた。

七

不彌の國から一人の偵察兵が奴國の宮へ歸つて來た。彼は、海上から新羅の船が、寶鐸と鏡と劍とを載せて、不彌の宮へ來ることを報告した。

長羅は直ちに出兵の準備を兵部の宿禰に促した。併し、宿禰の頭は重々しく横に振られた。

「爾は奴國の弓弦の弱むを欲するか。」と、長羅は云つて詰め寄つた。

「待て、歸つた偵察兵は一人である。」

長羅は沈默した。さうして、彼は、嘆息する宿禰の頭の上で、不彌の方を仰いで嘆息した。

六日目に第二の偵察兵が歸つて來た。彼は不彌の君長が、投馬の國境へ狩獵に出ることを報告した。

長羅は再び兵部の宿禰に出兵を迫つて云つた。

「宿禰よ、機會は我らの上に來た。爾は最早や口を閉ぢよ。」

「待て。」

「爾は武器庫の扉を開け。」

「待て、王子よ。」

「宿禰、爾の我に教ふる戰法は？」

「王子よ、狩獵の日は、危險である。」

「やめよ。」

「狩獵の日の警戒は、數倍する。」

「やめよ。」

「王子よ、爾の必勝の日は他日にある。」

「爾は必勝を敵に與ふることを欲するか。」

「敵に與ふるものは、劍。」

「爾は我の敗北を願ふ者。」

「我は、爾を愛す。」

長羅は鹿の御席の毛皮を、宿禰に投げつけて立ち去つた。

宿禰はその日、漸く投げ槍と楯との準備を兵士達に命令した。

四日がたつた。さうして、第三の偵察兵が奴國の宮へ歸つて來た。彼は、不彌の宮では、王女卑彌呼の婚姻が、數日の中に行はれることを報告した。長羅の顔は、兵部の宿禰の前で、見る見る中に蒼ざめた。

「宿禰、銅鑼を鳴らせ、法螺を吹け、爾は直ちに、武器庫の扉を開け。」

「王子よ。我らの聞いた二つの報道は、違つてゐる。」

長羅は無言のまま、宿禰を睨んで突き立つた。

「王子よ、二つの報告は殘つてゐる。」

長羅の脣と兩手は慄へて來た。

「待て、王子よ、長き時日は、重き資を齎すであらう。」

長羅の劍は、宿禰の上で閃いた。宿禰の屍は、耳と一緒に二つに裂けた。

間もなく、兵士を召集する法螺と銅鑼が、奴國の宮に鳴り響いた。兵士達は、八方から武器庫へ押し寄せて來た。彼らの中には、弓と劍と楯とを持つた訶和郎の姿も混つてゐた。彼は、この不意の召集の理由を父に訊き正さんがために、ひとり王宮の中へ入つていつた。併し、寂寞とした廣間の中で、彼の見たものは、御席の上に血に塗られて倒れてゐる父の一つの死骸であつた。

「ああ、父よ。」

彼は楯と弓とを投げ捨てて、父の傍へ馳け寄つた。彼は父の死の理由の總てを識つた。彼は血潮の中央に落ちてゐる、父の耳を見た。

「ああ父よ、我は復讐するであらう。」

彼は父の死體を抱き上げようとした。と、父の片腕は、衣の袖の中から轉がり落ちた。

「待て、父よ、我は爾に代つて、復讐するであらう。」

訶和郎は血に濡れた父の死體を背負ふと、馳せ違ふ兵士達の間をぬけて、ひとり家の方へ歸つて來た。

やがて、太陽は落ちかかつた。さうして、長羅を先頭に立てた奴國の軍隊は、宿禰の家の前を通つて不彌の方へ進軍した。訶和郎の血走つ

た眼と、香取の泣き濡れた眼とは、泉の傍から、荏杜の濃緑色の團塊に切られながら、長く竝のやうに輝いて動いて行く兵士達の鋒尖を、見詰めてゐた。

八

不彌の宮には、王女卑彌呼の婚禮の夜が來た。卑彌呼は寢殿の居室で、三人の侍女を使ひながら、式場に出る可き裝ひを整へてゐた。彼女は齋杭に懸つた鏡の前で、兎の脊骨を燒いた粉末を顏に塗ると、その上から、辰砂の粉を兩頰に掃き流した。彼女の頭髮には、山鳥の保呂羽を雪のやうに降り積もらせた冠の上から、韓土の瑪瑙と翡翠を連ねた玉鬘が懸かつてゐた。侍女の一人は、白色の絹布を卑彌呼の肩に着せかけて云つた。

「雲の下で、最も美しき者は、我の姫。」

侍女の一人は、卑彌呼の胸へ、琅玕の勾玉を垂れ下げて云つた。

「地の上の日輪は、我の姫。」

橘と榊の植つた庭園の白洲を包んで、篝火が赤々と燃え上ると、不彌の宮人達は各々手に數枚の柏の葉を持つて白洲の中へ集つて來た。

やがて、琴と笛と法螺とが緩やかに王宮の棟の方から響いて來た。十人の大夫が手火をかかげて白洲の方へ進んで來た。續いて幢を持つた三人の宿禰が進んで來た。それに續いて、劍を拔いた君長が、鏡を抱いた王妃が、さうして、卑彌呼は、管玉をかけ連ねた瓊矛を持つた卑狗の大兄と竝んで、白い孔雀のやうに進んで來た。宮人は歡呼の聲を上げながら、二人を目がけて手にした柏の葉を投げた。白洲の中央では、王妃のかけた眞澄鏡が、石の男根に吊り下がつた幣の下で、松明の焔を映して、朱の滿月のやうに輝いた。その後の四段に分れた白木の棚の上には、野の青物が一段に、山の果實と鳥類とが二段目に、鮑や鰹や鯉や鯰の川の物が三段に、さうして、海の魚と草とは四段の段に竝べられた。奏樂が起り、奏樂がやんだ。君長は鏡の前で、劍を空に指差して云つた。

「あゝ無窮なる天上の神々よ、吾らの祖先よ、二人を守れ。あゝ廣大なる海の神々よ、地の神々よ、二人を守れ。あゝ爾ら忠良なる不彌の宮の臣民よ、二人を守れ。不彌の宮は、爾らの守護の下に、明日の日輪のごとく榮えるであらう。」

周圍の宮人達の手が白い波のやうに搖れると、再び一齊に、柏の葉が投げられた。卑彌呼と卑狗の大兄は王宮の人々に包まれて、奏樂に送られながら、白洲を埋めた青い柏の葉の上を寢殿の方へ歸つていつた。群衆は歡びの聲を上げつつ、彼等の後に動搖めいた。手火や松明が、入り亂れた。さうして、王宮からは、鷄や諸白酒が、鹿や猪の肉片と一緒に運ばれると、白洲の中央では、薏苡の實を髮飾りとなした鈿女らが、山韮を振りながら、酒樂の唄を謠ひ上げて踊り始めた。やがて、酒宴と舞踏は深まつた。威勢良き群衆は、合唱から叫喚へ變つて來た。さうして、夜の深むにつれて、彼らの騷ぎは、叫喚から呻吟へと落ちて來ると、次第に光りを失ふ篝火と一緒に、不彌の宮の群衆は、間もなく曉の星の下で呟く、巨大な一塊のやうに見えて來た。

そのとき、突然、武器庫から火が上つた。と、同時に森の中からは、一齊に鬨の聲が群衆めがけて押し寄せた。それに應じて城からは、長羅を先驅に立てた一團が、花壇を突き破つて寢殿の方へ突擊した。不彌の宮の音樂は、再び宵のやうに騷ぎ立つた。松明は消えかかつたまま酒甕や祝瓮と一緒に飛び廻つた。さうして、投げ槍の飛び交ふ下で、鉾や劍が、撒かれた氷の

やうに輝くと、人々の身體は手足を飛ばして、間斷なく地に倒れた。
　長羅はひとり、轉がる人波を蹴散らして宮殿の中へ近づくと、宮殿の戸を突き破つて、寢殿の方へ馳け込んだ。廣間の布被を押し開けた。八尋殿を横切つた。さうして、奧深い一室の蒸被を引きあけると、そこには、白い羽毛の蒲團に被はれた卑彌呼が、卑狗の大兄の腕の中で眠つてゐた。
「卑彌呼。」長羅は入口に突き立つた。
「卑彌呼。」
　卑狗の大兄と卑彌呼とは、巣を亂された鳥のやうに、跳ね起きた。
「去れ。」と叫ぶと、大兄は壁柱に懸つた鹿の角を、長羅に向けて投げつけた。
　長羅は顏の前で鹿の角を跳ねのけると、卑彌呼を見詰めたまま、飛びかかる虎のやうに、小腰を屈めて忍び寄つた。
「去れ、去れ。」
　長羅に向つて鏡が飛んだ。玉が飛んだ。しかし、彼は無言のまま、卑彌呼の方へ近寄つた。大兄は、卑彌呼を後に守つて、彼の前に立ち塞がつた。
「爾は何故に、ここへ來た。」
と、大兄は云ふと、彼の胸には、長羅の劍が刺さつてゐた。彼は叫びを上げると、その劍を握つて、後へ反つた。
「ああ、大兄。」
　卑彌呼は良人を抱きかかへた。大兄の胸からは、血が、赤い花のやうに、噴き出した。長羅は、卑彌呼の肩に手をかけた。
「卑彌呼。」
「ああ、大兄。」
　卑狗の身體は、卑彌呼の腕の中へ崩れかかつて、息が絶えた。
「我は爾を奪ひに、不彌へ來た。卑彌呼、我とともに、爾は奴國へ來れ。」
　長羅は卑彌呼を抱き寄せようとした。
「大兄、大兄。」と彼女は云ひながら、卑狗の大兄を抱いたまま、床の上へ泣き崩れた。
　そのとき、奴國の兵士達は、血に濡れた劍を下げて、長羅の方へ亂入して來ると、口々に叫び合つた。
「我は、王を殺した。」
「我は、王妃を刺した。」
「不彌の鏡を、我は奪つた。」
「我は、寶劍と玉とを掠つた。」
　長羅は卑彌呼を床の上から抱き上げた。
「我は、爾を奪ふ。」
　彼は卑狗の大兄を、卑彌呼の腕から踏み放すと、再び宮殿を突きぬけて、廣場の方へ馳け出した。卑彌呼は長羅の腕の中から、小枝を拂つた桙の枝に、上顎をかけられた父と母との死體が、魚のやうに下つてゐるのを眼にとめた。
「ああ、我を刺せ。」
　焔の家となつた武器庫は、轉がつてゐる死骸の上へ、轟然たる響を立てて崩れ落ちた。長羅は卑彌呼を抱きかかへたまま、ひらりと馬の上へ飛び乘つた。
「去れ。」
　彼は馬の腹をひと蹴り蹴つた。馬は、石のやうに轉がつてゐる人々の頭を蹴散らして、森の方へ馳け出した。それに續いて、森に潜られた奴國の兵の鋒尖が、最初の朝日の光りを受けてきらめきながら、森の方へ揃れて來た。
「卑彌呼。」と長羅は云つた。
「ああ、我を刺せ。」
　彼女は馬の背の上で昏倒した。
　馬は走つた。萩と菫の花を踏みにじつて、奴國の方へ馳けていつた。
「卑彌呼。」

「卑彌呼。」

九

遠く人馬の蹄擾が闇の中から聞えて來た。訶和郎と香取は、戸外に立つて峠を見ると、松明の輝きが、河に流れた月のやうに長くちらちらとゆらめいて宮の方へ流れて來た。それは不彌の國から引き上げて來た奴國の兵士達の明りであつた。訶和郎と香取は、忍竹を連れた簀垣の中に身を潛めて、彼らの近づくのを待つてゐた。

やがて、兵士達のさざめきが、次第に二人の方へ近寄つて來ると、その先達の松明の後から、馬の上で、一人の動かぬ美女を抱きかかへた長羅の姿が、眼についた。訶和郎は劍を拔いて、飛び出ようとした。

「待て、兄よ。」と香取はいつて、訶和郎の腕を簀へ引いた。

先達の松明は、簀垣の前へ來かかつた。美女の片頰は、松明の光りを受けて、病める鶴のやうに長羅の胸の上で垂れてゐた。

訶和郎は劍を握つたまま、長羅の顏から美女の顏へ眼を流した。すると、憤怒に燃えてゐた彼の顏は、次第に火を見る嬰兒の顏のやうに弛んで來て、口を解いた。さうして、彼の厚い二つの脣は、兵士達の最後の者が、跛足を引いて木實を食べながら、宮殿の方へ去つて行つても開いてゐた。しかし、間もなく、兵士達の松明が、宮殿の草野の上で、圓く火の小丘を築きながら燃え上ると、訶和郎の脣は引きしまり、再び彼の兩手は劍を持つた。

「待て、兄よ。」

しかし、訶和郎の姿は闇の中を、夜蜘蛛のやうに宮殿の方へ駈け出した。

「ああ、兄よ。」と香取はいふと、彼女の悲歎の額は、重く數本の忍竹へ傾きかかり、さうして、再び地の上へ崩れ伏した。

十

訶和郎は兵士達の間を脫けると、宮殿の後屋の中へ入つていつた。さうして、室間の裏へ廻つて、尾花で編んだ玉簾の隙間から中を覗いた。

室間の中では、君長は二人の宿禰と、數人の軍男と使部とを傍に從へて、前方の薦被の方を眺めてゐた。數個の燈油の皿に燃えてゐる燈火は、一樣に君長の方へ搖れてゐた。暫くして、そこへ、數人の兵士達を從へて、現れたのは長羅であつた。

「父よ。我は勝つた。我は不彌の宮を、南北から攻め寄せた。」と長羅は言つた。

「美女は何處か。」

「父よ。我は不彌の宮に、立てる生物を殘さなかつた。我は王を殺した。王妃を刺した。」

「美女をとつたか。」

「我はとつた。さうして、寶劍と鏡をとつた。我の奪つた寶劍を、爾は受けよ。」

「美女は何處か。不彌の美女は、潮の匂ひがするであらう。」

長羅は兵士達の持つて來た劍と、靭の袋の中からとり出した鏡や瑪瑙の勾玉を、父の前に並べていつた。

「父よ。爾は爾の好む寶を選べ。寶劍は勇士の徴。奴國の武器庫を飾るであらう。」

「長羅よ。我は爾の殊勳に、爾の好む寶劍を與へるであらう。我に美女を見せよ。不彌の美女は何處にゐるか。」

君長は御席の上から、立ち上つた。長羅は一人の兵士に命じて言つた。

「連れよ。」

卑彌呼は後に劍を拔いた數人の兵士に守ら

れて、廣間の中へ連れられた。君長は卑彌呼を見ると、獸欲に聲を失つた笑顏の中から、今や手を延ばさんと思はれるばかりに、その肥えた體軀を搖り動かして、彼女に云つた。

「不彌の女よ。爾は奴國を好むか。我とともに、奴國の宮にとどまれ。我は爾に爾の好む何物をも與へるであらう。爾は玄猪を好むか。奴國の玄猪は不彌の鹿より脂を持つであらう。不彌の女よ。我を見よ。我は王妃を持たぬ、爾は我の王妃になれ。我は爾の好む蛙と鯉とを與へるであらう。我は加羅の翡翠を持つてゐる。」

「奴國の王よ。我を殺せ。」

「不彌の女よ、我の傍に來れ。爾は奴國の誰よりも美しい。爾は鐶を好むか。我の妻は黄金の鐶を殘して死んだ。爾は鐶を爾の指に嵌めてみよ。來れ。」

「奴國の王よ、我を不彌に歸せ。」

「不彌の女よ、爾は奴國の宮を好むであらう。我とともにゐよ。奴國の月は、田鶴のやうに[illegible]を[illegible]つてゐる。爾は奴國の月を眺めて、我とともに山蘭と[illegible]とを食へ。奴國の山蘭は、赤い卵を含んでゐる。爾は赤い卵を食へ。山蘭の卵は爾の腹から、我の強き男子を産ますであらう。來れ。我は爾のごとき美しき女を見たことがない。來れ、我とともに我の室へ來りて、酒盞を干せ。」

君長は刈薦の上に萎れてゐる卑彌呼の手をとつた。長羅の顏は、刺青を浮べて蒼白く變つて來た。

「父よ、何處へ行くか。」

「酒宴の用意は良きか。長羅よ、爾の持ち歸つた不彌の寶は、見事である。」

「父よ。」

「長羅よ、我は爾のために、新らしき母を與へるであらう。爾は臥所へ入つて、戰ひの疲れを憩へ。」

「父よ。」長羅は君長の腕から卑彌呼を奪つて突き立つた。不彌の女は、我の妻。我は妻を捜しに、不彌へ行つた。」

「長羅、爾は我を欺いた、不彌の女よ。我に來れ。我は爾を娶りに、長羅を遣つた。」

「父よ。」

「不彌の女よ、我とともに來れ。我は爾を、奴國の何物よりも愛でるであらう。」

君長は卑彌呼の手を引きながら、長羅を突いた。長羅は劍を拔くと、君長の頭に斬りつけた。君長は燈油の皿を覆して勾玉の上へ轉がつた。殿中は君長の周圍から騷ぎ立つた。

政司の宿禰は立ち上ると劍を拔いて、長羅の前に出た。

「爾は王を殺害した。」

長羅は宿禰を睨んで肉迫した。忽ち廣間の中の人々は、宿禰と長羅の二派に分れて爭つた。見る間に、手と足と、角髮を解いた數個の首とが斬り落された。燈油の皿は投げられた。さうして、室の中は暗くなると、跳ね上げられた鹿の毛皮は、閃々、劍の刃さきの上を、踊りながら放埓に飛び廻つた。

卑彌呼は蒸被を手探りながら闇にまぎれて、尾花の玉簾を押し分けた。その時、玉簾の後に今まで身を潜めてゐた訶和郎は、八尋殿の廻廊から洩れくる松明の光りに照らされて、突然に浮き出た不彌の女の顏を目にとめた。

「姫よ、待て。」

と訶和郎は云ふと、廣間の中へ[illegible]まうとしてゐたその身を屈して、彼女を横に抱き上げた。さうして彼は宮殿の庭に飛び下り、森の前へ駈けてくると、卑彌呼の耳に口を寄せて囁いた。

「姫よ、我と共に奴國を逃げよ。王子の長羅は、

我と爾の敵である。爾を奪はば、彼を我は殺すであらう。」

一頭の栗毛に跨が上つた。馬は闇から闇へ、二人を乘せて、奴國の宮を蹴り捨てた。

長羅は布被の前へ、追ひつめた宿禰の肩を斬り下げた。さうして、劍を引くと、「卑彌呼、卑彌呼」と呼びながら、高屋の中を馳け廻り、布被を引き開けた。長羅は跳ね上げた。庭園へ飛び降りて、横の草叢を掻き倒しつつ、廣場の方へ馳けて來た。

「不彌の女は何處へ行つた。探せ。不彌の女を捕へた者は、宿禰にするぞ。」

間もなく庭に積まれた松明の小丘は、馳け集つた兵士達の篝火に突き刺されて崩された。さうして、奴國の宮を、吹かれた火の子のやうに、八方へ飛び散ると、次第に陣に擴がりながら動搖めいた。

十一

訶和郎の馬は狭まつた谷間の中へ踏み入つた。前には、直立した岩壁から、瀑様に樹の森が下つてゐた。訶和郎は馬から卑彌呼を降ろして、彼女に云つた。

「馬は進まず。爾よ、爾は我とともに今宵をすごせ。」

「追手は如何に。」

「良し。爾よ。我は奴國の宿禰の子。我の父は、長羅のために殺された。爾を奪ふ兵士を奴國の宮に滯めて殺された。長羅は我の敵である。もし爾が不彌の國になかりせば、我の父は我とともに今宵を送る。爾は我の敵である。」

「我の良人は、長羅の劍に殺された。」

「我は知らず。」

「我の父は、長羅の兵士に殺された。」

「我は知らず。」

「我の母は、長羅のために殺された。」

「やめよ。我は爾の敵ではない。爾は我の敵である。不彌の女。我は爾を奪ふ。我は長羅に復讐のため我は爾に復讐のため、我は爾を奪ふ。」

「待て。我の復讐は殘つてゐる。」

「不彌の女。」

「待て。」

「不彌の女、我の願ひを容れよ。然らずば、我は爾を刺すであらう。」

「我の良人は、我を殘して死んだ。我の父と母とは、我のために殺された。我はひとり殘つてゐる。刺せ。」

「不彌の女。」

「刺せ。」

「我に爾があらざれば、我は死するであらう。我の妻になれ。我とともに生きよ。我に再び奴國の宮に歸れと爾は云ふな。我を待つは劍であらう。」

「待て。我の復讐は殘つてゐる。」

「我は復讐するであらう。我は爾に代つて、父に代つて、復讐するであらう。」

「するか。」

「我は復讐する。我は長羅を殺す。」

「するか。」

「我は爾の夫に代つて、爾の父と母に代つて、復讐する。」

「するか。」

「我は爾を不彌と奴國の王妃にする。」

その夜、二人は婚約した。頭の上には、蘭を絡つた藤蔓と、數條の蔦とが欅の枝から垂れ下つてゐた。二人の臥所は、羊齒と野蒜と刈萱とであつた。さうして、卑彌呼は、再び新らしい良人の腕の中に身を横たへた。訶和郎は馬から鹿の毛皮で造られた馬氈を降ろして、その妻の背にかけた。月は昇つた。訶和郎は奴國の追手を警戒するために、劍を抜いたまま眠らなかつた。

鼯鼠は楠の穴から出てくると、ひとり枝々の間を飛び渡つた。月の映る度毎に、鼯鼠の眼は青く光つて輝いた。さうして、訶和郎の二つの眼と劒の刃は、山蟹と知藍の中で輝いた。

その時、突然、卑彌呼は身を顫はせて、訶和郎の腕の中で泣き出した。

十二

その夜から、奴國の野心ある多くの兵士達は、不彌の女を探すために宮を發つた。彼らの中に荒甲と云ふ一人の兵士があつた。彼の額から片頰にかけて、田蟲が根強く巣を張つてゐたために、彼の炔形の青は、國の誰よりも淡かつた。

彼は卑彌呼が遁走した三日目の夜明けに、森を脱け出た河原の端で、馬の嘶きを聞きつけた。彼は芒を分けてその方へ近づくと、馬の傍で薜蘿を纏つてゐる不彌の女の姿が見えた。荒甲は矛を延ばして這ひ寄らうとした時に、兎と沙魚とを提げた訶和郎が芒の中から現れた。

「あゝ、爾は誰か。不彌の女を爾は見たか。」

荒甲は默つて不彌の女の姿を指さした。訶和郎は荒甲の首に手をかけた。と、荒甲の身體は、飛び散る沙魚と兎とともに、芒の中へ轉がされた。訶和郎は石塊を抱き上げると、起き上らうとする荒甲の頭を目蒐けて投げつけた。さうして、芒の莖にたかると、濡れた雞頭のやうにひらひらとゆらめいた。訶和郎は死體になつた荒甲の胴を一蹴り蹴ると、追手の跫音を聞くために地にひれ伏して苔の上に耳をつけた。彼は妻の傍へ馳けていつた。

「奴國の追手が近づいた。乗れ。」

馬は卑彌呼と訶和郎を乗せて瀬を渡つた。數羽の山鴨と雀の群れが、柳の中から飛び立つた。前には白雲を棚曳かせた連山が、眞菰と芒の穗の上に連つてゐた。

「かの山々は。」

「不彌の山。」

「追手は不彌へ廻るであらう。」

「廻るであらう。」

卑彌呼は訶和郎とともに、不彌に殘つた兵士達を集めて奴國へ征め入る計畫を立ててゐた。しかし、二人を乗せた馬の頭は進むに從ひ、不彌を外れて耶馬臺の方へ進んでいつた。秋の光りは訶和郎の背中に纏つた衣の結び目を中心として、羽毛の雲のやうな芒の穗波の上に明るく降り注いだ。さうして、微風が吹くと、一様に背を曲げる芒の上から、首を振りつつ進む馬の姿が一段と空に高まつた。空では、鶻子と鳶とが圓く空中の持場を守つて飛んでゐた。

十三

その夜、二人は數里の森と、二つの峯とを越して小丘の原に到着した。そこには椎と蜜柑が茂つてゐた。猿は二人の頭の上を枝から枝へ飛び渡つてゐた。訶和郎は野犬と狼とを防ぐがために、榾柮を焚いた。彼等は、數日來の疲勞から、追手の眼よりも、野獸の牙を恐れねばならなかつた。卑彌呼はひとり、訶和郎に添つて身を横たへながら目を開いてゐた。なぜなら、その夜は彼女の夜警の番であつたから。夜は更けた。彼女は椎の梢の上に、輝つた笹葉の上に、さうして、靜な暗闇に垂れ下がつた蘿蔓の隙々に、亡き卑狗の大兄の姿を見た。

卑狗の大兄の幻が彼女の眼から消えてゆくと、彼女は涙に濡れながら、再び燃え盡きる榾柮の上へ、新らしく榾枝を盛り上げた。猿の群れは梢を降りて、焚火の周圍に集まつて來た。さうして、彼女が榾枝を火に差し加へる度毎に、彼らも[illegible]を眞似て[illegible]頷いた。

[illegible]の次第に[illegible]かけた頃、山[illegible]の闇の中か

ら、突然に地を踏み鳴らす軍勢の響が聞えて來た。卑彌呼は傍の訶和郎を呼び起した。

「奴國の追手が近づいた、逃げよ。」

訶和郎は飛び起きると足で焚火を踏み消した。再び兵士達の鯨波の聲が張り上つた。二人は馬に飛び乘ると、立木に突きあたりつつ小丘の頂上へ驅け登つた。すると、芒の原に掩はれたその小丘の背面からは、一齊に枯木の林が動搖めきながら二人の方へ進んで來た。それは牡鹿の群れだつた。馬は散亂する鹿の中を突き破つて驅け下つた。と、原の窪から白茅を踏んで一團の兵士が現れた。彼等は一列に並んだまま、裾から二人の方へ締め上げる袋の紐のやうに進んで來た。訶和郎は再び鹿の後から頂上へ驅け戻つた。その時、楢と蜜柑の原の中から、再び新らしい鹿の群れが頂へ向つて押し寄せて來た。さうして、訶和郎の馬を包んだ牡鹿の群れの中へ突入して來ると、鹿の團塊は更に大きく擾亂しながら、吹き上げる黒い泡のやうに頂上で動搖めいた。しかし、間もなく、渦巻く彼らの團塊は、細長く山の側面を川波のやうに流れていつた。と、行手の裾に、兵士達の松明が點々と列を出した。さうして、それらの松明は、見る間に一列の弧線を描いて擴がると、忽ち、全山の裾を圓形に取り包んで縮まつて來た。鹿の流れは訶和郎の馬を浮べて頂上した。再び彼らの團塊は、小山の頂で踏み合ひ乘り合ひつつ沸騰した。松明を映した鹿の眼は、明滅しながら彈動する無數の玉のやうに輝いた。その時、一つの法螺が松明の中で鳴り渡つた。兵士達の收縮する松明の環は停止した。それと同時に、芒の原の空中からは一齊に矢の根が鳴つた。鹿の群れは悲鳴を上げて散亂した。訶和郎の馬は跳ね上つた。と、訶和郎は卑彌呼を抱いたまま草の上へ轉落した。しかし、彼は窪地の中へ這ひ降りると、彼女の楯のやうにひれ伏して矢を防いだ。矢に射られた鹿の群れは原の上を狂ひ廻つて地に倒れた。忽ち窪地の底で抱き合ふ二人の背の上へ、鹿の塊りがひき續いて落ち込むと、間もなく、寂然として盛り上つた彼らは、突き合ひ蹴り合ひつつ次第に靜に死んでいつた。さうして、彼らの傷口から迸る血潮は、谷地の隙間を漏れる泉のやうに、滾々と流れ始めると、二人の體を浸めながら、窪地の底の蘚苔の中まで滲み込んでいつた。

十四

訶和郎と卑彌呼を包んだ兵士達は、君長に率ゐられて、遠卷きに鹿の群れを卷き包んで來た耶馬臺の國の兵士達であつた。彼らは小丘の頂上で狂亂する鹿の群れの鎭まるのを見ると、松明の持ち手の後から頂へ驅け登つた。明るく輝き出した頂は、散亂した動かぬ鹿の野原であつた。軈て、兵士達は松明の周圍へ悉く集つて來ると、夫々一匹の鹿を引き摺つて、再び山の麓の方へ降りていつた。その時、頂上の窪地の傍で、群つた一團の兵士達が、血に塗つた訶和郎と卑彌呼を包んで喧騷した。二人を見られぬ者達は、遠く人垣の外で口々に云ひ合つた。

「鹿の中から美女と美男が湧いて出た。」

「赤い美女が、鹿の腹から湧いて出た。」

「鹿の美女は人間の美女よりも美しい。」

軈て、兵士達の集團は、訶和郎と卑彌呼を包んだまま、彼等の君長の反耶の方へ進んでいつた。

「王よ。」と兵士達の一人は跪いて反耶に云つた。「鹿の中から若い男女が現れた。彼らを[illegible]つか。」

君長の反耶は、傍の兵士の持つた松明をとると、頭上に高くかざして二人の姿を眺めてゐた。

「我らは、遠く山を越えて來れる不彌の者。我らを放せ。」と訶和郎は云つた。反耶の視線は、訶和郎の顔から卑彌呼の方へ流された。

「爾は不彌の國の旅人か。」

「然り。我らは不彌へ歸る旅の者。我らを赦せ。」と卑彌呼は云つた。

「耶馬臺の宮は、かの山の下。爾らは我の宮を通つて旅に行け。」

「赦せ。吾らの路は爾の宮より外れてゐる。吾らは明日の旅を急ぐ者。」

反耶は松明を投げ捨てて、兵士達の方へ向き返つた。

「行け。」

兵士達は王の言葉を口々に云ひ傳へて動搖めき立つた。再び小山の頂では地を辷る鹿の死骸の音がした。その時、突然、卑彌呼の頭に浮んだものは、彼女自身の類ひ稀なる美しき姿であつた。彼女は耶馬臺の君長を味方にして、直ちに奴國へ攻め入る計畫を胸に描いた。

「待て、王よ。」と卑彌呼は云ふと、綻れた蕾のやうな唇を見せて、耶馬臺の君長に微笑を投げた。

「爾は吾らを爾の宮に共なふか。吾らは爾の宮を通るであらう。」

「ああ、不彌の女。爾らは我の宮を通つて不彌へ行け。」

「卑彌呼。」と訶和郎は云つた。

「待て。爾は吾に從つて耶馬臺を通れ。」卑彌呼は訶和郎の腕に手をかけた。

「卑彌呼、吾らの路は外れて來た。耶馬臺を廻れば、吾らの望みも廻るであらう。」

「廻るであらう。」

「吾らの望みは急いでゐる。」

「訶和郎よ。耶馬臺の宮は、不彌の宮より奴國へ近い。」

「不彌へ急け。」

「耶馬臺へ廻れ。」

「卑彌呼。」

訶和郎は、眼を怒らせて、卑彌呼の腕を突き拂つた。その時、今迄反耶の横に立つて、卑彌呼の顔を見續けてゐた彼の弟の片眼の反絵は、小脇に抱いた法螺貝を、訶和郎の眉間に投げつけた。訶和郎は蹌踉めきながら、劍の頭椎に手をかけた。反絵の身體は、訶和郎の胸に飛びかかつた。訶和郎は地に倒れると、劍を拔つて反絵の顔へ投げつけた。一人の兵士は鹿の死骸で訶和郎を打つた。續いて數人の兵士達の松明は跳ね上らうとする訶和郎の胸の上へ投げつけられた。火は胸の上で、蹴られた花のやうに飛び散つた。

「彼を縛れ。」と反絵は云つた。數人の兵士達は、藤蔓を持つて一時に訶和郎の上へ押しかむさつた。

「王よ、彼を赦せ、彼は吾の夫、彼を赦せ。」卑彌呼は王の傍へ馳け寄つた。反絵は藤蔓で卷かれた訶和郎の身體を一本の蜜柑の枝へ吊り下げた。卑彌呼は王の傍から訶和郎の下へ馳け寄つた。

「彼を赦せ、彼は我の夫、彼を赦せ。」

反絵は卑彌呼を抱きとめると、兵士達の方を振り返つて彼らに云つた。

「不彌の女を連れよ。山を下れ。」

一團の兵士達は卑彌呼の傍へ押し寄せて來た。彼女の身體は數人の兵士達の頭の上に跳ねながら蜜柑の枝の下から裾の方へ下つていつた。訶和郎は垂れ下つたまま、蜜柑の枝に足を突つ張つて、遠く、背負はれてゆく卑彌呼の姿を睨んでゐた。兵士達の松明は、谷間から煙のやうに流れて來た夜霧の中を搖れていつた。

「妻を返せ、妻を返せ。」

蜜柑の枝は、訶和郎の背から梢端の果實の

やうな血か滴る度毎に、燃えさかる松明の明りの方へ揺めいた。その時、兵士達の群れから離れて、ひとり山腹へ引き返して来た武将があつた。彼はそれはかの酋長の弟の反絵であつた。彼は芒の中に立ち停ると、片眼で山上に揺られてゐる一本の蜜柑の枝を狙つて矢を引いた。蜜柑の枝は、一段と闇の中で激しく揺れた。訶和郎の首は、猟人の獲物のやうに矢の刺つた胸の上へ垂れ下つた。間もなく、濃霧は松明の光りをその中にぼかしながら、倒れた芒の原の上から静にだんだんと訶和郎の周囲へ流れて来た。

十五

耶馬台の兵士達が彼らの宮へ帰つたとき、卑弥呼はひとり、捕虜の宿舎にあてられる石窖の中に入れられた。それは幸運な他国の旅人に与へられる、耶馬台の国の習慣の一つであつた。彼女の石窖は奥深い石灰の洞から成つてゐた。数本の鐘乳石の柱は、波打つ高い天井の岩壁から下つてゐた。さうして、僅かに開けられた正方形の石の入口には、太い櫟の格子が降され、その前には、背中と胸とに無数の細い蜥蜴の絵でもつて、大きな一つの蜥蜴を刺青した一人の奴隷がつけられてゐた。彼の頭には、嫁菜の汁で染められた黄色の苧の布が巻きつけられ、腰には、継ぎ合した鼬の皮が纏はれてゐた。

卑弥呼は兵士達に押し込められたまま、乾草の上へ顔を伏せて倒れてゐた。夜は更けた。兵士達のさざめく声は、彼らの疲労と睡けのために、耶馬台の宮から鎮まつた。さうして、森からは霧を透して、梟と狐の声が石窖の中へ聞えて来た。曾て、卑弥呼が、森の中で卑狗の大兄の腕に抱かれたまま、梟の声を真似たのは、過ぎた平和な日の一夜であつた。曾て、彼女が訶和郎の腕の中で、狐の声を聞いたのは、過ぎた数日前の夜であつた。

「ああ、訶和郎よ、もし我が爾に従つて不弥へ廻れば、我は今爾とともにゐるのであらう。ああ、訶和郎よ、我を赦せ。我は卑狗を愛してゐる。爾は我のために傷ついた。」

卑弥呼は頭を上げて格子の外を見た。外では、弓を首によせかけた奴隷が、消えかかつた篝火の傍で、乾草の上に両手をついて石窖の中を覗いてゐた。彼女は格子の傍へ近寄ると、臆病な犬のやうな奴隷の二つの細い眼に嫣然と微笑を投げた。

「来れ。」

奴隷は眼脂に塊つた逆睫をしばたたくと、大きく口を開けたまま脊を延ばした。弓は彼の肩から辷り落ちた。

「爾は鹿狩りの夜を見たか。」と卑弥呼は云つた。

「見た。」

「爾は我の横に立てる男を見たか。」

「見た。」

卑弥呼は首から勾玉を脱すと、彼の膝の上へ投げて云つた。

「爾は彼を見た山へ行け。爾は彼を共なへ。爾は玉をかけて山へ行け。我は爾に玉を与へよう。」

奴隷は彼女の勾玉を拾つて首へかけた。勾玉は彼の胸の上で、青い蜥蜴の刺青を叩いて音を立てた。彼は加はつた胸の重みを愛玩するかのやうに、ひとり微笑を洩しながら玉を撫でた。

「夜は間もなく明けるであらう、行け。」と卑弥呼は云つた。

奴隷は立ち上つた。さうして、胸を堅へると彼の姿は夜霧の中に消えていつた。しかし、間もなく、彼の足音に代つて、石を打つ木靴の音が聞えて来た。卑弥呼は再び格子の外を見ると、そこには、霧の中に、ひとり王の反耶が立

つてゐた。
「不彌の女、爾は何故に眠らぬか。我は耶馬臺の國王の反耶である。」と君長は卑彌呼に云つた。
「王よ、耶馬臺の石窖は我の宮ではない。」
「爾に石窖を與へた者は我ではない。石窖は旅人の宿。もし爾を傷つけるなら、我は我の部屋を爾のために與へよう。」
「王よ、爾は何故に、我が傍に我の夫を置くことを救さぬか。」
「爾と爾の夫とを裂いた者は、我ではない。」
「爾は我の夫を呼べ。夜が明ければ我は不彌へ歸るであらう。」
「爾の行く日に、我は爾に馬を與へよう。爾は爾の好む日まで、耶馬臺の宮にゐよ。」
「王よ、爾は何故に我の滯ることを欲するか。」
「一日滯る爾の姿は、一日耶馬臺の宮を美しくするであらう。」
「王よ、我の夫を呼べ。我は彼とともに滯らう。」
「夜が明ければ、我は爾に爾の夫と、部屋とを與へよう。」
反耶の木靴の音は、暫く格子の前で迷つてゐた。さうして、彼の姿は夜霧の中へ消えていつた。洞内の一隅では、ひとすぢの水の滴りが靜に岩を叩いてゐた。

十六

反絵は鹿狩りの疲勞と酒とのために、計畫してゐた卑彌呼の傍へ行く可き時を寢過した。さうして、彼が眼醒めたときは、耶馬臺の宮は、朝日を含んだ金色の霧の底に沈んでゐた。彼は松明の炭を踏みながら霧を浮べた園の中で、堤のやうに積み上げられた鹿の死骸の中を通つていつた。彼の眠りの足らぬ足は鹿の堤から流れ出てゐる血の上で辷つた。遠くの廊の葉叢の上を、野牛の群れが黒い背だけを見せて森の方へ動いていつた。すると、その最後の牛の背が、遽に歩を早めて駈け出したとき、刺青のために青まつた一人の奴隷の半身が、赤く血に染つた一人の身體を背負つて、だんだんと廊の葉叢の上に高まつて來た。さうして、反絵が園を斜めに横切つて卑彌呼の石窖を眺めて立つた時、奴隷の姿は一層明りながら、石窖へ達る岩の上を歩いていつた。死體を睨んだ反絵の片眼は、強く反りを打つた鼻柱の横で輝いた。
「あゝ、訶和郎よ。」と石窖の中から卑彌呼の聲が聞えて來た。

奴隷は背負つた赤い死體の胸を石窖の格子に立てかけて、倒れぬ樣に死體の背を押しつけた。格子の隙から卑彌呼の白い兩手が延び出ると、垂れた訶和郎の首を立て直して云つた。
「あゝ爾は死んだ。爾は復讐を殘して死んだ。爾は我のために殺された。」
奴隷は死體の背から手を放した。彼は微笑をもらしながら、首の勾玉を兩手で揉んだ。訶和郎の死體は格子を撫でて地に倒れた。
反絵は毛の生えた逞しいその腕で、靄を搖がしながら、石窖の前へ駈けて來た。
訶和郎を抱き上げようとして身を屈めた奴隷は、足音を聞いて背後を向くと、反絵の唇から、むき出た白い齒齦が殺氣を含んで迫つて來た。奴隷は吹かれたやうに、一飛び横へ飛びのいた。
「女は我に臣を與へた。臣は我の臣である。」
彼は胸の勾玉を摩しながら、楡と檜の間に張り詰つた蜘蛛の網を突き破つて、森の中へ駈け込んだ。
反絵は石窖の前まで來ると、格子を握つて中を覗いた。
卑彌呼は格子に區切られたまま、倒れた訶和郎の頭の前に坐つてゐた。

「一族の女よ。」と反絵は云つてその顔を格子につけた。

卑彌呼は訶和郎を指差しながら、反絵を睥んで云つた。

「爾の獲物は、これである。」

「やあよ。我は爾と共に山を下つた。」

「爾の矢は、我の夫の胸に刺さつてゐる。」

「我は爾の傍に從つてゐた。」

「爾の弓弦は、爾の手に從つた。」

「爾の夫を狙つた者は、奴隷である。」

「奴隷は吾に從つた。」

反絵は奴隷の置き忘れた弓と矢を拾ふと、破れた蜘蛛の巣を潜つて森の中へ馳け込んだ。しかし彼の片眼に映つたものは、霧の中に包まれた老杉と、踏み躙られた羊齒の一條の路とであつた。彼はその路を辿りながら、森の奥深く進んでいつた。しかし、彼の片眼に映つたものは、茂みの隙間から射し込んだ朝日の縞を切つて飛び立つ雉子と、霧の底でうごめく野牛の朧に黒い背であつた。さうして、露はただ反絵の堅い角髪を打つた。が、路は一本の太い檜の木の前で止つてゐた。彼は立ち停つて森の中を見廻した。頭の上から、露の滴りが一層激しく落ちて來た。反絵はふと上を仰ぐと、檜の梢の叉の間に、奴隷の蜥蜴の刺青が、青い瓢のやうに見えてゐた。反絵は蜥蜴を狙つて矢を引いた。すると、奴隷の身體は圓くなつて枝にあたりながら、熟した果實のやうに落ちて來た。反絵は、舌を出して俯伏せに倒れてゐる奴隷の方へ近よつた。その時、奴隷の頭髪からはづれかかつた一連の勾玉が、へし折れた羊齒の青い葉の上で、露に濡れて光つてゐるのが眼についた。彼はそれをはづすと自分の首へかけ垂らした。

十七

霧はだんだんと薄らいで來た。さうして、森や草叢の木立の姿が、朝日の底から鮮かに浮き出して來るに從つて、檜の立ち並ぶ篷屋からは木を打つ音やさざめく人聲が聞えて來た。しかし、石窖の中では、卑彌呼は、格子を隔てて倒れてゐる訶和郎の姿を見詰めてゐた。數日の間に第一の良人を刺され、第二の良人を奪はれた彼女の悲しみは、最早彼女の涙を誘はなかつた。彼女は乾草の上へ倒れては起き上り、起きては眼の前の訶和郎の死體を眺めてみた。しかし、角髪を解いて血に染まつてゐる訶和郎の姿は依然、格子の外に倒れてゐた。さうして、再び彼女は倒れると、胸に劍を刺された卑狗の姿が、乾草の匂ひの中から浮んで來た。彼女はただ茫然として輝く空にだんだんと溶け込む霧の世界を見詰めてゐた。すると、今迄彼女の胸に溢れてゐた悲しみは、突然憤怒となつて爆發した。それは、地上の特權であつた暴虐な男性の腕力に刃向ふ、彼女の反逆であり怨恨であつた。彼女の眼は、次第に激しく波動する兩肩の起伏につれて、徐々冷たく空の一點に食ひ入つた。ふとその時、草叢の葉波が搖いた地平の上から、立昇つてゐる一條の煙が彼女の眼の一角に映り始めた。それは薄れゆく霧を破つて眞直ぐに立ち昇り、渦巻きながら瞬間を刺して、燒けた劍のやうに、だんだんと空を領してゐる煙であつた。彼女は立ち上つた。さうして、格子を掴むと、高らかに煙に向つて呼びかけた。

「ああ、大神は吾の手に觸れた。吾は大空に昇るであらう。爾は上方よ、我れを見よ。我は爾らの上に日輪の如く輝くであらう。」

石窖の格子の隙から現れた卑彌呼の微笑の中には、最早、卑狗も訶和郎も消えてゐた。さうして、彼等に代つて、その微笑の中に潜んだものは、ただ怨恨を含めた慘忍な征服慾の光りであつた。

十八

耶馬臺の宮の若者達は、眼を醒ますと噂に聽いた鹿の美女を見ようとして、宮殿の花園へ押しよせて來た。彼らの或者は、彼女に食はすがために、鹿の好む大バコや、百合根を持つてゐた。しかし彼等の誰もが鹿の美女を捜し出すことが出來なくなると、軈て庭園に積まれた鹿の死體が彼らの手によつて、崩し出された。その時、君長、反耶の命を受けた一人の使部は、彼ら嚴かな容姿を眞直ぐに前方へ向けながら、彼らの傍を通り抜けて石窖の方へ下つていつた。若者達の幾らかは、直ちに彼の後から從つた。使部は石窖の前まで來ると、その門をとり脱し、欅の格子を上に開いて跪拜いた。

「王は爾を待つてゐる。」

間もなく、若者達は、暗い石窖の中から現れた卑弥呼の姿を見ると、再び足を停めて首を延ばした。彼女は入口に倒れてゐる訶和郎を抱き上げると、そこから動かうともしなかつた。

「王は爾を待つてゐる。」と再び使部は彼女に云つた。

卑弥呼は訶和郎の胸から顔を上げて使部を見た。

「爾は王の前へ彼を共なへ。」

「王は爾を共なへと我に云つた。」

「王は彼を共なふを我に赦した。連れよ。」

使部は訶和郎の死體を背に負つて引き返した。卑弥呼は亂れた髪と衣に、乾草の屑をたからせて、使部の後から石の坂道を登つていつた。若者達は左右に路を開いて彼女の顔を覗いてゐた。さうして、彼女の姿が彼らの前を通り抜けて、高い篠の葉波の中に消えようとしたとき、初めて彼らの曲つた腰は、靜に彼女の方へ動き出した。彼らの肩は狹い路の上で突き衝つた。が、百合根を持つた一人の若者は、後の方で口を開いた。

「鹿の美女は、森にゐる。森へ行け。」

若者達は再び彼の方を振り向くと、石窖の前から彼に從つて、森の中へ馳け込んだ。

十九

卑弥呼の足音が高縁の板をきしめて響いて來た。君長の反耶は竹の遣戸を童男に開かせた。薄靄に漲つた森の花壇の上には、霧の中で數羽の鶴が舞つてゐた。さうして、朝日を背負つた一つの峯は、花壇の上で、絶えず紫色の煙を吐いてゐた。

やがて、卑弥呼は使部の後から現れた。君長は立上つて彼女に云つた。

「旅の女よ。爾は爾の好む部屋へ行け。我は爾のためにその部屋を飾るであらう。」

「王よ。」使部は跪拜いた膝の上へ訶和郎を乘せて云つた。「我は女の言葉に從つて若い死體を共なうた。」

「旅の女よ。爾の衣は鹿の血のために穢れてゐる。爾は新しき耶馬臺の衣を手に通せ。」

「王よ。若い死體は石窖の前に倒れてゐた。」と使部は云つた。

「捨てよ。爾に命じたものは、死體ではない。」

「王よ、若い死體は吾の夫の死體である。」と卑弥呼は云つた。

反耶の赤い脣は、微動しながら喜びの皺をその兩端に深めていつた。

「ああ、爾は吾のために爾の夫を死體となした。着よ、吾の爾に與へる衣は吾の心のやうに整うてゐる。」

王は階にひかへてゐた一人の童男を振り返つた。童男は兩手に桃色の絹を捧げたまま、卑弥呼の前へ進んで來た。

「王よ。」と使部は訶和郎を抱き上げて云つた。「若い死體を何處へ置くか。」

「一族の女よ。爾は爾の夫を何處へ置くか。」

その時、急に高縁の踏板が、馳け寄る荒々しい響を立てて振動した。人々は入口の空間に眼を向けるとそこへ怒つた反絵が馳け込んで來た。

「兄よ、旅の女が逃げ失せた。石窖の口が開いてゐた。

「王よ。我は夫の死體を欲する者に與へるであらう。」と卑彌呼は云つた。さうして、使部の膝から訶和郎の死體を抱きとると、入口に立ち塞がつた反絵の胸へ押しつけた。

反絵は崩れた訶和郎の角髮を除けると、片眼を出して彼女に云つた。

「吾は爾に代つて奴隷を撃つた。爾の夫を射殺した奴隷を撃つた。」

「やめよ。夫の死體を欲した者は爾である。」と、卑彌呼は云つた。

「旅の女よ、森へ行け、奴隷の胸には我の矢が刺さつてゐる。」

卑彌呼は反絵の片眼の方へ背を向けた。さうして、腰を縛つた古い衣の紐を取り、その脇に廻つた結び目を解きほどいた。彼女の衣は、薬を取られた桃のやうな裸體を浮べながら、彼女の滑らかな肩から毛皮の上へ辷り落ちた。

反耶の大きく開かれた二つの眼には、童男の捧げた衣の方へ靜に動く彼女の腰の曲線が、霧を透した朝日の光りを區切つたために七色の虹となつて浮き立ちながら、花壇の上で羽叩く鶴の胸毛をだんだんに現してゆくのが映つてゐた。さうして、反絵の動かぬ片眼には、彼女の乳房の高まりが、反耶の銅の劍に戯れる鳩の頭のやうに、微動するのが映つてゐた。卑彌呼は裸體を卷き變へた新しい衣の一端で、童男の捧げた指先を拂ひながら、部屋の中を見廻した。

「王よ。此の部屋を吾に與へよ。吾は此處に停まらう。」

彼女は靜に反耶の傍へ近寄つた。さうして、背に廻らうとする衣の二つの端を、王に示しながら、彼の胸へ身を寄せかけて微笑を投げた。

「王よ。吾は耶馬臺の衣を好む。爾は吾のために、爾の與へた衣を結べ。」

反耶は卑彌呼を見詰めながら、その衣の端を手にとつた。悦びに聲を潛めた彼の顔は、髯の中で、彼女の衣の射る絹の光りを受けて、薄紅色に榮えてゐた。部屋の中で、訶和郎の死體が、反絵の腕を辷つて倒れる音がした。反絵の指は垂れ下つた兩手の先で、頭を擡げる十疋の蠶のやうに動き出した。彼の身體は、胸毛に荒々しい呼吸を示しながら、次第に卑彌呼の方へ傾いていつた。

反耶は衣を結んだ兩手を、後から卑彌呼の肩へ廻さうとした。と、彼女は急に妖艶な微笑を兩頬に搖がしながら、彼の腕の中から身を翻して踊り出た。さうして、今や卑彌呼を目がけて飛びかからうとしてゐる反絵の方へ馳け寄ると、彼の剛い首へ兩手を卷いた。

「ああ、爾は、我のために我の夫を撃ちとめた。我を我の好む耶馬臺の宮にとどめしめた者は爾である。」

「旅の女よ、我は爾の夫を撃つた。我は爾の勾玉を奪つた奴隷を撃つた。我は爾を傷つける何者をも撃つであらう。」

反絵の太い眉毛は、潰れた瞼を吊り上げて柔和な形を描いて來た。しかし、反耶の空虚に擴がつた兩腕は次第に下へ垂れ落ちると、反耶は劍を握つて、床を突き立てながら使部に云つた。

「若い死體を外へ出せ。宿禰を連れよ。鹿の死體の皮を剝げと彼に云へ。」

使部は床の上から、訶和郎の死體を抱き上げ

ようとした。卑彌呼は反絵の胸から離れると、急に使部から訶和郎を抱きとつて毛皮の上へ泣き崩れた。

「ああ、訶和郎、爾は不彌へ歸れと我に云つた。我は耶馬臺の宮にとどまつた。さうして、ああ、爾は我のために殺された。」

反絵は首から奴隷の勾玉を取りはずすと、卑彌呼の傍へ近寄つて來た。

「一族の女よ。我は奴隷の奪つた勾玉を、爾に返す。」

「一族の女よ。立て。吾は爾の夫を阿久那の山へ葬らう。」と使部は云つて、訶和郎の死體を抱きとつた。

反絵は倒れてゐる卑彌呼を起すと、勾玉を彼女の首へかけ下げた。彼女は再び立ち上ると、反耶の傍へ近寄つて、彼に云つた。

「王よ、我を不彌へ歸せ。爾の馬を我に與へよ。我は不彌の山へ、我の夫を葬らう。」

「爾の夫は死體である。」

「爾は來た、爾は我を不彌へ歸すを約したのは、昨夜である。馬を與へよ。」

「何故に爾は歸る。」

「爾は何故に我をとどめる。」

「我は爾を欲す。」

卑彌呼の顏は再び生々とした微笑のために輝き出した。さうして、彼女は反耶の肩に兩手をかけると、彼に云つた。

「ああ、吾を爾の宮にとどめよ。吾の夫は死體である。」

「一族の女、吾は爾を欲す。」と反絵は云つて彼女の方へ迫つて來た。

卑彌呼は反耶に與へた顏の微笑を再び反絵に向けると彼に云つた。

「我は不彌に歸らず。吾は爾らと共に耶馬臺の宮にとどまるであらう。爾は吾のために、我に眠りを與へよと王に願へ。我は數夜の眠りを、馬の上で眠つて來た。」

「兄よ。此の部屋を去れ。」と反絵は云つた。

「爾の獲物は死體である。爾は獲物を持つて、部屋を去れ。」と反耶は云つた。

卑彌呼は二人に挾まれながら、反耶の肩を柔かく入口の方へ押して云つた。

「王よ。我に眠りを與へよ。眼が醒めなば、我は爾を呼ぶであらう。」

「不彌の女、吾も呼べ。兄が爾を愛するよりも、我は爾を愛す。」

反絵は眼を立てて王を睨むと部屋の外へ出て行つた。

「女よ眠れ。爾の眼が醒めなば、吾は爾のために此の部屋を飾らさう。」

反耶の卑彌呼に囁いた聲に交つて、部屋の外からは、高く反絵の銅鑼のやうな聲が響いて來た。

「兄よ。部屋を出よ。我は爾よりも先に出た。不彌の女よ、兄を出せ。」

反耶は眉間に皺を落して入口の方へ歩いて行つた。童男は彼の後から從つた。使部は最後に、訶和郎の死體を抱いて出ようとすると、卑彌呼は彼の腕から訶和郎を奪つて、荒々しく竹の遣戸を後から閉めた。

「ああ、訶和郎、吾を赦せ。吾は爾の復讐をするであらう。」

彼女は床の上に坐ると、歯を咬みしめた訶和郎の顏に自分の頰をすり寄せた。しかし、その冷たい死體の頰の觸感は、嘗て卑狗の大兄の頰となつて彼女の頰に傳つた。彼女の顏は、流れる涙のために光つて來た。

「ああ、大兄よ。爾は爾の腕の中に、我を雛子の如く抱きしめた。爾は吾を、吾が爾を愛するごとく、愛してゐた。ああ、大兄、爾は何處へ行つた。歸れ。」

彼女は兩手で頭をかかへると立ち上つた。

「大兄、大兄。」
彼女はよろめきながら部屋の中を歩き出した。脱ぎ捨てた彼女の青い衣は、彼女の片足に纏ひついた。とうとう、彼女の足が厚い御席の繼ぎ目に入ると、彼女は足をとられてどうと倒れた。

二十

反絵は閉ざされた卑彌呼の部屋の前に、猪犬のやうに蹲んでゐた。前方の廣場では、兵士達が歌ひながら鹿の毛皮を剝いでゐた。彼らの傍は、殺されかけた猪と一緒に、鹿の腹部に突き刺さると、息む鹿は三人からなる一組の兵士の手によつて裸體にされた。間もなく、今まで積まれてあつた鹿の小山の褐色の色が、血の紫紅の上からだんだんに減つてくると、それにひきかへて、瑪瑙色の鹿の小丘が、新しく晴れ上つた空の中に高まつてきた。手と体を塗つた兵士達は、血の流れた草の上で角力をとつた。宮廊の東の部屋では、狩獵を祝つた酒宴の準備のために、沈醸の鹿の酒が作られてゐた。兵士達は、廣場で刻まれた鹿の肉を、地中に埋まつた大甕の中へ、粟と一緒に投げ込むと、彼らはその上で枯葉を焚いた。その横では、不足な酒を作るがために、兵士達は森から摘みとつてきた黒松葉を壓搾して汁を作つてゐた。ここでは、その仕事の效果が、最も直接に彼ら自身の口を喜ばすがために、彼らの誰も、いづれの仲間達の歌よりも一段と威勢があつた。

反絵は時々戸の隙間から中を覗いた。薄暗い部屋の中からは、一條の寝息が絶えず闇に聞えてゐた。彼は息を潜めて部屋の前を往來した。しかし、兵士達の廣場でさざめく聲が、一層激はしくなつて來ると、彼は高い欄干から飛び下りてその方へ馳けて行つた。今や麻の草場の中では、角力の一團が最も人々を集めてゐた。反絵は彼らの中へ割り込むと、今まで勝ち續けてゐた一人の兵士の前に突きたつた。

「來れ。」と彼は叫んでその兵士の腰へ片手をかけた。兵士の體は、反絵の頭の上で足を跳ねながら浮き上つた。と、反絵は彼の身體を、倒れた草の上へ投げつけて、大手を上げた。

「我を倒した者に、鏡をやらう。來れ。」

そのとき反絵の眼には、白鷺の羽根を挿した反耶の二人の使部が、積まれた裸體の鹿の間を通つて、卑彌呼の部屋の方へ歩いて行くのが見えた。反絵の擴げた兩手は、だんだんと下へ下つた。

「よし、我は傷に勝たう。」と一人が云つた。それは反絵に倒された兵士の眞油であつた。彼は立ち上ると、血のついた角髮で反絵の腹をめがけて突進した。

「放せ、放せ。」と反絵は云つた。が、彼の身體は、曲つた眞油の背の上で、舟のやうに反つてゐた。と次の瞬間、彼は踏み躙られた草の綠が眼につくと、反耶に微笑む不彌の女の顔を浮べて、逆様に墜落した。

「我に劍を與へよ。我は勝つた、我は傷に勝つた。」

ひとり宮の中で喜ぶ眞油の聲が高くなつた。反絵は怒りのバネに彈ね起されると、波立つ眞油の腹を蹴り上げた。眞油は叫びを上げて顛倒した。それと同時に、反絵は卑彌呼の部屋の方を振り返ると、遣戸の中へ消えようとしてゐる使部の黄色い背中が、動揺めく兵士達の頭の上から見えてゐた。

「眞油は死んだ。」

「眞油は蹴られた。」

「眞油の腹は破れてゐる。」

廣場では兵士達の聲がやまつた。あちらこちらの草葉の中からは、兵士達が、動かぬ眞油を中心に馳け寄つて來た。しかし、反絵は、彼ら

とは反對に廣場の外へ、鹿の死體を飛び越え、馳け寄る兵士達を突き飛ばし、蕗の萩叢の中を一文字に使部達の方へ突進した。
遣戸の中では、卑彌呼の眠りに氣遣ひながら、二人の使部は、白鷺の尾羽根を周圍の壁となつた間木の隙に刺してゐた。
反絵は部屋の中へ飛び込むと、一人の使部の首を摑んで床の上へ投げつけた。使部の腕からは、かかへた白鷺の尾羽根が飛び散つた。
「我を赦せ。王は部屋を飾れと我に命じた。」轉がりながら叫ぶ使部の上で、白鷺の羽毛が、叩かれた花園の花瓣のやうに、ひらひらと舞つてゐた。反絵は拳を振りながら使部の腰を蹴つて叫んだ。
「部屋を出よ、部屋を出よ、部屋を出よ。」
二人の使部は直ちに遣戸の外へ逃げ出した。
そのとき、彼らに代つて、兩手に龍膽と萩とをかかへた他の二人の使部が、入つて來た。反絵は二人の傍へ近寄つた。さうして、その一人の腕から、萩の一束を奪ひ取ると、彼の額を打ち續けてまた叫んだ。
「部屋を出よ、部屋を出よ、部屋を出よ。」
「大兄、我は王の言葉に從つた。」
「去れ。」
「大兄、我は王のために鞭打たれるであらう。」
「行け。」
二人の使部は出ていつた。が彼らに續いてまた直ぐに二人の使部が、鹿の角を肩に背負つて入つて來た。反絵は散亂した羽毛と萩の中に突き立つて卑彌呼の寢顏を眺めてゐた。彼は物音を聞きつけて振り返ると、床へ投げ出された鹿の角の一枚を肩にひつかけたまま、逃げる使部の姿が、遣戸の方へ馳けて行くのが眼についた。
反絵は捨てられた白鷺の尾羽根と、龍膽の花束とを拾ふと、使部達に代つて間木の隙へ刺していつた。彼は時々手を休めて卑彌呼の顏を眺めてみた。しかし、その度に、細く眼を見開いて彼の後姿を眺めてゐた卑彌呼の瞼は、再び眠りのさまを裝つた。
「不彌の女。」と反絵はその野蠻な顏に、爛の微笑を浮べて彼女を呼んだ。
「不彌の女、見よ。我は爾の部屋を飾つてゐる。不彌の女。起きよ。我は爾の部屋を飾つてゐる。」
卑彌呼の眠りは續いてゐた。さうして、反絵の手で殺された顏の微笑は、ひとりだんだんと淋しい影の中へ消えていつた。彼は卑彌呼の頭の傍へ近寄つて片膝つくと、兩手で彼女の蒼白い頰を撫でてみた。彼の胸は、迫る呼吸のために次第に波動を高めて來ると、彼の手にたかつてゐた一片の萩の花瓣も、手の甲と一緒に、彼女の頰の上で慄へてゐた。
「不彌の女、不彌の女。」と彼は呼んだ。が、彼の胸の高まりは、突然に性の衝動となつて變化した。彼の赤い唇は開いて來た。彼の片眼は、靑みを帶びて光つて來た。さうして、彼女の頰を撫でてゐた彼の兩手が動きとまると、彼の體軀は、漸次に卑彌呼の胸の方へ延びて來た。しかし、その時、怨恨を含んだ齒を現して、鹿の毛皮の下から、彼の方を眺めてゐる訶和郎の死體の顏が眼についた。反絵の慾情に燃えた片眼は忽ち恐怖の光りを發して擴がつた。が、次の瞬間、挑みかかる激情の光りに急變すると、彼は立ち上つて訶和郎の死體を毛皮のままに抱きかかへた。彼は荒々しく遣戸の外へ出ていつた。さうして、廣場を橫切り、森を斜めに切つて、急に開けた斷崖の傍まで來ると、擔いだ訶和郎の死體をその上から投げ込んだ。訶和郎の死體は、眼下に澄んだ縹渺とした森林の波頭の上で、數回の大圓を描きながら、太陽の光りにきらきらと輝きつつ、沈默した綠の中へ落下した。

二十一

夜が深まると、再び濃霧が森林や谷間から、狩猟の後の酒宴に浮かれてゐる耶馬臺の宮へ押し寄せて來た。男庭の草園では、霧の中で、焚火が火の子を爆いて燃えてゐた。その周圍では宮の婦女達が、赤と青との虎斑に染まつた衣を卷いて、若い男に圍まれながら踊つてゐた。踊り疲れた若者達は、何も歌ひながら、草叢の中に竝んだ酒甕の傍へ集つて來た。彼らの中の或者達は、夫々自分の愛する女の手をとつて、焚火の光りのとどかぬ森の中へ消えていつた。

王の反耶は、大夫達の忠心に强ひられた酒のために、だんだんと醉ひが廻つた。彼は卑彌呼の部屋の裝飾を命じた五人の使部に、王命の違反者として體刑を宣告した。五人の使部は武裝した兵士達の圍みの中で、王の口から體刑停止の命令の下るまで鞭打たれた。彼らの背中の上で、竹の根管の鳴るのとともに、酒樂の歌は草園の焚火の傍で、ますます亂雜に高まつた。さうして、遠い國境の一つの峯から立ち昇つてゐる噴火の柱は、霧の深むにつれて、次第にその色を鈍い銅色に變へて來ると、違反者の背中は破れ始めて、血が流れた。彼らは地にひれ伏して草を引き搔りながら、悲鳴を上げた。反耶は悶轉する彼らを見ると、卑彌呼に此の體刑を見せんがために、彼女の部屋の方へ歩いていつた。何ぜなら、もし彼女が耶馬臺の宮にゐなかつたら、反耶にとつては、この體刑は無用であつたから。しかし、反耶が卑彌呼の部屋の遣戶を押したとき、毛皮を身に纏つて橫たはつてゐる不彌の女の傍に、一人の男が蹲んでゐた。それは彼の弟の反絢であつた。

「不彌の女、我と共に來れ。我は爾のために、我の命に反いた使部を罰してゐる。我は彼らに、爾の部屋を飾れと命じた。」

「彼らを赦せ。」と卑彌呼は云つて身を起した。

「反絢、爾は此の部屋を出よ、酒宴の踊りは彼方である。」と反耶は云つて反絢の方を振り向いた。

「兄よ、爾の后は、爾と共に踊りを見んとして、待つてゐた。」

「不彌の女、來れ。我は爾を呼びに來た。爾の部屋を飾り忘れた使部の背中は、爾のために破れて來た。」

「彼らを赦せ。」と卑彌呼は云つた。

「よし、我は兄に代つて、彼らを赦すであらう。」と反絢は云つて、遣戶の方へ出ようとすると、反耶は彼の前へ立ち塞がつた。

「待て、彼らを罰したのは、我である。」

反絢は兄の手を拂つて遣戶の方へ行きかけた。反耶は卑彌呼の傍へ近寄つた。さうして、彼女の腕に手をかけると、彼女に云つた。

「不彌の女よ、酒宴の準備は整うた。爾は我と共に酒宴に出でよ。」

「兄よ。不彌の女と行く者は、我である。」と反絢は云つて、遣戶の傍から反耶の方を振り返つた。「行け、使部の罪を赦すのは、爾である。」

「不彌の女、我と共に酒宴に出でよ。」反絢は再び卑彌呼の傍へ戻つて來た。

「王よ、我を酒宴に共なふことをやめよ。爾は我と共に、我の部屋にとどまれ。」

卑彌呼は反耶の手を持つてその傍に坐らせた。

「不彌の女、不彌の女。」反絢は卑彌呼を睥んで慄へてゐた。「爾は我と共に部屋を出よ。」

彼は彼女の腕を摑むと、部屋の外へ出ようとした。

反耶は立上ると反絢に曳かれる彼女の手を持つて引きとめた。

「不彌の女、行くことをやめよ。我とともにゐよ。我は爾の傍に殘るであらう。」

反絵は反耶の胸へ飛びかからうとした。そのとき、卑彌呼は傾く反絵の體軀を、その柔かき掌で制しながら、反耶に云つた。

「王よ、使部の傍へ我を共なへ。我は彼らを赦すであらう。」

彼女は一人先に立つて遣戸の外へ出ていつた。反絵と反耶は、彼女の後から跟け出した。しかし、彼らが庭園の傍まで來かかつたとき、五人の使部は、最早死體となつて、土に咬みついたまま横たはつてゐた。兵士達は王の姿を見ると、打ち疲れた腕に一段と力を籠めて、再び意氣揚々としてその死體に鞭を振り上げた。

「鞭を止めよ。」と反耶は云つた。

「王よ、使部は死んでゐる。」と一人の兵士は彼に云つた。

卑彌呼は振り向いて反絵の顔を指差した。

「彼らを殺した者は、爾である。」

反絵は言葉を失つた啞者のやうに、ただその口を動かしながら、卑彌呼の顔を見守つてゐた。

「來れ。」

と反耶は卑彌呼に云つた。さうして、卑彌呼の手をとると、彼は彼女を酒宴の間の方へ導いていつた。

「待て、不彌の女、待て。」と反絵は呼びながら、二人の後を追ひかけた。

二十二

卑彌呼は竹皮を編んで敷きつめた酒宴の廣間へ通された。松明の光りに照された綠の柏の葉の上には、山椒の汁で洗はれた山蛤と、山蟹と、生薑と鯉と、酸漿と、まだ色づかぬ獼猴桃の實とが竝んでゐた。さうして、蓋のとれた行器の中には、新鮮な杉菜に抱かれた鹿や、猪の肉の香物が、高々と盛られてあつた。その傍の素燒の大きな酒瓮の中では、和稻製の諸白酒が、高い香を松明の光りの中に漂はせてゐた。最早や醉の廻つた好色な一人の宿禰は、再び座についた王の後で、侍女の乳房の重みを計りながら笑つてゐた。卑彌呼は、盃をとりあげた王に、柄杓をもつて酒を注がうとすると、そこへ、荒々しく駈けて來たのは反絵であつた。彼は王の盃を奪ひとると、卑彌呼に云つた。

「不彌の女、使部を殺した者は兄である。爾は我に、酒を與へよ。」

「待て、王は爾の兄である。盃を王に返せ。」

と卑彌呼は云つて、彼女に差し出してゐる反絵の手から、素早くその盃を取り返した。「王よ、我を耶馬臺にとどめた者は爾である。今日より爾は、爾の傍に我を置くか。」

「ああ、不彌の女。」と反耶は云つて、彼女の方へ手を延した。

「王よ。爾は不彌の國の王女を見たか。」

「盃を我に與へよ。」

「王よ、我は不彌の國の王女である。我の玉を爾は受けよ。」

卑彌呼は首から勾玉をとり脫すと、嗒若として彼女の顔を眺めてゐる反耶の首に垂れ下げた。

「王よ、我は我の夫と奴國の國を廻つて來た。奴國の王子は、不彌の國を亡ぼした。爾は我を愛するか。我は不彌の王女、卑彌呼と云ふ。」

「ああ、卑彌呼、我は爾を愛す。」

「爾は奴國を愛するか。」

「我の愛する國は不彌。」

「ああ、爾は不彌の國を愛するか。もし爾が不彌の國を愛すれば、我に耶馬臺の兵を借せ。奴國は不彌の國の敵である。我の父と母とは、奴國の王子に殺された。我の國は滅びてゐる。爾は我のために、奴國を攻めよ。」

「卑彌呼。」と横から反絵は云つた。さうして、彼は突き立つたまま、彼女の前へその顔を近づ

けた。「我は奴国を攻める。我は兄が爾を愛するよりも、爾を愛す。」

「ああ、爾は我のために奴国を奪つた。憐れ、我は爾に報いよう。」

卑弥呼は反耶に向けてゐたにこやかな微笑を急に反絵に向けると、その手をとつて坐らせた。反耶の顔は喜びに輝き出した反絵の額にひきかへて曇んできた。

「卑弥呼、耶馬台の兵は、我の兵である。反絵は我の一人の兵である。」と反耶は云つた。

反絵の顔は勃然として朱を浮べると、彼の拳は、反耶の胸を打つて鳴つてゐた。反耶は頭をかかへて、倒れながら宿禰を呼んだ。

「反絵を倒せ。宿禰、反絵を倒せ。」

俯し、一座の者は酔つてゐた。反絵は何も

反耶の上に飛びかからうとして片膝を立てたとき、卑弥呼は反耶と反絵の間へ割り込んで、倒れてゐた反耶をひき起した。反耶は手に持つた酒盃を反絵の顔へ投げつけた。

「去れ、去れ。」

反絵は再び反耶の方へ飛びかからうとした。

卑弥呼は彼の怒つた肩に手をかけた。さうして、持つてゐる酒盃を反絵の手に握らせると彼女は云つた。

「やめよ、爾は我の酒盃をとれ。我に耶馬台の歌をきかしめよ。我は不弥の歌を、爾のために歌ふであらう。」

「卑弥呼。我は耶馬台の兵を動かすであらう。耶馬台の兵は、兄の命より、我の力を恐れてゐる。」

「爾の力は強きこと、不弥の牡牛のやうである。我は爾のごとき強き男を見たことがない。」と卑弥呼は云つて、反絵の酒盃に酒を注いだ。

反絵の顔は、太陽の光りを受けた童顔のやうに輝くと、彼は酒盃から酒を滴らしながら勢ひよく飲み干した。しかし、卑弥呼は、彼女の傍で反絵を睨みながら唇を噛み締めてゐる反耶の顔を見た。彼女は再び柄杓の酒を傍の酒盃に満たして、彼の方へ差し出した。さうして、彼女は左右の二人の酒盃の干される度に、にこやかな微笑を配りながら、その柄杓を廻していつた。間もなく、反絵の片眼は、赤銅のやうな顔の中で、一つの[illegible]と濁つて来た。さうして、目の瞼は曇りながら、眠りに落ちる犬のやうに傾き始めると、続いて彼は、卑弥呼の膝の上へ首を垂れた。卑弥呼は、今はただ反絵の眠入るのを待つてゐた。反耶は行器の中から鹿の肉塊を摑み出すと、それを両手で握り廻して眼を瞑つた。卑弥呼は彼の手をとつて膝の上へ引き寄せた。

外の草園では焚火の光りが薄れて来た。草叢のあちこちからは酔漢の呻きが漏れてゐた。さうして、次第に酒宴の騒ぎが宮殿の内外から鎮つて来ると、続いて、卑弥呼の膝を枕に転々としてゐた反絵も眠りに落ちた。卑弥呼は部屋の中を見廻した。しかし、一人として彼女のますます冴え渡つたその朗かな眼を見詰めてゐる者は誰もなかつた。ただ酒気と喧噪とが乱れた食器の方々から流れてゐた。彼女は鹿の肉塊を握つて眠つてゐる反耶の顔を見詰めてゐた。今や彼女には、訶和郎のために復讐する時が来た。剣は反絵の腰に敷かれてあつた。さうして、彼女の第二の良人を殺害した者は、彼女の膝の上に眠つてゐた。しかし、反絵のその逞しい両肩の肉塊と、その巨大な力の溢れた頭とに代つて、奴国に攻め入る者は、彼の外の何者が、何処の国にあるであらう。続いて彼のために長羅の首に落ちるであらう。続いて、彼女は、不弥と奴国と耶馬台の国の三国に君臨するであらう。さうして、もしその時の来たならば、彼女は更に三つの力を以つて、久しく攻伐し合つた暴虐な諸国の王を、その足下に踏躪するときが来るで

あらう。彼女の澄み渡つた瞳の底から再び浮び始めた殘虐な微笑は、靜まつた夜の中を、ひとり毒汁のやうに流れてゐた。

「ああ、地上の王よ、我を見よ。我は爾らの上に、日輪の如く輝くであらう。」

彼女は膝の上から反絵と反耶の頭を降して、靜に彼女の部屋へ歸つて來た。しかし、彼女はひとりになると、またも毎夜のやうに、幻の中で卑狗の大兄の匂ひを嗅いだ。彼は彼女を見詰めて微笑むと、立ちすくむ小鳥のやうな彼女の傍へ、大手を擴げて近寄つて來た。

「卑彌呼。卑彌呼。」

彼女は卑狗の囁きを聞きながら、卑狗の波打つ胸の力を感じると、崩れる花束のやうに、彼の胸の中へ身を投げた。

「ああ、大兄、大兄、爾は何處へ行つた。」

彼女の身體は毛皮の上に倒れてゐた。しかし、その時、またも彼女の怨恨は、涙の底から急に浮び上つた仇敵の長羅に向つて、猛然と勃發した。最早や彼女は、その胸に沸騰する狂ほしい復讐の一念を壓伏してゐることは出來なくなつた。

「大兄を返せ、大兄を返せ。」

彼女は立ち上つた。さうして、きりきりと齒をきしませながら、圓木の隙に刺されに白鷺の尾羽根を次ぎ次ぎに引き拔いては捨てていつた。しかし、再び彼女は、彼女を呼ぶ卑狗の大兄の聲を聞きつけた。彼女の身體は呆然と石像のやうに立ち停り、風に吹かれた衣のやうに圓木の壁にしなだれかかると、再び拔き捨てられた白鷺の尾羽根の上へ、どつと倒れた。

「ああ、大兄、大兄、爾は我を殘して何處へ行つた。何處へ行つた。」

二十三

反耶は夜中、眼が醒めると、傍から不彌の女が消えてゐた。さうして、彼の見たものは、自分の片手に握られた乾いた一つの酒盃と、肉塊を冠つて寢てゐる反絵の口を開いた顎とであつた。

「不彌の女。不彌の女。不彌の女。」

彼は立ち上つて卑彌呼の部屋の方へ行かうとした。と、彼は反絵の足に躓いて、前にのめつた。しかし、足は急いでゐた。彼は踉跟めきながら、彼女の部屋の方へ近づくと、その遣戸を押して中に入つた。

「不彌の女。不彌の女。」

卑彌呼は白鷺の散亂した羽毛の上に倒れたまま、動かなかつた。

反耶は卑彌呼の傍へ近寄つた。さうして、片膝をつきながら、彼女の背中に手をあてて囁いた。

「起きよ、不彌の女、我は爾の傍へ來た。」

卑彌呼は反耶の力に從つて靜に仰向きに返ると、涙に濡れた頰に白い羽毛をたからせたまま彼を見た。

「爾は何故に我を殘してひとり去つた。」と反耶は云つた。

卑彌呼は默つて、慾情に慄へる反耶の顏を眺めてゐた。

「不彌の女、我は爾を愛す。」

反耶は脣を慄はせて、卑彌呼の胸を抱きかかへた。卑彌呼は石のやうに、冷然として耶馬臺の王に身をまかせた。

そのとき、部屋の外から重い跫音が響いて來た。さうして、彼女の部屋の遣戸が急に開くと、そこへ現れたのは、反絵であつた。彼は二人の姿を見ると突き立つた。が、忽ち彼の下顎は、狂暴な嫉妬のために戰慄した。彼は齒をむき出して無言のまま、猛然と反耶の方へ迫つて來た。

「去れ。去れ。」と反耶は云つて卑彌呼の傍か

ら立ち上つた。

　反絵は、恐怖の色を浮かべて逃げようとする反耶の身體を抱きかかへると、彼を圓木の壁へ投げつけた。

　反耶の頭は逆樣に、床を叩いて轉落した。反絵は腰の劍をひき拔いた。さうして露はな劍を跳ねてゐる兄の脇腹へ突き刺した。反耶は呻きながら刺された劍を握つて立ち上らうとした。が、反絵は再び彼の胸を斬り下げた。反耶は卑彌呼の方へ腹這ふと、彼女の片足を摑んで絶息した。しかし、卑彌呼は横たはつたまま、身動きもせず、彼女の足を握つてゐる王の指先を眺めてゐた。反絵はまだ陽に逢はぬ影のやうに青黒くなつて反耶の傍に突き立つてゐた。軈て、反絵の手から劍が落ちた。靜な部屋の中で、床に刺さつて横に倒れる劍の音が一度した。

「卑彌呼、我は兄を殺した。爾は我の妻になれ。」

　反絵は卑彌呼の傍へ蹲むと、荒い呼吸を彼女の顏に吐きかけて、彼女の腰と肩とに手をかけた。しかし卑彌呼は默然として反耶の死體を眺めてゐた。

「卑彌呼、我は奴國を攻める。我は爾を愛す。我は爾を欲す。卑彌呼、我の妻になれ。」

　彼女の頰に附いてゐた白い羽毛の一端が、反絵の呼吸のために搖れてゐた。反絵は尙も腕に力を籠めて彼女の上に身を蹲めた。

「卑彌呼、卑彌呼。」

　彼は彼女を呼びながら、彼女の胸を抱かうとした。彼女は曲げた片肱で、反絵の胸を押しのけると靜かに云つた。

「待て。」

「爾は兄に身を與へた。」

「待て。」

「我は兄を殺した。」

「待て。」

「我は爾を欲す。」

「奴國の滅びたのは、今ではない。」

　反絵の顏は勃發する衝動を叩かれた苦惱のために歪んで來た。さうして、彼の片眼は、暫時の焦躁に搖られながら、次第に獸的な決意を閃かせて卑彌呼の顏を覗き始めた。と、彼女は、飛び立つ鳥のやうに身を跳ねて、足元に落ちてゐた反絵の劍を拾つて身構へた。

「卑彌呼。」

「部屋を去れ。」

「我は爾を愛す。」

「奴國を攻めよ。」

「我は攻める。劍を放せ。」

「奴國の王子を長羅と云ふ。彼を撃て。」

「我は撃つ。爾は我の妻になれ。」

「長羅を撃てば、我は爾の妻になる。部屋を去れ。」

「卑彌呼。」

「去れ。奴國の滅びたのは今ではない。」

　反絵は彼の片眼に怨恨を流して卑彌呼の顏を眺めてゐた。しかし、間もなく、戰ひに疲れた毛物のやうに、彼は足を鈍らせて部屋の外へ出て行つた。卑彌呼は再び床の上へ俯伏せに身を崩した。彼女は彼女自身の身の穢れを思ひ浮べると、彼女を取卷く卑狗の大兄の靈魂が、今は次第に彼女の身邊から遠のいて行くのを感じて來た。彼女の身體は恐怖と悔恨とのために顫へて來た。

「ああ、大兄。我を赦せ。我を赦せ。我のために爾は歸れ。」

　彼女が劍を握つたまま泣き伏してゐるとき、部屋の外からは、突然喜びに溢れた威勢よき反絵の聲が聞えて來た。

「卑彌呼、我は奴國を攻める。我は奴國を、砂のやうに崩すであらう。」

二十四

耶馬臺の宮では、一人として王を殺害した反絵に向つて逆ふものはなかつた。何故なら、耶馬臺の宮の人々には、彼の狂暴な熱情と力とは、前から、國境に立ち昇る夜の噴火の柱と等しい恐怖となつて映つてゐたのであつたから。

しかし、君長の葬禮は宮人達の手によつて、小丘の頂で行はれた。二人の宿禰と九人の大夫に代つた十一の埴輪が、王の柩と一緒に埋められた。さうして王妃と、王の三頭の乗馬と、三人の童男とは、殉死者として首から上を空間に擡げたままその山上に埋められた。貞淑な王妃を除いた他の殉死者の悲痛な叫喚は、終日終夜、秋風のままに宮の上を吹き流れた。さうして、次第に彼らの叫喚が弱まるのと一緒に、その下の耶馬臺の宮では、着々として戰ひの準備が整うていつた。先づ、士達は周圍の森から野牛の群れを獵集めることを命ぜられると、次に數千の投げ槍と楯と矢とを造る傍ら、弓材となる梓や檀を弓矯に懸けねばならなかつた。反絵は日々兵士達の間を馳け廻つてゐた。しかし、彼の卑彌呼を得んとする欲望はますます彼を焦躁せしめ、それに從ひ彼の狂暴も日に日にその度を強めていつた。彼は、戰々兢々として馳け違ひながら立ち働く兵士達の間から、暇ある度に卑彌呼の部屋へ戻つて來た。彼は彼女に迫つて訴へた。しかし、卑彌呼の手には、絶えず拔かれた一本の劍が握られてゐた。さうして、彼女の答へは定つてゐた。

「待て、奴國の滅びたのは、今ではない。」

反絵はその度に無言のまま戸外へ馳け出すと、必ず彼の劍は一人の兵士を傷つけた。

二十五

奴國の宮では、長羅は卑彌呼を失つて以來、一つの部屋に横たはつたまま起きなかつた。彼は彼女を探索に出かけた兵士達の歸りを待つた。しかし、歸つた彼らの誰も弓と矢を捨てると默つて農夫の姿に變つてゐた。長羅は童男の運ぶ食物にも殆んど手を觸れようとしなくなつた。それぱかりではなく、最早や彼を助ける一人殘つた祭司の宿禰にさへも、彼は言葉を交へようとしなかつた。さうして、彼の長軀は、不彌を遁れて歸つたときの彼のごとく、再び枯木のやうにだんだんと痩せていつた。彼の病原を洞察した宿禰は、蚯蚓と、鵲腸草と、童女の汁水とを混ぜ合せた液汁を長羅に飲ませるために苦心した。しかし長羅はそれさへも飲まうとはしなかつた。そこで、宿禰は奴國の宮の乙女達の中から、優れて美しい乙女を選拔して、長羅の部屋へ導き入れることを計畫した。しかし、第一日に選ばれた乙女と次の乙女の美しさは長羅の引き締つた脣の一端さへも動かすことが出來なかつた。宿禰は憂慮に惱んだ額をして、自ら美しい乙女を捜し出さんがために、奴國の宮の隅々を廻り始めた。その噂を聞き傳へた奴國の宮の娘を持つた母親達は、己の娘に華やかな裝ひをこらさせ、顔を飾らせて戸の外に立たせ始めた。さうして、彼女自身は己の娘を凌駕する美しい娘達を見たときに、それらの娘達の古い惡行を、通る宿禰の後から大聲に饒舌つていつた。かうして、第三に選ばれた美しい乙女は、娘を持つた奴國の宮の母親達のまだ誰もが豫想さへしなかつた訶和郎の妹の香取であつた。しかし、己の娘の榮譽を彼女のために奪はれた母親達の誰一人として、香取の容貌と行跡について難ずる者は見あたらなかつた。何ぜなら、香取の父は長羅に殺された宿禰であつたから。彼女は父の慘死に次いで兄の逃亡の後は、ただ一人訶和郎の歸國するのを待つてゐた。彼女にとつて、父を殺した長羅

は、彼女の心の敵とはならなかつた。彼女の敵は、彼女がひとり、胸底深く秘め隱してゐた愛する王子、長羅を奪つた不彌の女の卑彌呼であつた。さうして、彼女の父を殺した者も彼女にとつては、彼女の愛する王子長羅をして彼女の父を殺さしめた不彌の女の卑彌呼であつた。選ばれた日のその翌朝、香取は宮殿から選ばれた牛車に乘つて登殿した。彼女は宿禰が彼女を選んだその理由と彼女に與へられた重大な責任とを、他に選ばれた乙女達の誰よりも深く重く感じてゐた。彼女は青色の衣を纏ひ、首からは翡翠の勾玉をかけ垂らし、その頭には瑪瑙をつらねた玉鬘をかけて、兩腕には磨かれた鷹の嘴で造られた一對の釧を附けてゐた。さうして、彼女の右手の指に嵌つてゐる五つの鐶は、亡き母の片身として、彼女の愛翫し續けて來た黄金の鐶であつた。彼女は牛車から降りると、一人の童男に共なはれて宿禰の部屋へ入つていつた。宿禰は暫く彼女の姿を眺めてゐた。さうして、彼はひとり得意な微笑をもらしながら、長羅の部屋の方を指差して彼女に云つた。

「行け。」

香取は命ぜられるままに、長羅の部屋の杉戸の方へ歩いていつた。彼女の足は、戸の前まで來ると立ち悚んだ。

「行け。」と再び後で宿禰の聲がした。

彼女は杉戸に手をかけた。しかし、もし彼女が不彌の女に負けたなら、さうして、彼女が、もし奴國の女を滅したときは？

「行け。」と宿禰の聲がした。

彼女の胸は激しい呼吸のために波立つた。がそれと同時に、彼女の脣は、決意に引き締つて慄へて來た。彼女は手に力を籠めながら、靜に杉戸を開けてみた。彼女の長く心に祕めてゐた愛人は、毛皮の上に横たはつて眠つてゐた。しかし、彼女の頭に映つてゐた曾ての彼の、男々しく美しかつたあの顏は、今は攅まつた窪みの底に眼を沈ませ、鬚は突起した顎を蔽つて縮まり、さうして、彼の兩頬は、餓ゑた鹿のやうに細まつて落ちてゐた。

「王子、王子。」

彼女は跪拜いて小聲で長羅を呼んだ。彼女の顏は、その氣高き容色の上で赧らんだ。しかし、長羅は依然として、彼女の前で眠つてゐた。彼女は再び膝を、長羅の方へ進めて行つた。

「王子よ、王子よ。」

すると、突然に長羅の半身は起き上つた。彼は爛々と眼を輝かせて、暫く部屋の隅々を眺めてゐた。さうして、漸く跪拜いてゐる香取の上に眼を注ぐと、彼の熱情に輝いたその眼は、急に光りを失つて細まり、彼の身體は、再び力なく毛皮の上に横たはつて眼を閉ぢた。香取の顏色は、蒼然として變つて來た。彼女は身を床の上に俯伏せた。が、再び、彈かれたやうに頭を上げると、その蒼ざめた頬に涙を流しながら、聲を慄はせて長羅に云つた。

「王子よ、王子よ、我は爾を愛してゐた。王子よ、王子よ、我は爾を愛してゐた。」

彼女は不意に言葉を切ると身體を整へて端坐した。さうして、頭から靜に玉鬘を取りはづし、首から勾玉をとりはづすと、長羅の眼を閉ぢた顏を從容として見詰めてゐた。すると、彼女の脣の兩端から血がたらたらと流れて來た。彼女の蒼ざめた顏色は、一層その色を蒼ざめて落ちつき出した。彼女の身體は端坐したまま床の上に傾くと、最早や再びとは起き上つて來なかつた。かうして、兵部の宿禰の娘は死んだ。彼女は舌を嚙み切つて自殺した。しかし、横たはつてゐる長羅の身體は、身動きもしなかつた。

香取の死の原因を知らなかつた奴國の宮の

人々は、一齊に彼女の行爲を賞讃した。さうして、長羅を戴く奴國の乙女達は、奴國の女の名譽のために、不彌の女から、王子の心を奪ひ返せと叫び始めた。第四の乙女が香取の次に選ばれて再び立つた。人々は齊しく彼女の美しさの效果の上に注目した。すると、俄然として、彼女は香取のやうに自殺した。何ぜなら、香取を賞讃した人々の言葉は、あまりに莊嚴であつたから。しかし、また第五の乙女が宿禰のために選ばれた。人々の彼女に注目する仕方は變つて來た。けれども、彼女の運命も第四の乙女のそれに等しく、不吉な慣例を造らなければならないのは當然のことであつた。かうして、奴國の宮からは日々に美しい乙女が減りさうになつて來た。娘を持つた奴國の宮の母親達は、急に己の娘の美しい裝ひをはぎとつて、農衣に着せ變へると、宿禰の眼から家の奥深くへ隱し始めた。しかし、宿禰はひとり、ますます憂慮に沈んだ陰鬱な顏をして、その眼を光らせながら宮の隅々をさ迷うてゐた。第六番目の乙女が選ばれて立つた。人々は恐怖を以て彼女の身の上を氣遣つた。その夜、彼らは乙女の自殺の報道を聞く前に、神庫の前で、宿禰が何者かに暗殺されたと云ふ報道を耳にした。しかし、長羅の横たはつた身體は、殆ど空虛に等しくなつた王宮の中で、死人のやうに動かなかつた。

或る日、一人の若者が、王宮の門前の榧の根を見ると、疲れ切つた身體をその中へ馳け込ませて、ひとり叫んだ。

「不彌の女を、我は見た。不彌の女を、我は見た。」

若者の聲に應じて出て來る者は誰もなかつた。彼は高縁に差し込んだ太陽の光りを浴びて眠つてゐる童男の傍を通りながら、王宮の奥深くへだんだんと入つていつた。

「不彌の女を、我は見た。不彌の女は、耶馬臺にゐる。」

長羅は若者の聲を聞くと、矢の音を聞いた猪のやうに、身を起した。彼の顏は脹らんだ。

「入れ、入れ。」しかし、彼の聲はかすれてゐた。若者の呼び聲は、長羅の部屋の前を通り過ぎて、八尋殿へ突きあたり、さうして、再び彼の方へ戻つて來た。長羅は蹌踉めきながら杉戸の方へ近寄つた。

「入れ、入れ。」

若者は杉戸を開けると彼を見た。

「王子よ、不彌の女を我は見た。」

「よし、水を與へよ。」

若者は馳けて行き、馳けて歸つた。

「不彌の女は、耶馬臺にゐる。」

長羅は盌の水を飲み干した。

「爾は見たか。」

「我は見た。我は耶馬臺の宮へ忍び入つた。」

「不彌の女は、何處にゐた。」

「不彌の女を我は見た。不彌の女は、耶馬臺の宮の王妃になつた。」

長羅は激怒に壓伏されたかのやうに、ただ默つて慄へながら、床の上の劍を指差した。

「王子よ、耶馬臺の王は戰ひの準備をなした。」

「劍を拾へ。」

若者は劍を長羅に與へると、再び云つた。

「王子よ、耶馬臺の王は、奴國の宮を攻めるであらう。」

「耶馬臺を攻めよ。兵を集めよ。我は爾を、宿禰にする。」

若者は喜びに眉毛を吊り上げて默つてゐた。

「不彌の女を奪へ。耶馬臺を攻めよ。兵を集めよ。」

若者は劍を握つて、部屋の外へ馳け出した。

間もなく、法螺が神庫の前で、高く鳴つた。それに應じて、銅鑼が宮の方々から鳴り出した。

二十六

耶馬臺の宮では、反絵の狂暴は、その度を越えて募つて來た。それにひきかへ、兵士達の間では卑彌呼を尊崇する態度が戰ひの準備の整つて行くに從つて高まつて來た。何ぜなら、未だ曾て何物も制御し得なかつた反絵の狂暴を、ただ一眼の視線の下に壓伏さし得た者は、不彌の女であつたから。さうして、彼女のために、反絵の鏃の下からその生命を救はれた數多くの者達は彼らであつた。彼らは彼らの出征についての必勝を期してゐた。何ぜなら、未だ何者も制御し得なかつた耶馬臺の國の大なる恐怖を、ただ一眼の下に壓伏さし得る不彌の女を持つものは彼らの軍であつたから。反絵の出した三人の偵察兵は歸つて來た。彼らは、奴國の王子が卑彌呼を奪ひに耶馬臺の宮へ攻め寄せると云ふ報道を齎した。反絵と等しく怒つた者は耶馬臺の宮の兵士達であつた。その翌朝、進軍の命令が彼らの上に下された。一團の先頭には騎馬に跨つた反絵が立つた。その後からは、楯の上で輝いた數百本の鉾尖を從へた卑彌呼が、六人の兵士に擔がれた乘物に乘つて出陣した。彼女は、長羅を身邊に引き寄せる手段として、冑の上から、人目を奪ふ紅の染衣を纏つてゐた。一團の殿には背に投げ槍と食糧とを荷ひつけられた數十疋の野牛の群れが連つた。彼らは弓と矢の林に包まれて、燃え立つた櫨の紅葉の森の中を、奴國の方へ進んでいつた。さうして、この蜿蜒とした武裝の行列は、三つの山を昇り、四つの谷に降り、野を越え、森をつききつて行つた。その日の中に、二人の奴國の偵察兵を捕へて首斬つた。二日目の夕暮れ、彼らはある水の涸れた廣い河の岸へ到着した。

二十七

不彌を一擧に蹂躙して以來、まだ日のたたぬ奴國の宮では、兵士達は最早や戰爭の準備をする必要がなかつた。神庫の中の鉾も劍も新しく光つてゐた。さうして、彼らの弓弦は張られたままに、まだ一矢の音をも立ててはゐなかつた。しかし、王子長羅の肉體は、弱つてゐた。彼は焦躁しながら、鶴と鶏と山蟹の卵を食べ續けるかたはら、その苛立つ感情の制御しきれぬ時になると、必要なき偵察兵を矢繼早やに耶馬臺へ向けた。さうして、彼は兵士達に逢ふ毎に、その輝いた眼を狂人のやうに山の彼方へ向けて、彼らに云つた。

「不彌の女を奪へ。奪つた者を宿禰にする。」

彼の言葉を聞いた兵士達は互にその額を見合せて默つてゐた。しかし、それと同時に彼らの野心は、その沈默の中で互に彼らを敵となして睨み合せた。

數日の後、長羅の額は蒼白く痩せたままに輝き出した。さうして、逞しく前に蹲んだ彼の長驅は、駿馬のやうに兵士達の間を馳け廻つてゐた。出陣の用意は整つた。長羅の正しく尖つた鼻と、馬の鼻とは眞直ぐに耶馬臺を睥んで進んでいつた。數千の兵士達は、互に敵となつて塊つた大集團を作りながら、聲を潛めて彼の後から從つた。長羅の馬は、耶馬臺へ近寄るに從つて、次第にひとり兵士達から離れて前へ急いだ。このため兵士達は、休息することを忘れねばならなかつた。しかし、彼らはその熱情を異にする長羅の後に續くことは、不可能なことであつた。さうして、二日がたつた。兵士達は、ある川岸へ到着したときは、最早や前進することも出來なかつた。彼らはその日、まだ太陽の輝いてゐる中から、河原の芒の中で夜營の準備にとりかかつた。

遠い國境の山の峯が、一つ黑々と煙を吐いてゐた。太陽は桃色に變つて落ち始めた。そのとき、遽に對岸の芒の原が、ざわめき立つた。さうして、一齊に水禽の群れが、列を亂して空高く舞ひ上ると、間もなく、數千の鋒尖が、芒の穗の中で輝き出した。

「耶馬臺の兵が押し寄せた。」

「耶馬臺の兵が攻め寄せた。」

奴國の兵士達は動亂した。しかし、彼らは休息を忘れて歩行し續けた疲勞のために、却つて直ちにその動亂を整へて、再び落ちつきを奪回することに容易であつた。彼らは應戰の第一の手段として、盾や劍やその他總ての武器を芒の中に伏せて靜まつた。何ぜなら、彼らは奴國の兵の最も特長とする戰法は夜襲であることを知つてゐた。數名の斥候が川上と川下から派出された。長羅は一人高く馬上に跨つて對岸を見詰めてゐた。川には淺瀨が中央にただ一線流れてゐた。さうして、その淺瀨の兩側には廣い深淵が續いてゐた。

夜は次第に降りて來た。對岸の芒の波は、今は靜に背後の山の下で鎮つて見えた。その時、突然對岸からは銅鑼がなつた。すると、尾に火をつけられた一團の野牛の群れが、火のやうに棚曳いた對岸の芒の波を蹴破つて、奴國の陣地へ突進して來た。奴國の兵は、野牛の一團が眞近まで迫つたときに、一齊に彼等の群れへ向つて矢を放つた。牛の群れは鳴聲を上げて突き立つと、逆に耶馬臺の陣地の方へ、猛然と押し返した。奴國の兵は、牛の後から對岸に向つて押し寄せようとした。しかし、長羅は彼らの前を、一直線に馬を走らせてその前進を食ひとめた。と、齊しく野牛の群れは、對岸から放たれ出した矢のために、再び逆流して奴國の方へ向つて來た。それと同時に、鯨波の聲が對岸から湧き上ると、野牛の群れの兩翼となつて、投げ槍の密集團が、砂地を蹴つて兩方から襲つて來た。奴國の兵は、直ちに、川岸に添つて長く延びた。さうして、その敵の密集團に向つて、一齊に矢を放つと、再び密集團は彼らの陣營へ引き返した。野牛の群れは狂ひながら、ひとり奴國の兵の斷ち切れた中央を突き拔けて、遠く後方の森の中へ馳け過ぎた。

夜は全く降りてゐた。國境の噴火の煙は火の柱となつて空中に立つてゐた。奴國の兵の疲勞の時は迫つて來た。しかし、彼らの疲勞は一段と増してゐた。彼らは、敵の陣地の靜まると一緒に、芒の中に腰を下ろして休息した。長羅は彼らの疲勞の狀態に氣がつくと、その計畫してゐた夜襲を斷念しなければならなかつた。けれども、奴國の軍は、次に來るべき肉迫戰のときまでに、敵の陣營から矢をなくしておかねばならなかつた。それには、夜の闇が必要であつた。

彼らは疲勞の休まる間もなく、聲を潛めて川原の中央まで進んで出ると、楯を垣のやうに横につられて身を隱した。さうして、彼らは一齊に足を踏みたたき、鯨波の聲を振り上げて肉迫する氣勢を敵に知らしめた。對岸からは、矢が雨のやうに飛んで來て楯にあたつた。彼らは引きかへすと又進み、退いては再び喊聲を張り上げた。さうして、時刻を隔いて、この數度の牽制を繰り返してゐる中に、最早や對岸から矢が飛ばなくなつて來た。しかし、彼らに代つて敵からの牽制が、激しくなつた。初め奴國の兵は、敵の喊聲が肉迫する度に、恐怖のために、思はず彼らに向つて矢を放つた。けれども、それが數度續くと、彼らは敵軍の來襲も、所詮自國の牽制と等しかつたことに氣付いて矢を惜しんだ。夜はだんだんと更けていつた。限つたやうに沈默し合つた兩軍からは、盛に斥候が派せられた。川上と川下の砂地や芒の中では、小

さな斥候戰が方々で行はれた。

かうして、夜は兩軍の上から明けていつた。朝日は奴國の陣地の後方から昇り始めた。耶馬臺の國の國境から立ち昇る噴火の柱は、再び煙の柱に變つて來た。さうして、兩軍の間には、血の染んだ砂の上に、矢の刺つた屍や牛の死骸が朝日を受けて、點々として横たはつてゐた。

そのとき、耶馬臺の軍は、まばらに一列に横隊を造つて、靜々と屍を踏みながら進んで來た。彼らの造つた楯の上からは、油を滲ませた草花の火口が鉾先につきさされて燃えてゐた。彼らは奴國の陣營間近く迫つたときに、各々その箭先の火口を芒の中へ投げ込んだ。奴國の兵は直ちに足で落ち來る火口を踏みつけた。しかし、彼らの頭の上からは、續いて無數の投げ槍と箭が落ちて來た。それに和して、耶馬臺の軍の喊聲が、地を踏み鳴らす跫音と一緒に湧き上つた。消え殘つた火口の焰は芒の原に燃え移つた。奴國の陣營は、竹の爆ける爆音を交へて、濛々と白い煙を空に卷き上げた。長羅は全軍を森の傍まで退却させた。さうして、兵を三團に分けると、最も精鋭な一團を自分と共に森へ殘し、他の二團をして、立ち昇る白煙に隱れて、川上と川下へ分れさせた。分れた二團の軍兵は鉾と劍を持つて、砂地の上の耶馬臺の軍を、兩方から一時にどつと挾撃した。白煙の中へ矢を放つてゐた耶馬臺の軍は、散亂しながら對岸の陣地の中へ引き返した。奴國の二團は川の中央で一つに合すると、大集團となつて逃げる敵軍の後から追撃した。さうして、今や彼らは、敵の陣營へ殺到しようとしたときに、新たなる耶馬臺の軍が、奴國の密集團を中に挾んで芒の中から現れた。彼らは奴國の密集團と同じく、鉾と劍を持つて、喊聲を上げつつ、堂々と二方から押し寄せて來た。長羅は自國の軍が敵軍に包まれたのを見てとると、殘つた一團を引きつれて、斜に火の消えた芒の原を突き破つて現れた。耶馬臺の軍は彼の新しき一軍を見ると、奴國の密集團を包んだまま、急に進行を停止した。長羅は自分の後ろに一團を張つて、敵の大團に對峙しながら動かなかつた。その時、對岸の芒の中から、逃げ込んだ耶馬臺の兵の一團が、再び勢ひを盛り返して進んで來た。と、三方から包まれた奴國の密集團は渦卷きながら、耶馬臺の軍の右翼となつた大團の中へ殺到した。それと同時に、かの芒の中から押し返した敵の一團は、投げ槍を雨のやうに輝かせて、動亂する奴軍の中へ突入した。忽ち動搖めく人波の點々が、倒れ、跳ね、踊り、渦卷くそれらの頭上で無數の白い閃光が明滅した。と、やがて、その殺戮し合ふ人の團塊は叫喚しながら紅となつて、延び、縮み、搖れ合ひつつ、次第に小さく擦り減つて行くと、遽に長羅の動かぬ一團の方へ、潮のやうに崩れて來た。それに和して、今迄彼と對峙して止まつてゐた耶馬臺の左翼の軍勢も、一時に鯨波の聲を張り上げて、彼の方へ押し寄せた。長羅の一團は、彼を捨てて崩れて來た。長羅は一人馬上に踏みとまつて、「返せ、返せ。」と叫び續けた。

その時、放してあつた一人の奴國の斥候が、彼の傍へ駈け寄つて來ると、手を喇叭のやうに口にあてて彼に叫んだ。

「不彌の女を我は見た、見よ。不彌の女は、赤い衣を纏つてゐる。」

長羅は彼の指差す方を振り向いた。そこには、肉迫して來る刃の潮の後方に、紅の一點が、靜々と赤い帆のやうに彼の方へ進んでゐた。長羅はひらりと馬首を敵軍の方へ振り向けた。馬の腹をひと蹴り蹴つた。と彼は無言のまま、その紅の一點を目がけて、押し寄せる敵軍の中へ、ただ一騎驀進した。鉾の雨が、彼の頭

上を飛び廻つた。彼は楯を差し出し、片手の剣を振り廻して飛び来る鉾を斬り払つた。無数の顔と剣が、彼の周囲へ波打ち寄せた。彼の馬は飛び上り、跳ね上つて、その人波の上を起伏しながら、前へ前へと突き進んだ。長羅の剣は、馬の上で、風車のやうに廻転した。腕が飛び、剣が飛んだ。ばたばたと人は倒れた。と、急に人波は、彼の前で二つに割れた。

「卑弥呼。」

長羅の馬は突進した。そのとき、片眼の武将を乗せた黒い一駒が、砂地を蹴つて、彼の前へ駈けて来た。

「開け、我は耶馬台の王の、反絢である。」

長羅の馬は突き立つた。さうして、反絢の馬を横に流すと、円を描いて捲かれた高座の上の卑弥呼の方へ突進した。

卑弥呼の高座は、彼の馬首を廻しながら、反絢の後へ廻つていつた。長羅は輝いた眼を卑弥呼に向けた。

「卑弥呼。」

彼は馬を躍らうとすると、再び反絢の馬は、疾風のやうに駈けて来た。と、長羅は突然馬首を返すと、反絢の馬に向つて突撃した。二頭の馬は動きながら突き立つた。剣が空中へ跳ね上つた。再び馬は頭を合せて落ち込んだ。と、反絢の剣は長羅の腹へ突き刺つた。同時に、長羅の剣は反絢の肩を斬り下げた。長羅の長軀は反絢の上に跳り上つた。二人の身體は逆様に馬の上から墜落すると、抱き合つたまま砂地の上を転つた。蹴り合ひ、踏み合ふ彼らの足先から、砂が跳ね上つた。草葉が飛んだ。さうして、反絢の血走つた片眼は、引つ掴まれた頭髪に吊り上げられたまま、長羅の額を中心に、上になり、下になつた。二つの口は噛み合つた。亂れた彼らの頭髪は、絡まつた鳥のやうにばさばさと地を打つた。

卑弥呼の高座は二人の方へ近寄つて来ると降ろされた。しかし、耶馬台の兵士の中で、彼らの反絢を助けようとする者は、誰もなかつた。何ぜなら、耶馬台の恐怖を失つて、幸福を増し得る者は、それは彼らであつたから。彼らは卑弥呼と一緒に、剣を握つたまま、血砂にまみれて呻きながら輾々する二人の身體を見詰めてゐた。彼らの顔は、一様に、彼らの美しき不彌の女を守り得る力を、彼女に示さんとする努力のために緊き結つてゐた。しかし、間もなく彼らの前で、長羅と反絢の[illegible]は、卑弥呼の二人の良人の仇敵は、喘ぎながら、次第にその力を弱めていつた。さうして、反絢の片眼は、瞑られたまま砂の中にめり込むと、二人は長く重なつたまま、動かなかつた。卑弥呼はひとり、彼らの方へ近づいた。そのとき、長羅は反絢の胸を踏みつけて、突然、地から湧き出たやうに、起き上つた。彼は血の滴る頭髪を振り亂して、柔かに微笑しながら、その蒼ざめた顔を彼女の方へ向けた。

「卑弥呼。」彼女は立ち停ると剣を上げて身構へた。兵士達は長羅の方へ肉迫した。

「待て。」と彼女は彼らに云つた。

「卑弥呼、我は爾を迎へに、ここへ来た。」

長羅は腹に反絢の剣を突き通したまま、両腕を擴げて彼女の方へ歩まうとした。しかし、彼の身體は左右に二足三足蹌踉めくと、滴る血の重みに倒れるかのやうにばつたりと地に倒れた。彼は再び起き上つた。

「卑弥呼、爾は我と共に奴國へ帰れ。我は爾を待つてゐた。」

「爾は我の夫の、大兄を刺した。」

「我は刺した。」

「爾は我の父と母とを刺した。」

「我は刺した。」

「爾は我の國を滅ぼした。」

「我は滅ぼした。」

長羅は再び蹌踉めきながら、彼女の方へ歩みよつた。と、またも彼の身體は、どつと倒れた。振り上げた卑彌呼の劍は、下がつて來た。長羅は尙も起き上らうとした。しかし、彼の胸は、地に刺された人のやうに、地を離れると地についた。さうして、彼は漸く砂の上から額を上げると、彼女の方へ手を延ばした。

「卑彌呼、我は爾を奪はんために、我の國を滅ぼした。我は爾を奪はんために、我の父を刺した。宿禰を刺した。爾は歸れ。」

長羅の蒼ざめた額は、地に垂れた。

「卑彌呼、卑彌呼。」

彼は恰も砂に呟くごとく彼女を呼ぶと、彼の瞼は閉ぢられた。卑彌呼の身體は顫へて來た。彼女の劍は地に落ちた。

「大兄よ、大兄よ、我を赦せ。彼を刺せと爾は云ふな。」

卑彌呼は頭をかかへると、劍の上へ泣き崩れた。

「大兄よ、大兄よ、我を赦せ、我は長羅を撃つた。我は爾のために復讐した。ああ長羅よ、長羅よ、我を赦せ。爾は我のために殺された。」

長羅と反絵と卑彌呼を殘して、彼方の森の中では、奴國の兵を追ひながら、奴國の方へ押し寄せて行く耶馬臺の軍の鯨波の聲が、一段と空に上つた。

年譜

明治三十一年三月十七日誕生。大分縣宇佐郡長峰村に本籍あり、初めて小學校に入りしは大津市大津小學校。後、父の任地に從ひ轉々小學校を變る。父は測量技師なり。最も印象に殘る地は三重縣伊賀國東柘植なり。此の地は母の生れし所なれば、多く此の地にて幼年期を送る。三重縣上野中學を卒業後、早稻田の文科に入學。中途にして退學、後、再び入學。二十五のとき父死す。

大正十二年一月、「文藝春秋」同人となる。

同年五月、『日輪』を「新小說」に、「蠅」を「文藝春秋」に發表す。

同年八月、『マルクスの審判』を「新潮」へ發表。

九月一日、大震災。

大正十三年十月、「文藝時代」を同人十七人と共に創刊す。新感覺派の文學運動、此の時より始まる、

短篇集、「御身」を金星堂より出版。

同十月、「無禮な街」を「新潮」へ。

同十一月、「愛卷」を「改造」へ。

大正十四年正月、「表現派の役者」を「新潮」へ、「慄へる薔薇」を「新小說」へ。

同年四月、「園」を「文藝時代」へ。

同年七月、『靜かなる羅列』を「文藝春秋」へ。

同年八月、『街の底』を「文藝時代」へ。

大正十五年正月、『ナポレオンと田蟲』を「文藝時代」へ。

同年七月、「街へ出るトンネル」を「中央公論」へ。

同年八月、「春は馬車に乘つて』を「女性」へ。

同年十月、「蛾はどこにでもゐる」を「文藝春秋」へ。

昭和二年正月、「計算した女」を「新潮」へ。

同年二月、花園の思想」を「改造」へ。

同月、短篇集「春は馬車に乘つて」を改造社より出版。

同年四月、「文藝時代」を解散。

同年五月、「手帖」を同人二十人と共に創刊。

同年七月、「[illegible]とした[illegible]」を「改造」へ。

同年同月、戲曲集『愛の挨拶』を金星堂より出版。

同年九月、『七階の運動』を「文藝春秋」へ。

同年十一月、「皮膚」を「改造」へ。

同月、雜誌「手帖」を廢刊す。

昭和三年正月、「眼に見えた虱」を「文藝春秋」へ。

同年四月、「花婿の感想」を「改造」へ。

同年五月、支那へ遊ぶ。

同年八月、「笑つた皇后」を「中央公論」へ。

同年十一月、長篇の一篇、「風呂と銀行」を「改造」へ。

同月、選集「新選横光利一集」を改造社より出版。

昭和四年三月、長篇の第二篇、「足と正義」を「改造」へ。

同年六月、長篇の第三篇、「掃溜の疑問」を「改造」へ。

海に生くる人々

葉山嘉樹

序。

葉山嘉樹

私は、自分で、他に讀んで貰っても、大して恥しくない、と思ふ作品はそんなに沢山は書いてゐない。

「海に生くる人々」「誰が殺したか」「淫賣婦」「労働者の居ない船」等は私の範疇に属すると思ってゐる。

今後は、恥しくない作品丈けを書きたいと思ってゐる。

海に生くる人々

一

室蘭港が奥深く、廣く入り込んだ、その太平洋への灘口に、大黒島が栓をしてゐる。雪は北海道の全土を蔽うて地面から、雲までの厚さで横に降りまくつた。

汽船萬壽丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を詰め込んで、風雪の中を横濱へと進んだ。船は今大黒島をかはらうとしてゐる。その島の彼方には大きな浪が打つてゐる。萬壽丸はデッキまで沈んだその船體を、太平洋の怒濤の中へこはごは覗けて見た。そして思ひ切つて、乘り出したのであつた。彼女がその臨月の腹で走れる限りの速力が、ブリッヂからエンヂンへ命じられた。

冬期に於ける北海航路の天候は、いつでも非常に險惡であつた。安全な航海、愉快な航海は冬期に於ては北部海岸では不可能なことであつた。

萬壽丸甲板部の水夫達は、デッキに打ち上げる、ダイナマイトのやうな威力を持つた波浪の飛沫と戰つて、甲板を洗つてゐた。ホースの尖端からは、沸騰點に近い熱湯が迸り出たが、それがデッキを五尺流れるうちには凍るのであつた。五人の水夫は熱湯の凍らぬ中に、その渾身の精力を集めて、石炭塊を掃きやつた。

萬壽丸は右手に北海道の山や、高原を眺めて走つた。雪は船と陸とをヴェールを以て遮つた。悲壯な北海道の吹雪は、マストに悲痛な叫びを上げさせた。

生命のあらゆる危難の前に裸體となつて、地下數千尺で掘られた石炭は、數萬の炭坑勞働者を踏臺にして地上に上つて來た。そして、今、海上では同じく生命の赤裸々な危險に、その全身を船體と共に暴露しつゝある、船員の勞働に依つて運送されるのであつた。

藤原六雄は、ランプ部屋へ入つて、ランプの掃除をしてゐた。彼は、今年二十八歳のひどくだまりやの、氣むつかしやであつた。そして、一體彼は何か仕事をしてゐるのか、どうか疑はしいほど、勞働が嫌ひな性のやうに見えた。彼の職務は倉庫番であつた。

ランプ部屋はブリッヂに向ひ合つて、水夫室と火夫室との間に、みじめに、小さく拵へられてあつた。藤原はそこでランプのホヤを拭きながら、水夫達が、デッキを掃除してゐるのを見てゐた。彼はこの頃ボースンにも、一等運轉士にも見込みが惡いことを知つてゐた。「ストキ（倉庫番）にもワシデッキの時には手傳つて貰はなきやならん。一萬噸も八千噸もある船とは異ふんだからな」と、いつか水夫達全部が揃つて飯を食つてる時にボースンに云はれたことがあつた。

「ふん、ストキとは倉庫番てことだ。倉庫番は倉庫の番さへしてりや、それで澤山だらう」と、彼は答へた。

——それ以來、どうも、俺は水夫たちの仲間からまでも受けがよくない——と、淋しさうに、ストキは考へた。

二

船のエンヂンはフルスピードをかけてゐたが、風と浪とで速力が全で出なかつた。未明に出帆したのに、夕方になつても未だ津輕海峽沖

を抜け切らなかつた。

その夜、高等船員側では室蘭へ引きかへさうかとの相談も行はれたが、それは實行されるには至らなかつた。

水夫達は、暴風雪がだん／＼猛烈になつて來るに連れて、その作業も平常とは趣を異にし始めた。船體は保險マーク以上に沈んでゐるので、十分に抵抗的であつて、波浪は一つも殘らずデッキへと打ち上げた。そしてデッキは一面の海になつてしまつた。掬ひ込む水はなか／＼小さな排水口からは急には出て行かなかつた。

デッキには、ハッチの上を通るやうに、ライフライン（命綱）が張られた。いつデッキを通らうと試みても、そこは外海と何等異る處はないからであつた。

浪はその山と山との間に船を挾んでしまふ。その谷になつた部分が船のヘッドから胴體へ進む時、次の山の部分がヘッドに打ち衝る。鐵製のわが萬壽丸も、この苦悶には堪へかねて、斷末魔の叫びを擧げる。ミリ／＼、ドヾン——とうなる。その谷がやがて、とも（艫）へ行くと推進器は空中で空廻りをする、推進器は、飛行機のプロペラーのやうに空中で廻轉する。兇暴なその船の大きさほどの豆粒のやうに映える。特別裝置のないどの棚からも、いろんなものが落ちる。ランプのカップからランプが踊り出る。舵器は非常にその效力を減じられる。速力は今ではもう推進器の空轉の危險から、殆んど三哩位に減じられて、たゞ船首を風の方向から轉換しないやうにのみ總ての努力を盡してゐた。

機關室の方も汽罐室の方も、非常な困難があつた。油差しは、動搖のために、機械と機械との狹い部分に入り込むのに、神祕的な注意を拂つた。火夫はその汽罐の前で、ショベルを持つて、よろけまいとして骨を折つた。

汽罐室の眞上のコック場では、コックが、いつも一度で炊く飯を五度位に分けて炊かねばならなかつたし、お菜も同樣な方法にして、猶、汁物は作るわけには行かなかつた。

コロッパス（石炭運び）は、石炭庫の中で、頭中を瘤だらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかつた。

水夫等は、デッキを洗ふ波浪からダンブル內への浸水を護るために、ハッチカバー（船艙の蔽ひ）や、それを押へた金具や、又その上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかつた。それは危險な作業であつた。そしてこの危險な作業なしには、この船全體が危險から免れ得る方法がなかつた。恰も意地の惡い馬が馴れぬ乘手にするやうに、船體は猛烈にその背を振つた。そしてその度に柄杓が水を掬ふやうに、デッキは波浪を掬ひ込んだ。ロープは濡れて、固くなつて操作に非常な困難と遲滯とを招いた。然しそれは成し遂げなければならない仕事であつた。

ハッチが水を飲むと云ふことは、文句なしに、簡單明瞭に、船體の沈沒を意味するものであつた。五人の水夫とボースンとストキと、大工との八人が總動員で、この仕事を遂げた。

彼等はその體が、そのまゝ凍るやうな風の下に、メスのやうに光る、そして痛い波浪に刺された。そしてそれは、餘り動かない部分をカンカンに凍らせた。

船體の危險と、船體と共にする自分自身の危險と、そして、覿面に自分の凍えんとする肉體に對する危險とは、火事が中風の婆さんに、石臼を屋外まで抱へ出させたほどの目覺しい、超人間的な活動を、水夫達に與へた。そして、船首のハッチ二つは完全にその防備が出來上つた。

未だ二つのハッチが船尾の方に殘つてゐた。

そして、時間は今夕食に迫つてゐた。水夫たちは、飢ゑを感じた。けれども、海も飢ゑを感

じて、わが萬壽丸を呑まうとしてゐるのであつた。

船は絶えず藻掻き、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギンは絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決鬪するやうに打ち合つた。船尾ではプロペラーが、その手を空に振り上げた。

自然と人力とはその最大の力と、あらゆる智慧とを以て鬪爭した。

三

船を一郭として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戰つてゐる時に、船員たちは、自分たちが、船のりであることを、この時以上に癪に障り、心細くなり、哀れに氣の滅入ることはなかつた。そして彼等は、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意とにも拘らず、自分の運命を哀れむのであつた。彼等は、眞つ暗な闇の中を電光が一時に、全く鮮明にパッと明るく照らす様に、この困難な勞働の間に、感ずる處の彼等の地位は、全くハッキリした賃銀勞働者の正體であつた。然し、それは電光と全く同じであつた。彼等は、すぐ、その仕事の方へと一切の注意を向けねばならなかつた。

水夫等は、船首の方を濟まして、船尾のハッチへ行くために、サロンデッキに上つた時であつた、ブリッヂにゐたコーターマスターの小倉が、何か分らぬことを、嵐中で怒鳴りながら、物凄い勢ひでブリッヂから飛び下りて來て、サロンデッキを艫の方へかけて行つて、そのタラップをまた飛び下りた。

セーラーたちは、ビクリとした。のみならず、コック場のコックやボーイや交替で休んでゐた機關長や、ブリッヂの上の船長やは、全部が小倉の飛んでつた行方を見守つた。

小倉は、船尾へ驅けつけた。そこには、ブリッヂから操るスティームギーア(蒸汽舵機)の鎖と、そのカバーとの間に、わざとのやうに、水夫見習が、右半身をうつ伏しに潛り込ませてゐたのであつた。

小倉は、水夫見習が樂に出るやうにと思つたのであつたが、然し舵器は同位に船首を保つために、一刻も放擲しては置けなかつた。

そこへ水夫等は全部かけつけた。あるものは、カバーの金板をバーで動かさうと試みた。この間にも波浪は、船首甲板ほどではないにしても三四度、此處を洗つた。

水夫全體の力と小倉の力とは水夫見習を、鎖とカバーの間から引つ張り出すことが能きた。けれども見習は、引きずり上げられた溺死體のやうにだらりとして、眼ばかり宙につつてゐた、彼は直ちに、水夫二人に擔がれて、最も震動と、轟音との甚しい船首の、彼の南京蟲だらけの巣へ連れ込まれた。

仕事着を彼から脫がせることは最大の急務であつた。が同時に最大の困難でもあつた。まるで帆布作りの仕事着ででもあるやうに、それは凍りついてゐたのである。ついて來た藤原は、その腰のメスを拔いて見習の仕事着を上手に切り裂いた。そして、彼の寢間着が、上にかけられた。

ボーイ長の右手と右の肺の部分に紫暗色の打撲傷が出來てゐた。そして左足の拇指が碎けてゐた。

ストーブがないために、水夫等は甚しく寒かつた。見習は、傷と、凍のために、若しこのまゝにして置くならば、必ず始末は早くつくと云ふことを皆知つてゐた。そこでついて來たストキと、水夫二人は、各水夫の巣から、ありつたけの毛布を集めて、それをかけてやつた。

そして、そのまゝ、全部彼等は船尾ハッチのカバー作業に驅けて行つた。

船尾のハッチは船首のそれと同樣の危險と困

難さをもつて、作業された。手の屆きさうな低空を、雪雲が横飛びに飛んだ。中に、濃い雪雲は、マストに引つかゝつてそれを拔いてでも行くかのやうに、はげしくマストを搖ぶつた。水平線は、頭上遙に昇るかと思ふと、足下深く沈んだ。（船の動搖は、同時に水平線を動かすものだ。）ボーイ長（水夫見習を云ふ）の運命は、全甲板勞働者の現在のすぐ背後に鱶のやうに迫つてゐるのであつた。

　船尾部分のハッチはこの上もなく嚴密に密閉された。そして、次のは、機關室と、その上部に在る士官室、サロンデッキとの蔭になつてゐたために、以前の三つに比較べて、作業は樂であつた。そこで、藤原は、ランプを燈す準備をするために、再び、おもて（船首部分）へ歸つて行つた。

　ランプ部屋へ入る前に、彼は先づ水夫室へ入つた。未だ十七歳の少年、水夫見習は、痛さに堪へかねて、（お母樣、おとうさん）と、兩親を叫び求めては、泣いてゐた。そしては、暫く息を詰めて、死のやうな沈默の中へ落ちて行くのだつた。藤原は、ボーイ長の寢床の踏板に凭れかゝつて、ボーイ長の顏を覗き込んだ。けれども、見えなかつた。一つの窓も開けられてゐない水夫室は、出入口から星の夜のやうな光が辛うじて這ひ込み得ただけであつた。殊にボーイ長のは二層床の下部に當り、光の方を背にしてゐたので、最も暗かつた。藤原は、自分の床から蠟燭をとつて、ボーイ長の枕頭に立てた。彼は白ペンキのやうに青ざめて、そしてくらげのやうに衰へてゐた。

　未だ、チーフメートは、何等の手當もしには來なかつた。

　彼は、ボーイ長を慰めた、そして直ぐにチーフメートが「膏藥」を持つて、のろ／＼來やがるだらう、奴等には、勞働者よりも、プロックの方が比較にならぬほど重大なんだ、然し、心配しないがいゝ、皆がついてるからと云つて、ランプ部屋へ支度に行つた。

　萬壽丸は尻谷岬燈臺沖にかゝつた。暴化はその勢ひを少しも收めなかつた。

　水夫等は、ボートやサンハンを吹き飛ばされないやうに、それを、より一層殆んど、吹き出し度い位に、頑丈に、これでは沈沒した時に決して間に合はないと、證據立てられるほど、それほど頑丈に、くど／＼とデッキや煙突にまで、綱を引つ張つた。そして、この仕事は、波浪の恐れは全然なかつたが、動搖と、風と、おまけに「てすり」がないので、海へ落ちると云ふ危險を作つた。ボートデッキは、船中で一番高い部分であつて、それは士官室の屋根と天井とを兼ねてゐた。水夫達は、一本のロープを持つて、ボートの下へ仰向に潛り込んだり、ボートの外側――そこはデッキ板一枚の幅しかなくて、海面まで一直線にサイドなのだ――に、今縛りつける、そのボートに摑つて綱をからげるために、サイドへ足を踏ん張つて海の方へ體を傾けたりした。

　ボースンは、直ぐ前のブリッヂから、船長が作業を見てゐたために、その禿けた頭を、章魚のやうに赤くして慌てたり、怒鳴つたり、焦つたりした。

四

　陰鬱な薄暗かりが、海上に這ひ出たために、右舷に尻屋岬の燈臺が感傷的に瞬き始めた。荒れに荒れる海上に、燈臺の光を眺むるほど、人の心を感傷的にするものはない。この海の上は、今にも我々の命を奪はうとする程荒れ、喚いてゐる。そして、我々の家は宙天から地底へまで搖れ傾ぶ。そこには火もなく、燈も一もない。ために、あそこには、燈臺が光る。その

燈臺は、しつかりと地上に立つてゐて、そこには家族がある。團欒がある。愛すべき子供がある。いとしい妻がある。そこには火鉢があるだらう。鐵瓶がかゝつてるだらう　正月の用意の餅が搗けてあるだらう。子供がそれをねだつてゐるであらう。「もうねんねするんです。ね、夜食べると、ポン〳〵いた〳〵ですよ。サ、ねんね」と、母は今年三つになつた子供を膝の上に抱き上げるだらう。さうして、可愛くて堪らぬと云つた風に、子供の頬にキッスするだらう。さうして、夫と顏を見合せて微笑むだらう。さうして、「明日は父隨分澤山鳥が落ちてることでせうね。こんなにしけるんだもの、鳥だつて船だつて敵ひませんわね」と、云つて、火鉢から鐵瓶を卸して、茶でも入れるだらう。そして、子供に隠して、その父から一枚の煎餅を出して貰つて「坊やはいゝ子ね、サ、お菓子」と云つて突し拔けに子供にそれを與へるだらう。

だのに、俺達は、凍えるやうな風と、メスのやうな浪と、雪のやうに冷たい資本家や、氷のやうに冷酷な船長の下で、勞働をしてゐるんだ。俺は何だつて船員になんぞなつたんだらう。

殊に家持ちの下[illegible]船員はさうであつた。彼等はさうでなくてさへも、その家庭に堪らなく曳きつけられてゐるのに、時化のときには、その心持は長い刑を言ひ渡された囚人が、その家族のことを身も心も痩せ砕けるやうに戀ひ慕ひ、氣遣ふのと異る處がなかつた。全く、今では、兩舷から、鯨油を流してさへゐる位であつたから。鯨油を流すことは、時化も甚しくならないとやらないことであつた。

尻屋の燈臺はセンチメンタルに瞬く。日は暮れかけて、闇は、波と波との谷間から煙のやうに忍び出しては白い波浪の飛沫に、蹴飛ばされてゐた。

舵手の小倉は、船首を風位から變へないやうに、そのあらゆる努力を傾注してゐた。彼の眼はコムパスと、船の行方とを、機械的に注視してゐた。

と、本船の前左舷遙かな沖合に、一艘の汽船が見えた。「あ、汽船が！」と、小倉は無意識に叫んだ。

船長もチーフメートも誰もがブリッヂの左舷へ集つて、望遠鏡のレンズを向けた。

この少し前から、ボートデッキで、サンパンの下にもぐり込んで仕事してゐた、水夫の波田芳夫と云ふのも、今小倉が見付けたのを見付けて、一人でサンパンの下から眺めてゐたのであつた。

ブリッヂでは望遠鏡があるために、その汽船は救助信號を掲げて、難破漂流しつゝあるものであることが分つた。

ブリッヂからは、直ちにエンヂンへ向けて、フルスピードを命令した。一つ救助に出かけようと云ふのであつた。

全乗組員は難破船が見えること、その救助に向ふことを直ちに知つてしまつた。そして、全員はボートデッキへスタンバイした。

わが勇敢な、而も自分も腹半分水を飲んだ半溺死人のやうな、萬壽丸は、その臨月の體で、目的の難破船に、僅かに船首を向けた。極めて、それは僅かの程度であつた。が、本船はグーッと傾いた。そして見る見る中に、その舵が向いても居ないに拘らず、グン〳〵その頭を振り始めた。そして、同時に物凄い怒濤が、船首、船尾の全部を呑まうとするやうに打ち上げて來た。

船長は、今云つた許りであつたにも拘らず、方位を元へ返した。本船は極めて短い五分とかからぬ間に、殆んどコースを半回轉しようとしたのであつた。

難破船の稍近くへ近づくことは能きたが、本船はその船首を非常な努力の下に從前通りの

位置に返してしまつた。

難破船を救ふと云ふことは、本船を一緒に沈める計畫になると云ふので、船首はもうその向きを換へなかつた。けれども哀れな兄弟たちの乘り込んでゐる妹の難破船は、段々我々の視野に大きく明瞭に入る樣になつた。我々は、今のコースを以て進むならば、四哩位の側を通過するであらう。

波田は、サンパンの下から這ひ出して猶も一生懸命に、煙突にもたれて、寒さと、摑み處を同時に得ながら見入つてゐた。狂犬の口を藏ふ泡のやうな怖ろしい波浪と、この夕暗とに、あの船は呑まれてしまふんだ。彼は自分が二度も沈沒に際會した時の事を思ひ浮べては、その難破船に射込むやうな眼を投げてゐた

その小さな五百噸位の小蒸汽船は、北海道沿岸廻りの船らしかつた。今やその煙筒からは燃え殘りの煙草程の煙も出てゐなかつた。汽罐に浸水したのはもうずつと早いことだつたらう。そのマストの下の方には、棧橋に流れか〻つたぼろ布のやうに帆布が、まとひついてゐた。汽罐に浸水してから、どこかのカバーでも外してマストに縛りつけたものであらう。僅かに、デッキの上でバタ／＼と、その切れつ端が洗濯したおしめのやうに振れてゐた。

それにしても船員は、ブリッヂにも、マストにも、デッキにも、どこにも見えなかつた。津輕海峽を越す時に命を捨てて、ボートででも本船を捨てたのであつたのかも知れない。又は、その各々の室に凍えた體を、動搖のま〻に、お互ひに打つ衝け合つたり、追つかけ合つたりして、樂しみのなかつた生前の勞働者の運命を呪ひ悲しんでゐるのかも知れない。然し、この暴化はそれほど長く續いた譯でもなかつた。本船出帆の前日がその最高潮であつたのだから未だ二晝夜しか經つてゐない。船員は、或は、一室に集つて、別れのための最後の貧しい食事でもしてゐるのかも知れない。

ーあ〻、俺は二度まで沈沒船に乘つてゐた。一度は胴つ腹を乘り切られ、一度は衝突だつた。が、どちらも瀨戸内海で、一度は春の末、一度は眞夏であつた。そして、そのどちらの時も救はれた。けれども、北海道の冬の海では迚も助りつこはあるまい。俺は、瀨戸内海で沈められた時に、海の中に飛び込みざま、助けてくれ、と怒鳴つた悲鳴を今でも思ひ出せる。その叫びを擧げる刹那は全く、ありとあらゆる記憶、あらゆる感じ、それ等のものが、一度に總勘定でもするやうに頭に浮んで來た。そして、二十八では未だ死ぬのに、二年早すぎる、と、俺は思つた。何で二年早過すぎたのか自分でも分らない。けれどもハッキリ自分は二年早すぎると思つた。お〻！もし、あの船の人たちが、死んだとすれば、皆俺と同じ感じを、抱いて死んだことだらう。死ぬるのには、人間は何歳になつても二年早すぎるのだと、自分はこの頃考へるやうになつたが、全く、どの位多くの人が二年宛早く死んで行くことだらう。それにしても、この船長は何といふ冷酷、殘忍な奴だらう。僅か四哩や五哩より離れてゐないのに、その最後を見届けようともしないとは。自分の悅樂のためにはこの船長は俺達の生命を、いつでも鱶の前に投げてやるだらうに。俺は、あの沈沒船に代つてでも、又この船員たちのためにも、船長と鬪ふ時が必ず來ると信ずると、波田は考へに耽つた。

難破船はます／＼近づいた。日は暮れたけれども、未だ夕明りである。船は、今ならば、もつと難破船へ近づく／＼ことが能きるのであつた。が、わが、勇敢な萬壽丸は船員全體の希望にも拘らず、船長の一言によつて、冷やかに姉妹の死を見捨て〻去ることになつた。そして、本船には、救助不能の信號が揭げられた。相手一知

らすためのでなく、乘組船員を胡魔化し、同時に海事日誌を胡魔化すための。

實際、この時變化はだん〳〵凪いで來たのであつた。船員は一時間前の勇敢なる船長の行動を不審に思ふのであつた。

その可愛い小柄な船は四十五度以上五十度近く傾いて、今にもそのまゝ、沈み行きさうに見えた。そして人はどこにも見えなかつた。甲板の上は見事に掃除されて、その掃除手の怒濤は、僅かに甲板の隅に凍りついて殘つてゐるのみであつた。マストのカンバス（帆布は、ハッチの上部カバーであつた。それは全く淋しい姿であつた。火のない船であつた。人の居ない船であつた。生命のない捨てられた世界であつた。われわれは皆サロンデッキに並んで、浪と運命を共にするであらう、その船に別れを告げた。誰の心にも黑い、寒い寂寞が蟲食つた。

これは、やがて、わが萬壽丸の運命でもあつた。われ等が、船底に飢ゑと寒さとに倒れて漂流する時に、も少し大きな船が又、われ等の傍を通るであらう。われ等は信號を掲げねばならぬことを知つてゐるだらう。又われ等は、人間がその船室に凍えかけてゐることを、知らせる必要のあることを知つてゐるであらう。それにも拘らず、誰も甲板に出ないであらう。出られないのだ。途中で仆れてしまふのだ。

そして、漸く、最後の一人がデッキへ這ひ出た時には、今汽笛を鳴らして通つた船は、浮べる一大不夜城の壯觀を見せて、三哩も行き過ぎてゐるであらう。

このやうにして、わが萬壽丸は汽笛を鳴らして通過した。その汽笛を微に聞いて、今立ち上らうとして、その凍えた體に最後の努力と藻掻きとを試みてゐる兄弟が、その船の中に居ないだらうか、その賴りない捨てられた犬の子のやうに哀れな形をした船の中に。

鐘が鳴つた。夕食である。水夫は水夫室に、火夫は火夫室に、各々入つて行つた。

難破船は、薄闇の中に、暴れ狂ふ怒濤の中に、傳奇小說の中で語られた悲しき運命の船の如くに、とり殘された。

藤原は、船尾にランプを吊り上げながら、殘された船を見送つて、堪へられない寂しさと、憤りとに心を燃した。

「あの船には、尠くとも二十人の乘組員はあつただらう。それが養つてゐる、同じ數位の家族もあつただらう。あの中で二十人は凍死したか、ボートで溺死したか、どちらにしてもあの船の乘組員が助かると云ふことは考へられないことだ。二十人は遂々、その家族を殘して、妻子はその主人に殘されて逝つてしまはれたんだ。そして、その船に依つて、最も重大な利害を感ずる筈の船主は、今その宅で雪見酒を飲んでゐるのであらう。その二十人の不拂勞働から、蓄めて經營してゐる會社の株のことを、電報が入ると直ぐに氣にするだらう。遺族には、香典が二十圓宛位は行くであらう。そして、船主は、二十人の人間のことよりも、その沈沒するのが當然なほど腐朽し切つた、ぼろ船の運命に對して、高利貸式の執拗さで口惜しがつてゐるだらう。

「人間が生きて行くためには、どうしても人間の生命を失はねば生きて行けないのか、人柱！俺達は皆人柱なんだ！」

五

水夫室では、水夫達が、犬ころが唸り合ひながら食べると同じやうに、騷ぎながら、夕飯を食つてゐた。

負傷したボーイ長の側には、藤原と、波田とが居た。波田のベッドは、ボーイ長のとＬ字形に隣合つてゐるので、自分のベッドで、頭

をかじめながら、うまい夕食を攝つた。全く字義通りに「喉から手が出る」程であつた。胃の腑へ届く食物は、そのまゝ直ちに消化されて、血管を少女のやうな元氣さと華かさとで驅け廻るやうに感じられた。彼は飯を口一杯に頰張りながら、ボーイ長の足許に波田と並んで、これも頰張つてゐる藤原に話しかけた。

「チーフメートは來たかい」

「未だだよ」藤原は、全でそれが波田のせゐでありでもするかの様に、膨れつ面をもつて、答へた。

「隨分無責任ぢやないかい。三時間も打つ捨らかしとくなんて」

「距離が遠いんだよ。距離が、奴等のはね」藤原は謎の様に云つた。

「ハヽヽ、なるほどね、サロンから、おもてまでぢや三時間ぢや來られねえや」波田は、冗談だと思つて笑つた。

「五感と、神經中樞との距離がさ。鼻と口との距離と同じ程なんだよ」

ストキはひどく憤慨してゐるやうに見えた。

「それに、かう云ふことに馴れて、無神經になるつてことは、それが仲間のことであると、なほさら善くないね」

藤原は、話がむづかしいので、有名であつた。彼は漢語見たいなもの——仲間の間でさう云つた——を使ひたがる癖が背に沁み込んでゐるのであつた。

未だ食事が、始められて間もなく、チーフメートは、ボーイに「救急箱」を持たせて「大急ぎ」で驅け込んで來た。

水夫達は食事を中止した。そして、水夫見習のベッドを、チーフメートと一緒にとり卷いた。

「ボースン！ こんなに暗くちや何も分らんぢやないか、蠟燭をつけて來い。五六本！」と、チーフメートは一發放した。

かくて、蠟燭はつけられた。ボーイ長がそこへ寢始めてから、三時間目に初めて、彼の室は燈で照らされた。彼が船へ持つて來たものは、その體と、その切り捨てられた仕事着と、初期の禿頭病とだけであつた。

彼は、陸上でひどく苦しんだ。彼の家はひどく貧乏の上に、兄弟が十一人もあつた。彼は、小さい時分から、自分を養ふのは自分でなければならぬことを感じさされて來たのであつた。

彼は、訴へるやうな目附で、又、彼のそのやうな負傷にも拘らず、チーフメートに直接物を言ふことを恐れて、遠慮勝ちに「痛あーい」と呻いた。

チーフメートは何でも構はず、ボーイ長の左半身全體に、イヒチオールを塗りまくつた。彼は、一分間でも早く彼の義務が終ればいゝのであつた。醫者のやる様なことが、彼の義務であることも癪に障ることであつたが、それは、彼がそれでパンを得てゐる以上、仕方のない災難なのであつた。彼は、彼もパンのために、そのいやな仕事を持つてゐることを知ると同時に、もつと悪い條件の下にパンを求めてゐるものがあり、それが「おもてのならずものども」であることを知らねばならない筈であつた、ところが、彼は、ブルジョアが、彼と自分とを區別してるとすつかり同じやうに、彼とセーラー等とを區別してゐた。「俺は紳士だが、奴等は勞働者だ」或はもつと正確には「俺は人間だが、奴等はセーラーだ」と。

チーフメートは、限りなき嫌惡の情を含みながら、ボーイ長を滅茶苦茶に、イヒチオールで塗りまくることを、（面倒臭い位りに、さうするのではない。さう云ふ風に、セーラーたちに見せたかつた。彼は僞なければならないことの形式た

けをやつて、而も感謝の念をセーラー達から盗まうとさへ企んだのであつた。

黒川機男、これがチーフメートであつた。黒川は、イヒチオールを塗りまくる間に、口をきくことは、それほど仕事の能率を妨げないし、又、それ以上仕事を、汚くも困難にもしないと考へた。そして彼がどんなに、この蟲けらのやうなボーイ長に對してさへ、人道的であるかを見せてやることはいゝ。と彼は考へた。

「おもては全く、寒いね、そしてまるで眞つ暗ぢやないか」と黒川は口を切つた。彼はボーイ長の胸部にイヒチオールを塗布しながら云つた。

「満船の時はどうも仕方がありません」と、ボースンは鞠躬如として答へた。全で、全で、寒くて、暗くて、汚くて、狭いのは、ボースン自身の罪ででもあるやうに。

「これぢやいくらお前等でも堪らないなあ」

「なあに、メートさん、新造船だから、いゝ方ですよ」とボースンは答へた。

「暗くて寒いことあ今始まつたこつちやないや、おまけに風呂だつてありやしない、これでもお前等は、人間並は、人間並なのかい」と嘲笑

水夫達から、燃えるやうな言葉を打つつけた。

チーフメートは早速方向轉換の必要を痛感した。

「ボーイ長の傷は存外輕くてすんだね。俺はもうとても駄目だと思つてゐたんだよ。命拾ひしたわけだね」

「さうさ、すぐくたばりやもつと傷が輕いわけさ。手がかゝらねえからな」又藤原が口を出した。

セーラーたちは、何か起りはしないかと内心好奇心に驅られて「事」の起るのを待つてゐた。

「默つてろ！　餘計な口を叩くな！」チーフメートは遂々爆發した。

「默つてろ？　默るさ。だが、手前等にや手前等の命は大切でも、人間の命が、どの位大切かつてことは分る時はあるまいよ。へツ」藤原はそのまゝ自分の寢へ上つて、煙草に火をつけた。

彼は明白にチーフメートに挑戰した。

戰爭はすぐ開かれるか、後で開かれるか、どんな形に於て開かれるか、それは水夫等全體を昂奮の極に追ひ上げた。

黒川一等運轉手は彼の策戰が失敗したことを承認した。そして、多分この事はこれだけで片がつかないだらうと、云ふことも分つた。長びくやうな事件にならねばよいがと彼は心配してゐた。特にそれは、この場合では、彼にとつて絶對に都合のわるいことであつた。彼は、默つて、早く手當を濟ますに限ると思つたので、その手當を急いだ。

かくして、イヒチオールはそれが、その本來塗らるべき處であらうと、又は、膿をなして赤い肉の出た處であらうと、出血してゐる處であらうと、お構ひなしに塗りたくられた。又、如何なることが起きても、起らなくても、ボーイ長の左半身全體を眞つ黒くすると云ふことは、彼の三時間に亙る熟慮の結果であつた。

そしてチーフメート黒川機男は、そのプログラムに從つて他意なくやつてのけた。何等親身な情からでもなく人間的な氣持からでもなく、安井――水夫見習――は、その全半身にただ氣やすめだけのイヒチオールを塗布された。それは義務を果すための一つの對象にすぎなかつた。

安井は呻いた。「おかあさん、おかあさん」と叫んで救を求めた。そして眼を閉いては、絶望のどん底に眞つ暗になつて落ち込んでしまつた。

彼は、其の傷みと共に、堪へ得ぬ寒さと飢ゑ

とに泊られてゐたのだつた。

六

安井の手當がすむと、水夫達は、改めて、食卓に就いた。そして、いつでもは安井がボーイ長の職務として、食事の準備、後片附等はするのであつたが、今日は、波田が引き受けた。

「安井君、何か食べたくはないかい」と、波田はボーイ長に訊いた。

「喉が渇いて、腹が空いて、堪らない」と、彼は辛うじて答へた。

「そいぢや今持つて來るから待つて呉れよ」

波田は、コックに、卵を呉れるやうに頼んだ。

「卵なんぞ贅澤なもの、おもてに使へるかい、ほけなす奴！」波田は、一言の下に、卵なんぞ、おもての者の口に入りかねることを敎へられた。然し、若し、卵がなければ、波田は、その勤務を終へるのに困るのであつた。

「どうだらう、ボーイ長が硬い物は食べられないだらうと思ふんだが、何か腹に食べるやうなものはないだらうか、とも、[illegible]の事のコーヒーへ入れるミルクを一罐だけ分けて貰へないだらうかなあ」波田は食卓のことは、チーフメートが醫者序にやるべきものだと考へた。けれども又た、やるべきことは俺達だけにあるんだ。と思ひかへした。

「それぢやシチャード（司厨司）へ話して見ろ！一兩位出しや分けられねえこともねえかな、ぐれえなことだらうぜ」

このコックはおもての食費を胡魔化すために、とものコックから、給料を下げてまでも、おもてへ一つ船で鞍がへした、途轍もない「惡」であつた。

「この野郎、鼻持のならねえ野郎だ」と思ひながら、波田は、シチャードへ、ミルク一罐と、卵十個分けて貰へないかと交渉した。

「ボーイ長にやるんだつて、あゝ、いゝとも、持つて行きな、さうかい、ぢやあパンを一斤許り持つてつて、牛乳と卵とで濕してやるといゝや、ほら、こゝに砂糖と、……それだけでいゝかい、そしてどうだね、ボーイ長の容態は」シチャードは親切に倉庫から、それ等のものを笊へ出して呉れた。

「どうもありがたう。今は後でおもてから拂ふからね、當分濟まないが貸して呉れないか」

波田は本當に嬉しかつた。

「いゝよ、そんなこたあ、氣をつけてやりな、若いもんだ。先のあるもんだからな」

「あゝ、そいぢや、ありがたうよ」

波田は、ともかくそれ等のものを持つて來てボーイ長に與へた。

彼は飢ゑた狼のやうに貪り飲んだ。ボーイ長が食慾を失つてゐないことが、波田には大層心強く思はれた。

彼が安井のために、食事の支度をする間に誰もが食事を終つてゐた。そして、茶碗や、德利（醬油）はころばないやうに、各々その始末さるべき處へと仕舞はれてあつた。彼は、それから、又、自分の分を繼續しなければならなかつた。船の動搖は甚しかつたが、満船してゐる關係上、動搖以上に浪の打込みが甚しく、そのため、水夫室の頭上では、錨が浪と衝突して少しでも緩みが來ると、今にもサイドを押し割りさうに、メリメリツと鳴つた。

波田は、それ等のことには、外の誰もと同じく馴れ切つてゐるので、二度目の夕食をうまく食ふことが能きた。

彼は、腹には詰め込みながら、耳には、セーラーたちの[illegible]の話を聞いた。暴化た後では、きつと話がしんみりするのであつた。いつでも巫山戯るにきまつてゐる三上さへも、一二

度極端な、女郎に關するその話題を提供して見たか、反響がないので、それ以外に話すことを全然持たない彼は黙りこくつて、すぐにその寢床にもぐりこんで、三十分間をぐつすりと寢ることに決めたらしかつた。

　疊敷には能きない形ではあるが、それをその面積に換へれば六疊位は敷けるだらうと思はれる「おもて」には、上下二段にベッドを作りつけて、水夫長、大工、舵取を除いた、水夫五人と、おもてのコックが一人と、ストキとが寢るやうに出來てゐて、その中央に、テーブルと、ベンチとが作りつけてあつた。で、おもてでは、一切合切がキリ／＼一杯であつた、食卓は、用事が濟むと、室の眞ん中に立つてゐる柱に添うて上に吊り上げられるにしても、矢張り一杯々々であつた。そして道具置場は、その食卓の下を潜つて、船首の尖つた處か、さうであつた。

　わが萬壽丸は、甚しく團扇に似てると云ふ定評があつてさへ、矢張り船の船首の部分は、いくらか尖つてゐることが、これで見ても分るのであつた。

　そして、窓は總て、二重に嚴密に閉され、デッキへの鐵の扉までが嚴重に閉されたから、空氣は全く動かなく通はなくなつてしまつた。そして、この、太鼓の内部のやうな船室は、皮にあるべきサイドの鐵板が、波濤に叩かれて堪らなく轟くのであつた。

　その間にボーイ長は、その負傷の疼痛を、陸上の父と母とに訴へた。摺子木のやうに圓い神經の持主であるセーラーたちも、環境がかくの如くであるために、ひとりでにしんみりしてしまふのであつた。そして、彼等は、いつでも、しんみりするのを好まなかつた。それは、彼等を、此世の中で一番詰らない役割に引つ張り込んでしまふからであつた。と云ふのは、いつでも彼等は最も詰らない役割であるのだが、それを本たうに彼等に手をとつて覺らせるからである。誰でも、自分が踏みつけられ、馬鹿にされることを喜ぶものはない。わがセーラー達も、しんみりする時必ず、さうであることが分るやうに獨りでに考へるのであつた。そして、船乗りの氣質として、そんなに自分たちを「コミヤる」餘剰勞働を搾取すると云ふ意が含まれてゐる船乗り言葉一奴は容赦しない筈であるのだが、それが能き得ない處に、彼等が、しんみりした時に悄氣込み、次いで自暴自棄になると云ふ結果が生れるのであつた。

　彼等は、自分達が人間であることを知つてゐた。そして人間らしからぬ生活に、追ひまくられてゐることを知つてゐた。そして、彼等はどうすれば、これらの不都合な生活から人間らしい生活へ入れるかを、絶えず考へ、その機會を覗つてゐた。そして彼等はその考へを纏めることも、機會を捕へることも能きないで、一小資本を貯めるための、極めて短い時間だけ、この危險な仕事によつて金儲をしよう」とした最初の考へは、そのまゝ彼等を怒濤の上で老年にしてしまひ、磨滅した心棒にしてしまふのであつた。

　その夕、ボーイ長のベッドの側に集つた藤原、波田、小倉の三人は、皆ひどくしんみりしてゐた。

七

「俺たちは何だつてこんなに泥棒猫扱ひに、いぢめられるんだらうなあ」と、藤原が溜息と一緒に吐き出すやうに云つた。一時の昂奮から、夕方ボーイ長のことで來たチーフメートとの事を思ひ出して、きつとよからぬ豫感に襲はれたのだらう。

「それやあ君、泥棒猫だからさ」と小倉がへうきんに答へた。彼は人に落膽させまいとして、いつでも骨を折る氣のいゝ正直者であつた。

「どうしてなんだらう」藤原はおとなしく訊いた。

「十匹の猫の中の二匹が泥棒猫であつても、その十匹は泥棒猫と思はれるんだからな。況して君、十匹の中八匹がさうだつたら、勿論泥棒猫と断たらう」と小倉は答へた。

「それなら、僕等は一体、何れの泥棒猫だつたんだらうかね」

「結局はさうだね、詰り僕等が泥棒猫であつたにしても、それは僕等の悪かつたことにはならないことになる訳だ」

「と云ふと」藤原は小倉に訊きかへした。

「詰りさ。僕等は、その猫になつて見れば役に立たない泥棒猫なんだね、いい主人のものなかつぱらふ問題も何もありやしない、と云ふ、見られてゐるんだ。だから、主人の方では僕等を泥棒猫扱ひするんだ。扱ひだけがすこいんだ、僕等を真物の泥棒猫か、もつと適切に云へば、去勢した馬車馬と考へてるんだ。だから、主人、雇主、資本家から云へば、僕等は、彼等が僕等を働かさうと思ふ仕事にされてゐることを、唯一の方法なんだ。だから、雇主や水夫等は要求を云はないが、同盟罷業を上げるだらう」と思へば、僕等から昼飯をとり上げてしまふし、室蘭、横浜間は三日で航海すべきだから、糧食はきつかり三日分でよろしい、難破したり、遅航したりすれば、それは奴等の例の怠惰から来たものだ、俺の方の損害の方が大きいから、それ以上の貰込は相ならぬ、といふことになれば、それも正しいのだ」小倉は極めて真面目に、説法でもするやうに静に云つた。

「フーン、して見ると、僕等もその考へに適応しなければならないのかい」藤原は、小倉に訊いた。

「適応する必要は勿論ないさ。然しだ、適応する者のあることだけは事実なんだ。僕は資本家が自分自身の肉体の構成と、労働者の肉体構成とを、全然、異るものであると考へてゐるだらうと思ふ」

「それで、さうなと僕等はどうなつてんだね」と藤原は訊いた。

「それで、僕等は、僕等としての『意識』を持つ必要が生じて来るんだ。資本家や、資本家の傀儡共が、高尚な、温厚するやうに、温淫した、旧套の前思想たちか、思想だと思ふことを止めて、僕等に僕等のもの、行かなかあることをハッキリ知らなきやならないんだ」小倉は頭の中で、辞書のページでも繰つてるやうにして云つた。

「どうして、それを考へ、どうしてそれを知ればいいんだ」藤原は問を止めなかつた。

「それは、余り困難な問題だ。僕はそれで悩んでるんだ」と小倉は答へた。

「小倉君、人間は動物の首長なり、と云ふ人間の造つた言葉があるだらう。そこでね。俺は、昔から、一番苦しい、貧しい、不幸な階級の中で、又最も貧しい不幸な呪はれた人々でも、万物の首長だつたんだらうか？　と考へることがあるんだよ。俺はあの犬になりたいと奴隷は主人の犬を見て思はなかつただらうか。「俺は燕になり度い」と、窮屈な牢獄の窓に縋つて思はなかつただらうか。俺は虫になり度い、と高[illegible]の内[illegible]とメスとから、切腹を命じられた武士は思はなかつただらうか。俺は豚になりたいと乞食の子は思つたことはないだらうか。小倉君。僕は、行く行くはさうなることを信じてゐるが、今では、人間は動物の首長でもないと思つてるよ」藤原は[illegible]に火をつけた。

「それや僕もさう思ふなあ。僕だつて猫になりたい、と思つたことがあるもんなあ」と、波田は

翔ねて、その突拍子もない口をきつた。

「人間は萬物の靈長であるないに拘らず、人間だつてことは僕は信じるよ。だが、人間が萬物の靈長だつてことは、僕は、尤も僕は今まで、そのことをそんな風に問題にしたことがなかつたがね、人間は、兎も角も賢い動物だとは思つてゐたよ。賢い者に、馬鹿な者に力瘤を入れたり、どんな劣等動物でもしないやうな詰らないことを、人間の特徴と誇りながらしたりする動物だらう、人間つてものは。ハハハ、、、」

これが小倉の人間觀であつた。

「人間が萬物の靈長だなんて問題に、コビリつくことはもう止さう、ね、全く人間も他の動物と同樣に食ふため、生存するために、地上で蠢動してるんだね」藤原は人間であることを悲しむやうにかう云つた。

「食ふことと、生殖することとだけで活動してるから、それで蠢動してると云ふのかい」今度は小倉が皮肉な調子になつた。

「まあさうだね」と藤原は、一寸苦笑した。

「ところが君、ブルジョアはそれ以上の高利貸的官能のために、或は又何等かの目的的慾望のために、食はせないこと、と、生殖させないこととで蠢動してしやせないかい」と云つて小倉は大聲立てて笑つたが、フト氣がついたやうに、ボーイ長の方を見やつて口を噤んだ。

「安井君、痛むだらうね」と、波田はボーイ長に訊いた。

「えゝ、痛くて、痛くて、他の人の痛くないのが不思議で……」と答へた。

「困つたね。航海中だから、まあ、出來ないだらうけれど仕方がないから、我慢するんだね。横濱へついたら病院へ入院が出來るさ」と波田が慰めた。

「ところが、能きないんだ。ボーイ長は未だ雇入れがしてないんだ。これは確に船長の失敗なんだ。この點から攻撃すれば、傭雇手當や負傷手當などは勿論、取り得ると思ふんだ」藤原はかう云つた。

「雇入れがしてなくつたつて、入院は出來るさ。この重傷を入院させんなんてことはないさ。それに、雇入れと、負傷とは、どんな關係がありさうもないぢやないかね」波田は、藤原が入院を拒んでもするやうに食つてかゝつた。

セーラーの中では上で西澤、水夫長、大工、コックなどは、もうその寢床でグー〳〵いびきをかいてゐた。全く、何等か特に昂奮することでもない時は、食後は非常に眠いのであつた。全く眼が開かない程眠いのであつた。幼兒が夕食を食べながら居眠るやうに、幾日か續いた強行軍で、兵士が歩きながら眠るやうに、それと同じく眠いのであつた。けれども、この三人は今食後十分か二十分の熟眠どころではないのだつた。今や、彼等はボーイ長が雇入れなしに使役されてゐたと云ふ事實に就いて、彼等の意見を發表し合ふ必要が生じたのであつた。

「そんなことは、海員手帳にチャンと書いてあることだ。議論の餘地なんぞありやしないさ」と、ストヤの藤原は云つた。事實それは海員手帳に記入されてあることであつた。そして如何なる場合でも船長は之を怠つてはならないのであつた。法文の上でも、實際から行つてもそれはさうでなければならず、又さうあるべきであるのだつたが、併し、それがさうされなかつた場合は問題はどうなるかと云ふことは、略々、さうあるべき通りに、行かないのであつた。要するに、理論からも、實際からも、人間は、平等に、幸福でなければ困るが、一部の人間は、平等は困る。俺達だけの贅澤がいいんだ。「搾取の痛快味こそ生活の意義だ」と云ふので、分り切つたことが分らなくなるやうに、ボーイ長の場合に於ても、明白に、ボーイ長が有利な立

場にあるにも拘らず、その全體の利益と權利とを一にする處の一要素である勞働者で、ボーイ長であつた。だから、これは、それほど簡單に、數學的の結果を見ることは困難であらう。その代りに、法律的の形式は、商業會議所式の結果を見るであらう)と、三人は話し合ひの末、そこまで落ち着いたのであつた。

ーたけれど、倉田は、これに對しては異議はなけりやならぬと藤原は云つた。

この時、ブリッヂからコーターマスターが降りて來た。そしてボースンの室の入口から怒鳴つた。

「今から、ディープシーレット(深海測定器)を入れるッてと、ボースンが水夫室へ來てその眞ん中で大聲に「スタンバイ」と怒鳴つた。

八

皆は、今日當直中の勞働が烈しかつたので、夜は休みになるものだと思つてゐた。時化は稍々、その勢ひを靜めはしたが、而も、船首甲板だけは一夜中に怒濤に打たれて來た。それで、水火夫室の出入口は、波に打たれる度に、素晴しく水量の多い滝になつて、上のデッキから落ちて來るので、一々その重い扉を閉さればならぬ程であつた。それに、今朝からのワシデッキとハッチの密閉とで水夫達は、その着物の大部分を濡らしてしまつた。波田、三上の如きは、その全部を二重に濡らした、着の一揃の服を二度濡らした。それで、今、誰の仕事着も洗ひ濯がれて、汽罐場の手すりに、乾かされてあつた。

水夫達は起きるとすぐ、猿股一つでか、或は素裸でか、寢間着かで、汽罐場まで、仕事着をとりに行かねばならなかつた。けれども裸で、その寒さに道中はならなかつた。

波田は、自分の仕事着が未だ、今乾された許りであるので、いくら汽罐場の上でも未だ生乾きであることを知つてゐた。從つて彼は、猿股一つの上に合羽を着て作業しよう決心でゐた。處が仕事着は小倉が彼に一つ呉れることにしようと申し込んだ。それで、彼は、油繪のリンスのやうな、オバーオールを一つ手に入れることが出來た。それにはペンキで未來派の繪のやうな模樣が、ベタ一面に彩られて、ゴハ〳〵してゐた。

「それでも、ロンドンで買つたんだぜ」小倉は云つた。

「一昨年の乞食が着てたんだらう。こいつあ具合がいゝや」と彼は云つた。

水夫達は皆各々スタンバイした。そして、ともへと出かけた。

暗黒は海を横にも縱にも包んでゐた、闇は、その見えない力であらゆる物を縛り、締めつけ、引き摺り、轉ばしてゐるやうに思へた。それは總ての物を窘めて引つくるみ、その中の部分をも締めつけた。風が波に打衝かり、マストに突き當り、そこ此處で切られて、泣き喚いた。船はその知らぬ底で大きく低く、長く唸つてゐた。

わが萬壽丸は、その一本の手をもつて、相變らず虚空を摑んで行き悩んでゐた。測程器は三哩を示してゐた。

水夫たちは、倉庫からグリスを取り出して、ウエスにつけてその手に握つた。

そして、ボースンが、ランプをもつて、レットの滑車を照らした。

ともには、波田が以前から、その後頭の左寄りの處に、萬年筆で深さ二寸位の穴をブチ開けてやりたい、と常々希つてゐたセキメーツ(二等運轉手)が來た。

硝子管は速度計の中へ收められた。そして、パイプの先に附けられた、凧の緒のやうなワイアを引つ張つてレットは、ボートデッキと船尾から、遠く、

眞つ黒な中に、噛みつかんばかりに白い泡を吐く、波濤の中へと突進した。デッキの最高部は極めて狭かつた。從つて、後部のハッチデッキを浪で蔽ふ時は、われ／＼は、本船と切り離された破片の上に、乘つてゐるやうな心細さを感じた。浪頭はサイソのやうに冷く鋭くわれ等の薄着の肌をついた。飛沫は絶えず、全部の者を縮み上らせた。

レットは、その綱を引つ張る速度が緩むと、それは、ハンドルに依つて止められる。そしてそのワイアの長さが、そこで讀まれる。それを讀み終ると、二つのハンドルでその沈錘を卷き上げねばならない。それが水夫の仕事であつた。深海測深器であるから、おまけに進行中であるから、綱は斜に流れつゝ海底に到達するのである。百米突、二百米突などのワイアの長さを捲き上げられた時、われ／＼は、海の深さよりそれを卷き上げることの困難さに縮み上る。

それは極めて、それぞれのものとしては輕いものであつた。けれども船の進行と、浪の抵抗とは、釣つた魚が綱を陸上に上るまでは、その幾倍もの大きいもののやうに思はれる、より以上に、その小さい沈錘を重くした。そして、その手卷ウインチは、極めて小さく出來てゐたために、ワイアを、一回轉に、極めて小距離、最初は二吋後には一吋位より卷き取ることが能きなかつた。そして、それが車軸へ來るまでに、二人の水夫は、グリスを以て、ワイアに塗らねばならなかつた。これは、一々塗ることが不可能であるために、二人のセーラーはワイアをグリスのついたウエスで握つてゐるといふ形になつて現れるのであつた。

卷き方は骨が折れた。と同時にグリスの塗工も寒かつた。そして、その全部の者にとつて最も苦痛な點は、凍寒と、眠いといふことであつた。

寒さは全く著しかつた。合羽をバリ／＼に凍らせた。皮膚が方々痛かつた。歯が合はなかつた。體が痺れて來るのだつた。そして、眠りは、もつと強く、水夫たちを襲つた。賃銀勞働のあらゆる利潤が必要勞働と、剩餘勞働とに分割され得るやうに、あらゆる細部に、寒さと、眠さとが、全て相反した刺戟を彼等に與へた。

寒さに對しては、彼等は必要以上に、體を搖り動かした。眠さに對しては、彼等は頸關節が、グラ／＼して、作業が害になるのであつた。そして、それが、お互ひに、鼬ごつこをしてゐるのであつた。それはまるで、冗談半分にやつてるとより思へない恰好であつた。

セキメーツは絶えず、怒鳴り散らした。實際セキメーツにとつては、水夫等がそんな恰好をすることは、仕事の能率の妨げになり、殊に俺を馬鹿にしてゐるのであつた。水夫等は、セキメーツの怒鳴るのと、波浪の吠えるのと、スクルーの空轉音と、リギンの裂くやうな音とをゴッチャゴッチャに聞いてしまつた。そして、依然として、彼等は、彼等の必然に從つて、二つの反射運動を繰り返した。

セキメーツは自分の怒鳴る毎に、わざと、一度宛餘分に入れるやうにしてやらうと計畫した。「こいつ等を朝まで卷かせてやるぞ！」と彼は決めたほど怒つてしまつた。

沈錘は長い間反抗して、遂々上つて來た。錘の中から硝子管を取り出して、それに代りを入れて、入口を、グリスでしつかり塗るのである。その硝子管が錘の内へ收まるや否や、セキメーツは「レッコ」と怒鳴る。ボースンはバネをとる。沈錘と、ワイヤとは投げられた石のやうに飛んで行く。

この作業を水夫等は繰り返さねばならなかつた。それは我慢のならぬことであつた。けれども我慢せねば、またならないことであつた。

　水夫等は、八度、それを繰り返した。それは、八日、航海するより、八日拘留されるよりも長かつた。その間に四時間半を費した。彼等は濡れた鼠のやうに疲れ果ててしまつた。
　ヒヤメーツは敢然の決心を、自分のために撤回した。彼も今は濡れた鼠であつた。
　水夫がその南京蟲の待ちあぐねてゐる巣へ潜り込んだのは、午前一時前十五分であつた。そこには眠りが眠つた。

九

　一晩中蒸暑の中に煩悶して、夜は更けた。夜、それものは、それでいゝのであるが、おもての船室は、一八六〇年代の英国に於けるレース仕上の室内労働者が、各一人に對して六十七乃至百立方呎しか空氣を與へられてゐなかつた——マッチス——のと較べて、もつと甚しかつた。われ／＼は、夜の明け方まで、死のやうな眠りにつく、そしてその死のやうな眠りから覺めて、蓋口の蓋を開けて、外氣を室内に吹き入れしめるときに、「あゝ、眼が覺めた」と思ふ代りに「よく僕は蘇生したものだ」と思ふのであつた。
　我々はしけの場合は、常にナゾーンが頬いにも拘らず、殆んど窒息死の瀬戸際まで眠る。そのために、我々の背中は、一晩中に鈍く重くなつてゐる。そして、睡眠が與へる元氣恢復と云ふことは思ひもよらないことであつた。
　われ／＼は、水夫室なる罐詰の、扉なる蓋を開けて、初めて、人心地がつくのであつた。——これは、本文と關係のないことであるが、この時乗組んでゐた人間の中、藤原、波田、小倉、西澤、大正、安井は皆肺結核患者であつた——そして、この空氣溷濁は、そのことに起因して、肺結核患者を海上に於て生産する矛盾を敢てした。
　罐詰の内部に、生きたものが居ると云ふ結果は、どんなものであるかは、明に誰にでも想像のつくことであつた。たゞそれは、その蓋を開けた時に、蓋の外の清淨さによつて、非常に救はれた。
　彼等が五時間眠つてゐる間に、海は凪いだ。アルプスのやうに背張つてゐた海面は、山梨高原のやうにうねつてゐた。マストに、引つ懸り打つ衝つた雲は、今は高く上の方へ昇つて行つた。
　雲作の詰まつた袋のやうに、彼女はおとなしく、鮮に並んだ。
　室蘭出帆の日は日曜であつて、作業、それも並々ならぬ難作業だつたので、今日の月曜は日曜繰延べで休みにするやうに、一とも一へ頼みに行くことにしようではないかと「ならずもの」共は、西原伊佐等は衛へたながら相談した。
　「それは願ふまでもなく、至當の事ぢやないか。默つて休みやいゝさ」と藤原は鬪爭的に主張した。
　「これは、一々その都度々々、頼んだり願つたりしちや、面倒だし、その度にかけ合ひに行く者は犠牲者になるやうだから、一つ永久的の取り極にしたら、「日曜日、出帆入港にて休日フイとなりたる節は、翌日を公休日となすこと」とか何とか、四角張つて、約束しといたら、そんなに、度々聞かないでも濟むだらうぢやないか」波田は提案した。
　「そんなにしなくたつて、さういつもあることぢやないんだから、今日だけ願つといたらいゝぢやないか」とボースンはなだめた。
　哀れなボースンよ！　年は寄つてるし、子供は多いし、暮しは苦しいし、喉は渇くし、この臆病な鬼のお爺さんに從ふことに皆決めた。
　ボースンは、顎を撫でゝ撫ふとそのまゝ、チーフメートの處へ頼みに行つた。

船は大うねりに乗つて、心持よく泳いで行く。右手には遙に本州北部の山々が、その海岸まで突出して、雄壮なる姿を真つ白く見せた。寂しい山河である。そこには我等の寄るべき港としては殆んど無いのであつた。人煙稀れなる森林地帯ででもあるやうに、原始的な草原ででもあるやうに感じさせる景色であつた。ボースンの返事のあるまで、水夫達は、デッキへ上つて、懐しき陸を眺め、昨日荒らされた海を見入るのであつた。

風は、今日は昨日程鋭くなかつた。黒潮の影響を受けてゐるので、デッキへ上つても、メスで肌の肉を裂かれるやうな痛さを感じることはなかつた。

水夫達は皆、それぞれの嗜好に従つて、横濱へ着いてからの行動や、食物に就いての空想に浸つてゐた。ボーイや水夫は上せ、彼等は陸にさへ上れば、あらゆる快楽がある、それが待つてゐると思ふ。自分たちが、賃金奴隷にされ、自由を略奪され、労働力を搾取されてゐることは、陸と、デッキと、同じ海の上にはゐるからであると、無意識の中に考へてゐた。それは丁度牢獄に監禁された囚人が、高い高い煉瓦塀の彼方には、絶対の自由がある、自分はそこでは自分の好む通りにすることが能きる。そこは、そのまゝ天國だと、考へるやうなものであつた。處が監獄の塀の外にも、彼の考へた自由はその影もなかつたやうに、又甲板の上で考へたやうな自由と幸福とは、決して陸上にもありはしなかつた。彼等は、それぞれ、彼等が上陸する度毎に味つた。そして、陸上で自分の財布を地面へ叩きつけ、自分の着てゐるその不恰好な汚れた着物を引き裂き、労働で荒れた、足の踵のやうな手の皮を引ん剥いてやり度く思ふのであつた。それ等が、彼等が折角憧れ切つた陸に上つたに拘らず、彼等から自由と幸福とを追つ拂つた。

労働者は、自由や幸福や、人間性が、賃銀を得つゝある間に自分に與へられ、或は自分からそれを得ようとすることが、全然不可能なことであることを知るやうになる。人間が牛肉を食ふと同じやうに、人間が××を食ふ時代の存續する限り、労働者は、その生命が資本の下にあることを自覚しなければならない。水夫等は、そんな風なことを感じた。と思ふと、そのすぐ次には、俺一人でいくら焦つて見ても始まらない話だ、坊主でも女郎買をするではないか、俺等は人間の中の屑扱ひにされてゐるんだ、と、社會が自分に強制する處の、職分及生活範圍を、自分から容認してしまふのであつた。

彼等は、陸でも、これより月給がいゝのに、俺は海の上で何故こんなに少いのだらう。俺も陸に上つて働けないだらうか、迚も働けまい。口があるまい。と、彼等は法則通りに思ひ込んでゐるのであつた。

ボースンがトモから帰つて来た。そして「特に今日は休暇を與へる」と云つたことを傳へた。

この報告は、何等の批評もなく皆に受入れられ、喜ばれた。

「馬鹿にしてやがらあ、「特に」だとよ」と、嬉しさうに叫びながら、誰もが、何を爲るためにとも分らずに、そのベッドへと驅け込んで行つた。

そしてこの貴重なる、出し澁られた休日を彼等は大抵眠つてしまふのであつた。全く、いつもの例の如く、この時も、一人残らず、その巣へもぐるが早いか、眠つてしまつたのであつた。

単一の切實なる欲求を睡眠に置いてゐるセーラーたちは、そのことから見ただけでも、どの位彼等が過労し、酷使されてゐるかが分る。

一〇

朝食は八時である。波田は、ボーイ長が貸

傳ひ、ただね、仕事の間に炊事の方をやらねばならなかつた。二時間許り間があるので、彼はその時間を、自分のベッドへともぐり込んだ。彼は、八時になると、コックから起されて、彼は、おもての人たちが食べるやうに、大きな味噌汁鍋と、お鉢とを、コック場から抱いて來て、柱に添うて吊り下げた、テーブルの上へ、それを載せた。それから彼はあらゆる準備を終へて、飯だ！、と怒鳴つた、

ボーイ長には、昨夜通りに、味噌汁を添へて與へて、彼は第一番に朝食に就いた。それは、べくらうまい飯であつた。味噌汁もうまかつた。澤庵も、……

淺田の食つてゐる中に皆も眠い目をこすりこすり起きて、飯にとりかゝつた。

船の飯はうまかつた。それは、全く、澤山食はれた。それは味としては實に不味さこの上もないものであつた。味噌汁にしろ、澤庵にしろ、味と云ふ點から云ふ時にそれは零であつた。けれども、これがセーラーたちにはこの上もなくうまかつた。彼等はよくそれほど旨さうに食べると思ふほど貪り食つた。

ストキは淺田に、セーラーたちが、不味いものを旨く食へることには、心理的な部分も非常に手傳つてゐると云つたことがあつた。ストキに從へばかうであつた。

セーラーは食物を定期に與へられる。彼等は、その食事の前にも甚しくとも、四時間の勞働を課せられてゐる。彼等は十分空腹である。時間が來ると、彼等は食卓へかけつける。食卓には、盛り切りの惣菜が一皿宛置かれてある。稍々十分に食べる爲めには、澤庵だけしかない。彼等は、いつでも、次の食事が甚しく待ち遠い。それは、空腹が待たせるよりも、もつとの重要な理由は、次の食事が來るといふことが、その日の勞働をそれだけ減し終へたといふ、一つの安心を彼等に與へることと、その食事の後にいくらかの時間が、彼等に與へられてゐることである。彼等は、これ等の心的作用によつて、待ち焦れた食事が濟むと、直ぐに次の食事を、ガー／＼おくびを出しながら待つのである。彼等は又食事と食事との間に、間食することが能きない。彼等は食事に際して、そこに盛られた量以上の菜は絶對に食ひ得ない。また、それ以外の菜も海上に於いて求むべき方法がない。丁度彼等は囚人が、その出獄を少食のために損ひつゝ、與へられない食ゑを譯へ、次の食事に對して焦躁を感じつゝ待つのと、同様である。

セーラーたちが、食事をそれほど待ち、貪るのは、それが自分自身のためにすることは資本家のために、再生産することにもなる唯一の生活手段であるからだ。自分のためにする何等の仕事のない時、たゞ一つの自分自身の事があるならば、それは亦にでも、重大に取り扱はれねばならないことだ。殊にそれがパンの問題に關する時は、猶更さうでなければならない。

實際彼等は、その食事を、實際より以上に、想像を以て調理して食ふのである。上手くないものでたのが味をつけて盛られてあると、彼等は、それをトントンと呼ぶのである。そして、それは全くきんとんのやうにうまいのである。

外國航路に於ける船では、決してこんな状態ではないが、それにしても心理的には、矢張りさうである。けれども、萬壽丸は、これが甚しい。萬壽丸では、船主は甲板部に豚を飼つてゐる積りでもあるらしい。

「こんな状態では、誰でも、心細さからだけでも、咽喉まで詰め込み度くなることは事實である」と。これがストキのプロレタリア哲學であつた。

「事實、ストキは頭が惡い、僕達は皆の積りで、自分が幾つ頭を作つて置いたら、その状態を眺めた時に、ストキの觀察及批評は當つてると、思はずにはゐられないのである。」

企畫は、藤原の皮肉なる微笑の如くにして終つた。終つて往つた如く突唐に、犬の様に潜り込んだのか、天上であつた。西澤は煙草に火をつけて、彼が最も得意とする、信州岡谷附近の紡績工場に勤めてゐた頃のローマンスの一くさりを話し始めた。彼の話は實にうまかつた。講談師でもあれ程には話さないであらうと思はれる程、一切を創作的に述べるのであつた。そして、その話はうまければうまい程、初めの人は感心し、吉田は、逃け出してしまふのであつた。

今は、藤原も、波田も、逃け出す譯に行かなかつた。外に誰も西澤のローマンスを引き受けて呉れるものが無いからであつた。藤原は辛抱する氣でこれも無暗に、煙草をふかした。

西澤の話が、その得意なる山に入つて、今正に頂点に達しようとする時、藤原は云つた。

「君の話は大變うまい。そして大層面白い。ただ、一度だけ純潔なほんとの話をして聞かして貰ひたいな。猶面白いだらうと思ふよ」

「アハヽヽヽ、君の肉皮の方が上手だよ。僕も一度ほんたうな話をし度いと思ふんだが、どれがほんとだか、どこからが拵へたんだか、今では自分にも分らなくなつてしまつたんだ。ハ、ハヽヽ」と氣の良ささうに笑つた。

「君は全く、無産階級藝術家の寶玉だ。全くだよ」と藤原は、全く眞面目に云つた。

「小説だと受け應へが出來るが、藤原君がタンクを使用し始めると、僕も退却以外に應戰の法がねえや。ハッハヽヽヽ」

西澤も、そのベッドへ上つて、轉がつてしまつた。

「どうだい、誰もかも皆寢ちやつたね、寢る程樂はなかりけり、浮世の馬鹿が起きて働くつて歌があるぢやないか、皆賢くなつちやつたね」と云ひながら波田は、自分の巣から本を持ち出して來て、それを、罐詰の蓋の處へ行つて讀み始めた。

藤原は暫く、暗い室の中で、煙草の火だけを、時々明るくさせては一人、何か考へてゐるのであつた。が、やがて彼は煙草を捨てゝ立ち上つた。

「波田君、君は感心に本を讀むね、それは何て本だい、純文學かい」

「ナアニ、友人から借りて來たんだが、迚も難かしくて、分らねえんだ」

「一寸見せ給へ、へへー、マルクス全集、第一巻II か、資本論か、それや君、社會主義の本ぢやないかい」

藤原は、自分もその本を非常に讀み度く思つてゐたが、餘り高價なので今まで買ふことが能きなかつた。彼は中をめくつて見ながら「面白いかい」と訊いた。

「面白いか、面白くないか、ためになるか、ならぬか、全で分らぬよ。意味が分らないんだ。處々サーチライトで照らし出した程部分的に分る處があるんだ。そこはね、本文の論旨を說明するために引例した處さ。その例だけは分る。そして素てきに面白い。面白いと云ふより、何だか、僕たちのことが、僕たちの知つてるより以上に委しく書かれてゐるよ。だけど、その例以外は全で分らないんだよ」波田は正直に答へた。

「僕にも讀まして呉れ、ね」藤原は頼んだ。

「あゝ、いゝとも、讀んで呉れ給へ、未だ續きが三冊あるからね」

「僕も本を讀むことは好きだつたよ。隨分よく讀んだものだよ」と云つて彼は、波田と並んで本

のベンチへ腰を下した。彼は、人が人とも思はないやうな、[illegible]な男であった。そして必要以上には口を利くことが嫌ひなやうに見えた。

「なるほど、君は讀書家だね」と波田は藤原に同意した。「そして、どんな本を君は好んで讀んだかい」

「僕は、ありとあらゆる[illegible]ない本を讀み漁つたよ。[illegible]の本から、[illegible]で、珠算なんてする本も[illegible]讀んだし、ドンキホーテも、渡邊崋山も、吉田[illegible]の本から、小學地理、歴史、修身、[illegible]何でもでも活字の並んでゐるものは手當り次第に讀んだよ」と、藤原は、何だか、河の[illegible]、[illegible]でもしたやうに渦を巻いて彼の話を話し出した。

二

藤原は、そのいつもの、無口な、無感情な、石のやうな性情から、一足飛びに、情熱的な、鐵火のやうな、雄辯家に變つて、その身の上を波田に向つて語り始めた。

「僕が身の上を、誰かに聞いて貰はうなんて[illegible]心を起したのは、全く始めてだ。[illegible]こんなことは、[illegible]の後で、きつと妙な淋しい氣に落ちるんだ。そして、話し手は、こんなことを話すんぢやなかつた。俺はなんと下らない、泣き言屋だらう、と思ふし、一方では、『あゝ、あんなに昂奮して、あの男に話すんぢやなかつた。この話は僕等の生活の間に何かの、惡い障害になるかも知れない』と、思ふに決つてゐる。僕がそんな結果を豫測するやうな話だけが、何かのはずみで、どうしても話さずには居られない衝動を人に與へるものなんだ。あとで何でもないやうな話は、何かのはずみに、誰かを驅り立てゝ、話さずにはおかないと云ふやうに、情熱や衝動を與へはしないんだ。僕は、今日、僕が本を無暗に讀んだと云ふ話から、僕は我慢が出來なくなつたんだ。それほど、僕は本を讀んだことが僕に馬鹿氣た氣を與へたらしいんだ、本を讀んだことは、僕が生きるのにも、眠るのにも、ものを云ふのにも、本を讀んでゐるやうな感じを人に與へるらしい。つまり僕は本の讀んでならない乾燥したものばかりを讀んだんだ。

それで僕は見事に頭を毀してしまつた。今から考へると、その頃、僕は何を讀むかと云ふ大切な事柄の選擇が分つてゐなかつたんだ。特に[illegible]ことと、[illegible]出[illegible]つて讀んだ。そして結局、本を讀むことは、僕に何も與へないことを知つたんだ。そして今になつて考へると、その頃の僕には、生活がなかつたんだ、生活が、その頃の僕は燻見たいにブツ〳〵して、地についてゐない、生意氣な學生だつたんだ。本を讀むことの無駄を知り、僕の頭が從つて、カラッポであることを自覺した僕は、生活を得ようと焦つたんだ。生活は學校を出て、その[illegible]月給にありついて、その範圍外に家からの補助で送るのが、生活であることを僕は思つたんだ。[illegible]生活とは、燃えるものだと僕は思つたんだ。燒け出すやうな[illegible]するやうなものが生活だと僕は考へた。[illegible]の金で教育を受けてゐる。それぢや俺が生きてゐると云ふ事にはならないんだ。俺が生きてゐるためには、俺が自分を活かさなきやならないんだ。俺は、俺の腕で食はう」と僕は決心したんだ。そこで、僕は毎晩、下宿を[illegible]出て、友人の所へ書物を預けて置いて、工場を廻り歩いた。そしてAと云ふ工場に[illegible]見習で入つた。

工場生活は、非常に苦しかつた。學生の生活と比べて、[illegible]のやうに[illegible]つた。朝から夜まで、他の勞働者と[illegible]、[illegible]する[illegible]ことに[illegible]れた。[illegible]

僕は、今ではあたり前すぎると思つてゐるので、自分でも驚くのだが、伍長の傍へ行つて、グレインを借りて持つて來い、など云はれてどの位そのために恥をかいたり、方々驅けずり廻つたりしたか知れなかつた。僕は、此處にも生活はないと思ひ始めてゐた。けれどもそこは、學生とちがつた處があつた。眞劍だつた。そして、誰もが、心の底になにか甲蟲のやうに陰鬱なものを貯へてゐた。どんな若い勞働者でも、不平を云つてゐた。そして、彼等は、その生活が惡いと考へてゐた。僕も甚だ惡いと思つてゐた。そこで、僕等は、いゝ生活を考へるのだつた。こんな生活はいけない。

こんな生活は、あそこがかういけない、こゝがあゝいけないとすつかり分つてるんだ。そこで、いゝ生活はこゝをあゝ、あそこをかうと、旋盤を睨みながら一日に十四時間も十六時間も考へるんだ。それを、矢つ張り仲間たちも、多いか少ないかだけで、考へるには考へてゐるんだ。

「いゝ生活を人類のために求める。そこに俺の生活があるんだ」と、かう僕は、フト旋盤に送りをかけて腰を下す途端に考へたんだ。それから僕は、本を讀む代りに、自分たちの生活を見つめるやうになつた。僕は全で僕自身を他國のやうに白い眼で睨んだ。工場へ五時に來てから、幾度も小便に行つた。その中ほんたうにしたかつたのが幾度、あとは、兎にかく場處を動き度かつたからだ。倉庫番(工場の)の處まで何歩あるか、何秒かゝるか、それだけをゆつくり歩くことを、何故職長は咎めるか、職長は勞働者か、それとも何か、とそんな風に愚の骨頂のやうなことから、その他樣々なことが、僕の頭を根限り追ひまくつた。

そして僕には、僕が學生であつた時代が恥かしくなつた一時代が來た。僕はそれから、性格が一變したんだ。それまでは、僕は、殆んど誰からも愛される質だつたんだ。そして近づき易い青年だつた。處が僕が、學生時代を呪ひ始めると共に、職工時代をも呪ひ始めたんだ。詰り、その『恥づべき學生の俺を今の職工の俺たちが養つてゐたし、これからも養つてやらなきやならないんだ』と。丁度僕が、この正體の知れない考へに囚はれた時に、一人の職工と知り合ひになつたんだ。

「人間は何故働かねば食へないんだか知つてるか、お前」とそいつが云ふんだ。僕は暫く默つてゐた。すると、

「人間は何故働かねえ者が贅澤だか知つてるか、え」とそいつが云ふんだ。

『人間は苦しんでるんだ』と僕が云つたんだ。

『さうだ。一人のために千人が、十人のために一萬人が』とそいつが云つたんだ。僕は分つた。その勞働者は、白水と云ふ名前だつた。

それから僕はその男とつき合ふやうになつたんだが、その白水と云ふ男は全く珍らしく意志の強固な、感情を理智で叩き上げて、火のやうな革命的な思想を持ち、それを僕等が飯でも食ふやうに、平氣で、傍目からは習慣的に見えるほど、冷靜に實行する男だつた。A工場では、誰もその男を尊敬してゐた。會社では、その男を馘首しようとして、あらゆる手段を廻らしてゐた。そして、それは白水も十分に感づいてゐたやうだつた。彼は、眼だけを光らして、殆んど上役と口を利く樣なことがなかつた。上役も彼を見ると、なるべく避けて歩いてるやうに見えた。彼は、朝から終業まで、熱心に旋盤にかじりついて、仕事をした。そして、不思議なことは、彼は、特に能率を上げたこともなく、下げたこともなかつた。いつも一生懸命でやつてゐて、そして彼の能率は中一寸以下であつた。彼の熟練には、職長も文句が出なかつ

たんだ。彼はA工場の技師長と同期で大學を出た、と云ふ事があつたんだから。處が白水は學校には、實際は行つてゐないらしいんだ。然し、また驚くほど獨學をやつたらしいんだ。彼は僕と違つて、讀むべきものを知つてゐたんだ。探す目的を持つてゐたんだ。それに、白水は、前科が四犯あつたんだ。その各々の入獄時代に外國語も研究したらしいんだ。年は見たところ三十にも見えるんだが、實際は二十六だつた。彼は、資本家からも、勞働者からも、別々な立場と意味とからで注目されてゐたんだ。それは汚ない、暗い六疊の間だつた。それを白水は借りたんだ。そして彼はそこで自炊を始めたんだ。暫く彼がさうしてゐる中にその六疊の間は、いつでも夜になると、勞働者が五六人集つてゐないことはなくなつた。

三

藤原は熱心に語つた。彼は、白水を目の前に置いて、話してでもゐるやうに、感激し、昂奮して、自分の話に醉つてゐるのであつた。彼は、こゝまで話して來て、その好きな煙草に火をつけて、興奮全體に廻り行き渡るやうに、深く鋭く、煙を喫つた。

波田は、熱心に聞いてゐた。そして、白水と云ふのは、藤原の前名のことではあるまいか、と、藤原の話の合間々々には疑つたりしてゐた。それは、藤原によつて語られ、表される白水ではあるにしても、餘りによく藤原に似すぎてゐた。けれどもそれはどうでもいゝことであつた。

「フーム、重工産業の勞働者は賴もしいね」と、波田は嘆賞的に云つた。

「勞働者は、主人になるんだからね、勞働者の手によつて、平和と幸福とが齎されるんだからね――ストキは、ホッとしたやうにして云つた。

――それから、その男はどうしたんだね」と波田は杯をいぢりながら訊いた。

「白水は、自分の六疊の薄暗いと云ふより、殆んど眞つ暗な間を、夜間――晝間でもいゝのだが、晝間は皆仕事に出るのであつた。が、中には、晝間辨當を持つて本を讀みに來る者もあつた――開放したのであつた。そして、顏は變つても、數はいつでも大概五六人、多い時は十五六人も集つた。そして、そこでいろんな話が取り交された。僕も、その集りには毎晩出たものだつた。

白水は、彼の室では、又はその集りでは、全て工場に於ける彼とは別人のやうに柔和に、そして氣輕になるのだつた。最初の間は、誰でも不思議に思ふのだつた。誰かが、白水君は、工場と、家とは別々な全く異つた白水君を持つてるんだね、と云つた時、彼はかう答へた。

「それや僕に限つたことぢやないぜ。君だつてさうぢやないか、機械の附屬品たる君と、細君のための君と、奴隷としての君と、君の主人としての君と、誰だつて、勞働者はこの二つの人格を持つてゐないものはないだらう。君たつて、機械の附屬部分として働いてる時の顏付や氣持と、今の、さあ、細君や、子供のための君としての顏付や氣分の方が、どの位嬉しい、親しい人間だか分らないよ。[illegible]したぜ、ハッハッハ、、と。そこに居合せた者も、皆腹を抱へて笑つた。彼の說明は按摩のやうに人を和かにし、その疑ひを解いたんだ。

そして、話はいつも、かう云つた簡單な冗談から口を切られて、何故勞働者が機械の附屬部分であるか、と云ふ質問が生じて來るのだつた。それには白水君が誰も返答しない時に、ゆつくりと、よく分るやうに說明を加へるんだ。

かう云ふ風にして、そこに集つて來る勞働者は、必ず、一つ宛か、二つ宛か、自分自身の身の上

の幹部を會得して歸つて行くやうになつた。

かうしてゐる間にも、白水は、絶えず、警察から、尾行されたり、張込みされたり、呼出しを受けたりするんだつた。そして、それが、毎晩そこに集ることが原因であることが、そこへ集つて來る人達にも分つて來るのだつた。

その中に、そこへ絶えず集る者には、たとへば僕等などにも、時々警察の眼が光るやうになつて來たんだ。それが何故だか分らなかつたんだ。しかし、若い者は警察からかれこれ云はれることに對して、非常な反感と、從つて、それを激成するやうな、立場になつて行くのだつた。彼等は今まで無邪氣に聞いてゐた。しかし、警察が彼等の私宅を訪問したり、その工場を訪ねたりするやうになると、彼等は眞劍に聞くやうになつて來た。そして、警察をだん／＼恐れぬやうになつて行つた。

「俺達自身が何であるかを、俺たち自身で研究することが、何故悪いんだ」と、若い勞働者たちは、警察の制裁の洗禮を受けると、一種の無産階級信念――を抱くやうになつて來たんだ。

そして、遂に、警察によつて刺戟された若人共は、立派な『無産階級軍』の前衞隊』となり、猶ほ加へらるゝ試煉によつて、×××、××××、恐るゝに足らずと云ふ、固い信念の中に、生きるやうになつたんだ。さうして、さうなると、そこに待つてゐたものは、彼等の尻を引つ叩いた權力が、構へて待つてゐた陷穽であつた。愈々彼等は、現實の牢獄の壁に打つ突らねばならなくなつたんだ。

ある年の秋だつた。A工場の在るN市は、日本全國を襲つた暴風雨の襲撃を蒙つた。その程度は日本の諸都市中で最も慘めな部分に屬する程であつた。

風が強くて、雨が横から吹いて、傘がさせなかつた。屋根瓦が吹き飛ぶので、街に出られなかつた。海岸部分は軒先まで浸水した。水が減くと同時に、破壊れた家が無數だつた。船が海岸へ打ち上げられて、玩具屋の店先に於ける船のやうであつた。目貫の方でも、小學校が崩壞した。民家が倒れた。市民は外にも出られなかつた。内にも居られなかつた。

A工場の勞働者も、この天災から逃避し得なかつた。のみならず、彼等はその住む地域の關係上、より一層甚しい程度に、その慘害を受けた。彼等は少し受取つて多く養ふために、安い家賃を選んだ。そこは海岸の低地であつたんだ。

A工場の勞働者で、白水と同じ部に出てゐる男が、十分にその浸水の鹽の辛さを舐めさされた。彼の家は床上二尺浸つた。潮が將に汚濁せる潮水のために浸らうとする時、正にその時期にかつきり達してゐる彼の細君は、生理上の法則に從つて、赤ん坊を分娩した。その産褥の隣りに、十二年以前から如何なる場所へでも横になつて行く、痛風の彼の老母が臥せつてゐた。

太陽が誰をも待たないと同様な公平さと、正確さとで、その汚濁した潮水は、その水量を増して來た。叫喚があつた。失心があつた。泣き聲が上つた

この勞働者は、盥に赤ん坊を入れた。そして押入の上段に、出來るだけ深く老母を押し込んだ。次に彼の細君を、その手前へ押し込んだ。

その上で、この男は、自分自身赤ん坊を繦褓で拭いて、父親の正當なる責任を果した。極めて簡單明瞭なる事實であつたが、それが簡單であつても、その事のために入費がかゝると云ふことも明かなことだつた。處が、どうしてこの男が母の薬代や妻の後始末、それから子供への手當、産婆への謝禮などをすることが能きよう。それ處ではなかつた。彼は今まで、家族を養つ

てゐたＡ工場にも、出るに出られない有樣だつた。疊はビショ／＼に濡れてゐた。床の下は魚でも住んでゐさうだつた。便所と井戸水とが同居したために、未だそれが掃除されてゐない。若し、この男が苦勞に馴れなかつたか、貧乏に馴れなかつたかで、一寸神經質でもあつたのならば、僕等が考へても、首をくゝつた方が氣が利いてゐるやうに思はれる位なんだ。ところが、この男は我慢したんだ。後で知る事だが、この男は我慢するんだ、何でも、癪に障る位我慢強いんだ。と僕等は、さう思つてたんだ、ところがどうだらう。まるつきり奴は感じないんだ。

彼は、この慘憺たる事實に對して、何物をも感じなかつたやうだつた。たゞ、金が少くあればいゝのだつた。それが萬事を解決するだらう。

君、長い間、人間は餘り慘めであると、感受性を全然失つてしまふものらしいんだ。この兄弟なんぞも矢つ張りその一例だと見える。人間がその苦痛に對して、馴らされてしまふ――何の必要もないのに――それが、どんなことだと君は思ふんだ。馬が去勢されて生殖慾が無くなるやうに、人間が、縛りつけられて、型に押し込まれて、自由を奪はれてしまつた去勢された馬のやうに、感受性を失つてしまふ。自分がどんな奴隷だか知らずに、働けば樂になると思つて働く。勞働者たちは、皆この感受性を麻痺させられてしまつたのだ。勞働者は働けば働くほど、自分を搾る資本に、それだけ多くの餘剩勞働は搾取され、資本を增大せしめるんだ。

この去勢された、馬のやうになり切つた兄弟は、二三日目の後會社へ行つたんだ。

「積善會の積立金を頂きとうございますが、」

かう／＼云ふ譯で、と、事實ありのまゝを純客觀的に――彼には、今では、彼自身のことが客觀的にしか見えなくなつたやうだつた――くどくどと述べ立てたんだ。

この積善會つてのはね、勞働者の賃銀の百分の五を毎月強制積立をさせるんだ。そして、その金を一定の額だけ、吉凶禍福に應じて、會社からいくらかの補助金と共に「給與」して貰ふんだ。そして毎年一回この金で運動會を開いて、一金一封（五十錢）を酒代として、頂くんだ。工場法の役目を、勞働者の負擔に轉化した型だ、即ちその積善會なるものだつたんだ。

「その積善會のお金の中で私の積立金を下さい」

と、この男は申出たんだ。

勿論それは言下に刎ねつけられて、見舞料として積善會から二圓だけ貰へた譯なんだ。處が二圓では何とも話が煮えんとその男は云ふんだ。何とかならないでせうかと、相談を白水に持つて行つたんだ。

「それは、積立金を取つたらいゝだらう。積立金は職工の貯金だらう。それを取つたらいゝだらう。積善會の方は又話が何とかつくだらうと云ふことで、自分は事務所へ、その節くれ立つた木の切株のやうな男と一緒に行つたんだ。

工務係の御曹司、と云ふ妙な後光の差し揃つたやうな名前の男が、二人を相手にして、何の話だと訊いたんだ。

おふくろと、妻と赤ん坊とを、押入へ押上げた、この哀れな男は、くど／＼と、何故波が敷居より上へ上つて來たか、とか、壁と壁の間から、先づ汚れた水が、ブク／＼と吹出して來るものだとか、押入へ、親子、三人を入れましたので、とか、彼が、今そこで、そんな目に會つてでもゐるやうに、細大漏らさず、客觀的に話し始めた。

彼の話は、決して腹の立つべき質のものではなかつた。けれども、その長さと、それから、繰返しと、切りのないのとには、誰もが退屈を

ないんだなんて云つてゝよ。そして、濟まないが兎に角明日の朝まで待つて呉れるやうにつて云つて、そのまゝ寝てしまひなすつたわ。」

「あゝ、いゝよ。それぢや僕も泊らせて貰はうか。姉さん、僕はね、姉さんが嫌ひでなんぞないんだよ。抱きしめて、キッスしたい位だよ。だけど、僕にはね、僕が愛してゐると同じやうに僕を愛してる人があるんだよ。だから、僕は一人で寝るから、姉さんは、帳場の工合が惡かつたら、床を二つ敷いて、並んで寝ようね。そして寝物語りに、姉さんのほんとの戀人の話でも聞かうか」と云つて、淋しく氣の毒さうに小倉は云つた。

「まあ！」と立つて床を延べようとしてゐた女は、急に小倉の膝の上につゝ伏した。そして泣き入るのだつた。小倉はびつくりした。

「どうしたの。一體、え、そんなに帳場に都合が惡けりや一緒だつて、些も構はないから、泣くのはお止しよ。ね」

小倉は女を起さうとした。女は起きなかつた。そして猶も泣き續けるのだつた。

「およし、ね、泣くのはもうお止し。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなけれや分らない。泣く程の事があるんだつたら膝とも談合つてこともあるから、僕にでも話して氣が紛れないこともないかも知れない。迚も力にやなれまいけれど、若し役に立つことがあつたら、役に立つから、泣いて許りゐないで話して御覧な。ね、僕明日の朝早く歸らなきやならないんだからね。未だ二三日か四五日は碇泊してるから毎日にでも來るから、ね。サア、床を敷いてお呉れ」と云つて、小倉は女をその膝の上から抱へ起した。

「えゝ、今、床を敷くわ、一寸待つてゝね、片附けるから」ハンケチで眼を押へて淋しさうに彼女はそこらの食べ散らしを片附け始めた。小倉も彼女に手傳つて、七輪などを傍へ寄せた。

二〇

寝床はそこへ敷かれた。それは一つであつた。枕も男枕が一つッ切りであつた。

「どうしたんだい、お前さんは何故泣いたりしたんだね」と小倉は、そのまゝ床の中へ潜り込みながら、氣の毒さうに訊いた。

「妾はね。この家へ來てから、あんた見たいな人に會つたのは初めてなの。初めの間は、妾もあなたを「お客」だと思つてたの」と云ひながら、彼女は枕下の火鉢の前へ、生娘がするやうに、慎しく坐つて、はにかみながら話した。

「だけど、だん／＼話したり、聞いたり、見たりしたりしてる中に、あなたは船乘り見たいぢやないやうに思へて來たの。妾ね、から思つたのよ、この人はきつと間違へてこゝへ入つたんだ。さうでせう。ほんとに牛肉のすきやきだけしか食べられない處だと思つて來たのでせう。さう云ふ人の前へ出ることは妾たちには恥だとはあなたは思はないの。相手が野獸であるときだけ、妾達だつて野獸にもなれるのよ。妾達は、何でも呪つてやるわ、何でも、神樣や佛樣なんて、夙くの昔に、呪つて、妾は側に寄せ附けないやうにしてるわ。だけどもね、妾達の家に、妾達の肉以外のものを、全で坊ちやん見たいな、素直な氣持で求めに來たあなたには、妾達の氣持は分らないでせうね。

妾達はね、あなたのやうな人を見ることはないのよ。監獄に入つてる女の人が、男の人を見ることよりも、もつと／＼、ずつと、妾たちが、あなた見たいな人を見ることの方が尠いのよ。それはね、男の人は、皆獸だからなのよ。

えゝ、全く獸なのよ。妾はさう斷言出來てよ。だけどね。それや男の人の罪でもないんだわ。それはね、神樣や佛樣の罪なんだわ。さう

でせう。ね、自分で人間を作つて置いて自分でこれはいゝあれは惡いと決めて置いて、そして、自分の作つた人間を、自分の作つた罪惡の中へ、全で陷穽にでも落すやうにして、嵌め込んでしまふのは、それや神樣の責任だわ。だから、妾の恐いのは、神佛ぢやないの

「ぢや何が恐いんだね、小倉は眠くて堪らなかつたが、女の珍らしい言葉につい昂奮されて起きてゐたのだつた。

「妾寒いから、あなたの傍へ入つてもいゝでせう。ね、たゞ入るだけなのだから、ね、いゝこと」といひながら、女は帶も解かずに小倉の寢床へ入つて來た。そして床の隅に小さく黄金蟲のやうに固まりながら、

「妾達はね。ほんとに心から愛さうと思ふ人を見附けることが能きないのよ。

妾たちが、第一、選り好みする事がいけないつて、あなたも考へて? 妾たちだつて、何かを見分ける力を持つことが惡いつてことはないでせうね。よし惡くつても、それはあるものなんだわ。だから妾達は、心から人を愛すると云ふことは能きないのよ。だけどもね、それは妾たちの愛するだけの「價値」のある男がこの世の中にないつてことぢやないのよ。さう云ふ人もあるのよ。えゝ、さう云ふ人もあるのよ。そしてね、隨分癪にさはることはね、それは全く腹の立つ、癪に障る生意氣なことなのよ、さう云ふ男はね、妾たちが、ほんとにしんみりして、その人と愛し合ひ度いと思ふ樣な、さう云ふ人はね、いつでもきつと極り切つて馬鹿なのよ。馬鹿でのろまで、ぼうつとしてるの。でさう云ふ男はね、妾たちがその男を愛してるつてことが分らないのよ。そしてまた、その男は隨分馬鹿ね。妾たち見たいな女は、男性を愛することは職業的以外に能きないとでも云つたやうに、無關心なのよ、全く、馬鹿につける藥つてものは昔から、どこにも無かつたのね。

彼女は、全で夢遊病者か何かのやうに、天井を向いたつきり、その大きく開いた眼を、自分の頭蓋骨の内部でも凝視してゐるやうに、ぢつと据ゑて、熱に浮かされてるやうに、早口に、熱心に、そして、一人で小火を消しでもしてるやうに焦つて、慌てゝ話した。そのくせ、彼女の體はそこへ、釘でねぢつけられでもしたやうに、動かなかつた。

小倉は、やつと話が分つた。そして、自分が、氣取り屋で馬鹿であることを、十分にこつぴどくやつつけられてゐることも知つてゐた。けれども、それにしても、何と云ふ聰明な女だらうと、彼はもうすつかり眠氣を奪はれてしまつて、女の言葉の方向の動くがまゝに、その疲れ切つた意識を引摺り廻され、血みどろにされるのであつた。

「そして、ね、そんな馬鹿氣たことは、ある筈がないのだけれどね、妾たちも、又、馬鹿なのよ。何故だと思つて? それはね、妾達はいつでも極り切つて馬鹿だけに惚れるのよ。その馬鹿はね、いつでも極り切つて、戸惑ひした雀のやうに間違つて飛び込んで來るだけなのよ。ホヽヽ、ね、小倉さん、あなたは御自分が賢くつて品行のいゝ、船乗りには珍らしい、堅い、善良な、そしても一つあるのよ、人類のためになる人間だと思つてるのね。ね、さうでせう。さうよ、さうよ、妾にはね、あなたが自分で知らないことまで分るんだわ。だから、まあ聞いてらつしやい。だけどね。小倉さん。あなたは、それだけぢや三上さんよりも、未だ駄目だ。役に立たない穀潰しよ! 分つて。世の中にはね、この汚れた世の中を些も良くしようとしないで、益々惡く、腐らせて行くためにだけ努力してゐて、それでゐて自分は點の打ち處のない善良な人間だと思つてる人が澤山あるのよ。帽子を

キチンとかぶつて、几帳面な、ガキ／＼と歩いて、一銭も人から借り倒さないで、乞食には、きつと一銭――一銭より少くも多くもないことよ――それつぽかしだけやつて、女と云へば、おかみさんだけしか知らないで、それも、今で家の雑巾と同様に無趣味に乾し上げて、ね、若い中から、決して女郎買などしないで、その代り、小倉さんは航海學を讀んでるでせう。そして、高等海員の免状を受けようと目論んでるわね。勉強してることね、あんたは。ね、いゝの、あんた見たいに、勉強して、そして、階段を上らうとして骨を折るのよ。だけどね、その階段はね、滅亡への階段つてのよ。分つて。それをうまく昇つても、その階段自身が滅亡する運命になつてるし、それが又在る間は、その階段を支へる土臺の方で、無數の人間が失はれる滅亡の階段つてのよ、その階段てのが、一切の源なのよ。ね小倉さん。實は、ありもしない幻の階段のために、實在してる人間が、永劫に苦しむつてことはいゝことなの。あんたには分るはずだわ、あんたは、その階段から全でその焼けつくやうな眼を放したことがないんだもの。それは、あんたには分らねばならないんだわ。あんたは、妾や、その他あらゆる不幸な、あんた自身も、その不幸者の第一人者よ。よくつて。その澤山の不幸な人間をもつと、殖やす爲めに、あんたは、大骨折で勉強して、そして一廉善人振つてるのよ。ホホヽヽヽ、遂々、妾、あんたを、大馬鹿者にしてしまつたわね。御免なさいね。だけど、それはほんとに、あなたは大馬鹿なのよ。ホホヽヽヽ」女は全速力で、船の、スクルーシャフトが廻轉してるやうだつた。

「あゝ、それはほんとの事だ！」と、小倉は口走つた。

「僕は、社會の、秩序と云ふ大きな看板に隠れて、自分の利慾のみを得ようとしてゐた。それは全くだ」

「ほうら、白状してしまつたわ。あなたはね、高々船長位になつて、お上さん見たいな人を苛めて、御自分は又、自動車か何かに乘つた老碌爺から譯も分らない事を云つて苛められ度いの。お止しなさい。仰向いて唾を吐くのは止めるものよ。だけど、あんたが船長になると、今度は、ほんとに純潔な生娘があんたに惚れてよ。そして、船が着くたんびに、あんたに、ダイヤモンドの指輪を愛の表象として強請ることよ。ホホヽヽヽ。それは、あんたに幸福を齎すわね。妾見たいな、えゝ、妾は淫賣よ、それが、どうしたつての、小倉さん、あんたは淫賣よりも、一生涯を通じての娼婦がお好きな一人でせうね。ホホヽヽヽ、だけど、あんたは、さつき「僕が愛してると同じ様に僕を愛してる女がある」つて云つたわね。妾、妾、妾だつて誰にも劣らない愛を持つてるんだわ、だけど、妾は前科者なのよ。ホヽヽヽ、世の中の人間は、自分を縛つてる鎖の重さが、人をも縛つてると思ふと、安心して自分の鎖が輕くでもなるんだと見えるわ。それはね、奴隷道徳の鎖よ。因襲の鎖つてのよ。だけどね、小倉さん。妾には、そんなことはないのよ。妾そんなことを、夢にも思はないんだけれど、何故つてばね、若しか、妾があんたを愛したくつても妾が淫賣ならその資格が無いとでも、あんたは云ひ度いんだわね。いゝえ、さうよ、まあ、默つてらつしやい」彼女は、小倉が何も云はうとしてもゐないのに、慌てゝ彼の云ふのを遮つた。

「妾はあんたに愛させて見せるやうに、媚む資格も無いと思つてるのね。だけどね、小倉さん、妾は幻の階段を追ふやうな利己主義者は、妾の方でいくら頼まれてもいやなのよ。それは意氣地なしの夢見る生き方なんだもの。それは妾たちが、こんな恥かしい商賣をするの

より、もつと／＼恥かしい、墮落した、外道のやり口よ。

だけどもね。小倉さん。若しあんたが、さうでなかつたら、若しあんたが立派な人間で階級なんぞ認めない人だつたら、妾は、妾は、あんた見たいな人に初めて會つたことを白狀してよ。そして、妾は、あんたを、世界中で一番強い、弱い者の味方としてなら、妾はあんたを愛したいの。だけどもね、何たつて妾は馬鹿なんだらう。あんたにはいゝ人があつたのね、妾、妾だつて、妾はね、小倉さん、あんたが高等海員の試驗を受けて、船長に立身するやうに、試驗を受けてでも願つてでもなく、この商賣に、無理矢理に放り込まれたんだわ。妾の云ふことが分つて。ホヽヽヽヽ。妾の云ふことはね、こんな商賣してゐても、それは妾の知つたことぢやないつて積りなのよ。あなたが船乗りをしてゐても、妾がこんな汚はしいことをしてゐても、性質は同じなのよ。そしてね、妾の方が、ほんたうは、もつと尊敬して貰はなければならない程苦痛な部分を引き受けてるのよ。分つて？ 人間が生きるためには、どんな苦痛でも忍ぶもんだわ。生きるためには、より早く死ぬ時までに、食ひつくものよ。

妾なんぞ死ぬまでに、ほんとに自分のしたいと思つたことの、反對のことばかしさせられて遂々死んぢやふんだ。自分の思ふ通りになることとは一つだつてありやしないんだわ。妾はね初めはね、あんたをたゞのお客と思つたの、そして次には坊ちやんと思つたの、その次はほんとに物の分つたおとなしい人だと思つたの、そしてね、今ではね、あなたは、とうね、何だらう。何と云つたらいゝだらう。妾のお父さんだわ。妾を産んだ、妾も知らない、ほんとの妾のお父さんだわ、ホホヽヽヽ……妾お父さんに……

二

その夜は全く惡魔につかれた夜であつた。人間の神經を鏝で燒くやうに重苦しい、惱ましい魅惑的な、夜であつた。極度の歡びと、限りなき苦しみとが、とろ／＼に溶け合つたやうな一夜であつた。

三上にも、小倉にも、それは回想するに忍びないやうな、各々の思ひ出を、その夜は燒きつけた。それは永劫に覺めることのないほどの夜であるべきであると思はれた。それほどその夜は二人にとつて大きな夜であつた。

人間の一生のうちに、その人の一切の事情を、一擊の下に轉倒させる様な重大な事件があり、社會に於ては、全社會を聳動せしめるやうな大事件がある。そして、それ等の事件が必ず夜か晝かに行はれ、その事件とは全で關係なしに、夜になつたり、朝になつたりすることは、個人として、社會として、その事件に當面したものに、馬鹿げた、不思議な感じを屢度起させるものだ。中にはあゝ、俺にとつて、あれほど重大なことがあつたのに、どうだらう、夜が明けた、と思はせるのである。

三上と、小倉とは、各々が、こんな風な感じを以て、朝の六時に起きた。二人とも腫れぼつたい眼をしてゐた。

一夜は明けた。そして、重大なる事件は未解決の儘に、夜を持ち越して、明けたのであつた。それは、一夜を持ち越したために、事實の形を千倍もの太さにしてしまつた。一夜――五時間――傳馬繋留――水夫監禁――何でもないことであつた。それは全く極めて平凡な詰らないことであつた。

處が、それの經緯を、社會から、萬壽丸にまで縮めると、問題が由々しく大きくなるのだつた。

兎まれ、小倉は階段のことは忘れたにして

も、一應は、本船へ歸つてから、萬事を解決した方がいゝと考へた。處が、三上は、それは馬鹿なやり方だ、と考へた。そこに、三上と小倉との相違があつた。

二人はその家を出た。そして、海岸を傳馬のある方へ一緒に歩きながら、その事件の締めくゝりについて話し合つた。

「俺あ歸らんよ」と三上は、さつきから云ひ續けてゐた。

「でも歸らなきや様子が分らないぢやないか」

これは小倉の云ひ草だつた。

「様子は分らんでもいゝよ。あの傳馬を叩き賣るか、質に入れるかして、俺達はどつかへ行つたがいゝよ」三上は自分の計畫を初めて口に出した。

「でも、そいつあ困るなあ。僕は海員手帳が預けてあるし行李もあるし、そいつあ弱るよ」小倉は全く困るのだつた。彼は船長免状を取る試驗のために、二度も沈沒したりして、それに必要な履歴を實地として取つてあつた。それは海員手帳に記入されてあつた。

「だから、さやうならつて僕がさつきから云ふのに、いつまでも君が愚圖々々ついて來るからよ。君はサンパンを雇つて歸れ。そして、三上が傳馬を盗んだとでも、何とでも云つて、置けばいゝぢやないか。僕はこれを賣つて、どこかへ行くんだから。行李や、手帳なんぞ欲しくもないや。早く君は歸れ！」

三上はクルッと反對の方を向いて、棧橋の方へ歩を返した。小倉も無意識にそれに從つた。

「だつて、些も君だけが惡いことはないぢやないか、大體船長が無理なんぢやないか、だから、歸つたつて何ともないよ。歸つた方がいゝよ」小倉は、頻りに穏便な方法をとることを三上にすゝめた。

「何でもかんでもいやだよ、俺は。若し歸る氣になつたら、出帆間際に歸る。それまで俺は隱れてゝ船の様子を見ることにするよ」

彼はかう云つてズン／＼歩いて行つた。

小倉は夢でも見續けてゐるやうに、ボンヤリしながら、三上の後から無意識に歩いた。

三上は波止場に來て、昨夜繋いだ船の傳馬にヒョイッと飛び乘つた。小倉も乘らうとすると、手を振つて、みんなに、出帆間際にこれ――と云つて傳馬を指さして――で歸るからと云つといてくれよ。なあ」と云ひながら、グーッと波止場を押して、離れてしまつた。

小倉は失心したやうに佇んでゐた。

三上は、その五人前もあるやうな腕に力を籠めて橋の下を潜つて見えなくなつてしまつた。

「なるほど、三上は歸れない筈だ。船長を脅かしたんだもんなあ、それを歸れと云つて、昨夜一晩泊つた、俺は何と云ふ白癡だつたんだ。三上は、たとひ理由があらうがあるまいが、どのみちやッつけられるに決つてゐたんだ。三上は、傳馬を質に入れるなんて、奴一流の計畫を立てて行つちやつた。が、それがどんな滑稽なやり方であらうが、奴が、のこ／＼船へ歸るよりは遙にましなこつた。知つてゐて、陷穽に首を突つ込むにや當らないもんなあ」小倉は行く先きを忘れた田舎者のやうに當惑氣にそこへ突つ立つてゐた。彼の役割は、この上もなく／＼妙な、滑稽な云ひ様のない不思議なものになつて來た。

「船の傳馬に乘つて來て、サンパンを雇つて歸る！　一體どうしたんだ。そしてこの責任は、三上と僕とに、あるんだからなあ。どうなるんだ、一體。まゝよ！　歸つて見りやどうにかなるだらう」

彼はサンパンを雇つて、萬吉丸へ行くやうに賴んだ。

「萬壽はいつ入つたんだい」と、虱小屋から、這ひ出した兄弟が訊いた。

「昨夜晩くよ」彼は答へた。

「今朝此處へ繋つてあつた傳馬は、萬壽のぢやなかつたかい」と、船頭は訊いた。

「こいつ等も知つてら。へ、知つてる筈だ、七時だもんなあ、だが、一體昨夜のことは、ほんとにこの俺が經驗したことだつたらうか、それとも、……全く不思議だつたなあ」小倉は昨夜の女のことを考へてゐた。彼女は賢いそして純潔な女だつた。

三

小倉は萬壽丸へ歸つた。當番のコーターマスターは、梯子を昇りはじめると、すぐに、小倉を取り捕へた。

「どうしたんだい、心配したぜ、昨夜は、淸さ[illegible]しなかつたかつて、それで[illegible]した[illegible]んだ、[illegible]」

[illegible]に殘つた者に、[illegible]の事情を知らない[illegible]であつた。そして、サンハン[illegible]見[illegible]れに夜中のことだから、轉覆させられた爲めに、夜歸れなかつたんだと、船員達は勝手に想像して話を[illegible]のだつた。[illegible]に、船長を

上陸させて置いて歸りに、橋を潛る時に、打つ衝けて、壞れた——それほど古くも弱つてもゐないんだが——と云へば、船員たちには、いゝにかかうにか、三上が歸つて來ないで、サンハンの船頭が喋舌らない限り分りはしないんだが、俺それでは三上はどこへ行つたと云ふことになるし、何も隱し立てする必要もないから、すつかりぶち撒けた方がいゝだらう。それで惡かつたら、又その時のことだ」と、小倉は咄嗟の間に考へた。

「ナアに、やられはしないんだよ。妙なことになつちまつて困つたんだよ」小倉はほんとに、今そのことについて、口を切つて、「實際これは俺の考へてるやうに簡單に片のつく問題ぢやない、全く困つたことだ」と云ふことを痛切に感じた。

「どうしたんだ、一體、そして三上は？」

「三上が傳馬で、今朝歸つて來る筈なんだよ」

小倉は、三上[illegible]に入れるおかうと云つた。それ、迚も實現出來さうもない、彼の計畫だけは云ふまいと決心した。

「冗談云つちやいけない。誰も歸つて來やしないぜ」

「それぢや、おもてでよく、すつかりの事情を委しく話さう。一寸困つたことが起つたんだ。船長と三上とが喧嘩したんだ。それを、今おもてで話さう。皆も來るかなあ」小倉はかう云ひながら、もうおもてへのタラップを降りて、驅けて行つた。

おもてでは、ボースンから、大工、水夫たち、全部が、いつでも入港出來るやうに、準備を整へて、船長の歸るのを待つてゐた。それよりももつと、三上と小倉との消息について待ち切つてゐた。

「どうも濟まなかつた。只今」と叫びながら小倉はそこへ飛込んで來た。

「どうしたい三上は」

「俺ては女郎買をしてゐなかつたな」

「傳馬で歸つたかい」

「うまくやつてきたかあ」

各人が[illegible]考へ、想像してゐたことを最初の言葉に、彼のまはりに、[illegible]から一時に[illegible]やうに[illegible]と、同時に[illegible]かかつた。

小倉は、かいつまんで、昨夜の困難な航海から、船長の態度から三上の行動から、[illegible]——寢[illegible]はならなかつた——[illegible]ついた服を乾かして、今朝まで乾くのを待つてゐたこと、三上は、默つて、[illegible]出て、[illegible]の者へ

は一足先へ船の傳馬で歸るからと云ひ置いて行つたこと、慌てゝ飛んで出て、波止場へ來たときには、もう三上は影も見えなかつたこと、船長はどんな措置をとるか、打つ捨つては迚も置かないだらうと云ふことなどを、簡單に、然し要領を摘んで話した。

セーラーたちは默つて聞いてゐた。さうして、三上が一足先へ出て、未だ歸つて來ないと云ふことを、小倉ほどに心配しないのみならず、寧ろそれをひどく痛快がつた。

「いつぞ本船へ乘つて逃げたら面白かつたな」

などと茶化しさへした。一向誰もその事に對して「かうしたらいゝだらう」と云ふ意見を持ち出す者は無かつた。誰もが、その單調でない、奇拔な話を聞いて、その話と、事件とに滿足してしまつた。

小倉は、此處でも又彼が事柄を餘り簡單に見過してゐたことと、今では彼一人だけが、當の責任者に轉化したことを痛感した。

小倉は、非常に善良ではあるが、意志の弱い、そして所謂温情な、分別のある若者だつた。それで從つていつでも、事勿れ主義であつた。その澁滯的な彼は、旋風的事件の中心に捲き込まれたのだから、堪らなかつた。彼は何をどうしていゝか、自分自身が何であるか、一體全體どうしたらいゝんだか、薩つ張り一切が分らなかつた。

誰もがそれまで打ち明けてもゐないのに、いつでも、その人間の最も重大な秘密なことになつて、自分の手で收まりがつきかねさうになると、誰もが、決して普段それ程親密でもないやうに見える、藤原へ、相談を持ちかけるのが極り切つた例になつてゐた。小倉も、この例に依つて、藤原へ意見を求めようと決心した。

藤原は、今まで自分が中心になつてゐた、その話から、避けて、一方の隅で、默つてその事件の話を聞いてゐた。そして、煙草を「尻からヤニの出る」ほどに、やけに喫かしてゐるのだつた。

「藤原君。君はどうしたらいゝと思ふかい」と、小倉は藤原と向ひ合つて腰を下しながら訊いた。

「よくは未だ分らないけれど、僕の知つてる範圍では、君にも、三上君にも何等の責任はないと思ふよ」と彼は答へた。

「さうだらうか、だけど、三上は十圓無理強ひ見たいにして借りたものなあ。それに、昨夜は歸らないで、今日は傳馬をどつかへ持つてつちやつたしね。僕は今、一切が僕に責任がかゝつて來やしないかと思つて心配してるんだよ、そら僕にも責任はあるんだけどね。どうしたらいいだらうか。船長が歸つたら、直ぐに謝りに行つたらどうだらう、ね」

小倉は途方に暮れてゐた。彼はその事柄が帳消しになるためなら今から、裸になつて、海へ飛び込めと云はれゝば、さうすることの方を遙かに喜んで、且つ安心したであらう。彼は「これほどの問題か、未だ片附かない」と云ふ、宙ぶらりんの狀態であることを極度に恐れた。

彼は、この問題が、「いつかは現れるが、未だいつかそれは分らない」やうな狀態で、一、二ケ月も續くとすれば、彼は自分と三上との二つの行爲を括めて、道德的にも、法律的にも――若しありとすれば物質的にも、一切合切を自分で責任を背負つた方がどの位樂だつたか知れなかつた。

「俺はもう、これが三年越し引き續いた事柄のやうに考へられる」小倉は、ヒステリーの女のやうに「傳馬」の事以外から頭を持ち出すことが能きなかつた。

一船長に謝りに行く？　それもいゝだらう。だが、お前、何を一體謝る積りなんだい。雇入れもしないボーイ長の負傷を打つ捨らかしといて、

自分だけは、夜中に上陸したことをかい。難破船の側をスレ／＼に涼しい顔をして通過したことをかい。謝る理由と、事柄とがあるなら進んで謝るがいゝさ。だが謝ることの無い時に謝るのは、自分の正しさを誇示することになるか、又は、單なるオベッカに止まるよ。そんなに君慌てることはないだらう。事の起りから、終りまで、冷靜に考へて見給へ。勝敗は別として、理由の正邪はどつちにあるか、直ぐ分ることぢやないか。港務の許可なしに夜陰に乘じてコッソリ上陸したり、檢疫前に上陸したりすることは、よし、どんな風の晩の宵の中であつても惡いことに相違はないだらう。だから順序として、その點から先づ謝るべきだらうよ」

藤原は、全つ切り俺とは違つた見方をしてる。だが、あれも一つの見方だ。隨分亂暴な見方だが眞實の見方だ。どうだらう。本たうに、本たうのことをやつても構はないだらうか。」と、小倉は未だ考へを決め得ずにゐるのだつた。

「藤原の云ふことは、昨夜の女の云つた處と、どこか似てる處があるぞ」と、小倉は、この時フト思つた。「あの女は賣玉だ。だが、今はそれ處ぢやない。だが、あの女が俺のことを『三上さんよりも眞面目よ、あんたは』と云つたつけなあ、だがそれや全くだつた。俺はどうだ、自分のことさへ自分で考へが全つきりつかないぢやないか、三上は一人で立派にやつて行つた。俺には、俺の頭に反いて、尻尾を振るブルジョア的の取引氣分があるんだ。それが、すつかり、俺を臺なしにするんだ。俺は何故藤原君の云ふやうに、頭の命ずる通りに動かないのだらう、あゝ、矢つ張り俺は蛞蝓なんだ！ 俺は、勞働者階級の悲慘を、決斷と勇氣と犧牲のないことに歸してゐるが、就中、この俺がその中の最なるものだ。勞働者階級を、裏切る唯一の卑怯者の典型を、俺は、俺自身の中に見出した。俺は、思想として全體を憤慨する前に、俺自身の恥さらしな、臆病者の、事大主義者の、裏切者、利己主義者の、資本主義の番頭の俺を、先づ血祭に上げねばならぬ。俺は、俺の村を、ブルジョアの番頭になれば、救へると云ふ謬見を捨て去るべきだ。俺の救はなければならないのは、俺の村だけぢやなくて、この地上の一切だ」

小倉は元氣よく、全で今にも、ブルジョアに出つ會しさへすれば摑みつきさうに、かく考へたが、それは彼には絶對に不可能な事であつた。彼は、依然事大主義者だつた。一切が腐つてしまつても、關はない、あればそれで、安心なのだつた。

小倉はその性格が煮え切らない處から、この事件の進展に對し、何等の役目を勤めることの能きない一の木偶の坊に過ぎなかつた。

三上が船長に與へた、侮辱は、下級船員全體への復讐の形を船長によつて取られた。

そして、この事が、こゝに述べる處の、同盟罷業を惹起した。ブルジョアの番頭的、プロレタリア！ 船では、ブルジョアは決して傭主としてのその姿を勞働者の前へ現さなかつた。

三三

三上は、傳馬を押して、一度神奈川沖まで出たが、又引きかへして、堀川へ入つた。彼は、神奈川沖へ出た時に、傳馬にペンキで書かれてあつた萬壽丸を、シーナイフで削り取つてしまつた。

彼は、翁町の、彼が泊りつけのボーレンの、サンパンの繋がれる場所へ、その傳馬を繋いだ。

そして、小林と云ふ、そのボーレンへ、のこ／＼上つて行つた。

ボーレンの親爺は、笊のやうな彼の唯一の財産なるサンパンに、チャンス取りに泊つてる宿料なしの水夫を船頭にして、沖へとチャンスを

取りに出かけた留守であつた。

をばさんはゐた。下手な田舍芝居の女形を思はせる色の黒い、痩せたヒヨロ／＼の、南瓜の萎びた花のやうな、女郎上りのをばさんだつた。一口に云へばサンマのをばさんだつた。このをばさんである。

このをばさんは親爺のおかみさんではなかつた。おやぢの世話で船に乗つて、今外國船に乗つて、この四年程前ハンブルグから、近い中に歸るといふ手紙と、金二百圓とを送つて寄越した水夫の、おかみさんだつた。

そのおかみさんが、今歸るか、今歸るかと待つてゐる中に、二百圓と一年とが消えて失くなつてしまつた。そこで、三年許り前から、やもめの、このおやぢのところへ、飯炊きに來て、亭主の歸るのを「網を張つて」待つてゐるのであつた。

「まあ、三上さんだつたわね。どうしたの、いつ入つたの？」

三上が、のつそり入つたのを見たをばさんは、長火鉢の前に吸ひかけの長煙管を置いて、くるりと入口の方を振りかへつて、さう云つた。

「おやぢはチャンス取りか」三上はブッキラ棒に訊いた。

「えゝ、不相變、急いでるの？　それともゆつくり出來て？」とをばさんは訊いた。

「急がねえよ、上らして貰はう」と云つて、彼はもうそこへ上つてるんだつたが、長火鉢の前の座蒲團の上へ上らして貰つて、をばさんの長煙管で、スパ／＼と煙草を吸ひ始めた。

「隨分御無沙汰ね、三上さん。あつちにはこんなに御無沙汰しやしないでせう。憤られるからね」

「黄金町？　遠航海さ、おやぢは遲くなるだらうね。今幾人ゐる」

「十一人、暮に迫つて、口はないし、入る處はないし、親爺さん、困つてるよ」と指で丸を拵へて見せた。十一人の船員たちが今休んでゐるのであつた。

「をばさんの御亭、未だ歸らないかい？」三上は訊いた。

「歸らないよ、未だ。向うで髪の毛の赤い、青い眼の女房でも持つてるだらうよ」

「その積りで浮氣をしてゐると、えらいことになるぜ。ハッハヽヽ」

「相手さへあればね。ホホヽヽ」

「俺は下船したんだから、當分厄介になるよ。頼むよ、いゝかい。チヨット出かけて來るから、親爺が歸つたらさう云つといてくれよ」三上が頭を掻いてゐると、

「そして荷物は？　小屋？　親爺さんこの頃工面がよくないんだから、十でも十五でも入れないと、駄目だよ。分つてるね」と、をばさんは、駄目を押した。前金を十圓か十五圓は入れなけりや、迚も置かないと云ふのであつた。

「大丈夫だよ。そんなこたあ、云ふだけ野暮さ。ヘッヘッヘヽヽ」三上は表へ出て行つた。

彼は近所の質屋へ行つた。それは彼の常取引の質店であつた。

「いらつしやい、暫くで、お品物は？」と主人は訊いた。

「實はね、品物は此處まで持つて來られないんだが、二日だけ、傳馬で金を借りたいんだがね。ボースンが、融通して貰つたところへ、現金を返すんだが、それが今足りないんだ。船は今ドックに入つてる××丸だから、傳馬を返してあるんだ。それで、二日許り借り度いと云ふんだがね。利息はいくら高くても構はないつてんだ。どうだらう。見に行つて貰へないかね。そこに繋いであるんだが」三上は、これを昨夜傳馬に乗る前から計畫してゐたのであつた。そして彼は、その計畫を完全に信頼してゐたのであつ

た。

「傳馬ぢやちよつと困りますね。癪に入りませんからね。それに船の傳馬ぢや猶更、何とも仕方がありませんね。どうぞ、それはまあ、何かまた別な品ででも御座いましたら」主人は一も二もなく斷つてしまつた。

三上は、驚いた。彼は驚いたのである。彼は、未だ今度の事ほど綿密に、長い間かゝつて、企てたことは無かつた。それは港内に碇泊してゐる頃からの計畫であつた。その計畫は、サンパンを占領すると云ふ點までは、彼の計畫通りに進行したのである。であるのに、最後の點に至つて、これ程何でもない問題が拒まれると云ふ、その事が彼を焦かした。「だが、この家は傳馬を扱ふのに慣れてゐないと見える」と、すぐ、彼は思ひかへした。

「さよなら」彼はそこを飛び出した。そして今までより少し彼は慌てゝ歩いた。彼は歩きながら、これほどの船つき場でありながら、一軒もサンパン屋が店を出してゐないことを不便がつた。「國でさへ中古ん家店を出してるのに――」

彼は全く殘念であつた。

彼はその日一日、ありとあらゆる店屋で斷られ、質舗屋で斷られ、全く惨めな氣持になつてしまつた。

「傳馬は賣れねえや、急には目だな、だが、親爺になら賣れるだらう」小突きまはされた犬のやうに、身も心もヘトヘトになりながら、彼はボーレンの親爺を目標に持つて來た。彼には絶望がなかつた。

彼は夜中一時頃、ボーレンの表戸を開けた。

おやぢは起きてゐた。そして、彼が上つて行くのをじろりと睨めた。三上は、長火鉢の前へ、坐つて、煙草に火をつけた。そこは六疊の間であつた。隅の方には、船員が二人寢てゐた。

おやぢは暫く默つて、これも煙草を吸つてゐた。

「おやぢさん。俺あ今日下船したぜ。又、暫く賴むよ」三上は切り出した。

「下船したつて、又船に乘る氣なのかい」おやぢは妙な風に返事をした。

船乘りが、下船してボーレンに休めば、次の船に乘るまでの間、そこに休んでその間に、口を探すのが、その唯一の道であつた。

「あゝ、萬壽丸にやもう倦きたからなあ、今度は本たうの遠洋航路だ」どうも、だが、おやぢな樣子が怪しいぞ、今日萬壽に行つたんぢやないかな、と思つたが、能きるまで白つ惚けた方がいゝと思ひついた。

「さうか、遠洋航路もいゝだらう。だが、遠洋航路は履歴が美しくないといけないな。おまへの手帳を一寸見せな、預つとかう」

手練の手裏劍見事に三上の胸元を刺した。

「あ！ 船員手帳！」と驚いて三上は脚を叩いた。「船に忘れて來たぞ」

「冗談云つちやいけない。三上、俺は今日萬壽丸で、すつかり樣子を聞いて來たんだぞ。いゝ加減にしろ、傳馬まで乘り逃げやがつて。どうしたい傳馬なんか」

「えゝ！ からなりや癪だ、云つちまへ、畜生！ 傳馬は繫いであるよ」

「どこにあるんだい」

「おやぢのサンパンの繫いである處さ」

「何だつてあんな邪魔つけなもんを、のろのろと漕いで來たんだい」

「賣り飛ばす積りなんだ」

「買手はある積りかい」

「賣り物だつたら買手もあらうぢやないか」

親爺はもう三上と「眞面目」な話をすることは止めた、と決めた。が、それにしても、こんな野郎に「踏み止まれちや」商賣が上つてしまふのだつた。

「お前も横濱ぢや迚も駄目だから、神戸へでも行つて見たらどうだね、そのサンパンに乘つてさ。えー」

「俺あ、萬壽が歸つて來るまで待つてるよ。濱で。船員手帳は俺のだからなあ」

「萬壽の船長は、お前を監獄に放り込んでやると云つてたさうだぜ」

「船長が、無しにさうはしないだらうよ。俺が監獄へ放り込まれる前に、奴が海ん中へ叩つ込まれるだらうよ」

「お前は、船長を、なんとかしたつてえぢやないか、海ん中へ叩つ込むつて云つてたつてえらいことをやつたさうだなあ、だが、おもてはみな大喜びだつたぜ。何だつたつて船長はえらい、やる時になりやあの位やる奴あないつてさ。だが、少し氣をつけないといけないぜ。もう、お前は横濱を離れてた方がいゝんだがなあ。どうだい神戸か長崎へでも行つて見ちや」

「おやぢ、船員手帳を取つて來るかい？」

「それを取つて來てもいゝが、濱になるだらう。俺んとこに、あれよりもよつぽどいゝ履歴のがあるから、それを持つて行けよ」

三上は、別人の手帳を持つて、別人になつて、神戸へ行つた。藤原は、ボーレンのおやぢが預つて、萬壽が入港したら返すことにした。

船員の雇入れは、その手續が全く面倒であつた。極めて、嚴格なる手續の下に、極めて嚴重に取締られて、そして、彼等程搾取される勞働者は、多く他に例を見ないのであつた。例へば、三上は五年間汽船に乘つてゐて、漸く月給十八圓になつた許りであつた。話にならないのだ、全く！

而も、それに對して、命はおほつぴらに投げ出してあるのだ！

二四

北海道炭坑行きのホイツプ！それを、萬壽丸は、横濱から、室蘭への航海に、そのガラン洞の腹の中に喫ひ込んだ。それは甚だ手間の取れる厄介な積込みであつた。だが横濱には、そんな積荷の荷役に馴れた仲仕は澤山あつた。從つて、水夫たちも安心して、その作業を手傳つた。それに、[illegible]トもそれ等のことを知つてゐたから、それほど骨折もしなかつた。

珍らしい荷物であつたので、退屈を紛らし、單調を破つて、その積込みの始まつた時は、何だか、愉快なことでも爲し遂げたやうに、水夫等は感じた位であつた。

横濱から、室蘭へは、萬壽丸は、その新造船が室蘭から横濱への時の三倍の大きさに見えた。と云ふのは、荷が無いから、全でその赤い腹の殆んど全部を剝き出して、スクリューで浪を蹴つ飛ばしながら滑いで行くのであつた。從つてデッキから水面までの距離が、うんと遠くなつた。おもての淡水ポンプは、まるで空氣ポンプのやうに、シューシューと云ふ許りになつて了ふのだつた。

かうなると、便所掃除人、波田は實に、その作業を百倍の困難さにされてしまふのであつた。彼は、そとまで、淡水ポンプを汲みに行くか——それは見つかると大變八釜しかつたから、——その方法は餘り取れなかつた——又は、石油罐にロープを結びつけて、海から吊り上げるのであつた。これは全くいやなことだつた。僅か石油罐一杯の水が、それ程重く、それ程いつまでも途中で、愚圖々々してゐなくてもよささうなものだと思はれるのだつた。これを吊り上げるのが億劫さに、夕方、便所に水を流すことを怠けると、パイプに一杯の糞尿が溜りついてしまふのだつた。それが凍りついた日には、波田は字義通りに糞を掴む——糞では濟まない日に會ふことを糞を掴むと云ふのであつた。

パイプ——直徑一尺位の鐵管——は下水

滴が、その儘沖つたやうな形に於て凍るのであつた。それが凍つた際は、波田は、何よりも先づ機關場へ下りて行つて熱湯を貰つて來るのであつた、機關場から、おもてまでの距離の遠さよ――、第一、罐場までの上り下りが、大變であつた。殊に、熱湯の一杯入つた石油罐をブラ下げて、それを一滴も溢さないやうに、渡すと下手で火傷するのだ、その辷る鐵の油だらけの梯子を昇らなければならなかつた。これは周到な注意と、萬全の用意とでなされた。彼は、それだけの作業、バケツを持つて下りて、辷らぬやうに溢さぬやうに、昇つて來る、それだけの作業を、夏の土用よりも熱い思ひで汗を滴らし、罐場を一足出るとすぐに、凍つた便所の作業に移らねばならなかつた。

彼は熱湯と竹の棒とで、化學的及物理的の作用を應用して、頑固に凍りついた兄弟たちの汚い物を掃除する。

彼は熱湯を打つかける前に、竹の箒を以て、猛烈に物理的操作を試みた。――物理的操作とはセコンドメートルの口吻を借りたのである――そして、彼の分子と分子とが摩擦熱を生ずる時に於て熱湯を――この時決して物惜しみしてチビチビ注いではならない、思ひ切つて――どつと一時に打ち空けるのである。

と、忽ちにして、甚しい臭氣が、發煙硝酸の蓋でも開けたやうに、水蒸氣と共に立ち昇る。そしてこの水蒸氣が發煙硝酸と同じく、その煙までも黄色であるやうに感じられる。そして、この濛々たる蒸氣と臭氣とに伍して、ドーッと音がすれば、それは、汚物が流れ出した證據である。若し不幸にして音が伴はなかつた場合は、波田はそれと同じことを、幾度か繰りかへさなければならない。

波田は、その熱湯を汚物の壺の中へ注ぐや否や、彼は竹もバケツもそこへ打ち捨てゝ置いて、サイドから、汚物の飛び出す、スカッパーの活動の壯觀を眺めに行く。

それは汚ない仕事であつた。そしていやな、困難な仕事であつた。それは丁度われ等が便所へかゞむのと同様不愉快なことであつた。それは又、[illegible]く、一切が押し出すことは、われ／＼が便所へかゞんだ時と同様、腹の中が綺麗になることを意味し、且つ快いことであつた。

波田はスカッパーから、太平洋の波濤を目がけて、飛び散つて行く、汚物の瀧を眺めては、誠に、これは便所掃除人以外に誰も、味へない痛快事であると思ふのであつた。

「これで俺も氣持がいゝし、誰もが又氣持がいいわい」波田は、その着物を洗つて乾すために、罐場へ行つた。

そして彼は、その汚れた着物を洗ふ間に、「若し神が在るなら、糞壺にこそ在るべきだ」と思つた。

何故ならば、若し神や佛が在るとしたならば、彼等が愛する處の人間が豚小屋に住み、或は寺院の床下に、神社の縁下に住む時に、どうして、自分だけが、そんなだだっ廣い場所を獨占することが能きようか？若しもさうしてある神佛でもあるならば、それは岩見重太郎によつて退治されねばならない神佛であつて、決して讃物ではないのだ。今は、神佛よりも、床下である、き人間でさへ、萬人がパンを得るまでは誰も菓子を持つてはならぬと云つてゐるではないか、神は正に糞壺にこそ在るべきだ！

波田によると神は恐ろしく、汚ない處にもゐる必要があつた。

「俺は便所に神を見た。それ以外で見たことがない」と波田は、いつ、どこででも主張するのであつた。

で、その神樣は、俺のによく似た姿の葉を着

て、俺より先にいつでも便所を掃除してる！それは労働者だつた。賃銀を貰はない労働者の形をしてゐた！」と。

「で、若し、神様が、労働者でもなく、便所にもゐなかつたら、俺は、運も上陸して寺院や神社なんかへ、パンを、探しにたかぞ出かけてはゐられないんだ。人間から現實のパンを奪つて精神的な食べられもしない喰も與れない、パンなんぞそらと云つてごまかすのは神ぢやないんだ。それはヤソのアか、その種類だ」

これが淺田の宗教觀であつた。

「その精神的賃銀を月八圓宛と、得てゐては、そのまゝ、淺田君なんだかなあ、惜しいことには、たつた一つ遊ぶことで困つたね」藤原はさう云つて笑つたものだ

船には、宗教を信ずるものは一人も居ないと云つてよかつた。ボースン、大工、この二人だけが、幕府時代だけ寝臺の下の抽出しの中から、金刀比羅大明神を引つ張り出して、利用した。彼等は若し、それもいくらかでも役に立つなら、利用しなければ損だと習慣的に考へたのであつた。

梭子・以下は[illegible]であるが、超人間的な何か「佛」のやうな物に頼りたい氣は、人には、特に船員などにはあり得たのであるが、而も彼等は餘りに馬鹿々々しい、それ等のものを信じる氣にならなかつた。宗教は今では全く下らないものであるか、又は、その正體を胡魔化すための神學や經典で、曖昧に義務的に職業化されてゐた。宗教は今や高利貸や、マーダラーの手先になつたり擁護人になつたりすることに依つてのみその生命を辛うじて保つてゐるにすぎなかつた。

話は飛んでもない傍路へ外れたものだ。

二五

萬壽丸は、室蘭の荷役を早く濟まして、碇泊中そこで船のマストや何かをすつかり塗つて、横濱へ歸つて正月をする豫定であつた。そしてその豫定は、一切のプログラムを最大速力でやつて、順當に行けば、辛うじて大晦日の晩横濱へ着くのであつた。

そんなわけであつたから、わが、團扇の様な萬壽丸は、豚の様な體を汗だくで、その全速力九ノットを出してゐた。そしてこの大速力の爲めに、船體はハシフィッツィーンのエムロシアが、全速を出した時の様な、自己の重さをブルノヽと感じながら飛んで行くのであつた。何故、たつた九ノットの速力でゆれるかと云へば、わが萬壽丸は、なるべく多く石炭を積張るべく、デッキから、ボットム迄、どちらを向いてもガラン洞で、支柱がないためなのだつた。それはフットボールの内部のやうなものだつた。

冬期の北海は霧が甚しかつた。汽船で鳴らす霧笛、燈臺で鳴らす號砲のやうな霧信號。海へ轉り込んだフットボールのやうな萬壽丸は、霧のために、目隱しをされたものであるから、九哩の速力をどうしても、もつと下げなければならない筈であつた。けれどもそれは、正月のことを考へる時に、船長はこれから上速力を下げる譯には行かなかつた。その代り彼は無暗矢鱈に霧笛を鳴らした。

それは何かの事變の前兆を知らせると云ふ、犬の遠吠に似てゐた。それを聞くものに、きつと不安な豫感に似たものを吹き込まねば置かぬ音色であつた。同じ汽笛でも、出帆の汽笛は威しく、入港の汽笛は、元氣よく勇み立つた様に聞えるものだ。霧笛の場合は同じ汽笛でも、不吉な、落ちつかない、何だかソハノヽした氣持に人を引き込んだ。自らその餘韻を曳いてゐる船長自身が、その音色に追つかけられるやうに後から後からと、餘韻を曳いた。霧笛は、益々深く、

人から景色を奪ふ霧のやうに、その心から光と落着きとを奪ふのであつた。

精密なる海圖と羅針盤とがあるとは云へ、又それが、目高が溝に泳ぐやうな北側で海が廣いとは云へ、兎まれ先が見えないと云ふことは、安心のならないことであつた。殊に水夫等にとつては、全で盲人が杖を擔いで、文字通りに盲滅法に走つてゐるやうに思はれるのであつた。

西澤と波田とは、ブリッヂに上つて、小倉の舵取りを見學してゐた。

自動車の運轉手がそのハンドルを絶えず、運轉してゐるやうに、汽笛の先端も、前のコンパスと睨めつこをしながら、絶えず、舵をそれ[illegible]されてゐた。

一時間七ノットの速力も、この船全體をその霧力の下に支配する、船長の心理に及ぼす影響は、このブリッヂに相つて、一聲の[illegible]であつた。一體これが[illegible]下である時に、決して緩い速力ではなかつた。[illegible]小さな船も彼にとつては[illegible]であつた。[illegible]くかけた時は、船長は、二千[illegible]の[illegible]を、二萬噸に[illegible]して見ることも[illegible]。[illegible]ならば、船全體[illegible]、[illegible]を以てぼかされ、[illegible]するから[illegible]てあつた。

暗がりの中で、誰も見てゐないと知ると、急にに[illegible]許り威張つて、警察署長のやうな恰好に歩いて見ることが、大抵誰にもあるやうに、萬壽丸は、巨船の如くに氣取つて航行してゐるやうに見えた。

が、それにしても不思議であつた。室蘭港口に[illegible]をしてゐる大黒島は、もうそこに來てゐなければならない筈の時間であり、コムハスであり、海圖であつた。にも拘らず事實は、大黒島の燈臺も霧信號音も、見えも聞えもしないのであつた。

わが萬壽丸は七ノットのフルスピードを以て、船長自身ブリッヂに立つて、小倉の舵を命令してゐた。

波田と、西澤とは各々熱心に如何にして汽笛の舵を取り、その方向を保つて行くか、と云ふことを眺め、心で研究してゐた。

彼等は、何も見えない濃霧の中を、コンパスと海圖とにて、夢中になつて進んで行く船が不思議でならなかつた。

萬壽丸は、その哀れな犬の[illegible]を、絶えず吹き鳴らしながら、[illegible]して進んで行つた。

[illegible]の上に、[illegible]が、その[illegible]を[illegible]き始めた。

一切のものが今にも失明しようとする者の、最後の視力のやうにボンヤリしてしまつた。

と、突然、ブリッヂに立つてゐる者は船長から、波田に至るまで急に飛び上つた。怖ろしい速力を持つた巨大な軍艦が、その主砲を打つ放して、その轟音と共に、この哀れな萬壽丸の舳を目がけて、突進して來たのであつた。それは全く咄嗟の場合であつた。

[illegible]ハーミホール」と船長は、舵機を操つてゐる小倉の前へ來て、飛び上り様叫んだ。その聲は絶望的にブリッヂに響き渡つた。

機關室への信號機は「フルスピードアースターン」全速後退を命令して、チン／＼チン／＼とけたゝましく鳴り渡つた。

船長初め、小倉等ブリッヂにある者達は打つ侍けた[illegible]覺悟してゐた。

波田に西澤は、何たかまるで訳が分らなかつた。

これ等は息をつく暇もない瞬間に一切が行はれた。そして、本船はヂノと廻つた。波田も西澤も、船長までもが、その[illegible]れに拘らずよろめいた[illegible]。そして、今にも衝突しさうに思つた、山のやうな怪物、――それは軍艦だと波田と西澤は思つてゐた――は全速力を以て、全

で風のやうに左舷の方へ消え去つた。と、その怪物からは續け樣にドンドン／＼と轟然たる砲聲が放たれた。

哀れなる小犬の樣なる、わが萬壽丸は、今は立ち竦んでしまつた、云はゞ、腰を拔かしたのである。無暗に非常汽笛を鳴らし、救を求め、そこへ錨を放り込んだ。

今、これほど萬壽丸を驚かした、軍艦のやうに速力の速い怪物は、百年一日の如く動かない大黑島であり、大砲は霧信號であつた。

わが萬壽丸はその二十間手前まで九ノットの速力で、大黑樣のお尻の邊を覘つて眞一しぐらに突進して來たのだつた。

危かつた。錨が入るゝ、皆は、期せずしてホツとした。

大黑島の燈臺では、亂暴にも自分を目がけて勇敢に突進して來る船を認めたので、危險信號を亂發したのだつた。幸にしてこの無法者は、間際になつてその亂暴を思ひ止まつた。

萬壽丸は動いては危いと許りに、立ちすくんだ盲のやうに、そこに投錨して一夜を明すことになつた。

[illegible]なる一夜であつた。船も高級海員もソハ／＼してゐた。おもてのものだけは、一夜を樂に寢ることが能きた。

二六

翌朝萬壽丸は、雪に照り映えた、透徹した四圍の下に、自分の在所を發見した。それは頗る危險な處へ、彼女は首を突つ込んでゐた。

船員達は、自分の目の前に、手の屆きさうな處に、大黑島の雪に蔽はれた、鷲の爪のやうな岩石に向き合つて居り、左手に一體に海を黑く、魔物の眼のやうに染める暗礁を見出した。

彼女は、その醜體を見られるのが恥かしさに、拔き足さし足で早朝、何食はぬ顔をして、室蘭港へ入つた。

直ぐに石炭積込用の高架棧橋へ横付になるべきであつたが、ボイラーの荷役の濟むまでは沖がかりになるので、室蘭灣の殆んど眞ん中へ、今拔いた許りの錨を何食はぬ顔をして投げた。

萬壽丸が屬する北海炭山會社のランチは、直ちに勢ひよくやつて來た。

とも、おもてのサンパンも、赤毛布で作られた厚司を着た、囚人のやうな船頭さんによつて、漕ぎつけられた。沖賣らうの娘も逸早く上つて來た。

水夫達は、ボイラー揚陸の準備前に、朝食をするために、おもてへ歸つて來た。

食卓には飯と味噌汁と澤庵とが準備されてある。一方の腰かけの隅には、沖賣らう――船へ菓子や日用品を賣込みに來る小賣商人――の娘が、果物や駄菓子などの入つた箱を積み上げて、いつ開かうかと待つてゐるのであつた。

船員は、どんな酒好きな男でも、同時に菓子好きであつた。それは、監獄の囚人が、晝飯の代りに食べるアンパンを持つて通る看守を見て、看守はアンパンが食べられるだけ、この世の中で一番幸福な人間だと思ふのと同じであつた。監獄と、船中に於ては、甘いものは、ダイアモンドよりも貴かつた。

波田は、その全收入を擧げて、沖賣らうに奉公してゐた。彼は、船員としての因襲的な惡徳には染みない性格であつたが、「菓子で身を持ち崩す」のであつた。彼は極めて貧乏――月八圓――であつた。それだのに、彼は金つばを三十位は、どうしても食べないではゐられないのであつた。然し、財政の方がそれほど食べることを許さないのであつた。彼は沖賣らうがいつそのこと來ねばいゝにと、いつも思ふのであつた。そのくせ沖賣らうの來ない日は、彼は元氣がないのであつた。全く彼は甘いものに身を

持ち崩すのであつた。

この場合に於ても彼は、ソーッと、自分の棚から、状袋を出して、その中に五十錢玉が一つ光つてゐることを見ると、非常な誘惑を菓子箱に感じた。

「どうしても俺は仕事着と、靴が一足要るんだがなあ」と考へはしたが、彼は、その全收入を菓子屋に奉公する爲に、仕事着は、一着つきり、靴はなく、如何な寒い時もゴム底足袋の、バリ／＼凍つたのを履いてゐた。そして、ボースンの、ゴム長靴のペケを利用して、その踵の部分だけを、ゲートル流に履いてゐるのであつた。も一つ、彼が菓子以外に如何に金を出さないか、——出せないかと云ふことを知るには、彼の頭を見ればよかつた。全でそれは「はたき」のやうに延びて汚れ切つてゐた。ボースンはそれを氣にして、彼に、特に、一圓を理髪代として貸した——菓子屋が來た時に彼は月二割の利子を貪る處のボースンの金を、一圓借りたのである、ボースンも彼には菓子代は決して貸さなかつたが、波田は理髪代と云つた——彼はそれで、一度に金つばを食つてしまつた。

彼は、神様を便所から見つけたが、菓子箱には貧乏神が[illegible]、然し、正月になれば、それも何とかなるだらうさ、くよ／＼したものでもないや—

彼は自分に言ひ譯をしながら、沖賣らうの姐さんの所有に屬する、菓子箱へと近づいた。

「どうだね、うまい菓子があるかね」

「みんな、うまいかすだわね」菓子屋の姐さんは、東北辯全出しで答へた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

室蘭では、東洋軒と云ふ、室蘭一の菓子屋が作るだけであつた。彼はそのケークホールへ、その恰好で平氣で押しかけるのであつた。

碌に食べた氣のしない中に波田は五十錢の豫定額だけを食ひ盡した。それ以上は借款によるより外に道がないので、彼は止むを得ず、小倉が歸つて來るまで待つことにした。

波田にとつては、一切の慾望の最高なるものを菓子が占めてゐた。

若し陸に上がるとすれば、沖賣らうの姐さんは、ボースンと、大工と、[illegible]との共同戰線の下に、可哀想に苛められるのであつた。彼女は、それを世話で、二重に[illegible]をはいて、本船へ、彼女のパンを得べく沖賣らうに來るのであつた。

彼女は、實に氣の毒な程醜かつた。それは形容するのが悽慘な位に醜い女であつた。年は二十三四位に見えた。彼女は、女に生れたことが全く不都合な事だつた。彼女がその髮を延ばして置いて、鏡に向つてその髮を結ぶ時に、きつと彼女は自然を呪ふだらうと想はれた。彼女と一緒に本船の火夫室へ來る沖賣らうは、彼女とは全で違つてゐた。年は同年位であつたが、彼女は北國に見る美人型であつた。

彼女は、水夫たちから、殊に、彼女を見るも氣の毒な位に恥かしめる、ボースンや大工等は、彼女が、印度猿によく似てると、むきつけて、さうであることが、不都合極まることのやうにほんきに、彼女を罵倒し、そして恥かしい目にからかつた。

彼女は、それでも一緒になつて、キャッ／＼とはしやぎながら、自分の商賣の菓子箱の覆るのも忘れて、抵抗したりふざけたりするのだつた。

彼等は、薄暗いデッキの上を、小犬のやうに轉り廻つてふざけてゐた。

彼女が菓子の外に、彼女の肉をも賣ると云ふことを、波田は耳にしたことがあつたが、それ

ないんだなんて云つてゝよ。そして、済まないが兎に角明日の朝まで待つて呉れるやうにつて云つて、そのまゝ寝てしまひなすつたわ」

「あゝ、いゝよ。それおや僕も泊らせて貰はうか。姐さん、僕はね、姐さんが嫌ひでなんぞないんだよ。抱きしめて、キッスしたい位だよ。だけど、僕にはね、僕が愛してゐると同じやうに僕を愛してる人があるんだよ。だから、僕は一人で寝るから、姐さんは、帳場の工合が悪かつたら、床を二つ敷いて、並んで寝ようね。そして寝物語りに、姐さんのほんとの愛人の話でも聞かうか」と云つて、淋しく氣の毒さうに小倉は笑つた。

「まあ！」と立つて床を延べようとしてゐた女は、急に小倉の膝の上につゝ伏した。そして泣き入るのだつた。小倉はびつくりした。

「どうしたの——一體、え、そんなに帳場に都合が悪けりや一緒だつて、些も構はないから、泣くのはお止しよ。ね」

小倉は女を起さうとした。女は起きなかつた。そして一層泣き続けるのだつた。

「およし、ね、泣くのはもうお止し。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなければ分らない。泣く程の事があるんだつたら膝とも談合つてこともあるから、僕にでも話して氣が紛れないこともないかも知れない。迚も力にやなれまいけれど、若し役に立つことがあつたら、役に立つから、泣いて許りゐないで話して御覧な。ね、僕明日の朝早く歸らなきやならないんだからね。未だ二三日か四五日は碇泊してるから毎日にでも来るから、ね。サア、床を敷いてお呉れ」と云つて、小倉は女をその膝の上から抱へ起した。

「えゝ、今、床を敷くわ、一寸待つてゝね、片附けるから」ハンケチで眼を押へて淋しさうに彼女はそこらの食べ散らしを片附け始めた。小倉も彼女に手傳つて、七輪などを傍へ寄せた。

二〇

寝床はそこへ敷かれた。それは一つであつた。枕も男枕が一つッ切りであつた。

「どうしたんだい、お前さんは何故泣いたりしたんだね」と小倉は、そのまゝ床の中へ潜り込みながら、氣の毒さうに訊いた。

「妾はね。この家へ来てから、あんた見たいな人に會つたのは初めてなの。初めの間は、妾もあなたを「お客」だと思つてたの」と云ひながら、彼女は枕下の火鉢の前へ、生娘がするやうに、慎しく坐つて、はにかみながら話した。

「だけど、だん／＼話したり、聞いたり、見たりしたりしてる中に、あなたは船乗り見たいぢやないやうに思へて来たの。妾ね、かう思つたのよ、この人はきつと間違へてこゝへ入つたんだ。さうでせう。ほんとに牛肉のすきやきだけしか食べられない處だと思つて来たのでせう。さう云ふ人の前へ出ることは妾たちには恥だとはあなたは思はないの。相手が野獣であるときだけ、妾達だつて野獣にもなれるのよ。妾達は、何でも呪つてやるわ、何でも、神様や佛様なんて、夙くの昔に、呪つて、妾は側に寄せ附けないやうにしてるわ。だけどもね、妾達の家に、妾達の肉以外のものを、全で坊ちやん見たいな、素直な氣持で求めに来たあなたには、妾達の氣持は分らないでせうね。

妾達はね、あなたのやうな人を見ることはないのよ。監獄に入つてる女の人が、男の人を見ることよりも、もつと／＼、ずつと、妾たちが、あなた見たいな人を見ることの方が勘いのよ。それはね、男の人は、皆獣だからなのよ。

えゝ、全く獣なのよ。妾はさう斷言能きてよ。だけどね。それや男の人の罪でもないんだわ。それはね、神様や佛様の罪なんだわ。さう

でせう。ね、自分で人間を作つて置いて自分でこれはいゝあれは悪いと決めて置いて、そして、自分の作つた人間を、自分の作つた罪悪の中へ、分で勝手にでも落すやうにして、嵌め込んでしまふのは、それや神様の責任だわ。だから、妾の恐いのは、神佛ぢやないの

「おや何が恐いんだね、」小倉は眠くて堪らなかつたが、女の珍らしい言葉につい昂奮されて起きてゐたのだつた。

「妾寒いから、あなたの傍へ入つてもいゝでせう。ね、たゞ入るだけなのだから、ね、いゝこといひながら、女は帯も解かずに小倉の寝床へ入つて来た。そして床の隅に小さく黄金蟲のやうに固まりながら、

「妾達はね。ほんとに心から愛さうと思ふ人を見附けることが能きないのよ。

妾たちが、第一、選り好みする事がいけないつて、あなたも考へて？ 妾たちだつて、何かを見分ける力を持つことが悪いつてことはないでせうね。よし悪くつても、それはあるものなんだわ。だから妾達は、心から人を愛するつて云ふことは能きないのよ。だけどもね、それは妾たちの愛するだけの「價値」のある男がこの世の中にないつてことぢやないのよ。さう云ふ人もあるのよ。たゞ、さう云ふ人もあるのよ。そしてね、随分癪にさはることはね、それは全く腹の立つ、癪に障る生意氣なことなのよ、さう云ふ男はね、妾たちが、ほんとにしんみりして、その人と愛し合ひ度いと思ふ様な、さう云ふ人はね、いつでもきつと極り切つて馬鹿なのよ。馬鹿でのろまで、ぼうつとしてるの。でさう云ふ男はね、妾たちがその男を愛してるつてことが分らないのよ。そしてまた、その男は随分馬鹿ね。妾たち見たいな女は、男性を愛することは職業的以外に能きないとでも云つたやうに、無關心なのよ、全く、馬鹿につける薬つてものは昔から、どこにも無かつたのね

彼女は、全で夢遊病者か何かのやうに、天井を向いたつきり、その大きく開いた眼を、自分の頭蓋骨の内部でも凝視してゐるやうに、ぢつと据ゑて、熱に浮かされてるやうに、早口に、熱心に、そして、一人で小火を消しでもしてるやうに焦つて、慌てゝ話した。そのくせ、彼女の體はそこへ、鋲でねぢつけられでもしたやうに、動かなかつた

小倉は、よく話が分つた。そして、自分が、氣取り屋で馬鹿であることを、十分にこつぴどくやつつけられてゐることも知つてゐた。けれども、それにしても、何と云ふ聰明な女だらう」と、彼はもうすつかり眠氣を奪はれてしまつて、女の言葉の方向の動くがまゝに、その疲れ切つた意識を引摺り廻され、血みどろにされるのであつた。

「そして、ね、そんな馬鹿げたことは、ある筈がないのだけれどね、妾たちも、又、馬鹿なのよ。何故だと思つて？ それはね、妾達はいつでも極り切つて馬鹿だけに惚れるのよ。その馬鹿はね、いつでも極り切つて、戸惑ひした雀のやうに間違つて飛び込んで来るだけなのよ。ホホヽヽ、ね、小倉さん、あなたは御自分が賢くつて品行のいゝ、船乗りには珍らしい、堅い、善良な、そしても一つあるのよ、人類のためになる人間だと思つてるのね。ね、さうでせう。さうよ、さうよ、妾にはね、あなたが自分で知らないことまで分るんだわ。だから、まあ聞いてらつしやい。だけどね。小倉さん。あなたは、それだけぢや三上さんよりも、未だ駄目な、役に立たない穀潰しよ！ 分つて。世の中にはね、この汚れた世の中を些とも良くしようとしないで、益々悪く、腐らせて行くためにだけ努力してゐて、それでゐて自分は點の打ち處のない善良な人間だと思つてる人が澤山あるのよ。帽子を

キチンとかぶつて、几帳面な、ガキ〳〵と歩いて、一錢も人から借り倒さないで、乞食には、きつと一錢――一錢より少くも多くもないことよ――それつばかしだけやつて、女と云へば、おかみさんだけしか知らないで、それも、全で家の雜巾と同樣に無趣味に乾し上げて、ね、若い中から、決して女郎買などしないで、その代り、小倉さんは航海學を讀んでるでせう。そして、高等海員の免狀を受けようと目論んでるわね。勉強してることね、あんたは。ね、いゝの、あんた見たいに、勉強して、そして、階段を上らうとして骨を折るのよ。だけどね、その階段はね、滅亡への階段つてのよ。分つて。それをうまく昇つても、その階段自身が滅亡する運命になつてるし、それが又在る間は、その階段を支へる土臺の方で、無數の人間が失はれる滅亡の階段つてのよ。その階段てのが、一切の原なのよ。ね小倉さん。實は、ありもしない幻の階段のために、實在してる人間が、永劫に苦しむつてことはいゝことなの。あんたには分るはずよ。[illegible]あんたは、その階段から今でその[illegible]けつやうな[illegible]放したことがないんだもの。それに、あんたには分らねばならないんだわ、あんたは、[illegible]、その他ありとあらゆる不幸な、あんた自身も、その不幸者の第一人よ。よくつて。その澤山の不幸な人間をもつと、殖やす爲めに、あんたは、大骨折で勉強して、そして一廉善人振つてるのよ。ホヽヽヽヽ。遂々、妾、あんたを、大馬鹿者にしてしまつたわね。御免なさいね。だけど、それはほんとに、あなたは大馬鹿なのよ。ホヽヽヽヽ」女は全速力の、船の、スクルーシャフトが廻轉してるやうだつた。

「あゝ、それはほんとの事だ！」と、小倉は口走つた。

「僕は、社會の、秩序と云ふ大きな看板に隱れて、自分の利慾のみを得ようとしてゐた。それは全くだ」

「ほうら、白狀してしまつたわ。あなたはね、高々船長位になつて、三上さん見たいな人を苛めて、御自分は又、自動車か何かに乘つた耄碌爺から譯も分らない事を云つて苛められ度いの。お止しなさい。仰向いて唾を吐くのは止めるものよ。だけど、あんたが船長になると、今度は、ほんとに純粹な生娘があんたに惚れてよ。そして、船が着くたんびに、あんたに、ダイヤモンドの指輪を『愛の表象』として強請ることよ。ホヽヽヽヽ。それは、あんたに幸福を齎すわね。妾見たいな、えゝ、妾は淫賣よ、それが、どうしたつての、小倉さん、あんたは淫賣よりも、一生涯を通じての娼妓がお好きな一人でせうね。ホヽヽヽ。だけど、あんたは、さつき『僕が愛してると同じ樣に僕を愛してる女がある』つて云つたわね。妾、妾、妾だつて誰にも劣らない愛を持つてるんだわ、だけど、妾は前科者なのよ。ホヽヽヽ。世の中の人間は、自分を縛つてる鐵の鎖が、人をも縛つてると思ふと、安心して自分の鎖が輕くでもなるんだと見えるわ。それはね、奴隷道德の鎖よ。因襲の鎖つてのよ。だけどね、小倉さん。妾にはそんなことはないのよ。妾そんなこと、夢にも思はないんだけれど、例へばね、若しか、妾があんたを愛したくつても妾が淫賣ならその資格が無いとでも、あんたは云ひ度いんだわね。いゝえ、さうよ、ま、默つてらつしやい」彼女は、小倉が何も云はうとしてもゐないのに、慌てゝ彼の云ふのを遮つた。

「妾はあんたに愛させて呉れるやうに、賴む資格も無いと思つてるのね。だけどね、小倉さん、妾は幻の階段を追ふやうな利己主義者は、妾の方でいくら賴まれてもいやなのよ。それは意氣地なしの考へる生き方なんだもの。それは妾たちが、こんな恥かしい商賣をするの

より、もつと〳〵恥かしい、堕落した、外道のやり口よ。
　だけどもね。小倉さん。若しあんたが、さうでなかつたら、若しあんたが立派な人間で階段なんぞ認めない人だつたら、妾は、妾は、あんた見たいな人に初めて會つたことを白状してよ。そして、妾は、あんたを、世界中で一番強い、弱い者の味方としてなら、妾はあんたを愛したいわ。だけどもね、何だつて妾は馬鹿なんだらう。あんたにはいゝ人があつたのね、妾、妾、妾だつて、妾はね、小倉さん。あんたが高等海員の試驗を受けて、船長に立身するやうに、試驗を受けてでも願つてでもなく、この商賣に、無理矢理に放り込まれたんだわ。妾の云ふこと分つて。ホホ、ヽヽヽ、妾の云ふことはね、こんな商賣してゝも、それは妾の知つたことぢやないつて積りなのよ。あなたが船乗りをしてるのも、妾がこんな汚はしいことをしてるのも、性質は同じなのよ。そしてね、妾の方が、ほんたうは、もつと尊敬して貰はなければならない程苦痛な部分を引き受けてるのよ。分つて？　人間が生きるためには、どんな苦痛でも忍ぶもんだわ。生きるためには、より早く死ぬ方法までに、飛びつくものよ。妾なんぞ死ぬまでに、ほんとに自分のしたいと思つたことの、反對のことばかしさせられて遂々死んぢやふんだ。自分の思ふ通りになることは一つだつてありやしないんだわ。妾はね初めはね、あんたをたゞのお客と思つたの、そして次には坊ちやんと思つたの、その次はほんとに物の分つたおとなしい人だと思つたの、そしてね、今ではね、あなたは、さうね、何だらう。何と云へばいゝだらう。妾のお父さんだわ。妾を産んだ、妾の知らない、ほんとの妾のお父さんだわ、ホホ、ヽヽヽ……妾お父さんに……

二

　その夜は全く悪魔につかれた夜であつた。人間の神經を鏝で燒くやうに重苦しい、惱ましい魅惑的な、夜であつた。極度の歡びと、限りなき苦しみとが、どろ〳〵に溶け合つたやうな一夜であつた。
　三上にも、小倉にも、それは回顧するに忍びないやうな、各々の思ひ出を、その夜は燒きつけた。それは永劫に覺めることのないほどの夜であるべきであると思はれた。それほどその夜は二人にとつて大きな夜であつた。
　人間の一生のうちに、その人の一切の事情を、一撃の下に轉倒させる様な重大な事件があり、社會に於ては、全社會を聳動せしめるやうな大事件がある。そして、それ等の事件が必ず夜か晝かに行はれ、その事件とは全で關係なしに、夜になつたり、朝になつたりすることは、個人として、社會として、その事件に當面したものに、馬鹿げた、不思議な感じを屹度起させるものだ。中にはあゝ、俺にとつて、あれほど重大なことがあつたのに、どうだらう、夜が明けたと思はせるのである。
　三上と、小倉とは、各々が、そんな風な感じを以て、朝の六時に起きた。二人とも腫れぼつたい眼をしてゐた。
　一夜は明けた。そして、重大なる事件は未解決の儘に、夜を持ち越して、明けたのであつた。それは、一夜を持ち越したために、事實の形を千倍もの太さにしてしまつた。一夜——五時間——傳馬繋留——水夫睡眠——何でもないことであつた。それは全く極めて平凡な詰らないことであつた。
　處が、それの連續を、社會から、萬壽丸にまで縮めると、問題が由々しく大きくなるのだつた。
　兎まれ、小倉は「階段」のことは忘れたにして

も、一應は、本船へ歸つてから、萬事を解決した方がいゝと考へた。處が、三上は、それは馬鹿なやり方だ、と考へた。そこに、三上と小倉との食違があつた。

二人はその家を出た。そして、海岸を傳馬のある方へ道に歩きながら、その事件の締めくゝりについて話し合つた。

「俺あ歸らんよ」と三上は、さつきから云ひ續けてゐた。

「でも歸らなきや樣子が分らないぢやないか」——これは小倉の云ひ草だつた。

「樣子は分らんでもいゝよ。あの傳馬を叩き賣るか、質に入れるかして、俺達はどつかへ行つた方がいゝよ」三上は自分の計畫を初めて口に出した。

「でも、そいつあ困るなあ。僕は海員手帳が預けてあるし行李もあるし、そいつあ弱るよ」小倉は全く困るのだつた。彼は船長免狀を取る試驗のために、二度も沈沒したりして、それに必要な履歴が貴重として取つてあつた。それは海員手帳に記入されてあつた。

「だから、さうならつて僕がさつきから云ふのに、いつまでも君が愚圖々々、ついて來るからよ。君はサンパンを雇つて歸れ、そして、三上が傳馬を盜んだとでも、何とでも云つて、置けばいゝぢやないか。僕はこれを賣つて、どこかへ行くんだから。行李や、手帳なんぞ欲しくもないや。早く君は歸れ！」

三上はクルッと反對の方を向いて、棧橋の方へ歩を返した。小倉も無意識にそれに從つた。

「だつて、些も君だけが惡いことはないぢやないか、大副船長が無理なんぢやないか、だから、歸つたつて何ともないよ。歸つた方がいゝよ」小倉は、頻りに穩便な方法をとることを三上にすゝめた。

「何でもかんでもいやだよ、俺は。若し歸る氣になつたら、出帆間際に歸る。それまで俺は隱れてゝ船の樣子を見ることにするよ」

彼はかう云つてズン〳〵歩いて行つた。

小倉は夢でも見續けてゐるやうに、ボンヤリしながら、三上の後から無意識に歩いた。

三上は波止場に來て、昨夜繋いだ船の傳馬にヒョイッと飛び乘つた。小倉も乘らうとすると、手を振つて「みんなに、出帆間際にこれ——と云つて傳馬を指さして——で歸るからと云つといてくれよ。なあ」と云ひながら、グーッと波止場を押して、離れてしまつた。

小倉は失心したやうに佇んでゐた。

三上は、その五人前もあるやうな腕に力を籠めて橋の下を潜つて見えなくなつてしまつた。

「なるほど、三上は歸れない筈だ。船長を脅かしたんだもんなあ、それを歸れと云つて、昨夜一晩泊つた、俺は何と云ふ白癡だつたんだ。三上は、たとひ理由があらうがあるまいが、どのみちやッつけられるに決つてゐたんだ。三上は、傳馬を質に入れるなんて、奴一流の計畫を立てて行つちやつた。が、それがどんな滑稽なやり方であらうが、奴が、のこ〳〵船へ歸るよりは遙にましなこつた。知つてゐて、陷穽に首を突つ込むにや當らないもんなあ」小倉は行く先きを忘れた田舍者のやうに當惑氣にそこへ突つ立つてゐた。彼の役割は、この上もなく奇妙な、滑稽な云ひ樣のない不思議なものになつて來た。

「船の傳馬に乘つて來て、サンパンを傭つて歸る！ 一體どうしたんだ。そして、この責任は、三上と僕とに、あるんだからなあ。どうなるんだ、一體。まゝよ！ 歸つて見れやどうにかなるだらう」

彼はサンパンを傭つて、萬壽丸へ行くやうに賴んだ。

「萬壽はいつ入つたんだい」と、虱小屋から、首を出した兄弟分が訊いた。

「昨夜晩くよ」彼は答へた。

「今朝此處へ穩つてゐた傳馬は、萬壽のぢやなかつたかい」と、船頭は訊いた。

「こいつ等も知つてら。へ、知つてる筈だ、じ時だもんなあ、だが、一昨夜のことは、ほんとにこの俺が經驗したことつたらうか、それとも、……全く不思議だつたなあ」小倉は昨夜の女のことを考へてゐた。彼女は賢いそして「純潔」な女だつた。

二二

小倉は萬壽丸へ歸つた。當番のコーターマスターは、梯子を昇り切ると、すぐに、小倉を[illegible]へた。

「どうしたんだい、心配したぜ、昨夜は、浪さわぎしなかつたかい。そして傳馬はどうしたんだ。皆、[illegible]られたのかい」

船に殘つた者は、ことはと一切の事情を知らない譯であつた。そして、サンパンを止めた[illegible]それに夜中のことだから、傳馬を奪られた[illegible]夜眠れなかつたけれど、船員達は勝手に想像していろいろな噂を生んでゐたのだつた。「傳馬は、船長を上陸させて置いて歸りに、橋を潛る時に、打つ衝けて、壞れた——それほど古くも弱つてもゐないんだが——と云へば、船員たちには、どうにかかうにか、三上が歸つて來ないで、サンパンの船頭が喋舌らない限り分りはしないんだが、扨それでは三上はどこへ行つたと云ふことになるし。何も隱し立てする必要もないから、すつかりぶち撒けた方がいゝだらう。それで惡かつたら、又その時のことだ」と、小倉は咄嗟の間に考へた。

「ナアに、やられはしないんだよ。妙なことになつちまつて困つたんだよ」小倉はほんとに、今そのことについて、口を切つて、實際これは俺の考へてるやうに簡單に片のつく問題ぢやない、全く困つたことだと云ふことを痛切に感じた。

「どう[illegible]たんだ、一體、そして三上は？」

「三上が傳馬で、今朝歸つて來る筈なんだよ」

小倉は、三上が傳馬を[illegible]はする質に入れるかすると云つた、その、迚も實現出來さうもない、彼の計畫だけは云ふまい、と決心した。

「[illegible]ちやいけない。[illegible]も[illegible]つて來やしないぜ」

「それぢや、おもてでよく、すつかりの事情を委しく話さう。ちよつと困つたことが起つたんだ。それを、今おもてで話さう。皆ゐるかなあ」小倉は[illegible]ら云ひながら、もうおもてへのタラップを降りて、驅けて行つた。

おもてでは、ボースンから、大工、水夫たち、全部が、いつでも入港出來るやうに、準備を整へて、船長の歸るのを待つてゐた。それよりももつと、三上と小倉との消息について待ち切つてゐた。

「どうも濟まなかつた。只今」と叫びながら小倉はそこへ驅込んで來た。

「どうしたい、三上は」

「扨ては女郎買をしやがつたな」

「傳馬で歸つたんかい」

「うまくやつてやがらあ」

各人は考へ、想像してゐたことの[illegible]か、彼の歸りに、棧橋から海に落ちる石炭のやうに[illegible]と、同時に飛びかゝつた。

小倉は、「いつまんで」昨夜の困難な經驗から、船長の[illegible]から三上の行爲から、宿屋へ——睫屋とは云はなかつた——歸つて、凍りついた服を乾かして、今朝まで乾くのを待つてゐたこと、三上は、[illegible]つて、[illegible]を[illegible]へ出て、[illegible]の[illegible]

は一足先へ船の傳馬で歸るからと云ひ置いて行つたこと、慌てゝ飛んで出て、波止場へ來たときには、もう三上は影も見えなかつたこと、船長はどんな措置をとるか、打つ捨つては迚も置かないだらうと云ふことなどを、簡單に、然し要領を摘んで話した。

セーラーたちは默つて聞いてゐた。さうして、三上が一足先へ出て、未だ歸つて來ないと云ふことを、小倉ほどに心配しないのみならず、寧ろそれをひどく痛快がつた。

「いつそ本船へ乘つて逃げたら面白かつたな」などと茶化しさへした。一向誰もその事に對して「かうしたらいゝだらう」と云ふ意見を持ち出す者は無かつた。誰もが、その單調でない、奇拔な話を聞いて、その話と、事件とに滿足してしまつた。

小倉は、此處でも又彼が事柄を餘り簡單に見過してゐたことと、今では彼一人だけが、當の責任者に轉化したことを痛感した。

小倉は、非常に善良ではあるが、意志の弱い、そして所謂常識的な、分別のある若者だつた。それで從つていつでも事勿れ主義であつた。その退嬰的な彼が、旋風的事件の中心に捲き込まれたのだから、堪らなかつた。彼は何をどうしていゝか、自分自身が何であるか、一體全體どうしたらいゝんだか、薩つ張り一切が分らなかつた。

誰もがそれまで打ち明けてもゐないのに、いつでも、その人間の最も重大な祕密なことになつて、自分の手で收まりがつきかねさうになると、誰もが、決して普段それ程親密でもないやうに見える、藤原へ、相談を持ちかけるのが極り切つた例になつてゐた。小倉も、この例に依つて、藤原へ意見を求めようと決心した。

藤原は、今まで自分が中心になつてゐた、その話から、避けて、一方の隅で、默つてその事件の話を聞いてゐた。そして、煙草を「尻からヤニの出る」ほどに、やけに喫かしてゐるのだつた。

「藤原君。君はどうしたらいゝと思ふかい」と、小倉は藤原と向ひ合つて腰を下しながら訊いた。

「よくは未だ分らないけれど、僕の知つてる範圍では、君にも、三上君にも何等の責任はないと思ふよ」と彼は答へた。

「さうだらうか、だけど、三上は十圓無理強ひ見たいにして借りたものなあ。それに、昨夜は歸らないで、今日は傳馬をどつかへ持つてつちやつたしね。僕は今、一切が僕に責任がかゝつて來やしないかと思つて心配してるんだよ、そら僕にも責任はあるんだけどね。どうしたらいいだらうか。船長が歸つたら、直ぐに謝りに行つたらどうだらう、ね」

小倉は途方に暮れてゐた。彼はその事柄が帳消しになるためなら今から、裸になつて、海へ飛び込めと云はれゝば、さうすることの方を遙かに喜んで、且つ安心したであらう。彼は「これほどの問題が、未だ片附かない」と云ふ、宙ぶらりんの狀態であることを極度に恐れた。

彼は、この問題が、「いつかは現れるが、未だいつかそれは分らない」やうな狀態で、一、二ケ月も續くとすれば、彼は自分と三上との二つの行爲を括めて、道德的にも、法律的にも――若しありとすれば物質的にも、一切合切を自分で責任を背負つた方がどの位樂だつたか知れなかつた。

「俺はもう、これが三年越し引き續いた事柄のやうに考へられる」小倉は、ヒステリーの女のやうに「傳馬」の事以外から頭を持ち出すことが能きなかつた。

「船長に謝りに行く？ それもいゝだらう。だが、お前、何を一體謝る積りなんだい。雇入れもしないボーイ長の負傷を打つ捨らかしといて、

自分だけは、夜中に上陸したことをかい。難破船の側をスレ／＼に涼しい顏をして通過したことをかい。謝る理由と、事柄とがあるなら進んで謝るがいゝさ。だが謝ることの無い時に謝るのは、自分の正しさを誇示することになるか、又は、單なるオベッカに止まるよ。そんなに君慌てることはないだらう。事の起りから、終りまで、冷靜に考へて見給へ。勝敗は別として、理由の正邪はどつちにあるか、直ぐ分ることぢやないか。港務の許可なしに夜陰に乘じてコッソリ上陸したり、檢疫前に上陸したりすることは、よし、どんな風の晩の嵐の中であつても惡いことに相違はないだらう。だから順序として、その點から先づ謝るべきだらうよ」

藤原は、全つ切り俺とは違つた見方をしてる。だが、あれも一つの見方だ。隨分亂暴な見方だが眞實の見方だ。どうだらう。本たうに、本たうのことをやつても構はないだらうか。と、小倉は未だ考へを決め得ずにゐるのだつた。

「藤原の云ふことは、昨夜の女の云つた處と、どこか似てる處があるぞ」と、小倉は、この時フト思つた。「あの女は寶玉だ！　だが、今はそれ處ぢやない。だが、あの女が俺のことを、三上さんよりも信頼しよ、あんたは」と云つたつけなあ、だがそれや全くだつた。俺はどうだ、自分のことさへ自分で考へが全つきりつかないぢやないか、三上は一人で立派にやつて行つた。俺には、俺の頭に反いて、尻尾を振るブルジョア的の取引氣分があるんだ。それが、すつかり、俺を臺なしにするんだ。俺は何故藤原君の云ふやうに、頭の命ずる通りに動かないのだらう、あゝ、矢つ張り俺は蛞蝓なんだ！　俺は、勞働者階級の悲慘を、決斷と勇氣と犠牲のないことに歸してるが、就中、この俺がその中の最なるものだ。勞働者階級を、裏切る唯一の卑怯者の典型を、俺は、俺自身の中に見出した。俺は、思想として全體を憤慨する前に、俺自身の恥さらしな、臆病者の、事大主義者の、裏切者、利己主義者の、資本主義の番頭の俺を、先づ血祭に上げねばならぬ。俺は、俺の村を、ブルジョアの番頭になれば、救へると云ふ謬見を捨て去るべきだ、俺の救はなければならないのは、俺の村だけぢやなくて、この地上の一切だ」

小倉は元氣よく、全で今にも、ブルジョアに出つ會しさへすれば飛びつきさうに、かく考へたが、それは彼には絶對に不可能な事であつた。彼は、依然事大主義者だつた。一切が腐つてしまつても、蓋さへあればそれで、一安心なのだつた。

小倉はその性格が煮え切らない處から、この事件の進展に對し、何等の役目を勤めることの能きない一の木偶の坊に過ぎなかつた。

三上が船長に與へた侮辱は、下級船員全體への復讐の形を船長によつて取られた。

そして、この事が、こゝに述べる處の、同盟罷業を惹起した。ブルジョアの番頭、プロレタリア！　船では、ブルジョアは決して傭主としてのその姿を勞働者の前へ現さなかつた。

二三

三上は、傳馬を押して、一度神奈川沖まで出たが、又引きかへして、堀川へ入つた。彼は、神奈川沖へ出た時に、傳馬にペンキで書かれてあつた萬壽丸を、シーナイフで削り取つてしまつた。

彼は、翁町の、彼が泊りつけのホーレンの、サンパンの繋がれる場所へ、その傳馬を繋いだ。そして、小林と云ふ、そのホーレンへ、のこ／＼上つて行つた。

ホーレンの親爺は、笊のやうな彼の唯一の財産なるサンパンに、チャンス取りに溜つてる宿なしの水夫を船頭にして、沖へとチャンスを

取りに出かけた留守であつた。
　をばさんはゐた。下手な田舍芝居の女形を思はせる色の黒い、瘠せたヒョロヒョロの、南瓜の萎びた花のやうな、女郎上りのをばさんだつた。この一口に云へば「サンマ」のをばさんはゐた。
　このをばさんは親爺のおかみさんではなかつた。おやぢの世話で船に乘つて、今外國船に乘つて、こゝ四年程前ハンブルグから、近い中に歸ると云ふ手紙と、金二百圓とを送つて寄越した水夫の、おかみさんだつた。
　このおかみさんが、今歸るか、今歸るかと待つて、中に、二百圓と一年とが消えて失くなつてしまつた。そこで、三年許り前から、やもめの、こゝのおやぢのところへ、飯炊きに來て、亭主の歸るのを「網を張つて待つて」るのであつた。
「まあ、三上さんだつたわね。どうしたの、いつ入つたの？」
　三上が、のつそり入つたのを見たをばさんは、長火鉢の前に吸ひかけの長煙管を置いて、くるりと入口の方を振りかへつて、さう云つた。
「おやぢはチャンス取りか」三上はブッキラ棒に訊いた。
「えゝ、不相變、急いでるの？　それともゆつくり出來て？」とをばさんは訊いた。
「急かねえよ、上らして貰はう」と云つて、彼はもうそこへ上つてるんだつたが、長火鉢の前の座蒲團の上へ「上らして貰つて」をばさんの長煙管で、スパスパと煙草を吸ひ始めた。
「隨分御無沙汰ね、三上さん。あつちにはこんなに御無沙汰しやしないでせう。怒られるからね」
「眞金町？　毎航海さ、おやぢは遲くなるだらうね。今幾人ゐる」
「十一人、暮に迫つて、口はないし、入る處はないし、親爺さん、困つててよ」と指で丸を拵へて見せた。十一人の船員たちが今休んでゐるのであつた。
「をばさんの御亭、未だ歸らないかい？」三上は訊いた。
「歸らないよ、未だ。向うで髪の毛の赤い、青い眼の女房でも持つてるだらうよ」
「その積りで浮氣をしてると、えらいことになるぜ。ハッハヽヽ」
「相手さへあればね。ホホヽヽ」
「僕は下船したんだから、當分又厄介になるよ。頼むよ、いゝかい。チョット出かけて來るから、親爺が歸つたらさう云つといてくれよ」三上が靴を履いてると、
「そして荷物は？　小屋？　親爺さんこの頃工面がよくないんだから、十でも十五でも入れないと、駄目だよ。分つてるね」と、をばさんは、駄目を押した。前金を十圓か十五圓は入れなけりや、迚も置かないと云ふのであつた。
「大丈夫だよ。そんなこたあ、云ふだけ野暮さ。ヘッヘッヘヽヽヽ」三上は表へ出て行つた。
　彼は近所の質屋へ行つた。それは彼の常取引の質店であつた。
「いらつしやい、暫くで、お品物は？」と主人は訊いた。
「實はね、品物は此處まで持つて來られないんだが、二日だけ、傳馬で金を借りたいんだがね。ボースンが、融通して貰つたところへ、現金を返すんだが、それが今足りないんだ。船は今ドックに入つてる××丸だから、傳馬を泛してあるんだ。それで、二日許り借り度いと云ふんだがね。利息はいくら高くても構はないつてんだ。どうだらう。見に行つて貰へるかね。そこに繋いであるんだが」三上は、これを昨夜傳馬に乘る前から計畫してゐたのであつた。そして彼は、その計畫を完全に信頼してゐたのであつ

た。
「傳馬ぢやちよつと困りますね。藏に入りませんからね。それに船の傳馬ぢや猶更、何とも仕方がありませんね。どうぞ、それはまあ、何かまた別な品ででも御座いましたら」主人は一もこもなく斷つてしまつた。

三上は、驚いた。彼は驚いたのである。彼は、未だ今度の事ほど綿密に、長い間かゝつて、企てたことは無かつた。それは室蘭に碇泊してゐる頃からの計畫であつた。その計畫は、サンパンを占領するといふ點までは、彼の計畫通りに進行したのである。であるのに、最後の點に至つて、これほど何でもない問題が拒まれるといふ、その事が彼を驚かした。「だが、この家は傳馬を扱ふのに慣れてゐないと見える」と、すぐ、彼は思ひかへした。

「さよなら」彼はそこを飛び出した。そして今までより少し彼は慌てゝ歩いた。彼は歩きながら、これほどの船つき場でありながら、一軒もサンパン屋が店を出してゐないことを不便がつた。「靴でさへ中古の店を出してゐるのに――」

彼は全く殘念であつた。

彼はその日一日、ありとあらゆる質屋で斷られ、貸船屋で斷られ、全く慘めな氣持になつてしまつた。

「傳馬は賣れねえや、急には目だな、だが、親爺になら賣れるだらう」小突きまはされた犬のやうに、身も心もへト／＼になりながら、彼はボーレンの親爺を目標に持つて來た。彼には絶望がなかつた。

彼は夜中一時頃、ボーレンの表戸を開けた。

おやぢは起きてゐた。そして、彼が上つて行くのをじろりと眺めた。三上は、長火鉢の前へ、坐つて、煙草に火をつけた。そこは六疊の間であつた。隅の方には、船員が二人寢てゐた。

おやぢは暫く默つて、これも煙草を吸つてゐた。

「おやぢさん。俺あ今日下船したぜ。又、暫く賴むよ」三上は切り出した。

「下船した、で、又船に乘る氣なのかい」おやぢは妙な顏に返事をした。

船乘りが、下船してボーレンに休めば、次の船に乘るまでの間、そこに休んでその間に、口を探すのが、その唯一の道であつた。

「あゝ、歐洲航路にやもう倦きたからなあ、今度は本たうの遠洋航路だ。どうも、だが、おやぢの様子が怪しいぞ、今日萬壽に行つたんぢやないかな、と思つたが、能きるまで空つ惚けた方がいゝと思ひついた。

「さうか、遠洋航路もいゝだらう。だが、遠洋航路は履歴が美しくないといけないな。おまへの手帳を一寸見せな、預つとかう」

手練の手裏劍見事に三上の胸元を刺した。

「あ！　船員手帳！」と驚いて三上は眼を叩いた。「船に忘れて來たぞ」

「冗談ぶつちやいけない。三上、俺は今日萬壽で、すつかり様子を聞いて來たんだぞ。いゝ加減にしろ、傳馬まで乘り逃げやりやがつて。どうしたい傳馬なんか」

「えゝ！　からなりや癪だ、ぶつちまへ、畜生！　傳馬は繫いであるよ」

「どこにあるんだい」

「おやぢのサンパンの繫いである處さ」

「何だつてあんな邪魔つけなものを、わざ／＼と漕いで來たんだい」

「賣り飛ばす積りなんだ！」

「買手はある積りかい」

「賣り物だつたら買手もあらうぢやないか」

親爺はもう三上と眞面目な話をすることは止めた、と決めた。が、それにしても、こんな野郎に踏み止まれちや」商賣が上つてしまふのだつた。

「お前もう横濱ぢや迚も駄目だから、神戸へでも行つて見たらどうだね、そのサンパンに乗つてさ。え―」

「俺あ、萬壽が歸つて來るまで待つてるよ。濱で。船員手帳は俺のもんだからなあ―」

「萬壽の船長は、お前を監獄に放り込んでやるとさう云つてたさうだぜ」

「船長が、然しさうはしないだらうよ。俺が監獄へ放り込まれる前に、奴が海ん中へ叩つ込まれるだらうよ」

「お前は、船長を、おどかしたつてえぢやないか、海ん中へ叩つ込むぞつて。どえらいことをやつたもんだなあ、だが、おもてはみな大喜びだつたぜ。何だつたつて三上はえらい、やる時になりやあの位やる奴あないつてさ。だが、少し氣をつけないといけないぜ。暫くお前は横濱を離れてた方がいゝんだがなあ。どうだい神戸か長崎へでも行つて見ちや」

「おやぢ、船員手帳を取つて呉れるかい?」

「それや取つてやつてもいゝが、渡さないだらう。俺んとこに、あれよりもよつぽどいゝ履歴のがあるから、それを持つて行けよ」

三上は、別人の手帳を持つて、別人になつて、神戸へ行つた。傳馬は、ボーレンのおやぢが預かつて、萬壽が入港したら返すことにした。

船員の雇入れは、その手續が全く面倒であつた。極めて、嚴格なる手續の下に、極めて嚴格に取締られて、そして、彼等程搾取される勞働者は、恐らく他に例を見ないのであつた。例へば、三上は五年間汽船に乗つてゐて、漸く月給十八圓になつた許りであつた。話にならないのだ、全く!

而も、それに對して、命はおほつぴらに投げ出してあるのだ!

二四

北海道萬壽炭坑行きのボイラー一本を、萬壽丸は、横濱から、室蘭への航海に、そのガラン洞の腹の中に吸ひ込んだ。それは甚だ手間の取れる厄介な積込みであつた。だが横濱には、そんな特殊の荷役に馴れた仲仕は澤山あつた。從つて、水夫たちも安心して、その作業を手傳つた。それに、チーフ・メートもそれ等のことを知つてゐたから、それほど緊張もしなかつた。

珍らしい荷物であつたので、退屈を紛らし、單調を破つて、その積込みの終へた時は、何だか、愉快なことでも爲し遂げたやうに、水夫等は感じた位であつた。

横濱から、室蘭へは、萬壽丸に、その船體が室蘭から横濱への時の三倍の大きさに見えた。と云ふのは、荷が無いから、全でその赤い腹の殆んど全部を剝き出して、スクルーで浪を蹴つ飛ばしながら游いで行くのであつた。從つてデッキから水面までの距離が、うんと遠くなつた。おもての淡水ポンプは、まるで空氣ポンプのやうに、シューノヽと云ふ許りになつて終ふのだつた。

かうなると、便所掃除人、波田は實に、その作業を百倍の困難さにされてしまふのであつた。彼は、おもてまで、淡水ポンプを汲みに行くか――それは見つかると大變八釜しかつたから、その方法は餘り取れなかつた――又は、石油罐にロープを結びつけて、海から吊り上げるのであつた。これは全くいやなことだつた。僅か石油罐一杯の水が、それ程重く、それ程いつまでも途中で、愚圖々々してゐなくてもよささうなものだと思はれるのだつた。これを吊り上げるのが億劫さに、夕方、便所に水を通すことを怠けると、パイプに一杯の糞が凍りついてしまふのだつた。それが凍りついた日には、波田は字義通りに、糞を摑む――船では詰まらない目に合ふことを糞を摑むと云ふのであつた。

パイプ――直徑一尺位の鐵管――は下水

溜が、その儘凍つたやうな形に於て凍るのであつた。それが凍つた際は、波田は、何よりも先づ機關場へ下りて行つて熱湯を貰つて來るのであつた。機關場から、おもてまでの距離の遠さよ——、第一、罐場までの上り下りが、大變であつた。殊に、熱湯の一杯入つた石油罐をブラ下げて、それを一滴も洩さないやうに、洩すと下で火夫がやけどするのだ、その辷る鐵の油だらけの梯子を昇らなければならなかつた。これは周到な注意と、萬全の用意とでなされた。彼は、それだけの作業、バケツを持つて下りて、辷らぬやうに洩さぬやうに、昇つて來る、それだけの作業を、夏の土用よりも熱い思ひで汗を滴らし、罐場を一足出るとすぐに、凍つた便所の作業に移らねばならなかつた。

彼は熱湯と竹の棒とで、化學的及物理的の作用を應用して、頑固に凍りついた兄弟たちの汚い物を排除する。

彼は熱湯を打つかける前に、竹箒の柄を以て、猛烈に物理的操作を試みた。——物理的操作とはセコンドメートの口吻を借りたのである——そして、糞の分子と分子とが稍空隙を生ずる時に於て熱湯を——この時決して物惜しみしてチビチビかけてはならない、思い切つて——どつと一時に打ち空けるのである。

と、忽ちにして、甚しい臭氣が、發煙硝酸の蓋でも開けたやうに、水蒸氣と共に立ち昇る。そしてこの水蒸氣が發煙硝酸と同じく、その煙までも黄色であるやうに感じられる。そして、この濛々たる蒸氣と臭氣とに伍して、ドーッと音がすれば、それは、汚物が流れ出した證據である。若し不幸にして音が伴はなかつた場合は、波田はそれと同じことを、幾度か繰りかへさなければならない。

波田は、その熱湯を汚物の壺の中へ注ぐや否や、彼は棒もバケツもそこへ打ち捨てゝ置いて、サイドから、汚物の飛び出すスカッパーの活動の狀態を眺めに行く。

それは汚ない仕事であつた。そしていやな、困難な仕事であつた。それは丁度われ等が便所へかゞむのと同様不愉快なことであつた。それは又、勢ひよく、一切が飛び出すことは、われ〳〵が便所へかゞんだ時と同樣、腹の中が綺麗になることを意味し、且つ快いことであつた。

波田はスカッパーから、太平洋の波濤を目がけて、飛び散つて行く、汚物の瀧を眺めては、識に、これは便所掃除人以外に誰も、味へない痛快事であると思ふのであつた。

「これで俺も氣持がいゝし、誰もが又氣持がいいわい」波田は、その着物を洗つて乾すために、罐場へ行つた。

そして彼は、その汚れた着物を洗ふ間に、「若し神が在るなら、糞壺にこそ在るべきだ」と思つた。

「何故ならば、若し神や佛が在るとしたならば、彼等が愛する處の人間が豚小屋に住み、或は寺院の床下に、神社の縁下に住む時に、どうして、自分だけが、そのだだつ廣い場所を獨占することが能き得よう？　若しさうしてゐる神佛でもあるならば、それは岩見重太郎によつて退治されねばならない神佛であつて、決して眞物ではないのだ。今は、神佛よりも一段下であるべき人間でさへ、『萬人がパンを得るまでは誰もが菓子を持つてはならぬ』と云つてゐるではないか、神は正に糞壺にこそ在るべきだ！」

波田によると神は恐ろしく、汚ない處にもぐる必要があつた。

「俺は便所に神を見た。それ以外で見たことがない」と波田は、いつ、どこででも主張するのであつた。

一で、その神樣は、俺のによく似た奴の顔を着

て、俺より先にいつでも便所を掃除してる！それは勞働者だつた。賃銀を貰はない勞働者の形をしてゐた！」と。

「で、若し、神樣が、勞働者でもなく、便所にもゐなかつたら、俺は、迚も上陸して寺院や社祠などへ、のそ〳〵探しになんぞ出かけてはゐられないんだ。人間から現實のパンを奪つて精神的な食べられもしない腹も膨れない、パンなんぞをるゝと云つてごまかすのは神ぢやないんだ。それやブルヂョアか、その親類だ」

これが波田の宗教觀であつた。

「その神樣が賃銀を月に八圓宛さへ得てれば、そのまゝ波田君なんだがなあ、惜しいことには、たつた一つ違ふんで困つたね」藤原はさう云つて笑つたものだ。

船には、宗教を信ずるものは一人も居ないと云つてよかつた。ボースン、大工、この二人だけが、暴化時だけ寝臺の下の抽出しの中から、金刀比羅大明神を引つ張り出して、利用した。彼等は若し、それがいくらかでも役に立つなら、利用しなけりや損だ、と習慣的に考へたのであつた。

板子一枚下は地獄である。超人間的な、神か佛」のやうな物に頼りたい氣は、人には、特に船員などにはあり得たのであるが、而も彼等は餘りに馬鹿々々しい、それ等のものを信じる氣にならなかつた。宗教は今では全く下らないものであるか、又は、その正體を胡魔化すための神學や經典で、曖昧に詭辯的に職業化されてゐた。宗教は今や高利貸や、マーダラーの手先になつたり辯護人になつたりすることに依つてのみその生命を辛うじて保つてゐるにすぎなかつた。

話は飛んでもない傍路へ外れたものだ。

二五

萬壽丸は、室蘭の荷役を早く濟まして、碇泊中そこで船のマストや何かをすつかり塗つて、横濱へ歸つて正月をする豫定であつた。そしてその豫定は、一切のプログラムを最大速力でやつて、順當に行けば、辛うじて大晦日の晩横濱へ着くのであつた。

そんなわけであつたから、わが、團扇の樣な萬壽丸は、豚の樣な體を汗だくで、その全速力九ノットを出してゐた。そしてこの大速力の爲めに、船體はハシフィック、インのエムロシアが、全速を出した時の樣な、自震動をブル〳〵と感じながら飛んで行くのであつた。何故、たつた九ノットの速力でゆれるかと云へば、わが萬壽丸は、なるべく多く石炭を頬張るべく、デッキから、ボットム迄、どちらを向いてもガラン洞で、支柱がないためなのだつた。それはフットボールの内部のやうなものだつた。

冬期の北海は霧が甚しかつた。汽船で鳴らす霧笛、燈臺で鳴らす號砲のやうな霧信號。海へ轉り込んだフットボールのやうな萬壽丸は、霧のために、目隱しをされたものであるから、九哩の速力をどうしても、もつと下げなければならない筈であつた。けれどもそれは、正月のことを考へる時に、船長はこれから上速力を下げる譯には行かなかつた。その代り彼は無暗矢鱈に霧笛を鳴らした。

それは何かの事變の前兆を知らせると云ふ、犬の遠吠に似てゐた。それを聞くものに、きつと不安な豫感に似たものを吹き込まねば置かぬ音色であつた。同じ汽笛でも、出帆の汽笛は寂しく、入港の汽笛は、元氣よく勝ち誇つた樣に聞えるものだ。霧笛の場合は同じ汽笛でも、不吉な、落ちつかない、何だかソハ〳〵した氣持に人を引き込んだ。自らその緒を曳いてゐる船長自身が、その音色に追つかけられるやうに後から後からと、緒を曳いた。霧笛は、益々深く、

人から景色を奪ふ霧のやうに、その心から光と希望とを奪ふのであつた。

精密なる海圖と羅針盤とがあるとは云へ、又それが、日高が湖に泳ぐやうな北側で海が廣いとは云へ、一寸先が見えないと云ふことは、安心のならないことであつた。殊に水夫等にとつては、全で盲人が杖を搖いで、文字通りに盲滅法に走つてゐるやうに思はれるのであつた。

西澤と波田とは、ブリッヂに上つて、小倉の舵取りを見學してゐた。

自動車の運轉手がそのハンドルを絶えず、廻してゐるやうに、汽船の舵機も、前のコンパスと睨めつくらをしながら、絶えず、廻され調節されてゐた。

一時間九ノットの速力も、この霧全體をその權力の下に支配する、船長の心理に及ぼす影響は、このブリッヂに依つて、一望[illegible]であり、[illegible]これが[illegible]下である時に、決して緩い速力ではなかつた。[illegible]のやうな小さな船も彼にとつては[illegible]大であつた。殊に斯くの如き濃[illegible]をかけた時は、船長は、二千噸のこの船を、二[illegible]に[illegible]して見ることも能きた。何故かならば、船全體の[illegible]のために、漠然たる[illegible]を以て[illegible]してゐるから[illegible]て

あつた。

暗がりの中で、誰も見てゐないと知ると、急に二十許り威張つて、警察署長のやうな恰好に歩いて見ることが、大抵誰にもあるやうに、萬壽丸は、巨船の如くに氣取つて航行してゐるやうに見えた。

が、それにしても不思議であつた。室蘭港口に番をしてゐる大黒島は、もうそこに來てゐなければならない筈の時間であり、コムハスであり、海圖であつた。にも拘らず事實は、大黒島の燈臺も霧信號音も、見えも聞えもしないのであつた。

わが萬壽丸は九ノットのフルスピードを以て、船長自身ブリッヂに立つて、小倉の舵を命令してゐた。

波田と、西澤とは各々熱心に如何にして汽船の舵を取り、その方向を保つて行くか、と云ふことを眺め、心で研究してゐた。

彼等は、前も見えない濃霧の中を、コンパスと海圖とだけで、夢中になつて進んで行く船が不思議でならなかつた。

萬壽丸は、その哀れな犬の遠吠を、絶えず吹き鳴らしながら、斯くして進んで行つた。

霧の上に、夜の闇が、その墨を撒き始めた。

一切のものが今にも失明しようとする者の、最後の視力のやうにボンヤリしてしまつた。

と、突然、ブリッヂに立つてゐる者は船長から、波田に至るまで急に飛び上つた。怖ろしい速力を持つた巨大な軍艦が、その巨砲を打つ放して、その轟音と共に、この哀れな萬壽丸の舳を目がけて、突進して來たのであつた。それは全く咄嗟の場合であつた。

「ハーールホール」と船長は、舵機を握つてゐる小倉の前へ來て、[illegible]上り叫んだ、その聲は絶望的にブリッヂに響き渡つた。

機關室への信號機はフルスピードアースターン全速後退を命令して、チン〱チン〱とけたゝましく鳴り渡つた。

船長初め、小倉等ブリッヂにある總ては打つ衝けたと覺悟してゐた。

波田に西澤は、何たかまるで譯が分らなかつた。

これ等は息をつく間もない瞬間に一切が行はれた。そして、本船はグッと廻つた。波田も西澤も、[illegible]までもが、その驚れに拘らずよろめいた程急速に。そして、今にも衝突しさうに思へた、山のやうな怪物、（それは軍艦だと波田と西澤は思つてゐた）は全速力を以て、全

で風のやうに左舷の方へ消え去つた。と、その怪物からは續け樣にドンドン〳〵と轟然たる砲聲が放たれた。

哀れなる小犬の樣なる、わか萬壽丸は、今は立ち竦んでしまつた、否はど、腰を拔かしたのである。無暗に非常汽笛を鳴らし、救を求め、そこへ錨を放り込んだ。

今、これほど萬壽丸を驚かした、軍艦のやうに速力の速い怪物は、百年一日の如く動かない大黒島であり、大砲は霧信號であつた。

わか萬壽丸はその二十間手前まで九ノットの速力で、大黒樣のお尻の邊を覘つて眞一しぐらに突進して來たのだつた。

危かつた、錨が入るゝ、皆は、期せずしてホツとした。

大黒島の燈臺では、亂暴にも自分を目がけて勇敢に突進して來る船を認めたので、危險信號を亂發したのだつた。幸にしてこの無法者は、間際になつてその亂暴を思ひ止まつた。

萬壽丸は動いては危いと許りに、立ちすくんだ白のやうに、そこに投錨して一夜を明すことになつた。

嵐の晩の激烈なる一夜であつた。船も高級海員も、ハノ〳〵してゐた。おもてのものたけは、一夜を樂に寢ることが能きた。

二六

翌朝萬壽丸は、雪に照り映えた、透徹した四圍の下に、自分の在所を發見した。それは頗る危險な處へ、彼女は首を突つ込んでゐた。

船員達は、自分の目の前に、手ノ屆きさうな處に、大黒島の雪に蔽はれた、鷲の爪のやうな岩石に向き合つて居り、左手に一體に海を黑く、魔物の眼のやうに染める暗礁を見出した。

彼女は、その醜體を見られるのが恥かしさに、拔き足さし足で早朝、何食はぬ顏をして、室蘭港へ入つた。

直ぐに石炭積込用の高架棧橋へ横付になるべきであつたが、ボイラーの荷役の濟むまでは沖がかりになるので、室蘭灣の殆んど眞ん中へ、今拔いた許りの錨を何食はぬ顏をして投げた。

萬壽丸が屬する北海炭山會社のランチは、直ちに勢ひよくやつて來た。

とも、おもてのサンパンも、赤毛布で作られた厚司を着た、囚人のやうな船頭さんによつて、漕ぎつけられた。沖賣らの娘も逸早く上つて來た。

水夫達は、ボイラー揚陸の準備前に、朝食をするために、おもてへ歸つて來た。

食卓には飯と味噌汁と澤庵とが準備されてある。一方の腰かけの隅には、沖賣らう——船へ菓子や日用品を賣込みに來る小賣商人——の娘が、果物や駄菓子などの入つた箱を積み上げて、いつ間からかと待つてゐるのであつた。

船員は、どんな酒好きな男でも、同時に菓子好きであつた。それは、監獄の囚人が、晝飯の代りに食べるアンパンを持つて通る看守を見て、看守はアンパンが食べられるだけ、この世の中で一番幸福な人間だと思ふのと同じであつた。監獄と、船中に於ては、甘いものは、ダイアモンドよりも貴かつた。

波田は、その全收入を擧げて、沖賣らうに奉公してゐた。彼は、船員としての因襲的な惡德には染みない性格であつたが、菓子で身を持ち崩すのであつた。彼は極めて貧乏——月八圓——であつた。それだのに、彼は金つばを三十位は、どうしても食べないではゐられないのであつた。然し、財政の方でそれほど食べることを許さないのであつた。彼は沖賣らうがいつそのこと來ねばいゝにと、いつも思ふのであつた。そのくせ沖賣らうの來ない日は、彼は元氣がないのであつた。全く彼は甘いものに身を

持ち崩すのであつた。
この場合に於ても彼は、ソーツと、自分の棚から、状袋を出して、その中に五十錢玉が一つ光つてゐることを見ると、非常な誘惑を菓子箱に感じた。
「どうしても俺は仕事着と、靴が一足要るんだがなあ」と考へはした。彼は、その全收入を菓子屋に奉公する爲に、仕事着は、一着つきり、靴はなく、如何な寒い時もゴム裏足袋の、バリバリ凍つたのを履いてゐた。そして、ボースンの、ゴム長靴のヘタを利用して、その踵の部分だけを、ゲートル流に履いてゐるのであつた。も一つ、彼が菓子以外に如何に金を出さないか、――出せないかと云ふことを知るには、彼の頭を見ればよかつた。今ではそれははたきのやうに延びて汚れ切つてゐた。ボースンはそれを氣にして、彼に、特に、一圓を理髮代として貸した――菓子屋の來た時に彼はその二割の利子を貪る處のボースンの金を、一圓借りたのである、ボースンも彼には菓子代には決して貸さなかつたが、波田は理髮代と云つた――彼はそれで、一度に金つばを食つてしまつた。
彼は、神樣を便所から見つけた程、菓子の壺には貧乏神がゐると浮してゐた、無し、正月に
なれば、それも何とかなるだらうさ、くよくよしたものでもないや」
彼は自分に言ひ譯をしながら、沖賣らうの姐さんの所有に屬する、菓子箱へと近づいた。
「どうだね、うまい菓子があるかね」
「みんな、うまいかすだわね」菓子屋の姐さんは、東北辯全出しで答へた。
波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。
室蘭では、東洋軒と云ふ、室蘭一の菓子屋が作るだけであつた。彼はそのケークホールへ、その恰好で平氣で押しかけるのであつた。
存分に食べた氣のしない中に波田は五十錢の豫定額だけを食ひ盡した。それ以上は借款によるより外に道がないので、彼は止むを得ず、小倉が歸つて來るまで待つことにした。
波田にとつては、一切の慾望の最高なるものを菓子が占めてゐた。
若し三上がゐるとすれば、沖賣らうの姐さんは、ボースンと、大工と、三上との共同戰線の下に、可成り頻繁に苛められるのであつた。彼女は、それを覺悟で、二重に猿股をはいて、挑戰し、彼女のパンを得べく沖賣らうに來るのであつた。
彼女は、實に氣の毒な程醜かつた。それは形容するのが慘憺な位に醜い女であつた。年は二十三四位に見えた。彼女は、女に生れたことが全く不都合な事だつた。彼女がその髮を延ばして置いて、鏡に向つてその髮を結ぶ時に、きつと彼女は自然を呪ふだらうと想はれた。彼女と一緒に本船の火夫室へ來る沖賣らうは、彼女とは全で違つてゐた。年は同年位であつたが、彼女は北國に見る美人型であつた。
彼女は、水夫たちから、殊に、彼女を見るも氣の毒な位に恥かしめる、ボースンや大工等は、彼女が、「印度猿」に似てると、むきつけて、さうであることが、不都合極まることのやうにほんきに、彼女を罵倒し、そして恥かしい目にからかつた。
彼女は、それでも一緒になつて、キャッキャッとはしやぎながら、自分の商賣の菓子箱の覆るのも忘れて、抵抗したりふざけたりするのだつた。
彼等は、薄暗いデッキの上を、小犬のやうに轉り廻つてふざけてゐた。
彼女が菓子の外に、彼女の肉をも賣ると云ふことを、波田は耳にしたことがあつたが、それ

は想像するだけでも不可能のやうに思へた。彼女は女性として男性に持たせ得る、どんな魅力もないやうに見えた。汚い男よりも醜い彼女であつた。

だのに、彼女は、矢張り、噂のやうに菓子以外のものも、提供することか、ズッと後になつて波田にも分つた。それはボースンの部屋であつた。

これは、蜘蛛と蜘蛛とが、一つ瓶の中で互に食ひ殺し合ふのによく似てはゐないだらうか。

だが、その日は、それ等のことは一切起らなかつた。彼女の菓子は、食事の済んだ水夫等によつて一つ一つ摘まれた。

ボースンと大工とは、彼女を、波田の寝箱の中へ押し倒すことだけは形式的に忘れなかつた。波田の寝箱の隅では負傷のために腐り、痩せたボーイ長が、未だ呻いてゐるのであつた。

波田は、ボーイ長に、朝鮮飴を二本買つてやつた。ボーイ長は涙を流して喜んだ。

疾病や負傷や死までが、生活に疲れ、苦痛に馴れた人たちにとつては無視されるものだ。生活に疲れた人々は、その健全な状態に於てさへ、疾病や負傷の時と余り違はない苦痛に充されてゐるのだ。人間がそれ程であることは何のためか、誰のためか、何故それ程に人間は苦しまねばならないのか、それはこゝで論ずべきことぢやない。

面白いことは、この沖賣らの娘は、おもてのコックと後になつて、――四年もこれの書かれた後――二週間だけ一緒になつて世帯を持つた。二週間の後彼女はコックのために酌婦に賣り飛ばされて、夕張炭田に行き、コックは世帯道具を賣つて、ある酌婦の家へ入り婿となつて、彼自身沖賣らうになり、日用品や、菓子などを舟に積んで、本船へ持つて來るやうになつたことだ。が、これはズッと後の事だ。

水夫達の食事が終ると、ボースンは、チーフメートの處へ仕事の順序を訊きに行つた。

チーフメートは、クレインが來るから、それまでのあひだに、ボイラーの方を用意して置けと命じた。

ボースンはおもてへ歸つて來て「今からハッチの蓋をとるぞ」

そこで水夫等はデッキへと出て行つた。

二七

おもてはストキから、ボースン、大工まで、全部出て行つたので、後は傷を負つて、空しく一週間余りを暗室――それは殆んど暗室であつた――の、寝箱の中で悶え苦しんだ、ボーイ長の安井と、おもての通船のおやぢと、それから、沖賣らうのその娘とだけになつた。

沖賣らうの娘は、波田の寝箱の縁へ腰かけてゐた。サンパンの船頭は、ストーヴの前へ腰を卸して、皆默々としてゐた。

おもての、デッキでは、ビームがデッキへ打つ突かる音や、ウヰンチの廻る音などで、全で船全體が太鼓ででもあるやうに響き返つた。

ボーイ長は、自分では大して自由にならない體を持ち扱つて退屈し切つてゐた。

「姐さん、わしに少し菓子を呉れないか」ボーイ長は勞れ切つた聲で囁くやうに云つた。

「アヽ、びつくらしたよう。だれかをるだがよ、こゝに」と彼女は飛び上つて、ボーイ長の寝室を覗いた、そこにはボーイ長が確に寝てゐるのであつた。

「あ、見習ひさんでねえか、びつくりしただがよ」彼女は菓子箱を持つて來て、ボーイ長の前へ擴げて見せた。

ボーイ長はそれを三十錢買つた、そうして、うまさうに、貪り食べるのであつた。

「船頭さん！　俺今日陸へ上りたいが連れてつ

てお呉れよ」ボーイ長は船頭へ聲をかけた。

「あゝ、いゝとも、お女郎買かい？」船頭は素晴らしく大きい體の、氣のいゝ五十恰好の爺さんだつた。

「うんにや、わしや怪我したので、病院へ行くんだ」彼は今度こそ病院へ行けると思つた。

ボーイ長は思ふのであつた。「わしの怪我をしたと云ふことは、もう誰も彼もみな忘れてしまつてゐるのだらう。わしの怪我をしたことは、全く他の人たちにとつては些細な事なんだらう。だが、それや餘り不人情だらうと思はれる。殊に、私の足は膿んでしまつて、痛くて堪らないんだ。わしは今日は、何とーても船長さんに願つて、病院へ入院させて貰はにやならん。私の體は、私が大切にしないで、誰が大切にして呉れ手があらうか。私は船頭さんに病院まで負つてつて貰はう。私はもう、何から何まで自分でやらなけりや駄目だと知つたんだ」

「船頭さん、室蘭にいゝ病院があるの？」ボーイ長は訊ねた。

「あゝ、いゝ病院があるよ、室蘭病院てのが、山の手の高い所にあるよ」

「そこまで、波止場から、どの位の道程があるの」

「さうさなあ、十二三町位なもんだらうな」

それでは迚も一人の力で負つてなんぞ行けない。と云つて、此處では橇でもなければ迚も駄目だが、それも一寸あるまいし、もし船長が身を入れて呉れないと、今度こそは、自分は航海中に死なねばならないだらう。

「市立病院かい、それは？」ボーイ長は訊ねた。

「市立ぢやないけれど、公立だよ」船頭さんは答へた。「だけど、どうしてまた怪我などしたのかい」と訊いた。

「ほらこの前の航海ね。室蘭を出帆する日からしてえらい暴化だつたらう。あの航海に、舵機の鎖とカバーの間に食ひ込まれたんだよ」ボーイ長はその時の様子を、こゝで初めて語り始めた。

「その日、俺はともの倉庫にキャベツを出しに行つたんだよ。おもてのおやぢが、とつて來いと云ふからね。で、キャベツを三つ宛[illegible]へ入れて、コック部屋の方へデッキを歩いてると、船が急に傾いたんで、[illegible]つたよ。それから[illegible]つてた[illegible]らしたから拾つて、つい鎖の方まで入つてしまつたんだよ。その時に舵機がぐら／＼と動いたもんだから、私や鎖に食ひ込まれてしまつてカバーの中へ體を半分入れたらしいんだよ。それで俯向けに引きずられたもんだから、胸をひどくデッキへ叩きつけたらしいんだよ。わしは、ボーッとして氣を失つてたから、足を食ひ込まれて、ひどくやられたことだけは知つてゐたんだけれど、こんなに胸や手やなどが痛むとは、助けられてからでも思はなかつたんだよ。だけど、足はもうすつかり癒つても、ビッコをひかなけれや歩けないだらうと思ふし、どうしていいか分らなくなるよ。俺あ、體より外にもとでがねえからなあ、びつこを曳くやうになつちや、車も曳けないからねえ、さうかつて學問をする學資はないしね、家にや未だ子供が八人も居て、小作の親爺はおふくろと一緒に、それこそ眞つ黒になつて働いても、どうしてもやつて行けねえで、小さな子まで子守奉公に出してあるんだよ。だから俺、少しでも稼いで家に送らうと思つて、收入がいゝと云ふ話を聞いたから、船に乗つたらこんな始末だらう。今後どうしてやつて行つたらいゝか分らなくなつて了つたよ。こんな時、[illegible]貧乏しても矢張り、父さんや母さんがゐると、[illegible]いけないなあ」と語つて後はホロリとした。

勞働力を賣つて生活するこの青年も、今はその賣らうとする勞働力に、大きな障害を與へられたことについては、どこかはつきりしない憤懣を心の底に感じてゐるのであつた。彼は、負傷後イヒチオールを二三回塗布され、足のガーゼを二三度自分で取り換へただけであつた。彼は傷の疼痛のために、非常に衰弱してしまつた。彼のその疲れは、彼の神經を極度に疲勞させた。

水夫たちが、仕事に出て行つて、おもてに誰もゐなくなると、彼は、今まで貯めてゐた苦痛の叫びを擧げるのであつた。彼は、四六時中に呻でも唸つた。そして自分の前に、仕事の時間を入つた。彼の足の痛みは負傷後五六時間を經て、甚しくなつて來た。彼は、その濡れた紙のやうに力なく疲れた體を、寢箱の中から危くデッキへ落ちるやうにまで悶え狂つた。

彼は狂人のやうに叫んだ。そして、それは、彼自身でも、意識に上つては、非常にハッキリした意識を持つてゐたが、纔かに、それだけの方へのみあらゆる神經を集めたので、自分の悶えや叫喚には、ボンヤリしてゐるのだつた。

水夫等は歸つて來て、この苦悶の様を見ると「餘り暴れると、却つて傷が惡くなるから、もつと我慢してをれ。」と、慰めるよりも外に道がなかつた。水夫等はボーイ長の負傷に對して、非常な同情の念を一様に感じてゐた。それは、彼が怪我をしたのが、彼の過失だからと云ふのではなかつた。又、負傷したのが彼だからと云ふのでもなかつた。それは、ボーイ長が自分の負傷について、神經を全く疲勞させ、身を呪ひ世を呪ひ、遂には絶望的に自分の足までも呪ふやうな、それと全く同じ感情が、水夫等にあつたからであつた。水夫等は、それを意識するとしないとに拘らず、そこに、泣き喚き、狂ひ回り、のた打ち回る自分自身の運命を、朝も夜も、食事にも眠りにも、焼けた鏝で當てられるやうに、ジリ／＼と感じないではゐられなかつたからである。それから逃れる術はなかつたのである。

水夫等は、自分の負傷のやうに、ボーイ長の負傷によつて陰氣にされてゐた。そして自分の負傷のやうに、いら／＼させられた。彼等は、それから逃れようとして、焦つてゐた。冷淡な、無關心な態度は、彼等が鍛へられた神經を持つてゐることと、もう一つは、馴れてゐることと、今一つは、その自分自身の運命を、あまりにハッキリ見せつけられることから、免れようとする心から出たことであつた。

波田は、石油罐の一つに切つたので、便器を拵へて、彼と、ボーイ長の寢箱とが┐形をなしてゐる隅へ置いてやつた。

安井は、何も見えなくなると、その便器へ用を足した。その時の彼の努力は全く夥しいものであつた。彼は、用を達した後は、疲勞と疼痛とで失心したやうな状態に陷るのであつた。

彼は、一切のことが、二度目であると云ふやうな幻覺に囚はれるのであつた。それは丁度、濁つた方解石を透して物を見るやうに、一切がボンヤリして二重に見えるのであつた。彼は、ズッと遠い以前からの歴史も、また、たつた今何か考へた刹那的な考へも、二度目であるやうに思つた。その一度は、どこで經驗し、どこで考へたかと云ふことを、彼は考へ廻るのであつた。さうして、そこには、彼の以前の生活があつた。貧しい、苦しい小作人の子としての絶え間なき窮乏の生活が、それも、一町の耕を以て實感させるのであつた。小學校時代の暑中休暇のことが、彼の今の負傷して寢てゐる狀態と、ゴッチャになつてしまつたりするのだつた。丁度俺は二度目だ。一度はぼんやり怪我のことを考へてゐるのであつた。「俺はあの時、外の誰もが休んでゐるのに俺だけは、父と二人

で田の草をとりに出かけたつけ。休まねばならぬ時に、俺は、煮え沸る田の水の中で草除りをしたつけ。俺は休む時を持つて生れなかつた。だが、あの時俺は怪我をしたつけ。そして休んだつけ」それから、彼の哀れな、疲れ切つた意識は、彼を暑中休暇の田の草とりから、彼を厳寒の萬壽丸へ引き戻してしまつた。そして彼はまた呻き悶え狂はねばならなかつた。

彼はその疼痛の絶頂に於ては、感ずるのであつた。

——こんな苦痛をハッキリ味はねばならないつてのは、何て惨酷なことだらう。それよりも、もつとひどい苦痛を、もつとぼんやりの方がいゝのに、などと、會體の知れぬことを感じるのであつた。だが然し、必要もないのに、彼に、これほど長い間苦痛を、わざと見せつけることは、明かに、船長の[illegible]から來たことであつた。

船には、その船員に對して、會社から、傷病費の豫算が請求に應じて提供されてあるのだ。だがそれは、高級海員の家族の病氣療養費、或は特別收入と云つた方が正當であつた。そして、そのための支出から、かくの如き場合の負傷は、船長によつて「節慾」せられるのであつた。

船に於ける一切の事は、船長だけが土耳古の回々教の殿堂内に於ける、サルタンと同樣に知つてゐるだけであつた。より緊密でないことが高級海員に知られてゐた。そして、勞働者たちは、自分たちに會社から支拂ふ處の食料費がいくらであるか、それすらも知らなかつた。

若し搾らうとするならば、搾られる者が「何か——それは極めて詰らぬことでいゝ、二と二とを加へると四となると云ふことでも——知つてゐると云ふことは、それより惡いことを、搾るものが見つけるのが困難であらう。詰り何でも知らなきやいゝのだ。知つてゐると理窟が多くて困るのだ！　かくておもての「ゴロツキ」共は、完全に何も知らなかつた。自分の手帳まで事務所に取り上げられて仕舞ふのであつた。そして、序に判も。かくて、彼等は、ゴロツキにされてしまふのであつた。

そこでは、何でもふんだくる者が紳士であることは、十八世紀の英國のゼントルマンと些も變ることはなかつた。そして奪はれるものは、いつでも、ゴロツキであるのだ！　全く奪はれるものは、いつでも、ゴロツキであるのだ！　奪ふものと奪はれるものとのある間、ゼントルマとゴロツキとは絶えないのだ！　―生存權すら主張が出來ないことは、どんなに、ボーイ長を苛立たせたことだらう。そこに人間の生命の疾患に對しての、病院がいくつも甍を並べてゐるのに、彼はそのまゝ、横濱から又船で戻つてしまつたのだ。そして、それは船長が自分の船のボーイ長が怪我をしたことなどは、チーフメートから聞いたまゝ「忘れてしまつた」ことが原因かも知れないのだ。又はそんなものを病院なんぞに入れることは勿論、その怪我が癒らねばならない」必要を認めない、ことに起因するかも知れないのだ。そして、きつとさうなのだ。

それは確にさうあるべきだ。何故ならばそれは「階級」と「身分」とが違ふからであつた。それは又何故かならば「階級」と、身分」とは人間と猿とを距てるよりも、もつとひどく人間と人間を距て、隔離したからだ。

かくて、ボーイ長の負傷は、水夫等に何とはなしに、陰惨な印象を與へ、白内障の眼に於ける障害のやうに、いくら拭いても拭いても除れなかつた。そして、それはこのゴロツキ共を、常闇に紛れ込んだ針のやうに、時々チク／＼とつゝ突いた。且つ針は、いつかは餘りの痛さに「ゴロツキ共を[illegible]上らせずには置かないのであつた。

ボーイ長は、自分にとつて何よりも尊い自分の生命のために、相手は[illegible]であれ何であれ、

「今日と云ふ今日は交渉しようと決心した。そしてそれは藤原に相談すべきであると思ひ決めた。

二八

一方水夫等は、ボイラー揚陸のために、ハッチの蓋をとり、ビームを外した。そして彼等は、マストの内部にとりつけてある足場を傳つて、ダンブルの中へと降りて行つた。それは嚴重に荷造がしてあつた。水夫等は、それが航海中ゴロゴロ暴れ出さないやうに、それをしつかり据ゑ、方々から引つ張るための作業の困難で、迚も面倒臭かつたことを思ひながら、それを取り外すのだつた。取り外しは、取りつけから見ると、比較にならぬ程手輕に行つた。

クレインは今、室蘭驛の機關庫の見える方から、その怪物のやうな圖體を、濛々とランチに引つ張られて、萬壽丸を目がけて近づいて來るのであつた。四角な浮箱の上に、二十五噸の重さの物を引つ張り上げるだけの力と、骨組とを持つた鐵の腕と、ウヰンチが装置されてあるのだ、けし粒ほどの小蟻が黄金蟲か何かを引つ張るやうに、小蒸汽はそれを曳きなやみつゝ、じりじりと近づいた。

船の方では、いつでも、引き上げられるやうに、ボイラーはそのあらゆる拘束から釋放された。今はたゞ大きな腕が、自分をその牢獄から引き出して呉れるのを待つ許りだつた。

クレインは近づいた。そしてその偉大な腕を、ヌッと本船のハッチの上へ差し延べた。それから、ワイアロープがブラ下つて來た。そのロープの先端には人間の腕廻りほどの太さの鉤がついてゐた。この鉤自體が一人では迚も動かないのであつた。そこへ持つて來て室蘭では、この種の荷役に馴れた仲仕がゐなかつた。その巨大な鉤が上からブラ下つて來て、下から何でもひつかゝりさへすれば、引き上げようとしてゐるのに、仲仕はたゞ間誤々々するだけであつた。

水夫たちも荷役に手傳つた。が、何にしても足場は、ボイラーの圓いペンキ塗りの上である。辷ることとこの上もない處へ、それを縛るワイヤロープは、腕の太さほどあるのであつた。間誤つくとワイアに、跳ね飛ばされねばならぬ破目になるのであつた。おまけに鉤は一人で動かない奴であつた。從つて作業が甚しく困難であつた。

處が、船長が、このボイラー揚陸に當てた時間は、極めて短いのであつた。それはチーフメートも心得てゐた。チーフだつて正月は横濱でしたかつたことは云ふ迄もないことだ。かく從つて、これも、ボイラーを急いでゐた。かくの如く二重にボイラーは急がれてゐたが、仲仕は人數が少い上に、横濱の仲仕ほど馴れてゐなかつた。なか〳〵仕事は捗らなかつた。チーフメートはハッチに片足を載せて、

「そのワイアを引つ張るんだ！ 異ふ！ そつちからこつちへだ！ ボースン、そのワイアをあれへかけて引つ張るんだ、そら、シャックルが外れた！ 駄目だ！ ボースン！ 馬鹿！ 違ふ！ そらホックをかけて、ヒーボイ、チェッ、また外れた。スライク、スライク！」彼は眞つ赤になつてせり賣りの商人のやうに怒鳴りまくつた。

彼のこの焦躁にも拘らず、ボイラーはクレインからのホックに、些とも引つかゝらうとしなかつた。チーフメートは、自分の聲で、ホックをワイアに引つかけようとでもするやうに、だんだんその聲を大きく張り上げた。そして、鉤の大きいのは、ボースンや水夫達の責任ででもあるやうに、ボースンや水夫たちを口汚く罵り始めた。

紳士の番頭はその地金を現した。
「大工、何故隠へ行く、そのワイアを抜くんだ！ ボースン、何だ、まいまいつぶろ見たいに、グルグル廻つてやがつて、グル／＼廻つたつて、ボイラーは上りはしないぞ、どこへ行くんだ、そこ、馬鹿！」全でボースンが馬鹿であることをはやし立ててゐるのであつた。

ボースンが、上から見るとただ、ボイラーの周りをグル／＼廻るだけのやうに見えると同様に、チーフメートはボースンの周圍をグル／＼廻りながら、「ボースンが馬鹿であること」を、ハツキリ飲み込ませてしまつたより外には、何もしなかつた。

ボースンは默つてしまつた。どこから手を出していいか、分らなくなつてしまつたのだ。

藤原はボイラーの上に上つて、鈎が當然引つかかるやうな状態になつて來るのを待つてゐた。そして彼は、事實から、餘りに意氣地のない、ボースンと大工が、チーフメートに糞味噌に罵られてゐるのに對して、癇癪を立てた。

「ほんとに貴様等は馬鹿だ！ 奴隷でもそれ程卑屈ぢやないぞ！ 水夫等から月三割も撥ねやがつて、臆病！ チーフメートの野郎、なにか俺に云つて見ろ！ 思ひ知らしてやるから、畜生の高利貸の丁稚奴！」

彼は、それこそ、抜けかけたボールトのやうに、ボイラーの上に突つ立つてゐた。

ホツクはうまく彼と、向ひ合つて立つてる波田との間へ下りた。波田は嘸程の太さの、ワイアの鈎穴を持ち上げた。それは一秒間とは持ち續けることの能きない重さであつた。藤原は、ホツクを、彼の體の重みを凭せて、波田の持つてゐる鈎穴の方へ搖がした。それは丁度そこへ行つたが、少し足らなかつた。

駄目だつた！ 嵌らなかつた。

何だ、ボケナス、どうして嵌めないんだ！ 馬鹿！ 止せツ！」チーフメートは頭から、ストキへ罵聲を吐きかけた。

「波田君、降り給へ！ チーフメートが止せと云ふ命令だ」そのまゝ藤原は、ボイラーからワイアを傳つて飛び下りた。波田も續いた。

「どうした、ストキ、どこへ行くんだ！ 畜生！」

チーフメートは全で狂つてゐた。

藤原は下へ降りて、西澤をデツキから見えない處へ呼んだ。

「君、仕事であれでやれしまい、馬鹿とか、止せとか、怒鳴り散らされて、え？ 止さうぢやないか、俺達も、船を横濱まで着けないで下船しちやはう、馬鹿々々しいや！ 奴隷おやねえや」藤原はジロリとボースンを睨んだ。

「止せ！ 止せ！ 全く、こんなボロ船いつだつて下りるぜ」西澤も贊成した。

「ストライクか、それや、是非やらにやならないこつた」波田も贊成であつた。

チーフメートはデッキの上で、餅を喉につめでもしたやうに、慄てゝしまつた。

ボースンは下で癪を起しさうに青くなつた。そして、ストキの處へ飛んで行つた。

「ストキ、どうしたんだね、何か腹の立つことでもあつたのかね」ボースンは全でチーフメートがもう一人出來た、と云つた樣にソワ／＼しながら訊いた。

「ボースンは些とも讀つてゐない樣だね。俺たちも、チーフメートから、仕事を止めろと命令されたから、今やめた迄の話さ。そして、荷役も明日はもう止さう、と云ふことに決めたんだ。陸から、そのために本當の仲仕があるからね、それに、仲仕の前で、あゝ我鳴られちや仕事も能きないしね」藤原は答へた。

「そんなことを云はないで、酷な、後で何とでも話をつけるから、氣を直してやつてくれ、ねしなんぞはどうだ、まるで畜生だが、頼む、な、

ストキ、やつてくれ」ボースンは、自分が畜生のやうに云はれることを知つてはゐたのだ。だが、ボースン對チーフメートの關係と、水夫對チーフメートとの關係は全で違つてゐた。

前者には、高利貸とその手代と云ふ關係があり、後者は、高利貸と債務者と云ふ關係であつた。

「やるもやらぬもねえぢやないか、吩咐を守つて、止めてるだけのもんぢやないか、ボースンもこつちから大分やめろと云はれてゐるやうだが、止さないと後で又うるさいだらうぜ」

又ボースンにとつては、どちらにしても、後でうるさい、面倒な事になつたものであつた。

ボースンは、ストキから、西澤、西澤から、波田へ、それ〳〵に頼んで廻つてなから、一生懸命で、仕事をして呉れるやうに頼んだ。

デッキでは、チーフメートは青くなつてしまつた。彼は樣子が惡いことを見てとつた。然し、どうにもならなかつた。クレインの方では、チーフメートの合圖一つで、いつでも捲き上げようと、腕をたくし上げて待つてるのであつた。ボイラーの上に、チーフメートの合圖を待つために、人のことながらウロ〳〵してゐた仲仕たちは、俄にボイラーの上から、水夫達も下りてゐて、ぼんやりしてしまつた。

二九

チーフメートはデッキから、「ボースン!」と怒鳴つた。

ボースンは、愈々慌てゝ、愈々急にその禿頭を撫でて、頼むのであつた。「ソラ怒鳴つてる! 後生だからこのボイラーだけ上げてくれ。その後でいくらでも話はつくぢやないか、ホラ、また喚いた。頼む、ストキ、西澤、な波田頼む」

彼はこんなことを喋舌りながらも、チーフメートの前に隠して、その度に、マストの梯子まで驅けて行つては、又、驅けて戻るのであつた。「ね。おい、やつてくれるだらう。な、おい、頼むぜ」

「俺たちはチーフメートの命令で止めただけのもんだ。ボースンからそれつて云はれたつてどうも、やるわけにや行かないぜ」ストキは頑張つた。

「困つたなあ、ほんとに、チョッ! 畜生、おしは今一寸チーフメートさんが呼んでるから上つて來るから、その間頼むよ。いゝかい。俺を助けると思つて。な」

ボースンは發育不良な、東洋人のジョーカー見たいな恰好で、マストにとりつけてある梯子を上つて行つた。

三人の水夫は、そこに腰を下してしまつた。彼等は、彼等だけが偉大であると云ふことを知つた。僅か三人のセーラーであつた。而も、それが、たゞ何とも云はずに、ボイラーから下りただけであつた。それだけなのに、このボイラーが動かず、あのクレインが空しく待ち、仲仕が徒手傍觀し、本船の出帆が後れ、チーフメートは青くならなければならない。

そして、これは、たゞ勞働を一時中止すると云ふだけの簡單な理由からなのだ! そしてこれは、社會の一切の根本は、勞働者の勞働によつて、維持される、と云ふことを示すものだ。極めて簡單であるのに、我々の知らされない、唯一の事實なんだ!

水夫たちはこんな風に感じて、煙草に火をつけた。

藤原は、西澤と波田とに、「これは未だ何でもないんだ。俺等は、こんな細かい理由でストライクには移らない。これは、勞働者の創作的の準備だ。ストライキは實作的な計畫に進れば、必ず失敗するんだ。然し、これでも、相に依ると俺たちのストライキが、日本にはなし

かも知れないけれどね。ストライクの總成員三名なんてのは、古今未聞だらうね
一僕等は、然し、この船の船長や、チーフや、ボースンには、あらゆる機會に反抗しなきやならないんだぜ。船長チーフメートは共謀で、俺達宛の食費を、會社から前月末に受取るものだから、それをボースンに月二割で、おもての者に貸しつけさせてるんだぜ。見ろ、だから借金しないと、給料も上らないし、受けが惡いぢやないか。向う半年も頭なしの奴はどん／＼給料が上るぢやないか、奴等は、借金の利子を回收する爲だけで、給料を上げるんだ。だから、彼等は俺等に女郎買を奬勵するんだ。借金があれば、月二割の途方もない利徑があるのと、それに頭を上げられないし、足止めすることも出來るんだからな。だから藤原君なんか、いつまで經つてもストキなんだ。だから波田君なんざ、僕よりもいつも進給が遲いんだ」西澤は自分たちのことを僕に話した。全く藤原はその驚くべき獨學の努力のお蔭で、學校出の船長などよりも、遙によく社會的事情にも、一般學術的常識にも、通じてゐた。

小倉は藤原から、英語、數學、その他の學科を習つた。彼は高等海員の試驗を受ける積りで勉強してゐるのであつた。小倉も頭はよかつたので、一年餘りでナショナルリーダーを五まで上げてしまひ代數は高次までやつてしまつたのであつた。そして、船長にしろチーフにしろ、頭腦が明晰な爲に、その地位を得たのではないことを知つたのだつた。だが、小倉は、自分の位置を、高めることによつて、酷使と隷屬と侮辱とから、逃れようとしたのであつた。そして、それは結局彼一人を救ふことすら至難であり不可能であることがあらゆる努力を盡して後、彼を敗殘の身にしたことに依つて分つたのであつた。彼は非常に壓迫を憎んだが、身を挺して反抗しようとする代りに、權力の壁にくつついて身を隱さうと企んだため、卑怯になつたのだと、水夫達から云はれてゐた。

ボースンはデッキから下りて來た。そして三人が煙草を喫んでゐる處へ來て、チーフメートは非常に憤つて、直ぐに下船を命ずると云つてゐたが、自分はやつと賴んで、止めて貰つて來たから、どうか、一服したらすぐに荷役にとりかゝつて貰ひ度い、さうしないと、チーフメートは、すぐボーレン、代りを連れに行く氣でゐるのだから、と云つて來た。

藤原は、產業豫備軍が海員に於ては、組織的に、ボーレンに依つて動員準備されてある、且つ事情不明のためストライク、ブレーキングが平氣で行はれることを知つてゐた。そしてこの場合もそれが行はれ得ることを知つてゐた。で、彼は、仕事につくことが得策であることを知つた。

「それぢや、一服したらやると、チーフメートへ返事して來てくれ」と、譯なくストキが承諾したので、躍り上つたボースンはデッキへ上つて行つた。

藤原は、西澤と、波田とに、形勢は全く不利であるから、これは時期を見なければいけない、これほどの少數で、完全に勝つためには機會を握ることが第一だ、その時は今ではない。だから、その時を待つて力を示すために、今は忍んだ方がいゝ、それに今はなんでもないことなんだからと、種々と話をした。

—だが、今はいゝ時だがなあ、正月前だし、横濱にはギリ／＼に歸れるかどうか、と云ふ時なんだからなあ。條件が揃つてゐるんだがなあ、たゞ冬であるつてことが惡いだけだ。ボーイ長は雇入れなしで負傷させて打つ捨つてあるし、俺達は、全く馬車馬か何樣かで甘んずるなら、それでもいゝだらうけれど、——それに、

いま時分、室內に休む者はありやしないと思ふんだがなあ」と波田は主戰論を唱へた。
「だから、今は仕事をしなければならないんだらう。今は、室內に休んでる者があるか無いか、ハッキリしてないから、今は仕事をしなければならないんだらう。その代り、今夜上陸した時に、僕等は休んでる者が有るか無いかを探ることが能きる。で、若しゐないと云ふことになれば、出帆間際に船を動かさないことが能きるだらう。横濱まで、電報でセーラーを呼ぶにしても、いくら早くても、四日や、五日はかゝるだらう。おまけに正月だ。正月早々なんだ。ね。それに、ボーイ長を今日とう云ふ風に取扱ふか、それを見なくちや、若しボーイ長に對して、全然船から救護しないと云ふことになれば、僕等は海員部の方にも檄を飛ばして、全船の問題としなければならないと思ふ。

まづいのは、三上の問題が、未解決で殘つてゐることなんだ。船長側では、それを仕掛の種に使ふだらうと思はれるんだがね。

要するに、ほんとに、僕等の力がその一切を現し得るのは、一切の奴隷的條件が、僕等に痛切に感得され、彼等の野獸的殺戮振りが暴露される時だけなんだ。その時は、當分來ないか、又は明日の朝來るかは、僕等が、ヂッと見張つてゐなければならないことなんだ。ね。だから今よりも、いつか、もつと彼等の暴虐が露骨に現れて、われ〳〵の生命を直接にも、――間接にも顧慮することなく、反つて損傷すると云ふ事實がハッキリした時の方がいゝだらう。と、僕は思ふんだがね」藤原は條理を盡してその本質と、作戰とを述べた。

ボースンは降りて來た。衆議は一決して、藤原と波田とはボイラーの上に、西澤は、船底でそれ〳〵の仕事の持場についた。

ボイラーは、ハッチの口よりも長かつたので、非常にその作業は困難であつた。けれどもその日の夕方には、三本のボイラーをうまく無事に積卸すことが出來た。

偖、それから、萬壽丸は、高架棧橋の、石炭漏斗の下へ、そのハッチの口を持つて行かねばならなかつた。

三〇

ボイラーが、艀へ積み込まれると直ぐに、わが萬壽丸は、高架棧橋へ横付にするために、錨を卷き始めた。

錨を卷き始めると、おもての室の中は、一切合切ガラ〳〵に絡んでしまひはせぬかと、氣が揉めるほど震動した。轟き亙つた。ボーイ長は、その弱つた神經が壞れるのを、心配するやうな恰好で、耳に栓をするのだつた。

水夫室の眞ん中にある蓋をとると、その下が錨鎖の入る箱（チェンロッカー）になつてゐた。それはすつかり鎖が出切つた時、其處の廣さは、横六尺、縱六尺五寸、高さ十尺位であつた。

そして、それが二つ並んでついてゐた。上で捲き上げる鎖は、デッキの穴を通つて、この箱の中へ送り込まれるのであつた、それをこの箱の中では、波田が、一々、鎖を順序よく並べなければならなかつた。さうしないと、鎖が穴の下へ溜つて閊へてしまふのである。

波田は、この箱のドブ〳〵の中へ、カンテラを提げて入るのであつた。そして、金棒の先の鉤になつたのを、落ちて來る鎖に引つかけては、順序よく並べねばならなかつた。それは急がねばならぬし、力のいることだし、狹い處だし、濡れてゐて辷ることだし、暗くはあるし、油煙は立つし、息苦しくはあるし、そして、また、時々鎖から鉤が外れると、肘で後ろの壁を力一杯つき飛ばすのであつたし、鎖が一杯になつて來ると、彼は、鎖の中に危く身を構へ

て、それに挾まれぬやうに作業しなければならなかつた。これは一航海に一度でもうんざりする仕事であつた。それを、彼は、昨日の朝から、二度目であるのだ。

波田は暗い顔をして、チェンロッカーへ下りて行つた。彼は全く、そこへ入る時は地獄へ、下りて行くやうな氣がするのであつた。

彼はチェンロッカーについて悲慘な物語りを聞いてゐたが、それは、いつでも彼がチェンロッカーへ入る場合に、彼の記憶の中から、ムク／＼と起き上つて來ては、彼を脅すのであつた。

それは一九一〇年代の事であつた。英領植民地のシンガポーアの、マレーストリートとバンダストリートとの二街に、赤色煉瓦の三階建の長屋が兩側に向き合つて續いてゐた。その長屋は全部日本人の娼婦の居る家であつた。そこは、日本內地の大都會、例へば、横濱とか神戸とかに於ける遊廓よりも、數も多く、規模も遙に大きかつた。その頃は密航はチェンロッカが多かつた。それは、密航婦であつて、陸を食ひつめた無頼漢などが、自ら乘りになつてゐた。そして、船員なども女衒のやうな事もしてゐたのが多く、これ等の船員と結託しては密航婦を、シンガポーアだとか、ホンコンだとか、又はアントワープだとかの遠方までも、大仕掛で輸送したものだ。その運賃は高率であつて、それに食費は向ふ持ちであつて、おまけに船員が航海中最も惱む處の性慾に對して、密航婦を積む以上、好都合なことはなかつた。

密航婦はどんな狀態でも、我慢しなければならなかつた。哀れな彼女等は、フォーアピークの中で、窒息して死んでしまつた程にも、我慢しなければならなかつた、彼女等はビール箱の中で五晝夜も、云ひやうのない狀態で、半死のどたん場まで我慢しなければならなかつた。

殊にチェンロッカーと彼女等との關係は慘鼻を極めた。それは、密航婦を船長とボースンが共謀で、チェンロッカーの中に隱したのであつた。チェンロッカーは、出帆した最後、入港までは用のない處なのだ、その暗室の鎖の上へ、彼女等は、蓆を敷いて寢てゐたのだ。彼女等はシンガポーアで上陸して、その遊廓に賣られるのであつた。水火夫等は毎夜、そのチェンロッカーの蓋を開けてやつた。彼女等は、運動に出された[illegible]のやうに喜んで、おもての船員たちの室へ來て、出して貰つた禮として、××××××××××。

彼女等にとつても、その航海はビール箱や、フォーアピークなどよりも、××であつたに違ひなかつた。船員たちは浮れ氣味の航海を續け、彼女等は一日も早く、動搖しない大地を踏みたいと希つてゐた。

ところが、ホンコン入港の時は、密航婦を、フォーアピークへ移しかへることを忘れなかつたボースンは、何と考へ違ひしたものか、大切のシンガポーアで、有頂天になり過ぎてゐて、密航婦を、チェンロッカーから出すことを忘れてしまつた。

そこで狀態は、投錨の際に一度に惡化した。鎖の各片、人肉の各片、骨の各片、髮の破片ともつれつゝ、くんつして、チェンホールから、或は虛空へ、或は鎖と共に海へ、十三人の密航婦を分解、粉碎して、はね飛ばしてしまつた。錨甲板に立ち竦んでゐたボースン、大工は勿論、水夫、チーフメート等は肉漿を頭から浴びた。

波田は、チェンロッカーが、そんな歴史を持つてゐることによつて、その陰慘な場所を結構不快でいやな、寒い[illegible]いものにした。それを思ひ出すと、彼は全くチェンロッカーに入ることが、何よりも嫌であつた。そして、入つて來ると、一片々々が、今で、自分を狙つてすんでも來るやうに感じるのだつた。

彼は肉體的には勿論であるが、精神的にもこの上ない疲勞を感じて、チェンロッカーから上つた時は全で溺死しそこねた人のやうであつた。

その仕事着には海底の粘土が、所きらはずにくつついてゐて、彼の手や顔は、それで彩られて、隈取りしたやうに見えた。顔の色は鋼鐵のために土色であつた。心臓は無鐵砲に、跳ね上つた。頭が重く、眼が眩んで、彼は、暫くデッキへ打つ倒れるか、その邊にあるどんな物へでも、打つ倒れるのが例であつた。

誰もが、このチェンロッカーに入らなかつたならば彼は働き得ないのであつた。波田は、彼れとても心臓に苦しみながら、どんなに多く其へ、少し間でもあるかを思はずにはゐられないのであつた。

「彼等は死ぬほど苦しんで、こんな有様だのに。働き抜いて、住みもしない別莊を、十も持つた人間が、この船を持つてゐるのだ！」

資本家は斯くして機械の一附屬物になることが能きた。

棧橋の上には、夕張炭田から、地下の坑夫等の手によつて、掘り出された石炭が、幾百の貨車に満載されて、船の上の漏斗へ來ては、それを吐出して歸つて行くのだつた。

數十間の高さに、海中に突き出してゐる高架棧橋上の驛夫や、仲仕の仕事は、例へやうに困る程寒いものに相違なかつた。

人はストーヴにあたつて、暖かいコーヒー、暖かい肉を攝るべき時候であつた。そして多くの勞働者は、それを作り出すために、各々、危險と鼻面を突き合せて、凍え、飢ゑ、佗びながら、勞働してゐたのであつた。で、一切はお芽出度く、その通りに進行し、幾千代かけて長閑なる年の初めが、十日の内には來るべきであり、又、芽出度くも暦さへ間違ひなくば來るのであつた。

そこでブルジョア共は新年宴會をやるのであつた。二次會が開かれるのであつた。

が、そんな處まで、話を飛び越えてはならない。

三

ボイラーを吐き出すと、すぐに飯を食つた水夫達はそのまゝ船首甲板へ上つて、棧橋積込の作業にとりかゝつた。ボーイ長は、食事の時に藤原に頼んで、

「今夜は是非病院へやつて貰ふやうに、船長に頼んで呉れませんか、もうこの上とても辛抱がなりません」と云ふのであつた。

「いゝよ。だがね、今から、棧橋だから、棧橋へついてからにした方がいゝと思ふよ。それに先づ、そんなものはどうでもいゝとしても、順序つてものがあるさうだから、ボースンに一度話して、ボースンから最初に話し込んで貰つて、僕も、その時、一緒について行つて話をつけたらいゝと思ふよ。ま、何にしても、苦しいだらうが、今夜まで待つて呉れ給へね。今度は僕も、その積りでゐるんだから」と藤原は快く、請合つて呉れた。ボーイ長は非常に喜んだ。

棧橋は、馬蹄形の灣にも、その後ろなる山にも、高嶺も、みな、美しく、厚い、雪で念入りに蔽はれ、雪面を吹きまくる北海道の風は切れるやうに痛かつた。

萬壽丸は棧橋へついた。棧橋の雪はそのまゝ長い間を、船のハッチの中へ流し込まれた。それから白い雪の代りに黒い石炭が積込まれた。

船員たちは、船長から、水夫に至るまで、自分を、完全に縛りつけてゐる、その鎖を下る家庭から、解放しようとして、それぞれ準備に忙しかつた。

船長は、室蘭から少し内地へ入つた官舎を、又、酒場へ、室蘭の街中は必ず潜り込んでゐる

た。そこには、彼の妻や子供の代りに、彼の愛妾がゐるのであつた。

一般に北海道に美人が多いかどうかは、分らないが、然し、飛び拔けた美人を時々、我々は北海道で見る。色が「拔ける」程白くて、顏立の非常に高雅な美人を、われ〳〵は、雪に埋もれた山腹の遊廓にさへ見出すことが出來た。それは寂しい情景であつた。船員たちにとつては、彼等の手に負へない夢幻的な情緒であつた。從つて水夫たちにとつては、それは本能的な、肉慾的な、一對照より以外ではなかつた。

彼は、今夜も、そこへ行くために、汽車の時間表と睨めつこをしながら、支度を急いでゐた。

船長が、そのダイアモンドのピンを、ネクタイに「優雅」に插さうとしてゐる時に、純白の服を着けたボーイは船長室の扉を叩いた。

「何だ？」船長は怒鳴つた。

「ボースンとストキとが、お目にかゝりたいと云つて、サロンで待つて居ります」

「用事だつたらチーフメートへ話せ、と云へ」

彼はピンの恰好について、研究を續けた。ボーイはそこに待つてゐた、ボースンとストキに、その由を傳へた。

「それぢや、と、ボースンは、それをいゝしほに、ストキに云ひかけた時であつた。

「どうしても、會はなきやならないんだ！　是非、會ひ度いつて、も一度取次いで呉れ給へ」ストキは、ボースンを抑へてボーイに云つた。

ボーイは、「何だい一體」とストキに訊いた。

「なあに、一寸會つて話せばいゝことなんだよ」

氣輕に藤原は答へた。

「奴さん、登別に行くんで、急いでるんだよ」

「ところが、こつちはもつと急ぎの用事なんだ、一寸頼む」

ボーイは再び船長室の扉を叩いた。

「是非お目にかゝり度いと云つてゐます」

「駄目だ！　時間がないんだ！」船長は鏡の中の自分に見入つてゐたが、チェッと舌打ちをした。「うるさい奴等だ、用事は何だと訊いて見ろ」馬鹿野郎奴等が、と、彼は考への中でつけ足した。――手前達全體の運命は横濱までだ。代りのボースンはもう横濱まで來てるんだのに、馬鹿野郎等が――船長は虹羅共の低能さに對して、一寸冷やかしてやつてもいゝ、と云ふ氣を起したほどであつた。

「ボーイ長の負傷の手當をするために、室蘭公立病院へやつて頂きたい、と云ふのださうでございます」

「ボーイ長！　そんなものは駄目だ、と、さう云つとけ」何だ一體ボーイ長の負傷とは、馬鹿な。そんなものが船の費用から出せるかい。箆棒な。冗談も休み〳〵、機を見て云ふがいゝんだ。時もあらうに、自分等の首の運命の決してゐようと云ふ時に、それに今は上陸間際ぢやないか、ゴロツキ共奴が！　船長は、ボーイ長が負傷をしたことを、今、言はれて見て、思ひ出すには出したのであつた。そして、それは手當をしなければならないであらう。――が、――それはこんな場合では勿論ない筈だ！　と彼は思つたのであつた。

一體それはいつのことだ。横濱でやるべきではないか、今頃になつてそんなことを云ふのは因縁をつけると云ふものだ！　然し、これは彼の思ひ違ひであつた。横濱では船長に話す間がなかつたし、それに、チーフメートは、船長に相談してからにすると云ふので、横濱では、フイになつたのであつた。

船長は、登別の溫泉に、彼女――それは全く美しい若い女であつた。そしてそれは、白樺のやうに、山の匂の高い、澄んだ溪流のやうに作爲のない、自然人であつた。――をしつかりと、そのあらゆる力と情とを蒐めて、彼女を抱き締め

ることの回想と豫想とで、血腥い、汚れた現實的な、ボーイ長の問題なんぞは、その餘地を頭の中へ置き得よう筈がないのであつた。

「どうしても、それが必要なら、それはチーフメートがうまく片をつける事柄なんだ！」船長は、ズボン——押し出してしまつた後の繪の具チューブかなんぞのやうに、ピッタリ一重にくつついた——の中へ、足を通した。

「北海道ぢや、寸隙がない、すが／＼しい氣持なもんだ。ズボンの折目の立つてゐるのは——彼は、片足を前へ踏み出すやうに振つて見た。

「上等」それで彼のズボンの試運轉は通過した。

彼は十八の少年のやうに急ぎながら、彼女に與へる指環を、自分の小指へ光らしながら、理想的に船長らしい、スッキリした立派な服裝と、その姿勢とを、サロンデッキへ現した。

そこには、その寒さにも拘らず、ストキとボースンとが立つて、彼の出て來るのを待つてゐたのであつた。彼はハッとして立ち止つた。

ボースンは、とつ摑まへられた、コソ泥棒見たいに、しきりに尻ごみしながら、ストキに摑まれ、圍まされて待つてゐたのであつた。が、彼は一體、何を云へばいゝのだ！　彼には言ふべきことはなかつた。怪我をしたのは見習であつて、女房子を持つた哀れな、老いた彼ではなかつた。

「俺はこの船を放り出されたらどこへ行くことが能きるんだら。橋の上か、菜場かだけぢやないか、俺は今は、俺のためよりも、子供等や家内のために、働いてゐるだけのものだのに、俺は、……ストキは全く困つたことをさせるわい。見習の怪我と俺と一體、何の……そりや關係はあるにしても、船長が一度いかんと言つたものをナア……俺は、第一寒くてやり切れないや」

ボースンは、ストキの顏を切端詰つて拜むやうに眺め、そして又、船長に慌てゝ敬禮をした。

船長は默つて行き過ぎようとして、タラップの方へ歩みかけた。

ストキはボースンを小つ酷くつゝついた。ボースンは眼だけをハチ／＼させて、口は固く噤んでゐた。それは一秒遲くてもいけなかつた。續いて第二發目のストキの拳固がボースンの横つ腹へ飛んで來た。と同時に、

「船長」と太い、低い、重々しい聲が壓へつけるやうに、ストキの口から呼ばれた。

そして、ストキは、ボースンを打つ捨らかしたまゝ、船長が今下りてゆかうとする前へつゝ立つた。

「船長！　水夫見習の安井昇つてのが負傷したのは知つてますか、それが、今日は病院へやつて貰ひ度いと云つてるんです」

「それがどうしたんだ」と船長は頭の尖から、足の爪先まで、ストキの長さを眼で測量した「上陸禁止にでもなつてゐるのか、さうでなかつたら、今日でも明日でも病院へ行けるぢやないか、だが何だつて、お前はそんな處に立ち塞がつてるんだい」船長は、暴化の時に、夜中、深海測定をやるのと同樣に、嚴密に、幾度も幾度もストキの長さを、全く腹が立つて頭の熱くなる程の、熱心さと冷靜さとで測定した。

藤原はそのあらゆる激怒と、憤懣とを、船長の前で、そのしつかり踏んだ足の下に踏みつけて立つてゐた。

「だが、負傷手當を船から出すべきぢやありませんか。それに、足を負傷して寢てゐるものが、この雪の中を歩いて行くと云ふわけにも行きませんからね。俸賃と、診察料とを拂つて下さいまし。それに、……」

船長は、爆發した。

「負傷手當を船から出すべきだ？　べきだとは何だ！　べきたとは！　そんな生意氣な横柄な

ことをいふんだつたら、どうとも勝手にしろ、俺は、手前等に相手になつてる暇はないんだ！　馬鹿な！」

船長はさう怒鳴りつけると、そのまゝ、桟橋へと下りて行つた。

藤原は自分の足の下に踏んでゐた癇癪玉を、そうと、矢つ張り抑へつゞけた。彼はアハ、、ハ、、と、船長の後ろ姿に向つて哄笑を浴せかけた。

船長は桟橋の上へ飛び上つた。ポケットで金が鳴つた。彼は、ひどく怒りはしたが、先を急いでゐた。「明日、片をつけてやるから」と自分をなだめながら、桟橋の闇へと消えて行つた。

彼は、暫くすると、殆んど全速力で駈け足に移つた。何だか、メスが、自分の心臓に向つて光りきらめいて気になつてならないのであつた。この頃はどうも、をかしい。奴は――藤原――、どうもよくない傾向だ、彼は、後を振り向いた、狐のやうに神経を鋭敏に振り向いた、桟橋は黒く、真つ暗であつた。本船の停泊燈が、彼の方に寒さうに悲しく瞬いてゐた。

やがて桟橋が尽きて、公園に出た。雪は二尺餘り積つてゐた。道路に小溝のやうに深く二筋の道が踏み固められてあつた。

室蘭の町は魔窟のやうに、雪の夜の中から薄く瞬いてゐた。人魂のやうに街の燈が、港の水に映つてゐた。呪ひの声を投げて黒い波をつき刺した。彼は外套の襟を立て、首巻を耳まで巻いてフルスピードで停車場の方へと急いだ。

停車場は室蘭の町をズッと深く入り込んで、馬蹄形の一端に寄つた方にあつた。淋しい、終発駅であつた。停車場は高台の低地にあつて、その上の方には、遊廓の燈が明るく光つてゐた。

冷酷な、荒涼たる自然であつた。その前では人は互にくつつき合ひ、互が、互に温め合ひ、扶け合はねばならないやうに感ぜしめられるのであつた。

何だか、人なつつこくなるのであつた。

船長はストキの顔を反撥して、全然別へ引きつけられた。そこでは彼は自然の冷酷から暫く逃れ得るのだ！

ストキは噛くやうな笑を船長に浴せると、そのまゝぐるりと振りかへつて、おもての方へ歸つて行つた。

ボースンは、前をとつて行つた。

おもてでは大工は、ボースンの来るのを、起きてをすつかり濡まして居り、水夫達は皆部屋へ帰るのを待ち草臥れてゐた。

藤原は、おもてへ入つた。食卓の前のベンチへ倒れるやうに腰を卸した。

「どうだつたい」と皆は訊いた。

「駄目だ！　今度はチーフメートだ」と彼は答へた。若し彼は、彼がボーイ長が診察を受け、治療を受けるだけの金を持つてゐたならば、チーフメートへなんぞ、何も交渉に行く必要はなかつた。その結果は、餘りに彼にはハッキリ見え透いてゐる。けれども、彼が若し、ボーイ長を自分の費用で連れて行き得ない限りは彼はありとあらゆる手段を試みる必要があつたのである。

そして、それは、又、彼を救ふと同時に、ボーイ長を絶望から、暫くでも引き止めて置く處の、唯一の残された方法なのであつた。

「チーフメートの方もどうなるか分らないから、若し、それが駄目だつたら、おもてで出し合ふつてことにしよう。さうすることは、今まで幾度にロハで呉れてやるやうなもんだが、この際仕方が、外にあるまい。そして大丈夫だチーフも駄目だと思ふんだ。船長の許さないものを他は、と云ふに相場が極つてるんだ。だから、一人當り幾円位か金を集めて置いて呉れないか、それはボースンに預けよう。今持ち合せのない者

は、ボースンに立て替へて置いて貰ふこと。と
いふことにしてゐたらいゝだらう。ね、僕は、チーフの室へ行つて来るから、頼みますよ」
彼は出て行つた。浅田は、彼が出て行つて、暫くすると、ボースンに、十円貸して呉れと頼んだ。そして、五円をボーイ長に預いて、五円を懐へしまひ込んだ。そして、彼は、デッキを通つて、チーフメートの室の附近へ行つて、藤原の安否を聞かうと試みた。然し、チーフメートの室は固く扉に鍵が下されて、人の気配がしなかつた。彼はサロンデッキを一廻りした。けれども何事も、そこでは起つてはゐなかつたし、又、藤原もそこにはゐなかつた。
浅田は――それでは、藤原君はどこへ行つたんだ？――と思ひながら、おもてへ帰つて来た。
藤原はもう帰つて来て、水夫達に、チーフメートは、船長よりも先にサンパンで、海から上陸した後だつたことを報告した後であつた。
そこで、ボーイ長をどうしよう、と云ふ相談が水夫等と、四人の親友との間に行はれた。

三二

相談の結果、病院が夜では都合が悪くはないかと云ふ動議のあつたため、成程、それは其の方がいゝだらう、では明日午前中に、行くことにして、序と云つては済まないが、この事件の最初からの關係者として一番懇意な浅田君とに、上陸までついて行つて、貰はうと云ふことになつた。金は五人の水夫と、四人の親友と、一人の大工とで二圓づつ出せば、二十圓あるから、それで、若し必要ならば入院させて、ともで入費を持たないと云ふやうなことであつたら、おもてで持たう、その代り、ともの奴等は覺悟をするがいゝや、と云ふやうなことになつた。
安井は、その汚い、暗い、寒い寝箱の中で、その自分の疼痛のために、時々聲を挙げながら、一生懸命にこの成行きを聞いてゐた。そして、藤原のその程の努力にも拘らず、また、明日に延びたと聞いて、彼は心持ち上げてゐた、その頭を又ぐつたりと落してしまつた。今夜は病院へ行けると云ふ、彼にとつては唯一の喜びが消えてしまつたのであつた。彼は、今までと同じ一夜を又、この暗室で苦しみ通さなければならないと云ふことに、眞つ黒い絶望を感じたのであつた。
然し、何ともならなかつた、事情は彼も聞いてゐた通りであつた、「とも」の人間にとつては、彼は、その生命でも一顧の價値なきものだと云ふことが、念入りに繰りかへされて聞かされたに過ぎないのであつた。そして、彼は、自分の生命が消えど、生れ落ちてから、一顧の價値だもなく、それは高度にみつけられた量が大きくなるやうに、大きくなつたのである。いつでも、彼の生きてゐることは、外の誰かの生きてゐることと、その人この分配の時に、恐ろしく窮屈な思ひをしなかつたことのなかつた、彼の全生涯――僅か十八年ではあるが、その中の僅かに十円、五年を占める――を、その傷の疼痛と共に、彼に手痛しく思ひ知らせた。
「いつそ、産れなければよかつた」と思はれる程、或は事實に於て、その人間を餓死か、凍死かに導くやうな、「いつそ、死んでしまつた方がましだ」と痛切に感ぜざるを得ないやうな状態が、何故存在するのか？ そして、それは永久に存在しなければならないのか？
一方には腹が空かない「と云ふ病氣」のために、薬を飲む階級があり、一方には飯が食へないと云ふ「病氣」のために死ぬ階級があると云ふことは、地球が丸く出来てゐることと同様に、何とも仕様のないことであらうか？ それは時が、種を植ゑて居り、その種が生えて居り、既に實

つて居る處もあるのだ、だが、傍路へ入つてはならない。そんなことは餘りに分り切つたことなのだ。それは矢つ張り、飯の食へない、健康體の人たち、卽ち勞働者たちが、命じられてゐる仕事の一つなのだ。

藤原は、ボーイ長の寢箱の傍に腰を下して、今日の顚末を話した。種々とその成行きを述べて、から云つた。

「勞働階級は、君の場合のやうに、ハッキリ現れた場合だけ、資本制生産のために、その生命の危難に面すると云ふことを覺るのだが、それは實はもう遲すぎてるんだ。賃銀勞働者であることが、既に××を搾取されてゐることなんだ。だから、工場法にだつて、生命を失つた場合に、その生命に對する支拂額のミニマムが決めてあるぢやないか。それが、勞働力、云ひかへれば、人間の生命力の搾取に、その基礎を置いてなつてゐるものであるならば、それが、どんな形に於て生命が消耗されようと、ブルジョアジーにとつては、驚くべき理由がないだらう。君の生命は、君にとつて永久に大切であるが、ブルジョアジーにとつては、君の××が搾取され得る間だけ、役に立ち得ると云ふだけなんだ！　產業豫備軍は無數だ！　彼等は今、一切殘らず、さう云つた境遇の下にあるんだ、そして、お互に嚙みつき合はうとしてゐる。馬鹿な話だ、僕等は、生きる道を探るのだ。君の、今の直接の生きる道が醫者にかゝることにあるやうに、勞働者階級は、階級としての、生命の道へ眞つしぐらに進むべき時なんだ！」

それは、ボーイ長へ話してると云ふよりも、彼が一人言を云つてる、と言つた方が正當であつた位だつた。

波田、西澤、小倉などは未だ上陸をせずに、一緒に、彼の話を聞いてゐた。

水夫では、波田、コーターマスターでは小倉が、今夜の當番であつた。

波田、小倉、西澤、藤原と、四人の中で、酒を飮むのは西澤だけであつた、後の三人は酒よりも甘いものであつた。特に波田と來ては、前にも云つたやうに、菓子のために一身を持ち崩すほどだつたのだ。

「みんなで、東洋軒へ行つて、お茶でも飮みながら、話をしようか」と、藤原は、皆が自分を待つてゝくれたのか、——上陸を十分延ばすことが、どんなに辛いことかは、讀者は船長の例で知つてゐる筈だ——氣の毒になつて、皆を菓子屋へ誘つた。

「よからう」波田は、懷中の三圓——その月末には二割の利子で月給から天引きされる處の借金——を抑へながら叫んだ。

皆は揃つて出かけた。出がけに、波田は、ボーイ長に言つた。「すぐ歸つて來るよ。菓子を買つて來るぜ、待つて給へよ。そして、明日は、午前中に病院へ行くんだ！　すぐ歸るからね」

彼は三人の後を追つかけて、棧橋へとタラップを、猿のやうに傳つて飛んで降りた。

西澤たち三人はタラップを降り切つた處で彼を待つてゐた。

それは寒い夜であつた、水夫たちは不完全な防寒具で、皆震へ上つてゐた。オーバーを持つてゐたのは藤原と小倉とだけであつた、彼等は、どこかの古着屋で、それを買つたのだ。藤原のは上着の大き過ぎる位に小さかつたし、小倉のは米一斗袋に三升詰めた位にダブ／＼してゐた。

彼等は馬蹄形の海岸を一列に並んで、默々として歩いた。首が痛かつた。風は頬を刺して、首の神經をひどく刺戟するのであつた。水夫達は、彼等が貧乏であるために、必要以上に苦しまねばならないことを思つてゐた。

「メリヤスの新らしいシャツが一枚あれば　波

田は、どの位暖かいだらうなあ」と思ひながら油と垢とでガリ〳〵になつたズボンのポケットの中で、拳固を力一杯で握り固めたり、延ばしたりした。

西澤はオーバーが無い代りに、スエーターを着込んでゐた。それは、買ひ被つた綿製の物であつた。「随分商人はひどいことをしやがる」もつとも、彼はそれに一圓三十錢を夜店で出したと云ふことは、餘り吹聴はしない方が賢いと思つてゐた。

かうしてめい〳〵が甚しく貧弱な防寒具の下に、甚しく寒い、寂しい、荒涼たる、一言に云へば、と云つても、云ひやうのない、さうだ、それは死にいやでも應でも考へを押しつけねば置かない關係、即ち、プロレタリア對資本家の、本能的の寂しさの中を、四人は、港の街の淋しい通りの、明るい二階で暖かいお茶と、お菓子とが待つてることを思つて急いで行くのであつた。

石炭は、驛から迂廻して來た鐵路のある山腹の切開町、それから高架線、それ等が萬壽のかかつてゐる方へ並行してゐた。積まれた石炭の上には雪がすつかり塗り上げをしてゐた。處々に、人足の休憩所兼監督の詰所の交番様のものが「遠い」であつた。

彼等は、石炭と海との親不知、石炭と石炭との山の狭間を通つて夕張炭山へ續いてゐる鐵道線路を越して、室蘭の市街へ出た。その街は、晝も夜のやうに寂しい感じのする街であつた。方角を忘れてしまつたが、室蘭製鋼所のある反對側、棧橋を上つて右の方へ大通りを淋しく歩いて行くと、道が、上中下三段位に分れて、山の側面へ各々の家の並びを持つて並行についてゐる。その中段の通りへ、東洋軒と云ふ、この町で見付けた初めビックリしたほど、立派な「文化的」な構へと「文化的」な菓子とを賣つてゐる店があつた。硝子製の立派な箱が十五六、その廣い鋪に並べてあつて、その中には、外國人がクリスマスに食べるやうなパイや、その他種々な生菓子が並べてあると、一方の棚の中には、栗饅頭や、金つばや、鹿の子などと云ふ東京風の蒸菓子が陳列してあつた。その店の間から靴を脱いで、階段を昇ると、二階二間がホールになつてゐた、入つて左側のは、大テーブルが一つと椅子がいくつか置いてあつた。右の室は日本室で六疊であつた。

セーラーたちは、テーブルの方の室へ、油だらけな同勢を押し込んだ。けれども東洋軒は驚かなかつたと云ふのは、波田は、いつもその恰好で來て、必ず二圓位は食つて行くからであつた。

テーブルには白い布がかけてあつた。それを力をいれて指で擦ると、黒くなるのであつた。どんなに手に石鹸をつけて輕石で磨いた後でも！　彼等はそれで用心をした。金つばと、栗饅頭とを小僧さんがお茶と一緒に持つて來て呉れた。

彼等は、全で飢饉地方の住民のやうに、飛びついて、食べた。殊にその中でも、波田は仲間からさへ驚嘆されるのであつた。然し、彼等がそのものを要求するのは、囚人が甘いものを寶玉よりも數十倍も數千倍も、比較にならぬ程望み、欲しがるのと同じことだ。

何かを人間から、奪ふならば、忽ち奪はれたものが、奪はれたものにとつては一番切實な要求となり、願望となるのであらう。光線を奪へば光線、空氣を奪へば空氣を、活動、音聲、嗜好品、それ等は、それが奪はれるまでは第二義的であつても、奪はれると同時に、それは一切第一義的な慾望に變るのだ。自由を奪はれたものは自由を生命より尊いと思ふやうになるものだ。

菓子には、銀色の小さなフォークが楊枝代り

についてゐた。紅茶のコップは銀のスプーンがついてゐた。彼等は、これ等の器物を汚さないやうに、氣にしながら、忽ちの中に第一の皿を空けて、第二番目が註文された。

三三

彼等は甘いものに對する渇望が消費された。そこでボーイ長へ持つて歸る菓子が註文された。それから彼等は、ボーイ長の負傷について、「とも」の取つた態度について、我々は、どう云ふ形に於て抗議するか又、三上のやうな、事件を惹き起さずには置かない、船長の滅茶苦茶な態度に對して、そしてこれ等のことを交渉するならば、勞働時間もハッキリと決めて貰ふこと、それに賃銀が下で相場外れだから、も少し上げて貰ふこと。――當時歐洲大戰亂時代であつて、石炭は水夫たちの寝るべき室にまで詰め込まれた程であり、從つて、汽船會社の利益は全く莫大なものであつた。――それに、日曜でも何でも出帆入港でもされゝば、それで休日はおじやんになるが、それは休日を翌日廻しと云ふことにして貰はう。これ等のことは、是非片をつけるべき性質のものであり、又つけねばならない狀態に、われ／＼は追ひ迫られてゐる。

そこで、これ等のことを何時、交渉を始めるかと云ふことの話が、彼等の間に、西澤によつて口を切られて問題になつた。

「それは、交渉をチーフメートに對してやるか、又は最初つから船長に對してやるべきものか、それが問題だね」と小倉は言つた。

「勿論それは決定權を持つてゐる船長との最初で最後の交渉にならねばならんだらう」藤原が答へた。

「君の言ふやうに、それが最初で最後であると言ふならば、交渉を拒絶された場合には、どうなるんだらう」小倉はその點を怖れてゐた。若し交渉が不調になつたりした場合、同盟下船とでも云ふことになれば自分は明に乘船停止を食ふだらう。さうすると、自分は高等海員の免狀をとる資格が失くなつてしまふんだ！ 彼は苦しい立場にあつた。彼は若し、高等海員になつて稍多い收入を得ないならば、山陰道の山中で、冷酷な自然と、殘忍なる搾取との迫害から、その寒村全體が寒さのために凍死し、飢餓のために餓死しなければならないのであつた。

彼の村は、山陽道と山陰道を分ける中國の脊梁山脈の北側に、熊笹を背に、岩に腰を卸して死にかゝつてゐるやうな、人煙稀れな險岨な寒村であつた。その村の者は森林の産物をその生活資料としてゐた。處がそれ等の森林は國有林になつて終つた。そこで、その村の者は、監獄へ行くか、餓ゑるかと云ふ二つの道のどちらかを取るやうに強ひられた。小倉の生れた村の小徑とも、谷川とも分らない山徑は、監獄の方へ續いてゐた。僅か三軒の家を以て成り立つてるこの村は、その各家から戸主を監獄へ奪はれた。村から最年少は六つ、最年長十六の間の、十三人の男兒は滅亡に瀕してゐる故郷を救ふために、社のやうに神寂びたその村を後に、世の中を目がけて飛び出したのである。そして、村に金を送る代りに、村から勞働力を搾られに來たと云ふ形なのであつた。

で若し、彼が、これに參與して、この企てが失敗するならば、彼は、今まで三年間、全力を傾倒してそれに向つて進んだ高等海員どころでなく、下級船員からさへもその職業的生命を奪はれることになるのであつた。

彼は三上とサンパンを押した時にも、同様な感じを味つた。深い煩悶と、人生に對する疑問とが彼を無數の網のやうに包みとり卷いた。

「これは鬪爭になるだらう。僕等は、何等の武器も持たないから、たゞ固まつて、何にもしな

いだけの方法をとるだらう。さうすると、會社では給料止めして、乘船停止を食はすだらう。事に依れば棧橋から直ぐ監獄へ續いてるかも知れないよ」藤原は答へた。

「それは僕等の生活の破滅にはならないだらうか、いや、僕等だけではなく――僕等の背後にある老人や幼兒たちの運命を破滅に導くだらう。僕は僕の故郷のことを考へると、どんな忍耐でもやりたいと思ふよ」小倉は彼の窶れた氣の毒な心の中に、涙と共に浮ぶ考へを述べるのであつた。

「さうだ！　君は君の故郷の爲に最大の忍耐をなし得た時に、君は君の時と同じ最大の力で同胞を殺戮し、それからパンをも失つたと云ふ結果を見ることになるんだ」藤原は殆んど冷酷そのものゝやうな顔付になつてゐた。そしてその眼だけは火のやうに燃えて、光つてゐるのであつた。

「さうは思はれないよ。僕が今職業を失へば、僕の故郷ではどんなに嘆くか知れやしないよ。それだけではないんだ。僕の家では食ふ物に困つてしまふんだ」小倉は感情が昂ぶつて來た。彼の眼には、彼が村を去る時の悲愴な光景が涙に曇つて浮んで來るのであつた。

「同盟する！　勞働者は殆んどすべてが、罷工することも能きない地位につき落されてゐるんだ！　あらゆる組織が俺たちを簀巻きにしてゐるんだ。そして、俺たちは首を切られても罷工も能きないんだ。直立不動の姿勢を保つて、毆つても、蹴られても、それを崩せない新兵よりも俺たちは苦しいのだ。資本制は、勞働者に一人殘らず狹窄衣――監獄で狂暴な囚人に着せる革の衣類、それを着ると、體の自由が利かなくなつて、非常な苦痛を感じる――を着せて、手錠・足錠を嵌めて居るのだ」藤原は、その眼だけがますます燃え上つた。が、額はそれと反對にだんだん血の氣が褪せて青ざめて行つた。

「だが、小倉君、君はどつちにしても誰かの死には、關係しないわけには行かないだらう、ボーイ長は、自分のパンを求めに來て、鉤のついた餌を食つた魚のやうに、自分を生かす爲の犠牲に打つつけてしまつた。それが、今の問題なんだ。これはボーイ長にその形をとつて現れたのだが、パンを得るために、船乗りになるなどと言ふことは、鉤のついた餌に釣られる魚と同じことなんだ！　それは殆ど全部に、僕に當りのない運命なんだ。われわれには、鉤のついた餌より外には、どこにも餌がないのだ。君も二度まで沈沒船に乘つてゐたと云ふぢやないか、その時に、若し萬一君が死んでゐたら、どの位君の家族は嘆いたゞらう。若しその時に、君が誰かに救はれなかつたとしたら、君は、その嘆きを家の者にかけなければならなかつたんだ、さうではあるまいか。それは、どこへ行つても餌に鉤がついてるから起ることなんだ。

ただが、小倉君、君の言ふことは分る。僕等は馬車馬のやうに生活するか、餓死するかどちらかなんだ。ほんたうに、僕等が、僕等の持つてゐる偉大な力に、自分から氣付く時の來るまでは、徒に、僕等は犬死にをしなければならないんだ」上陸の時以外に彼等が口にすることの能きない一杯の紅茶は、彼等を昂奮せしめたやうに見えた。藤原は自分でもさう思ひながら自分に追つかけられて話しつゞけるのであつた。

「分つたよ、藤原君。僕等は、一足飛びに飛ぶことよりもヂリヂリ進む方がいゝんだらう。自分だけがブルジョアにならうとするよりも、成功しなくてもプロレタリアの頭上で倒れた方がいゝんだ。僕には、それがよく分るんだ。そしていつも理屈だけは解つてゐるんだ。だが、僕には、その勇氣が、決斷が、信念がないんだ！　唯の臆病者なんだ。僕は！　卑怯者なんだ！

だが、僕は、今度は、やるよ、やつて見よう！　コーターマスター四人をも起たせて見よう　僕にも漸く分つたやうな氣がするよ」小倉は、滿く厄介なものを拂ひ除けた、と云つた風な顔付をして殘つてる菓子を摘んだ。
「それで」と西澤は口を切つた。「誰が船長に打つつかるんだい」彼は、全つ切り默つてゐるわけにも行かない場合に喋舌るやうな、それと同じ氣持で、同じやうなことをそこへ吐き出した。「僕等がそ連も一方打ちが能きねえから、矢つ張りストキに頼むんだね」
「おやあ、今夜要求條件を作へて、それに全部で連印して、それを船長に提出しようぢやないか」波田が云つた。
「いゝだらう」皆が賛成した。
「だがそれはいつやるか？　その時を選ぶことが、勝つも負けるも、時を選定すると言ふことになるだ。僕は思ふんだ、殊に、船長は歸りを急いでるからね。正月は目の前だしね。俺たちの用事がなくなつた時に、俺たちが力を示さうとしたつて、それや駄目なことだから」藤原は、實戰家としての提案をした。
「だがさつきも言つたことだが、要求が容れられた時はそれが、大體を頼むんだね」小倉はそれを訊いた。「始めることになれば、俺も徹底的にやらねばならん」と彼も覺悟したのであつた。
「それは、ストライクが皆の意志で決定されるやうに皆で、決定しなければならない重大な問題だ。要求條件を出しただけでは、未だなんでもないんだからね、それが容れられない時に、怠業するか、怠けるか、下船しちまふか、等の方法がある譯だね。こんな處で下船すると云ふ譯にも行かないから、それも止むを得ない時は勿論、裸ででもこの雪の中へ下りる覺悟はしてゐるんだが、下船すると云ふことは、最後の場合にとつて置いて、さう大切でない時は怠けて、これをやつては絶對にいけないと云ふやうな仕事の日には休業しちまふんだね。これが一番效果の上る方法だと思ふんだ」リーダーは、實戰の鬪士、藤原であつた！
「そんなことは、一體どこで相談をするんだい」西澤が訊ねた。
「それは、若し、コーターマスター全部が承知したら、コーターマスターの室でやらうぢやないか」と小倉が言つた。
「それはいゝだらう」で、本部は三人數に足りない舵取の室を第一の候補地にした。コーターマスターが入らなかつたら、おもてでいゝさ」と云ふことになつた。
「それで、いつ一體やるのかい」波田が今度は訊いた。
「いつがいゝと思ふ」と藤原は反問した。「それは皆が一番いゝと思つた時が、いゝんだ」
「俺は出帆の時がいゝと思ふぜ。出帆の時に俺達が遊んだら、第一ワイアやホーサーが棧橋から外れつこねえんだからなあ。へツへツへ、へゝゝ」と西澤は、戰鬪を開始したやうな氣でゐた。
「さうさなあ――出帆の間際に要求書をブリツヂへ持つて行くか？」小倉が言つた。「これを承認して下さい。何でもないあたり前のことです』とやるか」
「さうぢやないよ。要求書を奴の眼の前へつきつけるんだよ、『さい見えるかい、え、これに判をつけ、さもねえと、正月は横濱ぢや能きねえぜ』と高飛車に出たら愉快だらうね」西澤は云つた。
「出帆の時はいゝだらう。第一、俺はチエンロツカーに入らないよ」波田は、自分のあの陰氣な仕事が、錨の出入に關して、どうしても省略することの能きない重大な仕事であることを、

ハッキリ見ることが出来た。「俺たちを月給泥棒見たいに思つてることは、全で逆つてるつてことをハッキリ思ひ知らせた方がいゝだらうよ」

彼は、何こんなほんたうに、人間として、労働者として、貴い犠牲的な、偉大な事業に、初めて携り得ると云ふ晴れがましい誇と、自信とを感じない譯には行かなかつた。

「だが、これがよし逆つたにしても、これが最後の戦術ではないと云ふことを、よく考へて、なるたけ大事をとつて呉れないと困るよ。たとへばそれは云つたけれど、後で気を鎮めたために、[illegible]が、一人づつ下船させられたなんてことになると、二三週間の中に、又元々通り、[illegible]人間は揃へるし、彼等だつて[illegible]を見なければならないからね。[illegible]は、その時も大切には間違ないが、[illegible]がもつと大切なんだからね」藤原は、[illegible]、折角[illegible]しても[illegible]ですつかり取つてしまはないで、[illegible]この方に[illegible]ときでもすると、埃はすぐに[illegible]出して、前よりも酒くなるやうなものだからね。殊に、[illegible]のやうな持つ[illegible]ないのもは、[illegible]ことを思へはずれない[illegible]、[illegible]ムを[illegible]言つた[illegible]ー

ペンター――大工――のきりはどうするんだね」波田はボースンや大工が裏切り者になりはしないかを恐れた。彼等は俺の中で腐つた目白のやうなものであつた。自分の牢獄を出ることを拒む、その中で生れた子供のやうであつた。彼等は船以外に絶對に、パンを得られない程、船に同化されてゐた。たとへば彼等は、丁度人間當り太さの捻釘にされてしまつたのだ。それは船のどこかの部分に忘れられたやうに捩り込んでゐるのだ。そして、それは大切な捻釘なんだ。だから錆びるまでそこへそのまゝ置かれるのだ。錆びると新らしいのと取り換へられねばならない。

彼等は捻釘の本質に基いて、船長に義務づいてゐるものと見なければならなかつた。

「一條つ程例外でもなければ、あいつ等が船長に叛逆を宣言するなんてことたあないよ」とストキも云つた。

「それやあたり前さ、今夜だつて、ボースン、大工は、チーフメートに大黒樓に呼ばれて、そこで飲んでるんだぜ。勿論奴等あ、捻釘さ。だが船長は[illegible]てこない方が[illegible]なくつていいよ。今度は[illegible]する日さ」西澤は、[illegible]しこくスパイしてゐたのであつた。

「俺達は毎月の收入の五分ノ一宛出し合つて、奴等に[illegible]をさせ酒を飲ましとくんだなあ」波田が言つた。

「では一」藤原が言つた。「要求書は僕が原稿を作つて、それから皆で[illegible]つた上で、清書して判を捺して、それから提出と云ふことにしようね。それまでは勿論、絶對に秘密、併し内容を秘してコーターマスターを説くことは小倉、君に一任しよう。ね、それでいゝかしら」彼は一寸頭を轉く叩いて考へた。

「もういゝやうだね」西澤が答へた。「だが波田君には菓子が、僕には酒と女とが足りないやうな氣がするね」彼は大口を開いて笑つた。「空氣まで寂しさに凍りついたやうな、静けさを破つて、[illegible]は通りへ響いた。

「波田君、どうだい、そこいらにいけるかい」藤原は立ちながら訊いた。

「もういゝよ。でも食へば食へないことは無論ないけれどもね。財政が許さないさ。ハハヽヽ」と笑つた。

四人はおもてへ出た。西澤はひやかして、「一杯ひつかけてくる」と言つて坂を遊廓の方へ上つて行つた。三人は[illegible]て、いつか、そこか外

国の町ででもあるやうな感じを抱きながら、馬蹄管にその船へ向つた。

ボーイ長は波田から菓子の土産を貰つて喜んだ。

三人は、紅茶のお蔭で眠られぬまゝに、ボーイ長の傍で、ストーブに石炭を放り込みながら、前のボースンが、直江津で放り上げられた悲惨な話を、思ひ起しては語り合つた。

三四

それは、こゝに今書くべきことではないかも知れない。けれども、それは書いた方が都合がいゝ。船長とは一体何だ？　それの答への一部にはなるだらう。

それは夏の終り、秋の初めであつた。時々暑い日があつて、又、時々涼しすぎる夜があるやうな時であつた。萬寿丸は同じく吉武船長——これは矢つ張りこの船のブリッヂへ錆びついた捻釘以外ではなかつた——によつて、操ることを監督されてゐた。そして小樽から、直江津へ石炭を運んだ時の、出来事であつた。

午前十時に彼等の萬寿丸は直江津へかゝつた、午後の一時頃であつた。下ろしてだしぬけに嵐にでも打つつかつたか、氷山でも打ち破つたと思はれるやうな突發的な夕立に遭つた。その時、船首甲板には天幕が張つてあつた。それが、その風に煽られて、今にも、デッキごと攫つて行きさうにブリッヂから見えた。船長はすつかり慌てた。そして、あれを取れと、命じた。その時、夕立前の暑さで、おもては皆裸で昼食後の眠りをとつてゐた。そこへ、コーターマスターが驅け込んで「ウォーニン」をとれと傳へた。

波田、三上、藤原、西澤等は元氣盛りではあるし、船長をそれほど「怖れ」てゐなかつたので、猿股一つで飛び出した。仙台と波田とは全裸で、飛び出した。それは風呂のない船に於てのいゝ行水であつた。だが、風が猛烈なので、仕事は頗る危険であつた。ウッカリするとウォーニンの煽りを食つて、海へ飛んで行かねばならなかつた。それにしても、若い水夫にとつては、それは、全裸で暴れ廻ることが「痛快」なことであつた。彼等は終ひには、少々寒くなりながらも、裸でその作業を為し終へた。ところが、妙な船長だ！　ボースンが裸ですぐ飛んで出なかつたと云ふので、ひどくボースンを叱つたのだ！

全くこれは職權外の悪い結果を水夫たちは蒙したものだ。水夫達では、溜船ですらあるまいし、全裸で「船長の見てゐる前で作業することは無禮だと、船長は考へるだらう。だが、ウォーニンを取り外すことは、又急いでゐるんだらう。だから、かう云ふ時を利用して、奴の鼻先に俺等の×を拝ませてやれと云ふ積りだつたのだ。

ところがその晩ボースンは船長から「捻」のぐらつくほど「油を搾られた」のであつた。「そんな風では非常の時の役に立たない、反つて邪魔になる位なもんだ」と云ふんだ。

それにはボースンはひどく悄氣た。水夫たちも、方角違ひの飛ばつちりに、些か、恐縮したのだつた。

だがそれは、問題にならずに、直江津に着いた。直江津の初秋！　それは全く、日本特有の淋しい景色であつた。さらでだに、人戀しい船乗りは、寂しい人なつつこい自然の情景の前で、滅多に来る事のない直江津の陸を眺めて戀ひ慕つた。

只困つたことには直江津の海は極めて遠淺であつて、おまけに少し風が吹くと、そこはのべつたらな曲線をなした海岸であるために、汽船は錨を巻いて、大急ぎで佐渡へと逃げねばならないのであつた。

佐渡へ避難する！　それも水夫セーラーたちには結構であつた。そこにも、珍らしい街、珍らしい風俗があるのだ。

萬壽丸は別に錨を卷いて逃げる望のことはないが、石炭積取の艀船は波で來られないと云ふ、苦りきつたい曖昧な日が三四日續いた。これには、船長はおろか、誰でも癇癪を起した。

さうかと云つて、わが萬壽丸が、不良少年のやうに、ノコ／＼佐渡までも女狂には出かけられないのであつた。

丁度、その時日曜が來た。船長は直江津の艀船ノ膽甲斐なさを、冷かす意味に於て、水火夫全部へ向つて、當番を除いた外の者は、ボート、傳馬とを卸して、練習していゝと云ふ、本船始まつて以來の計畫と壯擧とが發表された。

そこで、傳馬にはデッキ、カッターにはエンヂンと云ふことに振り當てられた。

この計畫が發表されると、同時に、ボースンと、今の大工、三上の三人は逸早く陰謀を企んでしまつた。それは、傳馬を、どん／＼漕いで行つて、上陸して直江津の女郎買を「後學のため」にして、早歸つて來ようと云ふのであつた。そのためには、グツ／＼してると不純な分子萬原の如き、小倉、波田の如きが乘り込んで來ると、いけないと云ふので、氣脈相通ずる火夫長とナムブトー（ナムバーツーオイルマン）とを誘惑して、傳馬を占領してしまつた。これは無邪氣な面白い、企てであつた。この企ては必ず喝采を博すると、彼等は考へた。

直江津の町は、沖から見ると、砂濱から、松が處々に上半身を表してゐて、街は殆んど、その姿を見せないやうな處であつた。それは、隱されると猶見たくなると云ふ人心を劇しく刺戟した。おまけに、誰かが直江津へ一度來たことがあるのであつた。

「こゝの女郎は、皆亭主持なんだぜ！　そして、みんな自分の家を持つてるんだぜ、自分の家へ連れてゆくんだぜ、素人見たいなのや、かと思ふと藝妓も及ばないやうなのがゐるんだぜ。そして、皆素人々々してるんだぜ。全で自分の家へ歸つたやうなものだぜ。日本一だ！　全くこの女郎買を知らない奴は船乘りたあ云へない位なんだぜ」それは、恐ろしく皆の者を昂奮させた。有夫の女郎、素人の女郎！　人に餓ゑた船乘りはもう有頂天にされてしまつたのであつた。それは全で錦繪の情緒ぢやないか。

それは、全く怖ろしいほど、彼等の好奇心をそゝつた。素人の娼婦、一軒を持つてゐる娼婦！　それは全く獨特のものであつた。

この昂奮劑は、恐ろしい偉力を現した。傳馬は直ちに卸された。

彼等は大騷ぎをして卸した。それは難なく、海面へ下りた。そして、三上は、實際直江津の漁夫を笑ふかのやうに、樂々とおもてへ漕ぎ寄せた。ボースン、ナンバン、ナムブトー、大工、と云ふ順序にロープを傳つて乘り込んだ。

櫓が二挺立てられた。三上と大工とがそれを押した。

波の山、波の谷を、見えつ隱れつして、それを漕いで行つた。

そして、そのまゝ、どこへ行つたか、見えなくなつてしまつた。カッターはその後で卸された。そしてこれは、サードメート、チーフメートまで乘り込んで、本たうに漕ぎ方の練習をやつた。「傳馬は」と云つて、チーフメートはカッターの上へ立つて方々を眺めたが、それは見えなかつた。

カッターは引き上げられた。そして日は暮れた。傳馬は勿論歸つて來なかつた。傳馬の連中が、若し、船長を連れて行つてるならば、このやうな問題は起らないのだつたが、船長は船に殘つてゐたのだ。

船長は、叩き落された熊蜂の巣見たいに、かつとなつて憤つた！

自分の細君の姦通を嗅ぎつけた亭主のやうに、その晩、船長は一睡もしなかつた。そして、そのおかげで、ボーイも眠れなかつた。と云ふのは、船長は、のべつに、ベッドから飛び上つては「ボースンは未だ歸らないか、歸つたらいつでもいゝから、すぐに俺の處に連れて來い、分つたか」だの「傳馬は未だ見えないか」だのと、怒鳴り續け、ベルを鳴らし續けたからである。

「全で狂人病室だ！ 看護人は堪らん」ボーイは背中をボリボリ掻きながらこぼした。

全く船長にして見れば、その誇を傷けられ、自分の優越感を裏切られ、自分の特權を蹂躙され、殊に彼さへも未だ遠慮してゐたのに、「女郎買」に行つたことは、彼を「愚弄」すること甚しいものであつた。それは、昔ならば「罪正に死」に相當すべきであつた！

彼は時々ベッドから、飛び上つては、ボーイを怒鳴つた。それは足へ煮え沸つた湯でもかゝつた[illegible]のやうに飛び上るのだつた。そして、彼は[illegible]び上る度毎に、「彼奴等」に對する復讐を一[illegible]思にしようと考へるのだつた。

ボースン、ナンバこ[illegible]出し拔いて、直江津の、自分自身の家を一軒獨立に構へてゐる女郎買に行つたことは、憤怒の餘り、船長を發作的の熱病患者みたいにした。

僅か、然し、この位の事で、何のために、それほどまでに船長が、憤らねばならなかつたか、それは、誰にも分らないのだ。それ程に憤慨しなければならない「理由」を、未だに「發見が能きない」とおもての者たちも云つてゐるのだ。それは多分、「蟲の居處」が惡かつたのだらう。そして、蟲の居處が惡かつたために次のやうな結果になつてしまつた。

三五

その夜は、船長にとつては、全く不愉快極まる長い夜であつた。その夜は、ボースン一行にとつては、全く愉快極まる短い一夜であつた。

そして、おもての者たちにとつては、それは、灰色に塗りつぶされた、懲役囚の一夜のやうに惰力的な一夜であつた。

その夜が明けると、ボースン等は、陸地近くの、日本海特有の[illegible]の中から、その傳馬の姿を見せた。[illegible]は、その[illegible]のやうな色と輝とを持つて、沖の方から[illegible]の方へ捲き[illegible]して行く反物のやうに見えた。傳馬は、陸近くでは、よくこの浪に見事に覆されるのであつた。傳馬は捲き込まれるやうに見えた。が、すぐにヒョコリと現れた。芥子粒のやうな傳馬は、だんだん大きくなつて來た。

止せばいゝのに、ボースン——海賢用の面白い男だつた——は、傳馬の舳につつ立つて、その功を誇りでもするやうにハンケチを振つてゐた。

それは、客觀的には浦島太郎が、龍宮の乙姫樣の處から、歸つて來るのではないかと思はれるほど、美しく、詩的であつた。

黑青い、大うねりのある海には、外には一般の船もなかつた。空氣は甘く、戀人の肌のやうに匂つた。空は海一杯を映した鏡のやうだつた。傳馬の背には、白い砂山の續きの間から松と屋根とが延び上つて覗いてゐた。

一切が澄み渡つて、靜であつた。それは一九一四年のことではなくて、紀元二百年の日本海と名のつかない、前の[illegible]であつた。

そしてボースンは乙姫樣から貰つた箱を提げて、ハンケチを振つてゐた。

ボーイが、船長にボースンの傳馬が見えると報告した時の彼の憤り方の氣持や、態度を説明

するのには、錨を投げる。

彼は、船長室の雙眼鏡を、オッ取つて、ブリッヂに驅け昇つた。彼の雙眼鏡は傷口を擴大した。

「圖々しいにも程がある、奴はハンケチを振つてゐる！」彼は唸つた。

水夫たちも、火夫たちもデッキへ出て、悲慘な孤兒たちを眺めた。傳馬は近づいた。大工は子供を持つてゐた。彼は又聲がいゝのだ。それは、誰でも、聞く者に、母に縋りついて乳を飲んでゐた頃の、甘い追憶を誘ひ出さずには置かなかつた。

彼等は、おもてから、ロープを下して貰つて上つた。

彼等が、まだ上り切らない中に、コーターーマスターが飛んで來た。

「傳馬はそのまゝにしといて、ボースンにすぐ來いつて、船長がさうボースンに云つて、

「オイ、ボースン、氣をつけないと眞つ赤になつて憤つてるぜ」

ボースンは、女房と、六人の子供が、打ち上げられた海草のやうに、ゴタゴタしてゐる、自分の家庭のことを思ひ出してしまつた。こいつあしまつた。行かなきやよかつた」と、彼は思つた。深刻に彼は悔いた。悪いと思つてでなく。より悪いことの原因になつたことを、彼は、……頭をデッキへ打つ衝けたかつた。……心臓が全で肋骨の外側についてるやうに、彼は、動悸がした。捕まつた犯罪人のやうに、彼は、自分の運命が決定したことを直感した。彼は、その破滅に瀕した自分の家で疲れ衰へ弱つた、妻や、子供等と一緒に、飢ゑ凍えてゐる狀態を想像して、震へながら、船長の所へ行つた。

彼の共犯者？達も、霜寄りした魚のやうに、一つ處に集つて、「困つた」のであつた。三上だけが一人その中で、昨夜はいかにして遊んだかと云ふことを、仲間の者に發表する勇氣と、發表せざるを得ない衝動とを持つてゐた。

その話によると、若い船員たちにとつては、その歡びを得たことは、そのために首を切られることがあるにしても、猶且つ非常にいゝ、得難いことであつた。何故かならば、

三上はかう説明した。「ほんとに自分の亭主ののやうに、親切にした」と。

彼等は、人間の「愛」には、譃にもほんとにも、沙漠のやうに渇き餓ゑてゐたのだ。沙漠にオアシスの蜃氣樓を旅人が見るやうに、彼等は「愛」の雰圍氣さへをも索し求めたので。それは「愛」の形骸であつたかも知れない。而も彼等は、それ以上のものを知らなかつたのだ。彼等は、そこへ持つて來て、原始的な制度の殘つてゐる、いくらか何か眞實らしいもののある――それは、彼等の幻影と、極端な想像とから來たものであら――「愛」の一夜を過したのだ。

彼女等が、彼等に、ほんとに人間として、仲間として接近された時、彼女等も、時としては、その夜強い反抗と、自暴自棄とから、涙の多いその女性としての一面をフト、見せることがあるものだ。それは、よくないことであらう。だが、それから先には、癒らないであらう。

船長はサロンに待つてゐた。チーフメートもそこにゐた。セコンド、サードもそこにゐた、陳列されたやうに頭を揃へてゐた、船長はそれ等の人間にとつても、犯すことの能きない人間であつた。從つて、ボースンなどは「陪臣」であつた。

ボースンは落ちて來た蠟火の人形のやうに、ガッカリしてゐた。彼は、ドーアの處へ立つて、マゴマゴしてゐた。彼は躊つてゐたが、死のやうな沈默と、屍のやうな冷たい眼とが集つてゐるたので、「そのまゝ思ひを決めて、中へ入つた。

そこは、全で法廷のやうであつた。そこでは、

善人と惡人とは決定されてあつた。

ボースンの爲たことは、論ずる餘地がなかつた。

「お前に下船を命ずる！ 今からすぐに。荷を纏めて、あの傳馬で上陸して行け、合意下船ではないぞ、下船命令だ！ それでよろしい」

極めて簡單であつた。抗辯もなかつた。ありもしなかつた。餘裕もなかつた、船長は自分の室へ、赤くなつて眼を休めに引つ込んだ。それぞれメート等も幽靈の如く引き取つた。

ボースンはおもてへかへつた。そしてどつかと自分の寢箱の中へ、體を投げつけた。一切は決定した。ボースンは業務怠慢で下船命令を食つたから、一年間乘船を海事局の名に依つて停止されるのだ。それだけの事實なのだ！

悲慘なる事實は、新聞の三面に「死んだ人」の欄に一括して載せられる。ブルジョアの結婚が破れたことは、全紙を數日間に亙つて埋める。

それだけのことなのだ！

××××××××××××××凍死し、餓死し、病死し、自殺し、殺戮されることは、その狀態なのだ！ ×××××若し、新聞や、その他一切の言論が事實を無視してゐると考へるならば、それは、相當な主義の社會を一見てゐないからだ。

若し、それ等の悲慘なる事實がなかつたならば、それ等の悲慘事の上にのみ建つ、ブルジョアの社會建築はどうなるのだ。それは、だから、實に悲慘事ではないのだ。貧窮のために死滅して行くことは、些も悲慘ではないのだ。死滅して行く程に多數が貧窮であるからこそ、これほど、××××が富んでゐるんだ。

だから、一切は、最上の狀態なので、「これを動かしてはならない！」のだ。

ボースンは、そこらの物を片づけ始めた。帆布で作つた袋の中へ、一切合切押し込み始めた。そして、その間に、アーッと溜息を洩した。曇つた夕暮のやうに、どんよりと考へ、どんよりと感じた。彼は寢床の上から、長いこと、そこにつつこんであつた、破れたゴムの長靴をとり出して、それに眺め入つてゐた。白い粉のやうに、鹽がフイてゐた。が、彼はその靴の事を考へてゐると云ふ譯でもなかつた。彼は、それをぼんやりと見入つてゐた。

ナンバン、大工などの連累者は、ボースンの命乞ひを計畫して、それ〴〵手分けをして運動に廻つてゐた。殊に大工は、船長と同じ國の出生日頃の事であつた。彼は、同郷者と云ふ、――僥と云ふ哀れな、せゝこましい、けちくさいことだらう、――理由で、船長の處へ、日頃の誼を恃んで出かけて行つた。

「お前が、國の者で無かつたら、お前も一緒なんだぞ」大工は、船長にさう怒鳴りつけられて、失望したやうな、ホッと安心したやうな、何だか浮き〳〵して嬉しさうな氣にまでなりながら、おもてへかへつて「駄目だつた」ことを報告した。そして、心の中では口笛でも吹き度いやうな元氣々々した氣になつた。

三上は、何とも思はなかつた。それは、人のことなのだ！ ナンバン、ナムプトーも、同樣であつた。

讀者は、作者に對してこのことで憤つては困る。作者が冷淡にしたわけではないのだ！ 若し又、昔がさうでなかつたら、ボースンが下ろされるやうなことも初めから生じ得なかつたらう。要するに、勞働者が結合してゐないことを、作者に向つて憤られるのは甚だ迷惑だ。

ボースンは馬鹿な子が、その帶を銜へるやうに、その靴をいつまでもいじくつてゐた。

暫くして、彼は、その靴を床へ力一杯叩きつけた。そして、暫く考へてゐたが、又、それを拾ひ上げて、その破け目を仔細に調べて、

ソーッと、下へ置いた。彼は、寢床の緣板の隅に、セルロイドの[illegible]を作つて置いてあつた。それは海のためにいゝだらうと、彼は自分で思ひ込んでゐた。彼は又、それへ目をつけた。これはどうしよう。彼は、それをとり上げて、又仔細に檢査を始めるのであつた。一切のものが急に、非常に重大な、貴重なものであるやうに、彼は感じ始めた。

水夫たちは、ボースンの室を覗いては、氣の毒さうな顔をした。波田は、ボースンを、月二割も利子をとるので、船長の模範的位に評價してゐたのであつたが、彼が「馘首」されたことを聞いて、急に同情者になつて了つた。

彼は、梅雨時の夕方見たいな氣持でゐる、ボースンの室へ入つた。そして、何かと手傳つたのであつた。――彼が、今時々足に嵌めるゴム長靴のゲートルはこの時に、貰つた記念品であつた――。

ともからは、ボースンは未だ上らないかと、頻りに急き立てゝ來た。

「人間ほどわからんものはない。あゝ人間ほどわからんものはない」と、ボースンは溜息と共に言つた。

ボースンは、三上に送られて、自分も一本の櫓を押して、今歸つた許りの直江津の街へ向つて漕ぎ去つた。

ブリッヂからは、船長とチーフメートが望遠鏡でこれを見送つた。傳馬はだん／＼小さく、波山と波谷との上にのりつゝ見えつ、沈みつして行つた。

丁度、その日も荷役がなかつた、又別に仕事も無かつたのだ、水夫等は、船首甲板にウォーニンを張つて、その下で寢轉びながら、ボースンの傳馬を見送つてゐた。

傳馬はどん／＼進んで行つた。そして、陸岸近くなつて、もう一二間と、云ふ位の處まで進んだ時に、後ろから追つかけられた、例の捲浪に、くるまれて、旋風が埃でも渦卷くやうに、ゴロ／＼ッと横に轉がしてしまつた。勿論船長とチーフメートはこの上もなく面白がり、手を打つて喜んだ。

岸には、石炭の人足達が、もう少し凪いだら、本船へ仕事に出かけようとして澤山集つて、その有樣を見てゐた。

人足の四五の者は直ちに跳り入つた。そして、二人は――三上は櫓と抱き合つて、ゴロ／＼轉がつた、彼は、立たうとして二三度試みたが、彼の四倍も長い重い櫓を抱へてゐたので立てないで、その代りに潮を飲んだ。ボースンは、その咄嗟の場合にも、荷物を流すまいとして、手を章魚のやうに八方に擴げて、手にさはるものを掴まうとしながら、グル／＼と捲き轉がされた。そして、彼は手に舟板一枚と洋傘一本とをしつかりと握りしめてゐた。

若し、人足が助けて呉れなかつたならば、傳馬は勿論、流されてゐるし、ボースンにしても、三上にしても、死に得た。その筈であつた。どんな大男でも、海の幅ほど丈のあるものはないからだ。詰り彼等は、横になりながら足を突つ張らうと試みたのだ。

二人は、櫓と、舟板と洋傘とをしつかり握りしめて人足に助け上げられた。

ボースンの荷物は、蒲團一枚と毛布一枚との包が取りとめられた。そして、柳行李の方は流れた。そして、一切は殆ど[illegible]、完全に濡れてしまつた。それは、吸取紙の完全に濡れたやうに、殆ど一切を役に立たなくしてしまつた。

それは、ブリッヂから、望遠鏡で見る時に、流れて行く行李まで見えた位であつた。

「これは、痛快だ、こいつあ面白い、ワッハッ

ハハハ、、、、ワッハッハッハ、、、、迚も堪らない、ワッハッハ、、、、あれを見給へ！ 舢板を虎の子見たいに抱いてるぞ、ワッハッ、、ハ、、一船長は轉げ歩くばかりに笑ひ狂つた。全く、それは、關係のない者から見ると、をかしい情景でもあつたらうさ。チーフメートも笑つた。

おもてのウォーニンの下でも、砂丘の上の粒のやうな人間たちが、動搖し始めたことを見た。何だらう？ と、傳馬の行方を探したが見えない。その中に、ブリッヂで、船長とチーフメートが腹を抱へて笑ひ轉げてゐるのを見た。そこへ、ブリッヂから、非番になつたコーターが下りて來て、ボースンの傳馬が、波浪に巻き込まれて顛覆したが、人命だけは人足に救はれたことを知らせた。

彼等は、ウォーニンの舷やレールに上つたり、摑まつたりして、それを眺めようとした。けれども、波に遮られて見えなかつた。彼等は下に降りて、寝そべりながら、彼等について話し合つた。

夕方になつて、三上は、疲れ切つた面をしてボースンと共に、又甲板へ來て、船長に、仔細を告げた。ボースンは、船長に損害賠償を要求しようとしたがテンデ、デッキまでも上らされなかつた。既に彼は、萬壽丸のデッキさへも踏み得なくなつてゐた、そして、一切は浪に掠はれた！

三上は、再びボースンを送つて行つて、夜になつて歸つた。

ボースンは、横濱へ歸つて、全く、屑鐵の山の中の一本の捻釘のやうに、僅に存在してゐるに止まつた。彼は、帆布の縫工になつて、一日七十錢を取つてゐるのであつた。

これが、船長の偉業であり、これが、ボースンが當然受けねばならない報いであつた！

三六

私は全で醉つ拂ひのやうに、千鳥足で歩き、一つことをクド〱と、繰返してゐる。だが、これは、私が船乘りであるからで、小說家でないからのことだ。全く、こんなことをいや、一書くと云ふことは、迚も難かしいものだ！

ボーイ長は、もうこれですつかり傷も、それから來た病氣も、これで段々癒るんだ！と思つた。それは、今から室蘭の公立病院に行くからであつた。

そこに行くためには、どうしたつて、海も見るだらうし、家も見るだらうし、木々も見えるだらうし、又、町の人々も、その外色々なものを見ることが能きるんだ！ さうだ、彼は頭の上の、上段の寝臺の底板ばかりを一週間許り眺めつゞけてゐたのだつた。

こんな場合には、人は恐らく、どんなものでも、見るもの一切が懐しいものだ、どうかすると、自分に喧嘩を吹つかけて來る、醉つ拂ひでさへも。それは放免された囚人の心と同じであつた。

彼を連れて行く、藤原と、波田とは支度をしてゐた。支度をしながら、二十五歳のキビ〱した青年、波田は悲痛な冗談を云つてゐた。

「病院には、看護婦がゐるぜ、色の白い、無邪氣な、それ程別嬪ではないが、素適に可愛い……」

「何だい、こいつ隅に置けねえなあ、君は病院に行つたことがあるのかい」波田にしては珍らしい話なので、藤原が一本突つ込んだ。

「その眼がいゝんだ！ 眼がね、汚れたどんな塵も映さない、山中の未だ發見されない、處女湖のやうな澄み切つた、親切な目なんだ！ その女は、全く、どの患者にでも、兄妹のやうにわざとらしからぬ親切さで以て、接するんだ！」波田は、既に十度以上は、便所掃除で汚

した仕事着に腕を通しながら、自分の戀人のことを話すやうに言つた。

「似合はねえな。波田君、皺だらけの顔と、澄み切つた瞳の處女とは、どう正面して見たつて、緣がねえなあ」と、藤原は冷かした。ボーイ長までも、ウッカリ微笑んだ。水夫たちも笑つた。

「ま、待ち給へ、先廻りしちやいけないよ。實際だね。僕だつて、もう二十五になるんだからね。戀も、愛も十分に知つてるさ。その時に、若し、そんな處女に病院で出會つたらだね、この糞の匂ひのする仕事着にでも、近づいて來るだらうかつてことを考へてるんさ、ハッハ、、、、」

彼は笑つた。その笑顔の中には、全處女地に殉す、處女林のやうな靜な表情があつた。

「だつて、君は、自分でも言つてるぢやないか、「女郎除け」にはこの葉ッ葉が一等だつて、さうだよ、勿論その娘だつて例外ぢやないぜ」小倉は言つた。

「野郎なあ、俺が女のことなどを云ひ出したのが、よくねえんだな。俺の妹だつて、こんな汚い、勞働者とは結婚し度がらねえだらうからな。ハッハッハ、、、、」

「それは本當だよ、波田君」藤原は感に堪へぬやうにして言つた。

さて支度、――それは、その通すべき處へ、手、足を通して、嵌めるべき處へ、釦、紐、帽子と嵌めればいゝ――は出來上つた。全く波田は「女郎除けのお守り」であつた。新米の乞食などは、彼より立派な風をしてゐた。彼の髪と來たら馴れた乞食と區別がつかなかつた。

波田は、ボーイ長を背中に負つた。水夫たちは、ボーイ長を彼の背中に、そつと乘せるやうにした。

「濟みません」と、ボーイ長は嬉し涙に詰つたやうな鼻聲で言つた。

二人は、四本の足で出發した。

子供を負んぶすることでさへも、非常に肩が痛く、又重いものである。ボーイ長の場合には甚しく重かつた。そして、困つたことには、その胸が痛く、痛より惡いことは、碎けた左の足が、兎もすればダラリと下つて、雪の中を曳き摺るのであつた。ボーイ長は、足を引き上げてゐようとして、全身の注意を左足に集めて、それを、曳きずらすまいとしたが、駄目であつた。ボーイ長の足の下ると同樣に、波田の手までが下るのだつた。

波田が、ボーイ長を揺り上げるのは、二十歩から十歩になり、今では一歩毎に揺り上げるやうになつた。ボーイ長は、痛さと寒さとの爲に、顔色を失くしてゐたが、それでも辛抱した。

彼等は、棧橋から、二十間位の處にある、番小屋へ入つた。そして、ボーイ長をベンチへ卸した波田は、額の汗を拭つた。

「ア、御苦勞様」藤原は言つた。ボーイ長は、心臟の鼓動が草臥れてゐて額から冷汗が出て、ものを言ふ氣に、どうしてもなれなかつた。ただ、アーッと小さく溜息を洩らした。

番小屋で休んでゐた男女の人足たちは、彼等が取り繞つてゐた、ストーブの一邊を空けて三人に與へた。そして、ボーイ長の負傷に同情と憐愍の言葉を贈つた。

「俺達あ體が資本だでなあ、大切にしなけりや」と言ひ合つた。「可哀想にまあ、未だ子供だによ」と言つた。

ボーイ長の左足は、鐵劍の尖のやうに、白木綿で眞ん丸く膨れ上つてゐた。その尖がストーブの暖みで、溶けた雪片によつて濕らされてゐた。

ボーイ長は、そこで、變つた人々の慰めの言葉を聞いて涙ぐまれて仕樣がなかつた。

彼等の母位の年配の老いたる婦人も、あの勞働に從ふのであらう、ショベルを杖にストーブの

側へ立つてゐた。彼は、恥かしい氣持を感じた。何故さうであつたかは分らないが、彼が怪我をして病院へ負はれてなど行くと云ふことが、恥かしい氣がしたのであつただらう。そこに居た人達は、そんな大きなショベルを動かすさへ困難であつたやうに見える、年配の人が多いのであつた。それは皆四十を越してゐるか、さうでなければ未だ十五六の子供かであつた――そんなのが[illegible]さへも交つて四五人ゐた――働き盛りの者はどこに居るだらう？　と、人々は思はずにはゐられなかつた。

働き盛りの者は、夕張炭田の、地下數千尺で命をかけて、石炭を掘つてゐるのだ！　それに、彼等の息子や娘が、そつちへ出稼ぎに行つてゐるのだ。そして、歸つて來れば、不具者か敗殘の病氣か、娼婦になつて歸つて來るのだ。

一體も、片輪になつて歸らねばならないだらうか――ボーイ長は、[illegible]になりかけた石炭のやうな、味氣ない淋しさに心を蝕食はれた。

「サア、行かうか、今度は僕が負ふからね」藤原が言つた。

人足の人たちも手傳つてくれて、ボーイ長は藤原に負はれた。二人は、又、四本の足を以て、[illegible]の端を、とぼとぼと拾ひ歩きして行つた。さうして、藤原は丈が高かつたにしても、雪は二尺から積つてゐた。踏まれた道は狹かつた。ボーイ長は、道端の高い雪へ、足で合圖の印でもつけるやうにして、その足を曳き摺らねばならなかつた。

三人は、それ程默つてゐないで、稀には一言位、何か言つたらいゝだらうと思はれるほど、默つてくつついて歩いた。三人も自分で、何かその不愉快な苦痛な沈默に反抗したいとは思つても、口を利くだけの氣力がないのであつた。それは何か官廳の手續きでもあるやうに、非常に面倒臭いことのやうに思はれるのであつた。

道は、藤原と、波田にとつては、昨夜歩いたと同じ道であるのに道の方が先へ向うへ辷り拔けでもするやうに遠く思へた。

然し、彼等はやがて、第二の小屋まで來た。

そこは、港の最奥部で、馬蹄形の頂點になつてゐた。その小屋から暫く行くと、彼等は、左へ、海岸から離れて、石炭の連峯の間に、拵へられたトンネルを拔けて、それから、室蘭驛の貨物車のある、數十條のレールの平原を横切つて街へ出るのであつた。

彼等の一行は、第二の小屋で息を入れた。

そこにも、鑛山の人足の人たちが、眞つ赤に焼けたストーブの周りに、集つてゐた。

三人は、又、そこで、人足たちに席を與へられて、そして、前と同じやうなことを繰りかへした。一休みごとに、彼等は少しづつ濡れるのであつた。

軈て、一行は、レールの平原を通り越して、街に出た。そこで、ボーイ長に俥か橇かを雇ひたかつたが、そんなものはなかつた。波田と藤原とは、交る交る汗だくになりながら坂を上り上つて、もう少し上れば、半島の頂部から、大洋の見える程、市街の高い部分へ上つて行つた。そこに公立病院があつた。

三七

受付で、診察券を買つて、外科の待合室で順番を待つた。丸で、言葉の通はない國へ、上陸したやうに、不案内であつた。船の生活が、彼等を、だんだん陸上に於ては、不具者同樣にするのだ。

白い服を着て、看護婦たちはゐた。そして、美しいのも居た。けれども、波田の考へたやうな夢のやうな、女はたうとう見つからなかつた。けれども、彼等は、ペンキの匂の代りに藥の匂を嗅いだ。機關[illegible]の代りに、清い女の聲が流

れ、看護服の裳がサラ／＼と鳴つた。藥の匂の中に、看護婦の顔からは、化粧水の芳香が、繃帯の綿のやうに後を引いて流れた。

椅子には頭中繃帯したのや手を肩から吊つたのなどが、二三人かけて待つてゐた。

その中に、安井さん、と呼ばれて、ボーイ長は二人に抱へられて診察室へ入つて行つた。

「どうしたんです」醫者は訊いた。

ボーイ長は、かいつまんで怪我をした時の様子と、痛い處とを話した。蒸汽のラジエーターが、白い蒸氣を吐いてゐた。

ボーイ長は、寢臺の上で、仔細に診察を受けた。そして、足は、改めてナイフで切り開かれたり、ピンセットで、神經を引つ張られたり、血管を引つ張り出して、それを糸で縛つたりした。

「どうしてこんなに、いつまでも放つといたんです。夏だつたら、もうこの邊から切り取らねばならぬやうなことになつてたか知れないよ」と云つて、膝の邊を指さした。

「船長が、どうしても診せることを許さないんです。それで今日は、自費で連れて來たんです」藤原は答へた。

「何か、船で、獸の如く喧嘩でもしてるんだらう、船ではよくあることだからね。君たちも強く出たんだらう」若い醫者は、近視眼鏡の奥で、その人の好ささうな眼で、笑ひながら言つた。

「そんなことぢやないんです。全く、話にならないんです」と、藤原は、簡單に時化の話と、横濱の話をした。

醫者は、大きく、うなづきながら聞いてゐたが、

「足は、これで一週間もすれば、絲を除れるやうになると思ふんだが、胸の打撲傷の處は、一度、内科に、見て貰はないといけないね、どうも、そこは外科では、ちよつと困るからね」と云つた。

「それぢや、胸を内科で診察して貰ふんですか」波田が訊いた。

「さう、その方がいゝね。足は絶對に動かしちやいけないよ。五日か一週間の中に、もう一度來て下さい」

「はい」と藤原は答へて、二人はボーイ長を抱へて、内科の方へ行つた。

一週間、以内なんぞに來られやしない――ことは皆を困らし、途方に暮れさせた。が、まあ、内科の方が、濟んでから考へることにしようと、言ひ合せたやうに、皆が考へた。それは、痛い傷に觸れたくないやうな狀態であつた。

内科の醫者は「熱が夕方になると出るだらう」と訊ねた。ところが船には、ともは知らずおもてには、檢温器などは見たこともなかつた。從つて、熱もあるにはたしかにあるんだが、高すぎるか低すぎるのか、皆目見當がつかなかつた。

「計つたことが無いんですが、實は、檢温器がないんですから」藤原が答へた。

「夕方になると、氣分が惡くなつたり、寒氣がしたりしやしないか」醫者は訊いた。

「えゝ、しよつちう傷は痛いんですが、氣分がぼんやりして來るのは、夕方です、何だか、妙な夢なんぞ見て、魘されたりします。それに、寒氣も夕方になると、屹度來ます」安井は答へた。

醫者は、背中から呼吸器を聽診しながら首を傾げてゐた。

「入院が能きるかい。入院をした方がいゝんだがなあ」醫者は、藤原の方に問ひかけた。

「何でございませう病氣は、入院も、能きなかないと思ひますが、船の方から經費が出ないと、私達では、入院費が迚も支拂へないと存じますので」藤原は、正直な處を打ち明けた。

「病氣つてのは、打撲から來たものだ、矢つ張りね。足のやうに、中から骨と肉とで出來上つ

た處はいゝが、から云ふ處は、内部に複雑な、器管があるからね」と云つて、「面倒なむづかしい病名を云つた。

「で、病氣の原因が、負傷から來たものだと、云ふことが分れば、船から出るのかね？　診斷書を書いて上げようかね」と云つて、醫者は、診斷書を書いて渡した。

「どうも有難う、いづれ歸船して、相談致しましてから」

三人は、禮を言つて、ボーイ長は、波田に負はれそこを出た。

診斷書が、百通あつても駄目だらうとは思つたが、兎に角、それは、一つの有力な味方であつた。

今では、實際の負傷や疾病よりも、診斷書の方が、重大な意義を持つてゐるのだ。殊に、それは、勞働階級の負傷疾病の場合、さうであるのだ。工場醫は、資本家の診斷によつて診斷書を書く、と云ふ役目だけを勤める場合が多かつた。

資本家は、機械に切斷された勞働者、ベルトに捲き込まれて、碎けてしまつた勞働者、乾燥爐の中へ落ちて、蒸鳥のやうになつた勞働者には驚かない。それの診斷書だけに驚くのであつた。

炭坑主は、自分の炭坑が、ガス爆發をした時に、五百人の男女工が、坑内で蒸燒きにされてゐることには、決して驚かないのだ。彼は、その坑口の密閉が三年後にか、五年後にか開かれた時、未だ掘る部分が燒けずに殘されてゐるか、どうかに心配してゐるのだ！

汽船に於ても同じことだ。一緒に沈んだ人間は何でもない――然し、船體は資本家にとつて大きな永久の嘆きなのである。

船長も、ボーイ長の負傷そのものに對しては、驚くべき「理由」がなかつた。だが、この診斷所は、幾分なりとも、何等かの衝動を與へまいものでもないと、三人は空頼みにした。

小學校の子供たちが、本と辨當とを載せた、小さい橇を引つ張つて笑つたり、喚いたりしながら、その高みにある學校から、ゾロ〳〵と歸つて行つた。道が、急な坂をなしてゐる處になると、子供たちは、子供たちにとつても小さすぎる、その橇の上へ、兩足を揃へて、まつしぐらに、下の街へ辷り落ちて行つて、曲りそこねて、雜貨屋の店先に飛び込んだりその街路樹に打つかつたりした。中にはうまく曲つたは曲つたが、雪の街路の山へ、衝突して、綿のやうな雪を噴き散らしたりする子もあつた。

これは、ボーイ長にとつて、堪らぬほど、愉快なことであつた。いゝ氣散じであつた。

三四年前までの彼の姿が、無數に雪の上を辷つたり、轉んだりするのである。彼は、足のことを忘れてしまつて、自分の負さつてゐることまで忘れてゐた。

彼を負んぶした波田は、汗を滴らしてゐた。

「波田さん、菓子屋まで、まだ大分寄り道になるの」ボーイ長はフト菓子が食べたくなつた。「きんつば」が食ひ度くなつた。出來れば、上等の蒸菓子の中へ入れる餡だけが食べたくなつた。彼は、甘いものを食べると、それは、血管を流れて行つて、足の傷所で、皮になるやうに感ずるほど、それほど甘いものに餓ゑてゐた。それと一つは「上陸した以上は、煎餅一枚でも食はないと氣が收まらん」と言ふ波田へ、その機會を與へたかつた、と、休息したかつたのと、最も彼を、この擧に出でしめた重大な誘因は、一分でも遲く船へ歸りたかつた、少しでも長く、陸の明るい處にゐたかつた。清い空氣、ハッキリしたものの形、人間の生活、美しい一切のもの、それ等と一刻も長く、一緒にゐたかつたのだ。

「そいつあいゝ思ひつきだ」波田は、その積りで航路をそつちへとつてゐた。

東洋軒は、又、その日も、珍無類なお客を迎へた。

ボーイ長は、足が利かないので、日本間の方に三人は通された。

全く、波田がどの位甘いものに對して、眞實の愛を捧げてゐるか、それは、私のよく表し得ない處だ。彼は、ほんとの酒好きが、酒に眼をなくす以上に菓子には參つてゐた。それは「病的」だつた。然し、一體に、船員は、何物、何事に對してでも「病的」に欲望を持つてゐた。安井、藤原なども量的には、時とすると波田以上であつただらう。

三人は、木炭の埋けられた火鉢を挾んで、菓子を摘んだ。かう云ふことは、ボーイ長は、未だかつて經驗しなかつたことだ。非常に、慘憺たる生活をしてゐた勞働者が、何か下らぬ犯罪で、監獄に投り込まれる。そこでは、彼は、未だ曾て食つたことのない豚肉や、魚肉やを食べさせられた。その勞働は、彼を今まで、苦しめたよりも樂であつた。土地の瘠せた、産業のない、深い山中の谷間などから、四十を越して囚へられた、囚徒などの、稍々低能なのに、さう言ふのがある、そして彼は、晩年を獄中で送ることを意に介しないやうに見える。

一八六三年、法刑及懲役にされた、囚徒の給養や勞働狀態について、英國政府が調査した結果からマルクスは、ポートランドの監獄囚徒が、農業勞働者や、植字工などよりも、良い營養をとつてゐたことを證明してゐる。(資、一ノ三、二三八ページ)

一八五五年、ベルギーに於ても、デュクペシオー氏は、書物の中で、悲慘でないと思はれてゐる標準的の勞働者が、同國に於ける囚人の營養よりも、十三サンチームだけ營養が、少かつたと書いてゐる。(資、一ノ三、二四ページ)

世の中には、監獄よりも、食物や、勞働に於ては、中には一切に亙つて、苦しい生活をしてゐる者もあるのだ。

ボーイ長は、負傷して、見舞金を貰つて、初めて、そんな――炭火の埋けられた、茶の道具の並んだ盆や、名前も知らない非常にうまい菓子を食べ、お茶を飲み、ゆつとりした、――氣分を味ふことが能きたのであつた。これは、監獄に入つて來て初めて「豚の肉」に、ありついた哀れな勞働者と似てはゐないだらうか?

――私は、讀者に、斷つて置かねばならないのは、以上のことに依つて、監獄がいゝ處だと云ふことには、ならないことを承知して貰ひ度い、監獄よりも惡い條件が、あると云ふことは、監獄が、いゝと云ふことの、一つの條件にもなり得ないからだ。――

ボーイ長は、その注意を足や胸から、暫くの間は、引き離すことも、能きるやうになつた。彼は、つまり、いくらか外のことも、考へることが出來るやうになつた。と云ふのは、手術をしたり、藥の香を嗅いだりしたのが、彼を、勦つたのだ。

「船に乘つてるとから云ふものは、迚も食べられないね」など云つて、彼は「鹿の子」の小豆を齒で嚙みとつたりしてゐた。

「全く、この家の菓子はうまいよ、横濱にだつてたんとありやしないよ」波田は通がつた。

「菓子の鑑別にかけちや、波田君は、ブルジョア的の、嗜好を持つてるからなあ」藤原は笑つた。

三人は、胸の燒けるほど菓子を食つた。その間に、疲勞も恢復された。そして、暫くは、船のことや、一切のいやなことを、忘れてることもあつた。が、藤原の心は、ストライクが、いつ起さるべきであるかが、殆んど、忘れられなかつた。

彼は、菓子を食ひながら――「萬人がパンを獲

るまでは、誰もが、菓子を持つてはならぬ」と云ふモットーを思つてゐた。この言葉、このモットーは、どの位、藤原を教育したことであらう。この簡單で分りのいゝモットーは、全世界の、勞働者たちの間に、どんなに、親しい響を以て、口から口へ、村から街へと、瞬く間に、擴がつて行くことだらう。そして、この言葉は、「アーメン」を口にする人の數を、今では遙に、拔いてゐるのだ。そこには、新らしい感激に燃える眞理が、煙火の如くに、輝いてゐるのだ。――

藤原は、勘定を拂つた。「濟まないなあ、僕が、おれいに奢る積りだつたのに」とボーイ長は、藤原に負さりながら、眞から恐縮して言つた。

ボーイ長の眞つ白の繃帶は、それでも血が滲んで來た。「一膳飯屋へ出るよりはいゝね」と、ボーイ長に笑ふ元氣が出た。

然し、本船に歸り着いた時は、彼等は、グッタリ草臥れてゐた。ボーイ長は、その曳きずつた足のために、再び、その繃帶は、搔き荒らされてしまつた。それは、美しい夢から眼覺めた、牢獄内の囚人の心に似てゐた。

一切は、又狹い、低い、騷々しい、不潔な、暗い、監室の作業へ歸つた！

三八

萬壽丸は、横濱へ歸ると、そのまゝ正月になるのであつた。從つて、船體は、化粧をしなければならなかつた。船側は、既に塗られた。次はマストが、塗られねばならない。

マストのシャボン拭き、ペン塗り、――この仕事は、夏はよかつたが、正月の準備などは、冬に決つてゐたので、困難であつた。シャボン水は凍つてヨーグルト見たいになるし、ブラシが凍るし、全く、始末に行かなかつた。中でも、最も困ることは、體の凍ることであつた。

冬の日電柱に寒風が唸り、吹雪の朝、電柱の片面に、雪が吹きつけられて凍つてゐるのが、丁度その面に日でも當つてるやうに見える。その電柱の數倍の高さと太さとで、マストは海中、何の遮るものもない處に吹き曝しに突つ立つてゐるのだ。

全くそのマストを相手の仕事は危くもあるし、寒くもあつた。仕事は一番のマストから始められた。自分で自分の體をロープに縛りつけて、それを、マストのテッペンへ、ブロッコを縛りつけ、それへそのロープを通して、一端を自分が持つてゐるのだ。塗りながらだん／＼そのロープを延ばし、延ばしては塗り、塗つては延ばして下の方へ下つて來るのだ。

われ／＼の仕事はペン塗りは夏に於いては、大變やりいゝのである。それはペンキがのびるからである。たゞ、この場合、ペンキはいくら油でのばしても、夏の時よりも遙に濃い。波田は濃くて堅くて延びの悪いペン罐を腰のバンドに縛りつけて、マストのテッペンから塗り始めた。

向う側を西澤が塗つてゐた。

高架棧橋は、マストのテッペンから四五間下たに見えた。

「棧橋は高いやうだが、マストよりは低いんだなあ」波田は西澤に云つた。

「そらさうだ、だがどうだい、寒いこたあ、手に感じなんぞありやしないぜ」

二人は、ペンブラッシュを子供が箸を摑むやうにして摑んで塗つてゐた。風のために彼等を吊してゐるロープは搖れた。彼等は機械體操をする人形のやうに、足をピン／＼させながらマストから、離れず、即かずの處で仕事をしなければならなかつた。どうかすると二人の勞働者は、マストの一つの側で打つかるのであつた。

オイ〳〵、こつちは俺の領分だぜ！」

「冗談言つちやいけない」

そこで二人は横を睨める。棧橋が左の方にあれば、西澤が正しいのだ。西澤は船首から船尾を向いて、船首部分を塗るのだつた。

彼等を吊したロープまで堅く凍つたやうに感ぜられた。彼等は勿論「棒たら」のやうに凍つて堅くならないのが不思議であつた。

「こんな團扇見たいなボロ船を化粧してどうするつてんだらう。え、船長も物好きぢやねえかなあ、いくらお正月だつて室蘭でマストのペンキ塗りなんさ、萬壽丸の船長でなきや表へ出せねえ名案だぜ」西澤がガタ〳〵震へながらそれでも、早く降りたいばかりに、盲目が杖を振り廻しでもするやうにむやみに塗り立てた。

「だがよ、おいらが、マストにくつついて凍つたのが見たいんぢやなからうかい？ え、俺は、彼奴の量見はてつきりそこだと思ふよ」波田も震へてゐた。

「擦つてらあね、金魚が凍りついたのよりや、蛇の罐、人間がマストへ凍りついた方が珍らしいからね」西澤が答へた。

大きなマストも、その高い部分では、随分揺れた。それは、その磨ぎ澄ました日本刀のやうな寒風が揺るのだつた。

「はたちやそこらでペンクワン提けて、マストに昇るも——親のばちかね」西澤は坑夫の唄をもぢつて、怒鳴つた。

——シュシュ、どころか今日この頃は、五錢のバットも喫ひかねるシュッシュー——と波田も唄つた。

「何だ捨てられた小犬見てえな音を出してやがる」西澤が冷かした。

「おめえのはヘン罐を叩いてるやうだよ」波田がやりかへした。そして彼は下を見た。

「オイ、未だ大分あるぜ、何とかうまい便法はねえかなあ」波田はこぼした。

「あるぜ素敵にいゝことが」西澤が云つた。

「ヘツ！ 下に下りてストーブにあたることだらう」

「もつといゝんだ。マストのテッペンから海へ飛び込むんだ！ さうすれや、どんな難病でも、いやな仕事でも一度に片がついてしまはあ」

「全くだ」

彼等は殆んど、無意識に、マストを、こすつてゐた。水の中で金魚が凍るやうに、彼等は、宙天の空氣の中で凍りさうであつた。

西澤と、波田とは、マストのペン塗りを「やり仕舞」で命じられたのであつた。「やり仕舞」とは字く如く、やつてしまへば、その日の仕事の仕舞と云ふことであつた。詰り仕事を、請負つてやることであつた。

それは大抵都合の悪いことであつた。何故かならば、仕事を當てがふ方では、普通の一日行程ではなし遂け得ないで、而も急いでゐる仕事を「やり仕舞」に出すのであつた。すると、出された方では、尻尾に紐を縛りつけられた犬のやうに、無暗にグル〳〵廻つたり、飛び跳ねたりして、その仕事から免れようと狂ふやうに働くのだ。

「やり仕舞だぞ、二時には濟まあ」セコンドメートは、未熟の南瓜のやうな氣味の悪い顔を妙に歪めて、さう言つて、自分の室へ行つてしまふ。さうするとその仕事はきつと五時には濟む。普通より一時間だけ餘分に働いて、二倍以上の骨を折つたのだ！

彼等は「やり仕舞」と云ふ「わさびおろし」で自分をすりおろすのだ！

それは、陸上に於ける請負仕事、或は、せい分仕事、と同じものだ。

「やり仕舞」の仕事で、時間の後れるのは、それは勞働者に「暇がない」のであつた。仲間から

言つても、それは「だらしのない」ことだつた！自分から云へばそれは「自業自得」であつた。そして、資本家から言へば、「だからこれに限る」のだつた。それで、「俺たちが儲かる」のであつた。

　彼等は、殆んど骨の髄までも冷たくなつて、夕方、外の水夫たちが、飯を食つて了つた後で漸く、その「やり仕舞」を終へた。それは彼等の言ふのが正當であつた。「やりづらい！」と。

三九

　一切は兎も角も順當に行つた。

高架棧橋からは、豫想以上に、石炭を吐き出した。それは黒い大雪崩となつて、船艙へ文字通りになだれ込んだ。仲仕は、その雪崩の下で、落ちて來る石炭を、隅の方へ／＼と、ショベルで掻き寄せた。上の漏斗からの出方が速くて量の多い時は、數十人の人夫のショベルの力は間に合はないで、船のハッチ口は、石炭で塞がつてしまひ、人足達は船艙の四隅の空いた處へ密閉されてしまつた。

　彼等は、苦しさと暗さとから、その身を救ふために、それありたけの力で、石炭を四方へ掻き寄せた。そのショベルの音、石炭のザク／＼鳴る音、彼等が何か呼ぶ聲が、デッキの上をあるいてゐると、初めての者にはどこから聞えて來るか分らないのと、その音が全で若しあるなら冥土からでも出たらうと云つた風な妙に陰氣な響であるので、必ず驚かされるほどであつた。そしてハッチ口に山のやうに高く積んだ石炭は、うまくダンブルへ收まつて、中の勞働者が上へ上ることが能きるだらうかと、心配せずにはゐられない程高かつた。

　勞働者達は、時とすると半日も石炭に密閉されて、隧道に密閉された土工のやうに、暗い中で働いてゐるのであつた。出て來ると、全で體中が肺で出來上つた人形ででもあるやうに、幾度も幾度も飽かずに深呼吸をしてゐるのであつた。そして、胡麻鹽のついた、非常に大きな、――それは他のどこの港でも見られない――人間の頭程の太さの、整頓した、等邊三角形の、握り飯を一つづつ、親方から受取つて、船室へ持つて來ては食つてゐた。

　それはセーラー中での食ひ頭三上でさへも、一つは迚も食べられなかつた。それには胡麻鹽以外何にもおかずはついてゐないのであつた。人足は夕食にその握り飯を一つ貰ふと、明け方までは、義務として、[illegible]勞働を、[illegible]の中で、「あの世」の人の如くに續けねばならないのであつた。

　石炭の運賃は、その頃、噸について室濱間が五圓であつた。從つて、石炭は水夫室にまで積み込まれた。水夫の月給は八圓乃至十六圓であり、仲仕、人足等は八十錢の日貨銀を貰つてゐた。そしてその途方もない握り飯に釣られると、一噸三十錢だけ、一晝夜で貰へるのであつた！　そして石炭の運賃は噸五圓であつた！

　ありとあらゆる隙間は石炭を以て塡充された、保險マークはいつも波が洗つて、見えなかつた。そして、糧食は、かつきり豫定航海日數分だけが、積み込まれてゐた。

　船主や株主等にとつては、「黄金時代であつた。水夫たちや、勞働者たちにとつても過度勞働の黄金時代であつた。

　たとへば、汽船にゼンマイ仕掛のおもちやのそれのやうだつた。ゼンマイの利いてゐる間は、キチ／＼と些しも休むことなく動いた、從つて、水夫たちも船長にしても、同じやうなことであつた。船長は稍そのために水火夫へ對して當つたのかも知れない、迷惑な話だ！

　人足たちは、棧橋から石炭と共に落ちて來る石炭の雪崩の下でその[illegible]ためにではなく、

その雪崩から自分を救ふために一心に、血眼になつて働いた。そして、その爲に彼等の勞働は一ケ月に二十日以上は、どんないゝ體格の者にも續けられないのであつた。そして、彼等は粉炭を呼吸するのだ。

然し、良かつた。一切が分らなかつた。一切が知られなかつた。馬車馬のやうに暗雲に稼ぐのはいゝことなのであつた。そして、資本主にとつてもこの事はこの上もなくよいことであつたのだ。そして、その頃は歐洲戰爭が行はれてゐたのだ。

その時であつた。わが日本帝國の富が世界列強と互角するやうになつたのは！

その時であつた！　日本が富んだのは。その時であつた、日本の資本主達が富んだのは！　勞働者はその代り過度勞働ですつかり、體をブチ壞してしまつた！

夕食は船ではとつくに濟んだのに、晝頃塞がつてしまつたハッチ口は未だ開かなかつた。デッキの下では、――ケーブルの下塗りでも、ボーイ長の寢台の下あたりでも、あちこちで、ゴトゴトと異樣な響が絶えず續いた。そして時々唸るやうな人聲が聞えた。そして、それ等も七時を過ぎると、漸く穴が開いた。それは難治の腫物が口を開いて膿を出し切つたのと同じ喜びを人足達に與へた。山の絶頂へでも登りついた人のやうに、彼等はショベルを杖にして石炭を踏みしめて上つて來た。

そして、その例外に太い握り飯に有りつくのであつた。

彼等はかうして、ダンブルの中で土蜂の樣な作業に從つて、窒息しさうな苦痛を嘗めてゐる時に、その境涯を羨んでゐるものさへあつた。

それは高架棧橋上の勞働者であつた。それは船のマストと高さを競ふ程も高いのであるから、その風當りのよいことは、送風機のパイプの中のやうであつた。

彼等は、石炭車の底部にある蓋をとる。石炭は棧橋へ作られた、漏斗の上へ落ちる。そして、船のダンブルへドドッと雪崩れ込むのである。

彼等が勞働する部分は皆鐵で出來上つてゐる。そしてその鐵は燒鏝のやうに、それに觸れると肉を引ん剝いてしまふ。彼等は帆布で作つた大きな袋を足に着てゐる。彼等はまた毛布と毛布との間に、綿や毛などを詰めた赤や灰色の仕事着を着てゐる。それは、彼等が、その眼の廻るやうな、過激な勞働時間以外に着てゐる、唯一の防寒具である。彼等は、父、皆、鎮西八郎爲朝が、嵌めてゐただらうと思はれるやうな、弓の手袋に似た革手袋の中で、その手を泳がせてゐる。

北海道の寒風が林檎の皮を緻密にし、その皮膚を赤く染めたやうに人足等も、その着物を厚くし、その頬を酒飲みの鼻の頭のやうにしてゐる。

だが高速度鋼のカッターは、鑄物を、ナイフで大根でも削るやうに削る。と同樣に北海道の寒風は、勞働者たちからその體溫をどん／＼奪つてしまふ。棧橋の上で働いてゐることは、焔の中へ氷を置くのと反對な、然し似合つた作用をする。

彼等は、その勞働を終へた時、歸つて行く、空荷車の上へ攀ぢ登るのが困難な位に、體が硬くなつてゐるのだ。彼等の一人は言つてゐた。

「まあ、生きながら凍つたやうなものづら」と。

然し、勞働者は、生きて行くためには死を怖れてはならなかつた。

四〇

藤原は、自分の寢箱の中で、腹這ひになつて、紙片に何か書いてゐた。それは、何か本の抜き書きでもするやうに、側には二三冊書物が置い

てあつた。彼は、煙草を喫かしてゐた。二本一緒にくはへたらいゝだらうと思はれるほど無暗にスパ〳〵と喫かしてゐた。彼一人でおもてを燻べ上げるに十分であつた。

　ダンブルには、殆んど石炭が一杯に詰つた。本船は、豫定通り、明早朝出帆して、横濱へ歸つて正月を迎へることが能きさうであつた。

横濱で正月を迎へることは、總ての船員の希望であつた。「室蘭では仕樣がない」のであつた。

　横濱には船長も、機關長も、誰も彼もが、世帶を持つてゐた。その自分の世帶で、お正月を迎へ度いと云ふことは人情として當然であつた。萬壽丸は、三十一日の午前十時頃か、もつと後れて横濱へ歸りつける豫定であつた。從つて、その豫定は、一時間も延長し得るものでなかつた。

　明朝一番で船長が登別の温泉から、その愛人と別れて、一番の列車で、室蘭へ歸つて來る筈であつた。

　船長が、船へ上り切ると同時に、ブリッヂには、彼の姿が現れるだらう。そこで、彼はヒーボイーと、錨を巻くことを命令するであらう。

　それまでは、今までと些も變らないだらう。

だが、それからが、變るだらう。彼等は「横濱正月」が、既に實現され得るものと信じてゐた。その安心を、甚しく搖り動かされ、のみならず、その他のことも一切が、全で、プログラムと違つた方向に脫線して、坐礁したと云ふことを、覺らねばならないだらう。

　そして、それ等の原因は、水夫等が、要求條件を提出して、目下交涉中であるから、彼等は、働いてゐないのだ。それで、船が動かないのだ！　と云ふことが、船內一般に知られるだらう。我々の要求條件は、エンヂンの勞働者に依つても、吟味せられるだらう。この要求條項は、何等かの衝動を與へるだらう。そして、そのために、この要求條件は、よく考へて、作らなければならない！

　藤原は、煙草の煙の間から、こんなことを考へてゐた。

　彼は、その紙の片を眺めた。それには、要求條件の原案らしい文句が、書かれてあつた。勞働時間の制定、勞銀增額、公休日、出帆、入港は翌日休業、公傷、公病手當の規定及斷行、深夜サンパン不可、などゝ亂雜に書かれてあつた。

　彼は今、それ等の條項に、要求書としての形を、與へるために、苦しんでゐるのであつた。

「チェッ！」藤原は舌打をした。そして、煙草の灰を本の表紙の上に、やけに拂ひ落した。「こんなことを今更ら、要求しなければならないなんて―」

　彼は、その紙片をポケットに入れて、寢箱から下りた。そして、波田へ訊ねた、「小倉君の方は、どうなつたんだらう」

「さあ、それを、未だ何とも聞かないんだがね」波田も、心配してゐるのであつた。

「小倉は、當番かい、今？」

「どうだか」波田は、出入口まで行つてブリッヂを見た。

　小倉はブリッヂを、あちこち歩きまはつてゐた。

「―ゐるよ。海圖室で、相談しようぢやないか」

波田は、ストキに耳打ちをした。ストキはうなづいた。

「ぢや僕が、都合はどうだか、訊いて來るから、君は、エンヂンの上で、待つてゝ呉れ給へ」

　波田は、そのまゝ、氣輕に飛び出して行つた。

藤原は、一度奥まで入つて、そこで、ベンチに腰を下した。そして、煙草へ火をつけた。暫くすると、フト何か、忘れものでも考へついたやうに、立ち上つて、デッキの方へ出て行つた。

甲板に、メート等は、明朝出帆の名残を惜しむために、皆どこかへ行つてしまつてゐた。

三人は、チャートルームへ集つた。

「西澤君に来て、貰はなきや」小倉が言つた。

「今、女郎買の話で、おもてを持たせてゐるから、目立つたらいかんだらう、と思ふんだがね」藤原が答へた。

「あいつあ、全く、仕様がないよ。女郎買の話となつたら、全で、夢中になつちまやがるんだからね、も少し真面目な時は、真面目に、やつて呉れなくちや、困るんだけどなあ」波田は、口惜しがつた。

「然し、中には、中にはおやないや、殆んど誰もが、それ以外に何もないのに、それ以外のものを、あの男は持つてゐるだけ、いゝぢやないか、味方に對しては、我々は、徹底的に寛容な、態度を取らなきやならないよ。さうしないと、味方の戦線から、自然に壊滅しちまふからね」藤原はなだめた。

「で、コーターマスターの方はどうだらう。未だ、話して貰へなかつたかしら」藤原は、小倉に訊いた。

「未だ、話さないんだよ。どこから切り出していゝんだか、話が、すつかり、打ち明けられないので困つちやつたんだよ。だからね、要求書を出す間際になつて、それを見せて意見を訊いたら。そして若し、コーターマスターとしての、提出要求でもあると云ふことなら、それを追加して、提出すると云ふことにしたら」小倉は答へた。

「さうだね。その方がいゝだらうね」藤原は賛成した。「その方が、秘密を保つ上にも、反つていゝだらうよ」

波田も賛成であつた。

「ぢやあ、僕は、西澤君を連れて来よう。そして、決めちまはなきや、明日のことになるのぢやないかい」波田は、何だか追つ立てられるやうに、心が急かしいのであつた。

「ちよつと」小倉は手で制した。「僕は、もう十五分で非番だから、非番になつたら、ともの倉庫で寄り合つたらどうだらう」時計は、八時十五分を指してゐた。

「さう、さうしよう。一人宛、チョッと上陸すると、云つた恰好をして、出ればいゝからなあ」

「ぢやあ、さうしよう」そこで、二人のセーラーは下へ降りた。

おもてへ歸つた波田は、西澤に、八時の鐘がなつたら、ともの倉庫で、相談があるから、分らないやうに抜けて来て、呉れるやうにと云つた。西澤はうなづいた。

ストキは、ベンチへ聴衆の一人と、云つた様な顔付で腰を下して、例に依つて、煙草を喫かし続けた。

四一

八時が鳴つた。その時には、もう藤原はゐなかつた。波田はボーイ長の傍に、腰を下して話してゐた。「ぢや、正月までお菓子を、食べ貯めて来るからね。お土産も忘れやしないから、待つてゐ給へよ、え、不相變、東洋軒さ、ハヽヽ」と、波田は、ともの倉庫を東洋軒にしてしまつた。

「え」西澤は頓狂な聲を出した。「波田君！　僕も、偶にや連れて行けよ」そこで、二人は、連れ立つて、ともの倉庫へやつて来た。

藤原は、日暮ランプを抱へて、綱敷き天神見たいに、ホーサーの、捲き重ねてある上に坐つてゐた。やがて小倉もやつて来た。

それで、一切は動員された――と云ふ譯であつた。

「そこで、僕等は、いつ浪に浚はれるか、ウヰンチでやられるか、どこで、やられるか分らな

い危險な勞働をしてゐるのに、ボーイ長のやうに、負傷はさせつ放し、死ねば死につ放し、と云ふやうな狀態では、迚も不安心で、落ちついてゐられないんだ。それで、僕は、公務疾病、傷害手當規約を本船に作つて、それで以て、扶助すべきだと思ふ。それを諸君に、計り度いんだ。そして、たゞ、そんなものを作つて貰ひ度いと、云ふだけでは役に立たないものを作るだらうから、こつちで二人、向うで一人の委員を出して、その委員會によつて、扶助規則を作ると云ふことにしたら、どうだらうと思ふのだがね」藤原は言つた。

「それや、是非必要なこつた」西澤が言つた。

「然し、規則の點だが、委員會で、おもての意志が、果して貫徹するだらうか、僕は、その點に疑ひを持つよ」波田が言つた。

「さうだ、だから、こちらから二人、向うから一人と、云ふ割合にしといたんだがね」藤原が答へた。

「それや、形ではさうなるけれども、實際に、その委員會は、ともの一人のために、おもての二人が支配されることになりはしないだらうか？　若し、おもての二人が、支配されまいためには、僕は單に、その條件のみについても、一度ストライクが、起されやしないかと思ふんだよ。さうなれば、それは二重の手間をとることになるからね」波田が言つた。

「さうさなあ、それぢや、どうすればいゝんだらう」小倉が言つた。

「なるほどね。こつちからの委員は、木偶の坊も同じだからね」藤原も贊成した。

「で、結局どう云ふ風にすればいゝだらう」

「僕の考へでは、こつちで作つてしまつて、向うには、たゞそれを承認するか、しないかの二つの回答の中一つを、選ばせるだけでいゝと思ふんだがね。でないと、何しろ出帆前の咄嗟の間に、決する勝敗だから、出帆後に持ち越せば、こちらの負けになるに決つてるんだからなあ。だから、一切の條件は、それを承諾するか、しないかどちらかにのみ、決定の能きるやうに、ハッキリしたものにして置いて、そして出帆間際の致命傷を突くと云ふことが、一等よかないかと思ふんだがね」波田の考へはこれだつた。

「さう、その方法はいゝと思ふね、今室蘭には、一人も、休んでるものはないさうだ。二三日前まで休んでた者が、一人許りあつたさうだが、仁威丸に、便を借りて濱へ歸つたさうだ。室蘭なんぞぢや雇入れる船はないさうだ」小倉が言つた。「だから、たとひ四人でも五人でも、時機さへしつかり捕まへれば勝てると思ふよ」

「だから、その要求條件を、こゝで作らうぢやないか」西澤が言つた。

「それは、藤原君に草案が一任してあるから、それで以て作つて行かうぢやないか」波田が言つた。

そこで、藤原の原案に依つて、新らしい要求條件が、卷き重ねられたロープの上で、その夜十一時頃までかゝつて作り上げられた。

それは、

一、勞働時間を八時間とすること。（現在十二時間以上無制限）
八時間以上は、必要なる場合勞働するも一時間に付、正規勞働時間の倍額の賃銀を支給すること。

二、勞働賃銀增額、――水火夫、舵手、大工等下級船員全體に對して、月支給額の二割を左の方法に依つて增給すること。
方法、下級（下級とは何だ！）船員全體の月收高の總計の二割を、下級船員の人頭數に平均に配分し、これを在來の賃銀に増加すること。

三、日曜日公休を勵行すること。

四、公休日に出入港したる時は、その翌日を休日とすること。

五、作業命令は一人より發し、幾人ものメートより同時に幾つも發せられぬやうにすること。

六、横濱着港の際深夜、船長私用にてサンパンを以て、水夫を使用し、上陸することに對して、吾人之を拒絶すること。

七、公傷、公病に對しては、全治まで本船に於て、實費全部を負擔し、月給をも支拂ふこと。

以上

と云ふやうなものであつた。それは、小倉が、看手室へ歸つて清書して、波田に手渡しする。交渉の順序は、明早朝、出帆準備にとりかゝる前に、チーフメートに手交して、我々は全部の要求が承諾されるまでは、室から出ない――と云ふことに決定した。

要求條件中、停泊時間と、勞銀増額と、公傷病手當の三つは完全に利害をファヤマンの方と一致した。そして、その三つは、要求條項中重要なものであつた。――だから、われ／＼は、この要求をファヤマンの方へ無斷でやると云ふ譯には行かないだらう――勿論。

そこで、小倉がファヤマン、火夫、コロッパス（石炭運び）に報告し、藤原がオイルマン（油差し）に、水夫達はから云ふ要求條件を出して戰ふ、戰線を共同して貰へれば、この上もない事だが、さうでなかつたら應援をして貰ひ度いと、云ふことを申し込むことになつた。然し、それは、われ／＼の要求條件がチーフメートの方へ持つて行かれると、同時でなければなるまい。

何故かならば、それは、ヒーラーの方で計畫實行しなければならなかつた程、セーラーにとつては、緊密な要求だが、火夫の方では、或者にとつては、さうでないかも知れないし、より一層われ／＼が怖れるのは、スハイだ。スハイに對しては、われ／＼は絶對に、氣をつけねばならない。それはペストのバクテリヤよりも怖いんだから。スハイはいつでも居さうな處に居ないことは、燈の下の闇と同じことだから、猶更われ／＼は細心に注意しなければなるまい。

だから、少し手後れのやうに思はれるかも知れないが、明日の朝にした方が、よくはないか、それはどうしても、明日の朝でなければならない――と云ふ事も決定した。

そして今一つ重大なことが、決定された。それは、この要求提出を機會として、それが成功しようが失敗しようが、兎に角、要求を出したと云ふことにだけは、成功した譯なんだから、その記念として、我々は海員組合――それが無いならば作らうし――へ加盟しようではないか。

誰か、それは極く最近生れたやうに、惚けながら聞いた。それは、濱に歸つた上で、早速調査して、組合があれば、直ちに入會に決することになつた。

公傷病手當の規約については、直ちに實行するのは、勿論であるが、ボーイ長の手當は、その新らしく決定された規約に依つて給すことを忘れないやうに、交渉すること、これも、その通りに決定した。

彼等が、からして、彼等の必要なる要求をするのにも、何か、不都合なすべからざる行爲を企てでもしてゐるやうに、彼等自身が先づ、これを秘密にし、それが、成らない時は――と云ふ善後策をも考へねばならなかつたことは、何を意味してゐるか。

それが、何を意味してゐようが、私の知つたことぢやない。たゞ、私は、彼等が、人間としてあたり前のことを最小限度に要求する時に當

つて、いつでも、その企ては、愼重に祕密にされる習慣を知つてゐる。誰でも、地獄に落ちたくはないのだ。誰が、人間をこんなに、コソコソするやうに仕込んでしまつたのか。

丁度この時、船長は、そのマストが綺麗になり、サイドが化粧し、うまい工合に滿船したと云ふ報知を、チーフメートから受け取つて、彼女と、酒を飲んでゐた。彼女は、「これが、今年のお別れで、來年は、又、すぐ會へるのね」と言つた風な意味のことを言つた。

「俺は、お前の美しいのが好きだけれど、そこが又、俺を心配させもするんだよ」と、彼は盃を舐めた。それは登別の溫泉宿の一室で、燃えるやうな、緋の蒲團のかゝつた炬燵の中であつた。

ボーイ長は、その時、鐵のサイドが、同時に彼のベッドの一方である、その寢箱の中で、海のものとも山のものともつかない傷と、病とのために唸つてゐた。

水夫等は、彼等を、餘りしつかり締めすぎる鎖を、少し寛くするやうに、要求する相談の最中であつた。

三田子爵は、この汽船會社と、その炭坑との社長だつた。彼はその時、何をしてゐたか、雲の上に隱れてしまつて見えなかつた。

四二

夜が明けた。風がヒュー〳〵唸つてゐた。灰色の空は、どこからともなく、山となく平原となく水平線となく、とけ合つてしまつてゐた。その間を粉のやうな灰色の雪が横つ飛びにケシ飛んでゐた。だが、大した雪ではなかつた。目も、鼻も、開けられないと言ふ、あの特徴的のやつではなかつた。

風は、大黑島を代れば必ず、前航海程には吹いてゐるだらうとは想像された。ハッチは、未だその口を開けたまゝであつた。それは栗おこしを食つた子供の口の邊に似てゐた。デッキ中は石炭だらけであつた。その各片はデッキの鑄瘤のやうに、デッキへ堅く凍りついてゐた。

ボースンはチーフメートの處へ、その作業の順序を訊きに行つた。すぐその後からストキ藤原が、清書された要求書を持つて續いて行つた。小倉は、起きると共に火夫室へ行つた。

水夫等は、それはいつもの朝とは何だか大變違つた朝のやうな氣がした。全く實際違つた朝ではなかつただらうか。

ボースンは、チーフメートの室に入つた。そして彼は後を締めようとすると、もうストキがすつかり體を入れてゐた。そして扉は後からストキによつて締められた。

「お早うございます」とボースンは云つた。

「うんすぐ……」チーフメートが仕事の命令を發しようとすると、ストキはすぐに、チーフメートの机の上に、その要求條件を載せた。

「水夫一同は、その要求書通り要求しますから、要求を容れて下さい。そしてその要求書に判を捺して下さい。詰りそれが要求承認の意味になるのです」

ボースンはそこへ凍りついた柱のやうに立つてゐた。

チーフメートは、暗礁に乘り上げたよりももつともつと驚いた。

それはあり得ることでなかつた。暗礁はあり得るが、水夫等が要求書を出すなんてことが！

彼は憤つてしまつた。

「何だ、要求だ！ どんな要求だ！ 乘船停止の要求か！」チーフメートは怒鳴つた。

ボースンは縮み上つた。彼は私は知りませんと言ひ度かつたが、――そこにストキが立つてゐるではないか――あゝ困つた。彼は字義通り立往生した。

ストキは平氣だつた、「舐めやがつた」と彼は思つてゐた。

「そこに書かれてある通りの要求です。御質問があれば御答へ致します」

ストキは癪に障る程落ちついてゐた。

「どんな要求でも今はいけない。横濱へ歸つてからだ！」チーフメートは、事態が自分の考へてるやうに簡單でもなく、又豫想通りにも行かないだらうと云ふことを覺つた。

「私たちは、室蘭で片がつかなければ働かないだらうと思ひます。この要求は殆んど海事法に定められてゐる最小範圍から、極めて僅か出てゐるか、出てゐない位のものだし、その他の問題も普通の問題です。今頃要求するのは、われわれの迂愚であり、同時に萬壽丸の恥辱でせう。然し、それは、われ〳〵にとつては、全く切實な問題なのです。これは、あなた方にとつて全く一顧の價値もない、輕易な問題でせう。それが我々には重大な問題なのです。これを御覽の上承諾して下さるやうに希望します」

ストキは丸で小學校の生徒が讀まされる時のやうに、「まじめ」くさつてさう言つた。

ボースンはもじ〳〵してゐた。逃げるにも逃げられないわけであつた――

「兎に角、俺には何とも返事が能きない。船長が歸つてから、船長と相談して返答する。だが、ストキ、こんなことあ止した方がいゝぜ、これはお前のために俺は言ふがなあ、もうお前も三十一なんだから、考へてもいゝ年ぢやないか、これや全く止した方がいゝぜ、船長がウンと云ふ筈がないと思ふぜ。さうすれや、お前たちや一年か三年位の停船命令は食はにやなるまいぜ、え、どうだ、おもてへかへつて、水夫等に思ひかへすやうにすゝめたら」

チーフメートは、そのコースを轉換した。

「私はさう云ふわけには行きません。ひつ込められるやうな、どうでもいゝやうな要求は私たちは出しはしません。それはわれ〳〵の生命や生活にとつて切實な事柄許りなんですから。冗談や退屈凌ぎ半分でこんなことをしはしません。私達は乘船停止なんてことを今頃恐れてゐるやうでは、こんな要求が出來ないことを知つてゐます。要するに、私たちは、この要求が、容れられなければ、私たちとしては、どんな仕事にもつかないと云ふ申合せがしてありますから。私はたゞ、使としてこの要求書の提出とその説明とを引受けて來たのです」

ストキはチーフメートの戰術には釣り込まれなかつた。

「それぢやどうしても聞かんと云ふのなら、船長に俺から渡すまでだ。だが、それは承認されないよ、そして俺の顏も踏みつぶす積りなんだな」チーフメートは自分の手で納めたかつた。

「さうです！　船長に渡して下さい。それから、あなたの顏をつぶすとかつぶさないとか言ふのは、をかしいと思ひます。そんなことはどうだつていゝやうなものだけれど、誤解があるといけないから云つときますが、この要求書は最初あなたに出したんですよ。さうするとあなたは俺では決められんから船長へと云はれるのでせう。で船長へ渡すことを頼めば、『俺の顏をつぶす』と云はれるんですね」

「さうではないか、俺の言ふことを聞かんぢやないか」チーフメートは一つグツと押した。

「それではあなたは、私達の要求書の決定權を持たないと云ふときながら、握りつぶす權利を持つてることになりはしませんか、握りつぶすことは否定することぢやありませんか、否定する權利だけ持つてゐて肯定する權利を持たないと云ふことは、この頃の流行にしても、理窟には合はないぢやありませんか。だから、あなた

に對して、今ではわれ〳〵は何等の要求もしません。たゞ取り次いで頂けばいゝのです」ストキは矢つ張りまじめに、急がず、何か相談でもしてるやうな調子で話した。

それは全くチーフメートの顔をつぶしてしまつた。彼はうんともすんとも云はなかつた。

「船長が歸つたら渡すよ」

「どうぞ願ひます」ストキは去つた。

大工はフオックスル（おもての甲板）へ上つて揚錨機をゴットン〳〵と調節したり、油を差したりしてゐた。

ボースンはチーフメートの室で、おそろしく極りの悪い思ひをしながら未だ、そこに突つ立つてゐた。

「どうしたんだい。ボースン、お前はこれを知らなかつたのかい」チーフメートはその机の上の要求書を指さして訊いた。

「早いことをやるものです。私は全で存じませんでした」ボースンは甦つたやうに答へた。

彼はもう先刻から、何でもいゝから一言口を利き度くて堪らなかつたのだ。

「一些も知らないぢや困るぢやないか、お前に責任があるんだぜ。一體どうする積りなんだ。それに今日出帆が遅れでもすると正月には横濱へ歸れやしないぜ。そんなことにでもなつて見ろ、船長は、一人殘らず下船を命じかねないから。お前はどうする積りかい」チーフメートはボースンから切り崩して行かうと咄嗟に考へついた。

「私は……困りましたなあ、ボイラーを揚げる時も漸くなだめて仕事をさせたのですけれどもなあ、兎にかく全く私もぬかつてゐたのですからおもてへ行つて出來るだけ仕事するやうに話して見ます……」彼は確信でもあるもののやうに慌てゝそこを立ち去らうとした。

四三

船長は歸つて來た。

ボースンが、水夫たちへ「無分別」をしないやうに頼みに行かうとしてゐるところへボーイはチーフメートの室へ現れた。

「チーフメートさん、スタンバイださうです。船長は今ブリッヂに上られました」

そのまゝボーイは去つてしまつた。

何と言ふこつたらう。――始末がつかない――ボースンも、チーフメートもこれから撲り合ひでもしさうな恰好で、二人向き合つてそこに突つ立つてゐた。

「兎にかく、お前はおもてへ行つてスタンバイして呉れ、何とでも誤魔化して水夫等を働かしてくれ！ 僕もすぐ行くから」チーフメートは漸くさう云ふと、急いで帽子をとつた。

ボースンは追つかけられた猫のやうに、おもてへ飛んで行つた。

チーフメートはブリッヂへ驅け上つた。右の手には要求書を引つ掴んでゐた。

船長はスタンバイをかけたのに、チーフメートがフオックスルに現れないので、彼女との別れ前からそのまゝ保つてゐた幸福感が、爆發しかけてゐた處であつた。彼はチーフメートが上つて來たのでチョッとニッコリした。

「どうも。サア、スタートしよう」船長は云つた。さうして息を切らしながら彼の前に突つ立つてゐる、チーフがたゞぢやないのを見てとつた。そしてその紙つ片へ眼をつけた。

「水夫奴等が要求書を出してるのです。舵夫まで二人入つてるのです」チーフメートは漸くこれだけをいふことが能きた、彼は要求書を船長の前へ差し出した。

水夫の出入口では、三尺幅の出入口へ、一尺幅のベンチを抱へ出した、藤原が出入口へ最も近く、波田、小倉、西澤と腰を下して、斷徴

鏡的なピケッティングラインを張つてゐた。

藤原は船長とチーフメートとが要求書のことを話してゐるのを、おもての出入口から眺めてゐた。

船長はチーフメートの要求書を見ようともしなかつた。そんなものはチーフメートが、引き破いてしまへばそれで圓滿解決が、船長に言はせると、つくのであつた。それだのに、チーフメートは、そんな下らないことまでも俺の處に持ち込んで來るのであつた。

「そんなものは、引き裂いちまひ給へ！　そんなもの。大門君がビク／＼してるからいけないんだ！　萬事は橫濱へ歸つてから聞いてやるとさう言ひ給へ」船長は全でチーフメートが指尺ででもあるやうに頭から足までを計つた。

「私もやつて見たんです。ところが、それが容れられるまでは絕對に働かないと云ふのです。來年の春になつても働きやしないとかうなんです。そしてそれは船長が決定權を持つてるんだから、あなたは船長へ渡してさへ吳れゝばいゝんだ――と言ふんです。私はどうせ後で分ることだからと思つて取つといたんです」チーフメートも、船長からガミ／＼やられると、「何だこの野郎、俺だつて後一年で船長の免狀がとれるんだぞつ」と思はざるを得ないのであつた。

「團扇見たいなボート見たいなチョコマン舟の船長で威張つてやがら。ヘン、ボースンと云つた方がよく似合ふよ」と憤慨するのであつた。が、それは思ふだけのもので、何とも爲方がなかつた。

「どんな寢言が書いてあるんだか見せ給へ」船長は要求書を取つた。

「そら、奴は受取つたぞ！」藤原が低い力のある聲で言つた。

「フン、フン」船長は輕蔑しきつた心持を鼻から吹き出した。が、第六の條項、深夜サンパンを船長の「私用」では漕がない、と言ふ點に至つては彼は鼻を鳴らすことを止めた。これは彼自身に關することであつた。由々しい大事であつた。

「セーラーを呼べ！」船長は無視するわけには行かなかつた。無視すれば船も動かないだらうし、橫濱で正月も出來ないし、それに、彼のサンパンに對して、文句をつけるとは全く、怪しからぬのであつた。

船長は、スタンバイの命令を出しつ放して、サロンへ入つて、そこで水夫等を「とつちめ」てやらうと待ち構へた。船員手帳は、チーフメートに持つて來さして、テーブルの上へ積み上げた。

可哀想に、ボースンと大工は、フォックスルで鼻水を凍らせてゐた。

機關長はエンヂンへ入つて、ハンドルへ、手をかけて待つてゐた。

蒸汽は、どん／＼上つて來た。セーフチイヴァルヴが、吹きさうになつて來た。サロンのテーブルにはメートが船長の兩側に並んだ。チーフ、セコンド、サードと。

ボーイはおもてへ飛んで行つた。

「セーラー全部、ボースン、大工、コーターマスター、みな、殘らず、サロンまで來て吳れと、船長が言つてるよ。大至急！」煙のやうに、彼は、又、飛んで去つた。

そこで水夫等は出かけた。

「奴は、高壓的に出る積りだな」藤原は思つた。

波田、小倉、西澤、各々は、別樣の戰鬪意志を持つてゐた。

ボースン、大工も青くなつて來た。

この時、ファヤマンの方でも、小倉が持つて行つて見せた要求條件が、問題になつて、主戰論と非戰論との猛烈な論戰が行はれてゐた。だが、全體として階級鬪爭と云ふことは、ハッキ

り頭に入つてゐなかつた。從つて、それは適當ではある、けれども、未だ直接の刺戟、衝動が來ない、と云ふやうな「感じ」が、彼等を、水夫等と共に立たせることを妨げた。然し、彼等は、立たないにしても動搖はしてゐた。それは、立つまいものでもない氣配に見えた。

彼等の出入口の前を水夫等が通る時に、彼等は、喊聲を擧げた。

それは、サロンまで響き渡つた。

これ等のことは、萬壽丸が出來て、海に泛んでから初めてのことであつた。

水夫たちは、笑を浮べて、火夫達に挨拶しながら通つた。それは、全で、今まで動かなかつた軍艦が、試運轉で滅茶苦茶に走らうとする、第一聲のやうでもあつたし、眼を覺ました獅子の第一聲のやうでもあつた。

何となく、いつもと違つてゐた。スタンバイがかゝつたのに、船體はビクともしない。罐前の火夫や石炭庫のコロッパスは、デッキまで孑孑のやうに、その頭を上げに來た。

オイルマンは機關室から覗いた。

サロンでは、交渉が開始された。尤も船長は、一蹴の下にやつつける筈であつて、交渉などをする氣はテンデなかつたのだ。ところが、どうしたはずみかいつの間にか、交渉の狀態に入つた――のであつた。

四四

「これは、誰が、書いたんだ！　これは？　この要求書は？」船長は、その一聲をこの文句によつて切つて放した。

「私が、書きました」舵手の小倉が答へた。

「お前が？」船長は、その廻轉椅子から、無意識に腰を浮した程驚いた。小倉は、コーターマスターの中で、彼の一番愛してゐた從順な青年であり、頭腦もよく仕事も出来る、その上風采のいゝ、サッハリした男だつた。

「誰かが、お前に、それを書かしたんだらう。お前が自分で、こんなものを書くと言ふ譯がない、誰だ、この文章を作つたのは」彼はストキを睨んだ。

「私が、作つたのです」ストキが今度は答へた。

「さうだらう。お前だと思つた。大體貴樣は、横着だからな。貴樣が、小倉や皆を煽てゝこんなものを出さしたんだらう」彼は、裁判官の如くに訊問した。

「そんなことは、極めて枝葉の問題と思ひます。私たちは、食ふために船乘りになつてゐるのです。であるのに、船の仕事のために負傷しても、手當をして貰へないと云ふことになれば、私たちは、命をすてゝかゝつたも同然です。尤も、船では命を捨てゝかゝつてることは、當然だと云へば當然ですがね。然し、たゞ、私たちだけが、命を安賣りすると云ふことは、私達にも、承知が出來ないことです」

藤原は、最初の探照彈を打つ放した。

「それぢや、勝手に下船して行つたらどうだい。誰が、いつお前に、どうぞ、下船しないで乘つて下さいと賴んだ！　賴んだのはどつちだつたか、よく考へて見ろ」

船長が言つた。

「私たちは、どこへ行つても、いゝ處はないのです。だから、自分の今の生活を、よりよくする方法をとるより外はないのです。この船ばかりへ、日が照らないと言つて、下船した處で、他の船でも、陸でも同じことです。だから、自分の今ゐる處で、より良い條件の下に、生活しようとするだけなんです」靜に彼は答へた。

「私たちは、どこへ行つたつていゝ處はないのです？　え、それは、一體、誰の責任だ。俺の責任だとお前は言ひ度いんだらう。俺は、今も

言つたぢやないか、誰が、頼んで乗つて呉れと云つたと、それに「よりいゝ条件」の生活がし度かつたら、何故もつと、勉強して上の方へ、昇るやうにしないんだ。自業自得を、人の責任におつつけるのは図々しすぎるぜ」船長は、こいつ一つ脂をすつかり搾りぬいてやらうと考へた。そして、それからつつ放す！　と。

「御忠告は、ありがたうございますが、勉強して上へ上つて行く人間が余り多くなると、セーラーなんぞするものが、失くなるだらうと思ひまして」彼は稍々笑はうとする處であつたが、それだけは取りとめた。

「馬鹿！　お前は、俺を愚弄してる積りか！　馬鹿！　お、いくら勉強しても馬鹿は馬鹿なんだ。セーラーより上にはなれないんだ。だから、實力があつたら人に遠慮などせずに、サッサと船長にでも機関長にでもなつたらいゝぢやないか」

船長は、だん〳〵ストキの話の相手になつてしまつた。

「私たちは勉強しても、船長はおろかボースンにも、なれないだらうと思つてゐるのです。ですから、船長、私たちは、今のまゝで、幾分でもいゝ条件の下で労働し度いと思ふのです。

私たちには、決して、船主になつたり船長になつて、富や、権力を、得ようと云ふ考へなんぞはないのです。私たちは、普通の労働者として、普通の人間としての、生活を要求するのです。人間として、船長は労働者よりもより特別なものだとは、我々は考へません。われ〳〵は、今では、階級と称せられてゐるものは、一つの仕事の分擔に、過ぎないものだと思つてゐます。それだのに、今では、ある仕事を分擔すると、同時に、人間を冒瀆するやうにさへなります。人間が、人間を虐げ、踏みつけ、搾取することを、えらくなると考へることは、半世紀許り前の考へだと、私たちは思つてゐます。私達は、人類の生活の一部分の貴い分擔者として、自分を見てゐるのです。だが、あなた方は、私たちを資本家と思つてゐる」ストキは、その話にだん〳〵熱と眞摯とを加へた。

「資本家と思つてる。お前等をか？　ハッハッハ、、、」遂々船長も、余りのストキの言葉に噴き出してしまつた。「恐ろしい資本家もあつたものだ！　ハッハッハ、、、、蚤と南京蟲のだらう！」

メート等は皆笑つた。セーラーたちが、資本家とは珍らしい言葉だつた。

「若し、私たちを資本家だと思つてゐないのならば、奴隷と、思つてるだけです。私たちの賣ることの能きるものは、私たちの労働だけです。詰り「からだ」だけです。だが、それも、私たちのものでないと考へられるならば、奴隷だ、と考へられることになるのでせう。然し、奴隷だつたら、何故その奴隷の生命を大切にしませんか。奴隷は、あなたたちの財産ぢやありませんか。私たちの生命が、あなた達にとつて、全で、どうでもいゝものになつたのは、私たちが奴隷から、資本家、すなはち賃銀奴隷になつたからです。それは、とつかへる程新らしい、いゝ商品が、無限にあるからです。

それに、私たちは、いつまでも、どんな奴隷でもあり度くはなくなつたんです。どんな機會にでも私たちは、私たちを縛る鐵の鎖を打ち切る用意をしてゐるのです。

私たちは、人間として、生きようとしてゐるのです、そこへ持つて来て、どうです！　私たちは蚤と南京蟲の資本家！　なんでせう、私たちは、その要求が通ればよし、通らなければ、私たちの力がどの位あるかを、お目にかけるまでです」

ストキは最後の言葉に、力を籠めて言ひ切つ

た。

「フン、それもよからう。だが何かね。波田、おまへは自分から進んで、この要求書に捺印したんぢやないだらうな。誰かが、お前を煽動したんだらうな」船長は、方向を轉換した。

「私は、どの船でもストライクの種を、見付ける役目をする積りで、船乗りになつたんです。私は、この船に乗つた最初の日から、風呂場のないことでも、ストライクがやれると考へてゐたのです」便所掃除人波田は、風呂場のないことに、誰よりも、苦痛を感じてゐたのだ。それに、彼は、若くて新らしい社會の空氣を吸つてゐたのだ。船長はこの無邪氣な、彼の便所を彼の居室よりも、金具など綺麗に磨き上げることの綺麗好きな、忠實な青年が「過激派」であらうとは思はなかつた。それに「こいつはストライクを見付けて歩くなどと、抜かしやがる！ 全で、此奴等はバルチザンだ！」

船長は、意外に、水夫等が結束を固めてゐるのを見た。それは發作でもなかつたし、衝動でもなく、計畫されたものであつたのを知つた。

この時、火夫室では又、喊聲が上つた。それがサロンへ響いて來た。

出帆時刻は、どん／＼と遲くなる！ 正月はどん／＼近くなる！

船長は、いら立つて來た。

「西澤、貴様はどうだ。宇野（捺印した舵手）、小倉、貴様等も同意して、捺印したんだな。よし、チーフメート！ ボーレンへ至急行つて、水夫四人、コーターマスター二人、ボースン一人、遂々ボースンにも祟は來た――すぐ、萬壽丸へ、チャンスだと云つて呉れ給へ、そして、此奴等を乗船停止を命じて、それを雇入れて來て呉れ給へ、出帆が、餘り晩くならないやうに、今からすぐかゝつて呉れ給へ！」彼はチーフメートに命じた。

その結果は、水夫等は、昨日からもう知つてゐたのだ！ 室蘭中のボーレン（それは半素人の昔も入れてたつた三軒切りないのだ――に、昔船乗りだつた、そのボーレンの主人が二人と、一人の沖賣らうとかゐるだけなのだ！ 彼等は、陸上に一軒を經營してゐるのだ！ 彼等は、どんなことがあつたつて、十三圓や十八圓で、一家の生活を保たうとして船に乗る氣づかひはなかつた。「その位のことは、俺達だつて氣をつけてるよ」と[illegible]原は言つてやり度かつた。波田はもうムズ／＼してゐた。

ボースンは驚いた。その職業と、月二割の利子――尤も中、一割はチーフメート（實は船長かも知れない）が、上前を刎ねるんだが――とが、フイになるのである。而も、彼は、何をしたんだ！ たゞ、忠實な番犬だつたのみではなかつたか。彼は、功勞こそあれ何の過失があつたか、既に、彼は、一旦の危急をチーフメートのために、救助さへしたではないか。

「しかし、これは船長に何かの深い考へがあることだらう。一度、皆の前でさう言つて、ボースンは代りが居ない――と言ふやうなことにする積りなんだらう。でなきや、船長だつて俺の首を切れた義理ぢやなからう、俺が居なけや、あの妾だつてあんな工合に、御安く手に入らなかつたに違ひないんだから」

哀れなボースン、彼は臆病犬見たいに、半信半疑で、主人の心を探つてゐた。だが、ボースン、君が、君自身のことを考へるやうには、他の人は決して君のことを考へてはゐないんだ。君自身が食へなくて餓死する瀬際にだつて、他の人は妾のことや、姦婦のことなどを考へてるのだ！ 他の人は、全く、他の人の身の上のことなど、てんきり考へはしないんだ。他の人とはお前を使ふ處の人た、分つたか、ボースン！

だが代りは、ボースンに限つてない譯ではなかつた。それは、室蘭中に一人のボーイ長の代りだつてなかつた。

チーフメートはやゝこの點に、その考へを向けるだけの餘裕を持つてゐた。

――船長」と彼は、船長の回轉椅子の背後から、低い聲で船長を呼んだ。

「ちよつと」と彼は後しざりした。

――何だね？　うん、あゝさうか、ぢやあ室へ」チーフメートへ言つた。チーフは船長室のドーアの中へ消えた。

――お前等は、此處へ待つてろ！　水夫達にから云ふと、船長は、チーフメートの後を追つて自分の室へ入つた。

船長も、その辭書の中から、不可能と云ふ字を、削る冒險はする位な男であつた。從つて、チーフは、船長に室蘭でそれだけの勞働者を、即時に得ると云ふことは、不可能だと、云ひ度かつたのであつた。が、船長は、全く、始末にいかぬタイラントであつた。それは、コセ〳〵したちしやの葉のやうな感じのするタイラントだ。

「船長、室蘭にはボーレンが一軒切りありませんが、ね、……」彼は、どうだらうと云つた風に、

――正月前だから、休んでるものが無いだらうと思ふんですがね」チーフメートは切り出した。

――若し、室蘭になかつたら小樽か、函館から呼ぶんだ。えーつと、然し、さうすると横濱歸航が大變遲くなるね。だが、室蘭に五人や十人の船員が無いつてことはないだらう。君は調べて見たかね」船長は訊いた。

「實は、入港するとすぐ訊いて見たのですがね。二三日前までは、三四人休んでゐたが、便をかりて横濱へ行つたとか言つてたんです。だから、それから一週間にもならないんだから、迚も駄目だらうと思ふのですよ。で、なけれや私もストキは、早く處分しなけりやならないとは思つてゐたのですから、代りさへあれば、此處で下船させる積りだつたんです。あれさへゐなけりや、何に他の連中は尻馬に、乘つてると言ふだけのもんですからね。どうでせう、あいつだけを、下船させることにして、後はチビ〳〵やつたら……でないと横濱正月がフイになりますよ」

チーフメートもボーレンを探つてゐたのだ！

「さうだなあ！　僕も、横濱で正月をし度いと思つてるんだが、それさへなけりや、十日や二十日錨を入れてたつて構やしないんだけどなあ、ぢやあ、應急手當として、ストキだけ下船さすか」船長も贊成した。

「それがいゝと、思ふんですがね。たゞ、その方法です。どう云ふ風にしたらいゝか、皆の前でやるか、それとも一人だけ呼んでやるかですがね。で、若し、水夫等全體があいつについて行くと云ふやうな時には、二十か三十やつて追つ拂ふより外に、仕方がないと思ふんですよ」チーフは何でもいゝから、彼が、この船から消えて失くなれ」ばいゝと思ふのであつた。

「さう！　何にしても、この際時間を爭ふんだからね。どんないゝ方法も遲れちやいけないんだから。ぢや、ストキの奴に下船を命じよう」船長は言つた。「だが、一體、奴等は何と云ふ不都合な奴等だらうな。これが横濱だつたらなあ――」

船長は、横濱でないことを、返すがへすも口惜しがつた。奴等を「殺しても、あき足らない程なのに、場合によつては、下船どころか金まで出すとは！」全く、彼の口惜しがるのは理由があつた。

――何にしても時が、惡いもんですからなあ。ところで、ストキが、海事局にボーイ長の雇入

未済のことと負傷のこととを申告しやしないかと思ふんですがね。そいつをやられると、どうも面白くないから、なるべくうまく、胡魔化す必要があると思ひますね」チーフメートは、外へ出ようとしながら言つた。

「だが、全く、癪に障るぢやないか、停止も食はせないなんて、監獄にでも放り込んで、やり度い位だ。治警に立派に、引つかゝつてるんだからね、畜生奴！」

それは、船長が憤るのは、云ふまでもない「御尤」な話だ。

二人は、未だ何かこそ〳〵と話した。一々そんな話を書くのは、面倒臭くて堪へられない話だ。先へ進まう、急げ、急げ。

四五

船長と、チーフメートとはサロンへと出て行つた。

ところが、こいつはどうだ。サロンの入口へ火夫たちが真つ黒に集つて、中を覗き込んでゐるのだ。口笛を鳴らす者があつた。足踏みをするものもあつた。

船長とチーフメートとがサロンへ入ると、彼等は、水夫達への演説から、船長へ、チーフメートへの示威運動へと移つた。口笛が盛に鳴つた。足踏みが拍子をとつて、踏み鳴らされた。

「何だ！　そんなとこから、覗き込みやがつて、あつちへ行け！」船長は怒鳴りつけた。

「何言つてやがるんだい。××××××！」誰かが後ろから叫んだ。

これは早く、片をつける必要があると考へた、船長は、入口の方へ、その「物凄い」眼を一閃放つておいて、椅子へ腰を下した。

「どうだらう。これは即答も出来ないから、横濱へつくまで保留したら」彼は切り出した。

「船長、それはいけません、私たちは、これが室蘭だから、要求として成立することを知つてるのです。横濱まで行けば、産業豫備軍が捨てる程居ります。私たちは、此処で要求が容れられなければ、労働をしません。それから、これはどうお考へになつても御随意ですが、私一人を馘首したにしても片はつきません、と言ふことを申し上げときます。私たちは、何の相談もしないのに、機関部の方でもあんなに、動揺してるぢやありませんか。この要求は恥かしい程、妥協的なをづ〳〵した時代後れの、要求ですよ。これが容れられないと云ふことになれば、「お前達奴隷は、俺達の〈もの〉だ」と云ふことになりますよ。

あなた達が、一ケ月の俸給だけで四百圓――彼はこれを聞くのに苦心したのだ――取つて、戦時利益特別賞與が年四十五ケ月分ある。この現在、私たちが、月給十三圓から十八圓で、命をかけて労働すると云ふことは、餘りいゝこととは考へられません。あなた方は、自分の懐中の裕福なので、夢中になつてゐられる間に、私たちは俸給の三倍もの率で、物價が上つてるので、非常な減給を受けた形になつてゐるのです。おまけに、労働時間は、船が忙しいと同じ比例で、私たちをかり立てゝゐます。一日に十四時間は、全で、懲役囚よりも長時間です、その上公休日なしです。怪我はしつ放し、死に放題、しけだらうが、夜中だらうが、俺は宅へ帰るからサンハンを押せ、お前たちは夜明け前に帰れ！　これが私達なんです。どうですか、聞いてゐて恥かしくなるやうな労働條件ではありませんか、實際、監獄だつてこれよりは、遥にいゝ待遇が與へられてゐますよ。その監獄よりひどいのが、萬寿丸で、その船長が吉長氏と云はれては、あなたの名誉でもなからうと思へます。

藤原は、また思ひ切つてやつたものだ！

船長及士官等の、憤慨振りは頂點に達してゐた。彼等は、椅子のクッションのやうに赤くなつたり、海のやうに青くなつたりした。彼等の憤慨と同じ比例で、水夫等は喜んだ。

「全くだ！」遂々波田が怒鳴つてしまつた。

「さうだ！」波田の氣合のかゝつた言葉に釣り込まれた、扉の外の火夫達は、一齊に喊聲をあげた。

「第一、私達は、肉體を賣る資本家かも知れない！ だが、要するに、私たちは生きてゐるんです。おまけに未だこの上も、生きて行き度いと思つてゐるんだ。生きて行き度くなけや、こんな船になんぞ誰が乗るもんか、畜生！」波田は、未だ／＼言はなければならないことが、山のやうにあつたし、餘りに言ふことが多くて、彼の言葉がスラ／＼と出なかつたために、「畜生！」で爆發してしまつた。

「誰が畜生だ！ 失敬な」船長は、夢中になつて立ち上つた。

扉口の外からは、罵聲と足踏みとが聞えた。

「燃しちまふぞ」と聞えた。

私はこの「燃しちまふぞ」と言ふ言葉の來歴を話し度いが、御覽の通り今は迚も忙しくて。

「さうではないか！」波田は立ち上つた。

「尊い人間の生命を等閑にしたのは、どいつだ！ ボーイ長でも、父と母とから生れて、人間としての一切の條件を、貴様等と些も異る處なく、具備してゐるんだ！ それだのに、どうだ！ ボーイ長が負傷してから、一度でも、貴様は、彼のことを考へたことがあつたか、貴様に、人間の生命を輕蔑することを誰が許したんだ！」

彼は夢中になつてしまつた。

「若し、貴様が、この上も、ボーイ長に對して、畜生の態度をとるなら、俺にも、覺悟がある！ 貴様が、ボーイ長を見殺しにするなら、俺は……」

遂々波田は、その腰にさしてゐたシーナイフを引き拔いた。

「危いつ！」と皆が叫ぶ前に、彼は、それをテーブルの上に、背も通れと突きさした。

「俺は、畜生に對して、人間として振舞はれないんだ！」

一座は、死んだやうに靜になつた。扉の外の連中は、眼ばかりになつて、息を殺して成行きを見張つてゐた。

「貴様は、權利を持つてゐる。この地上には、無暗に多くの權利が、他の權利を蹂躙することによつて存在してる。だが、船長、いゝか」彼はテーブルを、今度は拳骨で食はせた。「人間を、輕蔑する權利は、誰もが許されてゐないんだ。又、他人の生命を否定するものは、その生命も、否定されるんだ！ 分つたか」彼は、そこにそのまゝ、坐ることを忘れたやうにつゝ立つてゐた。彼は睨み殺しでもしさうな眼付で船長を見据ゑてゐた。それは、全で、燃える火の塊のやうに見えた。

ストキは、波田の突き刺したナイフを靜にテーブルから拔き取つた。そして、彼は自分の席の前に置いた。

船長は、ピストルを持つて來なければならなかつたが、そこを立つわけに行かなかつた。彼は、初めて彼が、殆んど、齒牙にもかけなかつた、低級な人間の中に、高級な彼をも威壓して射すくめてしまふだけの威嚴を見た。それは、全く、何も持つてゐない、一人の勞働者だ。地位も、金も、系累も、家も、それこそ何にもない、便所掃除の勞働者の青二才ぢやないか、だのに船長は椅子から立ち上れなかつた。

彼は一度立ち上つて、途中で、グツ／＼と坐つたことを悔いた。その、彼の前に立つてゐる勞働者が彼からその、燃える、やうな眼光を放さなければ、彼は立てなかつたのだ。

それは、彼の職業的な、因襲的な、尊厳を傷けるものであつた。そして、一度負けたが最後頭の上らない鷄のやうに、その後は、彼を永久に壓へつける一種の不快な、重しになるであらう。それは強迫觀念に囚はれた病者が、何もない處に、恐るべき幻影を見て、狂ひ續けるのと同樣であらう。それは見かけ倒しの立派な、芝居の建付に、全身の信頼を以て凭れかゝつて、一緒に倒れるのと同じ、人々の運命であらねばならぬ。彼は、芝居の建具に凭つかゝつてゐたのだ！

「貴様は、大きな錯覺に陷つてゐることを、自分で知らないんだ！　貴様だつて、被搾取材料だ！　で、なきや幇間だ！　自分自身が何だつてことを、内面からハッキリ見詰めろ！　若しボーイ長を、この要求通り、この要求は、餘り遠慮しすぎてあるんだぞ、いゝか、若し、これを許さなかつたら、俺達には覺悟があるんだ。俺が、覺悟を持つてることは、もう言はなくても分つてるだらう、サア！　下らない物だが、金ピカだのを除つて、人間として、人間の要求に應ずるがいゝ」

波田はその椅子の上へ、ドッカと腰を下した。

そしてシーナイフを船長の前から取つて彼の尻つ邊にブラ下つてゐる、その帆布製の鞘に收めた。

人々は初めてホッとした。彼がライオンのやうに、暴れ廻らなくて幕になつたことが、誰もを安心させた。實際、それはまあよかつたと誰もを感じさせた。

船長は、全で、馬鹿にしたやうな態度を、要求書へ向けてゐたのだが、今では、それが非常に尊いものでもあるやうに、チーフメートの前から、自分の前へ引き寄せて、眺め始めたのであつた。この紙つ片に、あの情熱と憤懣とが織り込まれてあつたのだ！　彼は、それを引き裂かなかつたことを今になつて喜んだ。

それを引き裂きでもしてゐようものなら！

「それで、その要求書にある條項を、一々説明しませうか、若し、お求めになるならば」藤原は言つた。

「いゝや、説明には及ばないだらう。大抵分つてるだらうから。然し、一應メート達と相談しなければならないから、お前たちは、此處で一寸待つて、貰ひ度いね。一寸相談をして來るから」と言つて、「どうぞ私の室まで」とメート等に目くばせをして、彼は、船長室へ、又候入つて行つた。メート等は續いた。

「波田つて奴あ、どえらい奴ぢやねえか」とサロンの外では、波田の行動に對して、賞讃の辭を惜しまなかつた。「あれに限るよ、あれで行きや、こちとらだつて、いつでもこんなに苦勞しなくても濟むんだが」

「さうさ、力の強いのが勝つんだ。俺たちや呑まれてるんだ」などと火夫達は、その場から去らうとはしなかつた。

水夫達は、相手が居なくなつたので、極度の緊張から解放されて、煙草に火をつけて、休憩した。

「どうだい、ボースン、お前の代りまで吩咐けられたぢやないか」波田は、ボースンの方を向いて言つた。ボースンは、全で、ひどく頭でも打たれた者のやうに、ぼんやりしてゐた。出し拔けに船長を斬つたりする奴は、彼も見たことがあつたが、口も手も、これほど達者な奴は見たことがなかつた。「それに奴は未だ子供ぢやないか」ボースンは、喫驚してしまつてゐた。「いや、どうも知らなんだ」その筈であつた。

波田は、酒も飲まず、女郎買もせず、大人しくて、よく仕事をする評判な青年だつたのだ。

「全く、人は見かけによらないものだ！」

「え、どうだいボースン？　今度は藤原がほん

やりしてるボースンに訊いた。
「え、あゝ、俺あぼんやりしてたよ」彼はほんとにぼんやりしてゐた。
「冗談ぢやないぜ、しつかりして呉れよ。皆大汗で働いてるんぢやないか」
西澤と小倉と宇野と波田と、この四人は交渉條件のことについて、何か頻りに話し合つてゐた。
そこへテーブルの上へ、機關部のボーイ長が、紙つ片を持つて來て載せた。そして「これを機關部から」と云つてそのまゝ、逃げるやうにして飛んで出て行つた。
西澤は、その紙つ片を開いて見た。

アントウ ノ シヤス、セイコー シ
イノル、キカンブカフ ―ドー セーラ
ーシヨクン

と電報文見たいに片假名で書いてあつた。
彼等はそれを見て、戸口の方を向いて、手を擧げて合圖をした。
「徹底的にやれ、必要になれば、火は吹かんから」戸口の外から誰かが怒鳴つた。
四人はそれを當局に見せた、彼は、ありがたう」と叫ぶのを忘れなかつた。
軈て、船長室へ、審議を凝らしに行つたメート等はサロンへ引つかへして來た。
要求條件には念入りにも、船長と、チーフメートとの判が並べて捺してあつた。
「皆と相談の結果、要求を容れることにしたから、今から直ぐに働いて貰ひ度い、ボーイ長は、横濱着港と共に直ぐ入院させるし、その他の條件も、即時實行することにしたから」船長は、低い聲で言つた。彼は自ら進んでこの條件を、認容したのだと云つた風に、見せかけたかつたが、餘りに狼狽した彼にはその方法も出來なかつた。
「バンザーイ」「態を見ろ!」「勞働者フレーフレー」などと云ひながら扉の外の火夫達は、ドヤドヤと立ち去つた。
「それぢや、今からすぐに仕事にかゝつて呉れ」チーフメートは言つた。
「へー、畏りました」ボースンは答へた。
「どうも有難う存じました」藤原は、判の捺された要求書を、ポケットに收めながら言つた。
彼等はおもてへと歸つて行つた。
水夫等は勝利を得た。だが、何だか物足りない感が殘もの、心の闇にわだかまつてゐた。彼等は、何かの豫感を感じてゐたのであつた。
火夫室の前では、彼等は、萬歳を三唱してセーラーを迎へた。
その日の出帆は、それでも、水夫等にとつては「凱旋軍の故國への船出」の感があつた。

四六

その航海は異樣な航海だつた。水夫達は人間として、取扱はれ始めたやうに見えた。命令を發する處のメート等は、彼等が單に、作業の分擔的任務から、行動するやうに命令した。そして、その內容も整頓され、そのために同一の效果に對して、水夫達は以前の三分の二の勞働と時間とで濟む位になつた。
船長にしろ、外のどのメートにしろ、今までは「ゴロツキ」の下級船員たちが、たゞもう奮めに働いてゐる、と言ふことだけに、その興味を持たなくなつたやうに見えた。下級船員にたが「人間」らしくあると云ふことが、今では、彼等の權威を傷けると云ふ、その妄想から彼等は、解放されたやうに見えた。
どこともなしに、いや、それどころではない、はつきりと彼等は、餘りに現金すぎる程に、水夫達はおろか火夫達にまでも遠慮してゐた
それは、內實を知らない人々から見ると、不和であつた。そして萬事が控へ目であつた。

譲なるメート等よ！」と知らない人は、それが勞働者であつても、褒めたであらうほど、靜であつた。從つて、船員たちも「ゴロツキ」ではなかつた。

彼等も、彼等が人間らしく振舞ひ得、又、さうすることを、禁じられさへしなければ、彼等は立派に――人間らしく振舞つた。

水夫等は、自分等に酬いられる、勞銀は何であるか？を或者は知り、多くは知らなかつた。たゞ彼等は、彼等の生活が甚しく脅かされる時だけ、仲間のやうな彼等の忠實さから、彼等は、自身に立ちかへるのであつた。そして、彼等は、それに成功することもあつたが、多く失敗した。殊に決定的な立場から言へば、彼等は、未だ、要求してもゐないのに、叩きつぶされたのであつた。

彼等は、三上のやうに、或は、波田のやうに、或は小倉のやうに、西澤のやうに、自分をだんだん強く、弱めいじめにする、勞働條件から逸れようとして、個人的に行動した。

彼等の行動は全で相反するやうにも見えた。そのことについて彼等同志の間に喧嘩さへも起つた。だがさうしたのは、彼等の上に重つ苦しく、蔽ひ蓋さつた「苦役」と、「困窮」とであつた。

それを操つてゐる資本制の絲であつた。彼等は、自分たちのやつてゐたことと、藤原のやつてゐたこととが全つ切り違つたことであつて、そのくせ一つものを目あてにしてゐたのだと言ふことを覺つた。彼等はものにはやり方があると言ふことを教はつた。

これまでは彼等は、一つ釜の飯を食ふ「仲間の關係であつた。だが今では、それ以外に「勞働者としての階級」に屬する同志だと云ふ感情がつけ加へられた。それは彼等の間を妙に強く緊りつけ、親密にしたやうだつた。

「女郎買」の友達から「牢獄まで」もの同志の關係に押し進められた。

それは、藤原が説き燒めたためであつただらうか、或は彼が「煽動」したものであつただらうか。誰か一人の力がそれ程多くの人を動かしただらうか、それは、若しさうであるとしたら、その多くの人は自分自身の意志に反してまでもさうなつたのであらうか。それは暑い空氣の中で人々が喘ぎ塞い空氣の中で人々が懊惱するのと同じく、資本制經濟の下に勞働者が一樣に抱いてゐる處の、反抗の小爆發ではなかつたか。

私たちは、多くの勞働爭議が、[illegible]に[illegible]、[illegible]史[illegible]に基いて[illegible]せられることを知つてゐる。

この小さな物語りも、その一つの定められた軌道を出で得ないことは、私の筆を、澁らせ、進み難くする。だが、それは、××××××××、××な勝利は得られるものでないと云ふ事實の前に忍從して、私は筆を進める！

この航海は、暴化の前の靜けさであり、暴化の後の寂しさであつた。

それは、そんなことの後には普通のことであつた。そしてその普通のことは、勞働者階級にとつては悲しいことであり、辛いことであつた。が、資本家にとつては、未だ食ひ足りないことであり、手緩いことであり、歯痒いことであつたが、稍々愉快なことでもあつた。だが、それは何だ？　私は又餘り先走りしすぎた。それは横濱についてからのことだ！

今度の航海――横濱入港は、どの船員の心にも大きな期待を持たれてゐた。そして出帆も四日頃迄は早くてもかゝるのだつた。正月の一日は誰でも休むのだ。そして、彼等は一樣に、――丁度炎天の下に強行軍する軍隊の兵士が一樣に水を欲してゐるやうに、――陸上に於ける、陸上であれば不便でもいゝ、生活に飢

ゐてゐたのだつた。それに、そこは正月ではないか。そのために彼等の足は地についてゐなかつた！

本船は、立派に化粧して入港するのだ！　船は二三日碇泊するんだ。いくらかの月給の外に、手當がある筈だ！　あそこに行かう、こゝに行かう、俺は東京まで行つて來よう！　種々に彼等は考へてゐた。

高い鐵の窓、或は高い煉瓦の塀を越えて、囚人が社會の空を望む時に、彼等はそこに實際以上の自由があり幸福があるやうに考へると、ドストエーフスキーは言つたが、それは全くうまいことを云つたものだ、それと同じく船乗りたちも、陸には實際以上の憧憬を持つた。彼等は、それが陸上でさへあればどんな幸福でもあり得ると、彼等が陸に居て苦しさの餘り倦ては、海へ逃け出したことさへも忘れて思ふのであつた。あの時分と今とは違つてゐるだらうと、またはあの時分は俺がまづかつたんだと。彼等は、夜の入港のやうに、陸の醜悪な事實を一切闇の蔽ふに委せて、その明るい、港の蠱惑的な燈火に憧れてしまふのであつた。その癖彼等は、どの上陸の際でも陸上の生活が、彼等と非常に縁遠いものだと云ふことを感じさせられた。それは丁度、陸上の總ての事物や人が、彼を突つ放すのだと感ぜずにはゐられないのだつた。

それは左捻の電球が、右捻のソケットに嵌らないのと同じく、彼等を專門的にし、不具的にしたのだ。萬寿丸は一晩港外に假泊しないでも濟むやうに順序よく、進んだ、尻谷の燈臺、金華山の燈臺、金石沖、犬吠沖、勝浦沖、觀音崎、浦賀と通つて來た。そして今本牧沖を靜に左舷に眺めて進んだ。

水夫たちはフォックスルにスタンバイしてゐた。雪催ひの風は鋭く頬を削つた。その頃はどんな防寒具でも通すのだから、水夫等の仕事着などは、蚊帳のやうであつた。彼等は、雨も雪も降らないのに、合羽を着てゐた、それは寒さをも防ぐし、暖くもあるのだ。そして飛沫をも除けることが能きるのだ。

十二月三十一日、午前九時――全く、うまく行つたものだ――萬寿丸は横濱港内深く入つて、殆んど神奈川沖近くへ投錨した。

本船が港内に入るや、すぐに會社からのランチが、本船の周りを水蜘蛛のやうにグル〳〵廻りながらついて來た。

それは十二月三十一日であつた。大晦日であつた。それは如何なる勞働も休んでゐる筈であつた。けれども、その當時は戰爭が、ヨーロッパに於て行はれてゐた。そのために、經濟的好況が、日本のブルジョア階級を、狂的な踊り菌でも、食つた人のやうに夢中に止め度もなく踊り狂はせた。そして、その有頂天な踊りと、そのための勞働者へ對しての節慾とが、その大晦日に、仲仕をして石炭荷揚を爲さしめた。即ち、萬寿丸には、仲仕が、ランチに曳かれた艀の中に滿載されて送りつけられた。仲仕――權三と云はれてゐた――は、特別の賃銀を支拂はれると言ふ約束で、明日のお屠蘇の餘分の一杯をあてにしてやつて來たのだ。

人足の艀は本船へつけられた。ロープを傳つて猿のやうに驅け上る。彼等は、只競爭するのだ。そのために得る處は彼等を驅つて過度勞働に追ひ込み、資本家をしてより一層その財布を重くせしめるだけのことだ。だが、彼等は我先にと飛び上る！

萬寿丸は荷役を始めさうに見えた。ウヰンチは仲仕等にかゝつては無暗に手荒く取扱はれる。バルブ明けつ放しで、ハンドル一つのゴーへーゴースタンだ。

私はこんな風に書いてゐたら、切りがないだらうと云ふことに氣がついた。私は未だ船長

と三上とが、室蘭で同じ女郎を買當てゝ兄弟になつたと云ふことも、書く積りでゐた。が、そんなことは別に不思議なことでも珍らしいことでもない。止めてしまはう。

ランチから、會社員が船長室へ入つて行つた。そこで、彼等はコーヒーを飲みながら、なにか話した。

船長は、水夫等の「不都合なる行爲」について嚴罰を與へようと、室蘭に於て既に決心してゐた。で、彼は會社から來た社員に對して、簡單に「水夫達が如何に不當な要求を、横着な態度でした」かを話した。だから、彼等、水夫等全部を下船させると同時に、引つ縛つてやる必要がある。「序に三上の傳馬事件も告發する積りである」ことを、彼は告げた。だから、「會社へ歸つたら、秘書課長へその由を傳へて置いて貰ひ度い」と言ふのであつた。

一方チーフメートは投錨と共に、再び船に乘つて水上署へ赴いた。そして、そこで室蘭であつた一部始終を話した。――彼にボーイ長のことは話すのを忘れた――それはきつと藤原の懇願だ。殊に波田はメスを拔いて我々を脅迫した。彼等はきつと暴行に訴へてもその實行を遂げるだらうから、本船へ出張の上保護を加へて貰ひ度いと願ひ出た。

水上署のランチは、チーフメートと共に、倔強なる巡査五六名を載せて、威勢よく出動した。

ランチは萬壽丸のタラップについた。チーフメートは警官達をサロンに案内した。そこで、巡査諸君は、林檎と、菓子と、コーヒーとの「前で」暫く待たなければならなかつた。

水夫たちは、ウヰンチに油をさしたり、種々な道具類を片附けたりしてゐた。そして彼等は、「その夜は、明日の朝まで、詰り正月の朝まで歸らないでいゝ上陸が能きる」と考へて、愉快な氣持になつて働いてゐた。確かに、彼等は、當分、船に歸らないでもいゝ上陸によつて、待ち受けられてゐたのだ。

船長は、今は、前航海の、夜中に於けるサンハンの中の船長でも、出帆前の室蘭に於ける彼でもなかつた。彼は今は暴力的であり得た。最も露骨なタイラントだつた。

船長の命を受けたとものボーイは、おもてへ來た。そして、ボースンに言つた。

「ボースン、荷物を片附けて、下船の用意をして、ボースンと、藤原と、波田と、西澤と、小倉と、宇野と、サロンまで來いと、船長が云つたよ。それからね、オイ」彼は今度は彼自身の部分の話に移つた。「水上署の巡査が十五人サロンへ來て待つてるぜ、きつと波田が暴れると思つて連れて來たんだぜ。すこし暴れた方がいゝんだ、全く。皆にさう云つて呉れよ、いゝかい」彼は、ともへと歸つて行つた。

そのことは、もう皆に特に通知するまでもなかつた。とものボーイが來れば、何かの命令だと云ふことは分るので、水夫達はボースンの室の前で立つて聞いてゐた。

「捕かつた!」藤原は感じた。然し、これほど徹底的だとは思はなかつた。これぢや全で船はカラッポだ! だが!」彼はぢつと我慢した。彼にはもう彼が歩いて行く道筋がハッキリ分つてゐた。それは白く乾いた埃つぽい道である。沙漠のやうに、人類を飢餓と渇とに追ひやる處の道であつた。

波田も覺つた。俺達は、それでは行くんだな」と思つた。「俺達の行く道は、右は餓死だ、左は牢獄だ」彼は吐き出すやうに云つた。

四七

彼等は各々自分の運命を知つた。そしてその行李へ、ありつたけの彼等の持物を詰めた。彼等

は、その持つてゐる者は、蒲團までも行李に詰めた。彼等の行李は貨物を持つてゐた。彼等は、全く簡單に、その世界一周旅行にでも上り得るのであつた。船乘りの生活は乘客として見た場合には、全く異つた觀を呈する。それは、水火夫に至つては、乘客から見たのでは全で分らないのだ。殊に貨物船に於ては、乘客がないのだ。乘客が無いと云ふことは世間態が無いと云ふことになるのだ。風呂さへ無いのだ。擂り度いだけ擂るのだ。

彼等は、食つて着るだけで滿不足であつたので、從つて、その最初船に乘る時に買つた行李、その中へ詰つてゐた種々の物が、だん／＼減つては行つても殖えて行くなどと言ふことは殆んどなかつた。

その實際の輕い、中實の少い行李を引つ擔いだ彼等は、恰も移住民の一列のやうに續いて彼等の艀からサロンへと赴いた。

彼等の去ることを知つたボーイ長の悲嘆は甚しかつた。彼は、藤原と、波田との手に縋つて、何か言ひ度さうにしてゐたが、漸く出た言葉は、劇しい嗚咽のために聞きとることが能きなかつた。だが、彼は嗚咽を語つたのだ！ 彼は一切を奪はれた。その最初であると同時に最後のものである、彼の賣ることの能きる唯一の勞働力さへも、彼が勞働力を賣つたことが原因となつて、奪ひ去られてしまつたのだ。

そして、彼を保護し、愛して吳れた人々は、今警官の居る處へ、船長に下船の用意をして來いと云はれて、出かけて行くのだ。その船長は何だ！ 自分の生命にさへ一顧を與へない勇猛果斷な男だ。ボーイ長は、自由を奪はれて以來病的に發達した神經によつて、そこには何かよからぬことが待ち受けてゐるに違ひないことを直感したのであつた。藤原さんや、波田さんたちはもう下船させられるんだ。そして、俺は動けもしないこの足で、あのメート達の下にどうなるんだらう。忘れつ放されるんだ！

彼は泣いた。

泣くと云ふことは、それは船では今まで無かつたことだ。血氣な青年が壯年の勞働者達の間に泣くと云ふことは見られないことであつた。

ボーイ長は歯を食ひしばつて、嗚咽を止めようとした。そして厚い禮も言ひ度い。彼等の今後の行動の豫定も知り度い。どうすればどこで會へるか、その方法も知り度い。又取り敢へずの所書も貰つて置き度い。自分の所書も渡したい。あゝも、かうもし度かつた。それだけ猶更ら、彼の淚は、溢れ落ちた。彼の泣聲は喰ひしばつた歯の間から、鋭く洩れた。

藤原の殆んど冷酷な、動いたことのない意志そのもののやうな眼の中にも、重く、鋭く、悲しみが閃いた。

波田も歯を喰ひしばつた。そして力をこめてボーイ長の手を握つた。そして、

「體を大切にして、早く癒り給へね」と言つた。

が、彼は、自分たちが去つた後ではボーイ長はどうなるだらう、その傷や病は誰が氣をつけるのだらう、と思つては、「癒り給へ」と云ふ言葉さへも慘酷な言葉であつたと思ふのだつた。打つ捨らかしといて、どうして怪我や病が癒り得るか、誰がこの責任を負ふのだ！ と思うて、彼は思はず淚の滲み出るのを覺えた。そして彼の心は、ます／＼憤怒の焰を强く燃え立たせた。

「又どこかで會ふこともあるだらう。それまで、お互に丈夫でゐるようよ、ぢや大切にし給へ、さやうなら」藤原は一揖して立ち去つた。

「體を大切にして下さい、さやうなら」とボーイ長は云つて、その枕に頭を埋めた。「淋しいなあ」彼は、止め度もなく溢れる淚の中へ顏をいつまでも埋めてゐた。

「資本主義制度は、蜘蛛の巣見たいに、俺たちを引つくるんでゐるんだ。どう足掻いてもそれは氣味惡くからみついて來るばかりだ、畜生！今に見てゐろ、土蜘蛛奴！」藤原は考へながらデッキを大跨に歩いた。

サロンには、船長以下メート等は、その裝飾した上陸姿を並べてゐた。

警察の巡査は後ろの方に立つてゐた。

「フン、無意識的にブルジョアやその××××××××××××××、×××××××××××！」藤原はその情景を外から眺めて感じた。

波田は、全身の血が頭に逆流した。彼は、心臟でも抉るやうに、船長の顏に燃えるやうな眼を注いだ。

船長は、然し、今は十分に「因襲的尊嚴」の鎧を着て、旗、着物澤山で拵へてゐた。

一同は、その各々の、行李をサロンの出入口へ投げ出して、一樣に不愉快な氣持を抱いてそこへ行つた。

「皆揃つたね」と船長はチーフメートに言つた。

「えゝ、とれで全部です」チーフメートは答へた。

「それぢや、云ひ渡して下さい」

「ボースン、小倉、宇野、西澤、とこの四人は、下船命令、藤原、波田も同樣皆、僕と一緒に海事局まで行つて呉れ、それから、藤原と波田とは海事局には行かないでよろしい。手帳は後で渡すから。二人に警察の方で用事があるさうだから」それが宣告であつた。そして彼は、つけ加へを忘れなかつた。「だから、俺が室蘭で、止した方がいゝつと言つたんだ。お前等が、いくら威張つてもあかん。それよりおとなしくした方が得だ。おとなしくしとれば、人の憐みもかかるが、強いことを云ふと、から云ふ際に誰も相手になり手がないからな」

「自分によく云つて聞かせとくがいゝや、俺等のことならお世話にやならないや。道が異つてるんだからなあ。そのうちどんなお禮をするか覺えてろ！」波田は怒鳴りつけた。

「あれが波田つて奴です。あんな亂暴な奴です！」船長が言つた。

「何を！　べら棒奴！　死にかけた人間を打つ捨らかしとくやうな奴が、人のことが云へるかい。手前より亂暴な奴はねえんだぞ、壓搾器奴！」波田は船長をも怒鳴りつけた。

「ま、せいぐ暴れて、警察で油を搾られるがいゝさ」船長は言つた。

「俺の出て來るまで、手前めは丈夫で生きてゐるやうに、俺は祈つてらあ。途中で燃されちやはねえやうに氣をつけな」

だが、船長は、早速引つ込んでしまつた。

チーフメートは、ボースン、小倉、宇野、西澤を連れて、二人の警官と共に海事局に行つた。

彼等はそこで物の見事に首を馘られた。

これが十二月三十一日だ。

藤原と波田とはランチで水上署へ行つた。

正月の四日までは警察も休みだつた。從つて、藤原と波田は、留置所の中で正月を休むことが能きた。

彼等は正月の仕事初めから、司法で調べを受けた。そして治安警察法で檢事局へ送られた。

檢事は彼等を取調べるために、彼等を監獄の未決監に拘禁した。

彼等には面會人も差入れもなかつた。殆ど彼等は禁錮刑囚のやうに、監房の板壁を眺めた。

食事窓や、覗き窓や、その他の隙間からは剃刀の刃のやうな冷たい風がシュッ／＼と吹き込んだ。

彼等は、そこで刑の決定されるのを待つた。

略傳

明治二十七年三月十二日、福岡縣豐津村に生れたさうである。

父は九州人であり、母は會津若松の人間であつた。

小學校の時から、ものを讀む事は好きであつた。故郷の中學では下級の時から文學書を漁つてゐた。上級になると學校に通ふ事が詰らなくなつた。卒業試驗の始まる前夜、酒を一升、切り通しの斷崖に向つて呷つてしまつてひどく泥酔したことを覺えてゐる。

試驗ほど人間を馬鹿にし、侮辱するものは無いと思つたかららしい。それは又、不必要に生徒たちを苦しめ、疲勞させた。

中學だけで、私は人から試される事に愛想をつかした。それから試驗無しの早稻田の文科の豫科に入つたが、學校には通はなかつた。そして最初の學期試驗の時に、授業料も無論納めて無かつたので、除名されたらしい。

私はありつたけの物を質屋に叩っ込んで、横濱へ行つた。夏の日暮であつた。橋の下流では浚渫船が泥を飲んだり、吐き出したりしてゐた。ひどく私には淋しかつた。

「海員下宿」と看板のかゝつてる家に、私は泊つた。そこでは數ケ月も私を船に乘せようとしないで、下宿料だけを取らうとした。

私は、山下町のローラースケート場のボーイになつて、客の靴にローラースケートを縛りつける仕事をした。

數ケ月の後、私はカルカッタ航路の貨物船に、水夫見習として無給で乘り込んだ。

凪の日に、私はすつかり胃の腑から雜物を吐き出して、終ひには血混りの粘液を吐きながら、水夫たちの食事を運んだり、風呂を沸したりした。然し神戸に着くともう、凪の日ならば醉ひはしなかつた。

カルカッタでは、暑くて堪らない正月を迎へた。

その船を下りてからの生活は、スピードの速さと、轉換の速さとで、順序も年代も思ひ出せない。その間にも二三度船を換へたと思ふ。

醫者の玄關番、出版の外交員、學校助手、セメント工場、新聞記者、等々をやつてるうちに、いつの間にか勞働運動に捲き込まれてゐた。

米騷動當時、學校の小使たちと一緒にストライキをやつて勝つた事がある。神戸の川崎三菱造船所の爭議時代から、名古屋で組織運動を始めて、當時の治安警察法で、前科を二犯貰つた。

一九二一年から一九二五年までは、何くれとなく毎年刑務所に留められた。

その間、二兒を失ひ、女房は行方不明、母は自殺し損つた。思つただけでも憤ろしい時代であつた。

『海に生くる人々』「淫賣婦」「誰が殺したか」「山抜け」等は獄中で書いたものである。

その投獄期の後に、木曾の水力發電所の工事場で働いた。

それ以前同志、青野季吉を運動の上で知つてゐたので、「海に生くる人々」「淫賣婦」等を見て貰つてあつた。

ジャックハムマーで、岩盤に穴を明けて、ハッパを濟まして歸ると、飯場に春陽堂から手紙が來てゐた。「本を出したいから」と云ふのだつた。それから未だ一年位は木曾に居て、最初の

本『淫賣婦』が出て暫くしてから、怖々、東京へ出て來た。

創作年譜を書けと云はれたが、私は物事をキチンキチンと片附けると云ふ事が、全く出來ないので、いゝ加減にしか分らない。

名古屋刑務所で書いたものに、

『海に生くる人々』『牢獄の半日』

『淫賣婦』『支那人の糞』

巣鴨刑務所で書いたものに、

『誰が殺したか』

『別離』

『山抜け』

『鼻を覘ふ男』

『迷へる親』

等である。××事件以後、獄中では執筆が絶對に出來ないらしい。

木曾で働いてゐる中に書いたものに、

『出しそびれた手紙』『セメント樽の中の手紙』『むごたらしい出來事』『遺書』『馬鹿を見たけれやこいつ等を見ろ』『眠い』『勞働者の居ない船』『それや何だ』『住むべき處を求めて』『どこも冷たい』『赤い荷札』『一篇の話』

等である。

東京へ出てからは、

『被害者』『正札つき貴婦人』『刺された男』

『散歩』『春の悩み』『焼けた金で拂ふ』『田舍者が都會を見る』『追跡』『猫』『校正係』

『櫻の咲く頃』『浚渫船』『印度の靴』『乳色の靄』『プロレタリアの乳』『マドロスと鼠』『生爪を剝ぐ』『死屍を食ふ男』『首を賣つた話』

『坑夫の子』『苦闘』『天の怒聲』『無風帯を行く船』『船の犬カイン』『火夫の顔と水夫の足』『電燈の油』『鴨獵』『ハンケチ泥棒』『獨房語』『人間肥料』『戀と無産者』『暗い顏』『小作人の犬と地主の犬』『惡夢』『海底に眠るマドロスの群』

等々がある。

その他未だ沒れたものもあると思ふが、思ひ出せない。獄中記の中に未だ發表しないものがあるが、これは、ぼつ/\手を入れて發表し度いと思つてゐる。

——一九二九、五、二六——記

葉山嘉樹

生ける人形
あんな男こんな男
大島代議君
雲とゴルフの球

片岡鐵兵

明るい心、洋々として。いつも活よう。
どんな圧迫をも怖れないで。嶮しい路を、
同志よ、快活にいかう。墓場へも。

一九三九・七・一〇

片岡鐵兵

(SM印　A…1)　10…20

生ける人形

一

このビルディングの中では、
忙しい事それ自身が快樂だ。

七階、エレベエタアから廊下へ、そして瀬木は歩きだした。

その時、瀬木はふと感じた、

すこしおれの歩き方は妙だ―

廊下を踏む靴さき、それを腰に感じる、若々しい、明快な感覺だ。近代の事務員らしい、新鮮な歩き方―忙しい事それ自身が快樂だ―とでもくり返すやうに鳴る靴から、肩さきにまで傳はつてくるリズムだ。

瀬木は意識してさつさと歩いた。快く氣取つて歩いた。

彼がこのビルディングの一室に勤めだしてから、まだそんなに時は經つてゐない。たつた二ケ月前までは、ある政黨の、院外團員として地方で働いてゐた瀬木が、もうこんなに特殊な歩き方をしてゐる！　だがこれは何も瀬木ひとりに限つたことではない。それは丸の内の、避け難い一の風土病であつた、歩き方が、廊下でこのやうに變つてくるといふ徴候は。

瀬木はやがて事務所―繁本興信所のドア口まで來た。ドアのとつ手をつかまうとした瞬間に、そのドアがスウッと、向う側から開いて、中から一人の若い女が、

「あら―御免なさいまし」

出て來た拍子に、瀬木の身體に突き當りかけたが、そのまゝ彼女は廊下を向うへ曲つて行つてしまつた。

「成程ね」

瀬木はそこへ突立つたまゝ、思はずつぶやいた。斷髪で洋裝で、所謂モダンな奴の見本だと思つた。それから彼はニヤリとして、事務室の中に入つて行つた。

「唯今―」

勢ひよくいつて、廣くもない事務室を一わたり見まはしたが、七階の外光を贅澤に取りいれてゐるといふ他に、これといふ取柄もない事務室は、相變らずだらけ切つてゐる。三四人の同僚が、向うの机の所から、ニヤリ〳〵しながら、こちらを見てゐた。

「何が可笑しいんだい？」

「まだ氣がつかないかね」

壯士風に紋付の羽織を着た富田が、意味ありさうにいつた。

「何が？」

「そら、それだよ」

富田が、瀬木の立つてゐる背後の白い壁を指さした。そこの帽子かけを見ろといふのだ。

「ふむ」

瀬木は瞠目した。外套や帽子が、重なり合ふやうにぶらさがつてゐる中に、見なれぬ婦人帽と、シイル擬ひの婦人外套とが、ぷんぷんとにほひ渡るかのやうに鮮かに浮き出てゐた。瀬木はすぐ、さつき扉の所ですれちがつた女を想ひだしたが、

「あれ、どうしたんだい？」

「社長が、今日からお雇ひの邦文タイピストさ―」

事務卓の上で將棋を指してゐた山野が答へた。

「チェッ、邦文タイピスト！　そんなものに用があるのかね、こゝに」
「有るとも、有るとも、大有りさ！」
富田がいつたので、みんなはドッと笑つた。
そこへ、さき程の女――邦文タイピストがしとやかに扉をあけて、戻つて來た。
瀨木はつか〱と彼女の方へ近寄つて行つた。

二

いつの間に備へつけたのか、タイプライタアを置いた卓の前に、キチンと腰かけた彼女の傍らに立つと、瀨木はいつた、
「貴女ですか、今度、入社なすつたのは？」
「はア……？」
彼女は疑はしい眼つきと、落ちついた微笑とを等分に現しながら、瀨木を見あげた。
「たれも紹介してくれさうもありませんから、名刺を差しあげるのですが、あしからず」
瀨木は名刺をさしだした。
「瀨木といふ者です。今までは僕がこの社で一等新參でした。その光榮を、今日からあなたへお讓りするわけです。どうぞ宜しく」
「わたしこそ」
「わたし」を小さく、「こそ」を大きく發音して、彼女は頭をさげた。「細川弘子と申しますの」
向うの方で、山野や富田が「巧くやつてやがら」といつてるのが聞えたが、瀨木はかまはずに話をつゞけた。
「少しお話して下さいませんか。僕は田舍から出て來たばかりで、東京のモダン・ガアルの方とお話がしてみたいんですが」
「まア、わたしがモダン・ガアルですつて？」
「さうでせう、だつて、さうですよ、何といつても、貴方のやうなのがモダン・ガアルでないはずはないですからな」
「さうですか知ら。ぢや、あなたのつけて下さつたレッテルを有難くお受けすることにしますわ」
「僕がつけたレッテル！」と、瀨木は愉快さうに叫んだ。
「貴方はにせ物を賣ることになれてらつしやるやうですのね、中味も分らない物に、そんなレッテルなんか貼つて――」
「中味がどうだか、味はせてくれますか？」
亂暴な攻撃だ。細川弘子嬢はむつとした顏を急にそらすと同時に肩をスッとそびやかした。
「怒らないで下さい。僕は永いこと田舍にゐて、淑女らしい人と交際もなし、つい田舍藝者にいふやうな言葉が出てしまふんです」
けれども彼女は答へなかつた。
「怒つたのですか？」
「ふゝ」
彼女は笑つたが、矢張り顏を外らしたまゝ答へなかつた。
「さぞ、僕を輕蔑したでせうね」
あきらめたやうにいつて瀨木はしばらく彼女の肩やえりあし――いや、田舍藝者でないことに、彼女にはえりあしなんか無いのだ――それに青々と剃つたうしろくびを見おろしてゐたが、相變らず彼女が默つてゐるので、たうとう彼は、富田たちの所へ歸つて來た。
「どうだ、巧くやつたか？」
富田が爆笑ひと一緒に瀨木の背中をたゝいた。將棋を指してゐた三木や山野も盤面から眼を放して、ニヤリとして見せた。
「いや、すつかり振られちやつた。それはさうと、社長はまだか知ら？」
「社長――まだ來ないよ。なるべく遲く來てもらはんと、將棋が困る。持久戰だからな」と三木が盤面に眼を戻しながら答へた。
「お手は？」

「桂に歩が二つ」

「桂に歩が二つ――と。桂に歩が……」

瀬木は将棋に興味がないので、欠伸しながら、窓の方へ寄つて行つた。

退屈すると窓のところへ立つて丸ノ内の空や電車通りや、青つぽい下界の植物を眺めるのが彼の癖だつた。退屈すると――だが、彼が入社してから、この事務所で、曾て退屈しない日といふものがあつたらうか？　それほど閑散で、仕事のない、それは「興信所」だつた……

三

瀬木は、地方院外團員だつた關係からある代議士の紹介で最近入社したばかりであるが、まだこの社へ入つて一度も仕事らしいものをあてがはれた事はなかつた。瀬木ばかりではない。看板は正しく「繁木興信所事務室」であるが、一體こゝで、どういふ興信所らしい事務が取られてゐるといふのであらう。外からこゝへ入つて來たものは、餘りにビジネス・ライクでないのに驚くであらう。申しわけばかりの事務卓に、椅子、古風な男を寄せ集めたやうな四五人の社員たち――中には壯士風に紋付を羽織つたのなどがゐて、雜談したり、將棋を指したりしてゐる。

このビルディングの中では、忙しい事それ自身が快樂だ。

然し、こゝの事務室ばかりは別天地のやうに見えた。唯、今日から入社したといふ細川弘子だけが、ビルディングの事務員らしい存在だつた。いや、まだもう一つある、瀬木大助の廊下を歩く時の歩き方がある。その瀬木さへ、廊下から、一歩室内に入るともう氣持が違つてしまふのだ。

その證據に、瀬木は今日も退屈して、窓から外を眺めてゐる。鐵筋コンクリートの七階で、快活な忙しさがないといふことは、一つの不幸であつた。

三月、春ちかい空は水色によどんでゐた。お城の森から、斜に展がる馬場先の芝生、どこかの巨大なアンテナ、屋根。日が降りそゝいでゐる。こゝは日比谷に近い。

瀬木のやうな男にとつて、日比谷に近い所に居るといふことは、その事だけで既に昂奮に價した。彼は今年三十四五になるが、餘り年をとらないうちに一度代議士にならなければ生れたかひがないといふ人生觀を持つ男だつた。永らくゐた田舍を引拂つて、東京で下宿生活を始めたのも、よく／＼覺悟するところがあつたからだ。地方の院外團員として、この數年來辣腕を振つてまうけたこともまうけたけれど、それは多く遊蕩につかつてしまつた。のみならず人々はます／＼自分を三百代言的に見るといふ傾向があつて、故郷では、なか／＼出世させてくれさうもなかつた。

そこで彼は東京に出て來た。東京といふところは、三百代言と紳士とが、同意語で通用する大都會だつた。

今、瀬木が七階の窓から見おろす大通りを、自動車と電車とが、縱に横に速力の線を無數に引いてゐる。

「今に見ろ、己だつて、この大通りを自動車で、日比谷へ走らすのだ」

空想。瀬木は空想のほとんどない男であるが、代議士になる夢については、子供のやうに昂奮したり、英雄的な氣分になつたりするのだ。

あゝ、ほんとに代議士になりさへしたら！　そしたら、あとは何でもない、金まうけも、その他のいろ／＼好い事も、瀬木の腕にとつては少しも困難なことではないやうに思はれた。彼は、兎に角一度代議士にならせてもらひたいのだ、決して陣笠では終らないといふ自信を持つてゐる

た。
ふと、室内を顧みると、富田や三木たちは相變らず、將棋盤をかこんでゐる。そこで瀨木の視線は、颯爽として、部屋の向うの隅にまで伸びた。
部屋の向うの隅には細川弘子が、用もないタイプライタアの前で、矢張り退屈してゐた。
そして彼女は、瀨木と顏が合ふと、ニッコリした。
瀨木も笑つた。
彼女は、片手をあごの下まで持ちあげて、その指のさきでそつと、おいで／＼をして見せた。
瀨木は「いや／＼」と首を横に振つて見せた。

四

ある日、瀨木が自分を今の興信所に紹介してくれた先輩の青原代議士を訪れると、代議士は「君を一度御馳走してやらうと思つてたのだ」といつて、彼をある待合につれに行つてくれた。
藝者が二三人來たが、田舍で遊びなれた瀨木には、面白くも何ともなかつた。妓たちは徒らに綺麗で品がよくて、お行儀がよくて、そして無口だつた。
しかし入りかはり立ちかはり、來たかと思ふとすぐ又他所のお座敷に行つてしまふ妓たちの中に一人の中年增は、酒も飲めるし、口もよくきいた。ふと、彼女は杯を代議士に返しながらこんな事をいつた、
「近頃、古本さんは、どうしてらつしやいますの？」
「古本君に、何かい、用事でもあるのかい？」
「えゝ、あるひは岡ぼれかも知れない――なアんて―
この下らない會話が、突然瀨木の氣持を緊張させた。といふのは「古本」といふ固有名詞は、彼にとつて聞き捨てのならないものだつたからだ。
青原代議士と藝者との會話はまだつゞいて行つた。
「君が岡ぼれしてることを知らせてやつたら、奴さん、有頂天になるぜ」
「さうあつて欲しいわ。譃ですわ、ほんとは、いつも御一緒だつたおつれさんですもの、近頃お目にかゝらないので：…」
「いゝよ、いゝよ、そんなテレ隱しはいはなくつても――そのうち、うんとおごらせてやるから―
「あら、お察しが利きますのね、前祝ひに、一つ頂きますわ」と杯をうけて、「こちら、先刻から隨分おとなしくしてらつしやいますこと」と、瀨木の方に言葉を移して來た。
古本、古本！　この固有名詞に瀨木の注意力が鋭く集中されるのには理由があつた。それは最近、繁本興信所の社長の繁本氏が、彼一流の敏感さで探知した玉屋銀行といふ三流乃至四流どころの銀行の危いらしいといふ話に關聯するのだ。つまり、玉屋銀行の頭取か古本といふ人なのだが、もしも、先程からの會話に出てくる古本なる人物が、玉屋銀行の古本氏だとしたなら――これは重大なる發見の端緒とならざるを得ない。
中年增の藝者が自分の方へ言葉を向けて來たのを機會に、瀨木は自分の發すべき言葉を咄嗟に選んでいつた、
「古本さんを手玉にとつて、玉屋銀行をつぶさうなんて心がけの好い女傑の前では、おとなしくせざるを得ないよ」
さういつて、チラと瀨木は青原代議士の顏いろをうかゞつた。心なしか、代議士の顏が、ふと青ざめたやうに思はれた。
「もう結構ですわ」

飲みかけた酒を、杯のふちにぶつと吹きだすやうに笑つて、藝者はぬれた唇をハンカチでふいた。

瀬木の頭は急速に回轉した。青原代議士と古木と——これはどう考へても、一緒に待合遊びをする取合せでは有り得ない。有り得ないものが、有つた。この事は、そこに特殊な事情が伏在するのを意味するのだ。

その特殊な事情を考へると、青原代議士と古木氏との交遊は、すこぶる有り得ることになるのであつた。否、これほど明白に、有り得ることは少いといつてもいゝのだ。

では、その特殊な事情とは何か？

代議士と銀行家

不良銀行、不良貸出

瀬木の頭には、もう結論が出來てゐた。

五

青原代議士と別れて待合を出た時はまだ早かつた。

「これから社長を訪問したつて遲くはあるまい」

自動車の中で思ひつくと、瀬木は運轉手に郊外の××住宅地へ、ゆくやうに命じた。いよいよ働く時が來たといふ感動で、彼の胸はふくれ上つてゐた。無名の瀬木大助か、この大都會を舞臺として立上るための第一の瀬踏みを、今彼は踏まうとしてゐるのだ——春ちかい夜の雨が、おだやかに降る街を、自動車は泥水をはね飛ばしながら、走つて行つた。

——それにしても、今夜は好い御馳走に有りついたものだ。お上品な藝者たち、遊ばせ言葉の待合の女中——そんなお韵で酒がうまいものか！ おれの氣がついた御馳走といふのは、古木のうはさだ。色男め。藝者に食はれる前に、おれに食はれてしまへ！——

だが、彼は同時に青原代議士をも食はうとしてゐることに氣がついた。先輩でもあるし、恩人でもある青原氏を。と考へると、瀬木も好い氣持はしなかつた。好い氣持のしない事は、あまり深くは考へないのが瀬木の癖だつた。

「恩人を賣る——それは惡い事だ、だが、惡い事をしないで出世した奴が、この世の中に何人ゐるか？ おれは惡い事をする。何故なら、おれは出世しなければならないから」

それが瀬木の獨特の考へ方であつた。彼はどうしても出世しなければならなかつた。もし人間が出世しなかつたなら、現代では、惡人以上に辱しめられ、壓迫されるのだ。

自動車は暗い濠端から、九段下の電車交叉路に出ると、猛烈に一つ彈みを打つて、そのまゝ明るい飯田町を走つて行つた。

雨にぬれた窓から、街の燈が桃色にうるほつて見える。もうやがて春だ。春からくる聯想は、瀬木にとつては、櫻でもなければ、戀愛でもなかつた。春には、今年は臨時議會がある、その議會を背景にして、あるひは大芝居が打てるかも知れない。彼の連想は、そのやうに散文的なものだつた。

自動車は、やがて郊外の住宅地に着いた。繁本社長の玄關を訪れると、——これから寢ようとしてゐる所だが、二十分位ならお目にかゝつても好い——といふ女中の取次ぎだつた。

繁本社長は、やせた五十男で、坊主頭をしてゐた。長い顔に、ひげがない。鼻の下はいつもつる／＼と光つてゐた。恐らく毛根さへないのだらう。それで、蛸といふよりは烏賊といふ感じだつた。

—何か急用かね—

どてらのまゝで應接室に出て來た繁本氏はひどく不機嫌な顔をしてゐた。人が寢ようとしてゐるのに——一家の主人はよく、さうした表情を

持つて深夜の訪問者を迎へるものである。自分の不機嫌ばかりではない、奥さんの不機嫌まで委任されたといふ顔で。

「實は、至急なお話で」

「ふむ」

「玉屋銀行ですな、彼奴は、いよいよやりますぜ」

「尻を割るのは、分つてるさ」

「そこです。不良貸だしの相手が面白いのです」

いつの間にか、社長の顔から、不機嫌な皺が一本とれ、二本無くなつてゐた。今は細君の不機嫌を委任された義務も忘れて、繁本氏の顔は明るく緊張して來てゐた。

六

「この玉屋銀行を種に、一つ大芝居を打つてやりたいものですね。それで御意見を伺ひに來たのです」

「君に腹案があるのか」

「さア。もつと調査をして見ないと、ハツキリ決めるわけにもゆきませんでせうが、こゝで、玉屋銀行の預け者たちを煽動して、取付を早くさせてしまふのですね。それとも、銀行の方をまづ脅しにかけるか、社長の御意見を伺ひたいのです」

「それは脅しにかけるのが簡單で好いではないか。取付なんかさせて、銀行を參らせてしまつては、こつちは一文にもならない」

「そんな事はないでせう」と瀬木はなるべく謙遜した態度を崩さないでいつた、「まづ銀行を絶望に陥らせておいて、自由自在に小づきまはしてやるといふ手もあります」

「それもあるが、君の腹案では、たとへばどうしようといふのだ」

社長は經驗家だから、部下に訊くのではない、部下を試驗してるといふ態度で、そつと探りをいれた。

その手にかゝつて、祕策をこゝでさづけてしまつたら、瀬木は立役の位置を社長に奪はれてしまつて虻蜂とらずになつてしまふと考へた。

そこで、話はなるべく具體的に亙らないで、ごく一般論的に、含蓄を持つて腹案を述べなければならなかつた。

「つまり、青原代議士の政黨と、その位置とを考へて頂きたいのです。青原代議士には不動産もなければ、もちろん動産だつて決つたものはありはしない。ところが、今度の選擧で五人の子分と一緒に當選してゐる。その費用が、全部玉屋銀行の不良貸だしによるものとすれば、玉屋と青原氏との間は切つても切れぬものといはなければなりません」

「それで？」と試驗官は冷靜な顔の中に一抹の狡猾さを浮べながら耳を傾けた。

「こつちは預金者を煽動して取付をやらせる。銀行は尻を割る。その間に、青原氏の手を經て、銀行の古本頭取と聯絡を取る。つまり、乘取り策の第一歩ですが――いや、それとも、X伯爵の銀行に合併の話を持ち込むのも好いではありませんか」

「X伯爵なら、おれが弱味を押へてゐるから、何とでも動かすことは出來るが、併し、不良銀行と合併させたつて、こつちにまうけがどれ位あるかね」

「不良銀行と仰言いますが、合併の名で乘取るのは善良銀行では不可能ですからね」

「それはさうだ」

「預金者大會に、どうせこのまゝでは預金は戻らない事をよく承知させるんですよ。そして、何割かを十ケ年の年賦で拂戻すといふ條件を承認させる。その條件で、X伯爵の銀行へ玉屋銀行を事實上乘取らせる」

「ハヽヽヽ。君は駄目だよ。そんな事いつたつて空想にすぎない。第一、おれたちが事件の渦中にいり込むのには。玉屋も吉本も、まるで他人なんだからな」

鈴木社長はあざけるやうに哄笑した。

「社長、そんなに遠慮深くては困りますよ。どしどし實行に移れば事は必ず運びますからね。「X伯爵から玉屋へ働きかけるやうになすつて下さい。仕事はそれからですよ」

瞬間、社長と部下とは顔を見合せた。

「さうだ、遠慮深くては何も仕事は出來ない」としばらくして社長はつぶやくやうにいつた。

「圖々しくあれ、これが我々の實踐道德の基準です」

「君も圖々しいことにかけては、スッカリ玄人なんだね」

「ハヽヽ。社長のお仕込みですよ」

瀬木は吸ひさしの煙草を灰皿に突き込みながら、ぴよこんと頭をさげた。

七

「まア然し、張らぬたぬきの皮算用はやめて、活動を開始することとしよう」

社長はやゝ上機嫌で、いい氣に歸つていつた。

そして、かるく欠伸して見せた。もう用事がなくなつたので、大人から託された不機嫌の委任狀を思ひだしたかのやうだつた。

「では、今晩は失禮させて頂きませう。明日から、會社をあげての大活動ですね」

「たのむよ」

「忙しいのは結構です。三木や山野も、事務所で將棋ばかり指してゐる苦衷から解放されるんですから、大喜びでせう」

「將棋は止めないと不可んね」

社長は社長らしい事を云つて、もう一度欠伸をして見せた。

「では」と瀬木は立上つた。

社長の宅を辭して外に出ると、來た時の自動車はかへしてあつたので、彼は省線の停車場まで、ひとりで歩いてゆく事にした。丁度、雨があがつたばかりの空には、まばらな星さへ見えてゐる。春はちかいといへ、郊外の夜路の空氣は、瀬木の昂奮した頬にも冷たすぎる感じだつた。

然し、瀬木は次第に、何か腹立たしいやうなものを感じ始めてゐた。

玉屋銀行の蹉跌、これは瀬木に活動の舞臺を與へてくれた。だが、そのために、これから狂奔しようといふ瀬木自身は何なのであらう？ 郊外の街の泥濘を、あへぐやうに渡り歩く慘めな自分に對して、瀬木は激しい反省を加へ始めた。

何物か、黒い魔の手が、自分を操つてゆくのだ！

自分は、その魔の手と握手することで、立身出世をはかるのだ。玉屋銀行を破産させたものは何であるか？ これも魔の手だ。不良貸だしの金の行方は、あの青原代議士の手を經て、幾人かの政黨候補者の選擧費用となつた。青原代議士は、かくて議會内に幾人かの子分を持つ勢力家たる位置を失はなかつた。そしてその結果は？ 玉屋銀行の蹉跌となつた。何千人かの無産預金者の窮乏となるのだ。

何千人かの無産者から剝奪する事で、幾人かの代議士に成る議會内の勢力が結成され得た。

彼らが、國政を議するのだ。いひ換へるなら、彼らによつて國政が議せられる限り、この國に剝奪され、窮乏する者は永久に絶えないであらう。

そして、瀬木は？

「おれは然し、立身出世しなければならない

のだ―

　瀬木の自己反省の、これが結論だつた。瀬木にとつて、この結論は不可避なものだつたに違ひない。大義名分のまゝに進んで行つて榮達が得られる社會でない事を、彼はよく知つてゐた。

―おれは損をしてはならないのだ。短い一生を、虐められ通しで終つてはならないのだ。おれは虐める者に味方しても、虐められる者になつてはならない―

　そして、昔から、正しい路を踏む者は聖人といはれる。聖人とはこの世の中で損をする者を嘲笑して惡漢共が奉る尊稱だつた。

八

　もはや冬だ。夜の、まぶしい日曜日。

　プラットとプラットをつなぐ地下道は、電車の乗降客で一杯だつた。無數の足音は、巨大なコンクリートの管の中に反響した。あふれの音を郭にしたやうな音である。群集は、外から持つて來た光を、この暗い影の世界に點々と落して行つた。

　一つのプラットへ降りる階段口まで來て、瀬木は、おや、と立止まつた。

　上から流のやうに降りてくる群集の波の中から、一つの見おぼえのある顏を見付けだしたからだ。その顏もまた、瀬木の方へ驚きの眼を投げながら、眞つすぐに近寄つて來た。

―マア、お珍らしい、瀬木さん、瀬木さんでせう？―

　彼女は、昂奮した花びらのやうに立止まつた。まさしくそれは、幾年振りかで逢ふ彼の初戀の女―梨枝子といふ女だつた。

　瀬木は微笑した、激しい感動をおさへながら。

「僕です。十年――いや、十五年ぶりですかな。どうして居ます？」

　さういひながら瀬木は素早く相手の全體に觀察の眼を走らせた――羽織、着物、指環――この三十女はそんなに不幸でもなささうだ、と結論して、彼は再び微笑した眼を、梨枝子の顏の上に持つていつた。

「お住ひ、どちら？」

―中野にをりますの。貴方は？

―僕―こんな所に勤めてるんですが、今居る所は、ただ汚い下宿ですよ―と名刺をだした。

―通信所ですのね――さう、いつかお電話しますわね。主人が亡くなりましてね。あら、何からお話して好いのか、見當がつきませんわ―

と彼女は笑つた。

「御主人が亡くなられたのですか、それは……」

　それはもちろん好い事でないのは決つてゐるから、瀬木は眉をひそめて見せる必要を感じた。

―あなた、奧さんは？」

「そんなもの、ありませんよ―

―どうですか、まア、さうとして置きませう――私、唯今……」

　そこで彼女は氣忙しさうに、今ゐる家の地理を說明しはじめた。

「ま、兎に角、千〇九番地を忘れなければ探しあてられるでせう」

　郊外の地理を詳記するのは大變なので、瀬木は彼女の說明をさへぎつた。

―ぢやね、妾から社へお電話しますわ。お宜しくつて？―

「えゝ、きつとですよ、待つてゐますから」と瀬木は熱意をこめていつた。

―ぢやア、ね、いづれ―

―ぢやア―

　そして二人は、何か物足りなささうな眼を見交はして、別々の群集の中へ別れて行つた。

―ふむ。彼女も、もう三十を過ぎた女盛りなんだ

な。そして未亡人——

そこまで考へた時、春の日に屋根を光らせた電車が、重々しくプラツトへ入つて來た。

電車の中も大變な混雜だつた。彼は、身動きもならぬほど、人々の肩に押されながら吊革にぶらさがつてゐた。

彼女は健在だつた！——

ふとつぶやいた。そしてこれは、うらゝかな日曜日にふさはしい發見だつた。いつか電車は明るい郊外の景色を、線路の上に走らせてゐた。すると、彼の頭が少しばかり、若々しい感傷で充ち始めた。

なぜなら、綾子は、十五年前の彼の戀人だつた。十八歳の少女、そして今日、突然三十歳の彼女を見たのだ——

いや、それはかりではない、電車は、櫻並木の、花のトンネルをくゞつてゐる。この次ぎの驛に、瀨木の新しい戀人が、彼を待つてゐるはずであつた。

九

瀨木の新しい戀人は、省線牛込驛の入口で彼を待つてゐる——

瞳いで、洋装で、春のセダン・ザアルは、停車場のかげに、桃色のブルウズの胸をふくらませながら、眉根には、微かな皺を寄せてゐた。明かに、彼女は、いら〳〵してゐるのだ。約束の時間は、とくに過ぎてゐる。

彼女は、あの素木興信所の、若いタイピストであつた。

どうして、こんな事になつたのか？ 彼女は、かうして彼を待合はせながら、それを考へた。だが、そんな事を考へるのは、無駄だつた。およそ、これは無意味な、待ち合はせに過ぎない。戀愛？ そんな意味は、みぢんも持たないのだ。

では何故？ 理由は簡單だつた。今、彼女の近くにゐる男性の中では、兎も角瀨木が一番ウイツトもあり、手應へもある男性であるやうに想はれるからに他ならない。

彼女には、女の友達よりも、男の友達の方が興味があつて一層望ましかつた。彼女はいつも、男の散歩友達を必要とする女だつた。そして彼女は、友達とは、お互に面白く遊ぶための生きた相手だ、といふ考へを持つ女だつた。

瀨木が彼女のこの種の友情を戀愛だと解釋しようがしまいが、それは彼の勝手であつた。瀨木は瀨木の領分で、自由勝手に考へたり、振舞つたりしたら宜しからうし、彼女は彼女の領分で、瀨木を利用したら好い。彼女にとつて、瀨木との交渉は、それ以上のものでも、それ以下のものでもなかつた。

さて、彼女は瀨木を、どういふ風に利用すべきであらうか？

けれども、彼女には、そんな事についての計畫も豫想もなかつた。こゝで彼と落ち合ふ——決つてゐるプログラムとては、唯それだけである。あとは、その場の興味の動き方ひとつにあることなのだ。

けれども、約束の時間はとくに過ぎてゐるのに、瀨木はなか〳〵やつて來ない。絶え間なく驛の入口を出入りする乘客たちは、たれも彼もじろりと彼女に一瞥を投げて行くし、殊に、出口の驛夫の、先刻から頻りに、怪しむやうな、又からかふやうな眼を、彼女の方に注ぐのは、彼女の若々しい癇にさはり始めて來た。

彼女は、今まで立つてゐた所を、しづかに離れると、ぶら〳〵と驛前の濠端路の方へ歩いて行つた。

その濠端路の櫻並木は、花の散る前のはぢらひに赤らみながら、地上に黒い影をにほはせてゐた。お濠の水は、白々と曇つて、無數の貸ボートがその上を、悠々とすべつた。

「あの人と、ボートにでも乘らうか知ら？」
ふと、そんな事を考へてゐる時、
「やア、お待ち遠」
瀬木だ。日傘をクルリと回して、彼女は男と面と向つて立つた。
「待つた？」
「いゝえ、妾も今來たところなの」
「さて――どこへゆくかな？」
「どこでも」
「貴女、お腹、すかない？」
「いゝえ」
「待たしたから怒つたの？」
馬鹿らしい、まるで戀人氣取りだと思ふと可笑しくなつて、
「今日、リーグ戰があるのよ。神宮球場へ行かない？」
「何だ、野球なんか」

十

「おや、ボートに乘りませうか」
「子供じやあるまいし」
瀬木はお濠を見ながら、輕蔑するやうにいつた。ボート遊びもスポーツも、瀬木にとつては子供らしい、從つて馬鹿々々しい遊びごとに過ぎなかつた。瀬木は、何らかの意味で實質的なもの、又は果實のあるものを求めて生きてゐるのだ。子供が求めるものとは、別なものを――そして、實質的なもの、又は果實に類するものの、他のあらゆるものに興味を持たなかつた。
で、今日の逢ひびきは何かといふと、瀬木は、出來ることなら、これから直ぐにでも女を自動車に乘せて、ホテルの部屋に連れ込んでしまひたいのである。女と散歩したり、野球を見たり、ボートに乘つたりすることの、何が面白いのだらう？　瀬木にいはせると、女のおしやべりの相手をすること程、退屈で空虚なことはない。然し、その退屈で、心の空虚なことも時にはしなければならぬのは、瀬木のいはゆる實質的なものに手を届かせるまでの、踏臺にすぎない。プレリミナリイなのだ。
然し、彼女は、ボート遊びまで素氣なくはねつけられると、いさゝか自尊心を傷つけられた氣味で、ふんとして瀬木の側をはなれた。そして、電車路の方へ、スタ／＼と歩いて行き始めた。
「どうしたんです、いよ／＼、怒つたな」
瀬木はあとから追つかけながら、ニヤリ／＼した。怒らせてはいけないから、機嫌をとる必要があると感じた。彼女は電車通りに出ると、折柄來合はせた自動車を、手をあげて呼び止めた。
彼女は、瀬木の方を振返りもせずに、自動車に乘つた。瀬木も、素早く乘り込んで、彼女に並んで席をとると、
「帝國ホテルへ」と叫んだ。
「あら、違ひますわ、神宮球場へ行つて下さい」
「いや――」と運轉手にいひかけたが思ひ返して女の方に「どうしても、野球を見るの？」
「お嫌だつたら、あなたはホテルへいらつしやい。妾は球場まで送つて頂きますわ。運轉手さん、球場へ行つて下さい」
自動車は、こぢれた心を乘せて、まつすぐに走りだした。
「そんなに怒らなくても好いでせう。僕、あなたに付合ひますよ」
「好いわ、付合つて下さらなくつても。妾野球を見てても、側の貴方が、おいやなんだと思ふと、負擔ですもの」
「見れば、僕にだつて面白いのにきまつてゐる」
「あなた、規則ご存じ？」
「馬鹿にしてはいけない、僕だつて中學時代に

は、やつた事もあるんです」
　瀬木は、たうとう今日は野球見物のお伴しなければならなくなつた、不幸なめぐり合はせを心でのろつた。
　しばらくして、
「折角二人で散歩するんだから、もつと有意義に時間を使つたら、どう？」
「有意義つて何ですの。ホテルへ行くのが、有意義ですの？」
「それは、野球見物よりはね」
「どうして？」
「どうしてつて！」
　お互に不思議がる眼と眼を激しく打ち合はせたが、瀬木は背負ひ投げを食はすやうに、
「ホテルには、ベッドがある」
　つと彼女は眼を外らした。
「そんなに、そつぽを向くのは、僕に幾らでも觀察しろといふ事になりますよ」
　彼女が答へぬまに、自動車は球場の前についてゐた。

十一

　三壘側スタンドの、後の方にやつと席を見つけて落ちついたが、そこの高みから見おろすグラウンドの廣さに、瀬木はまづ驚きの眼を見張つた。
「K――が今守つてるのね。今日は隨分の人だわ」と彼女がさゝやいた。
　然し、瀬木は、そんな事よりも兎に角この廣さに驚いた。隨分、もつたいない、野球のために、市内の土地を、こんなに贅澤に遊ばせておく程、東京の市民は富裕なのだらうか。
「隨分、廣いですね。僕は、もつたいないと思ふ」
「何が？」
「だつて、市内の土地をこんなに――世の中には木賃宿にだつて泊れない人間が澤山あるのに」
「もつと有意義に、と仰言るの？」と彼女は笑つた。「だつて、スポオツにだつて意義はあるわ」
「野球を見にくるだけの閑のある人間にはね。そんな閑のある人間が、東京中に何人あるんです。その何人かのために、こんな廣い土地が……どう考へても不合理ですよ。生活のために三尺の土地を自由にする事も許されぬ人間が何千萬人とゐる世の中で、こんなに廣い土地が、遊戯のために用意されてあるなんて……」
「あら、井口が打者だわ」
　白いユニフォームを着て、グラウンドの上を飛びまはつてゐる選手は、こゝから見るとどれもこれも同じ顔に見える。それだのに、一々の選手の名をいふことも出來るらしい彼女のファン振りに、瀬木は寧ろ反感をさへおぼえた。
　瀬木は試合を見てはゐなかつた。彼はいつしか、うつら〳〵として、色々の空想に陷ち込んでゐた。今日、新宿驛の地下道で、偶然出會つた昔の女のことが、突然又思ひだされて來た。
　あの女は、果して社に電話をかけてくるだらうか？
「あ、ボオルだ。井口は決してボオルを振りはしないからね」
　一杯つまつた見物席の中で、そんなさゝやきが聽える。ファンとファンとの、互に通を振りまはす會話だ。
「好いストライクだね、あれは宮武の取つて置きの球ですよ」
「井口は、この頃、あたりませんな」
「今度は、きつと盜壘するぜ、森が」
「そうら、ウエストだな。矢張り、六ケ敷いもんだな」

「何が？」
「盗壘がさ」
「ツウ、オールだぜ」
「おい、おい、冷や／＼するよ、もつとあれが低かつて見ろ、どうなる事やら……」
「一壘けん制球つて奴は實際、見てゐる方で心配で。ヤツ、ハウルだ」
「取れるよ、取れるよ！　何だ、駄目だなあ、もつと走らんか。あんなハウルを！」
昔、といつても十二三年前だが、瀬木が東京へいはゆる遊學してゐた頃の、澁谷の素人下宿の有様が、彼の頭の中にハッキリ描きだされて來たのであつた。そこの一人娘であつた彼女——まだ十九か二十の少女で、寄りそふと桃色のふつくらした紐かのやうにコケチッシュであつた。あの頃は、瀬木もセンチメンタルな青年だつた！「永久に」とか「忘れないでね」とか、そんな胸の浮くやうな言葉がいとも自然に脣をすべり出て、それがいつも彼らを素直な感激に誘つた。その初戀の女が、十年後に、例へば青空に一瞬間映しだした幻燈の花のやうに、今目前、忽然彼の前に現れて消えて……
バットの音！
「二壘打だ！」
「二壘打々々々」
觀衆席で叫んだ。

十二

「實際、東京には、不經濟な人間がうよ／＼してゐるんだな」
ゲームが濟んで球場の外に出ると、瀬木は慨歎してつぶやいた。支那の城壁のやうに、高いコンクリートの壁の底から激しい勢ひであとからあとから出てくる觀衆の波は忽ち神宮外苑の、八方に走る白い路を埋めて行つた。青い植物と群集との間を、無數の圓タクが、客を拾ひあげながら狂奔してゐる。
「圓タクをつかまへなくちや」
「そして、どこにいらつしやるの？」とタイピストは薄情な顔で訊いた。
「どこでも好いから、飯を食べませうよ」
「妾、少しもお腹が空きませんのよ」
「兎も角、ちよつと休みませう」
芝生の中にベンチがある。二人はそこへ腰をおろした。
「閑な人間が澤山ゐるんですね」
電車通りの方へ、行列をなしてぞろ／＼歩いてゆく球場からの群集を眺めながら、瀬木はもう一度慨歎した。
「お氣の毒でしたわ。貴方を、その閑な連中の中にお引き入れして……」
「だから僕は、つぶした閑を取返したいんですよ、この意味、分るでせう？」
「さア」
細川弘子は笑つて、考へるやうな眼付をした。それから、柔かな肩——瀬木はその肩から何か香りたかい吐息のやうなものの發散するのを感じた——を寄りそふやうに近づけながら、
「もつと、分り易くいつて下さらない、ね？」
「僕は、子供ぢやないんですよ。それから又、青年でもない。婦人と散歩する氣分なんか、享樂出來ないんです」
「それア、さうですわ、氣分なんてもの、妄想ですものね」
「僕なんかの年になると、具體的で直接なものでなくちや、刺戟にならないですね」
「妾も、妄想や空想は大嫌ひですわ」
「どう？　これから、どこか、ゆかない？」
瀬木は、具體的で、直接な物をねらひながら、流石に心のふるへるのを感じた。
「貴方は、隨分、勇敢な事、仰言るのね。妾、貴方のそこが、大好きなんですわ」

「だつて僕は、婦人に對しては、いつだつてその他の要求を持つた事がないんだもの」

「妾に對しても？」

「もちろん」

「ぢや、野球見物なんか、貴方には隨分無意味だつたのね」

「よく知つてる癖に！」吐きだすやうにいつた。

然し、彼女は面白さうに笑つて、

「そして、妾にそんな事仰言つて、結婚するだけのお覺悟があるの？」

「もし貴女が、それを望むのなら……」

「妾が？　飛んでもない。そんな不幸なこと、考へるのも厭！」

「僕と結婚したら、不幸だと思ふ？」

「えゝ。どんな男とでも」

「何故？」

「制度の罪よ」

「ぢや、女はどうすれば幸福？」

「結婚しないで、自由な戀愛に生きるの」

「これは――面白い」

瀬木が勝誇つて聞き直つた時、彼女はスッとベンチから立上つて、二三歩離れてゐた。

「もう日が落れますわ」

雑沓はいつしか散つて、青い植物の世界は、あわたゞしい春の暮れ方の空氣を呼吸してゐた。時折り通る自動車のフロント・グラスが、夕日を受けて、刃物のやうに光つた。

十三

細川弘子は、非婚論者であつた。現代の制度では、女は、結婚して決して幸福にはなれないといふことを知つてゐた。

彼女は又、戀愛さへも、嫌ひであつた。今に、好い時代が來たら、良い戀愛も出來るだらう。だが、現在では、良い戀愛をこの世の中で探して歩くといふことは、無駄な、悲しい巡禮である、さう彼女は考へてゐた。

どんなに多くの女が、その悲しい巡禮をつゞけてゐることか？　女たちは、この世の中に良い戀愛があるだらうといふ幻影にだまされて、疲れも知らずに歩いてゐるのだ。

この世の中の法律と、習慣と、傳統とは、女の自由を束縛してゐる。

自由を束縛された世の中で、幸福な戀愛なんか有り得ようはずはない。まづ世の中が良くなるまでは、戀愛の代りに、戀愛の眞似を、又は戀愛の練習をするより他はないのだ。

良き時代は、我々の一生のうちには來ないかも知れない。けれども、やがて來るべき良き時代のために、我々は刻々、準備を重ねてゆかねばならぬ。つまり、細川弘子は、いつかくるだらう良き時代の、ほんたうの戀愛へ進むための、準備として、練習として、戀愛の眞似をしなければならぬと考へるのであつた。次の時代の建築のために、經驗を積み重ねてゆく、さういふ意味で。

そこで、彼女は、偶然往來で出會つた見知らぬ男にだつて、一時間の感動のまゝに身を任せても悔いないであらう。

彼女は、執着のない、疑惑のない、嫉妬のない、悲劇のない、涙のない、明るい、美しい、生々とした戀愛が欲しかつた。

一時間愛して、次の瞬間には忘れたつて好い、戀愛は永遠の運命の問題ではなかつた。

「性」は神秘ではなく、科學だつた。

けれども、結局、彼女はさう考へるだけだ。それを實行に移さうとなると、全身が戰慄するほど、恐ろしかつた。何が、彼女をそのやうに躊躇させるのか？　何物かが彼女の上にのしかかつて、彼女を引き止めるのだ。

永い傳統か、そんな事を恥づべき事として彼

女の底の底にまで救へ込んでゐるのだ。そんなことを實行することは、彼女の習慣的な潔癖が許さなかつた。

戀愛とは、女にとつては、結局一人の男の私有物となるための運動だ。そのほかの運動は、不純だ、イムモラルだ。彼女の心の底のどこかで、さう叫ぶものがあるのだ。

知らず識らず男の奴隷となるやうに動く、女の習慣性、この古い虛僞、それと鬪ふ――つまり彼女自身の內面との鬪爭が、彼女には必要だつた。

細川弘子は、瀨木を少しも輕蔑してはゐなかつた。だから、彼と戀愛の眞似などする氣持は、彼女だつて、みぢんも持ち合はせてゐない。それだのに、瀨木の飾り氣のない一種特別の求愛には、衝動的な魅力をさへ彼女は感じた。

「どこかへゆかない？」

ベンチから立上つて、瀨木はもう一度さゝやいた。

彼女は何となない恐怖を感じた。この瞬間の自分自身が恐ろしかつた。

「妾、歸りますわ、家で心配してますもの」

うつむき加減にさういふと、兩手をにぎりしめたやうに吐息をついた。恐ろしい瞬間はすぎた。同時に、彼女は底知れぬ寂寥に襲はれて來た。

「自分は一生、戀愛の眞似さへ出來ないのだ」

何物かが怨めしくて、淚が出さうだつた。

十四

多忙な一週間が、瀨木を驅り立てた。玉屋銀行はたうとう取付に會つて休業した。繁本社長と瀨木とは、X伯爵や、靑原代議士や、古本氏等の間を、鋭敏な齒車のやうに回轉してまはつた――

その間に、タイピストは毎日、ぽかんとして社の片隅に坐つてゐた。

「一體、妾は何のために雇はれたのです」

ある日、外から社に立ち歸つた瀨木をつかまへて、彼女は駄々をこねるやうにいつた。

「何の仕事もない所に勤めるのは不愉快ですわ」

「遊んでて月給がもらへるのは、もつたいないほど結構ぢやありませんか」

「違ひます。妾は働いてる女だといふ誇りを持つてをりたいのですよ。こんな所は、妾、もう出して貰ひますわ」

「女は働く權利があるといふ誇りを失くしては不可ませんよ」

瀨木は冷淡にいつた。もはや彼は、細川弘子なんかに何の興味も持つてゐないといふ顏付で。

彼女はその夜、決心して繁本社長の私宅を訪れることにした。社長はめつたに社に出て來ない、來ても、ちよつと顏をだすだけで、すぐ、あたふたとして出て行つてしまふのだ。彼女は一度社長をつかまへて、談判しなければならない。仕事もない自分を何のために雇つたか、今のやうな境遇で社に居るのでは侮辱されてゐる氣持しか受けない。自分は恩惠を受けに勤めたのではなく仕事をする女でありたくて勤めたのだ、自分に仕事を與へてくれるか、それとも辭職させてくれるか、社長の返答を――

私宅の應接室で、つるりとした頭の社長は、あきれたやうな顏で、彼女の雄辯を聽いてゐた。

「今に厭になるほど忙しくなるから、もう少し退屈でも、待つてゐてもらひたいですな」と社長は茶の間の方にも聽えるほどの大きな聲で答へた。「今は、社も潜行運動時代なんだから、まだちよつと、タイプライタアを使ふ機會がないのだ」

「厭になるほど忙しくなつても、困りますわ。

妾は愉快になる程度で、働きたいのですの——

「ホヽヽ。それは又、隨分無理な註文だ。遊んでゐるのも厭だ、といつて餘り忙しくても厭で愉快になる程度の仕事を……どうも六ケ敷いな」

部屋が少しむし暑いので、窓は開け放たれてあつた。少しの風がレエスのカアテンを搖り動かして窓ぎはに腰かけてゐる彼女の頰を撫でる。彼女はカアテンの裾を手にとつてもてあそびながら、

「それに、給料だつて、今のまゝでは隨分安いと思ひますわ。妾はもつと仕事があつて、もつと給料の好い所に勤めたいのです」

「今日は頭がどうかしてる、どうも貴女のいはれる事が、ハッキリのみ込めないが——」

混亂した頭をまとめるやうに、社長は眼をとぢて、フウッと、煙草の煙を吐いた。

「この女のいふことは何だらう、要するによく働きよく遊べといふ古臭い訓戒をおれは思ひだすのだが、どうも彼女の口ぶりでは、さういふ所に意味があるのでもないらしい……」

社長はふと、大した事でもないのを仰々しい口實にしてわざ／＼私宅に訪ねて來た彼女の眞意を妙なところに持つて行つて、ニヤリとした。

「何を笑つてらつしやるの？」

カアテンの裾で唇を押へながら、彼女も笑つた。

しばらく沈默に陷ちると、茶の間の方の空氣にいら／＼した感じを與へるに違ひない。そこで社長が何かいひださうとした時、

「貴郎、ちよつと」

扉の外で、夫人の聲がした。

十五

「何か用かね」

一種魁偉な風丰にも似ぬやさしい聲でいふと、社長はあわてゝ立上つた。同時にドアがガチャリと開いて、細長い夫人の顏が現れた。

「あら、失禮」

ちよつと弘子の方へ頭をさげておいて、良人の方へ向き直り、

「お風呂を、早く召さないと、あとがつかへるぢやありませんか」

「うん、うん。今すぐ」

夫人は素早い眼で室内を見まはした。弘子は、少しむつとして立上つた。

「失禮させて頂きます」

立去るつもりで二三歩うごいた時、夫人はつかつかと窓ぎはに寄つて行つた。

さつき、弘子が唇にあてたカアテンの裾に、かわいた刷毛で撫で去つたかのやうな、口紅のあとがついてゐる。

「これ、口紅ぢやありませんか——どうして、こんな物、レエスにくつついてますの？」

夫人の蒼白めた細長い顏が、とがめるやうな銳い眼で、社長と弘子とを等分に見すゑた。

「ごめん下さいまし……妾、つい、いぢくつてるうちに、ハンカチと間違へちやつたらしいのですわ。お大切なものを——」

細川弘子は、相手を輕蔑したやうな語氣でいつた。

「あなた方は、いつたいこゝで、何してらつしやつたのです？」と夫人はいきなり甲高い聲になつた。

「お話してゐましたのです」

言下に、細川弘子は答へた。

繁本夫人は、猛然と勢ひ込んで何かいひ返さうとしたが、急には適當な言葉が見つからぬらしく、しばらくは無言のまゝ、相手をにらみつけてゐた。

繁本社長は、をかしいほど狼狽して來た。

「君、君、今日は、腹を立てずに歸つてくれた

まへ」
「隨分、失禮なこと仰言るのね。馬鹿々々しいお話も、好い加減になすつて下さい」と弘子は夫人の方へ向つて、しづかにいはうとしたが、次第に激して來て、今は自分で自分のいつてることが分らなくなつてしまつた。「貴方がたは、生活に餘裕があつて、閑が有りすぎるのですわ、そんな嫉妬喧嘩なんかなさるのは……ですけど、この口紅を見て下さい。ちよつと唇にあてると、もう白い布に判で押したやうにくつつくのですからね。こんな安つぽい口紅でお化粧しなくちやならない程、妾達は安い給料で働いてるのです。お宅にいらなければ、給料をあげて下さい。そしたら、こちらの御家庭の平和を害するやうな口紅を使はなくつても濟むのですわ」

彼女の頭の中に色々の思想が渦卷き流れて來た。お化粧は何のためにするのか？　働く女だからだ。働く女なるが故に、一段の魅力を持たなければならぬ、およそお化粧もせずに働く女が現代に有り得ようか――資本家は職業婦人に十分の化粧料を支拂ふ義務がある、彼女らにとつて、要求とはそういふやうに當然なものだ！

「まア君、家内は少し病人なんだ。今日は腹も立たうけれど……」簗本社長は、懸命に若いタイピストをなだめつゞけた。

「二言めには、妾をヒステリィだ、氣違ひだと吹聽して、あなたは人を恥さらしになさる。皆に妾を笑はせて、愉快なんですか」

夫人のこの最後の言葉はしぼりだすやうな聲だつた。その時、細川弘子は初めて社長夫人がひどい躁鬱症であるといふうはさを、いつか社内できいたことを思ひだした。

「左樣なら！」

弘子はそのまゝ部屋を出て行つた、明日からは二度と社へなんか出てゆくものかといふ決心で――

十六

忙しい忙しいと、こぼしながら、瀬木は梨枝子といふ女に、もう二度も逢つてゐた。

この女は、いはゞ明治時代の女の遺物であつた――瀬木が二十の時上京して、同鄉の關係で二階を借りた家の娘だつたのである。

その頃は、瀬木も――純情その物のやうな少年で、まづ異性に接近した世代が眼を輝かす無力の青年になるといふ時代だつた。そこで、極めて有觸れた物の進行で、二人の少年少女は結びついたのである。

けれども、同じ年頃の少年少女が、いくら純情をもつて愛し合はうとも、この世の中では無駄なことだ、親が金持でない限り、少年少女の身で結婚するといふわけには行かない。男が自活するまで、女は待たねばならないのだ。五年も六年も待つ、そのうちに女は婚期を過ぎてしまふだらう。

婚期をすごすまで、一人の男を待つ、そんな冒險を娘の親たちが許すはずがないのである。どうしても娘は、既に自活してゐて、生活の根據を持つた男を選ばなくてはならない。だから、二十の娘と、三十歲の男といふやうに、新婚の男女の年齡の開きは、男の就職難と正比例して、時代と共に次第に大きくなつてゆくのである。

今日、夫婦の年齡のひらきは、十歲十五歲以上に達する例が普通である。この事實の前に、少年少女の戀人たちは卒倒しなければならない。

こんなに年のちがふ夫婦が、その自然生活においても圓滿であり得ようはずがない。その性生活において、思想生活において、物の見方にお

いて、考へ方において、心の動き方において、二十歳の生命と三十歳の生命とが、むじゆんなく結合されつゝ進行するはずは有り得ないのである。

それ故、現代の結婚生活では、一人が常に指導と影響の位置に立ち、他の一人が常に被影響の位置に居る。でなければ、むじゆんした生命と生命とが、各々の要求と健康とにおいて闘争してゐる。現代では結婚生活とはこのやうな悲劇の連續である

梨枝子は、その悲劇をことごとく經驗して來た女であつた。

瀬木といふ少年との夢見るやうな戀愛はもちろん途中切れになつて、彼女はある中等の會社員の所へ嫁入した。それがお前の幸福といふものだよ。結婚を承諾した時に、彼女の母親はさうさゝやいたのであるが、母親の見地には「生活の安定」といふ一點があるのみだつたのである。

良人と彼女とは、その持つてゐる夢が全然種類のちがふものだつた。趣味の對象が、異邦人同士よりも異つてゐた。最初、この良人と妻とは、同じ音樂と悩みとを生活する人生の同伴者であるよりも、寧ろ家庭における事務的な協勞者であつたに過ぎなかつた。それから、年齢の差からくる生理的矛盾も、如何ともすることが出來なかつた。二十の彼女は、三十四の良人には、つゝましい前菜であるに過ぎなかつた。三十歳になつた彼女は、五十歳に近い良人の眼には恐ろしき吸血の妖魔と感じられた。

然し、二人の人間が生活を共にする時には、同じ屋根の下で互に健康と精力を奪ひ合ふ生存競爭が行はれると同時に、一方では、互のむじゆんを緩和せしめようとする化合の運動が進行する。それが梨枝子たちの場合では、良人が指導の位置に立ち、妻を彼の影響下におかうとする努力となつて表現された。良人に影響されて同化してゆくことが、彼女の幸福の唯一の道であつた。つまり、良人の氣風、良人の趣味、良人の性向に、年と共に感染して行く。似た者夫婦にならざるを得ない。かくて彼女は彼女本來の面目のまゝには育たず、良人の一部分としてのみ育つて行つた。良人によつて彼女の人格が變形された。現代の結婚はそのやうな物だ!

十七

梨枝子と瀬木とは、急速に結びつき、そして瀬木の、図々しさが巧く働いた事には、彼等は間もなく同棲さへするやうになつたのであるが、しばらくすると、二人は、お互に到底圓滿には一緒に暮してゆけない者同士になつてゐる事を發見した。

梨枝子は、スッカリ亡夫の影響で變形してゐた。

もはや、瀬木の影響力の割込んでゆける餘地は、少しもなかつた。

けれども、そんな事に拘りなく、魅力はお互を離れがたく結合させる。

たゞ、心と心とが觸れ合ふ時、瀬木は彼女のうちに亡夫の影を冷たく感じるのだ。そしてこの事は、瀬木に嫉妬を起させる。彼をいら〳〵させる。

「生活の便利のために、僕と同棲してるんだね。然し、僕は他人を利用することは大切なことだと思ふが、君に利用されるのは眞平だ——

「だから、お互に利用しつこしたら好いでせう——

彼女は狡猾な笑ひを流目で注いだ。しかし、男と女とが魅力を持ち合ふことが、愛でないはずはないといふのが、彼女の主張だつた。だから、自分たちは愛し合つてゐながら、なぜしよつちう憎み合はねばならぬのか、彼女にとつ

て、その答へも簡單だつた。「きつね色で濟ませないのがわるいのだ」過剩なる嫉妬だ。それほど、愛してゐるのだ！

喧嘩の多い戀愛は、それだけ複雜で、それだけ面白い。だが、それだけ心が疲れ、精力を勞費する。瀨木は、彼女から亡夫の影響を消して無くするために、といふのは、瀨木の影響で彼女を征服してしまふために、荒々しい若者のやうに、彼自身の肉體を酷使した。

古い戀愛の運動がいつもさうであるやうに、この二人の時代おくれの男女の戀愛も又、お互がお互から、生理的に、また精神的にしぼり取り合ふ所に享樂を求め合つた。

彼らにとつて、戀愛とは、相手に何物を附與することでもない。戀愛とは、消費である。衰へ、滅びて行くための進行である。

「ねえ、貴方、明日、白木屋に買物に行つても好い？」

「好いさ」

「お金は？」

彼女の眼はさぐるやうに彼をまともに射て來た。

「お金は――君が持つてるだらう」

彼も、探るやうな眼で、相手の視線を受け止めた。

「あら、妾が、どうしてお金を持つてるの？女ぢやありませんか」

「かくしたつて駄目だよ」

そのあとに來た沈默の中で、二人はお互を思ひやりなく憎み合つた。互に越えることの出來ない沈默――理解の通はぬ、沈默といふ壁を界にして、心ひそかに相手を罵り合つた。

瀨木は、彼女に底知れぬ祕密を感じるし、彼女は彼女で、男の忍ばせる欺瞞の手を幻想した。

油斷はならぬぞ！

二人の頭に、同時にこの叫びが聽える。

「そんなに、すねるものぢやないよ。え、どうしたの？」

瀨木は笑つて見せた。

「よ、こちらへ向いて顏を見せてくれたつて好いでせう？」

油斷はならぬ、斷じて！　だが、それは金錢についての事だ。戀愛の範圍では、女はいつも、男が早くやさしい仲直りの言葉をかけてくれゝば好いと待つてゐる……

十八

機嫌の好い時に、瀨木はそつと訊くのだ、

「君の御亭主は、いつたい、どの位殘して死んだの？」

「殘すもんですか、まア借金のないてのがせめてものなの」

「巧くいつてら」

だまされはしないよ、といふ顏で瀨木は鼻で笑つた。

「ぢや、今まで、ひとりで暮しやうがないぢやないか？」

「ですから、困つてたのですわ。どうして身の振り方つけようかと思つてたとこなの。故郷へ歸つたつて詰んないし、だつて、故郷には、お祖母さんひとりなのですもの……たんすをあけて御覽なさいな。目星いものは無くなつてしまつてるから」

もし、それが本當なら、瀨木は少々あてが外れるといふものだつた。

「うまく己の方が引かゝつたかな。何しろ、こんなのを、一生背負ひ込んぢや、堪らないよ」

一生、彼女を手放すのが惜しいなどといふ事は、有り得ない。して見れば、どうせこの女にもあきが來たら、さぞ重荷になるだらうといふ氣がする。うまく、してやられるのがこちらであるとしたら、癪にもさはるし、それを考へ

るだけで、今からいら／＼した。

魅力に強くひきずられる一方に、どうしても、敵、同士、他人同士といふ、和めない氣持から抜けられなかつた。

「今日は命日よ。あの人の」

平氣で彼女がそんな事をいふとひどく虐めてでもやらないと、氣がすまぬ。

「どうしても、死んだ人のことが忘れられぬと見えるね」

「それや、十五年も一緒にゐた人のことですもの」と梨枝子は半分は冗談にして笑ふ。

だが、殘る半分の眞實が、瀬木には笑へないものであつた。

「どうかして、この女をうんと不幸な目に會はせてやりたいものだ！」と、彼はいく度となく心ひそかに彼女をのろふのだ。

「それほど死んだ人に未練があるのなら、どうでも勝手にするが好いや。おれはもう明日から、又もとの下宿に歸るんだ」

「あら、怒つたの？　どうしてあなたはそんなにうたぐり深いのでせうねえ。妾は、こんなに迷ひ込んでしまつてると、いつてるのに！」

彼らは然し、いつからか、今月の月末の生活費を負擔するのか、兩方でだし合ふのか、それらの事がまだハッキリしない。お互の財産すら知らせ合はない同棲者である。經濟的の利害について、お互の立場のきまらない、そして、どちらも損をしてはならぬと警戒し合ふ二人であつた。彼らが、經濟的基礎の上に共同の生活を築かない限り、和やかな關係に入ることは不可能なのだ。

一方では又、繁本社長と瀬木との活動は、次第に成功していつた。X伯の銀行は玉屋銀行を事實上併合した。

「そこで——青原代議士への不良貸だしの二百萬圓だな。あれをおれたちで、一つ囘收してやらうぢやないか」

繁本社長がそんな事をいひだした。

「もつとも、それには條件つきですな」

「無論の話さ」

「どうせ取れないものを、取つてやるのだ。幾らでも取れるだけ取る——こいつはまうかりさうだ！」

彼らの意見は一致した。惜しいことに彼らは女についての意見を交換しなかつたことだ。社長は大人の馬鹿々々しい躁鬱症的嫉妬について、瀬木は梨枝子のにくむべき點について、お互の惱みを披瀝し合つたら、忽ち意見は一致したであらうのに。

十九

翌日、繁本社長と瀬木とは、伯爵の接見室で小さく身をちぢめてゐた。繁本社長の毛のない頭と、てかてか色紋の羽織とは、いつもなら古典的な調和をなして威容を添へるのであるが、伯爵の前では、スッカリしなびて見えるのが、うしろに控へた瀬木には悲壯なほど可笑しく感じられた。

「それや、取れるだけ取るが好いな。だが、取れる方法があるかな」

伯爵は、もう八十歳に手の屆かうといふ老人であるが、日本の財界の大立物である證據には、油壺から出たやうな男といふが、これはオリーブ油で洗つたやうなお爺さんで、瀬木はつくづく見ほれた。すべて、大ブルジョアといふものは見ほれさすものである。これを見て、我々は一種の慘忍な興味をおぼえる。無産者の、しぼり取られた血が、その血管の中に脈打つてゐると思へば！　指頭に肥つた蚤をおいて、今にひねり潰して呉れるんだと、つくづく眺める氣持である。

伯爵は二人を前にして話してゐるうちに、ふ

と思ひだして、
「ちよつと、待つてゐてもらひたい―
いひ殘したまゝ、中座した。
廊下をいくつか曲つて、奥まつた居室に入ると、ベルを押した。
十人からの小間使――保險の勸誘員に似た小間使勸誘員がゐて、困つてゐる親から娘を預かつて來て、小間使をしよつちう供給するので――の内の一人が、御用を伺ひに入つて來た。伯爵は無言で、ドアの錠をおろした。
やがて又ドアを開けて外に出て、元の席に歸つて來た伯爵は、
「君たちには、一割やらうかね―
繁本社長は平伏して、有難くお受けした、もつとも、まだ條件だけの話だ。
瀬木は心の中で、一割といふが二百萬圓みんな取れたところで、二十萬圓ではないか。社長も、そんな條件を有難がつて、隨分、意氣地がないと、歯がゆかつた。といふのは、青原代議士を、たとひ倒さにして振つて見たところで五萬圓も出さうにはないからだ。
「その他の不良貸つけも、みんな取立てを仰せつかりたいと存じますが―
瀬木はおそる／＼、社長の後から口をだして見た。
「好からう」
伯爵はじろりと瀬木の方を一目見たが、それつきり、何ともいはなかつた。
二人が退つてゆくと、伯爵は、接見控室に詰めかけてゐる次から次への客に逢はなければならぬのだが、少し疲れたといふ理由で、みんな斷ることにした。
再び、廊下を幾つか曲つて先程小間使に用事をさせた部屋の前までくると、ドアがあけ放つたまゝになつてゐる。廊下に立つたまゝ室内をそつと見ると、中ではそれとも知らず、年とつた一人の上女中が、泣き倒れてゐる、最前の小間使の肩をさすりながら、なだめるやうにいつてゐる。
「ね、いくら泣いたつて、腹を立てたつて致し方はありませんよ。御前さまの、からしようと思召すことは、天下で、どんなお我まゝだつて通らぬことはおあんなさらないのですからね。わかい貴女が、天國に届くほどの大聲でお泣きなすつたつて、どうなるといふものですか」
伯爵はつか／＼と入つて行つた。老女がびつくりして振返ると、
「あつち、行つて。あつちへ行つて」とニコリともせずに、手を振つて二人を追ひやつた。

二十

人生で愉快なことの一つは、その場に居合さぬ人の惡口をいふことである。殊に、今逢つたばかりの人間の惡口といふものは、印象がなまなましいだけ面白い。今逢つたばかりの大ブルジョアについて話しながら、歸りの自動車の中で瀬木と社長とはこの事を實感した。
「まるで魔物さ」
社長は、あの財界の大立物をさう批評して苦笑した。
「あゝなつたら、人間もお終ひですね。まるで雲を動かすやうな事ばかり考へてゐる。それで又、動かすことが出來るんだから、えらいには、えらいんですね」と瀬木は感慨ぶかくいつた、
「然し、人間は、雲を動かしたり雨を降らしたり、そんな神通力みたいなもののために働いたつて、あまりに現實ばなれがして面白くないぢやありませんか。矢張り、何といつても、我々のやうなのが、一番、いき／＼してゐますよ。目標が、ひどく手近なのだから――我々の働くのは、女が欲しい、着物が欲しい、家が欲しい、美食が欲しい、つまり、生活に即した慾望から働くん

ですからな。雲を動かさうなんていふのより、もつと切實なんだ！　切實だから幸福だ―」
　もつと切實？　だが、それでは今日只今の衣食のために工場で生血をしぼられてゐる階級、田園で汗まみれになつてゐる階級は、もつとも差し迫つた切實な要求で働いてゐるのだから、たれよりも幸福か？　さういふ議論は成立たない。
　雲を動かすほどの神通力があれば、人間を動かす位、何でもない。
財界の大立物にとつて、日本ほど狹い國はないだらう。彼らの資本は、外國の土地にも、深く根をおろしてゐる。それが脅かされたら、彼らは雲を動かす能力でもつて人間を、大衆を動かして、その利權を守つてもらふ。否、守らせる。
　無産大衆は、武裝して、祖國人の財産を擁護すべく、支那へ出かけてゆく。社長と瀬木とが乘つた自動車の走るあとを、對支出兵の號外は、白い翼を翻しながら、軒並に東京市民を刺戟して行つてゐる。
「いよ〱、出兵しますね」
　車を止めて、號外を一枚買ふと、瀬木は愉快さうに讀んだ。
「今度は、ウンと懲らしてやると好いんだ。日本人の怒りはこんなもんだと、思ひ切り知らせてやるんだね」
「どうせ濟南で殺された人數の百倍位はやつつけるでせうからな。何にしても、兵隊が強いつてことは、有難いですよ」
　濟南で殺された人數の百倍は幾人であるか？　さうした初等數學の問題は、瀬木の日常になじみふかい物である。働くのは、女が欲しいから、美食がとりたいから――さういふ目標に結びつけられる金高が既に初等數學の對象だつた。だが、彼ら財界の立物たちの目標は高等數學に屬する。セオリイ・オブ・ファンクションに至つては、人間の日常生活に即した切實なる要求から遙に遊離したものである。けれども、それは雲を動かすだらう。黑雲一たび滿洲の空をおほへば、無産大衆は、愛國の血に燃えて殺戮のちまたに躍りださねばならなくなるだらう。
　――たとひおれが代議士になつたつて、あの爺さんのやうな神通力は持てないだらう
　瀬木はさう考へたが、それは別に彼をさびしくはさせなかつた。彼のやうな男は、運命的に、野心の限界を持つてゐる。出世とは、望んで得られぬ境地に至ることではない。それは、あのお爺さんのやうな人間のおこぼれに有りつくだけの保證を得ることである。彼等大ブルジョアの魔力と、瀬木の幸福との間に、微妙なる函數關係を作ることであつた。

二十一

　途中で社長に別れて、瀬木はちよつと社に立寄つた。
　繁本興信所の事務室は、若いタイピストがすこしも社に出て來なくなつて三日目だつたが、それだからといふわけでもなく、妙に空氣が殺氣立つてゐた。丁度、瀬木が室内に入つて行つた時には、室の中ほどの事務卓に若い社員の三木を坐らせて、富田と山野と鈴木とが、そのぐるりに立ちはだかりながら、何か昂奮した聲でいつてる最中だつた。
「どうしたの？」
　瀬木が近づいて行くと、彼らは一せいに振向いた。
「みんなで、三木君を虐めてるやうな恰好だぜ」
「それどころぢやないんだ。みんなで三木君を、慰めてる所なんだ」

紋付羽織の富田が、眉をひそめながら答へた。
「三木君は、支那に行くんだ」
山野が説明していつた。
「召集されたの？」
「さうだ。僕の師團が出動するんだ。號外で見たらう？」
三木の顔は半分泣きだしさうになつてゐる
「そいつは、大變だな」と不安らしく「それで、いつ、立つ？」
「明日の朝、特急で――」
「それで今晩、これから、送別會をやらうといふんだが、君もつき合ふか？」
「あたりまへさ。つき合ふよ」
五人は、そこでビルディングを出ると、默々として銀座の方へ歩いて行つた。
だが、瀬木は、何だか、みんなの自分に對する態度が、いつもと違つてゐるのを感じた。一緒に歩いて行つても、妙に底つめたい。默つてゐても、外の四人の間には、何事か相通ずる諒解があるやうに見えるが、瀬木ひとりだけは、はね退けにされてゐるやうな感じた。
瀬木はへんに不安になつて來て、つと富田の側に肩を寄せながら、ニヤリとして、
「時に、あのエゴイスト、來なくなつたやうだが、どうしたのかな」
「それは君が一番よく知つてるはずだ」
富田はニコリともせずに答へた。
「どうして。おれが知つてるはずはないぢやないか？」
「君は知らなくても、君は社長の腰巾着ぢやないか。それとも、秘書官かね」
瀬木は、ヒヤリとした。これで分つたと思つた。つまり、富田たちは、瀬木がいつも社長と行動を共にしてゐるのを、妬いてゐるのだ。瀬木が、社長から特別な信任を受けてゐるらしく見えるのが――彼等だつて、別に社長を愛してゐるわけではないのだが、新參者にだし拔かれることは、堪へ難い不安であるに違ひない。
そこで瀬木は、そつと山野や鈴木の顔いろをうかゞつた。彼等は社長の信任を受けることを卑しむところの紳士らしく、鼻の先に微笑をたたへながら、瀬木の視線をさけた。
「おれが、こいつ等の權利を盗み取つたとでもいはんばかりの顔をしてやがる。おれ一人が卑劣漢で、こいつ等ばかりが紳士であるやうに自惚れてるんだな。だが、どうだ、その自惚れはさびしいだらう。こら、さびしくないか」
心でいひすて、瀬木はあざけり返した。今夜は油斷がならぬ――この敗殘者のやうな低能社員を相手に、ひよつとすると喧嘩を……
「いらつしやい！」
銀座裏の、腰かけて飲む小料理屋に、五人はふてぶてしい足どりで入つていつた。

二十二

狹い土間に客は一杯たてこんでゐた。細長い、粗末な食卓に、向ひ合つて腰かけた五人は、次第に醉がまはつて來た。瀬木のまむかひに、富田が坐つて、紋付羽織の肩を怒らせながら、杯を干しては時々瀬木をジロリジロリと睨める。氣味がわるい。
「そんなに立てつゞけに飲んでも好いのかい」
お愛想めかして、その富田の杯に、いはゆる置き注ぎで、酌してやると、
「厭だぜ、おい、おれを社長と間違へないでくれよ」と富田は物すごく笑つた。
「事件が古賀代議士に關係があるからだよ。だから、つい僕が引つ張りだされるつてわけで、有難くもない役割さ」
「でも、景氣がよくて、何よりぢやないか。みんなで、うらやましがつてるんだよ」
山野が、三木をはじめ、みんなの方から、にこり

と一瞥を投げながらいつた。

「あんな事を」

瀬木は苦笑して眼を伏せたが、すぐ、

「ねえ、三木君、故郷へ歸ることは、もう社長にもいつたのか？」

「いはうにも、會へないんだ。社には出て來ないし、宅にゆけば留守だし……」

「ぢや、僕から、宜しくいつとかうよ。かういふ時には、社から相當の餞別をだすのが當り前だと僕は思ふんだが……」

「ためしに、宜しくいつて見てくれたまへ。僕は期待せずに待つてゐるから」

三木は怒つたやうに、杯をグッと一息に飲みほした。瀬木はてれて、うつむいた。

鈴木はニヤリ／＼しながら、みんなの顏を等分に見比べてゐたが時々、山野や富田と眼が合ふと、互にうなづき合ふやうに、瀬木の方へ視線を投げた。うつむいて、そこの誰のものに執着してゐる風を裝ひながら、瀬木は觸角を動かす昆蟲のやうに、それらの氣配を感じ取つてゐた。

「三木君！」富田が、促し立てるやうにいつた、「何を沈んでるんだい。君は國民の望みを負うて、仇敵を懲らしにゆく、忠勇義烈なる勇士ではないか！　もつと氣勢をあげろ。大いに飲め。もぐり興信所の、目くそ程の餞別なんかに、今更何をか戀々と……」

「今更何をか戀々たらんや！」と突然、三木は、細長い食卓をドシンとたゝいて叫んだ。

「僕はゆく、支那へ。僕は戰ふ、正義のために。僕は塞木某に忠誠ではない。けれども僕は、人類を愛するのだ。人類のために、殺し殺されにゆく——

人類のために、何者が何者と殺し合ふのであるか？」

だが、これは有難い、と瀬木は心であざ笑つた。このほむべき勇士は、戰爭の意義を知つてゐる。帝國主義者ブルジョア共は安心して好い。彼らの利益と、人類愛とはかくも一致する！

「さア、我らの勇士のために、乾杯しようではないか」と瀬木がいつた。

「乾杯、乾杯！」

五人は立上つた。

杯を飲みほしながら、瀬木はたれがこんな貧乏たらしい英雄、三木某なんかのために乾杯するものか、と心で叫んでゐた。おれは今日社長と一緒に會つた、あの醜惡なお爺さんを祝福してゐるんだ。たれも知るまい……

「有難う、有難う」

三木は感激して再び立上つた。

「今度は、善良なる國民たる諸君のために乾杯します！」

「乾杯、乾杯！」

彼等も立上つた。この連中の勢ひに押されて小さくなつて飲んでゐた他の客たちは、眼をみはつて彼等の乾杯騷ぎを眺めてゐた。

二十三

だが、乾杯のあとは間が抜けて、へんに白々しい空虚が、彼等の食卓を襲つて來た。もはや食慾のなくなつた物憂い眼に、細木のテーブルの上の汚れた皿や、こぼれたまゝに浸み込んでゆく酒などが、ぼんやり映る。すると一層、酒でも飲まねば、何か知ら整理がつかないやうな氣持だつた。

彼等は、深い沈默のなかで、飲みつゞけてゐた。が、支那に行く三木が、支那に行くことを突然思ひだしたらしく、

「僕は支那に行くんだね……だが、僕がゐなくなつたら、實は、困るんだよ」

「家庭か？」と鈴木が訊いた。

「さうだ」
　そのまゝ又、沈黙におちたが、三木は、酔ふと何時もの癖で、咏歎するやうな調子で叫んだ。
――おれはプロレタリアだ」
　鈴木は笑つて、
――君は月給取りだよ」となだめるやうにいつた。
「いや、おれは断じて、プロレタリアだ！　その証拠に、おれは一文も家に金をおかずに、支那にゆかなくちや、ならないんだ。おれは、みじめな男だ。母親ひとり、満足には養つてやれない……ねえ鈴木君、おれはいつたい、どうしたら好いんだ」
　三木の泣き上戸がまた始まつた、といふ顔で、みんなは相手にしなかつた。
――おれは戦争しながら、母親が餓え死にしてるだらうと考へなくちやならない。繁本興信所のおれのイスは、もうふさがつてやしまいかとびく／＼するだらう。おれは弾丸なんか怖かないよ。弾丸なんかね――だけど、鈴木君！　山野君！　おれは、母と、社長が怖い。社長の野郎、たこ坊主めが！――
　云つたが、ふと瞼をあけて、瀬木の顔を見ると、にはかにヘラ／＼と笑つて、
――怒るなよ、瀬木君。社長は社長だ。尊敬してるよ。君は――社長の秘書だらう」
　そして、ゲッタリと食卓の上に額を打ちつけたまゝ、「社長の秘書か」と再びつぶやいたが、それつ切り眠つたやうに動かなくなつてしまつた。
――おい三木君」
　そばから山野が呼び起さうとしたが、三木は、矢張りぢつと面を伏せたまゝでゐた。
――おい、おい、しつかりしろよ
　山野は三木の肩をゆさぶつた。
「ちよつと、このまゝにしといとくれよ」と相変らずの姿勢で――社長の秘書か――
――苦しいんだらう。しばらくさうさせて置いた方が好いぜ」と富田ひとり落ちついてゐた。
　瀬木は、さいぜんから、どうぞしてこの場を早く抜けだす方法はないものかと、そればかりを気にしてゐた。郊外の家で待つてゐるだらう梨枝子のことが、しきりに思ひだされて来た。
　彼はそつと立上つて、入口の方へ歩いて行つた。帽子を片手に。
　と、今まで面を伏せて眠つたやうにしてゐた三木が、むく／＼と首を直つて鋭く叫んだ。
――瀬木君、どこへ行く」
　瀬木は笑ひながら手を振つて、三木をなだめるとも、制止するともつかぬ形をした。そして、つと、のれんの外に出て行つてしまつた。
――瀬木！」
　猛獣のやうな富田の声が、のれんの中でした。まア／＼と、だれかが富田をなだめてゐるやうな気配もしたが、瀬木は突き飛ばされたやうに、足をはやめ始めた。
　のれんの外に、二三人出たやうだ。
――どつちへ行つた？」
「あ、あそこに行つてやがる！」
　つゞいて走つてくる靴音。
　銀座裏は暗くてさびしい。瀬木は逃げるのはやめた。こぶしをかためて身構へた。おのれ、来て見ろ……。

二十四

――逃げるのか」
　富田を先頭に、瀬木の胸をめがけて飛んで来た四人に、三方からかこまれた形で、瀬木は、喧嘩をしたら、先づ負けさうだな、と考へた。
――逃げはしないよ」
「ぢや、戻つて来い」
――君たちは、何だつておれに喧嘩を吹つかけるんだ」

らす暗の中で、紋付羽織の肩が波打つたと思ふ間に、たくましいこぶしが、瀬木の頰をグワンと突いた。

「馬鹿らしい。喧嘩なんか吹かけはしないよ。兎に角、貴樣の顏を見てると癪にさはるんだ」

「なに！」

瀬木はひぢをあげて防いだが、相手のこぶしは素早い二度目の攻撃をもう果してゐた。

「くるんなら、來い！」

「ふむ」

よろ／＼としたが、矢張り喧嘩をしたら損だと思つた。山野も鈴木も三木も、油斷なく身構へてゐる。

「君たちは醉つてゐる。まア、明日ゆつくり話をしよう。そしたら、誤解をとく……」

「今日の割前は、置いてゆけ」

瀬木は泣いてるやうな笑ひ顏で、財布から紙幣を取りだした。

「よし、えらいぞ。流石に、景氣の好い人は違つたもんだ」

富田が愉快さうに笑つた。その隙だ、思ひ切つて一擲を――瀬木の右手は、半ばおそるおそるに頰打つたが、抑へるまでもなく、それは實行しなかつた。

「ぢやア、明日また……」

「明日は、もうなぐりはしないよ。もつとも、社長にいひつけて、首にでもして見ろ。もしこの上なぐられたい氣があるなら」

「首にしてやるから、そのつもりで居ろ」

たうとう、我慢がしきれなくなつた瀬木は、吼えるやうにいつた。同時に、全身の力を投げかけて、富田の鼻のあたまを突いた。

もう破れかぶれだ。瀬木は無數の腕が、自分に絡まりつくのを感じた。一生懸命に、足を地につけようとあせつたのも束の間で、鼻血だらけな富田の顏とたれかの腕との間を、街燈がクルリと回轉したのを見た。石ころの多い地面を肩に感じた。靴さきが、額を蹴つた。胸に、無慈悲な壓迫をおぼえた。足は地面からはね上つて、二度三度空を蹴つた……

「痛い！」

一人、悲鳴をあげてゐる。三木だ。瀬木は夢中で、三木の指をかんでゐた。

が、すぐ、瀬木は身のかるくなつたのに氣がついて起き上つた。みんなは、なぐるだけなぐつておいて、逃げだしてしまつたのだ。

今まで、こびりついてゐた他人の體溫が、一時に發散してはく身の輕さ――瀬木は、起き上ると、まづ頭を振つてみた。

大丈夫だ。

手をうごかして見た。これも別條はない。それから、脚を――痛んではゐない。

氣がついて見ると、いつの間に集まつたか、瀬木のぐるりには、まばらな人集りだ。背廣の泥を拂ひながら、このまゝ立去るのもきまりが惡かつたので、瀬木はニヤリ／＼と微笑みながら、元の居酒屋の方へ歩いて行つた。

のれんを勢ひよく排して中に入ると、案の定、敵の四人は、まだ酒を飲んでゐる。

「や」

鼻の穴に紙をつめこんだ富田が、こちらを向いて妙な顏をした。が直ぐ、ニヤリとした。

瀬木は笑つた。

四人も笑つた。

彼らは握手した。

「まア、坐れ。飲み直さうよ」

山野がポンと、瀬木の背中をたゝいた。

二十五

明けてゆく朝、しだいに空が白くなる。二臺の飛行機が、くつきりと黒い。

地上では、やがて慘たる戰爭が始まつた。平

原を、津浪のやうにはふ密集部隊、塹壕の泥は、兵隊の汗でくづれ、煙、火焔、さし貫く金属の雨。無数の人間が、蟻のやうに死ぬ。

機関銃がひらめかす赤い舌。

空は、蜂のやうに群れ飛ぶ飛行機。追ふ、逃げる。落ちる。落ちる。落ちる。青空に、ながく煙を引いて落ちる。死だ。

地上の村落は火災を起した。一隊の騎兵は砂塵を揚げて駆去つた。

この世界では、いかに無造作に人間は死ぬのであらう。彼らは空から落ちて死ぬ。彼等は路ばたに死ぬ、彼等は束になつて死ぬ。

髪の毛ほどの物で眼を突かれようとしても、反射的に、まばたきする、それほど生命を守る人間が、こゝでは無造作に、束になつて死んぢまふのだ。

入日の野を、絡繹と、死傷者を運ぶ車がつづいて行つた。

映画が終ると、場内は明るくなる。次の喜劇物までに五分間の休憩だ。

「コーヒーでも飲まうか？」

幕間の二人づれ、青年の方がさゝやいた。

細川典子にとつて、青年と一緒に社交場に今日現れたことは、結婚、重大事件ではない。[illegible]力のある女は、決して散歩友だちに不自由はしないのだ。

「何をそんなに、ぷん〳〵してゐるの？」

紺の上着に、季節はやゝ早いフランネルのズボンをはためかした青年は、瀬木よりか少しばかりタイピストに適はしい散歩友だちに見える。地下室の喫茶店に落ちつくと、彼は淑女の不機嫌に対して持つ、先刻からの配慮を表現した。

「活動、面白くないの？」

「男つて、随分馬鹿にしてるわね」

男全體に對しての不満らしい。おれ一人の責任ではないらしいと知ると、青年は別にひけ目も感じないで、

「男が──どうして？」

「だつて、さうだわ。考へてもごらんなさい。さつきの、クララ・ボウの態つたら、なつてないぢやないの？」

そこで、彼女の説をきくと、クララ・ボウといへば、映画女優の中でもモダン・タイプの標本のやうにいはれて、男たちが大騒ぎしてゐるのではないか。そのクララ・ボウか、今見た戦争映画の中では、どんな役割をしてゐるか？男たちが勝手に名目をつけて、勝手にやつてる戦争の昂奮の中へ、クララ・ボウなるモダン・ガアルも又無反省に昂奮して入つて行つてゐる。いふまでもなく、これは男が彼女にかく強要したのだ。しかも、その昂奮にも拘らず、戦場における彼女は、實に惨めな喜劇的な景物にしかなつてゐないのだ。男は、彼らが尊敬するモダン・ガアルさへ、このやうにもてあそび物にしないでは居ないのだ。彼らは、女のモダアニテイを発見するのではなく、たゞ、女をアップ・ツウ・デエトならしめようとして、煽動するだけである。

「だつて、それや、映画でさういふ役割をつとめさせただけで──貴女のやうな理窟は無理だ」

彼女も、おしまひには笑ひだしてしまつた。

「僕も、いろんな女の人を知つてるが、貴女のやうな六ケ敷い人は初めてだな」

「六ケ敷いのは不可い？」

「不可かないさ」

「でも、もつとおとなしくつて、もつと自由になる人の方が、つきあひ易いでせうね…」

「その代り、面白くない」

「貴方も、もつと面白い人かと思つてたら、大違ひね。案外、つまんないわ、面白い相手がない

んだもの」と、青年を一寸參らせたのは好いが、自分のこの言葉は餘りにほんたう過ぎて、却つて自分の方へ強くはじき返つて來た。

二十六

「ある男が面白いか面白くないかは、その男と戀愛して見なくちや、分りませんよ」

傷つけられた誇りを取繕ふ努力で、青年の微笑は弱々しくゆがんで見えた。

「つまり、貴方と戀愛して見ろと仰言るのね、ためしに――」

「僕を試驗臺にして見る氣持がある？ 僕はさうされたつて、別におこりはしない」

「厭アだ。貴方はきつと面白くないから――」

次の喜劇の始まる鈴か、この地下室の喫茶店の、さびれたやうな空氣を搖り動かした。

「貴方、まだ、ごらんになる？」

彼女は立上つて腕時計を見ながらいつた。三時である。彼女は用事を思ひだしたのだ。

「貴方は？」

「あたし……見ても好いけど、ちよつと用事を思ひだしたの」

貴女が外へ出るのなら、自分も出て好いといふ樣子を見せるのを、おさへ付けるやうに、

「貴方は折角だから見ていらつしやい」と、命令的な言葉を殘して、彼女は正面の玄關のところで青年に別れを告げた。

「ちよつと、細川さん」

青年は思ひ切りわるく呼び止めた。

「後學のためだ。貴女のいふ面白い男つてのは、一體、どんなの？」

「感受性の鋭い人、まアそんなのでせうね」

「僕は？」

「さつきの戰爭映畫を見ても、批評一つ仰言らないぢやないの？」

出來るだけ好意のこもつた微笑を投げると、彼女は身をひるがへして、玄關の石階を走りおりて行つた。

「畜生、おれに神經衰弱になれとでも註文したいのだらう」

青年が口惜しさうにつぶやいた時には、彼女はもう、有樂町の廣い通りを、東京驛の方へ歩いて行つてゐた。

大きな、角々しい石の建物が、濁つた空の下を、カルテルといふ字の感じで連つてゐた。それらの建物のかげを歩いてゆく彼女は、小さく小さく見える！ ともすれば、近くのガアドの上を、ぐわうぐわうと滑つてゆく列車の響に、彼女の姿は消えてしまひさうにさへ見えた……

だが、側に寄つてよく見るが好い。彼女のスカアツは、銀白の沓下の素早い一歩々々に、リズムと影とを、織つてゐる。絹のブルウズは、情操の昂まつた胸の上にふくれてゐた。彼女はさつき青年と話してゐるうちに、ふと考へついた用事があつたのだ。その用事の前には、青年も映畫も、退屈きはまる存在に見えた。それほど、この用事を思ひついたことは、彼女を昂奮させ、緊張させたのだ。

用事といふのは――彼女は今月に入つて蟹本興信所で二週間も働いた、途中で無斷で社はよしたのだが、たとひ二週間でも、働いただけの給料は當然もらふべきであり、又もらはなければならないものなのだ。そこで、今日はどこの社でもきまつた給料日だから、自分も蟹本興信所まで當然の權利を要求しにゆかう、といふのであつた。

この用事は、彼女の情操をたかめた。働いた、その報酬――金錢についての權利――主張すべき物をつかんでゐるといふ喜び、それこそ、彼女を元氣づけ、有頂天ならしめる。眞のモダン・ガアルにとつては、物質こそ、モラルの本源だ。

が、そのビルディングの中に入り、エレベエタアに乗つた瞬間、（エレベエタアは必ずしも心まで高揚してくれる物ではない證據に）彼女は急に打しをれてしまつた。二階、三階、四階——彼女は次第に、資本家の前に身をさらす弱い自己を感じ始めた。

二十七

細川弘子が久し振りに社のドアをノックしたこの給料日は、瀬木たちが銀座裏で喧嘩をした翌々日にあたつてゐた。

あの晩喧嘩をして仲直りをしてそれから散々飲んだ五人のうちで、翌朝出發しなければならぬ瀬木だけは早く歸つたが、あとの連中は、ぐづぐづしてゐるうちに、スッカリ泥醉してしまつた。瀬木も、こんなに醉つたのは、生れて初めてといつてもよかつた。それから、深夜の街を走らせた自動車の、何と愉快だつたこと！　四人は狹い箱の中で揺られながら、無暗に聲を張りあげて、朝鮮ぶしや、「こゝは御國」を、小學生のやうに合唱した。氣がついて見ると、彼らは夜の明け方ちかくに、吉原の、ある妓樓の表口へ、自動車を横づけにしてゐたのだ。

瀬木は、思ひ出し、下から來た婆アさんに、ひどく男振りをほめられたやうな記憶がある。それから、臺のまはりに並んだ女たちを前に四人で籤を抽いたことも覺えてゐる。富田が紋付羽織を脱ぎ捨てゝ、袖をめくつて酒のまはつた赤い腕をふりながら「おれはお職でなくちや厭だ、厭だ」と駄々をこねてゐたことも、ぼんやり頭に殘つてゐる。さういへば、そこの廣間での酒は馬鹿にまづかつたやうな氣もする……。

兎も角、針金で喉をかきまはされるやうな渇きをおぼえて眼がさめた時、彼は初めて、自分の寢てゐるのは、妓樓の二階であることを、ハッキリ意識した。

そばにはだれも居ない。手をたゝいてしばらくすると、色のさめたメリンスのやうな女が、無愛想な顔で入つて來た。

「やつとお眼ざめ？」

「うむ。よく寢た。何時？」

「さア、かれこれ六時でせう」

「なアんだ」

朝の六時かと思つて安心したがすぐ夕方だと分ると、瀬木も流石にギョッとした。

「他の連中はどうした？」

もしや彼らが、瀬木ひとりを人質に殘して歸つてゐたら——瀬木はスッカリ眼をさまして、半ば起き上りながらきいた。

「まだ、みなさん、よくお眠みですわ。貴方、行つて起しておあけなさいな」

ほつとしたが、同時に、彼は脱兎の如くはね起きた。

「どうしたの？　そんなに怖い顔してさ」

女はあわてゝ洋服など着はじめた瀬木をとがめるやうに訊いた。

「僕はかうしちやゐられないんだ、今日は是非、行かなくちやならない所があつたんだから——みんなが起きたらね、一足さきへ失敬したといつてくれたまへ」

「あなた、お顔は？」

「いや、歸つてからどうせ風呂に入るんだから」

然し、おれを人質におかないのなら、おれが彼奴らを人質においてやらうといふ瀬木の策戰は見事やぶられてしまつた。廊下を二三歩、歩いた拍子に、向うの突きあたりの部屋の障子が、ガラリと開いてとぼけたやうな顔の山野の丹前姿が現れてしまつた。

「瀬木君、瀬木君、おい、歸つては不可んよ」

聲をきいて富田も、片木も、廊下に出てくるやうな始末だつた。

もうどうせ今日は社をサボつたのだ。明日は給料日だからそれでこゝの拂ひをすれば好い。そのまゝ居つゞけといふことに話がきまつてしまつた。
　そこでもう一泊。
　翌る日、籤をひいて瀬木が社へみんなの給料を受取りにゆく役になつた。瀬木は本望通りに、三人を人質において、ひとりで社までやつて來てゐたのだが――細川弘子が、その時事務所の扉をノックしたのである。

二十八

「おや、いらつしやい」
　彼女が入つてくるのを見ると、瀬木は立上つて迎へた。
「馬鹿にお靜かですこと。どなたも――」といひかけて相手の顏に氣がついて「どうしてそんなに元氣のない顏してらつしやるの？　まつ青よ」
「久し振りですね。貴女が社に出てこないものだから、しよげちやつてるんです」
「厭ねえ。それはさうと、社長さんは？」
「社長さんに用事があるんですか？」
　瀬木はニヤリ〳〵しながら訊いた。
「あら、何を笑つてらつしやるの？　とても變よ、お笑ひになると、今日はふやけたやうなお顏に見えるのですもの」
　瀬木の、青ざめて、むくんだやうになつてゐる顏を見つめながら、彼女はクッ〳〵と笑つた。
　成程、二日も三日も酒に浸つてゐたのだから――そんな顏もしてゐるかな、と思ふと、瀬木は細川弘子の前にゐるのが、何となくまぶしい氣持であつた。彼女はまさしく神聖な雪で、瀬木はその雪の照りかへしで汚れ目の目だつムク犬ででもあるかも知れない。
「僕も、社長に用があつて來たんだが」
「いらつしやらないの？」
「えゝ。來て見たら、この君ひとりで」とその時二人の前にお茶を運んで來た給仕の少年を顎でさし示した。
「だつて、給料日でせう、今日は？」
「それでこつちも用事があるのに、來ないといふのは怪しからんと、今も給仕君と二人で憤慨してたところですよ」
「妾、そいぢや困るわ」
　弘子は眉をひそめて、自分の用件について話をした。二週間分の給料をもらふことの正當さを、勢ひこんで論じたあとで、
「少しばかりの物だけど、あたしお小遣ひが欲しいでせう？」と、媚びた眼をあげて、ホヽヽと笑つた。
「さうだとも、さうだとも、二週間といへば、半ケ月だもの」
　答へる瀬木は、しかし上の空だつた。今日の給料は、お小遣ひどころか、瀬木にとつては必死の金策でもあつた。妓樓で待つてゐる三人のことを想へば！　といつて、人質のつらさを思つて心が痛むわけではなかつた。彼奴らは、幾らでも、あんどん部屋で、虐待されたりするが好い。たゞ、瀬木は、あとの復讐が氣味がわるいのだ。煩いのだ。だから、金をこしらへて、彼らを迎ひに行つてやりたい。行かなければならぬ。彼らに怨まれて、この社で落ちついて働けなくなる必要もないと考へるのだ。だから、社長が來ないといふのは瀬木にとつては、細川弘子以上に困ることだつた。
「會計もおかないやうな事務所があるか！」と、彼はそんなことまで腹立たしくなつた。
　そこへ、不安な部屋を脅かすやうに、電話の鈴が鳴つた。
「瀬木さん、あなたですよ」と給仕が呼んだ。
「だれから？　社長さんかい」

「いゝえ、山野さんらしいんです」
瀬木はドキッとして、
「給仕君の馬鹿。居るといつたのかい」
仕方なしに電話口にかゝつたが、
「ウン。さうだ、なに？　分つてるよ。だけど、まだ社長に會へないんだ……よし、よし、分つてるよ、分つてるよ。夕方までには——好いよ、好いよ　分つてるよ」
荒々しく受話器をかけると、弘子の方を顧みて、彼は絶望的に叫んだ。
「細川さん、二人で社長を搜しに出かけませうか」
だが、その時、ドアを又ノックする女があつた。給仕君の馬鹿は、そこに未亡人梨枝子を導きいれた。

二十九

梨枝子は、瀬木と暮らしだしてから、自分の家を「愛の巣」と名つけてゐた。多分、婦人雜誌の告白記事などから得た知識だらうが、彼女は時々、さうした進歩的な言葉をつかつて、瀬木を参らせるのである。「愛の巣」だとか、「愛慾の惱み」だとか、「肉體の距離」だとか——
「愛の巣」に男が二日も歸らなかつた、といふことは「惱ましい」限りだつた。さびしくはないけれど腹が立つ。いら／＼して心が無殘に打ちのめされた氣持だ。そればかりではない、何だか、だまされた、損をしたと思ふと、矢もたてもたまらなかつた。夜なかに眼ざめても、すぐ頭にそれが來て、寢床の上に飛び起きたい、叫びたい……。
二晩で、身も心もゲッソリやせた思ひ、食慾もろく／＼進まないのだ。そこで三日目の朝には、にはかに思ひ立つて、繁本興信所を訪ねて見ることになつた。
電話をかけ終つた瀬木と、入口を入つて來た梨枝子と、ハッタリ顔が合ふ。
彼女は、その刹那に、被害妄想の夢からめざめたやうに、顔を輝かした。
「何か用？」
「どうなすつて？」
怨みを湛へながらその顔はひとりでに、ニヤリニヤリと崩れてしまつた。安心から、心がゆるんで、彼女は、急に生きてゐることが素晴らしい幸福であるやうな感じをおぼえはじめてさへ居た。
「隨分、心配しましたわ。だつて、お泊りになる時には、電話位下すつても好いぢやありませんか」
瀬木は無言で、苦笑した。そばに細川弘子がゐるのだから、めつたな事は聽かせたくない。それで哀願するやうに、梨枝子の方へ眼くばせするのだが、相手は、氣がつかない。
まア好かつた、この男は「愛の巣」の月末の生活費を踏み倒す意志でもなかつたらしい——たとひその意志であらうとも、こゝに搜しだした限り、もう逃がすものか。
「今日は、まだ、御用事あるの？」
「大變な用事があるんです」
梨枝子の顔が、すこし引きつつて見えた。何かいはうとした時、今までニコ／＼して二人の樣子を見てゐた細川弘子が、その時、向うの方から冷たい、ハッキリした聲をかけた。
「瀬木さん。社長さんを搜しにお出かけになりませんの？」
梨枝子はびつくりして振り返つた。見知らぬ若い女——斷髪の女が、こちらを見てゐる。人を馬鹿にしたやうな眼つきだ。負けてはをらぬ氣持で、梨枝子も、ぢつと弘子を眺め返した。
細川弘子の顔が、微かに緊張した。彼女も視線を伏せようとはしない。
かたい顔をして二人の女が、お互を見詰め

合つた。
　が、細川弘子の顔がまづ、すこしばかり、ほどけたと思ふまに、彼女の鼻のあたまを雨だれほどの微笑がかすめた。しづかに眼を、瀬木の方にうつすと、弘子はいつた。
「そろ／＼、お伴しませうか、瀬木さん」
「えゝ、もう出かけないと、時間がありませんね」
　それから弘子の手前をつくろふ必要から、彼は梨枝子に、
「今夜はきつと歸ります。御主人に、さう仰言つておいて下さい」
　いひながら、瀬木は眼をクシャクシャッとさせて見せた。
　梨枝子も、何が何やら分らず、眼をクシャクシャッとさせた。
「これから、社用で、細川さんと一緒に社長の宅へ行つて來ます。細川さんも社員で」
　無器用にさういひ捨てたまゝ、瀬木は弘子を促して、そゝくさと廊下に出て行つた。

三十

　あれは誰か、と弘子に訊かれたら、素人下宿の細君ですと答へるつもりで、瀬木は、弘子のいひだすのを待つたが、廊下でも、エレベエタアの中でも、彼女は默つてゐた。
「どうも困つたものですな。素人下宿の細君なんですよ。忙しく／＼つて歸らないものだから、心配してくれるのは好いが……」と瀬木は問はず語りの辯解を試みたが、弘子は顔いろ一つ變へないで、
「社長さんの、お宅へ行つてごらんになる？」
と他のことを訊いた。
「さうですな、電話をかけて見ますか、無駄足を踏むのも、何だから」
　東京驛まで來ると、瀬木は自動電話をかけた。社長は留守だといふ。どちらへと訊くと、どちらだか、分りません、社ではないでせうかと、先方からあべこべに訊ねられた。
「困つたな――」
　自動電話から出て、弘子のそばに歸つて眉をひそめたが、泥が腹にたまつてゐるやうな惨めな氣持だつた。社長に逢はねば――金をこしらへなければ、人質に殘つた連中の、あとが煩い。どうしても、今日ぢうに金をこしらへなければならぬ。梨枝子が、あんな所へ顔だしをしたものだから、弘子にもきまりがわるい。梨枝子の馬鹿が！　無智な色きちがひ！　と、のろひたくもなる一方では、梨枝子は、何と思つてるだらう、今晩歸つたら、いづれ一騒動で、こいつも厄介きはまることだ。そして吉原に殘つてゐる山野や富田らは、今ごろは……
「あゝ、八方ふさがりだ！」と瀬木はペッとつばを吐いた。
「然し、僕に、ちよつと今思ひだした心當りがあるから、その方へ行つて訊いてみませうか？」
「そこ、どちらですの？」
「築地の方ですがね」
　兎も角、その家へ行つてみようといふことになつて、瀬木は圓タクを呼んだ。
　思ひだした心當りといふのは、いつか青原代議士につれられて初めて行つた待合なのだ。その後二三度、瀬木は、本社長と一緒で、青原代議士と會見したが、その會見の場所がいつも例の待合だつたのである。
　社長や瀬木の策戰は、青原代議士をとつちめて甘い汁を吸はうといふのであるが、いはゞ對立した利益の立場にある者同士が、しば／＼待合で懇談を遂げたと考へると、ひどくむじゆんした話に感じられる。だが、この文句を、よく／＼考へてみるとむじゆんでも不思議でもなくなるだらう。即ち、彼等はしば／＼懇談を重

ねれば重ねるほど、利益の對立を明かにする。相手と仲よくすればするだけ、相手を賣つて賣りがひがあるやうになるのだ。

鹽本社長は、その待合でさうした用件を運ぶうちに、一人の女を知るやうになり、それからは單獨で、築地に出いりするやうになつてゐた。そのことを瀨木はチャンと知つてゐた。

だから、今日も、ひよつとしたら、と瀨木は思ひついたのであつた。すると社長はきつと築地だ、といふのが、もはや動かすべからざる直覺であるやうな氣がして來た。

女に逢ひに行つてるのではないかも知れない。だが、——ふと彼が氣になりだしたのは、今日あたり、あの待合で、社長と青原代議士と會見してゐるかも知れぬ、といふ豫感だつた。

これは重大な會見だ。玉屋銀行の貸付金を、青原代議士から取立てる、その妥協談だ——その席に瀨木が居合はさないでは!

社長ひとりに、甘い汁を吸はせてなるものか。

「今日はホテルに行かうとは、仰言らないのね?」

町々の雜踏で肩と肩とがふれ合ひながらの、細川弘子の、嬉々とした聲だつた。

三十一

「行きたい?」

瀨木は疑はしさうに眼を輝かした。

いつたい、この女は——と瀨木の心は動搖しつゞける。梨枝子を何だと思つてるのだらうか。なぜ、梨枝子の眼の前で、自分を誘ふやうに、外出を促し立てたか?

それを都合の好い方に解釋したら限りがない。だのに瀨木は、限りなく、都合よく解釋したかつた。

女の本能で、弘子は、梨枝子から瀨木を自分の方へ引き寄せようとしたのだ、と、瀨木は獨斷する。もちろん、瀨木も、引き寄せられる方が望ましかつたので、梨枝子の氣持を蹂躪したのだつたが……

「年増女の方が、おれは好きなのだが」と瀨木は考へる。

梨枝子といふ年増女は、柔かな湯のやうな慰めを思はせ、盡きない興味をそゝる時には肉感のメルティング・ポットでさへあらう。このまゝで人生が停滯しても好い、それは爛熟の頂上である。

だが、男の心を突如として冒險と飛躍に驅り立てるのは、常に、彈力ある生命だ、若い、水々しい女だ。彼女はまだ深い、複雜な魅力を持たない。けれども、爛熟の頂上へ渡るまでの進行を豫約されてゐる。未來へ! この豫約が、男の心を呼び立てる。

細川弘子は、彈力ある、若い、水々しい女性だ。そこで、瀨木は、もちろん、冒險心を呼びさまされた。といふのは、もはや梨枝子も、社長も、況して青原の行燈部屋で心配してゐるだらう富田以下の面々など、何するものぞ!

「ホテルへ、ゆかうか?」

「お止しなさいな」

弘子が笑つたので、瀨木は、折角のインスピレーションに手づなをつけた。彼等の自動車は、いつか銀座を走つてゐた。あゝ、街には初夏、明るく暮れようとして自動車と電車が重なり合つてゐる。步道の群集の上を、夕日と街燈とが、粉末のやうな光をふりかけて居る。

「こゝで、ちよつと運轉手さん、停めて下さい」

細川弘子が、生々とした聲で叫んだ。

「後ね、もう社長さんに逢ふの、厭になりましたわ」

「だつて、今日、お金、要るのぢやないのですか」

一また今度にしても好いの。さやうなら、どうぞ有難う

「下りるの？」

「銀座か、歩きたくなつたの―

―どうしても、下りる？」

―えゝ―

銀座の空氣が、彼女の望鄕の熱情を呼びさましたのであらう。罐の中の魚が、水を見てはねかへる、あのピチ〳〵した躍動が、彼女の血管に脈打ち始めたのかも知れない。

どうでもするが好い。

「ぢや、又ね」

何か、「又ね」だ。瀨木は、今日吉原の妓樓を出る時に、廊下で妓から「お近いうちにね」といはれたのを想ひだした。ねがはくば、あらゆる女から、どうでも好いやうな再會の約束なぞ、いつてもらひたくないものだ。

蝶ひ上るやうにヒラ〳〵と、細川弘子は歩道に飛び上つた。水の中に一滴の繪の具をしたゝらせたやうに、彼女はやがて群集の中に消えて行つた……

だが、自動車の中に一人になると、瀨木は再び現實に歸つた。社長、梨枝子、富田――どんより濁つたやうな人間ばかりの世界へ。

三十二

銀座の百貨店の一階。日の暮れ。屋内は溢れる燈火にふくれ上りながら、化粧品と、煙草と、帽子とが、菓物のやうに輝いた。鋪石の床を踏んで、人々は、石鹼と香水とのにほひに醉ひながら、盛上つた商品の間を波打つてゐる。

細川弘子も、その中に飛び込んだ。

斷髮で、洋裝で、彼女のやうな女が、ビルディングの中を、たつた一人で歩いてゐるのは、何か、不經濟的な感じであつた。こゝひとつに、近代の美しき夕暮を取り集めたやうな華々しい空氣の中を、斷髮で、洋裝で、戀愛のない女が歩いてゐる！　夢のやうな話だ。たれか、彼女の漫歩のつれになつてやらうといふ有志はゐないものか。商品は山のやうに、うづ高く輝いてゐるのに。

けれども、細川弘子にとつて、ひとりであることは、何の悔でもありはしない。彼女は男を輕蔑する。あらゆる男を、信賴しない。好きな男に出會ふまでは、戀愛の眞似ごとをする氣持もない。

彼女を不幸だと思はなくても好い。何故なら、彼女は今、この上もなく、のび〳〵とした氣持で歩いてゐるのだから。

瀨木のやうな男のそばにゐるといつの間にか、息づまるやうな不快をおぼえてくる。その上社長などに會つたら堪らないと思つた。そして、自動車から飛び降りた。

今までの濁つたやうな心持は、百貨店の輝かしい空氣をたゞよふ石鹼のにほひで、すがすがしく洗はれた。彼女は、銀座の群集の中で、元氣とうるほひとを取戾した。

また戀愛でも搜さうといふ氣持は、すぐ出てくるに違ひない。そして又、好もしい男は、世の中に幾らでもあるのだから――彼女がいくら無いといつたつて、有るのだ。そんな男が、ではどこにあるかといふと、それは、あらゆる男がよく知つてゐる。（男たちよ、自分の胸によく訊いて見るが好い）だから男たちは、「こゝに居るよ」と、いつでも女たちに目配せしてゐるのだ。女たちが、それに氣がつかないのは、をかしい。

鋭敏な細川弘子のことだから、いつか又、これらの無數の「理想の男」を、無數の男の中から發見するやうになるだらう。だから、彼女のことを心配するのは止めよう。彼女をして思ふがまゝに、銀座の街を歩ましめよ。この態度と、

この社會と、それらの物のつゞく限り、いくら彼女が自己に目ざめてゐたつて、聰明であつたつて、彼女に「自由」が持たれようはずはない。

確なことは、それだけだ！

一方には、矢張り何者かにあやつられて、人形のやうに動いてゐる男がある。自動車の中で、ふさぎ込んでゐる。

瀬木だ。

悶々しい癖に、さき程からスッカリ、しよげ返つて居るのだが、もし、これからゆく築地の待合で、社長をつかまへる事が出來なかつたら、どうしたら好いのか？　やがて築地で、目指す待合の軒が見えだした。すると瀬木は急に眼を輝かした。

一臺の自動車が、待合の門口に停ると、車の上から二人の男が降りて、そのまゝ待合の中に入つて行つた。

瀬木はしめたと思つた。今の二人は、確に青原代議士と、繁本社長なのだ。おれが行つたら驚くだらう――考へるまに、瀬木の自動車も、その待合の門口に着いた。

一種の武者振ひ――急に明るく晴れた胸のとどろきに、氣もそは〳〵として、彼は玄關に立つた。

「ごめん、ごめん」

スウッと障子があいて、年増の女中が三つ指ついた。顔をおぼえてゐるので、

「あら、いらつしやいませ」

「繁本さんが、來てませう？」

「さア」と女中はへんに躊躇した顔付だ。

三十三

「僕も、繁本さんと一緒にくるはずだつたのだ」

瀬木はいら〳〵して、半分、靴を脱ぎさうな様子を見せた。

「しばらく、お待ちあそばせ」

女中は去つて行つた。長いこと出て來ないので、構ふものか、上つてやれと思つた時、やつと、ほかの若い女中が顔をだして、

「いらつしやいませ」と、三つ指だ。うちには大臣だつていらつしやるのだから、といつた面がまへが小憎らしい。

「あの、たゞ今、ずつと伺つて見ましたが、繁本さまは、いらつしやらないさうでございます」

「でも、さつき、僕は見たんだ、こゝに入つて來たかゝないか？――」

「さア、どなたかのお間違ひでもございません

か知ら」

「二人づれで――青原さんと……」

「あゝ、あの、さつきのお二人とまでございますか。あれは、他のお客さまでございます」

あれが、繁本さんと青原さんとでなかつたら、おや、たれだ、いつてごらん」と、瀬木は喧嘩腰になつた。

相手の女中は、大臣でも代議士でもない瀬木の身分をよく知つてゐるといふ顔で、

「あの、私どもの方では、お客さまのお名前は、いつさい他さまへは申しあげないことに致してをりますので……」

落ちつき拂つた相手の調子に、瀬木はスッカリ負けたといふ感じだつた。

みじめな氣持で、そして、自分が確實に大臣でも代議士でもない事を思ひ知らせられただけのことで、瀬木はそれでも事務で肩を聳かせながら待合から往來に出て行つた。

世界ぢうの奴が仇敵だ。どいつもこいつも味方ではない。

繁本社長と青原代議士が、今日の會見で、どういふ妥協をやるかは、瀬木にもたいがい見當はついてゐた。自分をだし拔いておいて社長ひとりで好いことをしようとしたつて、やらせる

ものか、さんざん働かせておいて、今更裏切りをる！　どうするか見てをれ。

社長に對する憤りで、瀬木の腹はブス／＼いぶつてゐた。

社長に會へぬとなれば、今日の企儀はとても間に合はない。然し今は、そんな小さな問題に係はつては居られなかつた。富田や鈴木や山野の誰がどうならうと、おれの知つたことではない。彼らは、さんざん行燈部屋で、青息でもつくが好い。おれは——と瀬木はそこで、社長めを、どうしてくれようと、新たな憎悪をわき立たせた。

然し、いくら怒つて見ても、腹の底からさびしくつて、どうにもならなかつた。彼はひとりおでん屋に入つて酒を飲んだりしたが、酔がまはらない。では——矢張り梨枝子の所へ歸るより他に仕方がない。結局は、一まづ家に落ちついてから、だ。

さぞ怒つてるだらうと思ひながら、夜おそく、案外の家の戸をかるく遠慮ぶかくたゝいた。

「もし、もし……」

「どなた？」と、家の中から、梨枝子の鋭い聲がした。

「僕——」

「僕では分りません——」

「瀬木だ！——」

弱味を見せてはならないから、思ひ切つて怒鳴つた。

ガラリと、内側から戸をあけた。入る。いきなり、彼女は飛びついて來た。

「いや、いや、いや！——」

瀬木はびつくりした。曾てないことだ、彼女がこのやうにしをらしく、少女のやうに泣かうとは。

三十四

でも、瀬木は滿足だつた。今夜はいづれ一騒ぎしなくちやなるまいと、覺悟をきめてゐたのだが、これで、どうやら助かつたといふものだし、それから、女が、かうも無反撥に、崩折れるやうに寄りかゝつて來たといふのは、完全に征服されてしまつたことを意味するのではないか。

よつぽど、おれに惚れてるわい。

「分つてるよ。もう泣かなくても好いよ。僕は、もう、どこにもゆきはしない——」

「ほんと？」

涙をふいて顔をあげる。すつかり十五年前の、少女にかへつてゐる。もつとも、どんな鬼婆にしたところで、泣いた顔といふものは多少子供に近いものだ……

「ほんとだとも。僕ね。あんたとかうして暮すやうになつたのも運命といふ奴でね。一生、離れられなく、なつてるのだらうと、近頃、つくづく思ふんだよ。どうも僕は、かういふことについては、口が下手で、うまくいへないんだが——」

「運命だから、いや／＼ながらでも、仕方がない、と仰言るの？」

「まアさう理窟をいつて、いぢめないでくれたまへ。ほら、こんなに、恐れいつてるんぢやないか？——」

瀬木は頭をかいて見せた。

「お上手ねえ」

彼女は、妖婦のやうににらむ眞似をした。

茶の間でゆつくり寝衣に着換へると、何となく幸福に似たものを味つてるやうな氣がした。それは、どこまでも似たものであつて決して幸福その物ではない。が、彼女は臺所でガチャガチャいはせてゐる。一本つけようといふのであらう。寝酒も、わるくはない。

「ねえ、おい、もう晩いのだからお止しよ——」

いたはるやうに呼びかけた。
「でも、召上れ。何にもないのよ」
　お膳立てして、罐詰など、いかにも家庭らしい。今までは、このお膳にも、德利にも、茶だんすにも、壁の穴にも、疊の目にさへ彼女の亡き夫の體臭が殘つてゐるかのやうな、落ちつきのなさがあつたのに、今夜は、どうだ！
　だが、この小さな滿足のために、繁本社長に對する復讐を忘れてはいけない。彼奴に一あわふかせるためには、どうしても、白々しく社に居てやらなければならない。社にゐるとすれば——富田や山野に逢はないわけには行かない。癪ではあるが、何とか金を都合して、吉原に迎ひに行つてやらねば——明日でも、まだおそくはあるまい。
「どう、お加減は？」
「丁度だよ。」と杯をほして「一杯、どうです？」
「あら、どうも……」
「へゝ。可愛い顏してるね」
「譃ばつかり」
　小指で頰つぺたを突いてくるのを、顎をあげて、つんと外した。
「それはさうと、二百圓ばかり、持つてない？」
「……？」
「まア、そんなに水臭い顏しなくても好いぢやないか。ちよつと、二三日のことなんだが……もし何なら……融通してくれると、好いことがあるんだがなア」と氣まづく笑ふ。
「あきれるわ、妾を金持の未亡人だとでも思つてらつしやるやうね」
「あきれるのは、こつちだ、金のことといへば、すぐ顏いろ變へてやがる」
「どつちが」
「なに」
　しんと更けた夜で、二人は仇敵同士のやうに身構へてゐた。

三十五

　夜明けまでに、一度仲直りして、またもう一度、今度は、決定的にいがみ合つてしまつた。
　それで瀬木は、夜が明けると、急いで洋服を着ると、まだふてぶてしく寢てゐる女の枕もとに立つていつた。
「ぢや、もう會ふまいね。」
　女は默つて、蒲團の中にもぐり込んでしまつた。
　身をかゞめて、そつと蒲團のえりをつまみあげると、ザボンの皮をむいたやうに、青白い額が出る。
　彼女は、それでもぢつとしてゐた。
「そんなに憎いかね」
　ニヤリとして、蒲團のえりを元に戻して、その上を、拳骨でポンとたゝいた。
「痛い」
「失禮」
　トン、トンと足音させて、玄關に出て、靴をはく。表戶の、かぎをはづしてゐる時、
「口惜しいつ」
　奧の部屋でそんな聲をきいたが瀬木はかまはず、外に出た。
「これで、きれいさつぱりだ。社長をどうしてくれよう」
　兎も角、今日はどんなにかして社長をつかまへて、一談判しなくてはならぬ。瀬木の財布には、もう電車賃さへ乏しくなつてゐるのだ。
　朝、まだ早いので、行きどころがなかつた。繁本興信所に今から行つて、社長の出てくるのを待たうか、いや、萬一、富田たちと顏を合はせるやうな始末になつては困る。といふのは、瀬木が歸つて來ないので、彼等は第二の方策をやつたかも知れないのだ、たれか一人が、つけ馬

を引いて、親類に行くとか、質屋に行くとか――いろ／＼方法はあるだらうから。

が、急に思ひついて、彼は方向を決めた。朝はやく、社長の住宅を訪れることだ。寝込みを襲つて起きて來なければ、一日でも、二日でも、玄關にガン張つてやる。昨夜から、宅に歸つて來ない、などとはいはせない。社長は、どんな事があつても、外泊しないのだ。夫人が、あのとほり有名なやきもちやきなのだから。

三十分のちに、瀬木は、社長の宅の玄關にゐた。

「……？」

出て來た女中が、けげんな顏で瀬木を見あげた。

「旦那さまと、御一緒ではなかつたのでございますか。」女中の方がさきに質問した。

「一緒に、とは？」

「昨夜、旦那さまから電報が參りましてね。急用で大阪にいらつしやるといふ電報で……瀬木さんも御一緒のやうに、書いてございましたが。」

ちよつと、といつて女中は奥に引つ込んだ。

しばらくすると、夫人が、今起きたばかりの顏だが、嶮しい見幕で玄關に出て來た。

「主人は、大阪には參らなかつたのでございますか？」

「僕、一から存じませんが……」

「これを、ごらんなさい」

夫人は、一通の電報を瀬木の手にさしだした。

「コンヤ、キウヨウデ　オーサカニユク二三ヒカヘラヌ、セギ　クンモイツシヨ」と瀬木は讀んだ。飛んだ大阪だ。

「奥さん。御主人に御用がおありでしたら、築地の△△家といふ家に電話をおかけなさい」

「何ですつて？」

瀬木は笑つて答へなかつた。

「待合ぢや、ありませんか」

「もちろんです。あまり御油斷なさると不可ませんね。相手は、すごい美人ですよ」

夫人の顏が見て居られなくなつて、瀬木は逃げるやうにそこを出た。

三十六

瀬木は、取り返しのつかない事をしてしまつた、と思つた。

待合で居留守を使はせたのは、大した惡意からではなかつたのかも知れない。自分をだし拔いて、菅原代議士と何事か妥協したと取るのは早合點だつたやうな氣もする。一時にクワツとして、仇かなんぞのやうに、社長を怨む必要はすこしもなかつたのだ。

瀬木は、社長にあやまらねばならぬと考へた。

さうしないと立つ瀬がない。第一、身の置きどころも無くなつて、代議士になる夢もさめ果てた。つまらぬ男になつてしまつた――

省線驛のそばの自動電話に入つて、彼は築地の待合を呼びだそうとした。が、いくらかけても、お話中だ。待ちくたびれて、今度は、社にかけて見ようといふ氣になつた。給仕に、樣子を訊いて見よう……

「もし／＼、そちらは繁本興信所？　君は給仕君だね」

「あ、瀬木さん？」と向うではすぐ瀬木と氣がついたらしい。「あなた、瀬木さんでせう」

「瀬木だがね、もし／＼、もし／＼」

しばらく返事がなかつた。と、急に、受話器の底から、鼓膜も破れんばかりの聲で、

「卑怯者！」富田の聲だ。「瀬木、貴樣は、それでも紳士か、よくも人に恥をかゝせやがつたな」

「おれは紳士ぢやない」

どうせ電話だから、腕力は屆かない、だから、瀨木は、相手をからかつてやれ、といふ氣持で、ひどく落ちついた。
「紳士でなかつたら、何だ？」
「何でも好いよ。少くとも行燈部屋入する紳士ぢやないね」
「さうか、それは立派だ」と、言葉につまつて「貴樣は、今日から社は首だぞ」
「貴樣に雇はれてるんぢやない。おれは社長と――」
「ハヽヽヽ。社長さんの御託宣を傳へてやつてるんだ、分つたか」
瀨木はギヨツとした。
「社長は、そこに來てるのか―
「もちろん。給料日が今日に伸びただけの話さ。どうだ、口惜しいか
「貴樣のやうにな」と、送話器へ口を押しあてると、かみつくやうに、「目くそほどの月給で、尻尾を振る犬とはちがひますやうだ」
ガチャリと切つて、自動電話の外に出ると、五月一日の街の目が、今日から一文なしになつた瀨木の全身を、じろじろと照らした。
其所は大都會だ。日光と、埃と、騷音との大都會だ。日光の中には何百萬人の體臭が溶けてゐる。埃の中には工場の鐵屑が散亂してゐる。けれども、その大都會を一文なしの流浪人としてさまよふ者には、騷音さへ耳には入らない。彼は淋しい。
大都會は淋しい。
瀨木はふら／＼と、丸の内まで來た。あの七階のビルデイングの下の、白い大通りを、希望のない身體の重さに背中を曲げながら、歩いてゐた。もう斯うなれば、やけくそだ。兎も角、社長に直接會つて、一談判すべきだ。退職手當の要求で、飽くまで鬪はなければならぬ。たとひ富田が居ようと山野が居ようと、今は命を投げ出してでも、只、爭鬪あるのみだ！
と、わつと云ふ喚聲が、眩しい日光の中で聽えて來た。

三十七

五月一日だ。
勞働者の祭日だ。メエ・デエだ。
三萬人の逞しい行列は、四列に手を組み合つて、今日總動員された制服、騎馬巡査の垣の中を、今、丸之内の大通りにさしかゝつて來た。
往來の群集は、喝采の聲をあげて行列を迎へた。電車はとまつた。地主と資本家の、あらゆる企てに挑戰する全民衆の、沸き返る叫喚――その中に一人の淋しい瀨木が、立ちつくして行列を眺めてゐた。
「俺は……」
瀨木はセンチメンタルになつた。
「俺もこの行列の中に飛び込んで行きたい！」
けれども、どうしてそれが出來よう。彼は出世しなければならぬ。彼は、自分が大切なのだ。今は出世の望みも消え果てた身だが、それでも、その望みのない事を目ざして、自分を守つて行かなければならぬ。
たつた今、命も投げ出して社長と鬪はうといふ勇氣を振ひ起した癖に、瀨木は尻尾を卷いた犬のやうに、こそ／＼と群集のうしろへ消えて行つた。
七階の上では、外の大通りの行列も知らずに、希望のない、正義のない人間たちが、將棋を指したり、欠伸をしたりしてゐた。

あんな男こんな男

「それや、馬鹿も居れば、利口も居りますよ。いくら大學生だつて――」

宮木は笑つた。緣側に腰かけて此方を見上げた彼の半面が、軒から洩れる日光で明るく、それ故、笑ひ顏がちよつとグロテスクだつた。

「で、貴方は、お馬鹿さんの方、それともその反對？」

「さア、それは分りませんよ。貴方が勝手に觀察したら好いでせう。」

で、出に拔かれたから、登美は默つてしまつた。妾は貴方をお馬鹿さんだと觀察します、などと冗談に云ふのが、ちよつと差し控へられたからだ。と云つて貴方はお利口で……ないと、此所でまともな事を云ひ出すのも、少しばかり照れる話である。

登美は、自分の家の二階を借りてゐる宮木を、油斷のならぬ若者だと思つてゐる、勿論、馬鹿だなどとは考へたこともない。登美は小學校を卒業しただけなので、「大學生にも馬鹿がある」――そんな事が考へられよう筈はなかつた。

宮木が出て行つたあとで、登美は、二階の宮木の部屋を掃除した。四疊半には、机が一つ、本が五六册、その他には、壁の釘に、袴が來て、もう要らなくなつた外套が、ぼんやり懸つてるだけで、場末の借家らしい安普請に、ぴつたり似合つた貧しさだつた。

「苦學でもしてるのか知ら？」

掃除しながら、登美はいろ／＼の事を空想する。こんなに貧しい部屋でありながら、宮木は毎朝、部屋ぢうを埃だらけにして出て行くのだ。夜おそく歸つて來ることがある。登美が表戸をあけてやる。宮木はろく／＼物も云はないで二階へ上ると、ドシンと、寢床の中へもぐり込む音が、階下にまで響いた。それつきり、朝まで宮木は眠る筈だ。そして起きると間もなく飛び出して行くのだから、部屋がよごれよう筈がなかつた。それだのに、朝、登美が掃除すると、夥しい埃だつた。春さきの風は激しいし、建て付けはわるいし、だが、それにしても、時には、寢床をあげると、ボロ／＼に乾からびた泥などが、疊の上に音立てて降ることがある、そんなのは、不思議ではないか？

泥まみれの宮木さん。さう云つてやつたら、どんな顏をするだらう。

雨の降る日に、宮木は下谷の或る電車通りで圓太郎を待つてゐた。乘合はなか／＼やつて來なかつた。五分經つた。それから又十分……すると、宮木は自分の肩のほとりで何やら生あたたかい氣配を感じた。人間だ、と氣づいた。つづいて、黄色いレイン・コオトの男が、ひよいと宮木の前をよこぎつた、じろりと此方に眼を注ぎながら。

誰だつて、黄色い、よれ／＼のレイン・コオトを着た男に、往來で顏を見られたら不愉快になるだらう。丁度その時、圓太郎でなくて、電車が來てとまつた。宮木は咄嗟に洋傘を縮めるとそれに飛び乘つた。

黄色い、オーヴァの男も、宮木を追ふやうにあわてて飛び乘つた。

「君、君」

宮木はすぐ車掌を呼び止めて、聞えよがしに云つた。

「圓太郎は、故障でも起したのかね？」

「……」

「幾ら待つてても來ないぢやないか」と腹立たしさうに云つて切符を買つた。

「圓太郎は、私の責任ぢやありません」

車掌がひよいと顏を上げた。

「いや、それやさうだ。失敬々々」

そこで初めて屈託なささうに笑ひながら、宮木は、黄色いレイン・コオトを着た男の腰かけてゐる眞向ひに坐つた。

次の停留所で、黄色いレイン・コオトを着た男が詰らなさうな顏をして降りて行つてしまふと、宮木は吐き棄てるやうに云つた。

「畜生！」

朝。

「宮木さん、宮木さん」と呼ばれてゐるのに氣がつくと、登美が夜着の上から搖り起して吳れてるのだつた。

「まア、どうして？　こはい聲で」

「僕、唸つてた？」

「どうなすつたのかと思つて、びつくりして階下から飛んで來たのよ……まア、この汗！」

「うん」

額が汗ですつかり濡れてゐる。宮木は寢衣の袖で無造作に拭いた。

登美はやゝ離れて枕もとに坐りながら、思ひ出したやうに顏を赧らめて、

「お加減がわるいのぢやない？」

「いや、なに」

と云つたが、確かに身體が弱つてるのだと思つた。早く、登美なんか階下へおりて行つて吳れゝば好いと思ひながら、枕の上で、頭を振つて見た。すこし、ふら／＼するやうだ。

「わるい？」

「大したことはない」

「不可いわ、そんなに頭ふつちや」

登美はあわてて膝をにじり寄せると、あをむけに枕の上に載つてる頭を、兩手で押へるやうにした。

「熱があるわ」

「さうか知ら」

登美の手は、すこしガサ／＼してゐた。その手の上に、宮木も自分の手を持つて行つた。どの位ガサ／＼してゐるかをこの上まだ試すやうに。

「あるでしよ、熱」

と、登美は、ぽつと眼のふちを赧らめて、無理に微笑した。

頭の兩側で、お互ひの手が重り合つてゐる、その四本の手が、何か囁き合ひ始めたかのやうに、微かな耳鳴りを感じた。

「僕、もう暫く眠る」

宮木はそのまゝ眼を閉ぢた。が、四本の手はかるく重り合つたまゝ、時々ふるへてゐた。宮木は、自然に眠りに陷つて行くやうに裝ひながら、だらりと自分の手を疊の上に落した。登美も、思ひ切りわるさうに手を引つ込めた。そして、相手の眠りを驚かさないやうに、そつと立上つて障子の外に出て行つた。

階下へおりても、登美は、心を二階の男の枕もとに落つことして來たかのやうに、ぼんやりしてゐた。

「どうしたの？」

急ぎの仕事があつて、朝はやくから篦臺の前に坐り付いてゐた母親が、登美の顏いろを見て云つた。

「宮木さん、病氣なのよ」

「それや、困るね」

無感動に云つて、篦臺の上にのしかゝるやうな姿勢で、篦を動かした。その腕の振動が肩から頭に傳はつて後れ毛がこまかく動いてゐる。あとで又きつと頭痛がすると云ひ出すのだから

と、登美は思つた。
「いつか、働くとこ、ないか知ら、あたし」と登美は呟いた。
「どんな所？」
「どこでも好いわ」
「カフエにでも入つて、堕落したら好いさ」と母親は笑つた。
父親が、他の女の所へ轉り込んで歸らなくなつてから五年の月日が流れた。母親は、場末では大きい或る呉服屋の賃仕事と、時々呉れる不貞の良人からの補助と、それから二階を學生に貸すこととで、以前より結句氣樂で好い程だつた。娘も二十歳になるのだが、その行く末など考へるのは面倒臭かつた。養子に來る者もあるまいから、自分でどうにでも身の振り方を付けたら好い位に考へてゐた。
登美は、さういふ母の手許で、母の助手のやうな形で生きて行くのを、だん／＼我慢のならぬ事に感じ出してゐた。それで、此頃、しきりに働きたいと考へるやうになつた。たとひ日に八十錢でも、いや五十錢でも好い、僅かな日給で働いても、兎も角、自分で自由になる金を持ちたいのだ。母親からおこぼれを貰つて、半襟を買つたり下駄を買つたりするのはつくづく厭だつた。この生活は暗い。この暗い中にゐる間は、自分ひとりが世間から除け者にされてる氣持を、はふり捨てる事が出來ないのだ。
「火をもつとおこしといてよ」
母親が、長火鉢から鏝を拔いて、加減を見ながら云つたので、登美は炭籠をのぞいた。火箸で底をつゝくと、炭の粉が登美の額をめがけて立ち舞つた。
二階で足音がするので、登美は大急ぎで炭をつぐと、階段をのぼりかけた。
「こんな──すぐ消えるわよ」
母親が長火鉢をのぞいて、炭のつぎ方を非難してゐるのだが、登美はかまはずに二階へ上つて行つた。
宮木は制服に着換へてゐる所だつた。
「お出掛け？」
「飯を食つて來ます」
「熱があるのに……」
部屋のまん中に、二人とも突つ立つたまゝだつた。しばらく無言で眼を合はせてゐたが、やがて宮木は窓を明けて、窓ぎはに腰掛けながら、
「済みませんが、煙草を買つて來て呉れない？」
「えゝ、買つて來て上げるわ、だから、外に出るのは止した方が好いわ。御飯は、家に何かあるでせうよ」
ズボンから抓み出した銅貨が、パット一個の七錢に足りないので、宮木は机の方へ行つた。
「抽出しの中に、まだ二三錢あつた筈だ」
「ねえ、宮木さん、妾みたいな者でも、どつか使つて呉れる所あるでせうか？」
抽出しの中をゴソ／＼搔き廻してゐる背ろから云つたが、すぐ、無駄なことを云つたと後悔した。
探し出した銅貨を、彼女の掌に載せながら、
「職業婦人になりたいの？」
「だつて、遊んでんの、詰んないわ」
「それより、工場に行つたら好い」
「まア、馬鹿にしてるわ、妾に女工になれつて……どうせ、それやね」
すこし燥いだ氣持で登美は外に出た。煙草屋までなか／＼遠かつた。大急ぎで歸つて見ると、玄關にさつき出る時に確かにあつた宮木の頑丈な破れた靴が、無かつた。
誰か竊んで行つたのか？ それとも……と不安な氣持で、駈け上るやうにして二階に上つて行くと、茶の間から、
「宮木さん、もう出掛けてよ」と母親の言葉が、

追つかけて來た。

その通り、二階の部屋は、もぬけの殼だつた。

「知らない！」

登美は、バットを、あんまり力一杯でなく壁に向つて投げ付けたが、ふと、眼の前の壁が、ひどく間が拔けて見えた。いつも其所に掛つてゐる外套がないからだ。

この暖かい春の日に、外套が要る筈はなかつた――そしたら――登美は、二三年前、今のやうに母親が氣樂でなかつた時の經驗から、宮木の外套の行方を想像する事が出來た。

先刻、バットを買ふ銅貨がやつとあつた宮木、まだ飯を食つてゐない宮木、で、彼は、わざ／＼登美を外へ使ひに出しておいて、その留守に、外套を持ち出したのだ。見得坊！ 登美は、荒々しく階段を踏んで下におりて行つた。

「お母さん、宮木さんを、賄付きにして上げたらどう？」

賄付きでなしに、と云ふのが、部屋を借りる時の宮木の希望であつたのも忘れて、登美はまるで母親をきめ付けるやうな調子だつた。

その夜、宮木は一人の同志と或る所で落ち合つた。眞夜中の二時半頃、彼等は出發した。

ビルディングが、夜明け前の都會の空に、廢墟のやうに聳えてゐた。表通りに面した四階に、彼らの目指す事務所がある。

そこには、世界の出來事を、眞實に批判したり報道したりする新聞があつた。だからそれは、プロレタリア階級の鬪爭のために在る新聞だつた。無産者の、新聞だつた。あらゆる新聞は、世界の出來事を報道するが、それは支配階級の欺瞞に都合の好いやうに、眞相を歪めて報道するのに過ぎない。本當の無産者の新聞は一切の政治的な、又社會的な現れが、無産者から搾取するための、或は無産階級の擡頭を暴壓するための、資本家地主の政府の××の現れであることを鋭く暴露して、それに對する鬪爭心を煽動するのだ。

歴史を正しく導く新聞は、歴史を創造して行くプロレタリアートの物である。資本家地主の執行機關が、これに對して、××な彈壓を加へるに不思議はない。

ビルディングの四階に、その新聞の事務所があつた。それは、前日、多數のスパイに踏み込まれて、警官隊の占領する所となつてゐるのである。

正に、午前三時だ。ビルディングの、一切の明りは消えて、それは四角な怪物の巣のやうに暗く聳えてゐた。

「表戸は、駄目だ、裏へまはらう」

二人は囁き合つて、裏の路地へ入り込んだ。懷中電燈で足もとを照しながら、星の光も屆かぬ溝板を踏むと、ビルディングの煉瓦の肌が、死人の胸のやうに冷たく、身ぢかに迫つて感じられた。

建物の裏口は、ビルディングの夜番や小使の通路口で、夜どほし鍵を掛けない。其所から二人は、樂々と中に忍び込むことが出來た。晝間の、人間の波を驅逐したあとのビルディングの中には、闇と沈默と、そしてコンクリートの匂ひとが盛り上つてゐた。裏の方から眞直ぐに、表玄關まで來た。懷中電燈が、各事務室の郵便物受箱の、四角な格子の上をさまよつた。丸い明りは、すぐ一つの格子の上に停止した。持つて來た鍵で、蓋をあけると、中から新聞宛ての各地からのレポや、基金寄附の小爲替を封入したらしい封書などを取出して、二人のポケツトに捻ぢ込んだ。

先づ、仕事の一つは片附いた。

「上つて行くのは一人が好いだらう」と同志が囁いた。

宮が、表に出て待つことになつた。彼はそつと元來た路を取つてかへした。表通りまで來ると、ビルディングの眞向ひの小路の暗がりで、ぴつたり身を軒下にくつ付けながら、四階の窓——カアテンもおろさないで、只、底深い黑さに光つてゐる、ガラス戸を、一生懸命に見上げてゐた。

それよりも一生懸命に、同志は階段を一つづつ上つて行つたのだつた。勿論、靴は脱ぎ捨てて、沓下ひとつだつた。一足、階段を踏んでは耳を澄ませるといふ風に。懷中電燈も危險なので、手さぐりであつた。

やがて、四階まで來た。階段口から直ぐ取付きの右手に、新聞の事務所の扉がある。合鍵は持つてゐる。

それにしても、此所へ來るまで、見張りの奴の一人にも出會はなかつたのは、氣味のわるい幸運だ。一體、占領者共はどこに居やがるのだらう、と、彼は闇の中をそれとなく見まはした、すると五階へ通じる階段を上り切つたところに、ぼんやり薄明りがさしてゐるのを見た。それで分つた。五階を上つたところに、宿直室がある。彼奴らは其所に樂々と寢そべつて、いつかの拷問で脹れ上つた顔など夢に見ながら、寢汗でもかいてゐるのに違ひない……

だが、同志の亡靈よ、今夜だけはスパイの夢を驚かせないでおいて呉れ。今、彼奴らが眼を醒ましたら大變なんだ。敵の眠りよ、安かれと、彼は合鍵をさし込んだ。掌の肉だけの運動で、じいわりと音のせぬやうに、その鍵をまはした。

もし此の部屋に誰かが見張つてゐたら、命も最後だ。彼はぬつと入つて行つた。

誰もゐない。闇だ。ぼんやり、机が見える。爪さきで歩いてゐるのに、蹠が何故斯うも床へ引き付けられるやうに伸びたがるのか。その時、ふうはりと柔かく、手に觸るものがあつた。ハッとしたが、それは經營部と編輯部とを區切る垂れ布だつた。

彼は懷中電燈のボタンを押した。なつかしいと云ふやうな氣持で、明りの中に散亂した部屋を見た。

兎も角、此所から、讀者名簿と、會計簿と、その他の重要書類を竊み出して來るのが目的だ。

彼は、今は大膽になつて盛に懷中電燈を照らしながら、次から次へと、重要書類のありかを漁りまはつた。

が、突然、肘が机の上のレーニンの胸像にふれた。ガチャンと音がして、像が床の上でくだけた。瞬間、彼はひよいと身をかゞめて、机の下にぢつと縮こまつた。

今の音が、階上のスパイ共に聞えたか?

彼は耳を澄ませ、息を殺した。永い〳〵時間が、巨大なビルディングの闇の隅々を匍つて行く……

表通りの物かげから、四階の窓を見上げてゐる宮本は、氣が氣ではなかつた。黑い窓ガラスの上に、絶えず懷中電燈の光が明滅してゐる。それは、空をかすめる人魂の反映のやうに氣味わるく見えた。いけない事に、それよりも一層底ふかい内側からの光であるのが表通りからあり〳〵分るのだつた。もし此の深夜の街を、俺たちに馴染ふかいスパイの叔父さんでなくても、たとひ巡査でも通り合はせて、四階の窓ガラスに光る時ならぬ明りを見付けたとしたら、どうだらう? 結果は餘りにも分りすぎてゐる。そして、深夜の街を、巡査がさまよふつて事も、あまりにも有りすぎる事ではないか?

ちかり、ちかりと、四階の窓が薄ら冷たく輝く度に、あゝ、止せば好いにと、下から注意してやりたかつた。思ひ切つて四階へ上つて云つ

てやらうか？ もし、こゝへ泥刑が來たら——來て見ろ、俺は一擊のもとに——だが、その時、窓のもとに明りが突如として消えたまゝ、再び光らなくなつた。

永い〱時間が、それは殆ど永遠のやうに、暗い街通りに物音ひとつしなかつた。

ぢつと見上げてゐる頸すぢの痛さも忘れて、宮ノは、今にあの四階の窓から、ガラスを蹴破つて同志が飛びおりて來はしないかと、息を殺して待つた。

が、何事もなかつた。やがて、窓の上に再び、懷中電燈の明りがさし始めた。宮木はほつとした。今は、あの明りが危險だとも思はなかつた。あれは同志の生命のしるしだ。彼は生きてゐる。彼は活動してゐる。それを合圖する光明だ！

同志は、小脇に書類を一杯抱へ込みながら、表通りに現れ出た。宮木は駈け寄つた。

「萬歳だ！」

「うまいぞ、うまいぞ！」

手を固く握り合つた。感動でふくれ上つた胸は、ともすれば全身を小躍させようとする衝動に鳴つた。

「鬪タクだ！」

「よし、その邊にあるだらう」

云ふうちに、もう二人とも駈け出してゐた。

昨夜から宮木が歸つて來ないので、登美はやや焦々してゐた。宮木が來て二週間ちかくにもなるが、夜、外で泊つたのはこれが初めてだつた。

その日、久し振りで父親が來た。父親は鼠色のレインコオトを、だらしなく着て、幾ら洗つたつて埃の落ちつこないやうな顏をしてゐた。いつもの通りで、戸口を入つて來ると、いきなり、いかつい眼で、ギョロリと家內を伺ふやうな顏をした。

「ちよつと用事があつて、この邊まで來たから」辯解らしく云つて、晝飯がまだだと言ひ添へた。

「御飯なんか、餘分に炊いては居ませんよ」と、母親は飼犬を叱るよりは丁寧なと云ふ程度の調子で、縫物の手をやめようともしなかつたが、結局立ち上つて臺所へ拵へに行つた。

「登美は、まだ緣談が決らんのか？」

父親は、登美を顧みて冷やかすやうに云つた。

「それ所ぢやないわ。あたし、どつかで働きたいの」

「カフエーにでも行きたいのか」

父親も、母親と同じやうな事を云つた。

「工場へね——どうせ、妾、女工さんにでも成る他はないわ」相手がカフエーと云つたので、その皮肉に報いる皮肉のつもりだつた。

「ふん、娘が女工で、そして、お定りの組合入りだらう。俺がそれを摑まへる役か」

「あんな事を」

登美は取合はない顏で立ち上つて、二階へ逃げて行つた。

父親は、臺所へ向つて聲をかけた。

「おい、近頃、二階の借り手はあるのか？」

「無かつたら、家賃に困りますわ」

母親は障子越しに答へる。

「この前の、職人の夫婦者は、引越して行つたんだらう！」

「えゝ、とつくに」

今は、どんな人！」

「大學生よ、登美と仲が良いの」

「登美と？ どうだかね」とニヤリと口を橫に歪めて「そつちの、若い燕ぢやないのかい」

「登美に聞えますよ」

登美は二階で、窓ぎはに腰掛けてゐた。青い

事か、紙に滲み込むやうな氣持だつた。

宮本が早く歸つて呉れゝば好い——登美は室ぎはから、室内を見まはした。何にもない貧しい部屋。机の上の四五冊の本、それから、矢張り机の上に、ま青な、小さな函がある。昨日、登美が買つて來たバットである。

「人を馬鹿にして——」

要りもしないバットを買ひに行かせて、その留守のまに外出した宮本が、本當に自分を馬鹿にしてるやうに考へられて來た。でも、それは仕方がない、自分は何の取柄もない女なのだから……

「女工になれ、なれと云はれたつて仕方がない。大學生だもの。大學生の眼から見たらねえ——

然し、何と考へても、女工になれ、と云はれたのは、屈辱のやうな氣がした。今度歸つて來たら、うんと當り散らしてやるんだ。

階段を踏む足音がして、父親が、口に殘つた飯をまだ噛みながら上つて來た。

「ちよつと階下へおりとれよ」、いかめしい顔で登美に云つた。

「どうして？」

「どうしてでも好い、おりとれ」

登美はぷりぷりしながら降りて行つた。長火鉢の所では、食ひ散らしたお膳を片附けもしないで、母親は着物の前に坐つてゐた。

「お父さんつて、無茶よ、人の部屋を——」

「一度は、何でも彼でも疑つて見るのか、あの人の職業さ」

「いやな職業——」

父親がおりて來た。

「登美、學生さんが歸つて來ても、云つちや不可んよ」

「云はうたつて、云へやしないわ」

「俺の職業なんか云つたら、登美、お前が嫌はれるばかりだからな、ハヽヽヽ」

「誰だつて嫌ふでせうよ」と母親が、縫ひ上つた片袖をかざして擴げながら云ふのを、

「お前は默つとれ」と叱つた。

紺の洋服の雨服を投げ出して煙草を喫つてゐる父親の方へ、母親はチラと眼を投げたが、そのズボンのポケットの縁が少し綻びてゐるのを眼ざとく見つけて、

「ここにまア這はせて——お浪さんに少しは繕つて貰つたらどう？」

母親は糸を口にくはへ、針を持つて側へ寄つて來た。

「これは有難い」

父親は上衣のはしを持ち上げながら、繕つて呉れる相手の手元をずつと眺めた。

「あんた、お浪さんは、こんな事、平氣なの。綻びたものを着せて、外に出すなんて、妾にやとても我慢がならないわ。ほんとに、お休の用事ばかりが女の勤めぢやあるまいし」

父親は默つてゐた。

「はい」と、母親が縫つたあとをポンと叩くのと一緒に、父親は立上つた。

「おや、誰來る」

玄關へ、足の甲の雨覆がゴムで出來て、口を擴げるとスッポリ嵌まるやうになつた靴を穿きながら、彼はもう一度云つた。

「ほんとに、明日か明後日、また來るから——」

母親は見送らうともしないで、

「そして又、飯を出せ、でせう」

「いや、縫ひ物を澤山持つて來る」

いつたん出て行つたが、何を思つたか又引つ返して來て、格子戸の外から「登美」と呼んだ。

「登美——」と、出て來た女を招き寄せて囁いた、「ほんとに、默つてるんだぜ。あの大學生に、戸山君に」

「戸山！　宮本さんよ」

「あ、さうか、さうか。俺は、どんなにかして、

お前の婿さんに欲しいと思つてるんだから」
「知らない――譃ばつかり
登美が茶の間に引つ返して來るのを、母親はギョロリと見て、
「お父さんと、お母さんの惡口だらう」
「譃よ」
つんとした登美の顔は底白く青白めてゐた。

その日も、その翌日も、宮木は登美の家に歸つて行かなかつた。
三日目に、彼は青山の裏通りを歩いてゐた。向うから、ロイド眼鏡の若い男が歩いて來る。宮木は腕時計を見て、
「ふむ、丁度、三時十五分だ。俺も正確だが、彼奴も正確だな」
宮木はつと横町に折れた。向うから來た男も、半町ほど先きの横町を、同じ方向に折れた。
二人は、互ひに横町を突きあたると、再び半町ほど先きにお互ひの姿を認め合ふ裏通りに出た。彼らは一歩々々、近づいて行つた。
「やア」
「やア」
出會ひ頭に、挨拶した。

「どこへ？」
「なに、ちよつと」
そんな事を云ひながら近寄つて行つた。ちよつと手と手がふれた拍子に、宮木の掌中には、相手から渡された小さな紙片が殘された。レポだ。
そのまゝ振り向きもせずに、宮木は電車通りに出た。交叉點が二三十間さきに見える所まで來ると、いきなり背ろで、
「泥棒だ、泥棒だ！」と云ふ聲がした。
宮木は振返つた。すると、先程紙片を取交はして別れたばかりの同志が、こちらに向つて懸命に奔つて來る。あとから二人のスパイが、「泥棒だ」を連呼しながら追つ掛けて來るのだ。
「畜生、何が泥棒だ！」
瞬間、宮木も突き飛ばされたやうに、駈け出さうとしたが、その衝動は懸命に抑へた。
往來の人々は、みんな立止つて、この突然の追跡場面を、びつくりした顏で眺めた。
澤山の入り亂れた足おとが、すぐ宮木のうしろにまで迫つた。
「泥棒だ！　泥棒だ！」
「捕つけ！　何が泥棒だ！」
同志は力強く叫び返しながら逃げて來た。

彼らが、宮木の歩いてゐる前を走りすぎる時には、追ふ者と追はれる者との距離は二三間の近さに縮められてゐた。
「泥棒だ！　泥棒だ！」
さう叫ぶのは、往來で鬪士を追跡する時、いつも彼奴らが使ふ古い手だ、泥棒でもない者を泥棒だと罵ることで、通行人を欺くのだ。そして正しい者を追跡する疚しさを繕ふ。いや、あらゆる場合に、支配階級とその手先き共に、鬪ふプロレタリアに汚名を着せるためには、厚顏無恥な嘘八百を宣傳するのだ。泥棒でもない者を泥棒と呼ぶのは、そのほんの一例であるに過ぎない。そんな事で、一般民衆をごまかしておいて、どし／＼鬪士を逮捕するのだ。泥棒だといふなら、それらの「泥棒」を取調べて、堂々ところの××を公開して見ろ！
宮木は、眼前に悲劇を見て地團太踏んだ。向うの電車通路から、もう一人のスパイが、バラバラと飛び出して來て、逃げて行く同志の前に立塞がつた。此の頃の大都會の十字路や、目星い停留所などには、必ず一人二人のスパイが、一般民衆にまぎれて、電車を待つ風を装ひながら、左翼のおたづね者を見張つてゐるのだ。
忽ち、激しい格鬪が始まつた。そこいらの通

行人たちが、その格闘を取り圍んだ。通行の大衆は、本當の泥棒だと思ひ込んで、彼らのために闘つてゐる者の逮捕に手助けした。

もし宮木が猪突の勇を許されるなら、そして、彼がこの地球の上に根を張る闘爭組織の一細胞として活動することを放棄しても好いのだつたら、この瞬間、彼は生命を投げ出して、あの格闘の中へ飛び込んで行つたであらう。

彼は通り掛りの圓タクを呼び止めて、それに乘つた。彼は逃げなければならなかつた。

彼は無慈悲に、同志を敵の包圍の中に殘して行かねばならなかつた。

宮木は、危險を冒して、或る勞働組合の本部に行つた。

ストライキが、方々で起りかけてゐた。もう既に火蓋を切つた工場もあつた。それで、組合の事務所は、ひどく忙しさうだつた。

二階から、夕日を眺めながら、宮木は一人の勞働者と話してゐた。事のついでに、宮木は先刻赤坂でやられた仲間の話をした。

「あの人がやられたか――多分、逃げられないだらうな。畜生！　あんな好い人間を」

「こんな好い人間だよ。こんな好い人間を、あんな男たちが蹂躙するのだ。あんな男が、逮捕する立場にあつて、こんな男が逮捕される立場にある、それが現代の秩序さ」

宮木は云つた。

火蓋を切つたストライキ工場は、右翼組合のダラ幹に指導されてゐた。だから、この爭議は、負けさうな形勢にあつた。然し、左翼の分子が、その爭議の中で盛に活動してゐた。爭議其物は負けるだらう。だが、それによつて、大衆は、現實に、具體的に、ダラ幹がダラ幹である所以を經驗によつて知るだらう。左翼のみが、本當に信頼すべき階級的な組合である事に氣がつくだらう。

「そんなにして、大衆の力は、だん／＼昂まつて行くのだ、力強い大衆の背景さへあれば、さう無暗に、あんな男に、こんな男を蹂躙させてはおかなくなるよ」

「さうだ、何と云つても大衆の力だ！」

それは、日に日に實現されて行つてゐる。ストライキがある毎に、大衆の左翼的結成の盛り上つてゐるのは、知る人ぞ知る事實だつた。

用談を濟ませた二人が、夢中になつてそんな話をしてゐる所へ、一人の勞働者が二階へ上つて來た。そして大仰に叫んだ。

「や、太陽が、はでな引つ込みをやつてやがらア」

トタン屋根の上に、椿の梢の上に、春の夕日が、華やかに燃えてゐた。今の頓狂な勞働者の言葉が、久し振りに、彼に「自然」を意識させて呉れた。

その夕日は、宮木の汚れた詰襟服の、泥と埃を鮮かに浮き出させてゐた。

宮木は、久し振りに二階借りの部屋に歸つて來た。まだ宵の口だつた。

貧しい宮木の部屋には、茶を用意する道具もなかつた。それが登美には幸福だつた、と云ふわけでもないが、登美は番茶をくんで、二階に上つて來た。

「久し振りですね」と、宮木はニッコリした。

登美は默つてゐた。

「あ」と宮木は机の上のバットに氣がついて「買つて來て呉れましたね、ハヽヽヽ、それで、怒つてるんですか」

「怒つちや、ゐませんわ」

「僕ねえ、臨時試驗があるんで、友達ん所で、ノオトを寫してたんですよ。友達の下宿に泊つたんです」

ノオトを寫すことの意義などは登美には分らなかつたが、學校の事に關るのだから、品行を疑ふ點のないのは明かだつた。登美は、何となく、のんびりした氣持で、

「だつて、ひどいわ、宮木さん」

「何が？」

宮木は愕然として顏をあげた。

「あたしを心では笑つてらつしやるのでせう、女工になれなんて云つて……」

豫感がはづれたので、宮木は樂な氣持に歸ることが出來た。

「女工になれと云ふのが、どうして不可ないんです？　ちつとも、あんたを輕蔑して云つたのぢやないもの」

「どうせ、妾は無學で、鈍感よ、それやさうに違ひないけど」

「無學で鈍感な人に女工になれとは勸めない。それより、女工を輕蔑する貴女なら、僕は、もう貴女とはお話もしない」

「あら、どうして、そんなに怒るの？」

然し、宮木は苦笑して、プロレタリアートの役割について、客觀的な話をし始めた。

しばらくすると、廊下から付添が、登美を呼ぶ聲がした。

「ちよつと待つて」

登美は相手の話を途中でさへぎつて立上つた。

「あたし、呉服屋まで行つて來なくちやならないの、仕立物を持つて」

「行つてらつしやい」

「歸つたら又、お話のつゞき、して頂戴ね」

「えゝ、早く行つてらつしやい、今晩はひどく眞面目な話があるから、僕、待つてる」

「待つててね」

登美は飛び立つ氣持を抑へて下におりて行つた。と、茶の間では、思ひ掛けもなく、父親のニヤリ〳〵した顏が、長火鉢の所にあつた

「さ、これを持つて行くんです」と、母親は仕立物の包みを登美に渡した。

「登美、早く行つておいで。歸つて來たらお前を喜ばせてやる」と、父親が、立つてる登美を見上げながら、氣味わるく笑つた。

「だから、お酒を買つて來い、でせう」

「冗談ぢやないのだ。俺は、二階の書生さんに談判しなくちやならないんだ、お母さんに頼まれたんだよ、今」

登美はギヨツとして、

「どんな、談判？」と唾を呑んだ。

「登美」と、父親は厳粛な顏になつて「お前、二階の大學生は、お前を好いてるんだらうな。本當かい？」

「知らない」と登美は眼のふちを赧くした。

「お母さんに頼まれてね、俺は、お前の婿になつて貰ふやうに、これからあの大學生に談判するのさ、どうだ、好いだらう

「登美、早く行つといで」と母親が云つた。

「早く行つといで。歸つて來たら、今晩から花嫁だ、ハヽヽヽヽ」

登美は、からかはれてるのだと思つた。同時に、父親の顏付に、本當らしい表情もある事を見のがさなかつた。

歸つて來たら、花嫁になる！　父親はいくらでも、からかふが好い、宮木が、待つて呉れて居るのは確かなのだ。

登美は、袷の下を汗ばませながら、往來を急いだ。

仕立物を屆けて、その歸り途は一層汗ばんだ。一層、足がはやくなつた。

とにかく、からかひであらうが冗談であらうが好い、「歸つて來たら、お前は花嫁だ」父親のこの言葉は登美を陽氣にした。もしそれが冗談にしても、今晩確實に實現される豫言ではな

いか、何故なら、早く歸つて來い、とは、本人の宮木も云つたことだ。今晩はひどく眞面目な話がある。彼はさう云つた。
　若い男が、若い女にする眞面目な話？
　登美は、汗ばんだ上にひとりでに身體があつくなつた。これから、寒い、うかうかとしては濟すまいと考へた。先刻、男が、話したプロレタリアの話が、頭の中に蘇つて來た。よくは分らなかつたが、話が巧くて、女工にならずには居られないやうな氣がした。誰だつて、あんな工合に說明されたら、女工にならずには居られなくなるだらう。
　さうだ、女工にならう。そして、プロレタリアとして、闘はう！
　我が家に近くなると、登美は自分の歩く足を數へてゐた。一い、二う、三い、四う、…戸口まで何歩あるだらう。物心ついて、曾て一度として父親を父として信用したことのない登美だつたが、今日は半分だけ父親を信用して見る氣になつた。と云ふのは、父親のあの言葉が、眞實から出たのか、それとも冗談なのかを、心で占つてゐるのだ。もし家の戸口に着くまでの歩數が、奇數だつたら眞實、偶數だつたら嘘けれども、戸口まで着いた時には、自分の歩數なんかいつの間にか數へるのを忘れてゐた。彼女は、格子戸をあけると、勢ひよく中に飛び込んだ。
　が、いつもの癖で、登美は、玄關の三和土の上に、あの頑丈な破れ靴――宮木の靴を見ようとした。が、茶の間の燈火が屆かないので、玄關の三和土は、暗い闇だつた。
　心を落ちつけなければ――そして、あわててゐるのを見透かされてはならない。彼女は身をかゞめて、三和土の上を手さぐりに、靴を搜した。
　靴は一足もなかつた。父親のと二足ある筈だが、一足もない。
「お父さんも、歸つたのか知ら？」
　登美は何となく不安で思はず呟いた。
　只今！
　茶の間に入つて見ると、母親がひとり、ぽつねんと縫物をしてゐた。
「宮木さんは？」
「行つちやつたよ」
　母親は、チラと登美を眺めたが、すぐ眼を縫物の上に落して、針を動かしつゞけた。
「行つちやつたつて？　どうして？」
「知らないよ。お父さんが、引つ張つて行つたんだもの」
「どうして、引つ張つて行つたの？」
　それでも、まだ半分の半分だけ、父親を信用したくて、登美は聲をふるはせた。
「どうしてか、知らないよ。お父さんの、それが職業だらうさ」
「どうして、どうして！」
　もはや、みぢんも父親は信用しない。そして登美は聲をあげて泣き出した。
　あんな男が摑まへる立場にある。こんな男が、摑まへられる立場にある。
「でも好かつたわ。部屋代を前拂ひで貸してあつたのだから、損はないんだし、お前、泣くのは止してお呉れよ」
　母親は、振返りもせずにさう云ひながら、せつせと針を動かしてゐた。明日までに仕立て上げねばならぬ賃仕事を。

大島爭議君

1

役場の吏員が、人民と應接してゐる。これだけ云へば、人は、一段高い床の上の机に倚つた役人と、土間に立つて彼を見上げてゐる人民とを想像するだらう。

で、差し出された出産屆を暫く眺めてゐたが、係の吏員は、へんに擽つたさうなのを引き緊めた顔で、じろりと眼鏡越しに、土間の相手を見おろした。

「えゝと――これは何ですか……」

「何が？」

勞働者風の、たくましい男は、口ごもる吏員を撥き返すやうに、眼を上げた。

「失禮だが、貴方が、親御かね」

「さうです」

「赤ちやんの、その名は、何ですか、ソーギ、ですか」

「え。大島爭議、といふ名です」

「爭議ですね？　爭議と讀んで好いんですね？」

「書いてある通り」

「本當ですか？」と云つたが、云ひ過ぎたことを反省したやうに、急に口を噤んでしまつた。

勞働者は怒つたやうな顔で其所に突立つてゐたが、初めて生れた赤坊に付けた「爭議」といふ名が、いよいよ戸籍簿に登錄されるのだと思ふと、一種妙な氣持がした。

「彼奴が大きくなる頃には、爭議なんてものは、なくなつてるかな。いや、きつと無くなつてゐる」

未來の世の中についての空想から、すぐ彼は現實に醒めた。今、彼が現實にその渦卷きの中にゐる爭議のことで、心が一杯になつた。

2

鶴見海岸の芝×製作所で、第七工場の山口といふ動力が、スヰツチを入れる手もとが狂つた。

巨大なモオタアの横に、梯子を立て掛けて山口は登つて行つた。片手は梯子につかまつてゐるから、スヰツチは右の片手で差し込まなければならない。ところが、このスヰツチは重くて、大きい。片手では扱ひかねる代物だつた。グサと一氣に差し込まないと、必ずスヰツチの口からスパアクする。

その手もとが狂つた。瞬間、差し込み口が炎を吐き出した。山口は、梯子の上から床の上に轉落した。全身の火傷で彼は氣絶した。

それが朝の九時頃だつた。それだのに、山口の留守宅では、その事を夕方まで知らなかつた。と云ふのは、會社は何故か、夕方まで山口の家に報らせをしなかつたのである。

會社のこの冷酷な處置は、全工場千三百人の勞働者を怒らせた。翌日、工場の職場々々を、レポが飛んだ。七Aと七番工場にある會社側の手先きの溜り場に、會社の不誠意を詰問する交渉委員が押し掛けると共に、全工場はサボタアジュで、會社に示威した。

然し、このサボタアジュは、二時間で終つた。何故なら、會社はたうとう兜を脱いで、要求通りに、不誠意を陳謝したのだから。

けれども、月の半ばになつて、この陳謝その物が、ひどい不誠意なものであることが分つた。と云ふのは、會社は、全勞働者たちに支拂ふ賃

街から、サボタアジュの二時間分だけ、差し引いたのである。

　そこで、再びサボタアジュが始まつた。

「拵へる品物を良くしませう――

　會社が不誠意だから、怪我せぬやうに注意しませう」

　謂はゞ、さうしたスロオガンが、暗黙のうちに出來上つて、彼らは、安全週間と名付けた。お互ひに怪我せぬやうに、仕事を念入りに――安全週間は反語だつた。工人たちは何の仕事もしなかつた。

　このサボタアジュは、六日間つゞいた。

　六日間、意識のうちに、闘爭は敏活に行はれた。あらゆる職場々々の委員會が、工場の屋根の上や空地の闇で行はれた。鍛冶場の機械にある當事長から指令が飛んだ。各々の委員會を綜合した擴大委員會が持たれた。

　ところがその註文品で、半仕上げの途中にある大きなモオタアが、七番工場の一隅に、二つも三つも轉つてゐた。高さが二丈もある巨大な奴で、レポが飛ぶと、千三百人の全工人が、方々の工場から飛んで來て、その前に密集した。そしてモオタアの上に立上つて報告演説をやる交渉委員に、湧き上るやうな拍手を送つた。

　月が變ると、奴らはきつと、重立つた勞働者を首にするに決つてゐる。その事を、彼らは前々から嗅ぎ付けた。

　委員たちは幾組かに分れて、職場々々をまはつて行つた。

「この晦日には、きつと俺たちの仲間の十人や二十人は首になるが、その時の俺たちのやり方を決めておきたいと思ふ」

　職場を訪れた委員は、さういふ風に話を切り出した。

「どう云ふ考へか、委員の考へを話して呉れ」

「他にやり方はない。勿論、ストライキだ」

「然し……」

「ストライキをやらないで、どうするのだ？　俺たちの組合の力が、折角これだけ盛上つて來てゐるのに、今その力を引込めてしまつたら、それこそ物笑ひぢやないか。會社は益々俺たちを馬鹿にして、これから先き、どんな無茶をやり出すか分らない。こゝで退却するのは斷じて不可ない！　會社を叩き伏せるためにも、俺たちの力を練り上げるためにも。ストライキはやらなくちやならぬ」

「宜しい。俺は贊成だ」一人の職工は云つた。「然し、勝てる見込みがあるか？」

「勝てる」別の委員は、今まで睨み付けるやうに眼を光らせながら控へてゐたが、耐りかねたやうに、しやがんだ膝を乘り出させた。「たとひ勝てなくても、勝たなければならぬ。それに、隣りの淺×造船も、石油も、×田溶鑛爐も、みんなやりたがつてるんだぞ。ゼネストだ。俺たちが火蓋を切るんだ」

　これらの言葉は、あらゆる建物の、あらゆる職場を連結した。

　月の終りの、九月三十日、會社は豫期されたやうに、重立つた職工十數人を馘首した。全工場千三百人の工人は、その朝のうちに、長い示威行列を組みながら、職場を捨てゝ工場の外に出た。

　斯うして、ストライキが始まつたのである。――

3

　爭議が始まつたら、市内に家を借りなくてはならぬ。先づ司令部。それから團員を六隊に分つて六軒に陣取らせた。一つの隊は女ばかりで百人居た。その他に警備隊が二百五十人、宣傳隊が百五十人、訪問隊が五十人、即時編成さ

れた。第一日は、一般團員を町の或る神社跡に屯させておいて、家を借りたり、隊を編成したりすることで費れてしまつた。
警備隊は晝夜の警戒、宣傳隊は、晝間は附近の諸工場へ宣傳にまはつたり、ビラを刷つたり、夜は、ビラ撒きやポスタア貼りをやる。訪問隊は、缺席團員の自宅を訪れて、裏切りに備へるのだ。本部は、一部で、各隊長が集る所——其所には、評議會や、黨など應援團體の代表も、ガン張つてゐた。
勿論、資本家側の應戰振りも物々しかつた。無數の制服が動員されて、工場内外三個所に屯所が設けられた。
爭議團では、やがて、ぼつ〳〵、缺席者が出て來た。訪問隊が行つても居所を晦まして分らない者が十人ばかりあつた。裏切者だ。
工場では、職長やその他を動員して、モオタアを廻してゐるといふ報告が、本部に來た。
「裏切者を毆つてしまへ！」
然し、會社に買收された彼等は、何所とも知れず轉居してゐるのだから、手の付けやうがなかつた。
芝×製作所は、鶴見の海岸にある。工場の門から幾町かの所まで、この工場直屬の電車が來てゐる。電車の乘降場の附近は、ヒメジオンや、茅などの生ひ繁る茫々たる野原だつた。
或る夜明け前、警備隊の中から選拔された十四五人が、電車の乘降口の小屋のかげに身をひそめて何者かを待ち構へた。午前四時半になつて、初めて、彼らはひそやかな跫音を聽いた。
八人の人影が、工場の門に通ずる一直線の道を、列を組みながら、やつて來た。裏切職工だ。
やにはに、物かげから躍り出た十五人が、八人の列の中に飛び込んだ。うす暗の中で、激しい格闘が始まつた、と思ふ間もなく、八人は地上に叩き伏せられたまゝ、呻吟し始めた。襲來者は、もう何處へか姿を消してしまつてゐた。
すべて、この一瞬間の格闘は、深い沈黙のうちに行はれたのだ。それといふのも、もし聲を立てたら——附近に屯してゐる警官隊を呼び寄せるやうな事態を惹き起すのだから。

4

この事件は、一ケ月ばかりつゞいて、休戰といふことになり、やがて職工たちは出勤し始めたのだが、丁度その頃、職工の一人の大島正吉の細君が出産したのだ。
妊婦の枕頭で、大島君がうろ〳〵騷いでゐるその日の夕刻である。爭議團員は工場に出勤してゐたが、本部にはまだ幹部や指導者や、解雇職工たちがガン張つてゐた。工場の退け時を見はからつて、彼らは本部を出た。先きに立つた三十人ばかりが警官隊を誘き寄せるのに先づ工場の門前に立つた。見張つてゐた警官たちは案の定、それとばかりに、その三十人の方へ走り寄つて行つた。横濱の港の空を赤く染めた夕日が、幾本かのサーベルをチカ〳〵と光らせた。
その間に、あとから來た十人ばかりの團員は、職工たちのための電車の乘り場の側の草むらに巧く這ひ込んだ。
工場からは、歸りの勞働者たちがなだれを打つて門の外に溢れ出はじめた。門前で、警官たちが三十人の團員と何か押問答してゐる間に、此方の草むらに這ひ込んだ團員の一人は、腹に卷き付けて來た×旗を、そこいらで拾つて來た棒切れの先きにくゝり付けた。×旗が出來上ると、彼らは初めて、草むらの中から往來の上に躍り出た。

工場から溢れ出た労働者たちはワッと鬨をあげながら、次第に旗の下へ集つて来た。警官たちは狼狽して、此方へ引返して来た。

あらゆる工場の退け時だ。芝×製作所と並んでゐる浅×造船、旭ガラス、日×鋳鋼、S石油、日×石油、×清製作所——道路に建ち並んだ工場から溢れ出て来る労働者たちが、野原の草を踏んで、斜線を引きながら此所の×旗の下を目指して急いだ。

×旗の下では、二人が肩を組んだ。その肩の上に他の一人が上つて立つた。そして、演説を始めた。

「止めろ！」

其所に走り付けて来た××の一人が叫んだ時、密集した群集の先頭はもう、四人、つゞいて四人、又、又、と列を組んでゐた。四列の長い示威行列が、次第に形成されて行つた。×旗は進んだ。列は四人づつ、手を組むにつれて町の方へ、動き始めた。

急に、大きな渦が、列の中途に起つた。××たちが、密集の中へ割り込んで、列の成るのを止めようとしたのだ。怒號が起つた。拳が飛んだ。一人の警官が、××に顎を蹴られて倒れた。瞬間、××××××十数本、群集の頭上に閃いた。

「彼奴らは、××した！」

一人の警官は、×を抜いたまゝ、先登の旗に迫つた。幾人かは列から駆けて、その××を追つた。×旗は行列の進行と反對に遡りながら、××××から逃れて走つた。××××は追つた。その一本の×××××のあとを、勇敢な闘士が、追つて行つた。それを又、他の××××が追つた。

×旗は、一直線に工場の前に突きあたると、右に折れて逃げた。丁度その時、隣りの×田落鑛爐の工場が退けて、其所の門から労働者が飛び出して来た所だつた。彼らは、退けて来る×旗を見た。追つて来る××××を見た。これは何事であるか？ 彼らの本能は、たちどころに判断した。×旗は守らねばならぬ。そして、彼らの中の一人は殺到して来た××の胸を突き飛ばした。倒れた××の上から二三人が折れ重なつて組付いた。

列は、××××ともみ合ひながら、進んで行つた。町の方へ——あとから／＼工場から溢れ出て来る労働者で、行列の長さは止る所を知らなかつた。××××の狂ふまゝに、路上は點々と×に染んだ。その×を踏みながら、列は進んで行つた。

×旗は、いつか元の場所に歸つてゐた。そして、列の先登を進んでゐた。

5

大島君の細君は安産した。

彼はその日、そんな騒動があつたことを知らなかつた。況して、仲間の者たちが、デモンストレエションの中途から、みんな散り／＼にズラかつたことも、それから、一人の××が、顔面を石でめちや／＼に潰されたことも知らなかつた。

知らないから、彼はその翌日、ぶらりと、争議團本部の戸口を入つて行つた。と、むんずと肩を掴まれた。

「何するんだい？」

きつとなつたが、おそかつた。スハイの眼が、血に飢ゑたやうに光りながら、大島君を見据ゑてゐた。

何が何やら分らずに、彼は×へ引つ張つて行かれた。中に入ると、いきなり足をすくはれて板敷の床の上に××××られた。

起き上らうとすると、もう一人のスハイが横顔を×つた。それでも起き上らうとすると、腕

を引つ張られた。その拍子に、ビリッと音がして、勞働服の袖の、肘のところが少しばかり裂けた。

と、大島君の癇癪が俄かに破裂した。

「やい！」と彼は大聲で叫んだ。

その激しい勢ひに、スハイたちは思はずたじろいだ。丁度その時、××べるつもりか、それとも他の用事があつたのか、其處に入つて來た××とでも、ドキッとした顏で、大島君の方へ脅えたやうな眼を注いだ。

「やい、これを、どうして呉れるんだい、人の大切な洋服を破きやがつて！

唇がふるへて、しばらくは物が云へなかつた、が、すぐ、

「うちの嚊は昨日赤坊を生んだばかりで、寢てるんだ、誰が縫つて呉れるんだ、こんなに破きやがつて！」

すると、×××、へんに困つたやうに顏を顰めた、スハイたちも、しんと默つたまゝ、お互ひに顏を見合はせた。

「昨日、君は家にゐたのか？」と、一人のスハイが訊いた。

「それが、どうしたと云ふんだい？　嚊が子を生むのに、外に出る奴があるか……」

「一日うちにゐたんだな」

「朝から、今朝まで！」

「ふむ」

6

昨日の騷ぎについて、何も知らなかつたことが分つて、留置場から出される時、大島君の頭をチラと過つたのが、赤坊の名前のことだつた

「さうだ、あいつの名は、爭議、と付けてやることだな、好い記念だ」

斯うして、大島爭議君が、この世に登場したのである。

雲とゴルフの球

―コント―

I

どちらを向いても白い服だ。港の町は白い服で埋まつて居る。

その中から、ヒヨンと飛び出した一つの白い服だ。

港の裏の高い山、麓の密林の中を、淋しさうに、たつた一つの白い服が行く。

II

山の上のゴルフリンクに、いかめしい口髭を生やした名士が居る。白い服が、青い山を登つてゆく。

海抜何千尺の山頂は、夏ながら冷めたい雲霧の中である。三間さきは濛々として見えぬ。

名士はためらつた。あの雲の彼方へ――發止と打つ。球は雲を蹴立てゝ……はて、巧くいつたか知ら？

「おゝい！」

霧に凍る口髭のしたから、名士は大きく人を呼んだ。

すると、むく／＼と眼の前の雲がゆらいだと思ふと、しよんぼり見知らぬ白い洋服の男が現れた。

III

「君は誰だね？」

然し、白い洋服は無言のまゝ、恭々しく敬禮して、ポケットから一葉の名刺を取出した。

「ハハア」

名士は受取つた名刺を、すがめで讀んだ。雲が、名刺の上を撫でて行くので、彼をまつたく遠視眼にしてしまつたのだらう。

「――新聞記者……あゝ新聞屋さんだね、君は？」

「はあ」

白い洋服の男は一歩前に進んだ。雲と霧との中に、ふたりの人間は去勢されてゆくやうに浮き沈みして見えた。

IV

三十分のちだ。

名士と、その友人たちとが、山頂の芝生の上に立つてしきりに議論したり、首を傾けたりして居る。もはや雲もこの峯を去つた。くつきりと晴れ渡つたリンクの青い世界を、球拾ひの少年たちが燕のやうに飛びまはつて居る。

さつき名士の打つた球が、どう探して見ても分らないと云ふのだ。

いつたい、どこへ飛んだのか？ 名士はもう一度、球を打つたスポットに立戻り、斯ういふ姿勢で、斯ういふ方向に、この位の力で打つたのだ、と棒を振つて人々に説明しなければならなかつた。

その棒の方向、地面との角度、力の度、及び球の重さ、さういふものの一切を考慮に入れて計算してみたのだが、球の在りかはどう捜しても分らなかつた。

V

麓の森の中で、路がふたつに分れて居る。溪川にかけた土橋のねもとに標柱が立つて、右ゴルフリンク路、左A温泉路、と書いてある。

溪川にそつた温泉路から、女がふたり出て來た。

「一休まうよ」

「暑いわね」

溪川の水ぎはに二人はおりた。白いハンカチを、碧い淵に浸して、汗を拭く。
「誰も見ては居ないわ」
二つの半裸體の上を、濡れたハンカチが痛いほど軋んで走る
突然、橋の上に靴音がした。深い森の中途にぶら下つたやうに、白い洋服が、ポッカリ浮き出て、橋の上に立止つた。
びつくりした拍子に、女たちの肌から葉綠素の水蒸氣がむせぶやうに發散した。

VI

「きれいな身體ですね
男はニコ〳〵笑ひながら聲をかけた。
二人の女は顔を見合せた。それから、こちらもやはりニコ〳〵して、手招きした。
「其所は涼しい?」
「えゝ」
白い洋服は小走りに水際におりて來た。そしていきなり、手を伸して、否応なしに、二人の女の首をかゝへて、キユツと我が兩頰に締めよせた。

VII

もう夕暮か知ら?
男は空に共鳴する雲を眺めながら、自分の歸つてゆく港のことを想つた。
白い洋服がうぢ〳〵と、溢れるほど、街中に盛上つて居る港のことを。
「ねえ、眼をつぶつてらつしやいよ」
二人の女が口を揃へて云つた。
溪川に突き出た岩の上に、あをむけに寢ころんだまゝ、男はおとなしく眼をとぢた。
くす〳〵女が笑つて居る。
「俺は死ぬのだな」
女たちのなすまゝに任せて、男は、ふとさういふ實感が、だん〳〵濃くなつてゆくのを感じた。
「死ぬるのか?
それは夢のやうでもあつた。だん〳〵壓力が大きくなる。今は時期の問題だ。その時期が、物理的に近接して來る……もう少し! 死ぬる?
何糞! だが、女たちはくすくす笑ひながら。

VIII

突然、女たちは、岩のはづれから垂れ下りさうな位置に、ぐつたり弱つてゆく男の顔から眼を外らした。
その男の顔の下に、碧い淵が展がつて居る。
その水の上に、空が映つて居る。
空をゆく雲が、水の上に映る。
一片の雲は、白い腹を返して泳ぐ鯉かのやうに、水の上を悠々とよぎつて行つた。
女たちは、その時、その水に映る一片の雲を見た。
それは、今しも岸をはなれたばかりの雲であらう。あをむけになつて、眼をつぶつて居る男の眞上まで來ると、ぢつと立止つて動かうともしない。
と、どうしたわけか、その雲のまん中に、突然、丸い穴があいた。丸い球が、その穴からこぼれて猛烈な勢で落下して來た。
靜かで、透きとほるほど碧い水の上に、落下するゴルフの球は、直線の影である。

IX

その球が、男の額の上にあたつて、男が死んだ。そして女は?
白い洋服の男は、そこまで考へないうちに港の町に歸つて居た。

年譜

一八九四年（明治二十七年） 岡山縣苫田郡芳野村寺元平民、片岡歡一の長男として生る。母は山口氏ケイ。片岡家に入りて定と稱はる。

一九〇一年 一家は村より二里隔る津山町に移轉。

一九〇七年 岡山縣立津山中學に入學。「文章世界」「秀才文壇」等に投書。

一九一二年（大正元年） 十九歳。中學卒。三月、上京、七月、六高受驗、體格ではねられ、自殺を企つ。九月、上京、宇野浩二、三富朽葉等と識る。

一九一三年 九月、慶應大學佛文科豫科に入學。年末鍋井克之等、美術劇場を起すや加盟。

一九一四年 三田を出席日數不足で落第。父より學資を斷たれ、急に歸國す。十二月末、美作林野町の小學校に代用教員となる。

一九一五年 代用教員は三ケ月で辭任。ニヒリスチック。戀愛。大阪に行く。川崎備寛等と同人雜誌「美術」發刊。

一九一六年 春、上京。明大、日大等轉々す。

一九一八年 歸鄕。十二月、岡山の山陽新報に社會部記者として入社。

一九一九年 七月、大阪朝日新聞に轉じ、直ちに神戸支局詰めとなる。

一九二〇年 三月、大阪朝日退社。七月、處女作「舌」を脱稿。宇野浩二、廣津和郎に發表を依賴す。大阪時事入社、三ケ月にて退社。

一九二一年 八月、里見弴の好意にて『舌』は雜誌「人間」の新進作家號にて、紹介さる。九月、上京。

一九二四年 横光利一等と同人雜誌「文藝時代」を興し、一方創刊されたる雜誌「世紀」の編輯に從事。創作「悲しい男」「幽靈船」等を發表し新感覺派を提唱す。十二月、「世紀」廢刊。創作集『にがい話』を春陽堂より出版。

一九二五年 新感覺派は世の論難の的となり論戰これ努む。「甘い物語」等創作。

一九二六年 小說「綱の上の少女」を發表。春、初めて一戸を構ふ。十一月、片岡元彌長女光枝と結婚。

一九二七年（昭和二年） 『色情文化』、「金錢について」等發表、金星堂より感想集『モダン・ガアルの研究』、寶文館より短篇集『睡蓮』、講談社より少女小說集『薔薇の戯れ』、改造社より短篇集『綱の上の少女』を出版。

一九二八年 三月、舊勞農黨に入黨、前衞藝術家同盟に加盟し、「前衞」の同人となる。間もなく三・一五事件ありて、黨は解散せしめらる。五月、同盟は、中野重治等のプロレタリア藝術聯盟と合同し、全日本無產者藝術聯盟（ナップ）結成、「戰旗」發刊さる。七月、創作「生ける人形」を發表。其他、プロレタリア作家としての習作時代と謂ふべし。十一月、國際文化研究所創立、機關誌「國際文化」發刊の事に干り、その所員となる。

一九二九年 ナップ組織變更にてプロレタリア作家同盟の所屬となる。小說「綾里村快擧錄」「死に切れず」「あんな男こんな男」等を發表。「新進傑作小說全集」の第五卷として、「片岡鐵兵集」を平凡社より、『新選片岡鐵兵集』を改造社より出版。

昭和四年七月一日印刷
昭和四年七月三日發行

現代日本文學全集　第五十篇

著者代表　前田河廣一郎

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02977 6218

改造社